
E x I

I・B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E x I

【Nコード】

N 8 2 1 2 N

【作者名】

I・B

【あらすじ】

入学式の朝。十五歳の少女、高峯千里は不思議な夢を見る。日常の中、夢が現実を浸食する時、脳裏に響く声に答えてしまったがために千里は異なる世界に招かれた。意識を失い倒れ伏す千里を助けたのは、ナーリヤと名乗る記憶喪失の少年だった。千里はそこで、魔法とは異なる不思議な力を手にする。故郷に帰り家族や友人たちとの再会を望む少女、千里と記憶を取り戻し自身のルーツを求める少年、ナーリヤ。それぞれの願いのために旅に出た二人に待ち受けるのは、ゲームの中だけの存在だと思っていた、強大な力を持つ“

魔獣
” たち
だ
つ
た
。

序章 終わりの音／始まりの光

お願い。

声を、聞いて。

私の、世界を……………。

暗いところだった。

しんと静まりかえった空間。恒久に続く黒の世界。

溢れ出したような白は、光のそれとは似てもにっかない。

誰が自分を、呼んでいるのか。

喉は擦れて、声は出なかった。

叫びだそうとしても、同じこと。まるで今の今まで、叫び続けて

きたかのように。

（私を呼ぶのは、だれ？）

だから少女は、心で思う。

胸の内でも問いを出して、それを世界に響かせる。

声が出ないから響くはずがない、そんな“常識”は、持っていなかった。

この世界では“そんなもの”は通じないと、無意識のうちに理解していた。

(辛いのか？苦しいのか？それとも)

必死に、ただ必死に声を絞り出す。

誰が自分を呼んでいるのか、誰が自分を求めているのか、誰が…

(“痛い”の？)

頷いた、気がした。

誰かが暗闇の底で、誰かが光の天蓋で、誰かが虚無の狭間で、心を軋ませながら、首を縦に動かした。

どうか。

はつきりと聞こえてきたのは、教会に響くパイプオルガンのような、神秘的で澄んだ声だった。たった一言で綺麗だと解る旋律は、それゆえに痛々しい苦しみに満ちていた。

お願い。

何をお願いされているのか、何を請われているのか、何を望まれているのか。

少女はそれが知りたくて、痛む喉に手を添えながら口を大きく開く。

何故自分の喉がこんなにも痛んでいるのかなんて、解らない。解らないけれど…… “知って” いた。

(苦しまないで、悲しまないで、お願いだから……っ)

どうして、こんなにも自分の胸が痛むのかわからない。

それでも、喉から零れるのは痛みを訴える音だけだった。
痛みを和らげたいと、自ら痛む悲しみの声。

……。

(え……?)

視界が白に、包まれる。

先ほどまでの白ではなく、希望を紡ぐ光の白。

その遙か先に、少女は　　黄金の光を垣間見た、気がした。

ジリリリリリッ

けたたましい、音。

枕元から響くその音に反応して、小さな手が桃色の布団から伸びる。

場所が掴めないのか、二度三度と空を歩き来して、四度目に漸く目覚まし時計の頭を押した。

「うーあー」

女の子らしい、とはほど遠い、低い声だ。

普段は高い声なのだろう、低く出してもそれほど重い音にはならない。

だが、それだけで、寝起きの悪さは見て取れた。

「あれ、なんか、あれ？」

ベッドから身体を起こして、左手で強く目元を擦る。

十六歳、というには幼さの残る仕草も、彼女の幼げな顔立ちに追従させるとそれほど違和感のあるものでは無かった。

「変な夢、みたかも」

呟いて、首を傾げる。

だが一向に答えは出てこず、少女はしきりに首を捻っていた。唇を尖らす仕草もまた幼げだが、本人は気がついていない。

「千里ー！ご飯よー」

「はーいつ」

階下から響く母親の声に、少女は声を絞り出す。

朝は本当に弱いのか、ベッドから立ち上がるのも億劫そうだ。

「千里ー、今日入学式でしょーっ」

「わかってるってば！今行くよー」

最後の言葉は、どこか不満げに。

ナイトキャップを外して零れた、ウェーブのかかった栗色の髪を、少女は軽く手櫛で整えながら返事をした。

少女の名前は、“高峯千里”たかみねちさと この春から、高校生になる。

ゆるゆると立ち上がると、姿見の前に立つ。

身長は百四十の中頃と、同年代の少女達よりも十センチほど低い。未だに小学生に間違われることを、千里は気に病んでいた。

牛乳を飲んでも小魚を食べても、身長は一向に伸びない。

ブレザータイプの制服に袖を通すと、大きな欠伸をする。

髪よりもやや薄い栗色の目から雫がこぼれ落ちると、左手で拭き去る。

今日から高校生だというのに、こんなに眠いのでは頭が働かない。

「ふわ……」。

ダメだ、眠い。顔洗ってこよう」

学生鞆を持って、デジタル時計を腕に巻く。

そうして、ふらふらとおぼつかない足取りで部屋から出た。

春先の廊下は、まだまだ冷たさが残る。

白い靴下の裏から感じる寒さは、千里の目を覚ますのに役立つ
いた。

鞆を玄関に置いて、顔を洗って歯を磨く。

そうしてからリビングに向かうと、すでに家族が全員、食卓につ
いていた。

「姉ちゃん、遅えよ」

「うるさいよ、陸人」

自分に似た、栗色の髪の少年が、キュウリの漬け物を口に放り込
みながらそう言った。

行儀が悪いと父に怒られて、やや涙目だ。

「今日は入学式だろう？」

そんなにゆつくりとしていて大丈夫なのか？千里」

「まだ時間に余裕はあるよ、お父さん」

そうか、と一言零すと、黒い目を新聞に落とした。

この目は、陸人とよく似ている。

黒い髪は、姉弟のどちらにも似なかつたのだが。

「ごちそうさまっ」

「もう食べ終わったの？」

「うん、行ってくる！」

台所から顔を覗かせた母が、陸人を見送りに走る。

母は、さらさらのストレートヘアだが、その色は千里と同じ栗色だ。

瞳もまた、千里と同じ栗色。だが、母親のそれの方が、千里の瞳よりも濃い色をしているのが特徴的だ。

「ごちそうさま」

「気をつけて行ってこい」

「うん、行ってきます」

味噌汁にご飯、それから焼き鮭を食べ終わると席を立つ。

いつの間にか母も席に着いていて、立ち上がった千里についてきた。

「貴女はおつちよこちよいなんだから、気をつけなさいよ」

「だ、大丈夫だよ」

母の言葉に不満げな声を零すと、千里はローファアを履いて鞆を持つ。

少しだけ気になって持ち物を確認したのは、内緒だ。

決して、忘れ物があるかも、などとは思っていないのだ。

「行ってきます!」

「はいはい、行ってらっしゃい」

母に手を振って、扉から外に出る。

燦々と光る太陽が少しだけ眩しくて、千里は手で太陽を遮りながら目を眇めた。

「良い天気」

天気が良いと、心も晴れる。

だが今日は何故だか、天井知らずの青空を見ていると、どうしようもない不安に苛まれてしまっていた。

「気のせい、だよな」

そう一言呟くと、頭を振って歩き出す。

背中を押す風はひやりと冷たく、千里の肌を粟立たせていた。

十

学校までの道のりは、バスを使う。
徒歩十分で着くバス停からバスに乗り込むと、そのまま十五分ほどつり革を手に船を漕ぐ。そう簡単に眠気が消えるのなら、苦勞はしないのだ。

『次は、酒大路橋に止まります』
「あつ、と」

はつと目を開けて、白いボタンに指を置く。
だが、指に力を入れた段階で既に他の人が 赤く光っていた
押しであり、千里は二度押しをするという微妙に気恥ずかしい気分を味わうことになった。

「はあ、運がない」

運ではなく、不注意である。
入学式に向けた不安や希望で寝付きが悪かった。
それも眠い理由に入るはずなのだが、千里はどうにもそれだけではないような気がしていた。

何か大きなことを、忘れているような。

バスが止まり、後ろのドアから降りる。

学校まで目と鼻の先にある、大きな石橋だ。

この辺りは酒屋が沢山あり、そのことから酒大路さかおおじと呼ばれていた。
それがそのまま橋の名前になり、市の名前になり、そして高校の名前になったのだ。

「誰かが、泣いていたような」

千里は、無意識のうちにそう零していた。

石橋を進むにつれて心の隅から綻んでいく、殻の中の夢。ひび割れ剥がれ落ち消えゆく壁に、千里は意識を傾ける。

「そう、だ。確か」

「おはよう！千里っ」

背後から響く快活な声。

その声に、千里は肩を跳ねさせた。

ぐらりと心が揺れて、考えていたことを忘れてしまった。

「り、利香ちゃん？」

「なんで自信なさげなの？」

ポニーテールの髪を揺らしながら、千里の隣りに立つ少女。

彼女の名前は村上利香。千里の、中学時代からの友人だった。

「いやあ、入学式だねー」

「受験合格して良かったね、利香ちゃん」

「そう……あの辛い日々とはお別れしたんだよ！」

おおげさに手を広げてみせる利香は、開放感に満ちあふれていた。ランクの高い学校というほどでもないが、それでも一応、進学校だ。

勉強よりも運動が好きだと公言してはばからない利香は、当然のように勉強が苦手だった。

「でも、毎日予習復習くらいはしておこうよ」

「お母さんみたいなこと言わないでよ……」

肩を落とす利香の姿に、千里は苦笑する。

だがここで言うておかないと、“また”追い込みに付き合わされるのだ。

そう、高校受験時も期末や中間試験時も、経験済みなのだ。

「あら、お二人とも、今日は早いのですね」

「泉美ちゃん……は、車？」

「はい」

黒い車　ロールスライスから足を降ろした、黒髪姫カツトの大和撫子。

利香同様千里の中学時代からの友達である、姫小路泉美だ。

姫小路ひめこうじは酒大路と並ぶ名家で、食の小路、酒の大路と地元民から並び立てられるほどの“お金持ち”だった。

そんな彼女もまた、この酒大路高等学校の生徒になる。普通の進学校なら彼女の親も口を挟んだことだろうが、由緒正しいという意味では、この地域で酒大路よりも古い学校はない。だから彼女も、こうして千里達と背を並べることができるのだ。

ちなみに、泉美も利香の“追い込み”に手伝わされた一人である。

「はあ……」

それにしても、と千里は思う。

利香は女子の平均よりも五センチほど背が高く、百六十そこそこも身長がある。

泉美は背は百五十四と平均的だが、雪のように白く繊細な肌とくびれた腰は、同年代の少女の中で、飛び抜けて彼女を美しく見せていた。

「どうしたんですか？千里さん」
「う、ううん、なんでもないよっ」

ある意味、邪なことを考えていました。

そんなことを言えるはずもなく、千里は慌てて誤魔化した。
だがそれも、動物的に勘の鋭い友人の前では、無意味だった。

「はーん……さては千里、気にしてるでしょ？」

「へっ?!」

「大丈夫大丈夫、そのうち伸びるって。身長」

千里の頭を子供のように撫でる利香に、千里は慌てて弁解する。

それは誤解だと叫ぶ、その前に、泉美が口元に手を当てて呟いた。

「そんな、千里さんだってすぐに伸びますよ！」

「うう、そんな真面目に慰めないで」

肩を落とす千里、困惑する泉美、お腹を抱えて笑う利香。

夢の淵からこぼれ落ちた記憶の残滓は、ゆっくりと日常へ溶けて
いった。

その確かな違和感と、ともに。

眠気を誘う校長の挨拶。
クラス分けでも離れなかった友人。
初めてできる友達や、若い新任の担任教師。

陽光の差し込む窓際の席。
真新しい木の机と座り慣れない椅子。
年間行事予定のプリントと、自己紹介。

新しい全て、その中で微かに覚える違和感。
渴きで軋む心臓と、喉に詰まった感情の塊。

「思い、出した」

夢の全容ではなく、その欠片。
チャイムが鳴り友人達に手を振り、酒大路橋の上で呆然と呟いた。
誰かが助けを求めている、自分はそれに答えようとした。

その声が、苦しくて悲しくて、そして痛々しくて、手を差し伸べたいと願った、旋律。

「ただの夢、なのかな？」

橋の上から、川を眺める。

透明の川に映る自分自身の姿に、夢の中の光を重ねる。ただの夢なんかじゃないと、誰かが千里に訴えかけるのだ。

「お願い、たすけて」

……………。

夢の中の声、それを、うる覚えながら暗唱する。

すると……………千里の胸に、声が掠めた。

「あ……………」

……………。

断続的に聞こえ続ける音。

その声に、その旋律に、その言葉に……………意識を、重ねる。

「誰が、私を呼んでいるの?!」

思わず、声を荒げる。

求める言葉を掴み取ろうと、喉から心の叫びを溢れ出させる。

お願い。

はつきりと、聞こえた。

確かに聞こえた言葉に、千里は顔を上げる。
辺りはいつの間にか夕暮れになっていて、空は橙色に染まっていた。

どれほど意識を集中していたのか、千里は苦笑しながら腕時計を見る。

「五時四十五分、三十、八……秒？」

秒数まで、ぴたりと止まった時計。

千里は大きく目を瞪ると、思わず空を見上げた。

風が強い日なのに、動かない雲。

空に縫い止められたように、止まった二羽の鴉。

川に落ちた小石が生み出した波紋は、消えることなく残り。

……千里を除く世界の全てが、静止していた。

「そんな」

お願い。

「っ」

痛みが、千里の頭に響く。

声は何度も反響して、胸を侵して脳を打ち付け魂を支配する。

ぐらりと揺れるアタマとココロを、千里は右手と左手でそれぞれ抑えた。

「誰なの……だが、私を呼ぶの?!」

悲痛な声だった。

瞳から一筋の雫がこぼれ落ちて、千里から離れた途端空中で静止する。

千里以外が、止まっているのではない。

お願い、どうか。

私に、力を貸して。

どうか、どうか、私たちの世界を……。

千里だけが……世界から切り離されている。

その感覚を感じ取って、千里は両目を見開いた。

「なに、これ」

視界が、白で染まっていく。

綺麗な絵を漂白していくように、塗りつぶされていく世界。

落ちるような、浮き上がるような、不可思議な浮遊感。

水の中で息をしているような、空気の中で泳がされているような、奇妙な不快感。

やがて、全てが白で溢れかえる。

虚無にも似た純白の光が、千里の身体を呑み込んでいく。

「あ」

小さな呟きを残して、意識が薄れる。

その寸前、千里は 遙か遠くに、黄金の涙を垣間見た。

私たちの、世界を…… “救って” ください。

光が、
消えた。

序章 終わりの音／始まりの光（後書き）

かねてより書きたかった、異世界召喚モノです。

読み易さをテーマにして、続けていきたいと思えます。

手法なども今までと変化を持たせて、実験的に色々試していきたいと思えます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

次話もどうぞ、よろしく願います。

2010/10/02

現在細部修正中。

全体的な書き直し、手直しも後ほどします。

2010/11/22

改訂完了。

序章全て、書き直しました。

一章 第一話 光の外側

木漏れ日が、小さな肢体を照らし出す。

動くことのないその身体は瑞々しく、森に住む獣たちにとっては、降って沸いた“ご馳走”だった。

『グルルル……』

黒い体毛の狼。

尾が二本あり、目は血のように紅かった。

『グウウウ』

狼は低く呻り声を上げて、動かない獲物に近づく。

突然動き出すことを警戒して、鼻を鳴らしながらゆっくりと。

『ガウツ』

一鳴き吠えて、反応を確かめる。

しかし、獲物は動きを見せない。

ならばこれは獲物ではない ただの、餌だ。

噛みついて、その血肉を貪る。

その光景を想像しているのか、狼は涎を垂らしながら吠えようとする。

これで群れの仲間が集まって、餌にありつくことができるのだ。

だが、それは風を切る高い音によって遮られた。

タスッ

『グルッ?!』

大きく後ろに跳躍する。

すると、先ほどまで狼が立っていた場所に、一本の矢が突き刺さった。

深く暗い森の、その先。麓に近づき、明るくなっていく森の中。

鬱蒼と茂る木々の間から、焦げ茶の外套を羽織った人影が、弓を構えて立っていた。

「退け」

警告。

森を知り尽くした、狩人の声。

森の獣たちと、今、事を構える気は無いという合図。

『グルルル……ウウ』

狼は獲物を一瞥すると、もう一度狩人の姿を視界に納めた。

黒い髪の間人が纏う、黒色の皮鎧……それは、自分たちの強靱な肌を貫いてきた、証だった。

『ウウウウ……グウウ』

狼はもう一度だけ低く呻ると、狩人を睨み付けながら後退して、茂みに入る。

狩人の視界が遮られる木々の狭間に入ると、群れへと走り去っていった。

「アインウルフ、か。」

ふう、群れでなくて良かった」

耳が隠れる程度の、黒い髪。

二十歳前の少年が、大きく息を吐いた。

「それにしても……」

「おい、大丈夫？」

少年は周囲を警戒すると、倒れ伏した人影に近づいた。

見たこともない紺色の服装と茶色の靴に首をかしげながら、俯せになったその人影を抱き起こした。

「軽い……」

「女の子、だね」

俯せのままでは体調を確認することも出来ない。

だから、抱き起こしながら仰向けにした。

すると、少年の腕の中で、栗色の滑らかな髪が柔らかく広がった。

「非道い熱だ。」

「……早く、治療しないと」

少年は、少女　千里を負ぶさると、周囲を警戒しながら走り出した。

視界に光が差し込む感覚は、痛みを伴う。

太陽の光は強くて熱い。それ故に、“悼む”のだ。

「は……あ」

その光を遮るように右手をあげる。

そのまま目元を持って行くと、自分の目元が濡れていることに気がついた。

「あ、れ？
なんで、私……」

涙を流すような、悲しいこと。
そんなことがあっただろうかと、千里はハッキリとしない頭でぼんやりと考えた。

「起きなきゃ、遅刻しちゃう」

ベッドの頭下へ手を伸ばす。

だが、いくら探しても目覚まし時計は見つからない。
寝ぼけて叩いて、落としてしまったのだろう。

それでお気に入りの目覚まし時計を壊したのは、半年前のことだった。

「壊れてなきゃ、いーけど……」

そう言いながら、起き上がる。

上半身を起こすと、大きく背伸びをした。

「今、何時だろ？」

「……あ、れ？」

時計を見ようと、周囲を見回す。

だがそこは、見慣れた自室ではなかった。

木造の家。

板張りの床と壁。内装は質素で、木で出来た小さな机と椅子、それから箆笥が置いてあるだけだ。

「え、えと？」

ベッドは、自分の部屋にある物よりも、ずっと固い。
くすんだ白のシーツと、申し訳程度に掛けられた毛布。
来ている服は桃色の寝間着ではなく、茶色の野暮ったい上着とズボンだった。

「え、ええっ!?!」

知らない部屋にいて、おまけに着替えさせられている。
なにかされたのではないか、むしろ誘拐されたのか、今は一体何時なのか。

取り留めもない“心配事”が頭を埋め尽くして、千里は混乱から顔を青くした。

「ど、どうしよう」

警察?で、でもケータイもないし……」

両手を振り回して、慌てる。

ベッドから降りようにも身体に力が入らず、困惑したまま何も出
来ずにいた。

そして、何とか息を整えて落ち着こうとしていた時、それをノックの音で再び乱された。

「入るよ」

……って、まだ起きてないか……な？」

黒い髪に黒い目。

灰色の上着に茶色のズボンの少年が、パンと水に乗せた木製のト

レイを持って立っていた。まさか起きているとは思わなかったと、そんな表情で呆然としている。

「おとこの、こ？」

「大丈夫っ？！」

「どこか、体調が悪いとか、ない？」

机の上にトレイを置くと、少年は慌てて千里に駆け寄った。

見知らぬ男の子に詰め寄られるという状況は、本来ならもっと騒ぐだろう。

けれど、混乱の最中に於いて、千里はただ固まることしかできなかった。

本当に混乱すると、動けなくなるのだ。

「今、薬師さんを呼んでくるから、そこで待っていてっ！！」

「え、あ」

手を伸ばす千里を尻目に、少年は駆けだしていった。

男の子に着替えさせられたかも知れないし、誘拐犯的な人かも知れない。

そんな動揺も困惑も、先に少年に持つて行かれてしまい、千里は叫び声を上げるタイミングを失っていた。

「うう……」

「なんなんだろう、ほんとに」

身動きがとれない以上、先ほどの少年を待つしかない。

その上で困惑できなくなった千里は、大きく息を吐いた。

想定とは違うが、冷静になれたのだ。だったら、この機会に状況を整理すべきだろう。

そうでもしないと　蓋を閉めた感情が、溢れ出そうだったから。

「えーと、まずは」

顎に手を当てて、頭を回す。

最後に見た光景はなんだったか……それを思い出す必要がある。

「みんなと帰って、それから　そう、頭が痛くなって、空が……止まって」

頭痛をもたらすほどに響いていた声が、今は止んでいる。

その音が現実の物ではないと思わせるほどに、静かだった。

「声が“助けて”って、それで……っ」

最後の光景。

息苦しい、宇宙にでも投げ出されたかのような、無限の光。

それに飲み込まれていく光景を思い出して、千里は息を呑んだ。

「光の外側、なのかな？」

ガラスの嵌められていない、ひさしだけがついた窓。

かろうじて動く上半身を大きく伸ばして、千里は窓から外を眺めた。

「なに、……？」

鬱蒼と茂る緑。

木漏れ日がむき出しの地面を照らし出し、そこにアスファルトな
どがないことを示していた。舗装もされていない地面と、都心部で
は見られないような大きな木々。

「え、えーと……」

どこかの山奥に紛れ込んだじゃった、とか？」

そんなはずがない。

そんなはずがないと解っているから、声が震える。

唇は青く、顔は白い。

戸惑いは不安に、不安は恐怖に塗り替えられる。

不思議の国に迷い込んだのなら、そろそろネズミのヒントが欲しい。

「こつち！早く！」

「ええい、

落ち着かんか！」

先ほどの少年の声と、しわがれた老人の声。

その二種類の音に、千里は現実へ引き戻された。

「ええつと……」

「は、入るよっ！」

「は、はい」

慌ててきたのにもかかわらず、少年は律儀に確認をする。

その後ろから大きなため息の音が聞こえて、千里は小さく笑った。

そんな余裕はないはずなのに……いや、余裕がないからこそ、笑
うのだ。

「村長、お願い」

「わかつとる。」

さて、ワシはここ“ミドイル村”の村長、イルルガじゃ。

お嬢ちゃん、自分の名前はわかるか？」

色素の抜けきった白い髪に、黄色い目。

ぼさぼさの髪と小さな体躯で、陽気な笑みを浮かべていた。人に親しまれる、人を安心させる、そんな笑みだった。

「わ、私は千里……高峯、千里です」

「タカミネ？」

「あつ……えと、ち、千里が名前です」

慌てて、言い直す。

日本語を話しているはずなのに、外国の人に自己紹介をするような感覚。

その不可思議な感覚に、千里は目眩がした。

「さて、どうして森に倒れていたのか

……その様子では、解っておらん」

「はい……」

それは、千里が聞きたい事だ。

学校帰りだったはずなのに、気がついたらこのベッドで眠っていたのだ。

どうしてこんな、妙なところにいるのか……その答えが、欲しかった。

「最後にどこにいたか、解る？」

黒髪の少年。

故郷を思わせる髪の色に、千里は僅かな安堵を覚えた。
まったく違う場所ではないと、そんな風に思えるからだろう。

もうここが“そんな場所”ではないと、解っているはずなのに。

「 県、酒大路市の道端、です」

「 えーと、国は？」

聞いたことのない地名、少年は首をかしげた。

この周辺の地理は解るが、“セオウシ”などという街は聞いたことがなかった。

ならば考えられるのは、何らかの事情でここまで運ばれてきたという可能性だ。

誘拐や獣に運ばれたにしては、不自然に過ぎる状況だが。

「 日本、です。」

…… あっ、あの、ここはいったいどこなんですか？」

悲痛な声だった。

見たくない現実、知りたくない真実、目を背けられない光景。
それを前にして、千里は唇を噛みしめた。

「 村長……」

「 うーむ」

……ここは王国“スウェルス”の東南にある村、ミドイルだよ」

王国という言葉。

聞いたことのない地名。

外国なのに通じる言葉。

とうてい信じられない状況に、千里は胸に手を当てて震えた。まるで、弟が好きなRPGの世界に迷い込んだような、状況。

「村長、もしかして……」

「うむ……おそらく」

何か情報があるのなら、少しでも良いから状況を掴める何かがあるのなら。

それが欲しいと、千里は声を上げた。

「あ、あのっ……心当たりがあるんですかっ?!」

身体に力が入らず、詰め寄ることが出来ない。

でも姿勢だけは前に、心の慟哭を疑問と一緒に叩きつけた。

「おそらくお嬢ちゃんは

“流れ人”だろう」

「ながれ、びと？」

「うむ」

聞いたことがない単語は、先ほどから山のように出ている。

それら全部を聞くのは後でも良い。今はただ、この単語の意味が知りたかった。

その意味を込めて、千里は少年を見る。

黒髪黒目のこの少年が、一番安心できる雰囲気を持っていたからだった。

「僕も爺ちゃんに聞いたことがあるだけだから、詳しくは知らないんだけど……」

少年はそう、前置きした。

そして、戸惑いつつも、イルルガと千里に目で促されて続ける。

「数年に一度、こことはまったく違う場所から流れってくる人がいる。何年も空けて一人だったり、一度に複数人来たりまちまちだけど……そうやってここへやってきた人間を、“流れ人”っていうんだ」

「違う場所……違う、世界？」

「うん」

口元に両手を当てて、真っ青な顔で俯いた。

その表情、その仕草が余りにも痛々しく、少年は思わず目を伏せて顔を逸らした。

「帰り方……あの、わ、私はっ」

継るような声は、震えていた。

何故継るのか……それは、薄々気がついているからだろう。

もっ、

「方法は、解らないんだ」

「前例も、あるかわからん」

“帰れない”という事に。

「そんな」

突然の状況。

突然の絶望。

あまりに唐突すぎる状況に、千里は涙すら流すことが出来なかった。

まだ実感がわかない……まだ、夢であって欲しいと思っているのだ。

「少し、時間をおこう。行くぞ、ナーリヤ」

「うん、村長」

少年 ナーリヤは、イルルガに連れられて外へ出る。

呆然と虚空を見つめる千里を、最後に一瞥だけして。

「村長」
「うむ」

部屋から出て、二人はナーリヤの家の前に立っていた。
森で狩りをするナーリヤは、村から少しだけ離れた位置に居を構えている。

今は亡き彼の“爺ちゃん”の、持ち家でもあった。

「しばらくは、おまえの家に置いてやってくれ」

「うん、でも」

「わかっておる」

ずっと長くいるのは、耐えられない。

ナーリヤがではなく、千里が、だ。

「それもそのうち、なんとかしよう」

「うん……ありがとう、村長」

「なんだかんだで体調もみれなんだ。

まあ、シヨックはあるだろうが、体調を崩している様子ではなかったがな。

失った体力も、明日にはある程度回復するだろう」

ミドイル村の村長、イルルガは薬師でもある。
人の体調を見て、調薬した薬を処方するのだ。
千里の体調を確認したのも、イルルガである。

「森で倒れていた時は、どうなることかと思ったなあ」

「“高熱”を出した人間を運んで、

あんな高価な薬で治療なんかするお人好しは、おまえくらいだよ」

呆れたような声で、イルルガはそう言った。

声色こそ呆れているが、その目は暖かい優しさに満ちていた。

そんな目で見られて、ナーリヤは思わず顔を逸らした。

「爺ちゃんがしてくれたことを、爺ちゃんの遺してくれた物でした
だけだよ」

「セアックの意志と言いたいのか？……そうか、それなら仕方があ
るまい」

小さく笑い声を上げるイルルガ。

その顔は、どこか懐かしそうな色を帯びていた。

「あの子も同性がいないと厳しかろう。

明日、村の女衆に話しを通しておくから、連れて来い。

……それまで、頼んだぞ。ナーリヤ」

「うん、村長。解ったよ……ありがとう」

ナーリヤは、イルルガの目を見て、まっすぐと頭を下げた。

ナーリヤの誠実さが解っているから、イルルガは“幼い”少女を
預けることに、躊躇いを見せなかったのだ。可愛い女の子だからど
うこうするよつな、男ではない。

「今日は一度帰るが、様態が悪くなるようだったらすぐに知らせて
くれ」

「うん、送ろうか？」

「カカツ！まだそんなに老いてはおらんよ」

イルルガはそう言って大きく笑うと、ナーリヤの背を強く叩いた。その勢いに驚いて、ナーリヤは少しだけ肩を跳ねさせた。

「うわっ」

「鍛えが足りんぞ？では、な」

それだけ言つて、今度は喉の奥で小さく笑う。そして、背を向けて村へと帰つていった。

「はあ、元気だなあ、村長」

そう、大きくため息を吐く。

嫌悪感が含まれていないのは、そんな村長も好きだからだ。村人も、森も、この家も……ナーリヤは、“好き”だった。

「とりあえず、水を汲みに行かないと」

家の裏手に回つて、井戸水を汲む。

そして、それを持って家に戻ろうとして……足を、止めた。その視線の先には、千里の部屋の窓があった。

千里が目を覚ましたのが、夕刻間際……西日の当たる時間だったため、もう外は暗くなりつつある。当然部屋も暗くなり、千里の部屋も例に漏れず暗い。

「声？いや……」

すすり泣くような、声。

その音に、千里の心情に思い至った。

不安だし、悲しいだろう。生まれ育った地にも、血を分けた家族にも、逢えないのだ。

「よし」

ナーリヤはそう、小さく呟くと、懐から筒状の木を取り出した。そしてそれを持ったまま、窓の下にそっと座った。

†

一人残された千里は、ぼんやりと虚空を眺めていた。そして、大きく息を吐いた。

「はあ、なんなんだろう。
ある日突然異世界にやってきました！……って、ゲームじゃない
んだから、さ」

肩を竦めて、呆れたような声を出す。
必死に明るく努めようと、軽い口調で放たれた言葉。
だがその声は、震えていた。

「明日から授業開始なのに
お父さんとお母さん、心配してるだろーなあ」

ついでに言えば、弟の陸人も。
千里は小さくそう付け加えると、無理に声を出して笑った。

「利香ちゃんと泉美ちゃんは……
明日にならないと、まだ私がいなくなっただってわからないか」

心配はかけたくない。
けれど、嫌でもかけてしまうだろう。

「帰ったら、謝らなきゃ」

帰ったら、謝ろう。

帰ったら、愚痴をこぼそう。

帰ったら、少しだけ不満を言って。

帰ったら、久しぶりに甘えてみよう。

「かえった、ら……あ、あれ？」

涙は出なかった、はずなのに。
一人になった今になって、熱を持った雫が、頬を伝って流れ落ちた。

「あ、や、やだ、
今泣いたら、やだ」

今泣いたら、立ち上がれなくなってしまふ。
だから、千里は涙を拭う。両手で擦るように、一生懸命涙を拭う。

「だ、だめ、止まらない
……や、やだ、泣いたらダメだって、わかって、いるのに……あ、
ああ」

声が漏れる。
喉の奥からしゃっくりが出て、今までよりも大きな雫が零れる。
涙は熱を持ち、その熱が頬を朱に染め、心を灼く。

「お父さん、お母さん、陸人っ
利香ちゃん、泉美ちゃんっ……あああああっ！」

声を上げて、泣くのは、嫌だった。
泣いて泣いて、それで現実を受け入れてしまふのが怖かった。
夢でありたいと、見知らぬ地なんかじゃないと、もう少しだけ信じていたかった。

「ひっ、いっく、うっ」

声を殺し、感情を殺し、理性で蓋をする。
けれど溢れる想いは、簡単に蓋をこじ開けた。

「あ、うう、ああ」

……

涙を堪えようと俯く千里の耳に、柔らい音が届く。
優しく和やかな、旋律。

……

「だ、れ？」

……

笛の音だろう。

優しい音が、千里の心を落ち着かせて、包む込む。
なんとか身体を起こして、窓に手をかけて身を乗り出す。
音は直ぐ側　千里の、真下。

「あ　」

）

）

黒い髪の少年。

イルルガが、“ナーリヤ”と呼んだ、年上の男の子。
ナーリヤは、窓の下に座り込み、木製の横笛を吹いていた。

千里が声をかけても、止めることはなく。

ただただ千里の涙を止めようと、旋律を重ねていく。

いつしか千里は、その音に引き込まれていた。

逢えないことは悲しいけれど、悲しんではかりではいられない。
それでも今は泣いても良いんだと、優しく諭す暖かい音色。

「ありがとう」

そう小さく、言葉を零す。

そして、千里はゆっくりと目を閉じた。

声は出ないけれど、涙はもう拭わない。

流れるままに涙を流して、明日からは前を向こう。

それでも、今は。

ただこの音色に身をゆだねて、まどろむ意識の中で悲しみを流そう。

この世界で、顔を上げる為に。

一章 第一話 光の外側（後書き）

第一話をお送りしました。

次回から、少しずつ周囲を巻き込んだお話を展開していこうと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございます。次話もどうぞ、よろしく願います。

2011/04/07 改訂後の序章との矛盾点を修正。

一章 第二話 ミドイルの村

小鳥のさえずりと、薪を割る小気味良い音。
風が木々を揺らし、太陽が大地を照らす光。

「ふわ、あ？」

窓に頭を預ける形で寝ていた千里は、ゆっくりと目を覚ました。
浮上していく意識と共に、昨晚の記憶が蘇る。泣きはらした目からは痛みが引き、微かな熱だけが残っていた。

「そっか、

寝ちゃったんだ」

顔を上げると、日陰になっていた。

千里のいる部屋は西日に面している為、朝日は差し込まない。

そのため、昼近くはこの時間は、ひさしが大きな影になっていた。

「うう、そろそろ起きなきゃ」

何時までも眠ってはられない。

泣き尽くしたのなら、後は前を向かなければならない。

それがどんなに辛く、どんなに大変でも、折れたくはなかった。

千里は、負けず嫌いなのだ。

このまま負けっ放しは嫌だから、まずはできることから始める。

「薪を割る音

……あっち、かな」

だからまずは、“お手伝い”だ。

お世話になるのだから、それくらいはしたい。

そう思った千里は、ベッドから降りて音の鳴る方へ歩いて行った。

E
x
I

手斧を振り降ろすと、風を切る甲高い音と連続して、薪が割れる音がする。

それをテンポ良く繰り返していると、二人分補える量の薪が積まれた。

「これくらいで良いかな」

ナーリヤはそう言って笑うと、額に巻いてあった白い布を取った。汗が目に入らないように、外で作業をする時は、こうして布を巻いていた。

「あ、あのう」

「うん？」

薪を纏めていると、後ろから声が聞こえて振り向く。

ベッドの横に置いてあった革靴を履いた千里が、扉のところ立っていた。

泣き顔を見られたことが恥ずかしいのか、頬を淡く朱に染めて、目は伏せている。

「どうしたの？」

「えーと……チサト、だったよね」

「は、はい！」

「たかみ……千里＝高峯です！」

名前が先に来ることは、昨日の会話で解っていた。だから千里は、慌てて言い直したのだ。

「うーんと……」

チさと、ちさと、千里、かな？」

「は、はいっ」

ナーリヤは何度か口の中で転がすようにして繰り返すと、しっか
りとした発音で名前を呼んだ。ナーリヤは、少し難しい発音でも綺
麗に発音することが、得意だったのだ。

「僕はナーリヤ。」

「ここ、ミドイル村の狩人だよ。よろしく。」

「ああ、あと、畏まらなくても良いからね？」

「なんか、こっつ……むず痒いんだ」

そう言って、頬を掻きながら笑う姿は、千里にとっても安心でき
るモノだった。

とりあえず部屋は貸してくれていて、その家主は優しい人。
こんな環境で文句を言ったら、きっとバチが当たるだろう。

「はい うんっ」

「よろしくね、ナーリヤ」

笑顔には、笑顔で返す。

誠実には、誠実で返す。

それは千里のモットーで、きっと大切なことなのだ。

「さて、と」

「それで……どうしたの？」

「ああ、住居なら心配しなくても良いよ。」

「きちんと状況を呑み込んで方針を決めるまではここにいればいい
し、」

村にだって空き家くらいあるから、定住したいなら手伝うから、
ね」

「え、ええと……」

ナーリヤは、考えられる事を次々と上げていく。

家に住むのが嫌ならば、村に住む手配をする。

そこまでしてくれるのは悪いし、どうしてもという疑問も残るが、
今はそれが聞きたいのではない。

「なんか、手伝うよ」

お部屋まで貸してくれてるのに、なにもしないのは嫌だから

……その、我が儘だけど……」

自分が嫌だから、手伝いたい。

隠しめせずそう口に出して始めて、千里は自分の欲求が“我が儘”
だということに気がついた。受動的なままで良いとは思えないが、
性急すぎたような気もしたのだ。

「そっか……優しいんだね。ありがとう」

「や、優しいとかじゃなくてっ！」

だというのに、ナーリヤは笑って千里の頭を撫でた。

小さい子供にするような仕草だが、ナーリヤが自分よりも大人っ
ぽいこともあって、千里は振り払えずにいた。今でも、大きな大人
の人には、よく撫でられるのだ。

「それじゃあ、昼食の準備でも手伝って貰おうかな。包丁は扱える
？」

「うんっ……って、もうお昼？」

頭上を見れば、確かに太陽は真上まで昇っていた。
朝食を食べ逃すほど、ぐっすり眠っていたのだ。

そのことに気がついたとたん、お腹が減りだして、千里は肩を落としました。

くう

「っ」

小さな音。

お腹の虫が鳴く音に、千里は慌ててナーリヤを見上げた。

頬を朱に染め、涙目になっている千里と、耳を赤くして顔を背けるナーリヤ。

気まずい沈黙が二人を包む中、先に切り出したのはナーリヤだった。

「千里」

「……」

笑われるのか、フォローされるのか、嘆かれるのか。

正直、精神的にはどれも辛い。

どんな言葉が返ってくるのか、緊張しながら　かつ、涙目になりながら　千里は、ナーリヤの答えを待った。

そして、ナーリヤは　。

「さ、さあ、行こうか！」

華麗に、流した。

「うう、……ありがとう」

前途多難。

だがまずは、腹ごしらえである。

十

ガスも電気も水道もない。

火は熾さなければならぬし、水も井戸まで汲みに行く必要がある。

井戸も、地域によっては川まで汲みに行く必要がある。

そんな環境で千里に出来たのは、文字どおり“子供のお手伝い”

程度だった。

ようは、ジャガイモやニンジンに酷似した野菜の皮を剥き、切り分けるだけ。

火の始末なんか解るはずもなく、おおよそ料理と言える部分で手伝うことは出来なかったのである。

「エルリスの恵みと、イルリスの導きに感謝を」

「え、えーと……い、いただきます」

軽く握り拳を作つて、胸元に当てる。

それから神への感謝を言葉にする、食事の礼儀作法。

そんなことが解るはずもなく、千里は両手を合わせた。

「あつ、そつか

これはね、過去を司る神様“エルリス”と、未来を司る神様“イルリス”……

この二柱に、現在を生きる僕たちが感謝の言葉を述べるんだ

……と、それで、その作法は千里の国の？」

ナーリヤの説明に、千里は感心しながら頷いていた。

未来と過去を司る二柱の神様……二柱在つての“今”だから、感謝の言葉を捧げるのだ。

「えーとね

これは、野菜を育ててくれた人、料理を作ってくれた人

そして、命をくれた野菜達に、“ありがとう”っていう作法なんだ」

そして、今度はナーリヤが感心する番だった。

こちらは、命の恵みへの感謝。

多神教である日本らしい文化だ。

「へえ……それ、いいね。

それじゃあ僕も、“いただきます”」

千里に倣って、ナーリヤも野菜のスープとパンに手を合わせた。それを見て、千里は慌てて右手の握り拳を胸に当てた。

「え、えつと……

エルリスの導きと？

ああっ エルリスの恵みと、イルリスの導きに感謝を。

“いただきます” あれ？」

気がついたら、自分の作法と混ざっていた。

それに気がついて、千里とナーリヤは目を合わせて、同時に首をかしげた。

「っ」

口を押さえて、木のスプーンを置く。

それで二人に、限界が来た。

「あははははっ」

「はははははっ」

お腹を抱えて、笑い出す。

些細でくだらないことなのに、すっかり気が抜けてしまっていた。

散々笑って、料理が冷める前にと慌てて食べて。

気がついたら、千里の胸はすっかり軽くなっていた。

見ず知らずの他人。

部屋も料理もくれたのに、こうして笑顔もくれる男の子。異性として意識するほど、恋を望んでいる訳ではない。胸を高鳴らせる状況でもないし、余裕もない。

それでも、ナーリヤと居れば“安心”することができる。ここまで簡単に気を許したのは初めてで……。

だからこそ、この残酷な世界に、千里は少しでも感謝をした。

最初の出逢いが、彼であったことに。

†

昼食を終えた二人は、山を少し下って村へ行くことになった。
正確にはナーリヤの家も村の中だが、家屋が密集しているのはも
っと麓の方にある。

千里は今、ナーリヤが保管してくれていた、高校の制服を着てい
た。

紺色のブレザーに白いネクタイの制服だ。

流石にローファーで山道は厳しいが、代わりの靴は麓で買わなけ
ればならないので、千里は靴擦れを起こさないことを願いながら歩
いていた。

「と……見えたよ」

「ふえ？　おーっ」

周囲が山で囲まれた、小さな村。

眼下に広がる人々の営みに、千里は感嘆の息を零した。

根っからの都会育ちだからこそ、こういった“田舎の風景”は貴
重だったのだ。

「ナーリヤ、あそこが？」

「そう、あそこが僕たちの暮らす、“ミドイル”村だよ」

高台から滑るように、ナーリヤが下る。

千里は、その後ろに追従しながら、転ばないようにゆっくりと降
りた。

「あつ！ナーリヤお兄ちゃんだー」
「ホントだ！おーい、ナーリヤ兄ちゃん！」

日の高い内は、子供は外で泥だらけになって遊ぶ。
千里の周囲の子供はゲームばかりしていた為、少しだけ新鮮な光景だ。

「ナーリヤ兄ちゃん、そっちの女の子は？」

群がる子供達を押しつけて、黄色い髪の少女がナーリヤに声をかけた。

髪よりも淡い黄色の瞳は、快活な光を宿している。

「僕の家人居候中の……あー、旅の人、かな」

言葉に迷って、結局こう説明した。

流れ人なんて単語は、誰もが知っている訳ではない。

「ふーん。あたしはレネ！お姉ちゃんは？」

太陽のように笑うレネの笑顔は、心地よいものだった。

その笑顔に“可愛い”と感想を持った千里は、だらしのない笑顔で目を合わせた。

屈まなくても目が合う高さだということに、密かに傷つきながら。

「私は千里。千里〃高峯だよ」

「チサト？うーん……じゃ、ちー姉ちゃんねっ！」

言いにくい発音だった為、レネは直ぐに略して覚えた。

口で何度か転がして名前を呼ぶ姿は微笑ましく、千里もつられて

笑みを零す。

「千里、子供好き？」

「えへへ……うん」

くるくると表情を変えて、好奇心に溢れた目で世界の全てを楽しんでいる。

千里は、そんな子供達が好きだった。将来の夢は、保母さんである。

「さて、そろそろ行こうか？」

「あ、うんっ」

千里は子供達に向かつて、名残惜しそうに手を振る。

緩んだ頬のままではいけないと解っていても、どうしても緩んでしまっていた。

傍から見れば、千里も子供達と同じくらい表情豊かで、子供っぽかった。

「こっちだよ」

未だレネ達に手を振り続ける千里を、ナーリヤが引っ張る。

小さく息を吐いて苦笑する姿は、子供達の保護者のように見えた。無論、その“子供達”には、千里も含まれる。

「おお、おっきい」

「ここが村長……イルルガさんの家だよ」

先行するナーリヤに、千里も続く。

歩く度に小さく軋む、板張りの廊下。

綺麗に張られた板の上を土足で歩くということが、日本生まれ日本育ちの千里には心苦しかった。だが、裸足で歩く訳にも行かず、結局眉をしかめるに止まった。

「村長！」

「おう、ナーリヤ。待つとたぞ」

木机の上で頬杖を付きながらキセルを吸う、白髪の老人。

イルルガはナーリヤ達の姿を確認すると、歯を見せて笑った。

「さて、まあ座れ」

「うん。ほら、千里も」

「う、うん」

少し遠慮していた千里を、ナーリヤがそつと促した。詳しい話を聞くということもあって、緊張しているようだ。

「流れ人……まずはそれからなんだが、

人伝故、ワシも多くを知っている訳ではない。そのことは、理解してくれ」

「はい」

情報は、何も手に入らなかった。

そんな“悪い状況”は、昨晚から想定済みだ。

悪い方にも思考を巡らせておかないと、いざという時に固まってしまう。

「突如光の中より顕れて、異界の技術をもたらす存在。

どこからか流れ着き、やがてどこかへ流れていく、無縫の旅人。

その人間達は、何時しか“流れ人”と呼ばれていた」

村に寄った吟遊詩人。

世界を歩き回って物語を聞かせ歩く彼らから聞いた、流れる者達の詩。

そんな吟遊詩人に、イルルガは何度か話を聞いたことがあった。

「間隔は不明だが、数年に一度光の中から現われる人間、それを流れ人と言うそうだ。

ナーリヤは昨日、一度に数年現われることがあると言ったが、あれは少し違う。

同じ年に数人現われることはあるが、次の流れ人は基本的に前の流れ人が“消えた後”にしか現われないそうだ」

流れ人は、流れる者だ。

定住すれば、寿命を迎えた後。

旅に出れば、その姿が消えた後。

流れに乗って廻ってくるように、流れ人は現われ消える。

その説明に、千里は息を呑んだ。

イルルガの言った“消える”が、“帰った”のならない。

だが、もしもそうでなかったら、その“消えた人”は　。

「千里、大丈夫だから……だから、落ち着いて」

肌が白くなるほど握りしめた拳を、ナーリヤがそっと包み込んだ。その冷たい手に、千里の意識が浮上する。

「う、うん。……あの、消えた人って」

「わからん。それは、街で情報屋を捜すなりした方が良さだろう」

解らないという返答に、千里は安堵を覚えていた。

そこでハッキリと、帰れないという明確な答えを出されていたら。

“流れ人”は、死んでいるなどと言われたら、千里の心は折れてしまっていただろう。藁にもしがみつく思いだとしても、肝心の藁がなければ沈むだけだ。

「これから、お嬢ちゃんはどうしたい？」

「私、は……」

思い浮かべるのは、平和な故郷の風景。

両親と弟と、二人の親友の顔。

「私は、帰りたい。」

帰るために、出来る限りのことがしたいです」

そう胸を張る千里の表情は、先ほどまでの怯えを孕んだ顔ではない。
い。

ただ前を見つめる、希望を持つ者の目だった。

「カカツ

そうか……ならば、お嬢ちゃんは“村人”ではなく“客人”だ。

歓迎ではなく、もてなしの宴を開こう」

「え？うたげ？」

イルルガは嬉しそうに、キセルから灰を落とした。

若い人間が前を見る。その姿を見るのは、年老いた先達者達の楽しみなのだ。

「いや、まだ十か十一だろうに、良い啖呵だ！

おまえもそう思うだろう、ナーリヤ！」

「うん。力強くて、暖かい目だ」

褒められている、のだが。

千里は、宴の指示を出そうと人を呼んだイルルガに、待ったをかけた。

聞き捨てならない言葉が聞こえたのだ。

「あつ！」

「お？なんだ？」

「千里？」

一緒になって笑みを零していたナーリヤも、イルルガと共に首をかしげた。

親子と言われても違和感がないほど、同調した動きだった。

「私は、十五歳です！」

十か十一の女の子じゃありませんっ！」

その言葉に、二人は同時に固まった。

子供特有の“背伸び”かと思つて千里を見るが、その目は本気だった。

「え？僕の三つ下？ダメだよ、もっと食べなきゃ」

「うーむ、これじゃあレネに抜かされるぞ」

帰ってきたのは、やや的外れな返答だった。

第一、食べて背が伸びるのなら苦労はしない。

食生活で背を伸ばそうと頑張ると、千里は横に伸びるのだ。

「むう」

「あ、あはは、

ごめんね、でもほら！

千里は今のままでも、充分魅力的で可愛い女の子だよ」

やはり、微妙にフォローがずれていた。

だが、大まじめに可愛いなどと言われて照れない女の子は居ない。

千里もその例に漏れず、朱に染まった頬を膨らませることで、怒っているかのように誤魔化していた。

…
そうでなければ、いつまでも根に持っていたりはしないのだ。
…
たぶん。

「くくつ……」

さて、宴の準備だ！手伝ってこい、ナーリヤ！」

「わわっ、うん！それじゃあ千里、また後で！」

ナーリヤは、それだけ言つと走り去っていった。

その素早い動きに、千里はただ呆然と見送っていた。

「あそこまでしてくれることが、不思議かい？」

「え、あ……はい」

イルルガの優しげな声色に、千里は戸惑いながらも頷いた。

ずっと思っていたことだ。何故、ナーリヤは始めて会ったような人間に、こつちも優しくしてくれるのか、と。

「ナーリヤは、この村で生まれ育った訳じゃないんだよ」

「え　　？」

唐突に語り出したイルルガ。

その声に、千里は逡巡を見せてから耳を傾けた。

「先代の狩人は“セアック”といってな、

この男は、ワシの親友だった」

遠き記憶に思いを馳せているのか、イルルガはそつと目を閉じた。年を取って背が低くなっても、威風堂々としていた狩人。その腕前は、未だに並び立つ者が居ないと謂われている。

「セアックが、狩りに行って、その帰り道。

アイツは、ぼろぼろの子供を拾ってきたんだ。

今にも死にそうなそいつを、セアックは治療した。

高価な薬まで使って、な」

思い浮かべるのは、四年前の光景。

全身が真っ赤に染まった少年を、雨の中だというのにセアックが負ぶってきた。

「その子供が絶え絶えの意識を失う前に聞き出せたのは“ナーリヤ”という誰かの名だけ」

ナーリヤとは、女性の名前だ。

だが、聞き取れたのはそれだけだった。

年齢さえも、正しいものか解らない。

「再び目が覚めた時には、子供　ナーリヤは何も覚えていなかった。どうして怪我をしていたのかというだけでなく、自分の名前や家

族さえも」

「そん、な」

その目に映ったのは、どんな世界だったのか。記憶喪失になった子供を見て、セアックは引き取ることを決意した。

子宝に恵まれず、病床に伏せた妻。

その妻に使うことが出来ず 間に合わず 手元に残った秘薬により命をつなぎ止めた子供。それはきっと、神がもたらした自分たちの“子供”だと思ったのだろう。

「セアックは、“ナーリヤ”という記憶に関わる唯一の鍵を、子供の名前にした。

そうすることで、彼を知るものの情報が手に入るかも知れないと、そう考えたんだ」

そうして子供は、“ナーリヤ”になった。

セアックの技術と知識、その全てを受け継いだ、新たな狩人。

半年前にセアックが命を引き取る前までは、山奥の家屋に二人で暮らしていたのだ。

「アイツはな、嬢ちゃん」

キセルに火を熾し、紫炎を昇らせた。

調薬によって作られたこの煙草は、薬だった。

風邪の予防効果などを持つ、薬だ。

「返したいのさ。」

セアックがくれたものをセアックに返すことができなかった。

だから、自分もセアックのように誰かに手を差し伸べて、恩を返したい。

……それがセアックへの手向けだと　アイツは、胸を張ってくれるのさ」「

まるで、英雄を孫に持ったような。

そんな生き生きとした表情で、イルルガは胸を張る。

「お嬢ちゃん」

「はい」

イルルガは、今まで見せたことの無いような、穏やかな笑みを浮かべた。

「ナーリヤは未だ、記憶を求めている。

もし村を出るのなら、アイツも連れて行ってやって、くれないか？」

「イルルガさん……」。

はいっ、もちろんナーリヤが頷いてくれれば、ですけど」

「カカツ！」

そうかそうか……ありがとうよ、お嬢ちゃん」

ナーリヤという少年が、抱えていたもの。

それが、イルルガの言葉で、千里の胸にストーンと落ちる。

ナーリヤが見せたその“心”に、千里は胸が暖かくなったように感じていた。

そんなナーリヤが共にあってくれるのに、不満はない。

「さてさて、宴が始まるぞ！」

「は、はいっ」

「元気に腰を持ち上げる、イルルガ。軽快な足取りで走り去るイルルガの背を、千里は負けては居られない、と後について走り出した。」

十

村人が集まり、大きな鍋を囲む。
その光景を、少し離れたところでナーリヤが見ていた。

「ナーリヤっ」

「千里……。いつたい、どうしたの？」

漸く自分をもみくちやにしていた大人達から解放されて、千里はナーリヤに並んで座った。二人で並んで、木陰で夜風に当たる。

「あのね、イルルガさんから聞いたんだ。ナーリヤのこと」

自分を助けてくれたのは、ナーリヤだから。
事情を聞いたことを黙っているのは、嫌だった。

「そっか……。爺ちゃんは、すごい人だったんだよ」

「そうなの？」

「うん」

唐突に、ナーリヤは語り出した。

それは、自分を助けてくれた人との思い出話だった。

「弓の腕前なんか、並び立つ者なし！って謂われてたんだ。
常に三手先を読み、一息で三本の矢を射る。」

その軌道は獲物の未来を辿り、その命を確実に摘み取る……。って
ね」

尊敬しているのだろう。

身振り手振りで説明する姿は、生き生きとしていた。

「ナーリヤは、弓は？」

「僕はまだまだ、だよ。」

一手先を読んで、弓を射る。

……。狩人の平均レベル、かな」

命中率でいえば、ナーリヤの腕前は“熟練した狩人”の平均レベルだ。

しかし、それに状況判断からもたらされる、獲物の行動把握が間に合わない。

つまり、経験が足りないのだ。

「口数の多い人じゃなかったけど、優しく強くて、カッコイイ人だった。

右も左も解らない僕を助けて、僕に全てを与えてくれた。

……今の僕は、爺ちゃんのおかげでこうして“在る”んだ」

ナーリヤは千里から視線を外して、空を見上げた。
それにつられて、千里も夜空を見上げる。

千里の住む都会では見られない、星の煌めく黒い天幕。
ビルの光や電光掲示板で地上が明るくないから、星が落ちずに空に在った。

「千里」

「うん、なあに？」

空に吞まれて、返事が虚ろになる。

そんな千里に、ナーリヤもまた空を見上げながら、声をかけた。

「僕は、爺ちゃんに貰ったものを返したい。

でも、爺ちゃんはもういないから……。

だから、これは僕の我が儘だけだ。

僕に、千里を助けさせてください」

そう言いながら、視線を落とす。

夜がこぼれ落ちたような、闇色の双眸。
その黒を、千里の鳶色の瞳が映した。

「私は、帰りたい。
でも、その方法が解らないから、探したい。
だから、これは私の我が儘だけだ。」

私を、助けてくれませんか？」

そう言って、笑う。

優しく、少しだけおかしな、そんな微笑みだった。

「よろしくお願いしますっ」

「うん……喜んでっ」

差し出された千里の右手に、ナリーヤがそっと自分の右手を重ねた。

それは契約。

拙いながらも、約束の証。

「さて、輪に戻る？」

それとも、まだここにいる？」

「ねえ、あのさ、」

またあの笛……聞かせて貰っても良い？」

「うん！」

それじゃあ、小さな演奏会だね」

やがて音色に人が集まり、結局は宴の場所が移るだけになる。
それでもその中心で、千里は演奏に耳を傾ける。

不安はある。恐怖もある。
それでも……希望を持って、いられる。

「頑張ろう。」

うん 頑張、ろう」

月が真上に輝くまで、暖かい宴は光を灯し続けるのだった。
。

一章 第二話 ミドイルの村（後書き）

第二話は、千里の状況把握でした。

次回に今後の方針と、村の問題に関わるお話を入れていきたいと思っています。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

2010/10/06

一部加筆修正。

2011/04/07

一部加筆修正。

2011/04/13

改行ミスを修正。

一章 第三話 森の主

強い風が、森を揺らす。

ざわめきはそこに暮らす獣たちに伝わり、空気を震わせた。

森の奥。

漆黒に彩られた深い場所。

そこに、四本の赤い光が走った。

闇を溶かし込んだような、黒い体躯。

血を飲み込んだような、真紅の目。

獲物の体液を纏った、白い大きな牙。

巨大ななにかが、縦横無尽に森を走っていた。

どこを指し、どこへ往くのか。

それは、人間では解らない、獣の境地。

王者の風格を持つ、獣の到達点の一つ。

『グルルルル

グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！……！』

森の最深部で、空を震わせる咆吼が響き渡った。

早朝のミドイル村は、少し肌寒さが残る。

身を包む毛布からなんとか抜け出すと、千里は大きく背伸びをした。

宴の翌日。

ナーリヤの家には帰らず、今日は村の宿屋に泊まっていた。夜遅くなってしまったので、獣道を歩くのが危なかったのだ。

「うう、さ、寒い」

寒さには弱いのか、千里は毛布を畳みながら肩を震わせた。いくら寒いからといっても、何時までも寝ている訳には行かない。だから、名残惜しくも暖かいベッドから抜け出した。

「はあっ、」

さて、今日も一日頑張ろう！」

大きく背伸びをして、頷く。

気合いを入れておかないと、前を向けないのだ。

「えーと、筆筒に一式、と」

この宿屋の奥さんが、千里の服装を整えてくれたのだ。

制服は捨てたくないと言った千里が頼むと、制服をベースに改造してくれたのだ。

ブレザーやネクタイはそのままに、厚みをつけて防寒防熱に備える。

足を出しておくのは危ないので、紺色の布地でロングスカートに改造。

その下から灰色の長ズボンを着いて、アインウルフの素材で出来た黒革のブーツを履く。

「これでいいの、かな？」

それらを全て身につけると、改造軍服のような出来あがりになっていた。

ちなみに、紺色の布地などは、全てナリーヤ……ひいては、セアツクの持ち物である。

着替えを済ませると、千里は部屋を出て階段を下りる。宿屋の一階は食堂になっていて、降りたら朝ご飯だ。

「今は……」

って、時計を見てもしょうがないか」

デジタル式の腕時計に表示されているのは、十五時四十五分三十八秒。

秒単位で動かない時計からは、その本来の役割が失われていた。

これは、千里が“声”に招かれて光に呑み込まれた時刻だ。

世界を渡ったショックで、時計が壊れたのだろう。

「おはようございますっ！」

「おはよう、チサトちゃん！」

良い笑顔で千里を迎えたのは、この食堂の主人、アグルだ。

彼の妻ミリネと二人の娘のメリアが、この宿屋の住人である。

旅人なんて滅多に寄らない地なので、部屋を借りているのは千里だけだった。

「チサトお姉さん、

おはようございます」

「おはよう、

メリアちゃんっ」

黄緑色の髪に、紺色の目の少女。

彼女がメリア……この宿屋の、看板娘だ。

メリアは千里を見つけると、丁寧に腰を折った。

メリアは、村の子供達のお姉さん役をしている、少しだけ大人っ

ぼい女の子だった。

「今朝方、ナーリヤが森でマクバードウを獲ってきてくれたから、今日は朝から良い出汁の取れたスープだぞ！」

アグルは、そう言うと千里の前に野菜と肉のスープを置いた。これにパンとミルクが、朝食だ。

「マクバードウ？」

「森の低いところを飛ぶ鳥です。」

緑の羽で森に溶け込み、木の葉のように滑らかに飛行するんですよ。

ナーリヤお兄さんくらいの腕前でないと、狩猟するのは難しいですよです」

スープに手を合わせながら呟いた千里に、メリアが説明をした。

その口調は穏やかで、そしてどこか誇らしい物に見えた。

彼女は、ナーリヤを尊敬しているのだ。

「へー……。」

すごいんだ、ナーリヤ」

ナーリヤは自分を“大したことはない”と言っていた。

だが実際は、村の“誇り”と呼ばれるくらいには、卓越した腕前だった。

「ナーリヤお兄さんは、自己評価が低いから」

「本当さね！あの子も、もっと自信を持つべきだと思つわ」

メリアがそう苦笑すると、続いてミリネが同意しながら大きく頷

いた。

ナーリヤの自己評価が低いのは、やはりセアックの腕前と比べている為だろう。

「えーと……、

エルリスの恵みと、イルリスの導きに感謝を。いただきます」

手を合わせてから、木のスプーンを手取る。

先が割れたスプーンで、突き刺すのにも使える食器だ。

「……うあ、おいしい」

柔らかい鶏肉と、ニンジンのような野菜。

味の相性が非常に良く、おいしい。

パンは少し硬めだが、スープに浸して食べれば、何の問題もなく喉を通った。

量は余り多くないが、千里は元々そんなに食べない。

だから、丁度良い量だった。

「戻ったよー」

「おう、ナーリヤ！」

最後の一滴を飲み干すのとはほぼ同時に、食堂にナーリヤが入ってきた。

その手には籠を持っていて、中から緑色の羽毛が覗いていた。

「とりあえず、もう二羽だけ捕れたから、お昼ご飯にみんなで食べて」

「ひゅー、さすがだなあ」

「ナーリヤお兄さん、すごい」

アグルとメリアに褒められて、ナーリヤは少しだけ頬を赤くしていた。

素直な賛辞に照れて、目を逸らしながら頬を掻く。

「ナーリヤって、すごいね」

「はは、千里まで。……あんまり、からかわないで」

困ったように笑うナーリヤの様子に、千里は笑みを零す。

なんだか“可愛い”男の人だ、とそう思ったのだ。

「さて……と、それじゃあ僕たちは村長のところへ行ってくるよ」

千里が食器を片付けている間に、ナーリヤは鳥を手渡しながらそう言った。

そして、扉に背中を預けて、千里が来るのを待つ。

「アグルさん、ミリネさん、メリアちゃん！すっごく美味しかったですー！」

最後にその手を振ると、アグル達は互いに顔を合わせてから、大きく笑った。

その笑顔に乗せて手を振ると、千里も元気に振り返す。

「それでは、また！」

「おっつ！」

頬を緩ませながら、ナーリヤに並ぶ。

村に溶け込み始めている、千里の姿。

その様子を見て、ナーリヤはどこか嬉しそうに眼を細めた。

十

村の奥の、大きな家。

イルルガの部屋に招かれた千里とナーリヤは、躊躇うことなく椅子に座った。

「さて、まずは簡単に地図を見せよう」

イルルガはそう言うと、色あせた地図を机に広げた。

小さなカーペットほどもある、大きな地図だ。

「ワシらの住むミドイル村が、ここ」

千里は、自分の頭の中で方角を考えながら、地図を見る。

地図の左端に矢印のようなマークがあるので、名称は違えどそちらが“北”と考えたのだ。

地図には、中央に二つの小さな島と、東西南北に大きな島。そして、東南、北東、北西、南西に大きな陸地があった。

「ウィズ大陸を統治する、スウェルス王国だ」

東南の大陸を指さし、更にその東南にある森を見せた。
「ここが現在地、ミドイルの村だ。」

「次がここだ。」

アストーイ大陸を統治する、リックアルイン帝国。
続いて、ルノリ大陸の神聖国家、ノーズファンと、
ヴェースト大陸を統治する民主国家、スエルスロードだ」

順番に、北東、北西、南西の大きな大陸を指す。

「ここが、主な地理だった。」

「その他は、随時ナーリヤに聞くと良い。」

「ひとまず今は目指すべきところだが……ここだ」

指したのは、スウェルス王国の北側だった。

海に近いこの場所に、イルルガは石を置いた。

「ここは旅人達が寄る大きな宿場街でな。

“ギルド”に所属する“情報屋”が、多く住まう場所だ」

ギルドとは、一言で言ってしまうえば登録制の仕事斡旋場だ。

一定の金額を年に二回納めることで、仕事を回して貰うことが出来る。

年会費は安いが、その分仕事から何分の一かお金が引かれるシステムになっている。

また、信頼できない冒険者や武器屋、情報屋などのことも解るので、ギルドには安心して仕事を頼むことが出来る。

ナーリヤは、首をかしげる千里に、簡潔にそう教えた。

「へえ……。」

それじゃあ、ギルドに登録してある情報屋さんを当たればいいのか？

「そう言うことだろうね」

「うむ」

情報屋を当たれば、なにか掴むこともできるだろう。

その宿場街を見て、千里は強く頷いた。

「もしかしたら、大陸を渡ることになるかも知れん。

何が起こるか解らないが、それでも行くか？」

覚悟を問う、視線。

イルルガの真っ直ぐな目に、千里は正面から見返した。

「はい。」

みんな下へ帰りたい。
帰るために、諦めたくない。
……だから、私は行きます！」

千里の宣言を聞くと、イルルガは大きく息を吐いた。
その視線を柔らかな物にして、「そうか」と一言呟いた。

「おまえも行ってこい、ナーリヤ。
なにか、“自分”について、手がかりを得ることが出来るかも知
れんぞ？」

「はいっ！……ありがとう、村長」

力強く頷く二人に、イルルガは満足そうに笑う。
それならば、後は旅の準備をするだけだ。
旅の心得も、教えなければならない。

「さあて、忙しく」
「大変です！村長！」

柔らかい空気のまま終わろうとしていた空間は、駆け込んできた
村人の声によって乱された。

まずは、何故顔を青くしているのか。
とにかく今は、それを聞くのが先だ。

「メリアがっ
……メリアが、アグネークに！」
「え　？」

ナーリヤとイルルガの顔が、強ばる。

その表情に、千里は強い不安を覚えて、強く握った拳を胸に当てた。

十

宿屋の二階。

千里が使っていた部屋の、隣の部屋。
白いベッドの上で、メリアが寝かされていた。

吐息は荒く、顔は過剰に赤い。
時折苦しげに零す声が、何よりも痛々しい。

「メリアちゃんっ」

「止めるんじゃ、レネ」

ベッドに縋り付くレネを、イルルガが抑える。
その表情は暗く、悲しげだ。

「どうして、アグネークがあんなところに……ッ」

爪が肌を切るほど強く、アグルは拳を作った。
そのアグルを、ミリネが痛々しげに支えていた。

「アグネークは、本来森の深い場所や洞窟にしか居ないんだ」

千里にそう説明するナーリヤの目は、俯いていて見えない。
ただ、血の滲む唇が、その感情を表していた。

「男性の腕の長さもある赤い蛇で、鋭い牙を持っている。

牙には強力な毒があつて　　噛まれれば、一晩で……」

「そんな……だって、なんで」

千里は、自分でも何を言っているのか解らなかった。

毒蛇に噛まれても、病院ですぐに治療することが出来る。

だが、ここではそうはいかない。高度な医療など、ないのだから。

「店の前で遊んでいた子供を、庇ったそうだ」

イルルガが、そう悔しげに呟いた。

このままではもう、ダメだろう。

薬師としての目が、そう語っていた。

「おじいちゃん！」

「アルナの花……アルナの花はっ?!」
「いかん！」

訴えかけるレネに、イルルガは大きく声を上げた。
その声に、レネは肩を震わせる。

「アルナの、花？」

「治療薬だ。」

それがあれば、メリアの毒を癒すことができる。

「だが」

生息しない訳ではない。

だが、入手することは出来ないと、その表情で示す。

「森の最深部。」

そこは “森の主” の領域だ」

「森の主？」

メリアの側に近寄り、千里はその手を握る。

不自然なほどに熱い手は、幼い子供らしく、小さく儂い。

「毎年、最深部から出てきては、村から何人もの犠牲者を出す。

何度も倒そうと試みたが、その全てが“無駄”だった。

そうして、半年前に

「

イルルガがナーリヤを見る。

その視線につられて、千里もナーリヤを見上げた。

「僕のたった一人の家族、

セアック爺ちゃんが、殺された」

寿命や病気で死んだのではない。
森の主と呼ばれる魔物によって、“喰い殺された”のだ。

「弓の名手と呼ばれたセアックも、強靱な体毛は貫けなかった。
セアックもまた、全盛期ならまだしも、引退して長く身体も老いていた」

結果、弓の名手“セアック”は、森の主に挑んだきり帰ってこなかった。

おかげで、森の主は村に来ることなく、満足して帰っていたが…

「もうこの村には、
森の主を殺すどころか……
退ける能力を持つ者すら、いないのだよ」

もう、諦めるしかない。
ただここで最後の時を看取るしかないと、イルルガはそう言った。

「っ！」
「レネちゃん！」

その言葉に耐えきれなくなったのか、溢れる涙を拭いもせず
レネが飛び出した。

それを、少し迷ってから、千里が追いかけた。

「あの子は、メリアと仲が良かったから……」

「ミリネさん……」

寂しそうに、ミリネがそう零す。

諦められることではない。けれど、諦めるしかない。

その状況が、普段誰よりも気の強い彼女を、弱々しくしていた。

「村長、僕もちよつと見てきます」

「ああ……」

レネを、頼むぞ

「はい」

重い沈黙が続く中、帰りの遅い千里達を心配して、ナーリヤも外に出る。

後に残った大人達は、ナーリヤの背中を見送ってから、ゆっくりと崩れ落ちた。

「畜生……ッ」

大柄なアゲルの両目から、涙が落ちる。

憎くても、悔しくても、悲しくても。

人はどこまでも

“無力”なのだ。

レネの背中を追って部屋を飛び出した千里は、その姿を探して周囲を見回した。

そうしていると、アグルやミリネの前では出すことが出来なかった感情が、大きく膨れあがった。

「こんなのって、ないよ」

昨晚の宴と、今朝。

そのたった二回だけだけれど、言葉は交した女の子。常に年下の女の子に気を配る、苦勞性で優しい少女。

「こんな風に終わっちゃうなんて……私は嫌だっ！」

スカートを両手で握って、唇を噛む。

両目からこぼれ落ちる涙を、千里は頭を振って払った。

「探さなきゃ、レネちゃんだって、辛いんだ」

大切な友達。

利香や泉美が同じような状況になったら、きっと千里も正気では
いられない。

「あれ？ レネちゃん？」

ふと顔を上げた先。

暗くなりつつある森へ駆けてゆく、レネの姿。

水筒や籠、それにスコップのような物を手に持っている、その姿。

「スコップと、籠……つまさか！」

森の最深部。

森の主の領域で アルナの花の、生息地。

「っ……ダメだよ、待って！レネちゃん！」

声は届かない。

届かないほどに、遠い。

だから、千里は その背中に向かって、走り出した。

森が、啼く

十

悔しかった。

尊敬する祖父が、あっさりと諦めたことが。

悔しかった。

大好きな兄代わりが、ただ俯いていたことが。

悔しかった。

泣いて継ることしかできなかった、自分が
。

「はあっ、はあっ、はあっ」

タイムリミットは、翌日。

まだ半日以上、時間は残っている。

生まれ育った森なのだから、夜道くらいで迷ったりはしない。
最深部へはただ突き進めばいいし、帰り道はスコップで木につけた目印を辿ればいい。

「待ってて、メリア！」

大切な友達の名前を、口走る。
呼んでいないと、鬱蒼と茂る森が、レネの心を削るのだ。

足を取られることなく、森の奥へ辿り着く。
不自然なほど静かな森は、警戒していたアインウルフの一匹すら出ることはなかった。

「我らがエルリスとイルリスに、感謝を」

胸の前に握り拳を当てて祈ると、奥へと進んでいく。
ランプに火を点けて掲げるだけで、アグネークは近寄ってこない。
疲労から吹き出た脂汗が目に入り、痛みで涙を流す。
枝に引っかけたのか、服は所々破けて肌には血が滲んでいた。

「あ、れ？」

最深部　その、更に奥。
わき水を中心に広がる、白銀色の花。
対毒万能薬の材料として重宝される、貴重な植物。

「あった」

アルナの花が、そこに群生していた。

「っ！」

駆け寄って、スコップで掘る。

イルルガの孫として、薬師の知識を受け継いでいる彼女は、花の採り方なども知っていた。

「これだけ、あれば」

満面の笑みを浮かべて、アルナの花を収めた籠を抱き締める。

これで助かる……これでメリアは、死なずに済むのだ。

ガサッ

「え？」

背後から聞こえてきた、音。

その音の主を想定して、レネは絶望を顔に浮かべた。

振り向くのが嫌でも、確認せねばならない。

「どうか、

エルリスよ、イルリスよ、どうかっ」

震える足に力を入れて、振り向く。

だが……その視線の先には、誰もいなかった。

「あれ？」

えーと……うん？」

首をかしげて、周囲を見回す。

すると、足下に何かが落ちていることに気がついた。

「なんだろう?」

腰を屈めて、落ちているものを見る。
所々に赤い染みがついた、白いモノ。

「アインウルフの、牙?」

ドンッ!

もつとよく見よう。

そう更に体勢を低くした時、頭上を大きなモノが通り過ぎて、わき水の流れる岩にぶつかった。

「ひっ

な、なに?」

振り向くと、そこには 首のない、アインウルフの死体があった。

『グルルルル』

濃密な殺意とともに、レネの背後から響く呻り声。
その声を聞いて、レネは……咄嗟に、身を屈めた。

「っ!」

『ルグアッ!』

風を切る音と共に、漆黒の前足が通り過ぎる。

その恐怖に竦む足を、レネはメリアの事を考えて、動かした。
ここで死んだら……なにもかもが、無駄になる。

前のめりに、走る。

闇色の体毛と真紅の目。

左右で二つずつ、四つの赤が、闇夜に煌めく。

それは、黒色の巨大な“虎”だった。

「森の、主

……“黒帝”ッ！」

両手で籠を抱えて、ただ前へ走り抜ける。

すぐに捕まえられるはずなのにやってこないのは、獲物を黽つて“遊ぶ”ためだろう。

猫科の動物は、そうして獲物で遊ぶ習性がある。それは、異界の地であるここでも変わらなかった。

森の主　黒帝こくたいは、レネ“で”遊んでいるのだ。

「負ける、もんかつ」

遊ばれているということが解つていても、諦められない。

遊ばれているのなら、まだ生かされているのなら、そこに活路を見いだす必要がある。

そうしなければ……生きて帰ることなど、できないのだから。

『グルルル……』

だが、いずれ彼にも“飽き”が来る。

散々追いかけて回したことでレネの体力はすり減り、動きが鈍くなっていた。

小腹を空かせるだけの運動をしたのなら、後は……。

『ガアウツ！』

目の前の獲物を、狩るだけだ。

「やだっ！」

「危ない！」

そして飛びかかった黒帝の前から、“獲物”が消えた。
いや、消えたのではない。横合いから出てきた“何か”に、搔っ
攫われたのだ。

『グルルル』

だが、彼に怒りはなかった。

なにせ、“餌”が増えていたのだから。

「ちー姉ちゃん……」

「はあっ、はあっ、はあっ。」

……だ、大丈夫？レネちゃん」

肩で息をしながらも、千里は黒帝を睨み付けていた。

その足は、恐怖から震えていた。

「だ、ダメだよ！」

このままじゃ、ちー姉ちゃんまでっ」

「大丈夫だよ。」

諦めちゃダメ……一緒に、メリアちゃんを助けよう」

そう言つて、千里は力強く笑つた。

恐怖を押し殺し、ただ幼い少女を守るために、笑つて見せた。

小刻みに震えていてもなお……その笑顔は、力強い。

『ガアッ！』

「甘い！」

黒帝の突進を、千里はレネを抱えたまま避けた。

二十キログラムそこそこある少女を抱えて、三メートルも跳躍する。

その異常な身体能力に驚いていたのは、他ならぬ千里だった。

運動は好きだ。

だが、言うほど得意ではない。

得意ではない……はずなのに。

「ふっ！」

『グルアッ！』

振り降ろしの爪を、高速で黒帝の脇に回り込むことで避ける。

恐怖のせいで感覚が麻痺していなかったら、戸惑いで動けなかったことだろう。

『ルガアアアアアアアアッ！……！』

「つうっ！？」

咆吼と共に、衝撃波が放たれる。

いくら早く動けるといつても、全体を攻撃されたら避けることは出来ず、ただレネを庇うことしか叶わなかった。

「あうっ」

「ちー姉ちゃん！」

背中を木に強かに打ち付けて、千里は口から空気を零す。骨の軋む音を聞いて、千里は顔を歪めた。

「あ
」

そして、寝そべる千里に爪が迫る。

黒い爪の狭間から見える真紅。

その色に、千里は恐怖する暇もなく、ただ呆然と見ていた。

死の間際だからだろうか。

全てがスロー再生されて、まだ口を動かす余裕があった。

受け入れたくない、現実。

痛みを包んでくれた、優しい音色。

その音が二度と聞けないということが
無性に、苦しかった。

「なー……りゃ」

そして。

「千里とレネから離れるッ！」

閃光が、風を切った。

+

矢を番えて、弦を引く。

風を切って放たれた矢は、牙の齧やじりによって加速する。
アインウルフの牙を加工した、特殊な齧。

ガキンッ

「くっ！」

やっぱり、通らないかッ！」

だがそれも、鋼鉄よりも硬いといわれる黒帝には、通じない。
それでも……気を逸らすという役目は、果たせた。

「村のみんなを、森の入り口に集めてある。
だから二人は、早く逃げて！」

次々と矢を射ることにより、黒帝を牽制する。
文字どおり牽制にしなければならないが、無いよりはマシだった。

「で、でもッ！」

「メリアちゃんを、治すんだよね？なら、急いでッ！」

千里達に背を向けたまま、ナーリヤは動かない。
その姿に、千里は齒がみした。

「すぐに、戻ってくるから！」

「ナーリヤ兄ちゃん、ちー姉ちゃんっ？！」

千里はレネを抱きかかえると、そのまま走り出す。

戻ってこられたら、足止めしていた意味がない。
それなのに、ナーリヤはなぜだか、少し嬉しかった。

二人の気配が、背後から消える。
すると、獲物を逃がされた黒帝が、漸く“本気”になった。

『ガールルルルルル』

『グルオウオオオオオオオオオッ！……！』

空を震わせる咆吼。
それを一身に受けてなお、ナーリヤは怯まない。

それどころか　一步踏み出して笑って見せた。

「森の狩人　セアック＝ロウアンスが一人息子」

それは、名乗り。

宿命の敵とも言える存在への、宣誓。

「ナーリヤ＝ロウアンス。

爺ちゃんの仇は、ここで討たせて貰うッ！」

『オオオオオオオオオオオオッッッ！！！！』

矢を番えながら、前へ前転する。

すると、その上を跨ぐように、黒帝が飛びかかるところだった。

「先見一手！」

狩人としての経験が生んだ、セアック流の技能。

常に先を予測して、行動する技術。

それが

先見^{せんけん}である。

「シッ！」

『グウアッ！？』

足の先、爪の間を狙った矢。

高速展開する命のやりとりの中、ナーリヤもまた、動体視力を上昇させていた。

脳のリミッターが一時的に外れて、周囲の時間が遅くなる。

ここまで来てなお、ナーリヤは劣勢だった。

『ガアアアアアアツツツ！！！！』
「ああああああツツツ！！！！」

普段の穏やかな様子からは想像も出来ないほど、獰猛な叫び声。獲物を殺しきる、命の奪い合いにおける強い“覚悟”を秘めた双眸は、黒曜石よりもなお美しく、煌めいていた。

『グガアツ！！』
「ぐっ、うあっ！？」

読み切れないほどの速度。
爪の振り下ろしと同時に、黒帝は肩を使ったタックルを入れた。その衝撃に、ナーリヤは大きく弾かれる。

『ガアツ！！』

短い、啼き声。
それとともに飛びかかる黒帝の目は、闇の中で真紅に光っていた。

「赤い、光？」

赤い光。

四つの閃光が、ナーリヤの失った過去を刺激する。

「死ね、ない」

こんなところで、死ねない。

過去にもそう強く思ったことがあるのか、胸が激しく、動悸を打つ。

「爺ちゃん……僕、は」

無口で、無愛想で、優しい“親代わり”の老人。
尊敬して憧れた、心の底から慕っていた人。

誰よりも強かった。

そう誇れる“父親”は、本当に“この程度”の獣になにもできなかったのか。

セアックに貰った、多くのモノ。

過去を補填する新しい記憶、空虚を癒す優しい感情、空っぽの魂を埋める心。

そして。

「先見三手」

崩れた膝を立てる。

一度に三本の矢を持つ。

瞳の奥に火焰を灯し、魂に灼熱を込める。

経験と知識と技術から、三本の道筋を導き出す！

「三撃必殺」

一息の間に放たれた、三本の矢。

それらは全て、黒帝が避ける方向へ、動く方へ突き刺さる。
まるで誘導されたかのように降り立った黒帝。

その真紅の瞳を　　三本目の矢が、貫いた。

『ガアアアアツ?!』

痛みから蹲る、黒帝。

その瞳を、もう一度射る。

『グガウウツ!?!』

完全に左側の視界を潰されて、黒帝は混乱から大きく下がる。
そして、警戒しながら低く呻った。

『グウウウウウ』

手負いの獣となった黒帝は、危険だ。
だが、この傷が癒える前ならば、村人でもきつと勝てるだろう。

番えられる矢は、あと一本。
殺すには、足りない。

「それでも、

僕の　爺ちゃんの矢は届いたぞ、黒帝」

これで詰み。

もう後はなく、押すことも退くこともできない。

「ごめんね、千里。

……一緒に旅は、できない」

ただ一つの気がかりを、零す。

それを合図にして

黒帝が、吠えた。

十

レネを抱えていた千里は、周囲に獣がないことを“見て”確認すると、そつとレネを地面に降ろした。

「レネちゃんは……、

早くメリアちゃんに、お花を届けてあげて」

そう言って、千里はレネに背を向けた。

レネはその小さな背中に、手を伸ばす。

「ちーお姉ちゃんは？」

「私は　　ナーリヤを、助けてくるから。」

先ほどまで、レネと一緒にあって震えていた。

それなのに、千里は“助ける”と、胸張って言っただけを見た。

「ダメだよ！ちー姉ちゃん、死んじゃうよお」

涙を流すレネに、千里は振り向かない。

振り向いたら、震える唇と涙の溜まった目元に、気がつかれてしまっただけから。

「死なないよ」

「……ちーお姉ちゃん？」

「私は、死なない。」

絶対帰るよ。ナーリヤと、二人で」

もう、何を言っても止まらないだろう。

だからレネは、強く頷く。

何度も何度も……頷く。

「帰ってくる？」

お父さんとお母さんみたいに、居なくなったりしない？」

レネの両親。

イルルガの息子夫婦は、数年前に死んでいた。

それもやはり　　“森の主”の爪によって。

「帰ってくるよ。レネちゃんと私の、約束だよ」

「約束。……うん、私、待ってるから！」

返事はしない。

これ以上言葉を交したら、その場に足が縛り付けられてしまいそうだったから。

レネを突き放すように、ただ走る。

「私をここに呼んだ、誰か！」

喉の奥から、声を出す。

その度に肋骨がズキリと痛むが、無視する。

「私に何をさせたいのかわからないけれど」

何故呼んだのか？

何故招いたのか？

何故連れてきたのか？

そんなことは、解らないけれど。

「私にさせたいことがあるのなら！」

異常に良くなった、視力。

その先では、最後の一本を番えるの姿が、在った。

“友達ナリヤになりたい人”

「そのための力を、私に頂戴！」

……そのための力は、貴女の中にあります……ですか
ら……解き放つて。

頭の中で、幾重にも反響する声。
その声にしたがって、千里は右手を掲げる。
手のひらの中に光が集い、星の輝きを宿して煌めく。

それは 銀と黄金の、聖なる剣。

「イル＝リウラス― 光より顕れる者 ”」

光り輝き続ける剣を、まっすぐ向ける。

背中に羽が生えたかのように加速して、ナーリヤの隣に並び立つ。

「ッ 千里？」

ドスッ

そして 飛びかかってきた黒帝の額に、その刃を突き立てた。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツツ!??!?!!!』

断末魔の叫びと共に、漆黒の巨体が崩れ落ちる。

黒帝の身体が倒れると同時に、突き刺さった剣がずりりと抜ける。

その刃には、血の一滴も付着していなかった。

……まるで、聖なる光に“穢れ”が祓われたかのように。

黒帝を討った光の剣が、薄ぼんやりと発光する。

やがて淡い輝きと共に虚空へ消え、同時に千里に限界が来た。

「う、くっ」

体勢を崩して、倒れ込む。

肋骨の痛みが、今になって響いてきたのだ。

土に顔を埋めるのが嫌で、なんとか仰向けに倒れ込んだ。

だが、それで力尽き、起き上がれそうもない。

「ち、千里っ……あ、あれ？」

慌てて千里に手を貸そうとするが、極限だったのはナーリヤも同じだった。

膝から崩れ落ちて、そのまま千里の隣に倒れ込む。

やはり、千里同様仰向けだ。

「あーっ。私、立てないや」

「あはは、うん、僕もちよっと、立てそうにない」

完全に力が抜けて、もう起き上がれなかった。

光の剣のおかげか周囲には獣も蛇もいないため、そういった意味では安心だ。

二人の間に刹那の沈黙が流れる。

そして、示し合わせたかのように息を吸った。

「助けに来てくれて、ありがとう　千里」

「助けてくれて、ありがとう　ナーリヤ」

口を開いたのは、ほとんど同時。

同じタイミングで、互いに同じ言葉を言った。

お互いそのことに、一瞬反応が遅れて目を丸くした。

「ふっ、ははははっ」

「ふふ、あはははっ」

そして同時に、笑い出す。

笑う度に肋骨が痛み、涙目になる。

それでも、止めることは出来そうになかった。

「私、さ」

「うん？」

一通り笑い終わると、千里は首を曲げて、隣に寝そべるナーリヤを見た。

ナーリヤはそんな千里に、同じように視線を向けた。

「ナーリヤと、友達になりたい。

その……ダメ、かな？」

上目遣いに、ナーリヤを見る。

ナーリヤはその視線を受けて目を丸くし、すぐに柔らかく微笑んだ。

「僕で良ければ、

その……喜んで」

一緒に過ごした時間は短いけれど、交した心は確かなモノで……。一緒に“在りたい”と、互いに思えた。

「えーと、

これから、よろしくね ナーリヤ」

「うん、

これからも、よろしく 千里」

ナーリヤの伸ばした左手が、千里の伸ばした右手の上に置かれる。その暖かさと冷たさから“生き残った”実感を得て、大きく息を吐く。

そして、互いに顔を見合わせて……小さく、笑い合った。

「おーいっ！

みんな、あっちだ！」

遠くで響く、アグルの声。

ぼんやりと光る松明を見ると、とたんに瞼が下がりだした。

大きな谷を、乗り越えた。

だから、今は 。

「おい、大丈夫かつ？！

……って、寝てんのか？」

この瞬間に感謝を捧げて、眠りにつこう。

一章 第三話 森の主（後書き）

今回が、一番最初の大きな山でした。

今回は、二章への繋ぎのお話となります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございますございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

2011/04/07

誤字修正と一部加筆修正。

一章 第四話 旅立ち

朝の森を高速で滑空する、二羽の鳥。

森に溶け込み風に乗る　マクバードウ。

その姿を、木々の間に立つナーリヤの黒い瞳が、捉えていた。

矢を番えて、引き絞る。

森の主と戦ってから、しばらくは痛んでいた肩も、もうすっかり回復していた。

「先見二手、二射必中」

マクバードウに吸い込まれるように、矢が的中する。

そして、空中で体勢を崩し、極々自然な軌道でナーリヤの足下に落ちた。

「ふう、

……使いこなすには、まだ遠いかな」

森の主　黒帝を討った時のように、三手先までは読めないし、

一息に三矢も無理だ。

だが、二手先を読み、一息に二矢番えることは、出来るようになっていた。

「まあ、いいか。

今日で最後なんだ　もう少し、獲っておこう」

ナーリヤはそう呟くと、森の深くに足を踏み込む。

森を支配していた黒帝が居ない今、他の村人ならまだしも、ナーリヤに勝てる獣は居なかった。

「でも、アインウルフの群れだけは気をつけないと」

流石に、群れで来られたらひとたまりもない。

だが、その心配は要らないだろう。

群れの位置を把握して、常に気配を読むようにしているのだ。遭遇してしまうようなミスは、しない。

「見つけた」

そうしてナーリヤは、青空に向かって再び矢を番えた。

宿屋の食堂で、食卓を千里とナーリヤと、レネとメリアで囲む。並べられた料理を前に、四人は握り拳を胸に当てて、目を瞑る。

『エルリスの恵みと、イルリスの導きに感謝を』

「いただきます」

「いただきます」

合わさった声と、その後に小さく呟かれた声。

千里とナーリヤの最後の一言が、静かに重なった。

「マクバードウのスープも、

しばらく食べられないのかー」

「しょうがないよ。」

ナーリヤお兄さん以外に、捕れる人がいないんだもの」

鶏肉を囓りながら、レネが残念そうに呟く。

それを、メリアが優しく窘める。

アルナの花が間に合ったおかげで、メリアはすっかり元気になっていた。

「今日で、ナーリヤ兄ちゃんとちー姉ちゃんともお別れかあ。

……一度は、帰ってきてよね」

「はは、

うん」

スープを飲み干しながら、レネはふてくされた顔でナーリヤを見た。

その視線にナーリヤは、苦笑しながらもしっかりと頷く。

「お姉さんも、帰ってきてくださいいね？」

「うん、欲しい物が手に入っても、

一度はここに、ちゃんと“戻って”くるよ。メリアちゃん」

約束は、破らない。

それが解っているから 証明されているから、レネとメリアは嬉しそうに、笑った。

「さて、食べ終わったら片付けよう！」

「うん、ナーリヤ兄ちゃん！」

最後にもう一度手を合わせると、食器を持って立ち上がる。

それに、レネとメリア、それから千里も続いていった。

和やかな、村の一日。

旅路につく前の、最後の一時であった。

村の広場で、千里は黒い馬に跨っていた。

長い旅路を徒歩で移動するのは無謀だ。

だから、移動手段は馬になるのだが、千里は乗馬の経験など無かった。

ちなみに、黒帝との戦いで制服はぼろぼろになってしまったので、今は紺色の上着に若草色のロングスカートという格好だ。

「よ、つと、と?」

「うん、上出来だよ」

隣で同じように黒い馬に跨るナーリヤが、千里を指導する。

森の主との戦闘から数日、千里はずっとこうして、乗馬の練習をしていた。

「よし、どつどつ」

漸く乗れるようになった馬を、撫でつけながら操る。
落馬してばかりだった頃に比べれば、馬に愛着も持ち始めてきた。

「うん……」

それじゃあ、そろそろ村長のところへ行こうか」

「あ、うん、」

ありがとね！ブラックタイガー！」

ブラックタイガーではエビなのだが……。

エビでなくとも、黒帝の方が似合う名前だった。

これは、彼女のセンスに関わるところなのだろうが、異界のこの
地でツッコミを入れられる者は居なかった。

馬から下りた千里をつれて、イルルガの家に向かう。

黒帝と戦う前に話したことの復習も絡めつつ、今後の方針を決め
るためだ。

その道中で、千里はナーリヤに声をかけた。

「あの“先見三手”って、どう？」

「うーん……」

あれから、一度も“見えない”んだ。

千里の、あの剣は？」

「たぶん、出せる」

確証はない。

だが、漠然とだが、思うのだ。

喚び出せば、手の中に光の剣を出現させられる、と。

「なんだか、運動も出来るようになってるし、体力も上がって力も強くなって、それから目や耳も良くなってる」

自分の身体が、自分の知らないものになっていくような感覚。まるで、なにか底知れないモノに蝕まれているような、不快感。千里はその感覚に身震いし、立ち止まって自分の肩を抱いた。

「大丈夫だから。」

きつと、大丈夫だから。

その、曖昧で確証はないけど……」

ナーリヤはそんな千里の頭に、優しく手を乗せる。

栗色の髪は柔らかく、弓を引いて硬くなったナーリヤの手に、滑らかに絡む。

その感触がどこか恥ずかしくて、ナーリヤは気まづげに目を逸らした。

「ナーリヤ、

へへ……うん、ありがとう」

頭に乗せられた手を、千里が柔らかく包んだ。

小さな手は暖かく、冷え切ったナーリヤの手を温める。

「さ、行くう？」

「あ　　う、うん」

立ち直った千里は、ナーリヤを追い抜かして走る。

空元気な様子ではない……そのことに、ナーリヤは小さく安堵の息を吐いた。

風を一身に浴びながら、駆け抜ける小柄な少女。
その輝きが翳らないことを、ナーリヤは小さく祈った。

「エルリスとイルリスの、加護を」

眩きは風に流れ、空に溶けて無くなった。

+

イルルガの家の、机の上。
そこに広げられている地図は、ウィズ大陸の物だった。

千里とナーリヤは、揃ってその地図を覗き込む。

「ミドイルの村から出て向かうのは、ここが良いだろう」

ミドイルの村の北。

そこには、大きな街が載っていた。

「海を渡ってきた多くの旅人達が、その羽を休ませる地。腕利きの情報屋達が集い、大規模なギルドもある場所。それがここ　宿場街“アロイア”だ」

アロイアの街。

ここで情報を集めるのが最善だろう。

そう真剣な目で語るイルルガに、千里とナーリヤは顔を見合わせながら、頷いた。

「うむ。」

アロイアに行くためには、まずはノルウェルの方角に……」
「ノルウェル？」

聞いたことのない単語。

それに、千里は首をかしげた。

これから旅をするというのに、解らないままなのはまずい。

「えーと、地図で見て……」

右が“アルトリ”左が“ウェルトリ”で、

下が“スルトリ”上が“ノルトリ”だよ」

「東西南北？」

なるほど、それならノルウェルは、北西かな？」

口の中で呟いて、確認する。
その様子を見て、イルルガは説明を続けた。

「それで、まずは北西の街道を通り……」

説明を再開したイルルガ。

千里はその説明を聞いて、目を丸くした。

その意味を理解したとたん、単語が方角に“変換されて”聞こえたのだ。

「なんでなんだろう、これ？」

「千里？」

「え、あ……」

な、なんでもないよっ！続けて！」

首をかしげて自分を覗き込むナーリヤに、千里は慌てて首を振った。

謎は増える一方だが、反面“便利な”謎だった。

特別な言葉で方角を話されても、理解するには時間がかかる。

「ってことは、今までにも結構あったのかも」

視覚で捉えて名称を告げられた物は、自動変換されていた可能性がある。

弓矢や森、花なども、その一例という可能性があった。

「……そして、」

テレイの村を中継して、後はまっすぐ北ノルトへ向かえばいい」

北西の街道を通り、途中の村で休憩と食料などの補充をする。そして、北へまっすぐ進みアロイアへ行く。それが、予定している旅路だった。

「何か、質問はあるか？」

「いえ……特に」

「あ、はいっ、大丈夫です！」

冷静に頷くナーリヤと、慌てて首を縦に振る千里。

違う反応が返ってくるということは、すなわち違う考えが出来るということ。

早くも“相性の良さ”を見せる二人に、イルルガは小さく笑った。

「さて、と。」

二人とも、ついてこい。

……渡す物がある」

そう言って背を向ける、イルルガ。

その言葉に不思議に思いながらも、千里とナーリヤはその背中を追いかける。

「村長？」

「ほれ、黙ってついて来んか」

家を出て向かったのは、村で唯一の鍛冶屋だった。

たまにやってくる商人から買った、貴重な鉄が置いてある場所だ。

「おい、爺さん！」

「誰が爺さんじゃったかのう？」

「あんただ、あんた」

「おお、そうじゃったそうじゃった」

イルルガが呼んだのは、禿頭の老人だった。皺だらけの顔は穏やかで、背は低く腰は曲がっている。どうやら、少しだけボケが始まっているようだ。

「千里、彼がこの村の鍛冶氏。

ラング爺さんだよ」

「ふおっふおっふおっ」

千里は、ナーリヤに紹介されてラングを見た。鍛冶氏というには、頼りないように見える。だが、こう見えても腕は確かなのだ。

「さて、こつちだ」

「そ、村長！」

イルルガはまだ、何も告げない。追いかけるナーリヤと千里の声を無視して、工房の奥へ入っていた。

そして、暗い工房にランプをつける。

「え これ、は」

「うわぁ……」

工房の台の上に並べられた、鎧と武器。

漆黒で彩られたその装備は “黒帝” から造り出された物だった。

「ふおつふおつふおつ。」

久方ぶりに腕が鳴ったわい！」

「さて、まずはナーリヤだ。」

「こっちに來なさい」

イルルガに手招きされて、並べられた鎧の前に立つ。

それを、促されるままに着ていく。

旅路に着ていくために穿いていた灰色のズボンはそのままに、茶の上着を脱ぎ捨てて黒い上着を着る。

「あわわっ」

その横で、千里は短い時間だが頭わになったナーリヤの肌を視界に納め、慌てて目を逸らした。

上着の上から、胸と肩を覆う黒い皮鎧を着る。

弓を扱うことを意識しているため、右手の装甲は薄く、左手の装甲は厚い。

足にも同様に鎧を嵌め込み、黒いブーツを履く。

そして最後に、フード付きの黒い外套を羽織った。

「そして、これが新しい弓。」

夜影弓やえいきゆう “ウルドⅡガルⅡバリスタⅠ 闇を穿つ大弩”

夜色の大きな弓で、ナーリヤの上半身を越えるサイズを持つ。

留め具を外すことで折りたたまれ、また勢いをつけて展開することで力は必要だが高速で構えることが出来る。

黒帝のような、対大型魔獣を想定して作られた、弓だった。

「村長……ラング爺さん……」

「ええい、涙ぐむのは早いわ！」

ほれ、次はお嬢ちゃんだ。こつちへ」

「は、はいっ！」

目元に手を当てるナーリヤの肩を、イルルガは杖で小突いた。泣くのはまだ早いし、何より、旅路は笑顔で飾る物だ。

「お嬢ちゃんの装備は、

お嬢ちゃんの持っていた“制服”をベースに作ったんだよ」

「ほ、ほんとうですか!？」

わあ……ありがとうございます！」

イルルガが渡すと、ラングが着方の説明をする。

そして、千里が了承したのを確認してから、一度退出した。

「えーと」

形をブレザー型の制服のままに、黒帝の素材である“黒”をベースにして作られた鎧。

腰には白いベルトが幾重にも巻かれていて、首には無事だった白いネクタイを巻いていた。白いラインのモノクロカラーな、仕上がりがいい。

肘下と膝下は、大きめな重鎧になっていた。

身体能力の上昇した千里を以てして、“丁度良い”と感じさせる重さだ。

下は黒のズボンの上から、足首までを隠す黒のロングスカートで、靴はナーリヤとお揃いのブーツ。全体的に、鎧が嵌められていて、

丈夫だが重めに作られていた。

「き、着ましたよー」

「うむ、そうかそうか」

「ふおっふおっふおっ」

頷きながら、イルルガとラングが部屋に戻り、その後ろから続くようにナーリヤも入室してきた。

ナーリヤは千里の姿を視界に納めると、笑ってみせる。

「すごい、

よく似合っていて綺麗だよ、千里」

「へ？」

あ、ありがとう」

綺麗だ、なんて褒められるとは思っていなかったのか、千里は頬を朱色に染めて目を逸らした。その“若者”たちのやりとりを、にやにやしながら見ている老人二人には、気がつかずに。

「お嬢ちゃんには、これもだ」

「これって、剣、ですか？」

「うむ、黒帝より造り出した剣。

その銘も 帝剣“アギト”」

黒帝の骨と鉄から造り出した、白い大剣。

“ツヴァイハンダー”と呼ばれる、両手持ちの剣だ。

「あの“光の剣”は、強力だ。

だがそれ故に、招かざるモノを呼び寄せる可能性がある。

あれは、あまり多用せん方がいだろうと、思ってたな」

そう言うと、イルルガはキセルから吸い込んだ紫煙を、工房の天井に吐き出した。

強い力を持つ者は、強い危険を呼び寄せて、大きな危機と隣り合わせに生きることになる。

そんな剣を喚び出してしまう者にとっては、拙い延命処置以上の効果は持たないだろう。

それでも、千里の願いのためにも、余分なモノはなるべく削ってやりたかった。

「お嬢ちゃん、ナーリヤ。

二人は、ワシの孫娘とその親友、

そして、村の全ての人間にとって“恩人”だ。

だから　　ありがとう」

イルルガは、村を代表して頭を下げる。

年若い少年少女が相手だろうと、関係ない。

彼らは、村にとっての最大の危険であり、壁であり、仇でもあった存在を、討ち斃してくれたのだから。

「頭を上げてください、村長」

「私も、イルルガさんには沢山お世話になりました」

だから　　そう「だから」と声を重ねて直立する。

そして、勢いよく頭を下げた。

『ありがとうございました！』

それは、感謝の言葉だ。

ナーリヤにとつても、千里にとつても。

この村が、こんなにも“暖かい”から、救われたのだ。

「二人とも……そうだな、ああ、そうだな、セアツク」

イルルガの言葉は、その皺だらけの頬を伝った涙は……誰に、向けられたものか。

ただそこには、鍛治氏の優しい笑い声に包まれた、三人の涙があった。

十

時刻は、まだ昼前。

千里の感覚で言うのなら、午前九時頃だろう。

散々泣いた後、二人は村の入り口で馬に跨った。

二頭の馬の両脇には、大小様々な荷物が括り付けられている。大剣であるアギトも、そうして馬の横に括り付けられていた。

「じゃあ、もう行くね」

「うん、ナーリヤ兄ちゃん」

見送りに来た村人。

その中で、レネが一步前に出ていた。

「ちー姉ちゃん、これっ！」

「え？……おつと！」

レネが投げた小瓶を、千里は慌てて受け取る。

そして、太陽に透かすようにして中を見ると、透明の液体が満たされていた。

「アルナの花の、

“万能解毒薬”だよ！」

「え？

そんな、いいの？」

「うんっ」

黒帝は、森の最深部を領域としていた。

時折、その場所に住む“アグネーク”といった湿地固有の生物を追い出すほどに暴れていた黒帝がいなくなったことで、村人はアル

ナの花を採りに行けるようになったのだ。

「私が、始めて調薬に成功したお薬なんだっ」

「そうなんだ……。」

「ありがとね、レネちゃん」

師匠であり祖父である、イルルガ公認の調薬。

その一品のみ見れば、イルルガに迫る腕前だった。

……その他の薬は、まだ生き物に試すことも出来ない品ばかりだが。

千里とナーリヤは、互いに顔を見合わせてから、頷き合う。そして、後ろを振り向いて、手を挙げた。

「ありがとうっ！」

「行ってきますす！」

爛々と輝く太陽の下。

二人の姿が、麓から伸びる草原を駆け抜けていった。

。

一章 第四話 旅立ち（後書き）

これにて第一章は終了です。

次回から第二章に入りたいと思います。

これからの更新速度の上昇に繋がりますので、ご意見ご感想のほど、どうぞよろしく願います。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。次話も、よろしく願います。

二章 第一話 牙の団

風が吹く度に、草原が波打つ。

人や馬、馬車の轍によって踏みならされた街道は、土色の肌をむき出しにしていた。

「先、見えないね」

「あはは、まだ見えないよ」

村を出立してから、二時間ほど経つ。

そんな短い旅ではないと頭では解っていたはずなのに、実際に体験するときにつかつた。

長い時間馬に乗っていると、痛むのだ。

主に、尾てい骨の辺りが。

「はは、

それじゃあ……あの大きな木のところで、ちょっと休憩しようか」
「うう、

なんか、ごめんね。ナーリヤ」

肩を落として頂垂れる千里に、ナーリヤはおかしそうに笑った。

まだまだ道は長いのだ、ある程度は、肩の力を抜いていた方が良いだろう。

「あとちょっとだから、頑張ろう?」

「はあ……うんっ」

少しだけため息をつく、痛みを押しして背筋を伸ばす。
なんとも前途多難な旅の、始まりだった。

E
x
I

木陰に座り込み、水筒のお茶を飲む。

温度を保てる訳ではないので生ぬるいが、ミドイル村特製のお茶はそんなことが気にならない程度には、美味しかった。味は、ハーブティに近いモノがある。

「っん

……はあっ、生き返る〜」

大げさに息を吐いてみせる千里に、ナーリヤは苦笑する。

千里はそんなナーリヤの顔に首をかしげつつ、馬の横につけた革のバッグから、袋を取り出した。

時刻は丁度お昼時。

昼食タイムである。

「はいつ、ナーリヤの分」

「うん、ありがとう」

茶色の革袋。

その中には、森で捕れた兎の干し肉と、パンが入っていた。

「えーと、まだ北西へ進み続ける

……だよな？」

「うん、

そうなるね」

干し肉を噛みちぎるのに苦戦しながら、千里が問いかけた。

ナーリヤは慣れているのか、普通に食べながら質問に答える。

既に確認済みのことだから意味のある会話でないが、やはりなにか話をしていた方が、リラックスも出来るのだろう。

「アロイアって、ナーリヤは行ったことあるの？」

「うん、一度だけ。」

爺ちゃんに連れて行って貰ったことがあるんだ。

高台から見ると、遠くに青い海が見えるんだよ」

「へえー」

……海、かあ」

千里は、あまり綺麗な海を見たことがなかった。

写真で見たことはあるが、自分の目で“エメラルドのような海”

なんか、見たことはない。この海がそうとは限らないが、千里は
楽しみだった。

「魚だけならまだしも、

魔獣なんかがいると泳ぐのは危ないけどね」

「魔獣って……」

黒帝、みたいなの？」

そういえば、魔獣という単語もしっかり聞いていなかったことに
気がついた。

黒帝は、ナーリヤやイルガから“魔物”と呼ばれていたが、千
里の世界でも特別大きかったり凶暴だったりする動物を“魔物”と
呼ぶことはあったため、あまり気にしていなかったのだ。

「そうだね。」

獣のなかでも飛び抜けた能力を持つ存在。

それを、“魔獣”とか“魔物”って呼ぶんだ。

森に溶け込むマクバードウなんかも、場所によっては“魔物”扱
いだよ」

「そうなんだあ、

確かに、黒帝は抜き出たもんね」

明らかに人では叶わない、抜きん出た存在。

“暗き森の狩人”と呼ばれるアインウルフの群れすら、容易に蹴散らす“魔物”だった。

「この辺りで魔物と呼ばれているのは……」

ほら、丁度あそこで走っている獣とか、そうだね」

「どれどれ？」

ナーリヤが周囲を見回して、指で示す。

その方向を、千里は目で追いかけた。

普通の人間なら裸眼で見える距離ではないが、強化されている千里の視力と、狩人として鍛え上げられたナーリヤの目なら、その姿を捉えることが出来た。

「イノシシ？」

「“トライフ”っていう魔物だよ」

それは、千里の世界の“猪”によく似た獣だった。

焦げ茶色の毛皮と大きな豚鼻、それから白い牙。

猪と違うのは、逆三角形の配置に二本生えた、大きな角だろう。

「赤とか紫とか、

そういった派手な色を見つけると、ひたすら突進してくるんだ」

「うわぁ、

ますますイノシシだ」

明るい色、派手な色を見ると、見境無く襲ってくる。

毎年それで被害が出ているため、彼らは“魔物”なのだ。

「一匹突出してきただけみたいだね。

ほら、後から群れがついてくる」

「すっごい数だね。」

あんなのに追いかけられたら、かなり怖いかも」

草を蹴散らし、土煙を上げるトライフの群れ。

ざっと見て、三十はくだらないだろう。

その姿に、千里は身体を竦ませて身体を退いた。

「それにしても、なんか興奮してるみたいだね、ナーリヤ。

……赤いモノでも見つけたのかな？」

「うーん……うん？」

千里の言葉に、ナーリヤは首をかしげる。

そして、ゆつくりとトライフが追いかける方向に目をやると、赤いモノが動いていた。

「あれ、馬車？」

「へ？どこ？」

トライフばかりに注視していたため気がつかなかった、トライフの進行の先。

そこでは、馬車が走っていた。

「あの馬車、あの天井のつて」

「人、に見えるなあ、僕」

馬車の上に仁王立ちする、赤マントの巨体。

そんな目立つところにいたら、狙ってくれと言っようなモノだ。

「何やってるんだらう？」

「ナーリヤ、解る？」

「うーん、たぶん“冒険者”だから、
依頼を受けてトライフの誘導をやってるんじゃないかな？」

貴族や服飾の商人は、派手な色の積み荷を持つことが多い。
そういつた時にトライフに狙われると一網打尽にされかねない。
だからこうして、派手な格好で誘導することが、よくあるのだ。

「ふーん、

……ねえ、ナーリヤ。

なんか、こっちに来てない？」

「馬車の誘導が、こっちに？」

「千里ッ！」

ナーリヤは、飛び起きるように立ち上がると、千里の手を引いて
馬に跨る。

千里もすぐに気がついて、ナーリヤが馬に跨るのと同時に、手を
離して馬に跨った。

「行くよ！」

「ブラックタイガー！」

腹を強く蹴って、走り出す。

ナーリヤと並んで速度が出始めた頃には、馬車はすぐ側まで迫っ
ていた。

御者をしている薄茶の髪の少年が、目を見開いて驚いていた。

「フハハハハッ！」

「すまん、少ウ年少ウ女よ！」

「フアング！」

あんたが引つ込むタイミング失敗するから、こつなるんだ！」

「そう怒るな、クリフ。」

怒りすぎると身体に悪いぞ？

フハハハハハハツ！」

「俺が身体を壊したら、

アンタのせいだ！」

赤茶色のごつごつした髪と、赤茶色の髭。

体格は熊のように巨大で、その身には鉄の鎧を纏っていた。

少年に“フアング”と呼ばれたその男性は、豪放磊落な態度で笑っていた。

一方、フアングに“クリフ”と呼ばれた少年は、苛立ちを隠しもせずフアングを怒鳴る。

薄茶の短い髪と薄茶色の目が特徴的な少年だ。

見るからに、苦勞性である。

「ね、ねえ、なんか喧嘩してるよ？」

「そうだね。」

あの余裕……もしかしたら、何か切り札があるのかも」

「あ、なるほど」

直ぐ後ろで喧嘩をするその声に、何か作戦があるのだろうと判断する。

そうでなければ、今にもこちらを角で貫こうとしているトライフの群れの前で、余裕そうに笑っていられるはずがないからだ。

「すみません！」

僕はナーリヤ！旅の者です！

何か、手伝いましょうか?!」

走りながらも声が届くように、なるべく声を張り上げる。
ナーリヤは自分の獲物を示すために、外套をめぐって折りたたまれた弓を見せた。

「フハハハッ!

そんなモノはない!」

「ええっ?!」

やはり自信满满、余裕綽々にファングが胸を張って言った。

この答えにナーリヤは口を開けて固まり、千里はあからさまに驚いている。

「い、いやいやいや!

ちゃんとあるから!退かないで!」

ちよつと軌道を修正して、ファング達を囷にして逃げようかと考え始めたナーリヤたちを、クリフが必死な顔で引き止めた。

「少し先にある崖下に突き落とす!

高さはそんなに無いからトライフを倒せる訳じゃないけど、急な斜面になってるから、街道まで戻って来られなくなるんだ!」

クリフの答えに、ファングは目を見開いて驚いた。

「何?!」

そんな作戦があつたのか!」

「昨日言っただじゃねえか!

ちゃんと聞いておけよ、団長だろうが!?!」

「フハハハッ！
……すまん」

少し悪いと思っているのだろう。
ファングは、大きく笑った後、目を逸らして頬を搔いた。

「なんだか、疲れてきたよ」

「ナーリヤ……」

そんな二人のやりとりに、ナーリヤは肩を落とす。
千里はその様子を見て、顔を引きつらせた。明らかに巻き込まれている最中だというのに、クリフとファングは千里達を忘れて口喧嘩をしていたのだ。

「もうっ、」

それで、私たちは何をすれば良いんですかーっ？」

頂垂れているナーリヤの代わりに、千里が声を張り上げた。
大声は出し慣れていないため、少しだけ喉が痛む。

「あっ、そうだった。

予想以上に集まって困ってたんだ！

誘導する進路からトライフが漏れないように、左右から追いついてくれ！」

「わかりました！」

それじゃあ、私は左へ行くね、ナーリヤ」

「え、あ……」。

うん、「ごめん、ありがとうッ！」

手綱を掴んで、勢いよく左右に割れる。

モノクロカラーの二人は、トライフの対象になる見た目ではない。千里は群れの左側に回ると、馬の横に括ってあった大剣を、片手で構えた。

「帝剣“アギト”

せえいつ!!」

右手一本で持たれたアギトが、勢いよく振られる。

その迫力に押し負けたトライフは、徐々に群れの内側へ潜っていった。

当然そうになると、右側から抜けようというトライフが出てくる。

しかし、そちら側には大きな弓を構えて馬に跨る、ナーリヤの姿があった。

「夜影弓やえいきゆうの力、試させて貰うよ」

鎧越し、服越しではわかりにくい引き締まった右腕が、強く張られた弦を引く。

弓が弦の力で軋むが、その強い反発力の中にあっても、番えられた矢が震えることはない。

「シッ！」

高く風を切る音が、鋭利に響く。

ナーリヤの耳にその音が届くころには、矢は大きく土を削ってトライフを追い詰めていた。大地を削り風を起こすほどの威力。それが、対大型魔獣の弓の、真髄だ。

「よし！」

二人とも、崖が見えたから離れて！」

「はい！」

「わかりました！」

クリフの言葉で、ナリーヤと千里は左右に分かれた。もうすぐ崖の言葉のとおり、視線の先には崖がある。

「逃げない、のかな？」

囿になっているファング達の馬車は、進行方向を変えることなく突き進んでいた。

このままでは、トライフと共に崖の下だ。

「だめだ、

あの速度と距離じゃ、もう避けられない」

群れを挟んだ反対側で、千里も心配そうにしている。

そんな二人を余所に、ファング達は 馬車で崖から飛び出した。

「フハハハ！」

「出番だぞ！アレナ！」

「解ってるわよ！もう！」

空を飛ぶ馬車の中から、水色のショートカットの女性が顔を出した。

女性 アレナは中で準備をしていたのだろう、どこか疲れが見える。

「操作、増幅完了。」

【水よ、我が声に応えて道となれ！】

アレナがそう唱えて手を振ると、虚空から大量の水が出現する。その水が集まると、馬車を乗せる道となった。

「長くは持たないよ！クリフ！」

「解ってるよ！」

「ハイヤッ！」

手綱で馬を操作して、ナーリヤ達の方へ軌道を変える。

そして丁度その時、地を鳴らすほどの震動と共に、トライフの群れが落下した。

「ね、ねえねえナーリヤ！」

「今のって、なに？」

「今の……？」

「ああ、うーんと“魔法”だと思っただけ……僕も、実際に見たのは初めてだ」

淡い水のベールでできた道。

その道を馬車が行き、そしてゆっくりと降り立った。

すると、中から人が出てきた。

水色のショットカットに水色の目の、ボーイッシュな女性
ア
レナともう一人。

緑色の髪を左目が隠れる程度に伸ばした、仏頂面の男性だ。

「大変だったな、クリフ」

「そう思っただったら手伝えよ、アストル！」

アストルと呼ばれた緑髪の男性は、クリフの言葉に首をかしげる。天然ではない。すこし、茶目っ気があるだけなのだ。

「よう！坊主に嬢ちゃん！

助かったぞ！フハハハッ！」

一々声を張り上げなければ気が済まないのか、ファングは大きな声で笑う。

その声が空気を震わせて、ナーリヤと千里は思わず耳を押さえた。そんな二人の様子を気にも留めず、ファングはナーリヤの側に行つて背中を叩く。

行動が一々豪快で、ナーリヤは困惑から苦笑いを浮かべていた。

「あーもうっ！

止めなさいよ、団長」

背中を叩き続けるファングを止めたのは、アレナだった。

アレナは両手を使って押しのけるようにファングを退かすと、ナーリヤ達に向き直る。

「助けて貰ったのに、なんかゴメンね。

私はアレナ、冒険者よ。よろしく」

アレナはそう、笑顔で名乗る。

少年のような雰囲気醸し出しながらも、どこか艶やかな笑みだった。

「ごほっ、ごほっ！

ふう……旅の狩人で、ナーリヤです」

「ナリーヤと一緒に旅をしている、千里〓高峯です！」

ナリーヤは咳き込みながら、千里は元気よく挨拶をする。挨拶は第一印象に繋がる重要なポイントだ。ハキハキと元気よく、である。

「ナリーヤにチサトか。」

俺はクリフ、冒険者“牙の団”のメンバーだ。

えーと……あっちの髭達磨が団長のファングで、

あそこの“エセ”クールが、副団長のアストルだ」

クリフが、自分の仲間を見回しながら紹介した。

メンバーは全部で四人の、小規模な冒険者団だった。

「これも何かの縁だ！」

そうだな……次の村、トレイで飯を奢ろう！」

「無理には言わないけど、方向が同じなら、どうかな？」

豪快に宣言するファングと、申し訳なさそうに言うアレナ。

ファングの様子に頭を抑えて呻るクリフと、薄く笑うアストル。

でこぼこながらもどこか暖かい、良いチームだった。

そんな四人を前に、千里は小声でナリーヤを呼んだ。

「ねえ、どうする？」

「うーん。」

……悪い人じゃないみたいだけど」

急な展開についていけずに、戸惑う。

のんびり旅を始めて、休憩してからまだあまり時間は経っていない

い。
それなのにこつも早く状況が展開してしまうと、どうしたらいいか解らなくなっていた。

「坊主！」

「は、はいっ」

「そうか!“はい”か！」

よし、決まりだな！行くぞ！」

「えっ、へ？」

展開が読めていたのだろう、クリフはさっさと動いてナーリヤ達の馬を馬車に繋いでいた。馬車を引かせるのではなく、並走させるのだ。

アレナもそれに付き合いながら、苦笑いをしている。

「あはは、

うん、私は良いと思うよ？ナーリヤ」

「う、ううん。

……なんか、ごめん」

旅の始まりで千里が言ったことと、同じようなことを口走る。ぐいぐいと引っ張るタイプには慣れていないのだろう。

千里は、故郷の友人である利香が、ぐいぐいと人を引っ張るタイプだった。

そのこともあって、ナーリヤよりは“耐性”があったのだ。

揺れる馬車に乗せられながらため息をつくナーリヤと、懐かしさから楽しそうに笑う千里。

二人の旅は、出だしから奇妙な絆を結んでいた。

「はあ、

これからどうなるんだろう?」

「うわあ、

馬車ってけっこう速いんだねーっ」

どこまでも対照的に、二人と四人を乗せた馬車が走る。

全員それぞれに微妙にテンションの違う馬車の中は、どうにも奇妙な空気が醸し出されていた。

目指すはトレイの村

街道の、仲介地点である。

二章 第一話 牙の団（後書き）

二章の第一話ということ、短めです。

冒険者や別の村など、これからどんどん“外”に触れていきたいと思えます。

ご意見ご感想のほど、どうぞよろしく願います。

それから、目次ページの下に拍手を設けましたので、お気軽にご意見など書き込んでいただけたら、幸いです。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございますとございました。次話もどうぞ、よろしく願います。

二章 第二話 テレイの村

まだ太陽が沈む前の、夕時。

黒い影が、木々の間から村を見る。

街道の仲介地点にあるため、そこそこの財を持つ中規模の村だ。

「ちっ、

タイミングの悪い……」

黒い影が、悔しげに呟いた。

この村は、彼らの“獲物”だったのだ。

「どうする？」

手土産なしで帰るか？」

小馬鹿にしたような声が、別の影からかかる。

その声を、村を見る影は鼻で笑った。

「ハッ、冗談言うな。

どうせあつちは少人数……余裕だろう」

「そうだな。

たかだか六人。

それも、ほとんどガキと女だ」

聞く者が聞けば嫌悪感を催すような、淀んだ声だった。

まだ足りない人と人を骨まで貪る、餓鬼の声だ。

「予定どおり、今夜決行だ」

「了解した」

影が、散り散りに飛んでいく。
その姿を見ながら、村を見ていた黒い影は、唇を舐めて厭らしく
笑った。

E
×
I

日も暮れ始めると、昼間よりも寒くなる。

辿り着いた村で厚い鎧を外すと、背筋に走る寒気に千里は身震いさせた。

「到着だ！」

「見れば解るよ、ファング」

大きく手を広げて、到着を宣言するファング。

そんなファングに、クリフはため息をつきながらツツコミを入れた。

ちなみに、アレナは宿と食事の予約を取りに行き、アストルは馬車を預かって貰うために動いていた。

「ふう、酔ったかも」

「あはは……馬車は揺れるからね」

口元を抑える千里の背中を、ナーリヤがさすっていた。

寒気と吐き気で、千里の顔は心なしか青いように見える。

「はい、お茶」

「ありがと、ナーリヤ」

ナーリヤから受け取った水筒で、喉を潤す。

イルルガオススメのお茶には、吐き気止めや腹痛、頭痛の緩和などの効果があった。

「ふう、

今度からは、もっと大人しくしていよう。うん」

「慣れれば大丈夫だと思うよ」

密かに決意を固める千里に、しっかり聞いていたナーリヤがそう言った。

ガッツポーズの行き場を無くした千里は少し逡巡してから、拳を降ろす。

その顔は、どこか不満げだ。

「みんなーっ！

宿はこっちよ」

「おうっ、

でかしたぞアレナ！」

アレナが手を振りながら戻ってきたので、フアング達が移動を開始する。

重厚な鎧は手荷物の中へ入れておいて、見た目を軽くすると、千里とナーリヤもフアング達の後に続く。重厚な鎧で村人を威圧するのは、得策ではない。

道行く村人は、みんなどこか陽気な雰囲気だった。

野菜を運びながら笑う農夫、井戸の周辺で盛り上がる主婦。

子供達は泥だらけになって遊び、大人達は仕事の傍らそれを眺める。

「ミドイルの村も、こんな感じだったなあ」

「ミドイルの村は、豊作と言えなくとも不作はないからね」

その光景に目を眇めて呟いた千里に、横からナーリヤが答える。

ナーリヤの声に顔を上げると、ナーリヤも千里と同じように、ど

こか楽しげな笑みを浮かべていた。

「税を納めて、でも食べられるだけの食料は採れる。
天候も土地柄からか、ひどくなったりはしなくて、
豊かとは言えなくても、満足した生活が送れているからね」

非道い飢饉が起きない、それなりに生活していける村の人たちは、
みんな陽気だ。

精一杯生きながらも、どこか余裕がある村人達は、その余裕の楽
しみ方を知っている。

充実した一日を過ごすことの大切さを自然と理解しているから、
笑顔が絶えないのだ。

「トレイの村は、北への街道の仲介地点。

旅人や商人が宿泊していくから、自然と蓄えが増えるんだよ」
「そっか。

儲ければ生活に余裕が出来て、その余裕の使い方が上手なんだね」

千里はそう、こくこくと首を縦に振って頷く。

納得したのか、表情が晴れていた。

そうしているうちに宿屋に到着し、ナーリヤ達は足を止めた。

三階建ての木造建築で、部屋の大きさはそこそこといったところ
だろう。

「二人部屋を三部屋とっておいたから。

部屋割りは、私とチサト、クリフとナーリヤ、団長とアストルね」

男女で分けられた、良い組み合わせだ。

当然ながら大部屋の方が安いのだが、そちらは空いていなかった

のでこの部屋割りになったようだ。

やっと部屋で一息つける。

千里はその安心感から、背筋を伸ばして大きく息を吐いた。

背骨が小さく鳴る音が、身体の内側から耳に伝わる。

その心地よい感覚に一時身をゆだね、アレナに教えられた部屋に向かった。

階段を上って、二階の部屋。

角部屋な為、朱色の太陽と夜と昼の狭間の空が、窓からよく見えた。

「きれい……」

都会のようにビルなどの障害物のない空間は、広大で美しい。

千里はその光景に思わず息を呑みながらも、それが知らない空間であるということに一縷の寂しさを覚えた。

「いけない、

くよくよしてちゃ、ダメだ」

少しだけ目尻に溜まった熱を持つ雫を、左手で擦るように拭う。

黒帝という巨大な獣を討ち斃してなお、千里はどこか夢見心地のような危うさを内包していた。

そう “本当にここに立っているのか？” という疑問を、

漠然と抱いていた。

「あれ？

窓辺で黄昏れちゃって、どうしたの？」

「え

い、いえっ、なんでもないですっ！」

今後の相談をフアング達としていたアレナが、戻ってきていた。アレナは窓辺で黄昏れる千里の姿に、首をかしげていた。

慌てて答える千里の様子に、アレナはますます首をかしげる。

そしてすぐに何かに思い至って、チャシャ猫のような笑みを浮かべた。

「そっかそっか。

うん、なるほどね〜？」

「な、なんででしょうか？」

その笑みを浮かべたまま、アレナは窓脇のベッドに腰掛ける。二段ベッドの一段目で、少し硬そうだ。

「いやー、

……お姉さん、もっと気を遣った方が良かったかな？」

「え？」

口元に手を当てて、クスクスと笑みを零す。

その笑みに嫌な予感を感じて一歩下がるが、残念ながら窓際である。逃げ場はない。

「ナーリヤと一緒に部屋が、良かったんだよね？」

「へ？」

「……………ふええっ!？」

思わず、どこから出たのか解らない声が、出た。

意味を理解するまで一拍おいて、意味を理解して頬を朱に染める。その過程を、アレナは本当に楽しそうに見ていた。

「ちちち、違います！」

私とナーリヤは、そそそ、そんな関係じゃありません！」

「あれ？ 兄妹みたいだったから、そっちの方が良いと思ったんだけど………ふーん？」

はめられた。

千里は、そんな表情で口をぱくぱくと開けたり閉じたりしていた。目は大きく見開き、顔は空を染め上げる夕暮れの朱より、なお紅い。

「ななな、なんのことでほっつ」

噛んだ。

この上なく悪いタイミングで舌を噛み、羞恥と痛みで蹲る。

その様子を見て流石に悪いと思ったのか、アレナは顔を引きつらせた。

「あはは、

ごめんごめん、冗談だって」

「もうっ

アレナさん?!」

「あははは」

頬を膨らませて怒る千里の様子が可愛らしくて、アレナはお腹を抱えて笑っていた。

目元に浮かんだ涙を指でぬぐい取り、立ち上がって伸びをする。

「いやー、
笑った笑った」
「むう〜」

散々からかわれた千里は、へそを曲げて呻り声を上げる。
そうしている千里に、アレナは苦笑しながら近づいた。

「それで、
気分は晴れた？」

そして、先ほどまでとは打って変わった優しい笑みで、千里にそう問いかけた。

その意味を理解して、千里は目を丸くした。

「……はい」
「そっか。」

いや、なーんか放って置けなくて、ね」

年端もいかぬ少女が、窓の外から“遠く”を見る。
冒険者として各地を巡ってきたからこそ、沢山の人に会ってきたからこそ解る、小さな女の子の“郷愁”の目。

そんな目をされたら、放って置くことなんか、出来なかったのだ。

「えーと、
ありがとうございます」
「よしっ！」

それじゃあお礼ついでに、“それ”も止めよう！「

それ、と言われても解らず、首をかしげる。

そんな千里に苦笑を一つ零して、しかしすぐに快活な笑みを浮かべた。

「敬語よ、敬語。」

もつと気楽に話さないよ。

「……ね？」

「え、と……うん。」

わかった。ありがとう、アレナ」

「うむ、よしっ」

明るくも暖かいアレナの人柄に、千里はごく自然に惹かれていた。その場の空気を読んで和ませる、生粋のムードメーカーのようだった。

「それで、チサトは……」

ナーリヤの、どんなところが好きなの？」

「えーと、」

あああ、アレナっ?!」

「ふふっ」

あはははははっ」

それでももからかってしまうのは、きつと癖なのだろう。

千里はどうにも締まらない感覚を覚えながらも、すっかり晴れた心中の重みに安堵した。

十

千里の部屋の丁度真上。

三階の角部屋が、ナーリヤとクリフの部屋だ。

「よいしょっと」

ナーリヤは、部屋で邪魔にならないように弓を置く。

立てかけていたら重みで弓の形が変形してしまう可能性があるの
で、置くのは備え付けの机の上だ。

「なあ、ナーリヤは何時から旅をしてるんだ？」

茶色の皮鎧の籠手を外しながら、クリフが問いかけた。

特に深い興味がある訳ではなく、暇つぶし程度の話のネタが欲し
かったのだ。

「実は、今日からなんだ」

「へえ、それなら平民の馬車に慣れてないのも納得だ。
てつきり、イトコのお嬢さんとその従者、みたいなもんかと思
ったよ」

クリフがそんな感想を持つのも、無理はない。

特に荒れていない手に、滑らかな髪。

世間を知らなそうな表情は、見たまま“お嬢様”だ。

けれど、ずっと村から出たことがない“子供”ならば、それも頷
ける。

「あはは、そう見えるかな？」

「まあ、俺は馬車の操縦で見えていなかったが、

すっごい大剣振り回してたってファングから聞いたから、

王国の魔法騎士、貴族様かな、とも思ったんだけどな」

魔法騎士の称号は、貴族でなくとも得ることは出来る。

けれど、平民から魔法騎士というエリートになるためには、修練
を積んだ戦士くらいでないと、厳しい。

千里のような見た目で魔法騎士ならば、それは貴族として英才教
育を受けた子供という可能性が高かった。荒れていない手なども、
その想像に拍車をかけていたのだ。

「クリフは、何時から冒険者に？」

「俺は……」

えーと、九歳の時だから、十年前だな

まあ、ファングが俺の、育ての親だ」

そう言うと、クリフは気まずげに頭をかいた。

父親といえればいいのだが、彼は未だに“ファング”としか呼べていない。

「そうなんだ。」

……豪快なお父さん、だね」

「豪快“過ぎる”育ての親、だ」

クリフはベッドに腰掛けると、あぐらをかいた。

ナーリヤから顔を逸らす姿は、彼よりも一つ上の年には見えなかった。

「だあー、もう。」

いいから行こう！

ファングのおごりで宴会だ」

「うん、そうだね。」

楽しみにしてるよ」

年下の弟を見るようなナーリヤの視線に、クリフは顔を逸らしながら立ち上がる。

そして、どこかふて腐れた空気を醸し出しながら、ドアノブに手をかけた。

「畜生、

これもどれもこれも、全部ファングのせいだ」

「全部？」

「全部」

宴の場は、向かいの酒屋だ。

ナーリヤは下の階から聞こえる笑い声に首をかしげながら、クリフの後に続いて外へ出た。

十

太陽が落ち、月が顔を覗かせる。

空には漆黒の天蓋が覆い被さり、宝石箱の中身を散らばしたような星が輝いていた。

人々の生活の終わりを見送る、白い月が村を照らす中、宿屋の前の大衆向けの居酒屋では、牙の団一行が楽しげな賑わいを見せていた。

「フハハハハッ！」

クリフ！男ならもつと呑め！」

「ああいいぜ！」

アンタなんかよりも呑めるってところ、見せてやるッ！」

水のように酒を飲む二人を、アレナが笑いながら見ている。

アストルはその横で、黙々とほうれん草によく似た野菜を食べていた。

そんな四人を尻目に、千里は木のコップに入った果実のジュースを少しずつ飲んでいった。

時折、野菜のスープに舌鼓をうつナーリヤに視線を向けながら、顔を逸らす。

もう三十分は、そうしていた。

「うう、アレナのばか。

ナーリヤの顔、まっすぐみられないよう」

結局、この会場に着くまで、千里はアレナに散々にからかわれていた。

どんなところに惚れたのかと聞かれても、別に惚れてはないと言っでは、いた。

だが、言ったから意識するなというのも、無理な話だった。

例えば、目元が優しげで。

例えば、笛の音が綺麗で暖かくて。

例えば、優しく強くて頼りになって。

例えば、けっこう“可愛い”ところがあって。

例えば、そっいえば村で一瞬見てしまった上半身は引き締まっ
ていて。。。

考え出したら止まらず、思考がぐるぐると巡り出す。
初恋の相手は、保育園のお兄さん。五歳の時のことだ。
十年前の恋愛感情は拙く、千里はそれが“憧れ”にすぎないと、
自覚していた。

「うう、ダメだ。」

これじゃあなんか、私、変態さんだよ」

思い浮かべた、ナーリヤの顔。

そこについて廻る感情は、友情……だと、思っている。

それで間違いはないはずなのに、どこかで千里の心を乱す、名前の知らない感情があった。

「はあ、もつとしつかりしないと」

「さつきから一人で、どうしたの?」

「ふえ……。」

ひゃっ、そそ、そのっ

わわわ、私、なんか変なこと言ってた!??」

自分を覗き込むナーリヤの声に、千里は慌てて椅子ごと身体を引く。

聞かれたかも知れないと考えて、千里は頬を抑えながら叫んだ。

羞恥と訳のわからない感情で顔が熱を持っていくのを、千里は実感していた。

「う、うーん。」

締まりがどうとか、って……」

一番内容に関わりなく、かつ一番聞かれたらキツイ部分だった。

ナーリヤがよくわかっていなさそうな雰囲気なので救われているが、そうでなかったらと思うと気分も落ち込む。

「お願い、忘れて」

「う、うん。いいけど」

千里は机の突っ伏すと、涙ながらにそう言った。

そんな千里に、ナーリヤはひたすら首をかしげていた。

「鶏肉の締まりは、確かに良かったかも」

そして、当然ながら忘れていなかった。

頂垂れる千里を余所に、ナーリヤがファング達に呼ばれて席を立つ。

どうやら飲み比べを始めるようで、アレナが入れ替わりに千里の側までやってきた。

ひとまずうやむやになったことに、千里は少しだけ安堵の息を吐く。

「あはは、

いやー、楽しかった」

そう言いながら千里の隣に座ると、自分も強めの酒を飲む。

そんなアレナを、千里は恨めしそうに見ていた。

元はと言えば、全てアレナのせいである。

「うん？どっしたの？」

「うう……」。

なんでも、ないよう」

「どうしたのさ？」

あ、水飲む？」

アレナは首をかしげながら、空になっていた千里のコップに手がかざした。

「【水よ】」

すると、虚空から水球が出現して、コップの中に収まった。

その“魔法”という名の奇跡に、千里は目を丸くする。

改めて近くで見ると、ますます“ゲーム”みたいだと息を呑んだ。

「魔法が珍しい？」

「うん。」

魔法って、誰でも使えるの？」

異世界にいて、魔法がある。

それならば使ってみたいと考えるのは、現代人の必然ともいえる行動だった。

「才能が必要だよ。」

魔力を感じ取れる、才能。

あとは努力と根性かな？」

「こ、根性？」

千里の中の魔法使いのイメージは、シンデレラの魔女だ。

杖を一振りすれば、カボチャは馬車になってボロ服はドレスになる。

大鍋で煮えたぎる紫の液体をかき混ぜる、細身の老婆。

頭でつかちと言われても、根性とは無縁の風貌だ。

「そ、根性。」

チサトは、魔法ってどんなモノだと思う？」

「えーと、

難しい呪文で、きらきらーっ！どっかーん！

……かな？」

爆発は、するかどうか解らない。

だが簡単に自分のイメージを伝えるのなら、これだった。

「あはは、面白いね」

擬音が、だろう。

どことなくからかわれているような気がして、千里は頬を膨らませた。

「魔法っていうのはね、

世界に満ちる“力”を、自分の中で増幅、変換させて、表に出す術すべなの」

世界に満ちる力……“マナ”を自分の中へ取り込む。

そして、取り込んだマナを増幅させて、魔力という型に嵌め込む。

そこへ、詠唱によって形を与えて解放する。

それが“魔法”であるのだと、アレナは簡単に説明をした。

「変換できる“形”にも個人差があつてね。

私は水に特化した才能。

「結界や回復、捕縛とかの補助が得意かな」

馬車に乗せた、水の橋。

あれは、結界の応用である。

「魔法はね、感情で威力が左右されるの。

愛情、歓喜、憎悪、憤怒、悲哀、苦痛、信頼、忠義。

とにかく、強い感情なら強い感情なほど、威力も強くなるの」

それは、千里が抱いていた“魔法使い”のイメージとは、まったく違うモノだった。

感情に左右されないのが、魔法使い。

漠然とだが、千里は魔法使いにそんなイメージを抱いていたのだ。

「詠唱も、感情のトリガーとなるオリジナル。

一番発現しやすい文章を考えたりもするのよ。

人によっては、愛する人の名前を叫ぶ、なんてのもあるんだから」

「へえ……」

「なんか、すごいや」

千里は、感心したのか何度も頷いた。

アレナはその様子に微笑みながら、酒を喉に流し込む。

「ふう……」。

魔力を制御するために、頭は常に冷静に。

それでいて、威力を上げるために、心はいつも熱くする。

だから魔法使いは、“情熱の学者”って呼ばれることもあるの」

情熱の学者。

それが、フィクションの世界とは一線を画す、リアルの“異世界

”の魔法の形だった。

「ふはは、はは」

「うぐう、つええ」

呻り声につられて、アレナと千里はナーリヤ達の方へ視線を移した。

するとそこには、白い顔で動かなくなるファングと青い顔で崩れるクリフ。

……そして、平然とした顔で飲み続けるナーリヤの姿があった。

「うへあ……」。

なにあれ、すごいわね」

「お酒強かったんだ、ナーリヤ」

千里の呟きの先。

ナーリヤは笑顔を崩さないまま飲み続けて

そして、笑顔

のまま倒れた。

「ええええええつつつ!？」

ななな、ナーリヤ!だいじょうぶっ?!」

「あーもう!」

全員頭を冷やせ!【水よ】!」

青い水が酒とナーリヤ達を流す。

その脇でほうれん草を食べていたアストルは、さりげなく避難していたが、ナーリヤ達は完全に水浸しにされたのだった。

†

月が西へ傾き始めた頃。

獣も森も寝静まるこの時間に、ナーリヤは一人、目を開けた。狩人として森の側で暮らし続けた、鋭利な聴覚。

それが、森から来る“招かれざる気配”を捉えたのだ。

「なんだろう」

小さく呟くと、ベッドから起き上がる。

そして、弓を手に窓辺に近づいた。

夜の闇でも働く視界。

ある程度形を捉えれば、あとは聴覚で“観る”ことができる。

「クリフ、起きてる？」

「今、起きた」

ナーリヤの声で目を開けて、そしてその緊迫した雰囲気^{アトモスフィア}に声を潜める。

クリフはベッドから静かに起き上がると、刃渡り四十センチほどの短剣を腰に収めた。

「フアングももう、たぶん気がついてる。」

アストルは動いて、探りに出ている頃だと思う。

チサトはアレナが補佐すると思うけど、いいか？」

「うん、問題ないよ。」

ありがとう、クリフ」

そう話しをしながらも、ナーリヤは窓の外から意識を裂かないようにしていた。

クリフは足音を消して、ドアから身を乗り出し付近を探る。

「たぶん、まだ村には侵入してない」

「集まっている場所は、わかるか？」

「方角は、北東^{ノルアル}。」

詳しい場所はわからない」

相談をしていると、クリフがナーリヤに手を挙げる。

それを視界に納めてドアの方へ意識を裂くと、そこにはアストルが立っていた。

極端に気配の無い、奇妙な動きだ。

「フアングとアレナ達を残して、我々は打って出るぞ。
村に侵入される前に、片付ける」

侵入者は、掠奪を生業とした盗賊だ。
アストルは小声でそう、付け加えた。

「わかった」

「うん」

頷いた二人に、アストルも頷き返す。

村の護衛はフアング達に任せて、ナーリヤ達は盗賊を討ちに行く
ことになった。

†

村の近くの森。

生い茂る林の中で、十数人の男達が刃を手に立っていた。

「動きは？」

「気がつかれましたが、

おそらくほんの一部です」

「なら、騒がれる前に奇襲を仕掛けるぞ」

鳥の羽を縫い付けた、黒い外套の集団。

手に持つ剣はみんなバラバラで、それがどこからか盗んできたモノであるということを示していた。

「久々の獲物だ。

……しくじるなよ」

男は、部下にそう告げると手を挙げた。

この手を振り下ろすのが、合図だ。

「さあて、はじめ……」

ゴロンッ

「……ぐあっ」

鮮血が舞い、男の頬にかかる。

暗闇の中目を凝らすと、自分の手を貫く矢があった。

「チィッ、散開！」

男は舌を打つと、指示を変える。
気がつかれたのなら、まずはその相手を片付ける必要がある。

夜は、掠奪を繰り返してきた、男達の領域だ。
だが 夜の“狩り”は、その限りではない。

「弓士ゆみしがいるぞ！」

木々の間から出る時は、タイミングをずらせ！」

そう指示を出す。

だが、暗闇で逃げる“獲物”の動きは、男達を狙う狩人 ナー
リヤの“経験”の内だった。

風に乗って、遠くから、声が響く。

「先見二手」

逃げるタイミング、動き。

その全ての軌道を二手先まで読み、矢を放つ技。

「二射必中」

一息で放たれた二筋の閃光が、男達の中でも特に臆病な者を削っ
ていく。

足を穿ち、手を貫き、肩を裂き、膝を割る。

そうして、すでに十五人の内の十人が、地に伏していた。

「ここから、出なければッ」

「悪いが、そうはいかん」

気配無く忍び寄ってきた、緑色の影。

その両手に携えられた細身の双剣が、男の両足と両腕を瞬く間に切った。

「まだ生きていて貰うぞ。

……情報が必要だからな」

アストルは冷たくそう言うと、次の獲物へ疾走する。どうせ動けないし、自害するほど忠義の厚い盗賊などいない。

「うぐあぁっ?!」

森の奥から聞こえた声。

それは、最後の一人をクリフが昏倒させた声だった。

「厄介なことに、なりそうだ」

アストルの無感情な声が、夜の森に響く。

そして、丁度その声と同時に、ナーリヤは二百メートルほど離れた位置の木の上で、小さくため息をついた。

「本当に、厄介なことになりそう、だね」

旅の一日目。

それは、波乱の種と共に、小さく幕を下ろした。

二章 第二話 テレイの村（後書き）

第二話は、二章の軸を展開してみました。

ご意見感想ご評価のほど、随時お待ちしております。
拍手の方も、お気軽にどうぞ。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

二章 第三話 覚悟

村から離れた、洞窟の中。

一番奥の空間で、暗く笑う男の姿があった。

「ハハハ、

なに、その冗談」

声は笑っている。

だが、その音に込められた濃厚な殺意に、周囲の男達は身体を竦ませた。

襲撃失敗の後、ただ一人捕虜になることなく逃げてきた男。

その男に、奥から響く声が、重くのしかかる。

「も、申し訳ありません。

アズイの兄貴」

アズイ　そう呼ばれた男は、どこか楽しそうに鼻を鳴らす。

いや、事実楽しいのだろう。

なにせ、丁度良い“遊び道具”ができた事を、知ったのだから。

「凄腕の冒険者、か。

くくくっ………楽しめそうじゃねえか」

手に持つ巨大な鉄塊。

ただ鉄を固めて棍棒にしただけの武器を、アズイは大きく振り回して肩に担いだ。

「さあて、用意しろ。」

血と悲鳴の“宴”の用意を、な」

アズイの低く重い声が、洞窟に響き渡った。

E
x
I

朝は、一日の始まり。

誰もが活気に満ちるこの時間、村は騒然としていた。

昨晚の、盗賊騒動のためだ。

「俺たち牙の団が、盗賊討伐を任された。

おまえ達はどうする？」

豪快な笑い声と態度で、村人を安心させるファングの後ろ。

ナーリヤと千里に、クリフがそう呼びかけた。

「……人手は、必要なの？」

「あー、

人数が解らんからなんともいえない。

でも、ナーリヤみたいな腕の立つ弓士がいると、助かる」

不安そうに聞く千里に、クリフは正直に話す。

アレナの魔法は、中距離が中心だ。

ナーリヤのような遠距離でサポートしてくれる人間が居るだけで、かなり楽になる。

「僕は、手伝うよ」

「ナーリヤだけに任せておくなんて、出来ないよ。

私も手伝う！」

千里は、身を乗り出してまっすぐとクリフを見る。

流石に千里は止めておいた方が良さだろうと、そう思っていたクリフは、その強い意志に少しだけ圧されていた。

仲良くなった、牙の団のメンバー。

それに唯一の“友達”である、ナーリヤ。

仲間が戦いに行くのに無責任に待っているなんて、出来なかった。

「なあ、ナーリヤ……」

「一緒に行っても、いい？」

「……はあ、責任持てよ」

クリフは、渋々といった表情で引き下がる。

あっさり退いたのは、千里の目が“澄んでいた”からだった。

澄んだ眼で戦いに赴くのは危険で、だからこそ“行かせる”べきだという、旅をする者としてはずっと先輩であるクリフの気遣いだった。

「ファングに話してくる。」

それまでに、準備しておけよっ」

「わかった」

「うん！」

ありがとうっ」

ファングの下へ走り去るクリフに、ナーリヤと千里は頷いて返事を
をする。

千里はやる気に満ちあふれ、気合いを入れて鎧を取りに部屋へ戻
っていく。

その様子を見て、ナーリヤは小さく呟いた。

「越えなければならぬ。」

でも……本当に？」

その視線には、葛藤と決意が、混ざることなく揺らいでいた。

十

一行は酒屋に集まり、作戦会議をしていた。

こういった時に会議の進行をするのは、アストルの役目だった。

ちなみに、ナーリヤは酒屋の屋上にある物見台で、見張りをしていた。

村に滞在していたのは、運の悪いことに商人だけだった。

商人の護衛は、商人を守るだけで手一杯な冒険者のみ。

だったら、ついでに村を守って貰おうという判断を、アストルが

下した。

「商人の冒険者には、商人ごと村人を守って貰う。

その間に我々は、打って出るなり迎え撃つなりできる」

捕まえた盗賊達は、未だほとんど情報は吐かなかつた。

拷問などをする権利は冒険者にはなく、それは国の兵士の領分だ。別に、したい訳ではないと、ファングは豪快に笑っていたが。

「入手できた情報は、

東の洞窟ということのみ。

だが、村長の話では、その辺りには似た様な洞窟がいくつもあるらしい」

実質、情報ゼロといっても良い状況。

その状況に、千里は小さく、不安げな吐息を零した。

「だからひとまず、迎え撃つ。

その後のことはその時に考える。

臨機応変根性突破が、牙の団の座右の銘だ」

淡々とした口調ながら、その声は力強い。

共に冒険を繰り広げてきた仲間達がいるから、どんな時でも余裕を持てるのだ。

(信頼、かな)

頭に浮かんだ単語を、千里は心の中で呟く。

時間と共に築いた“信頼関係”が、確かな形でそこにあった。

「みんな、いいかな」

そうしていると、高台から戻ってきたナーリヤが声をかける。その声に、ファング達と千里は視線を向けた。

「北東から数人。」

たぶん、斥候だと思っけど……どうする？」

斥候　つまり、偵察だ。

こちらを偵察、調査するつもりで、身軽な人間をよこしたのだから。

「ふむ、丁度良い」

「よし！それなら」

「団長は居残り。」

俺とアストル、ナーリヤにチサト。

……これで充分だろ」

クリフがファングを押しとどめる。

実際、囷という可能性もあるので、別部隊の対策にファングとアレナは残しておく必要があった。

村の心配は要らないと言っても、別方向から来たら遊撃する必要があるのは確かだった。

村に入れないのが、そもそもの最低条件だ。

「むう」

「はいはい、居残りは任されたわ」

渋々引き下がるファングと、苦笑しながら了承するアレナ。

そんな二人の様子を確認すると、クリフはアストルに近づいた。

「アストル、

チサトはたぶん……」

「うむ、“初陣”だろう、な。

フォローはナーリヤがするだろうが、彼は遠距離担当だ。

巻き込んだ以上、我々も出来る限りのフォローはしよう」

「ああ、そうだな」

アストルの言葉に、クリフは頷く。

そして、鎧を着て大剣を背負う千里に、小さく視線を移した。

“初陣”の洗礼は、誰にでもやってくる。

そのことが彼女の目を曇らせたなら、少し寂しい気がして、ため息を吐く。

そんな取り留めもない感情を、クリフは胸の奥にしまい込んだ。

まだ日も高い時間。

燦々と輝く太陽の下で、千里達は迎え撃つ用意をしていた。

進行方向が千里達の下へ変わるように、遠くからナーリヤが誘導をしているのだ。

「来たぞ」

アストルの声を聞き、千里はアギトを抜き放つ。太陽の下で、白い刃が鋭利な輝きを放っていた。

「チイツ、やはり誘導か！

貴様ら！蹴散らせ！」

走ってきた男の一人が、そう叫ぶ。

すると、五人の男達が手に剣を持ち、一斉に飛びかかってきた。

千里は、高速で煌めく刃を“見て”避ける。

視覚で捉えてから動いて、間に合うのだ。

振り下ろされた剣に対して、身体を左斜めにずらすことで避ける。そして、から空きになった胴体に前蹴りを入れた。

「ごめん！」

「ぐあつ?!」

男の身体が宙に浮き、バウンドしながら地面を滑る。

その威力に男達が竦む中　千里は、誰よりも驚いていた。

女の子の力だからと、思い切り蹴った。

その結果が、今の男の状態だ。

地面に突っ伏して、痙攣しながら血を吐く男。

足の裏から伝わってきた、肉を潰す感覚。

「あ」

「死ねえええッッッ！」

叫び声を上げて斬りかかる別の男。

横薙ぎに払われた剣をバックステップで避けて、やや前に出た頭部に剣を。

「だ、め」

振り下ろすことが、できなかった。

男は幸いなことに、気がつかずに飛び退く。

気がつかれていたら、つけ込まれていたことだろう。

「人間、なんだ」

始めて戦ったのは、獣だった。

黒帝と呼ばれる森の主。

魔獣とまで呼ばれた、森林の覇者。

命を賭けた戦いで勝利を収めて、思ったのだ。

実戦でも通用する“力”がある、と。

だが、相手は獣ではないということが、千里の想像を遙かに超越していた。

この敵は、肉できていて、血が通い、泣けば涙を流す“人間”なのだ。

「うん？」

このガキ “初陣”か」

剣を手にしたまま震える千里に、男が下卑た笑みを浮かべる。これほど狩りやすい獲物はないのだと、言うように。

「おらッ！」

「っ!?!」

剣戟を、持ち前の能力だけで防ぎきる。だが攻撃できないということは、大きな差に繋がっていた。

「ちっ……」

覚悟を決める！チサト！

それで死ぬのは、“自分だけ”じゃないんだ！
「私だけじゃ、ない」

別の場所で戦う、クリフの言葉。

離れたところで剣を振る、アストルの視線。

一対一以上の状況を作らないように降り注ぐ、ナーリヤの矢。

その最中であつてなお 千里は、剣を振ることが出来ないで居た。

「終わりだッ！」

「っ あ」

男の剣は、もう避けられないほど近くまで迫っていた。
その剣を目で追い、そしてついに振り下ろされ なかった。

ドスッ

「ぎゃあッ?!」

男の足を貫通し、地面に突き刺さる一本の矢。

ドスッ

「ぐぎッ！」

男の両腕に刺さる二本は、一息の内に飛来したモノ。
ナーリヤの技である“先見二手”が、千里を救った。

「撤退だ！」

逃げていく二人の男を、アストルが気配を消しながら追いかける。
男達はそんなアストルに気がつくことなく、走っていった。

そんな男達を、呆然とした眼差しで千里が見送る。

周囲には、クリフ達が殺した盗賊たちの屍が、無残な姿で転がっていた。

その中には、死んでこそ居ないが、血を流して倒れ伏す男の姿も

ある。

この男は、死にはしないだろう。だが、怪我が治っても、千里が傷つけたという事実が変わりはない。

その事実には恐怖し、千里は震える肩を自分で抱きかかえた。

「千里」

そんな中、遠く離れた場所で、ナーリヤが小さく名前を呼ぶ。

対大型魔獣の大弩である夜影弓では、一撃で人間を“粉碎”してしまう可能性がある。

だから通常の射程よりも遠くにいて、威力を殺す必要があったのだ。

そうして遠くにいたナーリヤは、悔しげに唇を噛んだ。

側にいて、手を差し伸べることが出来ない。

初めての“友達”を、助けることもできない。

透き通った空の色とは対照的に、彼らの心には雲がかかっていた。

雲がないということは、月が輝くということだ。

遮るものが無いため、月明かりは思う存分に地上を照らしていた。

夕暮れから夜に変わったばかりの時間。

千里の世界でいうところの、大体午後八時頃。

千里は、宿屋の屋上で膝を抱えていた。

「甘いん、だよね」

その甘さは、“仲間”を殺す。

頭ではそう理解していても、心が受け付けられない。

治安の良い、平和な国に生まれ育った。

暴力は“いけないことだ”と教えられて、その常識の中で生きてきた。

千里は、誰かを傷つけるのが嫌いだった。

どうしもうもなく嫌で、喧嘩に手を上げたことはほとんど無い。かっとなって手を上げて、そしてすぐに後悔をしまうのだ。

この世界に立っているのか、解らない。

そんな漠然とした不安は、避けようのない“リアル”によって、残酷に押しつぶされた。

「千里」

膝を抱えて、顔を埋める。

そうしているとかかった声に、千里は顔を上げた。

「ナーリヤ」

ナーリヤは千里の隣に、静かに腰を降ろした。

再び膝に顔を埋める千里とは対照的に、ナーリヤは空を見上げている。

「ナーリヤは、さ」

「うん」

「人を殺したこと、あるの？」

「……うん」

ナーリヤの答えに、千里は小さく肩を震わせた。

解っていたのだ。躊躇いもなく、人に矢を向けた時点で。

「僕が、怖い？」

「ううん。」

ナーリヤは怖く、ない」

それだけは、自信を持つて言えることだ。
それが常識に組み込まれている世界の住人だから、という考えも、もちろんあるのだが、それでなくても千里は、ナーリヤが怖いとは思わないだろう。

だが、聞いておきたかったのだ。
この優しくて暖かい、少年に。

「ナーリヤは、怖かった？」
「うん。」

今でも、少し怖いよ」

命に関わる状況。

その最中ならば、恐怖の感情など切り捨てられる。
けれど、全て終わって、それから襲ってくるのだ。

どうしようもない、“恐怖”が。

「覚悟を決めなきゃ、ダメだよね」

無理にでも、覚悟を決めよう。

そう考えて、千里は拳を強く握る。
手が震えるほどに、強く、強く。

多少自虐的でも、痛みを伴わなければ、心の震えが収まらないのだ。

「僕は、さ」

「ナーリヤ」

ナーリヤはそんな千里に、視線を空に固定したまま声をかけた。その表情は、伺えない。

「無理に殺そうと思うことは、無いと思う」

「え？」

「……だ、だって」

甘えは仲間を殺す。

千里にそう叫んだのは、クリフだった。

「殺さなければいけないかもしれない。

でも、殺さなくても良いかもしれない。

殺す以外の方法だって、あるかもしれない」

「殺す以外の、方法……」

夢物語

そんなものは、“おとぎ話”の世界の話だ。

だがそんなことは、こうして語るナーリヤが、誰よりもよく解っていた。

村を襲った、小規模の盗賊団。

セアックと共に守りにつき、ナーリヤが盗賊の心臓を穿ったのは、十五歳の時だ。

その感覚を　その空虚さを、ナーリヤは今でも、覚えている。

「綺麗事だと思う。

でもそれは、本当に綺麗だから、“夢物語”っていわれるんだ」

だが、だからこそ。

この澄んだ瞳の少女に。
この美しい心の女の子に。
この優しい、“友達”に。

“泣いて”ほしく、無かった。

「綺麗事でもいいじゃないか。
そんな方法、無いかも知れない。
でも、でもさ」

空から視線を落とすと、ナーリヤの瞳に浮かぶ優しい夜空が、見上げる千里に降り注ぐ。

「諦めないで、
そんな“夢物語”を追いかけることの方が」

その“夜”に、吞まれる。
身体を縛られて、心を掴まれる。

「ずっと綺麗で、
ずっと素敵で、
ずっと尊くて、
ずっと」
好きだ」

それでもいい。
だからどうか、泣かないで、と。
ナーリヤの優しい微笑みが、千里の頬を伝う涙を、暖かく包み込む。

「殺さなくても良い。

だから、お願い。

ずっと“それ”を、貫いて

諦めないでくれと、そういう瞳は“諦めた”者の、悲しい光を宿していた。

「うん。

……うん、うんっ！」

何度も、何度も何度も頷く。

怖かった。

殺せと言われて殺してしまうことが。

それで後悔して苦しんで胸を痛めることが。

そして何より “諦めて” しまう、ことが。

「ナーリヤ……ごめんね。

それから、ありがとう」

涙を流す。

ぐちゃぐちゃになった顔を見られないように、膝に埋めて。

ただ、涙を流し続ける。

そんな千里の頭に、ナーリヤは優しく手を乗せた。

そして、その涙が流れきるまで……優しく頭を、撫で続けた。

二章 第三話 覚悟（後書き）

第三話は、やや短めで。

次話は、もう少し長いお話になります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

今回より拍手に番外編を載せてみました。

拍手の方も、どうぞお気軽にご利用ください。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

二章 第四話 物語に剣を持つ者

村の東の洞窟で、鉄の音が鳴り響く。

洞窟の壁に当てられた棍棒が、その身を鳴らす音だった。

「これくらいでいいだろう」

アズイは棍棒をランプにかざして、そう呟いた。

強靱な力によって歪められた、棍棒。

盗んできた鉄を更に押し固めたその棍棒は、鉄筋のような形になっていた。

元の姿など、想像も出来ない歪な鉄塊だ。

「兄貴、

斥候のヤツらはいいんで？」

「あん？」

自分のことしか考えないような連中だ。

本当はどうでも良いのだろうが、やはり何の意味があつて“必要のないこと”をさせたのか、解らなかつた。

事前調査など、とうに終えている。

「ああ、アレか。

アレは“招待状”さ」

「招待状？」

ああ、なるほど。

……流石兄貴っスね」

斥候にやったのは、冒険者をここに誘導するための駒にすぎなかったのだ。

所詮は他人。彼にとっては、等価の捨て駒に過ぎない。それでも自分の“力”のおかげで集まる蜜を吸おうと、アリのように群がってくる。

補充が効くから、楽に殺してしまえるのだ。

「さあて、

……何時まで、持つかな？」

棍棒が、空を切る。

そのけたたましい轟音は、洞窟の中に、いつまでも響いていた。

逃げた二人の男。

その行き先を追跡したアストルが戻ってきたのは、その日の早朝だった。

アストルは、音もなく戻ってくると、ファングの下へ訪れる。

影から影へ移動するその姿は、夜の闇を飛ぶ梟のように、滑らかだ。

「ファング」

「アストルか。」

「……どうした？」

アストルの張り詰めた顔に、ファングは声色を変える。

いつもの陽気で豪快な姿は、なりを潜めていた。

「敵の正体が、解った」

「そうか……それで？」

渋るような空気をあえて無視して、ファングは訊ねた。

アストルは幾度か逡巡を見せてから、普段よりも注意深く周囲を見回した。

「 “アズイ”だ」
「なに？」

その名前に、ファングは険しい顔で聞き返す。
それが誰であるかは解っているが、今はまだ“早い”と考えていた。

「 “黒鬼”め、
こんなところに潜伏していたか」

赤茶の髭を撫でつけながら、ファングは虚空へ向かって呟く。
アズイという名は、ファングをぐらつかせるほどの効果を持っていた。

「 どうする？ 」

「 俺たちだけで片付ける。 」

「 …… のは、アレナが納得せんか」
「 そうだな 」

クリフは丸め込むことが出来る。

だが、アレナは違う。丸め込まれてくれるような、殊勝な女ではない。

それは、彼女を十年以上部下にしてきた 彼女の“叔父”としての、感想だった。

「 それなら」
「 ああ。」

暴走だけはしないように、作戦の一部に組み込む。
頼んだぞ、アストル」

「フツ……任せておけ」

アストルは、そう言うと再び闇に潜った。抱える問題は多く、それ故に苦痛もある。だが、それでもファングは笑う。

彼は団長。

メンバーをまとめ上げて常に先陣を切り拓く、リーダーなのだから。

+

村の朝は、早い。

それはどこの村も同じで、村人達は朝早くから活動を始める。そうして賑わい始めた朝のトレイでは、いつの間にか決められた場所のようになった酒屋に、牙の団とナーリヤ達が集まっていた。

「今日はなんか、目の色が違うな」

「え？赤いかな？」

クリフの言葉に、千里は慌てて目元を隠す。

昨晚、散々泣きはらしたのだ。

目が赤くなっている可能性があった。

「そーゆー事じゃねえよ」

クリフは含むような笑い声を零す。

不快な感じではないその笑みに、千里はただ首をかしげていた。

「さて、敵の居場所が判明した。

中々の実力者が頭目をしているようだ。

追いかけた限りでは“誰かは解らなかつた”が」

アストルの説明は、周りに違和感を与えることなく進行する。そこであえて情報を削っていることなど、誰も気がつかない。

「そこで、

周囲から輪を狭めるように、洞窟外の盗賊を始末。

比較的広い洞窟だが敵地で戦うのはこちらの不利となる。

だから、雑魚を片付けた後は洞窟から燻り出す。

ここまでで、何か質問はあるか？」

アストルは、真剣に作戦を聞くクリフ達を、視線だけで見回した。そして、全員が強い瞳で頷いたのを確認し、目を伏せる。

「決行は昼時だ。」

わざわざ向こうの大好きな夜に戦ってやることもないだろう。それまで、各自英気を養っておけ」

アストルが席を立ち、その後を、ファングが豪快に笑いながらついていく。

王様と宰相……そんな立ち位置がよく似合う、二人だ。

「さて、それじゃあ各自で準備。」

「ってことでいいよな、アレナ」

「いいんじゃない？」

ナーリヤ達も、矢の準備位しておいてよね」

「はは、大丈夫だよ」

軽口を乗せながら、一人二人とその場を立ち去る。

戦いの前には、それぞれ思い思いの“何か”をするのだろう。

「ナーリヤ」

ナーリヤは自分の名を呼ぶ千里に、向き直る。

視線の先では、千里が指の先を合わせながら、目を伏せて顔を赤くしていた。

「昨日は、ごめんね。」

それから、その……ありがとう」

照れくさいのか、反応が怖いのか。

千里は恐る恐ると言った感じで、ナーリヤを見る。
上目遣いに上げられた視線は、羞恥を筆頭とした様々な感情で、
少しだけ潤んでいた。

「うん。」

解決の手助けが出来たなら、さ。

僕も　　嬉しい」

ナーリヤはその視線を受けて、目を泳がせた。

思わず“可愛い”などと考えてしまった己を恥じて、それでいて
どこか胸が高鳴るような感覚から顔を熱くする。

幾度かの逡巡。

その後には紡がれた言葉には、千里が何度も励まされてきた、優しく
暖かい笑顔が添えられていた。

その笑顔に、千里は、はにかむように柔らかい笑顔を返す。

「ありがとう。」

ナーリヤが居てくれて……」

自然に紡がれる言葉は、止まらない。

普段なら言えないような言葉を、雰囲気の後押ししていた。

「……私は」

「あー、うん。」

「ちょっといいかな？」

だがその言葉は、扉からかけられた声によって止められた。
その声に、見つめ合っていた二人は動きを止めた。

「あつゝく見つめ合っているとこ悪いんだけどさ」

「みみみ、見つめ合ってなんかっ！」

フリーズから溶けた後、二人は対照的だった。

慌ててアレナに食いつく千里の隣で、ナーリヤは大きく息を吐きながら目元を抑え、空を仰いでいた。

「それで、どうしたの？」

ナーリヤが首をかしげると、アレナは慌てて咳きをした。本題を忘れて、千里をからかうところだったのだ。

「クリフの姿が見えないんだけど

……どこにいるか、知らない？」

何か用があったが、部屋にいなかったのだろう。その言葉に、ナーリヤと千里は首を捻る。

「ああ、そういえば」

ナーリヤは、クリフと同室だ。

当然、昨晩も幾度か言葉を交している。

「少しでも有用な情報が引き出せないか、捕虜のところにもう一度だけ行ってみるって」

「そう……」。

まったく、苦労性なんだから。

ありがとね、ささ、続けて良いよ？」

「できないよっ！」

続きが“そう”であると暗に肯定する言葉。

その意味に誰よりも早く気がついたナーリヤは、赤くなってしまった顔を手で隠しながら、頬を膨らませる千里から顔を逸らすのだった。

十

村にも、大人を閉じ込めておく事が出来る“牢”はある。
小規模な村ではあまり見られないが、中規模から大規模の村は、
牢を備えていた。

「よし、出来ることをやりますか」

クリフはそう、息を吐く。

自分に出来ることは、なるべくしておきたい。

何も出来ないと言うことが、クリフは何よりも“嫌”だった。

村の端にある、牢屋。

頑丈な木の小屋と言った方が、近いだろう。

その小屋に、クリフは気配を殺して近づくと、壁に耳を当てた。

普通に聞き出そうとしても、話さないのは解っている。

だからクリフは、盗賊達の気が抜けた頃合いに、その会話を盗み聞きしようと考えていたのだ。

「まさか、捕まるようなへマをするとは」

「アニキに、助けて貰うか？」

「冗談はよせ。」

アニキにとって、俺たちは“駒”だ」

自分の役割を理解した、部下。

しかし情は薄く、つけ込む隙はいくらでもあるだろう。

それが、彼らの会話を聞いたクリフの意見だった。

「あの人は、

結局俺たちが居なくても変わらねえよ」

「そりゃそうだよ。」

俺たちが百人いても、敵うどうかわからねえほど強いんだ」

怪我をした人間は、動くことが出来ないまま話しに頷いているよ

うだ。

すっかり話しをすることが出来ているのは、クリフに昏倒させられた人間だけだった。

「俺たちの居るところには、いねえよ。」

そうでねえと、“黒鬼”なんて呼ばれかたしねえだろ」

男の言葉。

その中の短い単語に、クリフは目を見開く。

「“黒鬼”のアズイ、か。」

あの人だけは、敵に回したくねえな」

最後に出た、名前。

それを聞き取ったクリフは、幽鬼のような動作で立ち上がる。

小屋から離れて、歩き、腰の短剣を強く握りしめた。

震える唇と、俯いているため伺えない目元。

その顔には、徐々に“笑み”が生じ始めていた。

「くっ」

小さく零した、声。

その声は “歓喜” のものだった。

「ははははははっ！」

両手で腹を抱えて、大きく笑う。

慟哭にも似たその声は、絶えることなく空へ伸び続ける。

「漸く、漸くだ。

見つけたぞ

“アズイ”ッ！」

憎悪と憤怒で爛々と光る、薄茶色の双眸。

その暗い感情を押し込めると、クリフは一人、村の外に走り出した。

目指すは東。

アズイ達の本拠地がある、洞窟だ。

十

急遽酒屋に集まったメンバー達の表情は、明るいモノとは言えなかった。

「そうか……」。

クリフはどこにも居ない、

そして最後に行ったのは、牢屋……だな？」

「う、うん」

アストルの声に、アレナは不安を押し殺しながら頷いた。

アストルは、その声を受けてファングに視線を移す。

「出立だ。」

洞窟へ行くぞ」

「え、でもクリフは……」

アレナの、疑問の声。

ファングはそれを受けながら、席を立ち背中を見せた。

「盗賊の頭目は、

……“黒鬼”のアズイだ」

「え？」

それって、そんな、それじゃあ！」

アレナも急いで、馬車へ向かう。

ナーリヤと千里は、話しについて行けずに首を捻りながらも、その後が続いた。

駆け足で馬車に乗り込むアレナ達に追いつくと、自分たちも急いで馬車に乗る。

御者台にはアストルが乗り、馬の手綱を引いて駆けだした。

その、旅のために広く作られた馬車の中では、重い空気が漂っている。

その空気に絶えられなかったのか、千里は恐る恐る声を出した。

「いつたい、どうしたの？」

「あ……、

そ、そっか、ごめん。

……団長」

アレナは、事情を説明しても良いものが、ファングに視線を向けた。

その声に、腕を組んで目を閉じていたファングは、小さく首を縦に振る。

「クリフはね、

団長に拾われる前は、ある盗賊団にいたの」

アレナは、目を伏せてそう語り出した。

仲間の過去を話すことは気が引けるが、それは話すなと言えないところに行ってしまったクリフが悪い、と小さく前置きをして。

「赤ん坊の時に拾われて、

正しいとは言えないけれど、信頼する兄弟達に囲まれて暮らしていた、ってね」

他ならぬクリフから聞いた、彼の過去。

その思いを紡ぐアレナの唇は、小さく震えていた。

「盗賊団にもルールがあつて、

むやみやたらに殺さない、とか。

仲間達は裏切らない、とか。

「そんなのが少ないけれどあるんだ、ってクリフが言ってた」
「盗賊団の、ルール」

働く場所を失い、途方に暮れた者達は犯罪に走る。

どうしようもなく薄汚れた家業だけでも、生業とする以上はルールがある。

それは、底辺の世界で生きる者達の “プライド” だった。

リアルの世界。

フィクションではないから、悪は一概に“悪”とは断言できない。それでも彼らは“悪”なだと、千里は胸に刻みつける。

光を掴むことを諦めてしまったから、彼らは“悪”になってしまったのだ。

212

「でも、そのルールを破る者が、現われた」

「それが……アズイ」

ナーリヤが、音にしてその名を出す。

まだ見ぬ敵……黒き鬼の異名を持つ、盗賊。

「アズイは、己の破壊衝動のままに、他の盗賊を襲った。

その中に、クリフが所属していた盗賊団もあったそうよ。

……苦楽をともにした兄弟も、“父”と呼び慕った頭目も、全て殺された」

その言葉に、ナーリヤは目を伏せる。

部屋でクリフとした会話。

未だフアングを父親と呼べないのは
まだ、“彼”の影があるからだろう。

「根強い憎悪に、突き動かされる。

それがわかりきっていたから、せめて仲間で迎え撃つ状況が欲しかった。

時間もあんまりなかったから……でしょ？団長」

フアングは、答えない。

ただ目を閉じて、じつと精神を集中させていた。

「そろそろだ」

御者台から聞こえてきたアストルの声に、ナーリヤ達は顔を見合わせて頷く。

当初の作戦からは大きく外れてしまったが、それでも、進まない訳には行かなかった。

「さあ、往くぞ！

牙の団よッ！！」

立ち上がったフアングの声が、洞窟へ続く森に響き渡る。

敵を包囲殲滅できないのなら、向かってくる敵を全員、蹴散らすだけだ。

「千里」

「大丈夫。

殺さずに、戦える」

覚悟は出来た。

“殺さない”覚悟の下、他者を傷つける。
仲間を、友達を、守るために。

「行こう、ナーリヤ！」

「うん、行こう。千里！」

森を、駆ける。

仲間を救い出し、敵を討ち斃すために。

十

洞窟の横。

見張りをしている男が二人、崩れ落ちる。

「ふう」

洞窟の前に立ったクリフは、腰に仕込んでいたスロウイングナイフを遊ぶ。

クリフの足下に倒れ伏す男たちの喉には、鮮血と銀の刃が、鈍い光を放っていた。

「アズイ」

強く歯を食いしばり、憎悪に淀んだ目で洞窟を見る。

半地下に続く巨大な穴は、地獄の門のように暗く深淵を見せていた。

クリフは躊躇うことなく、その穴に身をゆだねた。

跳躍し、三メートルほど下の地面に着地する。

すると、所々に括り付けられたランプが、地下水でぬめる岩肌を映していた。

「どこだ」

ただ一人、生き残った者。

隠されて、逃がされて、家族を失った自身の過去。

その全てに、今日、終止符を打つ。

「人が、いない？」

いくら進んでも、人の姿は見えない。

目凝らして、周囲を観察して……気がついた。

「へえ、

まだ俺に、こんな“イイ”風をくれるヤツが残っていたか」

見えなくなった、クリフ。

だがそんなことは関係ないと、アズイは棍棒を振り払った。

「ぐっ」

「軽いんだよ、間抜けえツ！」

進行方向を“勘”で予測したのだろう。

左腕を擦られて血を流しながら、クリフは後方に飛ぶ。

「疾ッ！」

それでも、ダメージをただ受けるだけという状況には、ならないようにする。

後方に飛びながら投げたナイフが、追い打ちを変えようとしたアズイを足止めた。

「ヒュー、やるなあ」

楽しげな声。

暗がりから出てきたのは、大柄な男だった。

左半分が黒く、右半分が白いモノクロの頭。

傷だらけの顔は、左目に走る大きな刀傷が、目を潰している。

その身に纏われた重厚な鎧は、騎士から奪ってきたのか薄汚れた白色だった。

「親父　アンタの足搔き、俺が生かす！」

潰れた左目。

逃がされる直前に見た、父親の決死の一撃が遺した、傷。

「だああああッッッ！」

洞窟内で音を反響させて、自分の居場所を解らなくさせる。

「気配を消すことを得意とするアストルから教わった、音響疾走術、
“哭音”だ。」

「ああ、この傷が、父親のつて？」

弱小盗賊団の、生き残りか」

この期に及んで仲間を貶され、クリフの憎悪が膨れあがる。

アズイはその殺意から 気配を、読んだ。

「そこオツ！」

左側に棍棒を振る。

だが、その鉄塊は空を切った。

虚空に振られた鉄は、ただその空間に轟音を残す。

「なに？」

「壁へき駆か」

クリフは、アズイの左側の“壁”に向かって、一直線に走っていた。
た。

そして、わざと殺意を感じ取らせて、同時に壁を蹴っていたのだ。

大振りの一撃を放ち、隙の出来たその一瞬。

それこそが、クリフの狙いだっただ。

「
疾閃^{しっせん}」

壁を蹴る反動で、風に乗る。

すれ違い様に敵を屠る、超高速の一撃。

それが、クリフの編み出した、“壁駆疾閃”だ。

ガキインッ

だが、その一撃は、金属音によって防がれる。

「間抜け」

そして、確かに首筋に当たったはずの一撃を跳ね返され、呆然とするクリフに慈悲のない声が放たれた。

「死ね」

鉄塊が、振り下ろされる。

もう避ける隙も無く、せめて最後までこの男に負けまいと、睨む。鉄塊を振り下ろすアズイの目は 昏く、歪んでいた。

「さアセエんぞオオオオオッッ!!」

その最後の一撃は 紅いマントの巨体によって、弾かれた。重厚な鎧、真紅のマント、牙を模した大きな斧。

「俺の仲間はやらせんぞッ!」

「なにっ?!」

大きな身体に見合った、台風のように豪快な動き。
体勢を崩すことなく絶妙なバランス感覚の下振られる、斧捌き。

牙の団、団長　フアングの実力だった。

「俺のパワーに、追いつくのかッ?!」

「種族の力に自惚れた貴様が、この“俺”に敵うと思ったか!

“オーガニツクヒューマン”よッ!」

オーガニツクヒューマン。

絶大な力を持つ種族、オーガ鬼と人間のハーフ。

その力は岩を割り、その肌は刃を弾く。

嵐のような攻防を、クリフはただ、呆然と見ていた。
そんなクリフに、追いついてきたアレナが近づいた。

「【水よ、癒せ】」

「アレ、ナ」

虚空に出現した水球が、クリフの左腕を覆い始めた。

クリフが周囲に目を移すと、そこではフアング達を追いかけた盗賊と、千里達が戦闘をしていた。

「はあっ!」

千里の振るう大剣。

その“腹”が、鈍器のような役割を持ち、盗賊を吹き飛ばす。

大振りの隙を突こうとする盗賊はナーリヤに片付けられ、そのナーリヤに近づこうとする敵はアストルに切り伏せられていた。

「さて、と」

「あ、すまん、アレ……」

パンッ！

「……ッ」

腕が治り礼を言おうとしたクリフを、アレナが叩く。
平手で頬を打たれて、クリフは何かを言うより前に、息を呑んだ。

気が強く、いつも飄々していたアレナが　涙を、流していた。

「一人で突っ走って、

ちよっと見返せて、

あわよくば相打ちになつて、

そりゃあアンタは満足でしょうね！」

涙を拭うこともせず、アレナはただ想いをぶつける。

一人で死にそうになった仲間　　家族へ、想いの丈を叩きつける。

「でも、でもさ、

そしたら、私たちは、どうすればいいの？

仲間を失って、仇を討って、それでもアンタは帰ってこなくて」

消え入りそうな声は、悲しみに震えていた。

どうしようもなく、弱々しい女性の姿が、そこにあった。

「アンタは　、

クリフは、そんなに私たちが信頼できない？

一人で突っ走るほど、私たちを裏切るほど、信用できない？

仲間だと、“家族”だと思っていたのは、私たちだけ？」

仲間であり、家族。

それが、豪快な“父親”であるファングの下に集まった、“牙の団”の姿。

信頼できる絆を持つ、冒険者団なのだ。

「ごめん、俺、

ごめん、ごめんっ！

ありがとう、 “姉さん”」

「うん、うんっ！

本当に、無事で良かった」

クリフは、アレナにしがみついて涙を流す。

ただただ、家族の温もりもを求めるように、声を上げる。

失ってきた時間の全てを再び得たことを、実感するために。

血の繋がりが無くても、そこに絆はある。

だから彼らは、“家族”といえる、仲間だった。

「さて……全部片付ける」

「アレナ？」

二人のやりとりを見て、涙を浮かべて感動していた千里とナーリヤ。

端から聞いていて、頬を緩めていたアストル。

そして、しがみついて泣いていたクリフが、顔を引きつらせた。

「私の怒り、この全て、遙かな水に捧げよう」

頭は冷静に、冷たい水で理性を覆う。
心は熱く、灼熱のマグマで感情を満たす。

「【水よ、水よ、水よ】」

水球が、宙に浮かぶ。

一つが二つ、二つが四つ、四つが八つ。

「【水よ、水よ、水よ】」

際限なく増えた水は、徐々に洞窟を埋めてゆく。

戦闘の邪魔にならないそれを不思議に思いながらも、止める訳には行かず戦う盗賊。

それを捌きながら、千里達は顔を引きつらせていた。

「【水よ、水よ、水よッ！】」

張り上げられた声と共に、三十を超える水球が膨れあがる。

ゴルフボールサイズだったはずのそれは、いつのまにかバランスボールほどまで巨大化していた。

「【水よ、水よ、縛鎖の水よッ！】」

我が怒りに従い、その身を変えよ！

今ここで、全部纏めて“檻”になれええええええッッ
ッ！……！】」

叫び声のような詠唱と共に、水球が盗賊達に襲いかかる。

その光景に恐れを成した盗賊達は逃げ惑うが、一人残らず水に吸収され、閉じ込められる。

「ひいっ」

「た、たすけっ」

「あぶぶぶぶぶぶ」

「うあわわわあぁっ」

まさに、阿鼻叫喚とも言える光景。

その最中、剣を収めた千里は息を吐いた。

「すごいね、なんか」

「うん、すごい」

弓を降ろしたナーリヤも、千里に並ぶ。

気がついたら周囲に敵はおらず、アズイはファングによって体力を削られ、やはり水球に捕らえられていた。

「さて、どうする？クリフ」

ファングが、威厳を含んだ声で問いかける。

このまま憲兵に引き渡すか、それともこの場で切り捨てるか。その問いかけに、クリフは首を振った。

「こいつを殺して、何かが帰ってくる訳じゃない。」

俺はもう、なんか　　こんやつ、　　“どうでもいい”」

その言葉に、水球の中で聞いていたアズイは目を見開いた。

それは、侮辱だ。全ての人間の中へ自分の存在を刻みつけてきた、“黒鬼”への侮辱。

何よりも大きな、辱めの言葉だった。

「……………ッ！……………ッ！ッ」

声を出ることが出来ずとも、その憎しみは伝わる。

その歪んだ表情を、クリフは無感情な目で一瞥すると、踵を返す。

これがクリフの “復讐” だった。

興味を無くし、忘れ去ることこそが……。

「アストル、

一足先に憲兵を呼んできてくれ」

「わかった。

まあ、ゆっくりと帰ってこい」

フアングに言われて地上に昇ると、盗賊が持っていた馬に跨る。

思い思いに歩き去ろうとする一団を、アズイは狂った目で見ていた。

「……ガアアアアアアアアツツツ！！！」

檻を破り、疾走する。

その手には何も持っていないが、持ち前の怪力は人間くらいなら、潰すことが出来るだろう。

一直線に向かう先は、アレナに支えられるクリフだ。

クリフを助けようと、ナーリヤが弓を構え、アストルが馬を降り、フアングが斧を振り上げる中……誰よりも早く動いたのは、千里だった。

千里は、ずっと考えていた。

人を殺さず、解決する方法を。

ナーリヤが “好き” だと言ってくれた方法を、求めていた。

「来て」

「死ねえええええっ！！！！」

手の中に、光が生まれる。

この“力”なら出来ると、千里は本能で感じ取っていた。

「イルノ＝リウラスー 光より顕れる者”よ！

私に応えて、その力をここに示せ！」

洞窟内を覆い尽くすような極光。

振り下ろされながら形成される光の剣が、アズイの身体を斜めに切る。

その切り口から溢れ出るのは、鮮血ではなく目映い光だった。

光はやがてアズイの身体に広がり、そして収まる。

「いんちん理よ、悪を絶て」

そして、アズイの身体が崩れ落ちた。

その瞳に、狂気はない。

ただ、“悪意”の抜けた、呆然とした表情だけがあった。

「光の、魔法？」

アレナの声が、小さく響く。

振り払われた闇に佇む、光の剣を携える少女。

その姿はどこか “おとぎ話の勇者”のようだった。

二章 第四話 物語に剣を持つ者（後書き）

次回で第二章を終えて、次々回で第三章に入ります。

第三章は、少し緩めのお話になる予定です。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

気に入っていただけましたら、拍手の方も是非ご利用ください。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。

次話もどうぞ、よろしく願います。

二章 第五話 宿場街アロイア

あの後、しばらくして憲兵が到着し、盗賊たちは連れて行かれた。彼らに待つのは、永遠に続く強制労働だ。

そうして村に帰った千里は、なにも追求されないことに首を捻っていた。

「ふふ、気になる？」

そんな千里に声をかけたのは、まだ目が赤いアレナだった。気になりはするのだが、聞くのが怖い。そんな感情にぐらついて、千里は目を伏せた。

「答えは簡単！」

“仲間”だから

「え？」

仲間だから。

苦楽をともしした、“仲間”だから、助けてくれた“力”を追求したりはしない。

「ま、余所ではちゃんと、

“光の魔法”で通すんだよ？」

「あ……うん。

うんっ、ありがとう！アレナ」

アレナの言葉に、千里は何度も頷く。

次の街で別れてしまう、短い旅路。
だがそれでも、この時、彼女たちは確かに“仲間”だったのだ。
遠く離れた地へ行こうが、それは変わらない。

そう　　不変の“絆”だった。

盗賊を倒した翌日。

早朝から、千里達は村を出ることになった。

村から恩赦を貰い、次の街へ移動するファング達の馬車に、一緒に乗せて貰えることになったのだ。

「でも、いいの？」

アロイアまで送ってくれる、って」

千里が、隣に座るアレナに、恐る恐る訊ねた。

馬車で酔ったことが根強く残っているのか、千里は借りてきた猫のように大人しい。

「そんなこと気にしなくて良いわよ。

私たちの向かう街と方向は変わらないし、

なにより、私たちが“こう”したくてしているんだから」

快活に笑うアレナの様子に、千里も笑みを返す。

手助けがしたくて、しているのだ。

そう言われると、どこか照れくさい。

「それで、チサト」

「なに？」

わざわざ一拍おいて声をかけるアレナに、千里は首をかしげる。

なんだろうと疑問に思い、やがてアレナの視線の先を見て、顔を引きつらせた。

「なーんか二人とも、
距離が近くなってなーい？」

そして案の定、アレナの指摘はナーリヤとのことだった。
確かに距離は近くなった。

だがそれは、仲間の“絆”の大切さが身に染みて、信頼が強くな
ったというだけのことだ。と、千里は思っていた。

「友達で “仲間” だからね」

だから千里は、胸を張る。

疚しいことはない、胸を張って笑って見せた。

「ふふ、

そっか、うん」

その千里の答えに、アレナは優しく笑う。

自分たちの思いが、接している内に広がっていた。

それがなんだか、嬉しくて、小さな笑みを零していた。

「おーい、

昼休憩にするぞ」

「はーい」

御者台から聞こえてきた、クリフの声。

その声にアレナは返事をして、千里の手を引く。

「さ、いったん降りましょ」

「うんっ」

馬車から降りて、草を踏む。

昼食の調達と馬の休憩のために、一休みだ。

「さて、と。」

昼食に何か取ってくるよ」

「あ、ナーリヤ！」

私も一緒に行っても、良い？」

ナーリヤが狩りをしているところを、千里は見たことがなかった。そのことに気がついて、一度見てみたくなったのだ。

もちろん、邪魔になるようならついては行かないが、ナーリヤは笑って頷いた。

「うん、良いよ」

「ありがとう！」

「それなら、

ついでに木の実でも取ってきて！」

「うん！」

アレナに言われて、頷く。

みんなが何かしらの役割を持っている中、やることのないのも申し訳なかったので、この申し出は願ってもないものだった。

千里がナーリヤの隣に並ぶと、ナーリヤは千里に歩幅を合わせる。その様子を、アレナとクリフは微笑ましそうに見ながら、アストル達にその場を任せて薪を取りに歩いて行った。

中天にさしかかった太陽が、森を照らす。

木々の新緑に遮られた陽光は、木漏れ日となって静かに大地を温めていた。

その木漏れ日を手で遮りながら、千里は森を見る。

木の実を探すのは良いが、どれを取ればいいのか解らずに、ただ首をかしげていた。

「ナーリヤ、あれは？」

「うん？」

ああ、あれは“ランクト”だね」

千里が指をさしたのは、緑色の大きな果実だった。

周囲に見える小さなモノよりもあからさまに目立つ果実で、大きさは千里が抱えられるほどもある。スイカよりも、一回り小さい程度の大きさだ。

「けっこうおいしいよ。」

「……それっ！」

ナーリヤは、果実のへたを弓で落とす。

一目見ただけで位置を把握し落としてしまうその腕前に、千里は大きく拍手をした。

「おおっ！すごいー！」

「あはは、

ありがとう、千里」

ナーリヤは照れ隠しに笑うと、控えめに礼を言った。

狩りはナーリヤの“誇り”だからこそ、褒められれば嬉しい。

ナーリヤは落ちてきた果実を拾うと、腰から引き抜いたナイフで切る。

獣を解体する時などに使う、専用のナイフだ。

「よっ、と。」

「はい、どうぞ」

「わわ、

あ、ありがとう」

ナーリヤはその大きな果実に、斜めにナイフを入れた。

そして、端の方を削り取り、半円状の果実の表面を、千里に渡した。

「……うん。」

おいしい。林檎、かな？」

丸くて緑色の果実を、嚙る。

口の中に広がる味は、やや酸味の強い林檎だった。

「リンゴ？」

千里の故郷の食べ物？」

「うん、そうだよ。」

パイにして食べると、美味しいんだー」

駅前のパン屋に売っていた、手作りアップルパイ。

甘味の利いたその味を思い出して、千里は蕩けた笑みを浮かべた。女の子にとってのスイーツは、生きるのに必要な栄養分なのだ。

「それなら、

大きな街に行った時にでも食べてみようか？」

「え？」

「……あ、あるのっ?!」

この世界に来て数日経つが、千里はまだ“お菓子”というものに触れていなかった。

ミドイル村のレネやメリアも、欲しがるような仕草や食べているところは見られなかったというのが、大きいだろう。

「ラクトパイっていったかな？」

爺ちゃんに連れられて行った王都で、一度食べたことがあるんだ。火を通すと実がすごく柔らかくなって、美味しいんだよ」

「うわぁーっ!」

「なんだか、お腹減って来ちゃったよ……」
「それもそうだね。」
「そろそろ獲って、戻ろう」

ナーリヤが先導して、森の深くへ入る。
時折空を見上げては、視線を下に落としたりしていた。

「どうして下を見るの？」

「マクバードウは知ってるよね？」

あんな感じで周囲に溶け込む鳥なんだけど、
空の色に合わせて体毛を変化させる鳥がいるんだ」

話しながらも、下を見続ける。

そして、おもむろに足を止めた。

「“ソルオード”っていう鳥だね。」

空に应じて姿を変えなければならぬから、
ゆっくりと飛ぶんだ。こつ、ふわふわとね」

落とすには簡単な速度だ。

だが、目に見えなければそもそも当たらない。

「だから、影を見るんだ」

「影って、

……………あ」

ナーリヤの視線の先。

そこには、薄く影があった。

よく注意しなければ解らない、小さな影。

それを一瞥すると、ナーリヤは素早く弓を構えた。

「それ！」

風を切って矢が飛来する。

獲物を必要以上に傷つけないようにしなければならぬため、力を調整して放つ。

そうして放たれた矢は、宙に浮かぶ透明な獲物を、見事に打ち落とすとした。

「すっごーい……！」

すごいよ！ナーリヤ！」

その腕前を、人間以外に使うのを見るのは初めてだった。

黒帝の時は、獲物が大きすぎてそもそも腕が解らなかつたのだ。

「ナーリヤは、なんでも知ってるんだね」

「僕が知っているのは、

爺ちゃんから聞いたことと、森のことだけだよ」

セアックから聞いた、様々な知識。

そして、自分が狩人として生きてきた、森のこと。

それが、ナーリヤを象る知識だった。

「森を知らない者は、森に殺される。

森を知る者は、森に救われる。

森を侮る者は、森に裁かれる。

森を敬う者は、森に恵まれる」

更にもう一羽、ソルオードを落とす。

それを籠に入れながら、ナーリヤは歌うように言葉を紡ぐ。

「狩人よ、森を知れ。

さすれば汝は、導かれる。

狩人よ、森を識れ。

さすれば汝は、得られるだろう」

それは、“教え”だ。

森を生き抜くための狩人に伝えられる、言葉。

森に生き、森に生かされ、森と共に生きる者達への、たった一つの教典。

それが、この“詩”だった。

「爺ちゃんが僕に教えてくれた、心構え。

僕が森で生きるために、僕に伝えてくれた言葉」

最後にもう一羽、空色の鳥を落とす。

そして、構えていた弓を降ろして、ぼんやりと聞いていた千里に振り向いた。

「僕の大切な

たからもの
“記憶”だよ」

そう言って笑う姿は、“誇り”に満ちていた。

全てを失った少年が得た、尊い“誇り”が、そこにあった。

「すごく

……うん、すごく、素敵だね」

だから千里も、笑う。

自身の“友達”を誇るように、見上げて大きな笑みを見せる。

「ありがとう、千里」

「どういたしまして、ナーリヤ」

見つめ合って、笑い合う。

新たに築いた、信頼の絆。

その出逢いと巡り会いに感謝して、暖かい笑みを交し合う。

「もどろつか、千里」

「そうだね。」

それ、どうやって食べるのが美味しいの？」

「香草で香りをつけて焼くと、

ぐっと美味しくなるんだよ」

再び並び立つ。

先ほどまでとは違い、ほんの数センチで、手と手が触れ合う距離だった。

近くなった距離に、二人は気がつかない。

だがその姿は、周囲の緑に優しく見守られていた。

馬車が進んで、更に時間が経つ。

空が茜色に染まる頃、夕暮れ時には街が見え始めた。

「見えるか？」

あれが、アロイアだ」

御者台のクリフの言葉に、千里は窓から身を乗り出した。障害物もなく、まっすぐ伸びる街道のその先。夕焼けを反射して輝く、石造りの塔が見えた。

「きれい」

小さくそう呟くと、ナーリヤに手招きをする。

ナーリヤも千里の後ろから身を乗り出すと、その光景を目に収めた。

「うん、すごく綺麗だ」

色々な場所に連れて行かれたのは、ナーリヤが十六歳の時だった。今からもう、二年前。記憶に新しいはずのその光景は、前よりも一段と輝いて見えた。

「ナーリヤ、あの塔は？」

「あれはギルドだね。」

「魔法で造られた塔だって、爺ちゃんから聞いた」

大地の魔法を操る魔法使いが、恋人への“愛”を叫びながら建てた塔。

その塔がギルドに買われる前から街にあり、無名の街はその塔の名前をとって“アロイア”となった。

ナーリヤは塔をじっと見つめながら、千里にそう説明をする。

愛の証明として、ナーリヤどころかセアックが生まれるよりも前に建てられた塔。

その名は、“アレア＝ロイア”という女性の名前から、アロイアと名付けられたのだと謂われている。

「そうなんだ。」

「うん、なんか、素敵だ」

その想いは、どうなったのか。

それはわからないが、街の名前になるほど残り続けた塔だ。

その愛の結末は、幸せなものだったのだろうか。

「さて、到着だ」

クリフが、馬車を止める。

馬車の窓から身を乗り出して、近づいてきた街を見上げていた二

人は、慌てて降りた。

自分たちの馬も馬車から放して、横に並ぶ。

開け放たれた街の門。

その前に、牙の団が並ぶ。

「フハハハハッ！」

俺は楽しかったぞ！ナーリヤ！チサト！」

別れのその時まで、ファングは豪快でおおらかだ。

大きく笑うその姿に、ナーリヤと千里も笑ってみせる。

「僕も、楽しかったです」

「私も、です！」

控えめに礼を言うナーリヤと、負けじと身を乗り出す千里。

その二人の姿に、ファングは優しい目で頷いた。

「ふむ、良い腕だった。

また会おう、ナーリヤ、チサト」

顔を引きつらせたような笑みは、彼の贅辞を表していた。

口数は少なかったが、アストルはいつも、影からフォローをして
くれていた。

「はい、また！」

「絶対、会いましょうね！」

静かな声には、元気な声を。

若い元気な様子に口を綻ばせるアストルは、三十代には見えない。

「楽しかったよ、チサト。」

それからナーリヤ。アンタは、もっとチサトを“見て”上げなよ？」

「あ、アレナ!？」

最後の最後まで、一言からかおうとするアレナ。

それは、“最後”ではないのだから、しんみりするなというメッ
セージだった。

「う、うん？」

解った、しつかり見ておくよ」

「な、ナーリヤっ?!」

見ておかないと無茶をしそうだ。

そんな意味で言った言葉なのだが、状況が千里の顔を赤くする。

「ふふふ、

はははははっ」

「アレナ!もうっ!」

別れの悲しみは、もうそこにはない。

ただ旅に戻り、再び巡り会うことを望むだけ。

帰る手段が解ったら、絶対に会いに行こう。

千里はそう、強く決心した。

「あー、なんだ。」

色々ありがとな。助けられた」

最後は、クリフだ。

クリフは頭の後ろを搔いて照れを隠し、目を逸らしていった。やはり彼は、みんなの“弟”のような、存在だった。

「で、なんだ。」

「これ、貰ってくれないか？ナーリヤ」

「これは……」

クリフが差し出したのは、一振りの短剣だった。復讐のために磨き続けた短剣は、もう必要ない。

「新しい自分として、スタートしたい。」

「だからこれは、貰ってくれないか？」

“仲間”に預けることで、過去と決別がしたい。言外にそう伝えるクリフに、ナーリヤは頷いた。

「うん、解った。」

「ありがとう、クリフ」

「礼を言うのはこっちだ。」

「ありがとうな、ナーリヤ」

皮の鞘ごと、ナーリヤは短剣を受け取った。

そしてどちらからともなく、厚い握手を交す。

「また会おう、ナーリヤ、チサト」

「うん、また会おう、クリフ」

「またね！クリフ！」

手を離すと、馬車に乗り込む。

走り出した馬車の窓から、アレナが手を振る。

千里とナーリヤは、馬車が見えなくなる前で、そうして手を振り続けていた。

「さ、行こう。千里」

「うん、ナーリヤ」

並んで歩き、同時に門を潜る。

元の世界へ帰る、その情報を求めて。

二人は、宿場街アロイアへ “前” へ進むための一歩を、踏み出した。

二章 第五話 宿場街アロイア（後書き）

第二章は、これで終了です。

次回第三章は、あまり重くない展開のお話を、書いていこうと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

気に入っていただけたら、拍手の方もお気軽にご利用ください。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

次話もどうぞ、よろしく願います。

三章 第一話 幸せを運ぶモノ

夕暮れに照らされた町並み。

転がる毛玉。

夜に向けて、酒屋の明かりが灯り始める時間。

跳ねる毛玉。

子供達は名残惜しそうに手を振り、家に帰っていく。

溢れる毛玉。

宿を探している間、千里はアロイアの街を、呆然とした目で見ていた。

なにかを言おうと口を開けて、結局言えずに、もごもごと口を閉じる。

「毛玉、だよな？」

夕焼けで朱色に染まる、大きな噴水。

その前に立っていた千里は、周囲を見ながら何度も首をかしげる。普段なら教えてくれるナーリヤは、まだ戻ってこない。

それ故に、千里には疑問ばかりが溜まっていた。

街に溢れる、大きな毛玉。

ふかふかと柔らかかそうな毛玉は純白で、どうにも奇妙だった。

子供の腰ほどもある巨大な毛玉に対して、不思議に思う人は見あたらない。

誰も彼もが、その毛玉を“当たり前のもの”として、受け入れていた。

「うう、

ナーリヤ、かむばくつく」

肩を落として、項垂れる。

大きな街だからか、猫耳の男性や羽の生えた女の子などが歩いているが、それに関しては“ふぁんたじー”だと、千里は自分に言い聞かせていた。

だが、謎の毛玉をスルーすることは、できなかった。

千里のため息が、夕日に溶ける。

ナーリヤが戻ってきたのは、それから十五分ほど後の、事だった。

噴水から離れた千里は、宿屋の前で首をかしげた。

毛玉のことを聞く前に、ナーリヤが申し訳なさそうに手を合わせ
ていたからだ。

その表情がどこか気まずそうで、それが妙に新鮮でもあった。

「一部屋しか、なかった？」

そう。

余っている部屋は、一部屋だけ。

海を渡る人間が多い時期なため、ナーリヤ達の持ち金で泊まれる
部屋は、一部屋しか見つからなかったのだという。

「うん、ごめんね。」

その、同室でも、いいかな？」

ナーリヤと、同室。

思いも寄らないそのシチュエーションに、千里は顔を赤くして目

を丸くした。

年頃の少女としては断るべきなのだろうが、そうなるかどうか
が野宿である。

自分が一人で野宿なんか出来るはずもなく、ナーリヤを追い出す
のは論外だ。

「え、えーと、

うん……………へ、変なことしない、よね？」

恐る恐る、千里が聞く。

普段ならば、照れた後に“我が儘は言えない”と頷くだろう。

だが、千里はつい先ほどまで、アレナにからかわれていたのだ。

“変なこと”を聞いてしまうのも、仕方がないだろう。

「変なこと？」

だが、ナーリヤはまったく解っていないかった。

年頃の女の子は、同室は嫌がるだろう。

そんな一般常識に基づいて聞いていたのだが、肝心の“自分が何
かをする可能性”に思い至っていないかったのだ。

「なななな、なんでもな」

「あ……………」

ああっ！

し、しないよ！なににも！」

慌てて弁解しようとする前に、ナーリヤは答えに辿り着く。

顔を赤く上気させて、両手と一緒に首を横に振った。

端から見れば、初々しいバカップルである。

「そそそ、それじゃあ、入ろうか！」
「ううう、うん！私もそれが良いと思う！」

リンゴよりも赤い顔で、宿に入っていく。

その最中、千里は墓穴どころか棺まで自分で用意したような状況に、ただ呻り声を上げていた。

前途多難。

しかし前途だけではなく、道程も中々多難なようだった。

十

夕食を、宿の近くの食事処で簡単に済ませると、部屋に戻る。
二人部屋で、広さは十畳ほどある。
思っていたよりも、ずっと広い部屋だったようだ。

「あれ？」

説明よりも広いかも」

「そうなんだ？」

でも、けっこう過ごしやすそう」

宿の人にされた説明では、もっと狭いような話だった。

それは、ベッドが二段ベッドしかない事への “男女の宿泊”
への配慮だったのだが、ナーリヤはそれに気がついていなかったの
だ。

二段ベッドの上に、千里が昇る。

ベッドが二段だったり三段だったりすると、つい上に昇りたくな
ってしまふ。

好奇心旺盛な子供なら、絶対にするであろう行動だった。

「おおっ

ベッドが暖かい！」

枕に顔を埋める仕草は、幼い子供と言われても仕方がないものだ
った。

千里は、同じ部屋ということを紛らわすために無理にテンション
を上げているのだが、そんなことは当然のようにわからないナーリ
ヤは、生温かい目で千里を見ていた。

「明日からは情報屋さんを探すから、今日はもう休んでおこう。

ギルドに集まっているとは思っけど、時間はかかるだろうからね」「あ、そうだね」

千里は枕から顔を離すと、一度ベッドから起き上がる。最初に宿に入った時に重厚な鎧は外したので、後は寝やすいように、プレートのついたスカートや上着を脱ぐだけだ。

……… だけなのだが。

「ね、ねえ、ナーリヤ？」

「うん？ どうしたの？」

首をかしげるナーリヤに、千里は頬を僅かに染めながら視線を逸らす。

そして、僅かな逡巡を見せてから、口を開く。

「着替えたいから、その」

「ちよつと夜風を浴びてくる！」

言い切る前に、ナーリヤが声を張り上げた。

そして、急いで走り去るナーリヤの姿に、安堵からため息を吐く。アレナのからかいが頭から離れないせいで、何を言つにも一々恥ずかしいのだ。

「うう、」

アレナに好きな人が出来たら、絶対からかってやる！」

こう宣言している時点で、負けは決まったようなものである。

「と、着替えなきゃ」

ナーリヤを追い出したままだと言うことに気がつき、さっさと服を脱ぐ。

荷物から取り出した柔らかいズボンとシャツを着れば、簡易パジャマの完成だ。

「普段着の方が軽いけど、

……普段の鎧も、軽いんだよね」

元の世界にいた時では信じられないほどの、怪力。

帝剣アギトは子供一人分の体重ほどもあり、鍛えているナーリヤでも振り回すことが出来ない。それを千里は、片手で持ち上げ振るっているのだ。

「はあ、

人間離れ、してるよね」

帰る手段が見つかって、帰って。

その時、自分が“人間”として振る舞うことが出来なかったら、元の世界に千里の居場所はあるのか？

そんな取り留めもない思考が、ぐるぐると頭を巡る。

「お父さん、お母さん、陸人、元気かな」

顔を見ることが出来ない。

そうやって苦しいのは、残してきた人たちも同様だろう。だからせめて強くなるうと、千里は感情を呑み込んだ。

「もういい？千里」

「あ、うんっ
もういいよ！ナーリヤ」

笑顔に切り替えて、ナーリヤを迎え入れる。
ナーリヤは大きく胸をなで下ろすと、ベッドに腰掛けた。

「さて、それじゃあ僕も着替えようかな」

ナーリヤは自分自身に言うように、小さくそう呟いた。
千里が追い出してしまったので、ナーリヤはまだ鎧姿だ。

「じゃ、じゃあ私は外で」

「ああっ、ダメだよ！」

女の子がこんな時間に外に出たら、危ないから、ね？」

宿の中だろうと、やはり少女一人で歩くのは止めておいた方が良
い。

そう言われてしまえば千里に反論する術はなく、ただ赤い顔で後
ろを向く。

恥ずかしさからか、ナーリヤの言葉が完全に“子供扱い”をして
いる雰囲気だったことに、千里はついに気がつかなかった。

絹擦れの音に胸をドキマギさせながら、千里はゆっくりとベッド
に向かう。

考えてみれば、さっさと二段ベッドの上に昇って、布団に潜って
しまえば良かったのだ。

「よし、」

もういいよ、千里」

「ひゃいっ」

二段目にする階段に足をかけた体勢だったせいか、千里は妙な声で驚いていた。

もう少しで辿り着くという時は、何時だって誰だって、隙だらけなのだ。

「千里？」

「な、なんでもないよっ！」

慌てながら、布団に潜り込む。

そんな千里の様子に苦笑を零すと、ナーリヤも自分のベッドに潜り込んだ。

変則的な同棲みたいだ、と千里は小さく呟いていた。

二人とも布団に潜り込み、落ち着く。

そうすると、今度は不安が浮かび上がる。

「情報、見つかるかな？」

気がつけば、そう零していた。

声に出してみても消えることのない、不安。

考えないようにしていた、可能性だった。

「見つかるよ。」

見つからなかったら、見つけよう。

見つかるまで、一緒に探そう」

ベッドの下の段から聞こえる、優しい声。

欲しい時に欲しい言葉をくれると言うことの大切さなんて、きつとナーリヤは解っていない。それでも嬉しいと、千里は小さく微笑む。

「ねえ、ナーリヤ。」

そういえばさ、街に溢れてたあの毛玉って、なに？」

明るい話題に切り替えよう。

そう思った千里の口から零れたのは、明るいかどうか微妙な話題だった。

「毛玉……、」

え？毛玉？」

「こっ、」

ふわふわーっ、もこもこっ！とした」

千里はベッドの中で、ナーリヤには見えないのにジェスチャーをしながら説明した。

微妙な擬態語である。

しかし、意味は伝わったようだ。

「ああ、」

それは“シーラ”だね」

「シーら？」

聞いたことがない言葉に、首を傾げる。

千里の中で“毛玉”に変換されて聞こえないということは、毛玉ではないのだろう。

判明した事実、余計に千里を混乱させるモノだった。

「王国で保護指定されている動物だね。幸せを運ぶ魔獣って言われてるんだ」

魔獣である。

害はないが、魔獣扱い。

呼び名に過ぎないのならそんなこともあるのだからと、納得することは出来ていた。

「あれは、体毛がすごくふわふわしてるから、毛玉に見えるだけなんだ。

よく見ると、耳と尻尾、それから短い手足が見えるよ」

「えっ？」

あのもこもこって、犬か猫なの?!」

衝撃の事実には、目を瞠る。

どうみても毛玉なのに、千里の知っている生き物な可能性があった。

「うん？」

うん、そう、猫^{シーラ}」

「ああ、

猫さんなんだ」

しかし、猫と聞くと途端に可愛く思い始める。

ふわふわもこもこの猫である。冬場に抱いたら、至福を味わえることだろう。

「幸せを運ぶ猫だから、旅人達の多いこの街でよく見られるんだ。その幸せにあやかっつて、この旅を成功させようって、ね」

港へ行くためには、ここアロイアを経由する。

そのため、スウェルス王国の各地から、この街に人が集まるのだ。

「明日は、

ちゃんとあやかってみようかな」

「それなら、

胸に手を当てるお祈りしてから撫でさせて貰うと良いよ。
それが猫たちにあやからせて貰う時の、作法なんだ」

千里はそれを聞くと、もう明日が楽しみになってきた。
ふわふわで、もこもこ。楽しみにならないはずがない。

「ふふ、

さーてっ……おやすみ、ナーリヤ」

「うん、

おやすみ、千里」

ナーリヤの声を聞き、千里は薄く頬を綻ばせる。

そして、ナーリヤに聞こえないように、小さく呟いた。

「ありがとう、ナーリヤ」

夜の宿。

アロイアの一日目は、静かに、それでいて温かく幕を閉じた。

十

翌日、二人は朝早くから街に出た。

まずはギルドに行つて、情報屋へ依頼を

という前に。

「あやかりあやかり。」

「うわあ〜もこもこだあーっ」

まずは猫で、もふもふタイムだ。

アロイアの毛玉猫は実に大人しく、千里が近づいて祈りを捧げる間も、ただじつとしていた。

よく見れば確かに、毛玉から小さな三角の耳と、白い尻尾、そして短い手足が生えている。正面だと思わしき部分には、黒い小豆のような小さな瞳も、しかっかりついていた。

完全に球体の猫、といつてもいいだろう。

「猫さん猫さん、
猫さんはどこからきたの?」

話しかけても、当然ながら答えない。
ただじつと構えている姿は、どこか荘厳だ。

「そろそろ行くよ、千里」

「あ、うんっ」

「はいはい、ありがとう、猫さん」

苦笑するナーリヤに手を引かれて、千里が離れる。
そんな二人の様子は、どう見ても仲の良い兄妹にしか、見えなかつた。

「まずはギルドで、
情報屋を捜さない」と

「少ないの?」

「場合によっては、
他の依頼で手一杯だから引き受けて貰えないっていうのが重なる
ことがあるんだ」

重要な情報なら、誰もが我先にと求める。

その結果、一つの“大きな事”があると、そちらに集中してしま
っている可能性があった。

「まあでも、

そんなことは滅多にないからね。

たぶん大丈夫だと思うよ」

「そっか、

うん……そうだよねっ!」

千里は安心したように、大きく息を吐いた。
そうそう滅多に、そんな運の悪い状況に出くわすはずもない。

「これでも私、

けっこう運が良いんだよ」

「そっか、

それなら、心強いね。

僕も実は、それほど運は悪くないんだ。」

……などと、“異世界に招かれた”という最大の不運を柵に上げて、千里は自信満々に胸を張った。

それに同意するナーリヤもまた、記憶喪失の不運な少年だということに。

そうして二人は 。

「そんな、ことって」

「都合の悪い……」

ギルドの前で、頂垂れていた。

一ヶ月後に控えた、帝国の闘技大会。

その情報を集めようと群がる客で、情報屋は手一杯だった。

当然ナーリヤ達の、あまりない財産で引き受けてくれるような情報屋はおらず、こうしてギルドの前で肩を落とすに至ったのだ。

「もしかして、」

闘技大会が終わるまで足止め？」

千里は不安そうに、そう零す。

一ヶ月も目的無く過ごすのは、きつと耐えられないだろう。

いつも何か目的があるから、沸き上がる不安を封じ込めておけたのだから。

「いや、」

まだ方法はある」

諦めるものか、と声を上げる

セアツクからの言葉、残してくれた記憶と記録。
その中から妥当な物を見つけ出し、ナーリヤは顔を上げてそう呟いた。

そんなナーリヤを、千里は勢いよく見上げた。

「ほ、ほんとっ?!」

「うん。」

情報屋は、全てがギルドに所属している訳じゃないんだ。
だから、モグリの情報屋を当たれば、あるいは「

当然、モグリである以上、その情報屋には“何か”がある。
それでも、それは“藁”だ。掴める可能性のある、一縷の希望なのだ。

「探そう!ナーリヤ!」

「うん、絶対、見つけよう!」

立ち上がれば、あとは進むだけだ。
まだ日も高く、時間は充分ある。
だったら、探すことだって出来るはずだ。

「二人とも正確に地理を把握している訳じゃないから、
手分けはしない方が良いと思う」
「うん、合流できなかつたら意味ないもんね。
まずはどうする?」

真剣な顔で、意見を交し合う。

情報屋を捜すと一言にいつても、モグリである以上看板は掲げていない可能性が高い。

そうになると、怪しい店で片っ端から聞き込むしかないだろう。

「一度宿に戻って、武装をしておこう」

「危ないの？」

「裏路地なんかは、それなりにね」

治安が悪い街ではないが、それでも“裏側”は存在する。

その裏側に足を踏み入れようというのだから、それなりの準備をしておく必要があった。

「合い言葉は“諦めるもんか！”

……で、いい？ナリーヤ」

「うん、いい言葉だと思う」

笑い合って、拳を合わせる。

その“男の子”のような自分の仕草に、千里は小さく苦笑した。

もう、元気になっている。調子を取り戻している。だから、大丈夫だ。

千里は、不安なことなど何もないと自分に言い聞かせて、“元気を”を作る。

ここで挫ける訳にはいかないから。

ここで折れたくはないから。

自身を保つために、“友達”に心配をかけさせないために、一生懸命笑みを浮かべた。

「行こう！」

「うんっ！」

絶対に探し出す。

その新たな決意の下、千里達は走り出す。

目標は、モグリの情報屋。

人の影が溶け込む、暗い路地裏だった。

三章 第一話 幸せを運ぶモノ（後書き）

今回から、第三章がスタートです。

この章は、戦闘シーンはそこに、緩めに進めていきたいと思いません。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

気に入っていただけましたら、拍手の方も是非ご利用ください。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

次話もどうぞ、よろしく願います。

三章 第二話 路地裏の情報屋

石畳を歩く音。

一歩一歩が大きく反響し、広い部屋に響く。

ごつごつとした手が、暗闇の中で浮かび上がると、その手に持たれたマッチの炎がランプに火を点けた。

そこで漸く、男の人数が解る。

ランプを持つ男を先導に、合計七人ほどの男達。

男達は思い思いに、照らされた室内の硬い椅子に座る。

「準備は万端、だな」

「当然だ」

どこか緊張の孕んだ声に、低い声が答える。

淀みなく返事をするその男の態度に、訪ねた男は息を吐いて安堵した。

そして、喉が渴いたのか、部屋の樽に近づいて手杓で水を飲む。

からからに渴いた舌と喉を潤わす水に、男は喉を鳴らす音で歓喜を表した。

「もうすぐ、目的が達成される。

くくくく　　そうだ、もうすぐそこだ」

歓喜と興奮の入り交じった、声だった。

反響する笑い声は仲間達に伝染し、いつしか部屋は欲望の音で満

ちていった。

「ふ、ふふふ

ふはははははっ……げほっげほっ

「ああ、アニキ！」

ランプを持つていた男が笑いだし、そして咽せる。

その男を、小柄な男が支えて、灰色の髪の大柄な男が背中をさす
った。

「す、すまねえ、

とにかく！目的はすぐそこだ！」

「お、おう！」

「アマリ、無理ハスルナ」

その三人の様子を、他の四人は胡乱げな表情で見る。

だが、彼らも“目的”がある以上、見捨てる訳にも行かなかった。

ランプに灯された火が、風もないのに小さく揺らいぐ。

裏路地を、歩く。

乾燥した雨のような臭いが鼻をつき、千里は小さく眉を寄せた。壁を伝う水滴が落ちて、小さな水たまりを作る。そこに足を踏み出すと、高い音を立てて水が跳ねた。

「うん、

見つからないね、ナーリヤ」

「そうだね……。」

暗くなるまでは、探してみようか」

「うん」

刻一刻と過ぎていく時間。

焦りはあるが、焦っても仕方がないという事は、解っていた。とにかく探すしかないため、千里は水を跳ねさせながら進んでい

く。

「ちょっと、

じめっとしてるね」

「そうだね。

雨でも降ったのかな？」

取り留めもない会話を交しながら、奥へ奥へと進む。

建物の背が高くなればなるほど、千里達に降り注ぐ陽光は、薄くなる。

闇の中は不安なものだが、友達の色だと思えば、千里は前に進めた。

「おい、兄ちゃん」

不穏な声が響き、千里とナーリヤは足を止める。

ナーリヤは振り向きながら、千里を背に庇うように、一歩前に出た。

「金目の物と腰の得物、置いていけ」

「その嬢ちゃんも置いていってくれんなら、

命まではとらねえぞー？」

大きな剣をちらつかせる、男達。

人数は五人で、全員がっしりとした体つきだ。

「置いていくものは無いよ」

「ああ？」

剣を抜き、その切っ先をナーリヤに向ける。
だが、森で命を賭けてきたナーリヤに、そんな“安い”脅しは通用しなかった。

「そんなら、その命、
……置いていけやッ！」

まっすぐ振り下ろされる、銀の刃。
差し込む光を受けてきらりと輝くその刃は、鈍く遅い。
ナーリヤはクリフから貰った短剣を引き抜くと、その柄頭で剣の腹を叩き、剣筋を逸らした。

「ふッ！」
ズンッ！

そして、一息。
強く息を吐いて、千里が前に出る。
風を切る音が空気を震わせ、石畳を割る音が男達を震えさせる。
男の横を通り過ぎた巨大な剣は、恐怖の象徴の様であるにもかかわらず、白く清純に輝いていた。

「痛みが欲しいなら、相手するよ」
「オススメはしないけどね」

千里が剣を振り上げて、ナーリヤが短剣を構える。
その戦い慣れした雰囲気、男達はひゅっと高い音を、喉から零した。

「に、逃げるぞ！」
「ちいっ、なんだこいつらッ」

慌てて逃げ出していく男達。

その姿を真剣な顔で見送り、やがて二人は大きく息を吐いた。

「何組目だっけ？」

「四組め、かな」

そう、こうして“カツアゲ”を撃退するのも、もう四回目だった。暗がりからやってきては、ああして脅して、結局逃げていく。

誰も彼もが同じパターンだったので、最初は困惑していた千里も慣れてきていた。

「早く見つけたいのに」

「そうだね、」

何か手がかりでもあればいいんだけど」

肩を落として息を吐く千里に、ナーリヤも同意の首肯をする。

そろそろ気温も下がってきて、肌寒くなる時間帯だ。

空が赤紫色に染まりつつあるからこそ、早く探し出したかった。

「はあ……、」

あ、こんなところにも」

荒みつつある心を癒すのは、路地裏で丸くなる猫だった。

丸くなるといっても、足を折りたたんでいるだけで、視覚的にはいつも丸いが。

「猫さん猫さん、」

なにか知りませんか？」

千里は胸に握り拳を当てて、猫に訊ねる。

藁にも縋る気持ちではあるが、本気で猫に訊ねようと思っている訳ではない。

ただ、癒されたかったのだ。

『なあー』』

低い声で、猫が鳴く。

立ち上がり千里の目をじっと見たと思うと、猫は踵を返して歩き始めた。

「ついてこいって、こと？」

「千里？どうしたの？」

どうにか効率の良い方法はないか。

そう考えを巡らせていたナーリヤは、ここで漸く千里の様子に気がついた。

千里はふらふらと立ち上がると、そのまま猫についていく。

「ナーリヤも、ほら！」

「え？え、と？」

猫を追いかけける千里を、ナーリヤが追いかける。

猫は二人が追いかけ始めると、それを待っていたかのようにスピードを上げた。

「わわ、速い！」

「ち、千里っ」

短い足なのに、風のように駆ける猫。

千里はそのもこもこな後ろ姿を見失わないように、こちらにきてから上がった身体能力を駆使して追いかけ始めた。

「よっ、とー！」

塀に昇れば飛び移り、穴を潜れば一緒に潜る。

邪魔をする大剣に四苦八苦しなから、千里は必死で追いつがった。当然、ナーリヤも一緒に、だ。

「と、止まった！」

猫は、異国の文字で書かれた看板の前で止まった。

それに合わせて、千里も足を止める。焦りも一緒にあつたせいか、息が切れていた。

「ここに案内したかったの？猫さん」

「ど、どうしたの？千里」

追いついてきたナーリヤは、千里よりも軽めだが、息を切らしていた。

千里と猫を見て首をかしげ、猫が見る方向にある看板を見て……目を瞪る。

「情報屋……」

「デイルの店」

情報屋。

その単語が、驚きとともに吐き出された。

千里もその言葉を聞いて、慌てて顔を上げて見る。

「ここが、情報屋？」

「とにかく、入ってみよう」

「う、うん」

混乱はするが、しかし良い結果には違いない。

千里は案内をしてくれた猫に礼を言おうと振り向くが、そこにはなにもいなかった。

「千里？」

「う、ううん。」

なんでもないよ、ナーリヤ」

古びた木製のドアを潜りながら、千里は霞のように消えた猫のこ
とを、一時的に頭から追い出した。

帰ることが出来るか、否か。

その瀬戸際に、挑むために。

木造の建物の、独特な臭い。
それが煙草の香りと混ざり合って、奇妙な空気を生み出していた。
歩く度に軋む板張りの床に、千里はほんのり体重を気にする。

「ちよつと、

太ったかな？」

「……剣、じゃないかな？」

「あつ」

小さく呟いた言葉は、しっかりとナーリヤの耳に届いていた。
その上で尤もなことを言われて、千里は頬を赤くする。
そういえば大剣を担いでいて、更に言えば重厚な鎧を着ているの
だ。

重くならない、はずがない。

「なんだ、おまえたち」

聞こえてきた洪い声に、千里は顔を上げる。

山のように積まれた本の中、一人佇む老人の姿。

老人は目に当てた銀のモノクルを、皺の寄った手で外す。

そして、やや鋭く眉根を上げて、散らばった本の革表紙と同じ色
の、茶色の瞳を千里達に向けた。

「あの、欲しい情報があるんですっ」

気が逸り、千里は思わず声を張る。

その声が耳に響いたのか、老人は煩わしそうに眉を寄せた。

「あ、

ご、ごめんなさい」

千里はすぐに気がついて、頭を下げる。

その横で、ナーリヤも一緒に頭を下げた。

「お願いします、

情報を、僕たちに売ってください」

誠心誠意の込められた礼から、老人は鼻を鳴らして目を逸らした。手元にある分厚い本を読み進めるために、再びモノクルをかけて、
呟く。

「ふんっ……」

何の情報を、求める？」

それは、仕事を引き受けることの、確認だろう。

千里とナーリヤは勢いよく顔を上げて目を合わせると、満面の笑みで頷いた。

そしてすぐに、その表情を真剣なモノに、切り替える。

「“流れ人”の、情報です」

千里が、はつきりとした口調でそう告げる。

自分の意志を、本気の心を、伝えておきたかった。

「ほう？」

あることはあるが、条件がある」

流れ人と聞いて、老人は少しだけ眉を上げた。

情報屋は、偽りの情報は流さない。

それは例えモグリであろうと変わらない共通の“誇り”だからこそ、老人の言葉は信用することが出来た。

「条件、ですか？」

「教えてください！」

どんな条件なんですか?!」

千里はそう、必死に声を出す。

思い浮かべるのは、家族と友達……元の世界の、大切な人達の顔だった。

「簡単だ。」

猫探し^{シラ}をして貰いたい」

「猫探し？」

老人は、聞き返した千里の声に頷く。

その仕草は緩りとしたもので、どこか惰性的なように思えた。

「ここに通っていた猫が、最近来なくなてな。

安否だけでも確かめて貰いたい。

嫌がるようでなければ、連れてきて欲しい。どうだ?」

連れてこられなかったが、元気にしていた。

そう言ってしまったえば、すぐに完遂できる依頼だった。

老人は、誰にでもそんな“簡単”な対価を要求する訳ではない。人を“見て”選ぶのだ。誠実そうな人間だから、イカサマはしないという見込みだった。

こうして、欲しい物の対価を要求し、それを完遂させた者に情報を与える。

その過程を大切にしているから、彼は金銭で取引されるギルドには、所属しないのだ。

「その猫の特徴を、教えて貰えますか！」

千里がそう、再び声を上げる。

それは依頼の受諾願이었다。

「では、契約成立だな。

俺は情報屋のディルド。

今から猫の特徴を言うから、よく聞いておけ」

「はい！あ、私は千里です！」

こっちはナーリヤ、友達です！」

千里に圧され気味ではあるが、ナーリヤもしっかりと頭を下げた。

そして、二人揃って、真剣な顔で耳を傾ける。

依頼を達成させて、情報を得る。

そのために、二人は真摯な気持ちに向けていた。

「うむ、特徴だが、まずは……」

老人 ディルドは、猫の特徴を言いつのる。

それを、ナーリヤと千里はしっかりと、記憶するのだった。

十

夜の街は、流石に危ない。

そのため、千里とナーリヤは翌日から探索を始めることになった。

そこで今日は、ひとまず大通りへ、夕飯を食べに出た。

「えーと、

千里は、どんなものが食べたい？」

ギルドに置いてあった、街の情報誌に目を通す。

千里はこの世界の文字が読めないの、ナーリヤに要望を言う形になっていた。

「えーとね……」

って、ナーリヤはなにか食べたい物、無いの？」

人差し指を唇に当てて、少し考える。

だがすぐに、ナーリヤが自分の希望を言っていないことに気がついた。

何から何までしてもらうのは申し訳なく、同時に性に合わないのだ。

「うーん……」

港が近い街だから、魚が食べたいかな」

「お魚！」

「いいよね、お魚！」

ナーリヤの希望に、千里は目を輝かせて手を合わせた。

ナーリヤの食べたいものと自分の食べたいものが重なったのだ。少しはしゃいでしまうのも、仕方がないことだろう。

「それじゃあ、」

うん、ここからだ、南東へ少し歩けば良いみたいだ」

情報誌に載った地理情報を見ながら、ナーリヤはそう言った。

顎に手を当てて距離を考え、思っていたより近くだったことに、笑顔で頷く。

「ねえねえ、」

「この辺りでオススメのお魚料理は？」

「ムニエルがすごく美味しいみたいだ。

ここに書いてある」

「ムニエルかあ……ふふふ」

今から味を思い浮かべて、千里はだらしない顔で笑う。
ナーリヤは、千里のその笑顔を見て、嬉しそうに笑った。

「うん？」

どうしたの、ナーリヤ？」

「ああ、いや。」

……もう、無理はしてないみたいだったから」

無理に作った笑顔。

不安を押し殺したその表情を、ナーリヤは見抜いていた。

そして、見抜いていながら何も出来なかった自分に、歯がみしていたのだ。

「あ

うん、ありがとう。ナーリヤ」

「僕は何もしてないよ。」

千里が自分で、持ち直したんだから」

異世界に来た不安。

その不安を打ち明けたのは、この世界で目を覚ました時のみ。

自然に零れてしまうことはあっても、千里は誰かに当たったりもせずに、耐えていた。

その強い心を、ナーリヤは素直に尊敬していた。

「ううん。」

私一人じゃ、やっぱりダメになった。

ここまで頑張れたのは、ナーリヤがいてくれたおかげだよ」

ナーリヤは、いつも千里を守っていた。

初めてできた、年の近い友人。

守りたいと思った、小さな少女。

その優しい心に、千里は“守られて”いた。

「だから　ありがとう」

「うん　それなら僕も、ありがとう」

料理屋に向かう道で、二人は同時に空を見た。

星が爛々と輝く夜空は、宝石箱のように美しい。

その夜空を心に染み渡らせながら、ほとんど同時に小さく笑った。

「人が混んできたね」

道が広くなるにつれ、人が増え出す。

千里の住んでいた都会よりもずっと狭い道は、少し人が増えただけで前が見えなくなった。

「それなら、

危ないから　はい」

そう言って差し出された、ナーリヤの手。

その大きな手のひらに、千里はそっと手を重ねた。

千里よりもずっと冷たい、右手。

その右手を温めるように、千里はほんの少しだけ強く握る。

この感謝の心が、繋がった手のひらから伝われば、きつと素敵だ。

そう思って、手を握る。

小さく繋がった二人の影は、夜のアロイアにぼんやりと浮かんでいた。

三章 第二話 路地裏の情報屋（後書き）

第二話を、お送りしました。
次回は少し長めです。

ご意見ご感想のほど、随時お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

三章 第三話 探索×猫×救出×猫

アロイアの街の早朝は、猫以外は静まりかえっている。

まだ日が昇りきっていないせいも、空は群青色で、街は薄暗い。

人の活動時間には早く、猫の活動時間にはちょうどいいこの時間。千里は、猫のように大きく伸びをして、それから欠伸をした。

「ふわ、あ」

大きく口を開けて欠伸をするのは、みっともないと普段なら考えるだろう。

だが、一々隠す余裕もないほど眠いのだ。

目覚まし時計を壊した経験があるほど、千里は朝に弱い。

「大丈夫？」

「らいじょーぶ」

口調がすでに、大丈夫ではない。

足取りもふらふらと危うく、千鳥足だ。

おぼつかない歩きを見ているとどうにも心配になり、ナーリヤは苦笑してから千里の手を引いた。

「大丈夫？」

意識がはつきりするまでは、こうしているからね

「うん、ありがほう」

やはり、心配だ。

ナーリヤはアレナに言われた“よく見ておけ”の言葉をしっかりと
思いだし、それを胸に刻む。千里と繋いでない方の手、右手を強
く握って、決意を顕わにした。

「千里は、僕が守るよ」

「うん、はい」

実はナーリヤも、疲労からか少しだけ寝ぼけていた。

そのため、数分後には、どうやって移動したのか記憶になく、二
人揃って首をかしげることになるのだった……。

やや太陽が昇り始めて、街に陽光が差し込む。
まだ人が疎らな大通りで、千里とナーリヤは依頼の猫の特徴を思
い出す。

「お腹に丸い茶色の体毛がある」

「それから、尻尾には赤いリボンが巻かれている」

「目は丸く可愛い」

「肉球は柔らかく可愛い」

ナーリヤ、千里の順番で、聞いた情報を纏める。

声を出してみると、自然にリボンが取れてしまった可能性を考え
れば、有用な情報は一つだけである。それでいいのか、情報屋。

「デイルさん、

猫好きなんだね」

とりあえずそれは解ったと、千里は深く頷いた。

確かにそれは解ったが、解っても仕方のないことだ。

「ひとまず、

一匹ずつ確かめてみよう」

「うん」

手間はかかるが、それが確實だ。

ナーリヤがそう提案すると、千里も真剣に頷く。

石畳の上に転がる毛玉を持ち上げたりするのは、少しだけ楽しみにしていた。

「猫さん、失礼します」

丁寧に祈りを捧げて、それから持ち上げる。

ふわふわの身体に指を通すというもこもこ感に、千里は緩む頬を必死に抑えた。

この柔らかな身体を前に、理性と緊張感を保つのは至難の業だった。

「違う……」

よし！なら、次！」

猫に頭を下げて、礼を言う。

猫はそんな千里を気にもせず、自由に伸びたり欠伸をしたりしていた。

小さなピンクの舌がちよろつと出る様子が、妙に可愛い。

「ふう……いけないいけない」

かいてもいない額の汗を、腕で強く拭う仕草をする。

平静に、冷静に、と意識するのは、難しそうだった。

「ナーリヤ、

そっちは……」

ナーリヤの方はどうなっているか確認しようと、千里は後ろを向

いた。

そして、石畳に転がる無数の猫、それらを調べるナーリヤの姿を見て、口を閉ざした。

まず、真剣な目で猫に祈りを捧げる。

そして、真剣な顔で優しく持ち上げる。優しすぎて、猫がくすぐったそうだ。

猫の腹を鋭い目でじっと見て、茶色ではないことを確認すると、宝物を扱うようにそっと地面に降ろす。

最後に、礼の為にこれまた真剣な表情で、頭を下げた。

「ナーリヤ……」

そんな真剣に確認しなくても、良いと思うよ？」

自分の為に真剣になってくれていると思うと、千里はどうにもむず痒いような気持ちになった。嬉しいことは嬉しいが、妙な気分だったのだ。

「ナーリヤ！」

もっと気軽に良いと思うよー？」

見かねてそう声をかけると、ナーリヤは顔を上げて苦笑する。

そして、どこか恥ずかしそうに頬を掻いた。

「なんだか、傷つけちゃいそうで怖いんだ」

柔らかい猫を抱き上げるのに、一々そんな事を考えていた。

もちろん千里も考えてはいるが、そんなに気張らなくても抱えられる。

もこもこの毛玉は、力を入れすぎると猫にダメージが行く前に毛

皮が凹んで気がつくことが出来るから、そこまで緊張する必要はないのだ。

「あはは、

えーとね……」

そもそも抱き方が妙だったので、千里はナーリヤに教えに行く。

ナーリヤの隣りに立って、近くにいた別の猫に祈りを捧げてから、しゃがみ込んだ。

「ほら、ナーリヤも」

「う、うん」

戸惑うナーリヤに、猫の抱え方を教える。

抱えるように持ち上げて、優しく腕の中に収める。

それをナーリヤに見せると、ナーリヤは一度頷いて見せた。

「ちょっと、ごめんね」

恐る恐る持ち上げて、手の中に収める。

すると猫は、呻り声一つあげることなく目を閉じた。

「ほら、

ナーリヤが優しく持ってくれたから、喜んでるんだよ」

「う、うん。

そっか………うん」

小さく笑って、猫を撫でる。

朝の光を浴びながら柔らかく笑うその表情に、千里は自身の頬が熱を持ったことを感じた。何故だかは解らないが、胸が温かくなる

ようなその感覚は、決して不快なモノではなかった。

「探索の続き、しようか」

「うん、そうだね。ナーリヤ」

優しく猫を地面に降ろして、頷き合う。

朝の一時は、一日を始める重要なスパイス。

こんな瞬間があるから、その日一日を頑張ることが出来るのだ。

「さて、

まずはこの辺りを全部、回ってみよう」

「うんっ」

石畳を踏みしめると、ブーツのプレートがカッンと鳴る。

やがてその音は重なり、アロイアの朝に響いていった。

昼時の料理屋で、ナーリヤは地図を広げた。
情報誌に付属していたことに、今更ながらに気がついたのだ。

食べている時間も惜しいと言わんばかりに、スープを飲みながら
地図を見る。

千里も同様に、パンにかぶりつきながら地図に目を落としていた。

「朝から回り続けてだいたい見たと思う」

「そうだね」

回った部分を、ナーリヤが指でなぞる。

それを千里は目で追い、探索した場所を確認していた。

「後調べてないのは……ここになる」

「ここって……」

ナーリヤが指で示したのは、地図の中央だった。

一際大きなマークで印された、アロイアの街のシンボル。

アレア＝ロイアという女性の名がつけられた建物にして、ギルド
の拠点。

「アロイアの塔、だよね？」

「うん。」

アロイアの塔、その周辺。

「ここはまだ、見ていないよ」

ギルドの周辺は、非常に入り組んでいる。そのため、迂闊に入ると迷い込む危険性があり、それ故に避けていたのだ。

だが、地図があるのなら話は変わってくる。いざ迷い込んでも、本当に“危ない場所”に出る前に、戻ってくる事が出来る。

「それじゃあ、これからギルドへ？」

「うん。それが良いと思う。」

……すみません！会計をお願いします！」

ナーリヤが店員を呼び止めて、代金を払う。

銅貨と銀貨と金貨の三種類のお金で、ナーリヤが出したのは銅貨数枚だった。

「さ、行くっ」

「うんっ」

席を立って、早速ギルドの周辺に向かう。

人通りが多い時間のためごく自然に手を繋いでいるが、照れているのは千里だけだ。

千里はそのことが妙に気に入らなくて、顔を赤くしながらも頬を膨らませていた。

ギルドの周辺は、高い塔の影響で、太陽の方向によっては薄暗くなる。

この辺りは特に人通りがある訳ではないが、沢山の猫が集まっているため、どこか賑やかに感じられた。

「これだけいても、ダメかあ」

その周辺に集まる全ての猫を調べ終わり、千里は息を吐いて肩を落とす。

視線を落としてみればそこにも猫がいて、ぐらつく千里の心を支えてくれた。

まだ頑張ろう、まだ頑張れる。

そう決意して、顔を上げる。

すると、先ほどまで肩を落としていた自分を心配そうに見る、ナリーヤの姿があった。

「……大丈夫だよ」

「でも」

「大丈夫、だから、ありがとう」

また、心配をかけてしまった。

その事実が、千里の心を締め付ける。

胸を強く掴む、罪悪感と後悔を、千里は一生懸命振り払う。

負けるもんか、諦めるもんかと、自分に言い聞かせた。

「はあ……」。

心配かけちゃダメだ。

なんて、思ってる？」

「えっ？」

どうして解ったのかと、千里は顔を上げる。

その先にあつたナリーヤの顔は、呆れているようで、千里は少しだけ腹が立った。

「あのさ、僕はやりたくてやってるんだよ？」

“友達”を支えてあげたい、心配したいって思うのは、ダメなこと？」

夜空を見上げて笑い合った“あの日”から、二人は“友達”になった。

その言葉は、その絆は、嘘だったのかとナリーヤは問いかける。

「ううん、そんなこと、ない。」

でも、でもさ……だったら私だけ迷惑をかけるのは、イヤだっ
いつも、ナーリヤは千里を助けてくれた。
笑って手を差し伸べてくれた。
優し、包んでくれた。

「私もナーリヤを助けたい。
私も、ナーリヤの力になりたいよ！」

黒のスカートの裾を、両手で強く握りしめる。
目の端に涙を溜めて、千里は抑え込んでいた感情を、吐露した。

「千里……」

「私は、頼りないかも知れないけどっ
“友達”を助けたいって、頼られたって思う。
助けて貰えばなしで心配だけかけるなんて、できないよっ！」

目尻に溜まった涙は、熱い雫となって頬を伝う。
やがてそれは太陽の光を呑み込んで、光の粒となって石畳に染み
込んだ。

その涙を、ナーリヤは指で拭う。

「千里は、泣いてばかりだね」
「だれの、せいであっ」

呂律が回らず、曖昧な発音で声が出る。
時々喉の奥からしゃくり上げて、ただ、自分で拭うことなく涙を
流し続けていた。

「ああ、僕のせいだね。
うん、僕のせいだ」

そう言うナーリヤの顔は、千里が見たどんな表情よりも“穏やか”なものだった。

千里の涙を左手の指で拭いながら、右手で髪を梳かす。
手に絡まる柔らかい茶色の髪を一房掬い上げて、指の間から流すように落とした。

「僕はね、千里。

ずいぶんと、千里に助けられているんだよ？」

「ふ、え？」

涙を拭いながら呟いたナーリヤに、千里は顔を上げて見た。
穏やかで優しい表情。ナーリヤという少年の、顔。

「爺ちゃんがいなくなって、僕は一人村に残された。

爺ちゃんが僕の目標で、僕の憧れで、僕の記憶で、僕の全てだった」

自分は“からっぽ”だと気がついた、何も持たない“少年”が、その心を埋めるのには沢山のものが必要だった。

ただ混乱し、ただ無感情に生きた半年。

寡黙で無表情な養い人の優しさに触れ、家族となるまでの時間。
それが大切だと思ったから、ナーリヤはセアックに、それを返したいと思っていた。

「でも、爺ちゃんはいなくなった。

寿命を迎える前に、せめて一矢って、森へ行ったきり」

追いつがり、気絶させられ、起きたら血塗れの“家族”に全てを託された。

村に住むための家、生活していくための財産、色褪せるだけで増えはしない思い出。

「爺ちゃんが生きて欲しいと願ったから、僕は生きていた。でもやっぱり、爺ちゃんと同じ状況になったら、僕は森の主に挑んでいたと思う。」

「ううん……絶対に挑んで、一矢報いて、命を落としていた。それでいいって、それで漸く爺ちゃんに会えるんだって、思ってた」

震える声、波打つ音。

ナーリヤが誰にも打ち明けずに、胸の中にしまっていた感情。早くセアックに会いたくて、ただそれだけで“諦めた”想い。

「ナーリヤ」

「でも、でもさ。」

そうしたら、千里に会えたんだ。始めて、生きていたって、生きて一緒に笑い合いたって思える人と出会えたんだ」

ナーリヤは、千里の肩を掴む。そして、千里と視線を合わせた。

「千里は僕の」

命の、恩人なんだ」

だから、ありがとう。

そう、虚空に溶かして、千里へ響かせる。

「うんっ、うん！」

うん　　ありがとう、ありがとう、とうっ、ナーリヤ！」

生きていてくれて、“待って”いてくれて、ありがとう。

千里はナーリヤにしがみついて、涙を流す。

ナーリヤもそんな千里を抱き締めながら、ただ一筋の涙をこぼした。

「ありがとう。」

僕の前に現われてくれて、ありがとう、千里」

互いに名前を呼ぶ声が、広がっていく。

不安で躓きそうになった互いの心を、癒していく。

頑張れる、頑張り合える。

そんな想いが二人を満たし、やがて溢れて笑顔に変えた。

「ありがとう　　ナーリヤ」

「ありがとう　　千里」

塔の影から零れた陽光を、身に受ける。

すると、石畳に二人の影が、長く伸びた。

その影の中。

中心部分から、抱き合う二人に声が届く。

『なあー！』

「えっ？」

「へ？」

見れば、そこには猫シラがいた。
白いもこもことした毛皮の、丸い猫だ。

『なあ』

猫は一声を鳴くと、踵を返す。

そして、ゆくゆくと歩き始めた。

「ついて来いって、ことだよね？」

「ねえ、ナーリヤ、行ってみよう！」

「うん！」

二人は自然な動きで身体を離すと、慌てて猫を追いかける。
その顔は、耳まで真っ赤になっていた。

路地の細い道を、猫は軽やかに進んでいく。

毛玉が飛び跳ねているような様子に、心を和ませている余裕はない。

ディルの下に辿り着いた時とは比べものにもならないほど、速いのだ。

「は、速いよ猫さんっ」

足を纏れさせないように注意しながら、必死に走る。

外見的特徴が他の猫たちと変わらないため、一度でも目を離せば紛れて解らなくなってしまうだろう。

だからとにかく、追いつがる。

途中で人にぶつかることがないのは、猫の通り道だからなのだろう。

それだけは、ありがたかった。この速度でぶつかったら、相当危ない。

「わわわっ、とー！」

猫が進路を直角に変える。

それを追いかけるために、千里は足の裏を使ってブレーキをかけた。

砂埃が舞い上がり、石畳に罅が入る。その反動で、千里は一気に曲がった。

「ええっ!？」

だが、ナーリヤはそうはいかなかった。

曲がった千里を追いかけようとするが、石畳に罅が入るほどの脚力はない。

砂埃を舞い上げてブレーキをかけるが、それだけでは弱く、地面にスライディングする形で転んだ。

「うわっ!

……っう」

転んだ際に打ち付けた背中。

その微妙な痛みに呻きながら、ナーリヤはなんとか立ち上がった。

「見失った、かな？」

外套についた土をはたき落としながら、駆け足で千里が曲がった角へ行く。

丁度塔の裏に当たる位置なのか、他のところに比べてずいぶんと暗い場所だった。

その暗がりの中心で、千里は未だ佇んでいた。

じつと斜め下を見ているだけで、動こうとはしない。

「千里？」

「ナーリヤ、ちょっと見て」

千里にそう言われて、ナーリヤはその視線を追いかける。
壁の下、壁と石畳の中間地点には、不自然に挟まるピンクのリボンがあった。

「これって、まさか」

「ここで、あの猫さんがいなくなっただんだ」

ナーリヤは片膝をつく、そのリボンに手を触れる。
引っ張ってみても抜けそうにないことから、隙間に偶然入ってしまったという選択肢を捨てた。

「どこかに、なにか……」

うん？これは？」

壁を触って確かめるナーリヤの様子を、千里はただじっと見ていた。

ナーリヤはその視線を受けている間も真剣に手がかりを探し、やがて何かを見つけて手を止める。

「どうしたの？ナーリヤ」

「千里……」

これ、ちょっと見て」

ナーリヤが指で示した方向を、じっと見る。

千里の膝ほどの高さ、その部分の壁に、不自然な凹みが見えた。
ナーリヤはその部分に指をかけると、壁を剥がした。

「剥がれればいなくなって思っただけなんだけど」

「剥がれちゃった、ね」

剥がれた壁の中。

そこには、フックのようなものがあつた。

ナーリヤはそれを試しに引いてみるが、ぴくりとも動かない。

「ふう。」

たぶん、大人の男四〜五人で引つ張る、スイッチみたいなものだ

と

「えいつ」

ガシンツ

ナーリヤが説明している最中に、千里は何となく引いてみた。するとフックは、あっさりと引かれた。

「あれ？」

「ふえ？」

強化された筋力は、なんの障害もなくフックを引き出す。

千里にとってはマーマレードの蓋くらい固かったのだが、それでも動いた。

ズ、ズズズズ

すると、壁がゆっくりと持ち上がる。

リボンが挟まれていた場所を中心に、ぽっかりと口を開けた門。

それは、この街に隠された“ギミック”だった。

「開いちゃった、ね」

「開くんだ、ね」

安心して呟く千里に、ナーリヤは呆然とした様子で頷いた。

どこか気まずい雰囲気の流れで、両者とも言葉に詰まる。

「い、行こう！ナーリヤ！」

「そ、そうだね！千里！」

そうして二人は、結局“無かったこと”にして、先に進むのだった。

十

門を潜り抜けると階段があり、そこを進むと地下道になっていた。暗くじめじめとしたその地下道を、夜道を歩くことに慣れたナー

リヤが先導する。

「アレアロイアを愛した男の、遊び心。そんな伝承が、この街にはあるんだ」

その道中で、ナーリヤが語る。

静かな声だが、あまり広くない地下道の壁に反射して、不思議と深い声に聞こえていた。

「噴水の下、塔の頂上、街の狭間。

様々な伝承があつて、実際にギルドが管理をしている塔の頂上には、ギミックがある」

確証があつたから、街の人々はそんなモノが他にないか、好奇心で探していた。

だが、それはついに、見つからなかったのだという。

「でもまさか、

こんなところにこんな道があつたなんて……」

「しかも……

使用の形跡のある、だよな？」

「……うん、そうなんだ」

そう、どうにも、頻繁に開けられた様子が見て取れたのだ。

つまりこの場所は、誰かが何度も行き来をしている可能性があるが、
た。

ナーリヤ達が普段よりも声を抑えているのは、“先客”への対策
だった。

「千里」

そうして歩いていくと、ナーリヤが小さく、千里の名を呼んだ。千里はそれに頷くと、ナーリヤの後ろに無言で立つ。ナーリヤが足を止め視線を向けたその先。地下道の角を曲がったその先から、声が響いていた。

「はっはっはっ！」

これだけ集まればもう良いだろう」

少し高めの、男の声だった。

ナーリヤは感づかれないように気配を消して、角から身体を覗かせる。

地下道の中でも、特に大きな一室。

そこでは、七人の男達が、ランプを中心に酒を飲んでいた。

その周辺、そこには

檻に入った、猫^{シラ}たちの姿があった。

「ナーリヤ……これって」

「うん、たぶんだけど、

“密売”だと思う」

国に保護指定されている動物だからこそ、求める他国の声は消すことが出来ない。

一体どんな秘密があるのかと騒ぐ連中と、希少動物を集めるためには何でもするという、金持ちの“マニア”が、なにかと欲しがる動物だった。

「あとはこのまま、

帝国にでも売りさばいて」

「そのままこの国ともおさらばだぜ！」

男達は、口々に自分の欲求を吐き出す。

良い家に住んで、一日中だらだらと怠けて過ごす。

良い物を食べて、一年中だらだらと遊んで過ごす。

そのためなら、猫の十や二十はいつでも良い、犯罪も犯せるといふ言葉だった。

「ナーリヤ、あれ」

「うん？」

あれは……」

千里の示した方向を見る。

男の一人が、檻から出ようとしていた猫を、おもむろに持ち上げた。

そのまま鞠玉のようにちょっと投げしてみるなどして、暇を潰している。

幸い猫は悲鳴を上げることなく身を任せているが、不意に力が入りすぎたら大変だ。

その回転しながら投げられている猫の、腹。

そこには……茶色く丸い、模様があった。

「おっと」

その模様に驚いていた二人を余所に、男は次の行動に出る。

猫を台の上に置くと、その猫に向かってダーツを構えた。

男が暇つぶしのために遊んでいた物なのだろうが、いくら毛玉っばいとはいえ怪我をする。

「おい、売り物に傷つけるんじゃない！」
「大丈夫だって、ザーク」

ザークと呼ばれたのは、黒のターバンを巻いた赤毛の男だった。天然パーマの髪とナーリヤよりも少し低い身長、青年だ。

「そうツスよ！」

「アニキのいうとおりだツス」

「オレモ、ソウ思ウ」

それに同意したのは、二人の男だった。

黄色い髪に黒のターバンを巻いた、出っ歯の青年。

青年とはいったが、背が低いため正確な年は解らない。

もう一人は、黒のターバンに灰色の髪の青年。

こちらはかなり大柄な体格で、三白眼とカタコトの口調が特徴的だ。

「タークにオンクか。」

「チツ、解ったよ」

男はそう言うと、振り上げた手を下ろす。

……ように見せかけて、ザーク達の視線が外れた一瞬を狙ってダ
ーツを投げた。

大人しく丸くなる猫に放たれた、一迅の凶器。

その鋭い針がランプの火に照らされ、猫の脇腹に向かって一直線
に突き進む。

「ははっ、命中……」

まだ届く前に放たれた、男の言葉。

その言葉が全て紡がれる前に

ダーツが“弾け”飛んだ。

「イルリウラス― 光より顕れる者 ―」

視界を埋め尽くすほどの極光。

黄金に煌めく陽光の剣が、ダーツを粉々にする勢いではじき飛ばした。

「な、何事だ！」

その音を聞きつけて、奥の小部屋で待機していた三人の男が出てきた。

焦りから構えたその剣は、ヘタをすれば猫に当たってしまうだろう。

だからその刃を……矢で、弾く。

「先見二手、二射必中」

放たれた矢が、二人の男の剣のみを弾き飛ばす。

その光景に困惑するもう一人の男の剣も、続いて放たれた矢が叩き落とした。

その方向に、猫はいない。

「街に幸せを運んでくれる、

こんな可愛らしい猫さんに、なんてことを！」

怒りを隠そうともしない、千里の声。

猫のピンチにたまらず飛び出た千里の後ろから、ナーリヤも出て

くる。

その手には、新しい矢が番えられていた。

「チイツ！」

こんなところで、生涯を盗んだ猫と戯れるって生活を、捨てられるかア！」

ザークは、どさくさに紛れて目的を叫んだ。

ここで叫んでおかなければもう二度と言えないような、そんな気がしたのだ。

「理よ、悪を絶て。」

全員、反省しなさいっ！」

ザークに向かって、ナーリヤが弓を構えた。

だがその前に、大きく振り上げられた光の剣が、視界を覆う。

両手の力、その全てを使って放たれた振り降ろしの一撃は、ザークの身体を通り過ぎてなお、黄金の軌跡を空間に刻みつけていた。

「ア、アニキ　ッ!？」

「ザークッ!？」

それだけでは、終わらない。

返す刃で近くにいたダーツの男を切り捨てると、その切っ先をタイクたちに向けた。

その黄金の刃に肌が粟立つ感覚を覚えて、タークとオンクは冷や汗を流す。

「成敗」

「ひっ」

踏み込みの一步。

ただその一步で、五メートルほどの間合いが消滅した。

石畳を削るほどの踏み込みに驚愕する中、薙ぎ払いと返しの刃が、二人の膝を折った。

「お、おい逃げッ」

タタンッ

「ひうっ」

逃げようとした、三人の男。

その足下に、矢が刺さる。

「そこに 直りなさいっ!!」

「ひ、ひいひいっつっ」

「た、助け」

「あばばばばっ」

逃げる男の背中を斬り、腰を抜かした男の胸を突き、最後の足掻きで殴りかかろうとした男を、返す刃で振り返りながら切り捨てた。

「僕、出る幕無かったかも」

悪意の抜けきった男達。

その死屍累々の頂点で佇む千里を見て、ナーリヤは顔を引きつらせながら呟いた。

「ふう、これにて、幕っ」と

そして千里は、さりげなくノリノリだった。

何にしても、猫誘拐事件と猫探索。

その二つが同時に片付いたことに、ナーリヤは大きく息を吐いて、安堵した。

三章 第三話 探索×猫×救出×猫（後書き）

第三話を、お送りしました。

次回で三章は終了です。

ご意見ご感想ご評価のほど、随時お待ちしております。
気に入っていただけたら、拍手の方も是非ご利用ください。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

三章 第四話 見え始めた未来

地下道の一角。

広い部屋で、七人の男達が並んでいた。

『申し訳ありませんでした!』

地面に額をついて跪く、千里の故郷である日本で伝統的な謝罪方法。

そう……“土下座”である。

「俺たち、どうしても猫と戯れながら生活がしたくて」

「盗んだ猫を売った金と盗んだ猫で、その生活を送ろうって思ってたんツス」

「……ソウ、ナノダ」

猫好きなのは構わないが、猫を売るといつている時点で本当に好きなのか疑わしい。

ちなみに、純粹に金儲けに猫を売ることに賛同していただけた他の男達は、ザーク達の言葉に驚愕していた。

「はあ……」。

もうやらないって、誓える?」

この問いは、甘いだろう。

だが、近くで聞くナーリヤがその提案を止めないのは、確信があるからだ。

光の剣で切られた者は、悪には戻らないだろうという、奇妙な確

信が。

「誓います！」

そして

世界に猫愛を広める、

猫布教の旅に出ます！」

「ついていくツスよ！アニキ！」

「オレモ、行ク」

「チツ、しょうがねえな」

口々に賛同していく、男達。

何故かダーツの男もそれに乗っていた。

他の男達は、もう真面目に働こうとしか思っていないのに。

「一件落着。

だよね？ナーリヤ」

「ふう、

うん、そうみたいだ」

二人は猫のことを任せると、頼まれた茶色い模様の猫を持ち上げた。
た。

そしてその猫を手に、ゆっくりと地下道を後にするのだった。

路地裏の情報屋。

古びた扉を潜り、板張りの廊下を歩いた先。

沢山の本に囲まれた情報屋の老人、デイルに、千里とナーリヤは猫を差し出した。

「大人しく、ここまで来てくれたんです」

千里の腕に抱かれた猫は、ここに来る道中、暴れることなく大人しくしていた。

檻の中に閉じ込められて、未遂とはいえ非道い目にあつた後だから、怖がってしまうのではないかと心配していたのだ。

「おお、そうか。
この街で、密売か」

この街で密売をしようとするケースは、少なくともはあるが前例はあった。

だがその一つとして、成功した者は居ない。
なんらかの理由で、みんな失敗していったのだ。

まるで、彼らが“何か”に守られているかのよう。

「さて、これで対価は成立だ」

デイルは、机の下から猫皿を取り出し、そこに魚を一尾置く。
魔法で凍らされた魚は、ランプの側に置かれることで徐々に溶けていった。

机の上にあった本を再び読みながら、デイルはそう低い声で言い、話しをする体勢を作る。

これが彼の真剣な構えなのだろう。千里とナーリヤは、ただ耳を傾けることに集中する。

「流れ人。」

この言葉がいつ頃から使われるようになったのかは、俺も知らん」

何時しか、“ここ”ではない“どこか”から来た者達のことを、流れ人と呼ぶようになった。デイルはまずそう前置きをして、千里とナーリヤに椅子を指す。

立ったままではるくに集中できないだろう。

そういった気遣いから指で示された二つの椅子に、千里とナーリ

ヤは腰掛けた。

木造の丸い椅子は、周囲を囲む本棚から本を取り出して、その場で読むためのものだ。

「流れ人は、皆、特別な才能や技術を持っていた。

ある者は、身の丈の倍もある槍を片手で操り、

ある者は、手に汲んだ水を投げて岩を砕き、

ある者は、両手を打って感じた音だけで、周囲の地図を描いて見せた」

様々な技能を持つ者。

デイルが今までで蓄えてきた情報。

その中にある者は、これだけだ。

世界を回れば、これだけではないという可能性もあった。

「そんな、人たちが……」

「はあ……」。

私、ただの女子校生だよ」

驚くナーリヤと、肩を落とす千里。

技能を持つ者だけが、目立って伝わっているという可能性もあったが、それでも“自分が選ばれた”理由がわからずに、千里は困惑していた。

成績は平均的。

強いて言うなら体育が中の上で英語が中の下。

数学よりも現文の方が好きだが、古文は首を捻ることがある。

その程度の、どこにでもいる高校生だった。

「先生の評価も、

“元気で優しい子ですが、たまに奇抜なことをしますね”
……って苦笑される程度だったのにい”

椅子の上で膝を抱える千里。

ナーリヤは苦笑しながら、その肩を叩いて慰めた。

「ごほんっ」

「あっ、

すみません！」

わざとらしく咳き込んだ、ディル。

その仕草に、千里は慌てて居住まいを正した。

座ったまま頭を下げて、ナーリヤもそれに追従する。

そんな二人の様子にため息をつく、ディルは再び話しを始めた。

「はあ、続けるぞ」

その声に呆れが含まれていることに気がつき、千里は目を泳がせる。

「流れ人は、

一つの時代に一人きりしか現われない。

前の流れ人が消息を絶つなり命を落とすなり、

何らかの理由で“ここ”を去らない限り、次の流れ人は現われなかった”

それは、イルルガからも聞いたことのある話だった。

どこかに流れて、そして消えていく違う世界の住人達。

その有り様から、彼らは“流れ人”と呼ばれるように、なったのだと。

朗々と語るデイルの深い声が、千里とナーリヤに染み込んでいく。途切れることのないその言葉は、彼女たちの心に不可思議な波紋を生み出していた。

「定住することを決めた者も、確かにいた。」

だがそれよりもずっと、帰りたいと望む者の方が多かった」

諦めてしまつ者は、この世界に根付いた。

だが、その中で子孫を残した者はいない。

いや、正確には、“残せた”者は、いなかった。

「帰りたい、」

そう望む者は皆、同じ場所を目指した」

「同じ、場所？」

完全にデイルの“語り”に引き込まれていた千里が、呆然と呟く。帰還を望む流れ人が、己の全てを賭けて目指した希望。

「そうだ。」

それが宗教国家“ノーズファン”

流れ人に神の言葉、神の意志を伝えることが出来る唯一の存在。

“神託の巫女”が住まう地だ」

北西の大陸、ルノリ。

東南の大陸であるここ、ウィズの対面に位置する大陸だ。

神託の巫女、その神の言葉を何よりも尊重する“聖域”と呼ばれる場所。

それが、神秘と託宣の国“ノーズファン”だった。

「ノーズファンは、各地の“教会”に長年在籍していないと、入国は難しい。だが、毎年開かれる帝国の“闘技大会”で上位十八人に入れば、神の騎士を目指したいという名目の下、入国が許される」

千里の中で、音を立ててレールが敷かれていく。

広大な荒野を、ただ手探りで進めてきた。

何時か手段が見つかるかもしれない、帰れるかもしれないという、曖昧な希望で進んできた道。その道に、道標が見え始めた。

「神の騎士になれとは言わん。

だが、神託の巫女に謁見することが許される、で、あれば」

その時に、神託を受けることができる可能性は、高い。

その明確に照らされた、目的地へのスポットライト。

旅の終着点にはなり得なくとも、確実な通過時点になるであろう、その地。

「神秘と、託宣の国」

「宗教国家、ノーズファン」

喉がからからに渴いていく、感覚。

その最中、呆然と呟いた二人は、思わず顔を見合わせた。

「俺に言えるのは、ここまでだ。

流れ人の最後は、定住した者以外は解らん。

だが、そうだな　その“亡骸”が発見されたことも、ない」

この世界の住人として、亡骸が扱われたこともあるだろう。

だが彼らの大半は、確実に他の人ではたどり着けない地に、その

歩を進めたのだ。

それは、手がかりは、どこかに必ずあるという意味だ。

「千里！」

「ナーリヤ！」

二人は、歓喜から向き合って、笑い合う。

夕暮れのアロイアに、二人の歓声が響いた。

デイルに大きな咳払いを、されるまで。

十

宿屋の一室。

翌日にはここを出るため、二人でこうして夜を過ごすのも、最後だ。

潜り込んだベッドの中で、千里とナーリヤは興奮から眠れずにいた。

知りたいことが、手に入った。道を掴むことが出来た。それが二人に、大きな希望を抱かせていた。

「まずは帝国、だよな？」

「そうだよ。」

北東の大陸アストーイにある、

リックアルイン帝国だね」

リックアルイン帝国。

その名を、千里は噛みしめるように繰り返した。

「リックアルインへ行くためには、海を渡るんだ」

「海？」

「……わぁー、けっこう、楽しみかも」

異世界に来たのなら、来てみたいと思っていた場所。

現実逃避のために思い浮かべた場所が、今は目的の一部となっていた。

無限に広がる広大な海、やはり船に乗るのだろうか、千里は逸る心を抑えた。

「船って、乗ったことある？」

「あるよ。」

海獣を用いた水上船は、すつごく速いんだよ。
豪華客船にも少し乗ったことはあるけれど、僕は海獣船の方が好きだな」

「か、怪獣？」

不穏な単語が聞こえて、千里は思わず聞き返す。

下の段のベッドに向けて声を放つためにうつ伏せになったが、かえって声がかくぐもっていた。

「えっと、うん。」

“レビアルス” っていう大きな海の魔獣でね、
大きなヒレと緑色の身体を持っているんだ。

彼らに船を引いて貰って、一日の内に遠くの海まで漁をして戻ってくるんだ」

沖で漁をしても、品質を悪くすることなく戻ってくる事が出来る。

港で専属の魔法使いに纏めて凍らせて貰うため、それまでは品質を保たなければならぬ。そんな時、レビアルスの海獣船は、品質を保持したまま往復することが出来るのだ。

「海を割って進むって言うのかな？」

それだけ速いからそれだけ危険なんだ。

だから、海獣船を駆る漁師は、命がけの仕事なんだ、って」

セアックに教えられた知識。

その一端を思い出しながら、ナーリヤは千里に語っていく。

「へえー……」。

そっか、怪獣戦じゃなくて海獣船か、うん」

物騒なことを考えていた千里は、少し恥ずかしく思いながらも、納得したように頷いた。

船の話だというのに大怪獣バトルの話になったようで、少し混乱していたのだ。

「まあ、僕たちは普通に定期船に乗れるだろうから、海獣船のことは考えなくても良いんだけどね。

ちよつと間違えれば、海に放り出されるし」

「そ、そうなんだ。

それなら、普通に渡った方がいいや」

少し期待していた千里だったが、その期待を振り払う。

絶叫マシンが嫌いではない千里としては、乗ってみたい。

だが、命がけとなれば話は別だ。

君子危うきに近寄らず……は状況的に厳しくても、避けるくらいは出来るだろう。

「海ではね、

空と地上が繋がるんだよ」

水平線。

その向こうの景色を思い出しているのか、ナーリヤの声には感嘆の音が含まれていた。

「笛を吹くと、鳥が集まるんだ。

ラムルウっていう、渡り鳥が、その鳴き声で歌を唄うんだよ」

十六歳のナーリヤを連れせたセアックが、吹いて見せた思い出の曲。

集まってきた白い渡り鳥たちが、その音色に合わせて鳴くのだ。

「すっごーい……。」

ね、ねえねえっ！

それってさ、定期船の上でも出来るの?!」

「うん、ああ、そうだね。」

やるのは初めてだからちょっと自信ないけど、やってみるよ」

「ほ、ほんとう!？」

……やった!」

音楽に合わせて、鳥が歌う。

それはどんなに、幻想的な風景なのか。

千里は思い描いて、胸を高鳴らせた。

「そろそろ、寝なきや」

「あー、うん。」

言われて見れば、眠くなってきた、かも」

瞼が落ちる感覚に、千里は身をゆだねる。

こんなにもすっきりとした気持ちで瞼が落ちるのは、“ここ”に
来て初めてのことだった。

「おやすみ、ナーリヤ」

「お休み、千里」

落ちていく意識。

その暖かさを感じながら、千里はゆっくりと瞼を閉じた。

不安はない。

そっぴいえば、嘘になる。

けれど、心は揺れない。

心の底から支え合える、“友達”が、いるのだから。

十

情報を得た、その翌日。

千里とナーリヤは馬に跨って、アロイアの街を去る。

地図を見ながら港町に向けて走る二人の背中を、じっと見つめる姿があった。

白いもこもことした毛皮と、優しい目を持つ一匹の猫が、建物の

上からその様子を見ていたのだ。

『なあー』

小さく一鳴きする。

すると、その周囲から他の猫が立ち去り、代わりに一羽のラムルウが降り立った。

『な』

短い声。

その声に返事をするように、ラムルウの身体が淡く輝く。

そしてその場に 光で構成された、女性が降り立った。

身体は薄く、ほとんど見ることは出来ない。

希薄で儚く、どこかもの悲しい雰囲気的女性だった。

ただ、白い布のような服を着ていることと、黄金の流れるようなウェーブヘアだけは、見て取ることが出来ていた。

私にできるのは、ここまでが限界ですね。

儚い、声だ。

今にも水泡の如く弾けて、消えてしまいそうな音色だった。

『なあー』

ありがとっ、シーラ。

貴女の協力のおかげで、助かりました。

そう女性に言われる猫^{シーラ}の姿は、どこか誇らしげに見える。

これは、常に自然体で自由な彼女たちには、珍しいことだった。

『なっ』

ふふ、お優しいのですね。

彼女は、女性に何と言っているのか。

女性は彼女の言葉に、嬉しそうに微笑んだ。

百合が花開くような、可憐で美しい笑顔だ。

女性は、再び薄くなってきた己の身体を、悲しそうに見下ろす。
そして、最後にと、顔を上げた。

どうか。

どうか、彼女たちに。

胸の前で手を重ね、握る。

それは懇願であり、祈りだった。

正しき加護が、あらんことを……。

そうして、風景は元に戻る。

心なしか弱ったように見える、一羽のラムルウ。

その顔を、猫はただ一舐めして見送った。

空に舞い上がる、白い身体。

その羽の流れる先には、何が待ち構えているのか。

広大な空。

無限に広がっていくその空に、一匹の猫の鳴き声が響き渡った。

三章 第四話 見え始めた未来（後書き）

今回で三章、第一部が終了となります。

次回からは、やや更新ペースは落ちますが、二日以上は遅れないように頑張りたいと思います。

第一部について、ご意見ご感想ご評価のほど、随時お待ちしております。ます。

気に入っていただけましたら、拍手の方もどうぞお気軽に、ご利用ください。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございます。ございました。

第二部、次章もどうぞ、よろしく願います。

四章 第一話 港街ルルイフ

太陽は雲に覆われ、空は灰色に濁っている。

ごうごうと吹く風が木々を大きく揺らし、肌を打つ雨は礫のように衝撃を伴っていた。

宿場街、アロイアを出て半日。

天気的气まぐれにより、千里とナーリヤは嵐に見舞われていた。

大きな風は、雨で濡れた身体を芯から冷やす。

冷えた身体を温める暇もなく、ただ進まなければならぬ。

馬からは降りて手綱を引いているが、馬への負担も相当だろう。運が悪いの一言では説明しきれない、そんな不運な状況だった。

「ナーリヤっ！」

あと！どれ！くら！いつ！？」

声を張り上げなければ、隣にいるナーリヤに言葉を伝えることも出来ない。

喉を嚙らすほどの大声を上げて、漸く断片的に届く。

それほど風の力は強く、雨の音は大きかった。

「あと！もう！少し！だよっ！」

ナーリヤも千里同様に、大きな声で返事をした。

アロイアを出て半日。そろそろ、二人とも体力が厳しくなっていた。

最初は馬に乗っていたが、雲行きが怪しくなり急いだ。

だが、風が強くなってきたので、落馬を恐れて馬から降りてからが、ひどかった。

にわか雨は豪雨となり、強風は突風となり、やがて暗雲が立ちこめ稲妻が走り出す。

その光景に、二人は揃って頬を引きつらしたのだった。

「あれは……。」

千里っ！　だよ！」

「えっ？」

な、なにっ！？聞こえない！」

ナーリヤが、前を見据えて何かを言った。

だが、突風に遮られて、千里まで声が届かなかった。

仕方なく、ナーリヤは斜め上に指を向けて、示した。

「へ？」

……あ、あれっって」

薄暗い周囲を照らす、金の光。

それは……海の道標、灯台だった。

「あれが、

港街“ルルイフ”」

千里が零した声は、いとも簡単に突風の中に呑み込まれていった。

歯を食いしばって力を入れ、重い扉を押し開ける。
突風で蝶番が歪んだ扉は、筋力が上昇している千里でも重く感じられた。

「あっはっはっ、

この嵐ん中大変だったねえ、旅人さん」

そう言って笑うのは、恰幅の良い女性だった。

彼女は、ナーリヤ達が入った宿屋の婦人である。

「いや、はい。」

どうにも運が悪かったようです」

千里が押し開けた扉から、荷物を抱えたナーリヤが入る。

二人は街に入るとまずナーリヤ宿をとり、それから荷物と馬を支えていた千里がナーリヤと協力して荷物を運び入れる。

その予定だったのだが、突風で立て付けが悪くなったのか、ナーリヤ一人では開けられなくなったのだ。

おかげで二人とも、濡れ鼠という言葉がよく似合うという有様だ。水も滴るとはいうが、滴りすぎて寒そうだった。

「嵐の中じゃなければ、

あたしも外に出て直すんだけどねえ」

女性はそう言うと、再び笑う。

かんらかんらと笑うその姿は、見ていて気持ちが良い。

「ま、ゆっくりしていきなよ」

「はいっ！」

「ありがとうございます」

千里が元気よく返事をして、ナーリヤもそれに追従する形で頭を下げた。

その対照的で気持ちの良い返事に、女性は三度笑い声を上げる。

「ところでお二人さん、

「……………一部屋じゃなくて良いのかい？」
「そんなんじゃないやありませんっ！」

どこに行ってもからかわれるのか、千里は声を張り上げる。
その横でナーリヤは、ただ恥ずかしげに顔を逸らしていた。

十

薄い壁越しに、二つの部屋。

隣同士のその部屋に入ると、二人は大きく息を吐いた。

帝国の闘技大会のこともあるのに、こんな嵐に巻き込まれたのだ。

少し肩を落とすくらいは、許されるだろう。

「はあ、

もうそんなに焦ることはないって思ってたけど、さ。

……だからって、これはないよ」

鎧を外して、予備の上着を羽織る。

濡れた服の着心地は決して良いものとは言えなかったので、早く
渴かしてしまいたかった。

窓にはしっかりと鎧戸が嵌っていて、外の風景は見られない。

嵐の風景など見ても面白いものではないが、ナーリヤの言っていた
“海”を楽しみにしていた身としては、残念でならなかった。

「はあ、考えても仕方ないや。

とりあえず今は、今できることに集中しなきゃ」

といつても、出来る事なんて限られていた。

服を乾かしている間はじっとしていた方が良さだろう。

予備の上着とロングスカートという姿は肌寒く、ヘタに動き回っ
たら風邪を引きそうだ。

第一、動いてもやることがない。

ナーリヤの部屋に押しかけるのは、また婦人にからかわれそう
できないし、着替えを自分が覗くような状況に出くわしたら、気
まずい。

だから、今やるべき事は、一つだけ。

その一つこそが大事なことだと、千里は考えていた。

「イル＝リウラス」

小さく呟くと、手のひらの中に剣が生まれる。

光り輝く、黄金の剣 “イル＝リウラス” 光より顕れる

者”だ。

千里は自分の“力”に戸惑うあまり、自分の“力”を知ることが怠っていたのだ。

「この機会に、

何が出来るのかしっかり調べておかないと」

そう、この黄金の剣の“機能”が確かめたい。

闘技大会という戦場に出るからには、自分自身のことくらいは把握しておきたかったのだ。

「えーと、

それじゃあまずは、と」

最初に思い浮かべたのは、サイズだった。

もう少し大きくできるのではないか、小さくできるのではないか、という疑問だった。

「大きく、は危ないから」

小さくなれ。

そう念じると、輝きはそのままに短くなっていく。

そのサイズがペーパーナイフほどになったところで、縮小はぴたりと止まった。

「おー、

なんなんだろう、この力」

どう使ってみても、これが“何”であるかは解らない。
出来たから使って、それが結局自分を助けてくれた。

そうはいつても、人の“悪意”のみを斬る、ということが尋常なことではない事くらいはわかる。

「もうちょっと、何か試してみよう。
わかるかも、しれないし」

とにかく今は、何が出来るのかの把握だ。

闘技大会まで一ヶ月……それまでに、どこまで経験を積めるかなど解らないのだから。

「そういえば、

闘技大会は“魔法使い”ってで出られるのかな？」

魔法使いとして参加できなければ、千里は光の剣を使えない。
そのことに思い至り、冷や汗を流す。

「あ、あとでナーリヤに聞いてみよう。
う、うん、大丈夫大丈夫っ」

流石にこれは心配のしすぎ、で片付けられることになるのだが、
しばらく千里は現実逃避に光の剣の解明をするのだった。

嵐の後は、雲一つ無い空が広がっていた。

急速に通り過ぎた嵐、その現象は良くあることなのか、ルルイフの人間は気にした様子もなく働き出していた。

「兄ちゃん！

そっちを持つてくれ！」

「はい！」

虎の顔をした獣人の男性に言われて、ナーリヤは地面に転がった看板の端を持つ。

力を入れてそれを持ち上げると、壁に立てかけた。

「見た目の割りに力持ちじゃねえか！

よし、次はあっちを頼む！」

「あはは、
はい、わかりました！」

あの嵐の翌日、ルルイフでナーリヤ達は、後片付けに参加していた。

本来ならすぐにでも船を探したいところだが、世話になった宿屋が予想以上に傾いてしまっていたので、こうして手伝いを名乗り出したのだ。

ナーリヤがそうやって撤去作業を手伝っている間、千里は宿屋の婦人と共に昼食作りに参加していた。

「いやあ、助かるよ！」

悪いねえ、手伝いなんかさせちゃって

「いえ！」

見なかったフリとか、苦手なんです」

見なかったことにして、関係ないと言って立ち去るのは簡単だけれど、そうやって逃げてしまうと、どうしようもなく胸が騒ぐのだ。

後ろ髪が引かれて、結局手伝いに戻ってしまう。

だったら始めから参加した方がずっと気持ちが良いと、ナーリヤに頼んで参加したのだった。

「そうかいそうかい。

あっはっはっ」

そう千里が言うと、女性は大きく笑う。

その瞳は優しく、穏やかに千里を見ていた。

「ほう、良い心根だ」

その声が聞こえて、千里と婦人が振り返る。

調理場の入り口に立つのは、軽鎧を身に纏う一人の女性だった。

流れるような黄金の髪に、海を思わせる碧い目。

女性にしてはやや高い身長と、すらりと伸びる長い足。

可憐で優しげな顔立ちに似合わない、鋭い視線。

そして　　長く尖った、耳。

「久々に柔らかな“音”だった。

気に入ったぞ。ご婦人！私も手伝おう」

「あ、ああ。

手伝ってくれるんなら大歓迎さ！」

婦人は、客商売をしているだけあって、あっさりと受け入れて見せた。

この辺りの器量の良さは、中々身につくモノではない。

「さて、うん？どうした？」

自分を見る千里の視線に気がついて、女性は小首を傾げて見せた。その仕草は可憐で、同性である千里でも思わず見惚れてしまう類のモノだ。

「ああ、そうだったな。

私はフィオナ。見てのとおり、“エルフ”だ」

「あ

あっ、わ、私は千里、千里＝高峯です！」

RPGの世界に限らず、古代の神話にも登場する長命種。その存在がリアルに、千里の前に立っていたのだ。

「チサト、か。」

「うむ、良い名前だ」

フィオナは噛みしめるように、そう何度も頷いた。

一つ一つの仕草が洗練されていて、それでいて自然だ。

その仕草がどうにか真似できないモノかと考えて、千里はすぐに諦めた。

「おーい！」

二人とも、そろそろ休憩しておいで！」

「ああ、了承した」

「あ、わかりました！」

時折声を投げかけてくるフィオナと言葉を交していると、婦人から休憩の号令がかかった。炊き出しも下ごしらえが終わったので、さほど焦らなくても良くなったのだ。

「チサト、

休憩ついでに話してもしょう」

「は、はい！」

まだやや気後れはするものの、千里は素直にフィオナの後について歩く。

威风堂々とした佇まいに慣れるのは、もう少し時間がかかりそうだった。

+

撤去された煉瓦の山。

その一部に腰をかけて、二人は休憩時間を過ごしていた。
手には、チーズとハムが挟まれたパンを持っている。

「ほう？」

では千里は、帝国の闘技大会に出場するのか……」

千里からノーズファンを目指しているという話しを聞いたフィオナは、すぐにそう当てて見せた。といっても、時期的にすぐにわかる事なのだが。

「そうか、

いや、実は私も闘技大会を目指しているのだ。

……と、みればわかるか」

そういうと、フィオナは笑って自分の姿を見下ろした。

銀の軽鎧に、背中に背負った真紅の長剣。

この姿で闘技大会を目指さないと言われても、冗談にしか聞こえない。

「ということとは、

今年の女性部門は、チサトと当たるかもな」

不敵に笑うフィオナに、千里は苦笑で返す。

フィオナに当たるといっのは確かにあり得ることだが、それよりも気になることがあった。

「あの、女性部門って……」

「なんだ、知らないのか？」

てっきり男女混合でやるのかと思っていたが、そうではないようだ。
そのことに気がついて、千里は首をかしげながら訊ねた。

「男女混合は観客的にも“受け”が良くないからな。

まあ私は混合でも良いと思っっているが、

王族貴族も参加するのなら、そうも言ってられんのだろう」

フィオナは肩を竦めると、腕を組んで息を吐き出した。

本当は混合でやりたいのだろうが、そうはいかないのが現実だ。

「チサトはやはり、

魔法剣士か、魔法使いか？」

「はい、

私は剣士……え、と、魔法剣士です」

緊張しながらも慣れてきたのか、千里は普通に答えることが出来た。

その返事に、フィオナはそうかと頷いていた。

華奢な見た目で参加する者は、大抵魔法で身体能力の水増しをしている。

中には防御を捨てて魔法の能力に特化させた魔法使いもいる。だがほとんどの場合は、身体能力の向上に魔法を使っていた。

「私も、魔法剣士だ。

ふふ、大会で当たったら、容赦はせんぞ？」

フィオナは、手加減といったことを嫌うのだろう。

千里に手加減はしないと、不敵に笑ってみせた。

「はいっ

私も、本気でいきます！」

ならば、それに立ち向かわないのは失礼だし、どこか悔しい。

そう思って、千里は拳を握りながら意思を表明した。

その負けん気の強い、正々堂々とした態度は心地よく、フィオナは楽しそうに笑う。

「フィオナさん？」

「ああ、いや、なんでもない。

……それよりも、その堅苦しい口調は止めないか？
同じ舞台上で剣を交す戦士だ。妙な気遣いはいらん」

フィオナはそう、どこか気まずげに断言した。

悪い感情を向けられている訳でも、卑屈な感情を抱かれている訳でもない。

だから、言い出しにくかったのだろう。

「えへへ、

うん、わかった。フィオナさん」

それでも“さん”付けて呼ぶのは抜けなかったようだが、十分だ。

「ふふ……

そろそろ戻るか」

「あ、うんっ」

立ち上がったフィオナは、自分の後ろをついてくるひな鳥のような少女に、頬を緩ませる。実力は正直期待していないが、それでも千里の性根と気概は気に入っていた。

だから、この“ひな鳥”と戦えるのなら、それは楽しみなことだった。

古くより、“勇氣”を持つひな鳥は、勇猛な“神の鳥”へと昇華するものなのだから。

結局この日は、船を探すことも出来ないまま夜を迎えることになった。

千里とナーリヤは、夕飯を食べた後、一息ついて夜風に当たっていた。

「久々に、

“疲れた” って思えたよ」

ナーリヤは、風を浴びながら大きく伸びをして、そう言った。ここのところは全て、戦闘による疲れだった。

だが今日は、正当な“労働”による疲れで、それ故に気持ちよく疲れを感じることが出来ていたのだ。

「お疲れさま、ナーリヤ」

「うん、千里もお疲れ」

二人でそう言って、笑い合う。

千里も、戦闘に関わらないことでお礼を言われたことなど久しぶりで、それが妙に嬉しかった。

戦えるようになったといっても、戦わないで済むのなら、それに越したことはないのだ。

「明日は、ちゃんと船を探さなきゃね」

「定期船は？」

「一番大きな港ではないとは言え、この時期だからね。」

定期船も、何隻か有るんだ。

まあ、本当に数が多い次期だから、乗れないことは無いと思うよ」

今までのことがあるから、断言することが出来ずに苦笑する。

その不安の理由がわかる千里も、同じく顔を引きつらせていた。

そろそろ二人は、自分の“運”が信じられなくなっていたのだ。

「さて、と。」

今日はもう休もうか？」

「うん。」

明日のこともあるし、ねー」

翌日の日程を相談しながら、宿に向けて踵を返す。

明日は定期船を探して乗り込み、一気に帝国まで行く必要がある。

そうして二人は、期待と希望を胸に、宿へ戻っていった。

日頃の疲れか、注意力が散漫になっていた二人は、ついに気がつかなかった。

そんな二人 いや、千里の後ろ姿を見る、小さな影があることに。

この正体がわかるのは、まだ少しだけ、先のことだった。

四章 第一話 港街ルルイフ（後書き）

お待たせしました。

これより、第二部を開始します。

更新スペースは落ちますが、その分質を上げられるように頑張ります。

ご意見ご感想ご評価のほど、お持ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。次話もどうぞ、よろしく願います。

四章 第二話 街外れの漁師

突き抜けるような青空。

その燦々と輝く太陽の下で、千里とナーリヤは呆然と立っていた。ナーリヤが定期船を見に行っている間に、千里はフィオナを見送った。

そして、さあ自分たちもとナーリヤに合流したのだ。

だが、嵐で壊れてしまった船や、リックアルインから帰ってこない船があるため、定員がオーバーしてしまったというのだ。

街の復興を手伝っていた二人は、これに予約することが出来なかった。

本来ならば予約など必要ないのだから、予想できることではない。

「どうしよう、ナーリヤ」

「どうしようか、千里」

喉から漏れる声は、消え入りそうなほど弱々しい。

次の定期船が来るのは、半月後だ。

それまでに闘技大会の参加枠がどうなっているのかは、わからない。

二人の旅路は、まだまだ障害が多いようだった。

一度宿に戻って、一階のフロアで息を吐く。

どうにか手段を探さなければならぬが、船が乗れなくなるとい
う予想外の事態に、ナーリヤは戸惑いを隠せずに行った。

「どうにか、しないと」

「やっぱり私、もうちょっと探してくるよー!」

千里はそう叫ぶと、勢いよく立ち上がる。
まだ諦められないし、この程度の困難は、この短い旅路の中で何
度もあった。

「この程度で、負けないもん。
行こう、ナーリヤ！」

……“諦めるもんか！”だよっ」

栗色の双眸に、強い意志の炎を宿して千里はナーリヤに手を差し
伸べる。

目を瞠るほどの精神的成長を見せる、千里のその力強い姿を見て、
ナーリヤは己を奮い立たせた。

「うん、そうだね。

“諦めるもんか”……だね」

ナーリヤは、千里の小さく柔らかな手を掴むと、立ち上がる。
その細腕からは信じられない筋力と、その可憐な容姿からは想像
できない不屈の心。

これでは、引っ張られてばかりになってしまいそうだと、ナーリ
ヤは苦笑した。

「ちて、

それで……どうしようか？」

「どうしよつって？」

「うん、

港に行くのも良いし、聞き込むのも良いし」

ナーリヤは気持ちを切り替えると、すぐに頭を回転させてそう言

った。

顎の手を当てて首を捻る姿からは、先ほどまでの憔悴は感じられない。

「まずは手分けして、情報を集めよう」

それが最初にすべきことだ。

そう呟いて、千里に同意を求めた。

「どう？」

「うん！」

「……それじゃあ私は、宿の方へ行ってくる！」

「よし！」

じゃあ僕は、港の方を回ってみるよ！」

指針が決まると、すぐに別れて走り出す。

思い立ったが吉日、決定即行動である。

ルライフの波止場は、端から端まで歩いても、半日もかからない。これが北西の港街だったら、橋まで歩けば一日かかる。ちなみに、北西の港町へ行けば船はあるかも知れないが、大きな街の船は懐へのダメージが桁違いなため、ナーリヤ達はその選択肢を考慮することができなかつた。

「そうですか……」

「すまねえな、兄ちゃん」

肩を落とすナーリヤに、貨物船などの船乗りや漁師達は首を横に振った。

リックアルインまで行くことはできる。だが、リックアルインまで船を出すことが出来る者はいなかつた。

誰も彼も、家族を持ち職を持つ身。

そんなに長期間、家を空けることが出来ないのだ。

「まあ、兄ちゃん達には嵐の後片付けも手伝わせちゃったしなあ」
船乗り達も、口々にそう言って考え込む。

だが、それで手段が思い浮かぶはずもなく、時間だけが過ぎていった。

「無理なご相談をしまい、申し訳ありませんでした。なんとか、もっと探してみます！」

「俺たちも仲間内に話しを広げておくよ。」

「頑張れよ、兄ちゃん！」

日に焼けた褐色の肌。

その胸を大きく叩いて言い放つ姿は、頼りがいのあるものだった。

船乗り達の好意を嬉しく思いながらも、ナーリヤは背を向ける。

気落ちしてしまうのは仕方がない、とはいえ落ち込んでもらえなかった。

だから急ごうと、走り出そうとした……その時、後ろから声が響く。

「あつ……。」

「お、おいつ兄ちゃん！ちょっと待った！」

「はい？」

足を止めて振り向く。

すると、船乗りの一人が思い出したかのように手を打っていた。

「実はな……。」

船乗りから語られた、情報。

それにナーリヤは、目を丸くするのだった。

建物の修復や片付けが終わり、街の住民は思い思いに過ごしていた。

一仕事終えたばかりということもあり、酒屋や食事処などにも人が集まっている。

ナーリヤと別れた千里は、ここで情報収集を行っていた。手の空いている人、何か伝手を持っている人。

とにかく聞き込んで探してみないことには、埒があかない。

「はあ………」

そうして駆け回っていたが、成果は芳しくなかった。

今はとりあえず一休み。食堂で、聞き込みしながらの休憩だ。

「よう、嬢ちゃん。」

兄ちゃんは別行動かい？」

「トールさん……」

千里にそう声をかけたのは、街の周辺を中心に活動をしている賞金稼ぎの男性だった。

深く良く通る声の持ち主で、ナーリヤと一緒に瓦礫の撤去をしていた虎頭の青年だ。

黄色い体毛に黒いライン。

縦に割れた眼孔と鋭い爪のついた五本の指。

大きな体躯を包む鉄の鎧と、臀部から伸びる長い尻尾。

ファンタジーな世界だと理解はしていても、どうにも納得のできない存在だった。

「手の空いた漁師か……」。

ムルミ、誰かいたか？」

「知ってりゃとつくに教えてるよ！」

虎頭の青年、トールに呼ばれたのは、宿屋の婦人だった。

彼女は人手を請われて、こうして食堂で働いていたのだ。

本来は、宿屋の家事をしているのだが、こうしてよく手伝いに出ている。

「違くない」と大きく笑うトールに、ムルミは息を吐く。

昼間から酔っついていれば、世話はない。

「自分の縄張りを“キレイ”にすんのを手伝って貰ったんだ。」

なんかしてやりてえのは山々なんだが……どうしたもんかな」

トールはそう言いながら、肩を竦める。

彼も手助けはしたいと思っでいて、千里としてもその気持ちは嬉しかった。

「ありがとうございます、トールさん」

「よしてくれ。」

俺はなんにもできちゃいねえよ

「それでもですっ」

強く言い切る千里に、トールは鋭利な牙を覗かせて苦笑した。

気持ちに押されているようでは、賞金稼ぎ専門の冒険者の、名折れである。

「私、もう一走りしてきますー！」

千里は沈みかけた気持ちを持ち直すように、勢いよく立ち上がった。

強く握りしめる拳には、前を向く大きな意志が込められている。

そうして走り去ろうとする、千里。

その後ろ姿を見ながら、ムルミが小さく呟いた。

「あ……。」

そうだ、そういえば」

その言葉が、強化された聴覚を持つ千里に届く。

千里は足を止めて振り向くと、顎に手を当てて考え込むムルミを見て首をかしげた。

「いや、そうだよ!」

「なんだよ、ムルミ? 大声出して」

突然声を張り上げたムルミに、トールは不満の声を上げながら三角形の耳を押さえた。

雷を怖がる猫のようにも見えて、少しだけ可愛らしい仕草だった。

「ラオ爺さんさ!」

「ラオ爺さん……。」

ああ、そうか! ラオのジジイか!」

思い出したのか、トールも納得したように頷く。

そんな二人の様子に、千里は一人取り残されたように感じて、ますます首を捻っていた。

そして直ぐに話を聞き、奇しくもナーリヤと同時刻、同様に目を丸くした。

ルライフの東側。

海に面した一角に、寂れた家屋があった。

水で満たされた桶や煙の上がる煙突など、誰かが暮らしている気配はある。

けれど、肝心の人影は、どこにも見あたらない。

その家屋の前で、千里とナーリヤは顔を見合わせていた。

「ここ、だよな？」

「うん、ここだと思っよ」

不安げに呟いた千里に、ナーリヤは自信なく答える。

ナーリヤの手元には、船乗りたちから預かった紹介状と、トールとムルミから預かった地図があった。

ナーリヤは、とにかく行ってみようと扉をノックする。

木製の扉は、叩く度に僅かに軋んで危うげだ。

「誰だ」

奥から響く、野太い声。

その声は、胸の内に響くような迫力を宿していた。

「紹介状を持ってきました、旅の者です。
船を出していただけないでしょうか？」

戸惑う千里の横で、ナーリヤがそう声を上げた。
すると、数拍ほど間を置いて返事が返ってくる。

「入れ」

意志だけ告げる、短い言葉だった。

一々重みがあるのは、この声の主に、積み重ねられた経験か。
なににせよ、それには妙な圧迫感があった。

「ナーリヤ」

「うん」

千里が顔を上げて、ナーリヤの名を呼ぶ。

ナーリヤもまた、千里を一瞥して顔を上げた。

こんなところで、尻込みしてはられない。

扉が軋む音を意識から弾きながら、家の中を覗き込む。

壁に掛けられた大きな銚、木製の古びた机、その奥で煙管から煙を噴かす人影。

「船を出して欲しい、だつたか？」

「は、はい」

暗がりで輝いているかのように錯覚させる、鋭い群青色の眼光。
その光に戸惑い、千里はほんの僅かに肩を跳ねさせた。

ここまで鋭い気配を持つ人物に出会ったのは、この世界に来て初めてのことだった。

アズイの狂気的な雰囲気よりも、ずっと純粹で、重い。

「僕はナーリヤ。」

こっちは、一緒に旅をしている千里です」

ナーリヤは、空気に吞まれかけた自分を持ち直す。

比べられることではないが、セアックもまた“鋭い雰囲気”の間だった。

その様子を見て、千里もまた自身を持ち直した。

「見せてみる」

「あ……、
は、はい」

右手が差し出されることにより、差し込む陽光に照らされ全容が顕わになる。

長い白髪、明るみに出ても鋭さを損なわせない双眸、大柄な体躯。

そして何より目を惹くのは “鉄で出来た” 左腕だった。

「チッ……」。

坊主ども、面倒な仕事を押しつけやがって」

老人は、手紙を読みながら舌を打つ。

読み終わるとその手紙を机に放り投げて、煙を噴かせた。

「残念だが、諦める」

「なっ、」

……どうしてですかっ！」

重い気配をはね除けて、千里は大きく声を上げた。理由も話されずに無碍に断られて、諦められるほど小さな目的ではない。

その意志を、千里は双眸に込める。

「どうか、お願いします。」

僕たちを帝国へ、乗せていってください！」

詰め寄る千里の後ろで、ナーリヤは勢いよく頭を下げた。そんな二人を、老人は胡乱げに見ていた。

「うん？」

いや……待てよ」

そうして二人を見ていた老人は、何かに気がついたのか顎に手を当てて呟いた。

二人の姿、それをじっくりと見て、頷く。

「おまえ達、腕は立つのか？」

「え？」

は、はいっ！」

ナーリヤは、咄嗟に頷いて見せる。

自分の腕に過剰な自信を持っている訳ではないし、対人戦なども考えれば経験も少ない。

けれどここは頷いておかなければ、門前払いされるということが容易に解ったのだ。

「え、えーと、
力には、自信があります！」

ナーリヤに倣って、千里もその声を上げる。
その宣言は“女の子”として何かを投げ捨てているようで、千里は内心で落ち込む。

だが、今は気にするべきではないとその思考を振り払った。現実逃避である。

「……乗せていってやっても、いい」

「ホントですかっ?!」

「ただしッ!」

千里の歓声は、老人の大きな声に遮られた。
その迫力有る声に、千里は声を詰まらせる。

「条件がある」

「条件？」

首をかしげるナーリヤに、老人は不敵に笑いながら頷いた。
何を要求されるのか、流れる沈黙は重い。

「そうだ。」

俺はもう何年も、“海の魔物”と戦っている」

言いながら、老人は自分の腕を撫でる。

鋼鉄製の左腕は、さながらフック船長のように見えた。

「俺はこいつを討ち取りたい。」

だが、こいつの周りには沢山の下僕がいる。

……あとは、わかるな？」

海の魔物を討ち取るために、道中の雑魚を蹴散らす。
言うほど簡単なことではないのは、老人の左腕を見れば一目瞭然
だった。

「嫌だったら諦める。」

この話は、これで終わりだ」

口を閉ざす二人に、老人は見向きもせずそう吐き捨てた。

嫌だったら諦めるしかない。それは、船に乗ることをだけにか
けられたモノではない。

千里にとってそれは……元の世界へ帰ることを諦めることに、他
ならなかった。

「ナーリヤ、私」

「うん、僕も同じ気持ちだよ」

俯いて零した千里に、ナーリヤは笑顔で頷いた。
その一言に突き動かされて、千里は薄く微笑む。
そしてすぐに、二人で真っ直ぐと老人を見た。

「条件を、呑みます」

「船に乗せてくださいっ！」

そう言っ頭を下げる、ナーリヤと千里。

二人の姿に、老人は小さく笑う。

「良い度胸だ。」

俺はラオ、海獣船の漁師だ」

老人……ラオは、ここに来て始めて名乗った。
意志が伝わった。だから、こうして受け入れられた。
そのことに喜びを隠しきれず、二人は笑顔になる。

「出発は明日の早朝。

遅れたら置いていく。覚悟をしておけ」

「はいッ！」

「はいッ！」

ラオは二人の目を見て、そう告げる。

まだ解決した訳ではないが、確実に道は見えてきていた。

頭を下げて、立ち去る。

その道中の星空は、過ぎ去った嵐を思い出させないほど、
晴れ渡
って見えた。

四章 第二話 街外れの漁師（後書き）

今回は、もう少し長めになります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

四章 第三話 海淵の魔獣

突き抜けるような青空、輝きを増す太陽。

やや強めの風が頬を打ち、千里は身体を震わせる。

寒さからではなく、目の前の光景から我に返ったためだった。

波止場に向けられた橋。

木製のそれは、海獣船に向かって真っ直ぐと伸びている。

千里が立っているのは、その橋だった。

「大きい」

感嘆のため息と共に呟かれた、静かな声。

その視線の先には、ラオの海獣船があった。

光を呑み込む深緑の鱗で覆われた、大きな体躯。

蜥蜴のような姿をしているが、両手足は大きなヒレになっている。

全長は、ワゴン車を直列に三台並べたくらいだ。

ラオの相棒、名を“レグルス”というのだと、千里はラオから聞いていた。

その大きな海獣には、手綱のような形で鎖が巻かれている。

鎖の先にあるのが、ラオの乗る船体で、こちらもワゴン車を二台並べたほどもある。

それは、千里が想像していた漁師が単独で乗るような“漁船”に比べて、遙かに大きな物だった。

「何をしている。早く乗れ」

「千里、手、貸そうか？」

呆然と船を見上げる千里に、ラオの厳しい声とナーリヤの柔らかい声が届く。

千里はその声に、慌てて頷くのだった。

E
x
I

大海原を、突き進む。

風を切って海を割り、ただ真っ直ぐと進んでいく。
その姿は雄大で、威風堂々としていた。

「うわあ」

高速で移動する、木製の船。

木製、といってもこの高速に耐えられる特殊な種類なのだと、千里はナーリヤから聞き及んでいた。

船の中央、休憩室の上にある高台で、ラオが舵を握っている。

この舵と鎖が連動していて、海獣を操縦しているのだ。

その斜め下、甲板の上で、千里は感嘆の息を吐いていた。

「すっごーい」

障害物一つ無い、広大な海原。

嵐の後の快晴のおかげもあって、空と海が境無く繋がっているように見えていた。

少し濁った海、人の溢れかえる砂浜、沖に進むことを禁止する看板。

そんな海しか知らない千里にとって、この海は幻想的な空間だった。

「さて、と。」

「お昼ご飯を獲ろうか」

ナーリヤはそう言うと、弓を構える。
千里は、ナーリヤのその行動に首をかしげた。

「ナーリヤ？
弓で、漁をするの？」

千里の尤もな質問に、ナーリヤはただ笑みを浮かべていた。

「ふん。」

俺の分も獲っておけよ、坊主」

ラオは、ナーリヤの構えから意図を理解したのか、進路をやや斜めにずらした。

一人ついていけないことに不満を覚えながらも、千里はじつとナーリヤを見る。

ナーリヤはもう笑みを浮かべておらず、弓を斜め上に構えて真剣な表情を浮かべていた。

「来た」

「え？」

じつと待つこと、ほんの数秒。

ナーリヤは太陽に向かって目を眇めると、吐く息と共に矢を放つ。それと、海面が割れるのは、ほぼ同時だった。

ザパンツ

「先見二手、二射必中」

海面を割って、“ なにか ” が船を横切るように水のアーチを造った。

その飛び上がった“なにか”を、ナーリヤが弓で射る。
ほとんどタイムラグのない、高速連続射出で撃ち落とされたのは、
細長い魚だった。

「フリットっていつてね。」

海面から飛び出て、跳ねるように泳ぐ魚なんだ」

「飛魚、かあ」

船を軽々と飛び越えて、時には三十メートルほども飛び上がるこ
とのある飛魚おひづり。

それが、“フリット”という名の魚だった。

「身が引き締まっっていて、

けっこう美味しいんだよ」

言いながらも、ナーリヤは矢を番えて放ち、落とす。

海面を割った直後には船の向こう側に着水していて、並の目では
捉えられない。

視力が強化されている千里ですら、真剣に集中してやっと見える
速度だ。

捉えるだけではなく、撃ち落としてしているナーリヤの技量。

それを見て、ラオは目を瞠っていた。

本当に露払い程度にしか考えていなかったツレが、予想以上に“
使える”ようだ。

ラオは、そう言いたげに口を歪める。

「今度こそ、討ち取ってやるぞ……“海淵の王”よ」

小さく呟かれた言葉は、誰に届くこともなく消えていく。

ラオのその群青色の双眸には、苛烈な戦意が宿っていた。

十

昼食を食べるために、一度船を止める。
海獣船が止まると、海の上に大きな波紋が生まれた。

ラオは、船の奥から七輪を持ってくると、火を熾すのをナーリヤに任せて自分は魚の調理を始めた。
鱗と鋭利なヒレを取り、内臓を取り除く。

そうしている間に、ナーリヤは七輪に入れた赤い石に、石の鎚を

打ち付けていた。

「ナーリヤ、それは？」

「これ？」

これは“火石”^{かせき} っていうて、

衝撃を与えると炎を出す石だよ。

けっこう高価なんだけど、海上への薪の持ち運びとかを考えると、長期的に見ると薪を買うよりも安上がりなんだ」

言いながら、ナーリヤは火石に衝撃を与える。

すると、三度ほど火花が上がり、炎を出した。

ガスコンロのように燃え上がる火石に、千里は感心した目で拍手をする。

「おおー」

「与えた衝撃によって火力が変わるんだ。

火石のサイズによって、上限はあるけどね」

最初に出た火花が、上限の目安なのだとナーリヤは説明する。

生物以外の“ファンタジー”に触れたのは、アレナの魔法以来だった。

ちなみに、自分で出来てしまったためか、光の剣は数えていない。

「千里の所では、どうしてたの？」

「えーと、ガス、

……燃える空気を筒に閉じ込めておいて、

それを調整しながら外へ出して、火を点けるの」

自分の常識、当たり前を説明することの難しさ。

それを自覚して、千里は呻りながら説明をする。

「へえ……。」

面白い世界だね」

「私にとつては、

こつちの方がずっと“面白い”よ」

千里はため息と共に、そう零した。

面白いと言いつつも、楽しそうな表情ではない。

「ほら、どけ」

二人をかき分けて、ラオが三枚に下ろしたフリックを七輪に並べた。

大きめの七輪に九つの切り身が乗り、香ばしい匂いを充満させる。その煙に千里は小さく鼻を動かして、喉を鳴らしていた。

「ラオさんは、

いつから海の魔獣と戦っているんですか？」

焼き上がった魚を皿に移すと、塩を振りかける。

余談だが、ルルイフ周辺では塩が取れやすかった。

ナーリヤに問われて、ラオは切り身を飲み込んでから口を開いた。千里も、鯛とヒラメの中間みたいな味に頷きながら、耳を傾けている。

「……ガキの頃から、だ。」

親父も、その親父も、その前も。

俺たちはずっと、アイツと戦ってたのさ」

ラオは自分の義手を撫でつけて、ぶっきらぼうにそう言った。
気まぐれに嵐を起こす、海の魔獣。
それさえいなくなれば、ルルイフはもっと盛んになるだろう。

生まれた故郷。

その発展を妨げる、魔獣。

放って置いても、嵐以外に害はないと、国も退治に乗り気ではなかった。

「アレは俺の“宿敵”だ。

街の未来なんざも二の次さ。

……俺は俺のために、ヤツを斃す」

生涯を賭けてきた。

だから諦められないと、ラオはその目をぎらつかせる。

「ご家族は、いらっしやらないんですか？」

フリックを呑み込んだ千里が、咄嗟にそう訊ねた。

そして声に出してすぐに、聞いてはならないことだったのかも知れないと焦りを受けべる。

「妻は死んだ。病気だ。

息子夫婦は王都で商人だ。

おまえ達に気にされるようなモノは、背負っちゃいねえよ」

ラオはそう、鬱陶しそうに眉をしかめる。

さっさと立ち上がって舵を取りに戻る背中は、大きな悲しみを背負っているようには見えなかった。

そのことに、千里は大きく安堵する。

そう何度も家族を失った人に出会うのは、辛かった。

自分の故郷のことを思い出してしまったためだろう。

……きっと、それだけではないが。

「さて、片付けようか」

「あ、うんっ」

ナーリヤに言われて、千里は慌てて最後の一口を咀嚼し嚥下する。顔を上げて見た先では、ラオが舵を握りしめ、ただ前を見据えていた。

昼食を食べ終わり一時間ほど過ぎた頃。
見飽きることなく海を眺めていた千里は、風が強くなってきたことに気がついた。

「ナリーヤ」

「うん」

前方を見る。

すると、先の空が不自然に暗くなっていた。
突然現れたかのように広がる暗雲に、千里は寒気を覚えて拳を握る。

「あれって」

「たぶん、ラオさんの言ってた、

……海の魔獣が生み出す、嵐」

海の魔獣、海淵の王。

そう呼ばれた魔物の生み出す、暗く淀んだ雲と風。
その海域に、ラオの海獣船が侵入していく。

「坊主、嬢ちゃん！

露払いは任せたぞ！」

ラオが舵を強く握ると、呼応するように彼の相棒が雄叫びを上げた。

長年連れ添った海獣は、主の意図に応じて速度を上げる。
風を切り海を割る姿は、勇ましくも雄大だった。

「帝剣、アギト」

千里は、その甲板で剣を抜き放つ。

これから戦う。その自己暗示に、剣の名を呼ぶ。

ミドイル村の“仲間”たちの思いを、意志に宿して身構えた。

「来るよ、千里！」

「うんっ！」

波が荒れ、海が割れる。

そこから飛び出してきたのは、ヒレと角が生えた蜥蜴だった。

海獣船の“レビアルス”に似ているが、鋭い角と群青色の体軀が違いを示していた。

更に言えば、レビアルスよりもずっと小さく、せいぜい大型バイク程度の大きさだ。

「レビクルス」

……レビアルスの亜種だ」

ラオの声が、風に吞まれる前に千里の耳に届く。

レビクルスと呼ばれるこの魔獣が、千里達が“露払い”しなくてはならない、“敵”だ。

「はあっ！」

『ガアアッ！』

横薙ぎに振り抜かれた刃が、飛びかかってきたレビクルスの横腹を斬り裂く。

すれ違い様に与えられた衝撃は先陣のレビクルスを海へ叩き落とした。

「ここからが本番だ。
気張れよッ!!!」

ラオの声が、風を打ち破り響き渡る。

千里達はその声を聞き、降り出した雨に負けないようにと、足に力を入れた。

「……来た」

第二陣。

今度は、先走りの一陣のようには、いかない。
いくつもの波紋が荒れ狂う海に浮かび上がり、そして飛び出す。

「減らせて貰うよ。」

先見二手……………“二拍双雨”ニハクシュウウ」

空に向かって放たれた、一息二発、四射の矢。

それが雨のように降り注ぎ、最初に出てきた四体のレビクルスを
撃ち落とした。

『ギアッ』

血の一滴も浮かぶことなく、落ちたレビクルスは流されていく。

それに感慨を浮かべる暇もなく、出てきた第三陣に千里は足を踏
み込んだ。

「せいっ!」

縦に振られた一閃が、甲板に届く寸前のレビクルスを切り落とす。

「はああっ！」

振り下ろした大剣を、右回転に回しながら横薙ぎに振る。
雨と風を切りながら流れた白刃は、飛び上がった二体のレビクル
スを切り落とした。

「てえええいつ！」

一回転して右に抜けた大剣が、右斜め下の甲板に突き刺さる。
その隙に飛び込むように出てきたレビクルスを、ナーリヤが矢で
撃ち落とした。

千里は充分に出来た余裕で剣を抜くと、左斜め上に向かって剣を
薙いだ。

「っせい！」

『ギガアツ！？』

その刃に血しぶきが飛び、暴風のような連撃に巻き込まれたレビ
クルスが落ちる。

合計七体のレビクルスを切り落とす。

その間に出てきたレビクルスも、四体ほどナーリヤの矢に撃ち落
とされ、ついに出てくる雰囲気が無くなった。

陸を支配した“黒帝”から造り出された、剣と弓。

それは、海の魔物達に“暴力”を見せつけて、その抑止力として
君臨していた。

「もうすぐ、もうすぐだ。」

「……………そこかアツ！！！」

ラオが舵を取る。
すると、船体は大きく左に傾いた。

「わわっ?!」

「おっと!」

ふらついた千里を、ナーリヤが支える。
危うく甲板から滑り落ちるところだったのだ。

「ふう、あぶなかった。

ごめん、ありがと、ナーリヤ……?!」

突如強くなった風に、千里は眉をしかめた。

ナーリヤも同じように、目を閉じて風と雨に耐えている。

『オオオオオオ……』

海底から響く声。

それはまさしく、“魔獣”の呻り声といえるモノだった。

空が割れ、海が荒れ、暗雲が立ちこめ、激流が巻き起こる。

生み出された嵐の最中、荒れた海原の中心に渦潮が発生した。

「今日で最後だ。

………来い!海淵の王!」

ラオはそう叫ぶと、義手を外す。

そして、足下に転がっていた箱から、換えの義手を取り出した。
長い穂先を持つ、銚を装備した義手だった。

海淵の王は、大きく仰け反ると口を開ける。

その動作に“嫌な予感”を覚えたナーリヤが、弓を構えて矢を番えた。

人間相手では本気で放つことが出来なかった、対大型魔獣の大弩の、本領発揮だ。

「先見一手、一撃必中ッ！」

ドンッ

大砲を放つような、轟音。

反動で弓が仰け反り、ナーリヤの手に痺れが伝わる。

それに顔をしかめる頃には、矢は海淵の王へ到達していた。

『ガアウツ?!』

口から透明の“風”を吐き出そうとした、瞬間。

飛来した矢が、その下顎に突き刺さった。

軌道をずらされたブレスは、海獣船には当たらずに、その背後数十メートル地点に着弾する。

ゴオンッ

「うわっ」

その衝撃は、背後で津波となってナーリヤたちを襲った。

濡れる程度でなんの支障もなかったが、直撃すれば命はなかったことだろう。

「油断すれば、海の藻屑か」

「ナーリヤー！」

眩くナーリヤに、千里の声がかかる。
咄嗟に振り向くと、自分に向かって飛びかかるレビクルスの姿があった。

「はあっ！」

バランスの悪い甲板の上を、千里が疾走する。
そして、ナーリヤの首に噛みつきこうとしたレビクルスを切り伏せてみせた。

「油断大敵、だよ！」

「うん、ごめん、ありがとう！」

背中合わせになり、得物を構える。

その二人の上で、ラオはただ海淵の王を見据えていた。

「まだだ、もつと来い、王よ！」

「ギヤオオオオツツ！！！」

その気合いに応えて、レグルスが吠える。
ともに海を駆けた彼の相棒は、この瞬間、ラオと“一心同体”となっていた。

海獣船が、波を飛び越えるように進む。

大きな波に打ち上げられても転覆しないのは、ラオの腕だろう。
大きな海原で跳ねるように、海獣船が海と空を駆ける最中、海淵の王はその船体に狙いを定めた。

「オオオツツ！！！」

トドドンツ

風のプレスが、海獣船の周囲に着弾する。

下顎に突き刺さった矢が海淵の王の集中力を妨げていなかったら、とうに海の藻屑となっていただろう。

水飛沫が舞い上がり、船を揺らす。

その揺れに振り落とされまいと、ナーリヤと千里は身体を低くして耐えていた。

「埒があかない。

せめて、もう一撃！」

揺れる船の上。

震動と海淵の王の動き。

矢の速度と放つタイミング。

その全てを、“観て”先読みする。

「先見二手、一撃必中！」

動きの二手先に、引き絞った一撃を放つ。

嵐を貫き飛来した矢は、海淵の王の首筋に突き刺さった。

『ギツアアアアアツツツ!!?』

群青色の肌から鮮血が吹き上がる。

痛みから大きくうねった身体は海面を揺らし、大きな波をつくった。

「行くぞ！レグルス！」

『ギヤウツ！』

レグルスが吠え、その波に乗る。
巨大な津波に舞い上げられた海獣船は、身体を起こした海淵の王
のその頭上まで飛び上がった。

「お、落ちるーっ!？」

「ち、千里!

っ………捕まっつて!」

重力から瞬間的に解放されて、千里の身体が宙に浮く。
慌てて手を伸ばす千里をナーリヤはなんとか掴むと、柵を掴んで
自分の方へ引き寄せた。

「ハッハーツ!

“追いついた”ぞ!王よッ!」

『オオオオオツツツツ!?!?!?!』

ラオは梶から手を離すと、重力から解放された一瞬を狙って跳躍
した。

身体を弓なりに仰け反らせて、左腕を大きく引く。

鋼鉄の銚が狙うのは 海淵の王の、その黄金の眼孔だった。

「おおおおおおおおおおおおツツツツ!?!?!?!」

『ギアアアアツツツ!?!?!?!』

左の目に、銚が突き立てられる。

ラオはその上で更に、左腕に右腕を添えた。

「特注品だ。

たっぷり、味わえッ!」

肘裏に位置するレバーを引く。
すると、左腕の中から火花が散り、轟音が響いた。

ドンッ！

『ギイアッ?!』

銚を打ち込む、特注のギミック。

それが、海淵の王の眼孔を深く貫き、決る。

ラオはその姿をみて、満足そうに笑って見せた。

「ハハッ

これで終いだ。

もう、俺たちの街は、壊せん」

だが、それで終わりだ。

波に乗って滑り落ちるように着水した船はともかく、空から投げ
出されてしまえばラオに生き残る術はない。

海に叩きつけられて、海に散るだろう。

海で死ぬことは、ラオにとっては本望だった。

それで死ぬるのならば満足だと、笑えていた。

だがそれは……海淵の王が、許さない。

『ガ、アアアアアアアアアッ!!』

「なに?!」

投げ出されたラオを、海淵の王が襲いかかる。

口を開いて襲ってきたその姿に、ラオは為す術もなく呑み込まれ

た。

「ラオさん！」

その姿を、海獣船の上から、千里はその瞳に映していた。

その髭と鬚を真紅に染めながらも、海淵の王は健在だ。

いずれは力尽きるほどのダメージは負っているかも知れないが、今逃げられたら回復されてしまう。

「先見二手、一撃必中！」

なんとか逃がすまいと、ナーリヤが矢を射る。

だが、着水の衝撃でひび割れた甲板は、ナーリヤの狙いをずらす。

「くそっ！」

海淵の王の首筋を傷つけるに終わった矢を見て、ナーリヤは悪態をつく。

そうしている間にも、海淵の王はじりじりと後退していた。

このままでは、ラオの“生涯”が無駄骨に終わる。

命を賭してその身を投げ出したラオの姿を、ナーリヤはセアックに重ねていた。

だからこそ、セアックと似た様な結末を辿ってしまうということ
を、避けたかった。

「先見……っ」

続いて矢を放とうとするが、度重なる極限状態がナーリヤの処理能力を超えた。

響くような頭痛に眉をしかめて、ナーリヤは膝をつく。

強く歯がみして痛みを耐えるが、治まるよりも逃げられる方が早
いだろう。

「また、なんだ。」

「僕はまた、間に合わない……ッ！」

「でも今は、一人じゃないよ」

拳を甲板に叩きつけて、唇を噛む。

その姿に声をかけたのは、揺れる船の上でしっかりと佇む、千里
だった。

「お願い、応えて……！」

空に両手をかざす。

その手の中に光が生まれて、それはまっすぐと伸びていった。

「その力を、ここに示せ！」

“イル”リウラス― 光より顕れる者 ” よっ！”

極光が天に伸び、暗雲を貫き陽光を喚ぶ。

大きくすることが出来るのなら、天を貫くことだって出来る。
自身の常識を覆して、出来ると“信じた”力の発現。

「光の、柱？」

ナーリヤの呆然とした声が、静かに響く。

空を割るほどに伸びた光の剣が、ただ悠然と構えられていた。

“友達”に対して、宿して良い感情ではない。
ナーリヤはそう、首を振って自分の感情を否定した。

「千里？」

聞かれたか。

そんな不安が、ナーリヤによぎる。

千里は身動きすることもなく、ただじっと佇んでいた。

「千里……っ！」

再び名を呼んだ時、千里の身体が大きく傾く。

ナーリヤは慌ててその身体を受け止めると、想像以上に軽い身体に驚いた。

「こんなに小さな、女の子なのに。

無理ばかり、させてしまっているね」

ナーリヤはそう呟くと、辛そうに顔を歪めた。

疲労からか、千里の顔色は悪い。

心なしか、熱もあるように思えた。

「ごめんね、千里。

……本当に、ごめん」

柔らかい栗色の髪を撫でながら、小さく呟く。

そしてナーリヤは、よぎった“想い”に、強く蓋を閉めた。

青が戻った空の下、三人には静かな風が吹いていた。

四章 第三話 海淵の魔獣（後書き）

今回で四章を終え、次回から五章に入ります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

五章 第一話 ニーズアルへ

それは、銀色だった。

壁や床、調度品に至るまで、全てが“銀”で覆われた空間。

その、まともな人間ならば気を遣えそうな空間に佇む、影があった。

「素晴らしい」

紡がれた言葉は、感嘆の色に満ちていた。

広い空間に朗々と響く、男性の声だ。

しなやかに伸びる指。

その白い 白すぎる 手に持たれているのは、水晶だ。

大きな丸いその水晶には、ここではない“どこか”の映像が映し出されていた。

「その力を、ここに示せ！」

“イル＝リウラスー 光より顕れる者” よっ！」

水晶の向こう側では、栗色の髪の少女が光の柱を構えていた。

そう、千里が光の剣を構えて振り下ろす、そのワンシーンだった。

「斬り裂けええつつつっ！！」

海淵の王、海の覇者と呼ばれた魔獣が消滅する。

光を携えて無慈悲に敵を駆逐する、その横顔。

輝きを映したその顔を見て、男は抑揚に頷いた。

「美しい」

そう言うと、男は水晶に映った千里の顔を撫でる。

気まぐれで外を見ていた時……アロイアの街で偶然見かけた少女ルルフまで来た時点で興味を持ち、本格的に“観察”を始めた女の子。

その姿を見て、その端正な顔を期待に歪ませた。

「私の“眷属”を退けた、その力。

その美貌とその才能、その全てが……欲しい」

うつとりと、男はそう呟く。

長く野放しにしていた、血を分けた眷属。

海淵の王と呼ばれるほど成長した、名も無きウミヘビ。

興味を失っていた己の眷属は、最後の最後で、最大の“親孝行”をした。

男性がそうして立ち上がると、腰まで届く銀の髪が流れる。

「さあ、来い。

貴女の全てを、手に入れて見せよう。

クククククツ……………ハハハハハハハツ！」

銀で彩られた世界。

その中心で、真紅の双眸が輝いた。

誰かに名を呼ばれるような、安心感。
その奇妙な感覚に身をゆだねながら、
ラオはゆっくりと目を開け
た。

「俺、は」

見知った天井は、自分の家のものだった。

古びた木目の天井が目に入り、そして違和感を感じる。

「俺は、何故？」

海淵の王に挑み、そして喰われた。

そこまで思い出して、ラオは身震いする。

確かにその眼孔に銛を突き刺して、そして飲まれたはずだった。なのに自分はこうして、ここにいる。

「夢だった？」

いや……そんなはずは、ない」

長年の夢だった。

だが、海淵の王に挑んだその感覚は、しっかりと覚えている。

だから、ラオの胸には疑問だけが残っていた。

「チッ

……まずは起きてみないと、始まらないか」

ラオはそう吐き捨てるように言うと、ベッドから起き上がる。

背筋を鳴らしながら立ち上がり、未だおぼつかない足取りで寝室の扉まで歩いた。

「うん？」

だが、ラオがノブに手をかける前に、扉が開く。

痛んだ蝶番がぎしぎしと軋む音を発し、やがて開いた人物の全容が見えるほどになった。

「親父ッ」

「ラウ……？」

おまえ、帰ってきていたのか」

群青色の髪と、同じ色の目。

ラオをそのまま若くしたような、彫りの深い男性だった。

「はあ……。」

元気そうで良かったよ。

親父が“海の覇者”に挑んだって聞いた時は、どうなることかと

「あ、いや、

そうだ！海淵の王はどうなった？！」

「覚えていないのか？

」たく、あんな立派なモノを持ち帰っておいて」

ラウは呆れたように首を振ると、ラオの手を引く。

さあこっちだと笑う姿は、見た目に似合わず優しげだった。

ラオは帰省してきた息子の様子に、安堵の息を吐く。

それをため息だと誤魔化すと、ラウの手を振り払って歩き出した。

先ほどまでよりも、ずっとしっかりとした歩みだ。

先導された先。

そこは、居間だった。

リビングの机の上に置かれた、布にくるまれた“何か”に、ラオはそっとな近づくと、

そして、高鳴る鼓動と震える手を自覚しながら、ゆっくりと布をとった。

「これは」

淀むことのない、白銀。

鋭く伸びる、海淵の王の“角”の、その先端部分。対峙し、そして討ち斃したという確かな“証拠”が、そこにあった。

視線を上げて、開いた玄関を見る。

その先では、大切な孫と一緒に遊ぶ、少女と少年の姿があった。

「あいつら……」。

はあ、つたく」

そう、言葉にならない感慨を呟く。

トドメがさせなかったことは悔しく思う。

けれど、一矢報いて帰って来られたと言っことが、ラオは何より嬉しく思っていた。

可愛い孫にも会えて、そして夢も叶えられた。

だから、ため息を吐いていても、その目は優しげだった。

ラオはその白銀の角を手にとると、掲げてみせる。

生涯を賭けた老人の、最後の“夢”が、ゆっくりとその幕を閉じた。

脚本とは少し違ったが、最後は拍手喝采の大団円。

ならばそれでいいと、ラオは小さく笑う。

「ありがとよ、坊主、嬢ちゃん」

その呟きは、側にいたラウの耳にだけ届く。

本人達には素直に言えない、言葉。

だからこそ、それを聞いたラウは、小さく微笑むに止めるのだ
た。

十

前日と同じく、空は快晴。

昨日と違うところを挙げるとすれば、それは彼らの“内側”の天
気だろう。

今日は、心の中も晴れ上がっていた。

漁船に乗せていく訳には行かないため、ここまで共に旅をした馬
とはお別れだ。

船に乗り込み、千里は見送りに来た街の人たちと馬に手を振った。

「ありがとうございますーっ！」

元気の良い声に、トールたちも笑って応えている。

その中には、ラオの息子夫婦の姿もあった。

「あんまり身を乗り出すと危ないよ、千里」

「あ、うん」

千里はナーリヤに止められて、慌てて身体を退く。

ここで海にダイビングでもしたら、取り返しのつかないことになる。

主に、服の洗濯的な意味で。

「直ぐ治ったとはいえ熱があったんだ。

病み上がりに濡れて重くなったら、大変だよ」

「あはは、

うん、そうだね。気をつけます」

ナーリヤの自分を真剣に心配する言葉に、千里は苦笑する。

倒れた後、何故か熱を出した。

けれど、ラオが目を覚ます前に治ってしまったのだ。

「そろそろ二人とも、下がってる」

「はい！」

それでも前のめりだった千里と、隣りに立つナーリヤにラオの声がかかる。

千里はそれに元気よく返事をする、身体を退いた。

「しっかり捕まってるよ。」

「さあ、出発だ。行くぞ！」

ラオの声は、明るい。

命を賭した戦いに身を乗り出す者の“それ”とは違った、心地よい声だった。

海を割って、船が進む。

本土から出たこともなかった自分が、異世界に来て海を渡る。

そのなんともいえない高揚感に、千里は胸を押さえた。

「もう、あんなに遠くになっちゃった」

高速で移動する海獣船。

甲板の上から眺めると、伸ばした手のひらの上に乗るほど、ルルイフの街が小さく見えた。

「千里、どうしたの？」

「あ……、」

「なんでもないよ、ナーリヤ」

感慨を頭から振り払うと、ナーリヤに向き直る。

そして、前方の甲板に腰掛けた。

「どれくらいかかるの？」

「半日かけて、一度休憩のために停泊。」

「そこで一日休んで、更に半日で到着かな」

前に乗った事があると話していたナーリヤが、指折り数えてそう

言った。

大陸を渡るほどの距離を乗った訳ではないので、これくらいだろうという予測だ。

千里は、どれだけ速いのかよくわからなかったが、とりあえず感心していた。

半日、つまり十時間程度で九州から北海道へ行くようなモノなのだが、千里はその速度を実感できずにいた。

「その割りには全然“酔わない”んだけど、

……私って、そんなに乗り物強かったかなあ？」

千里は一人そう呟いて、首を捻った。

速く動く車に乗ると、すぐに酔ってしまっただけだった。

だからこそ、風を感じるほど速くても、その“程度”が理解できずにいたのだ。

水面を見ればその認識も変化したかも知れないが、景色の動きが解りづらい海の上だと言うことも、千里の認識を狂わせることを手伝っていた。

「うーん？」

「千里？」

「あ、ううん。

なんでもないよ」

ナーリヤに声をかけられて、思考を中断する。

自分の身体のごときは、自分がよくわかる。

よくわかるはずだったからこそ、わからないということを実感しなくなかった。

「考えても、仕方ない」

そう呟くが、感情は納得していない。
理性だけで行われた理解に、千里は眉を寄せていた。

「はあ……」。

あれ？鳥、かな？」

「うん？」

……えーと、蝙蝠こうもり、かな？」

空を舞う、黒い影。

それを視界に納めて、千里は首をかしげた。

鳥かと思ひ声を上げたが、その答えは考えていたモノとは、違っていた。

「蝙蝠つて……海にいるの？」

「いや、洞窟で暮らすはずなんだけど……？」

二人は、空を眺めながら揃って首をかしげた。
空を舞う一羽の蝙蝠。その不可思議な、存在。

「もしかしたら海の種族なのかも。」

昼時に、ラオさんに聞いてみようか？」

「あー、うん。」

そうだね、ナーリヤ」

解らないのだから、素直に聞くしかない。

そう言っって苦笑するナーリヤに、千里もすぐに頷いた。

十

フリットを煮込んだ、簡易鍋。
ムルミたちが持たせてくれた野菜を、一緒に煮込んで塩で味付け
をすると、海の香りがふわりと立ち上る。

その食欲をそそる香りに、千里は笑顔で手を合わせていた。

「海の蝙蝠？」

「はい、ご存じありませんか？」

千里が白身魚を頬張っている間に、ナーリヤがそう質問をした。
千里もそれに乗ろうとするが、流石に口にモノを入れたまま喋る

ことは出来ない。

そうして慌てだした千里に、ナーリヤがそつとフォローをした。

「ゆっくりで良いよ。」

フリットは逃げないから、ね?」

「……………」

しかし、欠食児童ががつついて見えているように見えるのフォローだった。

そのことに、千里は頬を赤くしながら頷いた。

弁解しようにも、そのためには急いで飲み込まなくてはならない。そうすれば結局、がつついていて印象を強めてしまうだろう。

その悪循環に、千里は軽く落ち込んでいた。

「それは普通の蝙蝠じゃねえな。」

おおかた、“ニーズアルへ”の住人だろうさ」

「“ニーズアルへ”?」

漸く飲みこんだ千里が、ラオの答えを復唱した。

聞いたことのない単語で自動変換がされないのなら、地名や人名の可能性が高かった。

「強力な存在が統治する自治国家、かな?」

千里の疑問に、ナーリヤが捕捉をする。

と言つても、ナーリヤが知っているのはここまでだ。

その存在のことも、どんな者が住んでいるのかも、ナーリヤは知らなかった。

「不可侵条約みたいなのがあんのさ。」

国としても、“触れたい”存在ではない。

だから、いくつかの“約束事”だけして放置しているんだよ」

ラオはそう説明しながら、白菜に似た野菜を頬張る。

味の良く染み込んだ白菜は、その熱でラオの身体を温めた。

「いくつかある約束事の中に、

俺たちみたいな沖に漁をする漁師のために、港を貸すつてのがあ
る。」

その約束事に沿って、港を借りるんだが、まあその時に“住人”
も見かけるんだよ」

港を借りて、休ませて貰う。

いくら“約束事”があるからとはいえ不気味だが、他に休めるよ
うな場所はない。

「蝙蝠の群れが雲を作っていたり、やけにデカイインウルフがいた
り。」

まあ、不気味な場所だよ、あそこはな」

ラオは、苦々しそうにそう語る。

とくに被害にあったことがある訳ではない。

だからといって安心できるほど“良い噂”が流れている訳でもな
い。

「さて、そろそろ出発だ。」

あそこの統治者は“若い娘”を好むっていうからな、
嬢ちゃんも、まあ気をつけておけ」

ラオはそう言って立ち上がると、背を向けたまま呟いた。

「はいっ
」

自分を心配してくれる言葉。

その言葉が嬉しくて、千里はナーリヤと顔を見合わせてから、頷いた。

+

航海を進めて、しばらく経った頃。
空が夕暮れに染まる時間になって、漸く島が見えてきた。

まるで海淵の王が出現した場所のように、暗雲の浮かぶ島。
周囲は快晴なのに不自然に薄暗い島は、なるほど“不気味”な島
だった。

「あれが……………“ニーズアルへ”」

千里の言葉が、空に溶ける。

隣を見れば、その光景に圧倒されたナーリヤが、言葉を失っていた。

「寄せるぞ。捕まっている」

ラオの声で我に返り、体勢を整える。

薄暗い港に船を寄せ付けると、船体が緩く揺れた。

赤茶色の地面には、真紅の薔薇が生えている。

茨が絡まった道と、荒れ果てた小屋。

その全てが、侵入者を拒む砦のように構えていた。

「あの小屋で一晩休憩だ。」

俺たちの休憩には、ならんかもしれないが、
レグルスを休ませる必要はあるからな」

そういうラオも、嫌そうだった。

それはそうだろう。こんな不気味な場所にいたいと思う人間は、
そうはいない。

「あ、はい。」

ほら、千里も」

「う、うん。」

……降りても大丈夫な地面なのかな？」

先に降り立ったナーリヤを見ているため、安全は保証されている。それなのに戸惑ってしまうのは、その場所がとて“安全”には見えないためだろう。

降りたら最後、生命力を吸われそう。なにせ、薔薇以外は見事に枯れているのだから。

「よっ、と」

降り立ってみると、なんてことはない。

普通に土を踏みしめる感覚が、足の裏に残るだけだった。

大丈夫だと解ってはいても、千里はそのことに小さく安堵の息を吐いていた。

小屋の中に入ると、かび臭さが充満していることに気がつく。

千里は小さく口元を抑えながら木で出来た窓を開いて、空気を入れ換えた。

だが、そもそも日の光が入らないせいで、あまり快適にはならないようだった。

「けほっけほっ」

「予想以上に埃が充満してるね。」

窓を開けたまま、ちよつと外に出ていた方が良いかも」

「うん……。」

そうだね、けほっ」

千里は埃に咽せながら、ナーリヤの言葉に頷く。

「俺はレグルスに餌をやってくる。」

「適当に戻ってこいよ」

「はい」

ラオが背を向けて歩いて行くのを、見送る。

埃に咽せる千里の背は小さく、ナーリヤは何故こんな儂い背に“あんな”感情を抱いてしまったのか解らず、こっそりと息を吐いていた。

「ナーリヤ？」

「あ……」

なんでもないよ、さ、行こう」

鋭く感づき、千里はナーリヤの顔を覗き込む。

だがすぐに、首をかしげて前を向いた。

ナーリヤは千里のそんな仕草に、胸が痛むような感覚を覚えていた。

「そんなこと、あるはずないんだ」

そう……“怖い”などと、“友達”に対して思うはずがない。

恐怖感なんて、抱える必要があるはずがない。

ではこの胸に落ち込む感情は、なんのか？

「なんなん、だろう」

小さく、小さく呟く。

握り拳を胸に当てて息を吐いても、答えは出てこない。

己の心に問いかけても、理由がわからない。

「ナーリヤ？」

「どこか、痛むの？」

どんな表情をしていたのか。

俯いていたナーリヤ自身は、気がつかなかった。

だがナーリヤの表情を見て、千里は心配そうに覗き込んできた。

「ごめん、大丈夫。

大丈夫、だよ。千里」

「それならいいけど」

「……………無茶はダメ、だよ？」

「うん……………うん」

軽く頷くと、すぐに深く頷く。

噛みしめるようなその仕草に、千里は心配していた。

「うーん。

……………あ、ねえ、あれって？」

なんとか明るい話題に持って行こうと、千里は話の種を探して周囲を見回した。

そして顔を上げてすぐに、その“建物”を見つけて顔を引きつらせる。

「あれ？」

……………って、なんだろう、アレ」

千里が指し示した方向を、見る。
茨に覆われた丘、その上に悪目立ちする城があった。
光の加減で、小屋の側まで近づかなければ、気がつくことが出来
なかつた城。

丘の上にそびえるその城は 。

「銀、色？」

その全てが“銀”に染まっていた。

「趣味、悪う」

そう言い放ちながらも、千里の腰は退けている。

こうしてハッキリと見てみると、圧倒的すぎて目眩がするほどの
存在感を持つ城だった。

「うん、なんかすごいね」

真剣に考え込んでいたことも忘れて、ナーリヤは呆然と呟いた。
銀色に染め上げられた城なんて、見たことがない。

金よりは悪趣味ではないかも知れないが、どちらにせよ“成金”
臭さがあった。

「全面“ああ”なのかなあ」

千里はそう呟きながら、ナーリヤから離れて左へ歩く。

角度を変えて見てもやはり“銀色”で、見えない裏側も“銀色”
なのだとわかる仕様だった。こうなると、内装が非常に気になる。

「うん？」

あれは……蝙蝠？」

空を見上げて、ナーリヤはそう呟いた。

無数に羽ばたく蝙蝠が、群れを成して近づいてくる。

どこかへ移動する最中なのかと傍観していたが、急に動きを止めたことに首をかしげる。

「なにか、あつたのかな？」

そう思いながら、視線を落とす。

そこには……回り込むためにナーリヤから大きく離れた、千里の姿があつた。

「っ……まさか、

千里！逃げてッ！」

「え？」

駆けだしたナーリヤの声に、千里はゆっくりと振り向いた。

だが、時既に遅く……蝙蝠による“黒の奔流”が、千里に襲いかかった。

「え、は？

……きゃあああああつつつ！?!?!?!」

「千里ッ！」

背負った弓を構えて、咄嗟に矢を番える。

けれど、千里を包み込む蝙蝠を射ることは、できなかつた。

どこに照準を合わせればいいのか解らず、矢の先がゆらゆらと揺れる。

「　　っあ」

そんな小さな悲鳴を最後に、千里はその場から消え去る。

蝙蝠がその全てを溶かしてしまったかのように、そこには何も残らなかった。

「ちさ、と」

呆然と佇むナーリヤの口から、小さく零れた言葉。

彼以外立つもののない空間の中、その声だけが虚しく響いていた。

五章 第一話 ニーズアルへ（後書き）

五章開始です。

山場ですので、なるべく日を置かずに更新できるよう執筆して行きたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございます。次回もどうぞ、よろしく願います。

五章 第二話 銀月の王

寒さを感じて、身を振らせる。

すると、自分の身体が深く沈んだことに気がついて、千里は目を瞑りながら眉を寄せた。

「ふあ……あれ？」

小さく零れた、疑問。

一度だけ泊まったことのある高級ホテル。

その値の張る部屋のベッドは、身体を深く沈ませるほど柔らかかった。

「なん、で？」

ここ最近、ずっと硬いベッドで憂鬱に眠っていた。

漸く慣れてきたのに、こんなベッドで寝かされてしまったのは後が辛い。

千里はそう、満足感を棚に上げて呻り声を上げる。

「むう……っつて、寝かされた？」

自身で考えた、“寝かされた”という言葉。

その言葉で、自分が何故“寝ている”のかを思い出して、千里は飛び起きた。

「っナーリャ！」

友達の名前を叫びながら、上半身を起こす。

その視界に映った光景は、想像以上に“目が痛い”ものだった。

「なに、ここ？」

どこ？ではない。

何処かというのも気になるが、それよりも先に口から零れたのは、“何”という疑問だった。

銀の調度品には、金のラインが引かれている。

地が銀で、縁が金という派手さだった。

天蓋付きの大きなベッドは、余裕を持っても四人は眠れるサイズ。色は銀。

部屋も大きく、寝室のように見えるのに十坪はある。色は銀。

前述の調度品も、壁に掛けられた装飾剣やランプなど、高そうな物ばかり。色は銀。

窓に嵌められたステンドグラスもご丁寧に、銀と金で彩られているのだから、ここまでくれば呆れを通り越して感心……を跳躍してどん引きだ。

「趣味悪う」

千里は思わず、そう呟いた。

それも仕方のないことだろう。

そう言われるだけの“インパクト”のある空間なのだ。

千里は息を整えると、自分の手を見て首をかしげた。

肘まで覆う銀色の手袋のようなものは、ドレスとセットになって

いるイメージがあった。

そうして千里は、自分の服の感触に疑問を覚える。

そして、答えなんかすぐわかると思い至って慌てて自分の服装を見下ろした。

「な、なんでっ!?!」

着ていたのは、制服を改造した鎧ではない。

銀と真紅で彩られた、華美なドレスだった。

目が覚めた時点で気がつくべきのだが、そんなことに気が回らないほどインパクトのある光景だったのだ。千里が鈍いと、責められるものではない。

「うう、誰が着替えさせたんだろう？」

…………… そういえば、ナーリヤに拾われた時も、結局聞けてない」

この世界に来て、服を着替えさせられていた時のことだ。

状況の展開が早かったせいで、未だに聞けていない、聞きそびれたことだった。

「と、とにかく!」

千里は大きく声を出すと、その考えを頭から追い出す。

念のため、身体に妙な感覚やおかしな所がないか確認して一息吐くと、ベッドから降りた。

「現状確認が、先決だよな」

千里はそう自分に言い聞かせると、銀色の豪華なドアノブへ、ゆ

っくりと手を伸ばすのだった。

E
×
I

ぼつぼつと、雨が降り出す。
空には暗雲が渦巻き、風には氷雪が混じり、
一帯に銀の稲妻が走

り出す。

突然悪くなった気候に、自然の生命である海獣が、警戒心から呻り声を上げた。

「なんだ、いったい？」

相棒、レグルスに魚を与えていたラオが、その不気味な空にそう呟く。

まるで“海淵の王”が現れたかのような、そんな空間だった。

「いったん、小屋に戻るか。」

大人しくしているよ、レグルス」

『グルルルル』

呻り声で返事をするレグルスを一瞥すると、ラオはそつと踵を返す。

豪雨だけならまだしも、稲妻に氷雪まで混じると、尋常なことではない。

「ラオさん！」

「あん？」

名を呼ばれて、顔を上げる。

そこには、肩で息をするナーリヤの姿があった。

「おい、嬢ちゃんはどうした？」

ナーリヤの切羽詰まった表情を見て、ラオは訝しげに訊ねた。

ラオのその言葉を受けたナーリヤは、唇を噛みながらそれに応える。

まるで……血を吐き出すように。

「浚われ、ました」

「なんだと？」

……ちっ、詳しく話せ」

稲妻が海に落ち、轟音が響く。

刹那の間輝いた閃光は、悔しげなナーリヤの表情を浮き彫りにしていた。

十

小屋に入ったナーリヤは、弓と矢の準備をしながら状況を説明した。

そして、簡単にそれを説明し終わると、用意した弓と矢を持って小屋から飛び出そうとする。

「闇雲に出て行ってどうするつもりだッ！」

「っ、でも」

ナーリヤも錯乱しているのか、唇を噛んで反論をしようとする。だがそれは、ナーリヤが口を開く前にラオが制した

「落ち着けていってんだろうが！」

そんな気持ちで助けられるなんて、甘ったれたことを考えるなッ

「っ!……はい」

叱責されて、ナーリヤは漸く立ち止まる。

そんなナーリヤに、ラオはため息を吐いた。

「十中八九、城だろう。」

あそこ以外には考えられねえ」

「なら、早く助けに行かないと!」

落ち着こうと椅子に座ったナーリヤが、再び腰を浮かす。

そのナーリヤの行動に、ラオは鋭さを滲ませた目で呆れながらナーリヤを止める。

「はあ、それで？」

助けるって言っても、まさか正面突破するつもりじゃ、ねえだろ
うな?」

「え……あ」

興奮していたのか、その辺りのことをまったく考えていなかったようだ。

ナーリヤは思った以上に動揺する自身の気持ちを、なんとか抑え込もうと深呼吸をする。

「あのバカでかい城に突入して、見つけられるのか？」

「そう、ですよ。」

まずはどこに捕らえられているのか、探る必要がある、か」

ナーリヤは顎に手を当てると、そう思考し始める。

ナーリヤの目を持ってすれば、あまり近づかずに城を観察することが出来る。

そうして、千里が捕まっている部屋を見つけるとというのが、ベタな方法だろうとナーリヤは頷いた。

「問題は、嬢ちゃんが窓のない部屋に幽閉されている場合か」

提案を聞いたラオは、呻りながらそう言う。

窓のない部屋……すなわち、地下室や隠し部屋に閉じ込められていた場合だ。

これでは、周囲から見て千里を見つけることは、難しい。

「城の見取り図でもあれば……いや、詮無いことですね」

不確かな物に縋ろうとする。

普段のナーリヤならば、しないことだった。

それほどまでに、ナーリヤは追い詰められていたのだろう。握りしめられた腕からは、赤い雫が一筋、流れ出していた。

「はあ、坊主」

「なん、ですか？」

「……っづづ?!」

ラオはため息を一つ吐き出すと、鋼鉄の左腕でナーリヤの頭を小突いた。

フツクの角が当たったのか、ナーリヤは涙目になって頭を抑える。

「なっ、なに、を？」

抗議しようにも、思ったよりダメージが長引いて悶絶していた。

その痛そうな様子に悪いと思ったのか、ラオは目を逸らして頬を掻く。

しかし謝らない。状況的に。

「狩りをする時、命を賭ける時。

……おまえは、そんな茹だった頭で矢を番えているのか？」

「え……」

いえ、そうです、ね」

散々窘められたのに、まだ冷静ではなかった。

痛みを伴って漸くそのことに気がつき、ナーリヤは羞恥と共に冷静さを取り戻す。

「まずは外周から中の様子を確認。

時間をかけたくはありません。

ですから、なるべく見つからないように侵入して千里を捜します」
「わかった。

なら俺は、城の裏手

……丘の下に、船を着けておく」

プランは簡単だ。

救出して、その後ラオの船に乗って逃げる。

統治者とは一戦も交えることなく、さっさと立ち去るのが最良だと考えたのだ。

「わざわざ連れ去ったんだ。

命の危険は考えなくても良いと思うが……」

「はい。

なるべく早く、千里を助け出します」

蝙蝠を操って遠距離から人間一人を浚う。

それが本当に統治者なのか、それとも城に住む他の者なのかは解らない。

だがいずれにしても実力者で、その実力者が“ただ”浚うだけ浚っていった。

その気になれば、傷つけることだって出来ただろうに。

ナーリヤは小屋から出ると、マントについたフードを被る。

腰にはセアツクから引き継いだはぎ取り用のナイフと、クリフの短剣。

背には矢筒と、“ウルド”ガル”バリスター 闇を穿つ大弩”を背負う。

「二人とも無事に帰ってこい。

……いいな？」

「はい……ッ！」

背を向け合い、頷く。

そして、ナーリヤはその漆黒の双眸に、銀に輝く城を収めた。

稲妻が走り、空が黄金に輝く。

その豪雨と吹雪を斬り裂くように、ナーリヤは勢いよく走り出すのだった。

十

「うつぬううつつ！！」

とても人には聞かせられないような、呻り声。

鈴の転がるような綺麗な音は今、低く切羽詰まったモノとなって

いた。

「つぬぬぬっ

………っはあっ、はあっ、はあっ」

銀色のドアノブ。

か細い手が白くなるほど、千里は力を込めてそれを捻っていたのだ。

押せども引けども動かないそれに、ついに諦めたのか両手を離す。その際、バランスを崩して倒れそうになるが、一步二歩と下がってなんとか体制を整えた。

「一時、休戦が必要ね」

どうやら、諦めた訳ではないようだ。

千里は宿命のライバルを見るような目つきでドアノブを睨むと、大きく息を吐いて肩を落とした。

この部屋に来てどれほどの時間が過ぎたのか。

千里は体感で三十分以上は、このドアノブと格闘していた。外に出て状況を確認しようとしたはいいが、出られなかったのだ。

「うーん。

鍵穴も、無いんだよね」

肩を落として、そう呟く。

光の剣を小さくして鍵穴にさせば何とかなる。

そんな安直な考えは、試す前に打ち破られたのだった。

「ナーリヤ、心配してるよね」

ベッドに腰を落とすと、背中を投げ出す。
音もなく自分の身体がシーツに吸い込まれて、千里は慣れないその感触に嘆息した。

脳裏に浮かぶのは、優しい少年の顔。

友達が自分のせいで辛い思いをしていると考えたと、それだけで胸が痛む。

棘が刺さったような、“鈍くて鋭い”という、どこか矛盾した痛みだった。

「はあ」

「コン、コンコン」

「っ」

聞こえてきた、ノックの音。

ため息を吐いていた千里は、その音に警戒して身体を起こした。

いつでも攻撃できるよう、また身を守ることが出来るように、光の剣を喚び出す構えをしておくのも、忘れない。

「入るぞ」

低く冷たい声だった。

その声に込められた妖艶な旋律に、千里は肩を振るわせる。

その震えが指し示すのは、生物としての危機反応か、女性としての警戒心か。

千里は判断できずに戸惑いながらも、内側に開く宿敵を睨み付けていた。

「ほう、目が覚めたか。」

我が愛しの “姫君” よ」

そう気障ったらしい口調で千里を見るのは、三十に届かない程度の背格好の、男性だった。

千里はその青年の姿に、思わず目を瞠る。

腰まで流れる銀髪は、月を溶かしたように妖しく輝き。

彫刻のように整った顔立ちに飾られた真紅の双眸は、ルビーのように美しい。

ただ立っているだけでその身体は銀に輝いて見え、漆黒の燕尾服が王族の装束のように演出されていた。

「クク、

我が姫君は、ずいぶんと“初心”なようだ」

「そのようですよ。ご主人」

青年の後ろに控える、可愛らしい声。

その声に千里は、漸く我に返った。

「っ……貴方、は？」

絞り出されるように放たれたのは、そんな疑問だった。

こんな言葉しか出せないほどに圧倒されながらも、千里は睨み付けることを止めない。

「おっと、自己紹介がまだだったね」

青年はそういうと、何もない空間に腰をかける。

空中に風の椅子でも置いてあるのか、自然で優雅な動きだった。

「私の名前はエクス。
ここ、“ニーズアルへ”の統治者……“エクス・オン＝イーエル
ハイト”だ」

足を組み、名を告げる。

ただそれだけの行動が、彼の威厳を醸し出す。

千里がまだ見たことのない……上に立つ者の“カリスマ”だった。

「私、は

……私は千里。千里＝高峯」

自身の名を唱えることで、“自分”を取り戻す。

こんなところで折れる訳にはいかないと、その双眸で語っていた。

「チサト、か。

“改めて”聞くが、うむ、良い名だ」

「あ、ありが……“改めて”？」

名を褒められて、反射的に礼を言う。

両親に愛情を持ってつけられた名前なのだから、褒められれば嬉
しい。

ただ、この状況で言ってしまうのは、些か抜けていると言わざる
を得ないが。

「歓迎しよう！」

ようこそ、我が城……“がつむぎんれいじょう月夢銀嶺城”へ！」

ネーミングセンスはないようだ。

千里は、胸を張った青年 エクスを見て顔を引きつらせる。

銀一色の城に住んでいる時点で、センスを疑ってはいたのだが。

「私を、どうする気？」

改めてという言葉については、華麗に流されたのでそれ以上は追求しない。

追求しても、疲れるだけで何も得られないという、千里の“直感”だった。

「どうする？」

クク、解っているだろう？」

エクスはゆっくりと立ち上がると、滑らかな動きで千里に近づいた。

その隙のない素早い動きに、千里は辛うじて、ではあるが反応してみせる。

「っ 剣よー！」

後ろに飛び退きながら、手をかざして光の剣を生み出す。

そしてそれを腰ために構えると、エクスに向かって振り抜いた。

「せえいっ！」

「ククッ」

横薙ぎに振るわれた剛剣を、エクスは優雅な礼で躲す。

そして頭を上げると、剣を持つ千里の手を絡め取った。

「なっ」

「力はあるても、技術は足りないようだ」

エクスは、人外の力を以て千里を捕まえる。
左手一本で、千里の腰の後ろにその両手を拘束して見せたのだ。

エクスは薄く笑うと、残った右手で千里の顎を持ち上げる。
すると、未だ鋭く睨み付ける千里の栗色の目を、上から見下ろした。

「私は君が欲しいのだよ。
愛しい我が、姫君よ」

独占欲。

強者に備えられた傲慢が、千里の瞳を絡め取る。
その真紅が纏う魅了を、千里は意志の力で弾く。

だがその力は……先ほどまでよりも、弱々しいモノになっていた。
「まあ、そう急かすつもりはない。
時間はたっぷりあるのだ。もう少し考えるがいい」

エクスはそう良いながら、千里を解放する。
漸く圧迫感から解放された千里は、光の剣を支えにすることで何とか腰を落とさずに持ちこたえていた。

「彼女の世話は頼んだよ、ダーク」
「はいですニャー！」

先ほどの可愛らしい声が、響く。
エクスの影で、ずっと姿が見えないが、幼げな声だった。

「ゆっくりと、考えておけ。」

どうせ逃げられはしないと、自身に言い聞かせるがいい。
ククツ……ハーツハハハハハハツツ……!!」

笑い声が、木霊する。

その声を不快に思いながら、千里はおぼつかない足取りでベッドに倒れ込んだ。

どうにも、精神的な疲労が襲ってきたようだった。

「さて、お嬢様？」

可愛らしい声が、千里を呼ぶ。

だが千里はその声の主を確認する前に……静かに瞼を落とすのだった。

五章 第二話 銀月の王（後書き）

今回は短めに。

次回とその次は長めになります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

五章 第三話 吸血城のロンド 前編

銀で彩られた城。

その一室で、エクスは銀の大きな椅子に座っていた。目を閉じて思い浮かべるのは、栗色の髪と瞳を持つ、一人の少女。欲しいと望み捕らえた、自分に“並ぶ資格”を持つ者。

「足掻きたければ、足掻けばいい。

戸惑う時間が欲しいのなら、くれてやろう。

最早君は私の手のひらの中にあるのだよ……千里」

傲慢に、不遜に、笑みを浮かべる。

その瞳に映るのは、絶対なる強者の自信だった。

「うん？

……ああ、そういえば“いた”な」

エクスは気怠げに立ち上がる。

彼は、己が王であると……“魔王”であるという自覚があった。

それはともすれば自意識過剰と言われるだろう。

しかし、強者たる“自信”が、エクスを“王”として魅せていた。

「さてさて、

勇敢なる“英雄”を迎え入れるのも、“魔王”の責務か」

エクスは肩を竦めると、真紅の絨毯を踏みしめ歩き出す。

その姿はまさに……“王の凱旋”といえる姿だった。

E
x
I

外周をぐるりと廻る。
茨の森を越え、薔薇の園を抜けたその先で、
ナーリヤは城を見上げていた。

「結果、つてやつかな」

窓ガラスは、いくつもある。

中にはステンドグラスのように煌びやかなモノまであって、目が痛い。

だが、不思議とその窓は全て、向こう側が覗けないようになっていた。

「仕方がないか」

ナーリヤは一人呟くと、どこか入れる場所がないか探す。

正門からは離れて、慎重に行動していた。

「裏門、かな」

そうしている内に、ナーリヤは小さな扉を見つけた。

ナーリヤはフードの下で真剣な表情を浮かべると、その扉に近づく。

城に近づく度に、茨がその密度を増していく。

それなのに、城の壁には茨が巻き付いている様子はなく、不自然なほど綺麗だ。

その奇妙な光景、不気味な城に近づくのに抵抗を覚えながらも、ナーリヤはドアノブを掴む。

「開かないか。」

「……それならッ！」

ドアノブを捻り、開かないことを確認する。

するとナーリヤは、クリフに貫った短剣を、勢いよくドアに叩きつけた。

ガンツ、ガンツ、ガキンツ

二度三度とぶつけると、漸く鍵が壊れる。

大きな音を立ててしまった以上は長居は出来ないだろうと、ナリーヤは開いたドアに身体を滑り込ませた。

「まだ気がつかれては、いないかな」

しんと静まりかえった、銀の廊下。

装飾品から壁、天井まで全て銀色に染められていて、唯一床だけは血のように赤い真紅の絨毯が敷かれていた。

「人の気配がない？」

いや、それなら好都合か」

誰かが生活している、“人の気配”が無い空間。

奇妙ではあるが、人の気配がある所を探せばいいという意味では楽だった。

風潰しに部屋を開けて探すよりも、ずっとリスクが少なく効率的だ。

「どうか、無事で」

ナリーヤは小さく呟くと、広い廊下を走り出す。

その背には、未だ焦燥の色が強く残っている。

「焦っちゃダメだって、解っているつもりだったんだけどなあ」

口から零れるのは、自覚の言葉だった。

絨毯を叩く柔らかい音が、廊下に木霊する。

その中でナーリヤは、必死に集中力を研ぎ澄ませていた。

「気配……こつちか」

廊下を曲がり、絨毯を踏みしめ、壁に手をつき進んでいく。

これで千里でなかったら、その住人に聞き出せばいい。

言葉が通じるかどうかというのは心配だが、口を割らない程度ならどうにでもなる。

「どうにでも、してみせる」

音にして零れた言葉。

その声を放った時の表情は、俯いているため伺えない。

だが、クリフの短剣を握る右手は、心なしか震えているようにも見えた。

「ここか」

大きな扉の前で、足を止める。

自分を誘うように少しだけ開いた、銀色の扉だ。

ナーリヤは両開きのその扉の、ドアノブを掴む。

そして、少しずつ押し開いていった。

「暗い」

ナーリヤは、舞い上がった埃で咳き込まないように、外套を翻して口元に当てる。

人の入った形跡のない部屋は暗く、かび臭い。

敵地で明かりをつけるのは心配だったが、手がかりには変えられないだろうと、ナーリヤは火石を取り出した。

ラオの船に置いてあったそれを、一つだけ借りてきたのだ。

ガンッ

地面に置いた火石に、火を灯させる。

そうすることで、周囲がぼんやりとだが明るくなった。

「人影？」

……いや、鎧かな？」

壁に横たわる、銀製の鎧。

ナーリヤは火石を短剣の上に掬い上げると、ランプ代わりにしてその鎧に近づいた。

朱色の光が揺らめき、その鎧の全容を照らす。

そしてその姿を確認すると、ナーリヤは眉をしかめた。

「人の骨、か」

旅人だろうか。

銀製の鎧に、白いマント。

大きな盾に描かれているのは、青い十字架だった。

その脇に転がるのは、鎧の主の物であろう、大きな槍だ。

鋼鉄製の穂先を持つシンプルな槍で、二メートルほどもある。

これを振り回すには、それ相応の技術と体力、それに経験が必要だろう。

「これは……この人の遺品、かな？」

もうこの場を離れるなり、他のことを調べるなりした方が良いでしょう。

それは解っているのだが、ナーリヤは自分でも理解できない感情に突き動かされてその首飾りを拾い上げた。

「十字の、首飾り？」

布を纏い頭に草の冠を乗せた男性が、十字架に磔にされている首飾り。

その意図するところが解らず、首をかしげる。

「これはいつたい……」

「それは“彼”の神、だ」

「っ!？」

響いてきた声に、ナーリヤは弓を構えながら振り向く。

その際に素早く火石の火を消して、ナイフを収めていた。こちらの姿だけ見えるのでは、良いのだ。

そう判断したナーリヤだったが、その考えは杞憂となる。

「ふむ、私の姿が見えないか。

人間とは不便だな」

月明かりすら入らない、漆黒の間。

いくら暗闇に慣れているとはいえ、それは月明かりがあることが前提だった。

パチンツ

指を弾く音。

それと同時に、その空間に明かりが灯る。

銀に輝くシャンデリア、無数に揺らめく蝋燭の火、銀の炎の不思議なランプ。

その全てが一斉に灯り、空間を照らした。

「これ、は」

その不可思議な現象に、ナーリヤは言葉を失う。

それは魔法とはまた違った、一つの奇跡のように見えていたのだ。

「あなた、は」

「ふむ、私に名乗らせるか。

……まあいいだろう。今日の私は機嫌が良い」

銀と真紅で彩られた、ダンスホール。

高い天井と大きなシャンデリア、ステンドグラスは光が入り込まない特殊な物。

その一番奥、大きな階段の上に掛けられた肖像画と、同一の顔立ち。

いや、それは自分の姿を描かせた物なのだろう。

流れる銀の髪と真紅の瞳を携えた、“傲岸不遜”のカリスマ。人ならざる気配の“王者”が、周囲の銀に彩られて佇んでいた。

「我が名は“エクス・オン”イーエルハイト”

全ての“夜”の頂点に立ちし最強種 “銀月の吸血王”なるぞー」

人の血を吸い、生気を吸収し、隷属させる種族。

それが、“吸血鬼”だ。

長命種たる彼らは、他の長命種よりも傲慢で、それ故に強大な力を持つ。

その中でもずば抜けた力を持つが故に、エクスはこの地を支配するに至ったのだ。

他の全ての吸血鬼を、この地より追放することだ。

「あなたが……千里を」

「ほう、彼女を連れ戻しに来た、ということか？」

呑み込まれていた。

その事を自覚しながらも、ナーリヤはエクスを鋭く睨み付ける。千里を助けたいというその思いだけで、圧倒的なプレッシャーを押しつけていた。

「勇敢だな。」

その勇気に免じて　生きて帰ることを許そう」

「なにを？」

エクスは傲慢に言い放つと、何もない空間に腰を下ろして、足を組む。

そして、まるで玉座に座っているかのように、頬杖をついて笑った。

「わからんか？」

……見ていてやるから、逃げ帰ることを許そうといったのだ」

言い放つエクスの言葉。

死にたくなければ、千里を置いて逃げる。

そう見下しながら言ったエクスのその言葉に、ナーリヤは険しい表情を浮かべる。

「どうした？」

私の気が変わらないうちに逃げるのが、得策だろうか？」

「せ」

「なんだ？」

ため息を吐きながら追い払うように手を振るエクス。その様子を睨み付けながら、ナーリヤは激情を紡ぐ。

「千里を、返せッ！」

噛みつかんばかりに吠える、ナーリヤ。

その様子を、エクスは鼻で笑う。

「返せ？」

ククッ……おかしな事を言うのだな。

本当に、返して欲しいと思っているのか？」

「何を、戯れ言を！」

怒りのままに声を荒げるナーリヤを、エクスは態度だけで見下していた。

その余裕を感じ取りながらも、激情は揺るがない。

「ふむ、そうだな。

貴様はあの時

あの“柱”を見て、どう思った？」

「っ……」

言葉に、詰まる。

どうして知っているのか、わからない。
だがそれ以上に……戸惑いを、晒された。

「怖い”

……そう感じたのでは、ないのかね？」

エクスという言葉は、止まらない。

ただその音は、刃となってナーリヤを抉る。

「ち、がう。僕は……ッ」

「隠す必要はない」

口の中で、笑う。

蔑みの声、責め立てる言葉。

止まることなく紡がれるその旋律に、ナーリヤは唇を噛む。

「強大な力に対して人間が見せる反応は、それで正しい」

腕を広げて、諭すように言葉を紡ぐ。

言葉は言霊となり、その音に明確な意志を乗せて、ナーリヤを貫く。

「だからこそ、強大な力を持つ者の隣には

同じように、“強大な力”を持つ“似た者”が立つ必要があるのだよ」

ナーリヤにその資格はなく、自分にはその権利がある。

そう歪んだ笑みで言い放つエクスには、強者に相応しいプレッシ

ヤーがあつた。

「そんな、もの……関係、ない。
千里を……千里を返せ！」

動揺を押し隠しながらも、ナーリヤは必死に言葉を紡ぐ。
弓を持つその左手は、血の気が引くほどに強く握られていた。

「返せ？」

彼女は貴様の物ではないだろうか？」

「物”なんかじゃない。

彼女は僕の “友達” だ！」

友達だ。

友達だから、目の前の男に“だけ”は、渡せない。
ナーリヤは荒れ狂う激情と一握りの戸惑いを、その漆黒の双眸に
乗せてエクスを睨む。

「フン、そうか。

ならば、無礼な“ご友人”には退場願おうか」

エクスは立ち上がると、構えることなく両手を広げる。
すると、エクスから半径二メートルほどの空間に、突如として暗
雲が広がった。

「さあ、立ち去るがいい。

この世という、舞台からなッ！！」

「立ち去るのはおまえだ。

舞台から落ちろ、吸血鬼ッ！！」

黒の大弩を構えて、弓を番える。

そのナーリヤを見て凄惨に笑いながら、エクスは腕を振り上げた。

迸る稲妻。

駆け抜ける漆黒。

銀と黒が、ぶつかる。

†

覚醒は、すぐだった。

異世界に来て強化された千里の身体は、疲労すらもほんの数分の

睡眠で癒す。

その間隔がだんだんと短くなっていることに、千里はまだ気がついていなかった。

「あ……う」

気怠げな身体。

急激に疲れが癒されたことで感じる、精神的な違和感だった。その奇妙な感覚を、千里は頭の隅に追いやる。

「お目覚めですかニヤ」

「っ！」

耳に届いた声に、千里はベッドから飛び起きた。

身構えながら、声の聞こえた方に顔を向ける。

するとそこには……一匹の、猫が“立って”いた。

「猫？」

毛先の白い、毛先から“Y”の字に分かれた尻尾。

黒毛で目は銀色。当然、瞳孔は縦に割れている。

器用に二足歩行していて、その六十センチほどの身体には執事服を纏っていた。

「^{シーラ}猫？」

あんな毛玉生物と一緒にしないで欲しいですニヤ」

猫の言葉で、千里はアロイアの毛玉猫を思い浮かべる。

世間一般の“猫”は、こちらではシーラかと思っていた千里にとって、驚くべき光景だった。見た目は千里の世界の猫なのに、二足

歩行で尾が二又なのだから。

「ボクはケルト。」

誇り高き妖精族の猫妖精ニヤ」

「猫、妖精？」

えーと……猫又？」

ぱっと思いついたのは、日本の妖怪“猫又”だった。
夜な夜な油を舐めて主の仇を討つ、“鍋島の化け猫騒動”に出てくる猫の変化だ。

「だから、

猫妖精ケルトですニヤ」

「猫又？」

「そうですニヤ」

漸く千里が理解して、相手に伝わる。

ハッキリと自分の種族名が呼ばれたことに満足して、猫はこくりと頷いた。

「改めまして。

ボクの名前は“ダーク”

銀月の吸血王、エクス様の忠実なる下僕にして、血を分けられし眷属ですニヤ」

猫　ダークは、エクスの配下であるということ、胸を張って告げた。

その様子はどこか滑稽で、それでいて誇らしげだった。

「知っているみたいだけど

……私の名前は千里だよ、ダーク」

「これはこれは「丁寧」に、

ありがとうございますなのニヤ」

ダークは、愛くるしい見た目で綺麗な礼をしてみせた。容姿が容姿なので、子供向けの玩具のようにも見える。

「ダークは……」

うっん、エクスは私をどうするつもりなの？」

不安と警戒心。

その二つが混ざり合った声で、千里が問う。

「主は、お嬢様を伴侶にと考えておられますニヤ」

「伴侶って、奥さん、だよな？」

はあ……言い方からそんなような気はしてたけど」

エクスに“姫君”と呼ばれて、そんな気はしていたのだ。だからこそ、千里は不思議でならないことがあった。

「どうして、私なの？」

エクスは、まるで芸術品のような美しさを持つ、絶世の美青年だ。人を惑わす端正な顔、怪しさを秘めたルビーの瞳、月を呑み込む銀の髪。

友人達の身内びいきで考えれば、千里は“可愛い”部類なのかも知れない。

けれど、そんな飛び抜けた美貌を持つ男性に好かれるほどの容姿を持っている自信は、当然ながら無かったのだ。

「主は、ずっとお嬢様のことを“眷属”の視界を通して見ておいででしたニヤ。」

アロイアの街で偶然見かけて、それからずっと」

アロイアの街。

そこから“見られていた”ということに、千里は言いようのない羞恥を覚えた。

見られていたら恥ずかしいだろう……そんな風に思った場面が、いくつか思い浮かんでしまったためだった。

千里は頬にさした朱を誤魔化すために、目で続きを促した。

「道中で、お嬢様は強大な力を持つことが解りました。

興味本位で見っていた主も、その力を見てたいそう驚かされていたのですニヤ」

「力……光の、剣」

喚び出そうと思えば、いつでも喚ぶことが出来る剣。

その力が“目当て”なのだとしたら、それはそれで悲しい。そして同時に、どこか腹立たしくもあった。

「決め手は、海の魔獣との戦いですニヤ。」

人知を越えた強大な力、他者を圧倒する強者の器。

それらの力を宿す“意味”は………“孤独”ですニヤ」
「孤独？」

強い力を持つ者は、“一人ぼっち”になる。

並び立てる者はおらず、やがて一人になってしまふ。

「主は、孤高であることを誇りに思っていますニヤ。」

けれど、並び立てる者が居るのなら、その者を隣に置くことも厭いませんニヤ。

それでも望むことの無かった主が、始めて望まれたのがお嬢様ですのニヤ」

ダークは目を伏せながら、淡々と語る。

忠誠を持って仕える主人の助けになろうと、その思いを吐露する。

「強大な力を持つ存在は、いずれ孤独になりますニヤ。

そしてその“いずれ”は、きつと近いうちに訪れますニヤ。

強大な力を持つ者は、強大な力を持つ存在以外には認められませんニヤ」

ダークは、考え込む千里に、追い打ちをかける。

その瞳が、ネズミを追い立てる“ハンター”のものになっていることに、千里は気がつかない。この猫は、割と強かな猫だった。

「そう……………“あの者”では、その資格は無いのですニヤ」

「え？」

千里が、ダークの言葉に反応して顔を上げる。

そんな千里を見ながら、ダークは続けた。

「主が直々に出向かれ、説得しましたのニヤ。

今頃は、もう船に乗って帰っているところで」

「ナーリヤが来てるの?!」

そ、そうだ。ナーリヤ、絶対エクスに挑んでる!」

ナーリヤの性格。

長い時間を過ごした訳ではないが、時折頑固なあの“友達”が、

説得程度で帰るとは思えない。ダークの言葉よりも、自分の経験とナーリヤへの“信頼”の方がずっと信用できるからこそその、判断だった。

「し、失敗だったかニヤ？」

ゴホンツ……それももう、決着がつきますニヤ。

そうすれば、お嬢様は晴れてこの城の一員。

覚悟を決めておきますよう、お願いしますニヤ」

ダークは礼をすると、素早く身を翻して退出する。

千里は開かれた扉に身体を滑り込ませようと走るが、一歩間に合わずに扉を両手で叩いた。

「あつ、もう！」

ドアノブを掴むが、当然のように開かない。

千里はそのまま、ずるずるとへたり込んだ。

「ナーリヤが、戦ってる」

声に出して、それから唇を噛む。

強大な力を持つ存在、圧倒的なプレッシャーを持っていたエクスト、ナーリヤが戦っている。

その結末にあり得る“最悪”を思い浮かべて、千里は強く手を握りしめた。

視線は床に落とし、耐えるように目を瞑る。

悔しげにしかめられた眉と、青くなっていく唇が、彼女の焦燥を表していた。

「脱出、しなきゃ」

助けなければ、ならない。

助けたいと、千里はふらりと立ち上がる。

「イル＝リウラス」

光が手の中に生まれ、剣となる。

千里は扉から三歩下がると、剣を振りかぶった。

「せい！」

ガンッ

だが 扉を打ち破ることは、できなかつた。

「なん、で」

何度も叩きつけるが、結果は同じ。

弾かれて、体勢を崩す。

「魔法の一種、なのかな？」

いや、生き物以外には効きにくいのかも」

強いていうのなら、両方なのだろう。

魔法だけならば、光の剣は通じる。

だが、それに“純粹に丈夫な扉”という要素が加わるだけで、光の剣は威力を削られていたのだ。

「どうにかしないと」

声に出してみても、変わらない。
焦りだけが加速して、千里の胸を締め付ける。

「イルリウラス……光より顕れる者。
あれ？そういえば、“剣”って言ってない」

胸の内側から浮かび上がった、言葉。

その詠唱に“剣”という単語が入っていないことに、今更ながらに気がついた。

「ふう」

大きく息を吐いて、神経を研ぎ澄ませる。

その呼吸に呼応するように光の剣が輝き、その形状を変えていく。

「できた」

ハンマーのような形になった、光の剣。

それで扉を叩いても結果は変わらないのだろうが、それでも出来るが増えれば可能性も増えるのだ。

「生物以外に効きにくい。

普段は……アギトを使ってたから問題がなかった」

それなら剣を使えばいい。

だが、千里自身の力に耐えうる“武器”は、あまり無い。

なんとなくだがそのことを自覚していた千里は、どうにかできない物かと周囲を見ましていた。

「隠し通路とか、何か無いかな」

首を回し、振り返り、踵を返して見る。

シャンデリア、インテリア、ランプ、棚、クローゼット。

そうして見回していた千里は、インテリアの一つで目を止めた。

「剣の、レプリカ」

壁に掛けられた、インテリアの装飾剣。

幅の広いブロードソードで、銀とルビーで彩られていた。

あまり丈夫ではないことは、ごてごてとした装飾で解る。

これだけ色々と細工されていたら、決して丈夫ではないのだろう。

「でも、これなら」

千里は剣を持つと、目を閉じて正眼に構える。

すると、光の膜がゆっくりと広がり、ブロードソードを覆い尽くした。

光り輝く、装飾剣。

それを千里は大上段に振り上げると、目を開いて扉を見据える。

「せえいっ!!」

ガギンツ

振り下ろされた一撃は、扉の鍵を壊して開けた。

同時に装飾剣も折れてしまったが、光の膜によって強化されていたため、この一撃だけは耐えきることができたのだ。

「よしっ!!」

ガッツポーズを作ると、すぐに扉の外に出る。
その開放感に、千里は息を一つ吐き出した。

「なっ、どうやって出たのですニヤ?!」

音を聞きつけて戻ってきた、ダーク。

その姿を見つけると、千里は身体能力をフルに使った動きでダークの首根っこを掴んだ。

「ぐえっ」

鈍い悲鳴を上げるダークに良心がチクリと痛む。

けれど千里はそれを努めて表情に出さないようにして、自分できる最高の“笑み”を浮かべた。

「ニヤ?」

その笑みに戸惑うダークに、千里はナイフサイズにした光の剣を突きつける。

小動物をいじめている感覚に罪悪感が膨れあがるが、気にしている余裕はないのだ。

決して、もふもふしたいなどは、思っでなんかいない。

「ニヤツ?!」

「ナリーヤの居場所。」

それから、私の剣と鎧がどこにあるのか、教えてくれると嬉しいな」

ダークは恐る恐る千里を見て、硬直した。

満面の笑みを浮かべているのは、まあいい。

だが、肝心な“目”が笑っていないのだ。要するに、怖い。

「あ……あつちですニヤ」

ダークは震える身体を隠すこともできずに、肉球で廊下の奥を示す。

千里はそんなダークに、やはり目が笑っていない笑みを浮かべて、もう一言付け加える。

「まずは剣と鎧。

道案内、してくれるよね？」

「……………はいですニヤ」

折れるまで、そんなに時間はかからなかったようだ。

ダークは首根っこを掴まれて剣を突きつけられているため、抵抗もできずに了承する。

そんなダークの様子を見て、千里は満足げに頷くのだった。

それは“嵐”だった。

エクスを中心に半径二メートル。

球体状に出現した暗雲は、暴風と氷雪、そして稲妻を携えて呻り声を上げる。

「凍てつけ」

ダンスホールに響き渡る、吸血鬼の宣告。

暗雲より生み出された氷が大きな塊となり、打ち出される。

操れるのは球体状の暗雲の中だけだが、射出してしまえば真っ直ぐ飛んでいく。

「シッ！」

鋭く、息を吐く。

心臓を抉らんと飛来する氷塊を、ナーリヤは剛弓の一撃を以て叩き落とす。

対大型魔獣の大弩から放たれた矢は氷を砕くだけでは飽きたらず、エクスの心臓めがけてつき進んだ。

「片手間に“取れる”と思ったかッ！」

エクスは大きく手を振ると、たったそれだけで矢を弾く。海淵の魔獣すら貫いたその矢は、銀月の王には届かない。だが、その一瞬の隙こそ、ナーリヤの望んだ結果だった。

「先見二手、二射必中ッ！」

動きの先を読んで放たれた、連続射出の矢。

エクスは驚異的な反射神経で立ち直ると、その矢を落とすために氷塊を生み出した。

「この程度……っ」

だが、ナーリヤの矢は氷塊に当たることによって軌道を変えて、エクスの右足を貫いた。

その衝撃によりやや斜めに傾いたエクスの心臓に、二射目の閃光が突き刺さる。

「クッ

ハハハッ……無駄だと言っただろう！」

エクスは笑い声を上げると、身体を霧に変える。

雲のように霧散した身体は暗雲に溶け込み、直ぐに変わらぬ姿と なって再生した。

踊り場からナーリヤを見下しながら戦闘しているエクスは、その場から一步も動いていない。王者の威厳を持ったまま、ただ佇んでいた。

「まだ、まだッ！」

引き絞られた弦が、番えられた矢を射出する。
一息に二射、それを二連続で行う先見の技。

「先見二手、二拍双雨！」
「フンツ、甘い」

降り注ぐ四筋の雨。

それに対して、エクスは四匹の蝙蝠を放つ。
腕を振られただけで出現するその蝙蝠は、彼の“眷属”なのだろう。

その身体に冰雪を纏い、矢を凍らせて弾いた。

いくら経験や相手の呼吸から先を読んで攻撃しても、知らない技を使われたら防がれる。

初見の相手には弱いという、先見の弱点だった。
初見、といっても、共通した“人間”という種族相手には効果がある。弱点と表現するべきモノではないのかも知れないが。

「はぁあっ！」

何度防がれても、ナーリヤは止まらない。

まずは踊り場から叩き落とそうと、限界以上に弦を引き絞る。

黒帝の骨より削り出された、人知を越えた強度を持つ弓。

その漆黒の身体が悲鳴を上げるように軋み、番えられた矢を轟音と共に打ち出した。

「先見二手……ッ一撃必中！」
ドンッ！

その音は、既に矢を放つ音ではない。

それはいうなれば大砲……まさしく“城壁攻略用大型弩砲”^{パリスタ}の名を冠するに相応しい威力を宿していた。

「ぐっ……ぬう！」

その強大な一撃は、エクスの左肩を貫き弾けさせる。

吹き飛ばされてしまえば流石にダメージが残るのか、エクスは身体をぐらつかせた。

「二拍……双雨ッ」

「ちイッ！」

更に降り注ぐ、矢の雨。

それがエクスの足下を削り、そしてついに踊り場から引きずり下ろした。

二人の視線は、これで対等。

ナーリヤは、圧倒的な劣勢状態から、ここまで食らい付いてみせたのだった。

「く、ハハハハッ」

エクスは無様に転げ落ちたことを気に留めた様子もなく、立ち上がる。

ついでに激昂させて隙をつくろうとも考えていたナーリヤだったが、それほど甘い存在ではなかったのだ。

「大した“激情”じゃないか。

なよなよとした“普段”の姿勢は仮面か？」

普段の優しげな風貌とは、比べられないほどの激情。

戦闘と言っただけでは片付けられない苛烈な姿勢に、エクスは笑ってみせた。

「ククッ

中々どうして、面白い。

いいだろう………“戦い”を始めよう」

これまでののは、遊びに過ぎなかったのか。

驚愕を表情に出さないように眉をしかめるナーリヤに、エクスはただ笑っていた。

凄惨に、残酷に、冷徹に、傲慢に……。

「穿て

「っ！」

小さく紡がれた言葉に、ナーリヤは言いようのない悪寒を感じて右に飛ぶ。

そしてその経験から判断された回避行動は、この上なく正解だった。

「【雷霆】」

今までののは、ただ技を“宣言”しているに過ぎなかった。

魔法ではなくエクス自身の能力だから、詠唱はなくても良い。

だが、能力を使う力が“魔力”である以上、詠唱をすれば威力が上がる。

そしてこの一撃は 初めて“詠唱”を用いたモノだった。

暗雲が、極光を放つ。

紫電はいつしか銀に輝き、稲妻はいつしか槍に変化する。
空気を焼く轟音と共に放たれたのは、殺意を纏う銀雷の戦槍だランスった。

「うあっ!?!」

ドオンツ!!

轟音。

ナーリヤの直ぐ横を通り過ぎた稲妻は、銀でできた地面と壁に巨大な爪痕を残した。

それはまるで、大きな龍がその爪を振るった跡のようにも、見えていた。

「良い勘だ。」

だが、いつまで続くかな?」

煌びやかな銀光。

光を放つ“エクスの空間”を前に、ナーリヤは震える足に渴を入れる。

まだ、この戦いは始まったばかりだ。

こんなところで折れる訳にはいかないと、ナーリヤはゆっくりと矢を番えるのだった。

五章 第三話 吸血城のロンド 前編（後書き）

三話前編終了。

次回、早めに後編を投稿し五章の終了としたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第五章 第三話 吸血城のロンド 後編

暗雲に覆われた、銀の城。

その暗黒の景色に、ラオは苦い表情を浮かべた。

「どうなってんだ、あれは」

吐き捨てるように、言う。

作戦に従い島の裏側に回り込んだラオは、舵を取りながらため息を吐く。

想像以上の厄介ごとになったとぼやきながらも、その群青色の目は心配そうに揺れていた。

「レグルス、もう少し頑張れるか？」

『ギャウツ』

嵐の中なのに、波の激しい島の裏側にいなくてはならない。その事を危惧して相棒に訊ねると、実に頼もしい返事が来た。

「流石は、俺の相棒だ」

『ガウツ』

当然だ、と激しい波に耐えながら、レグルスは胸を張る。

その姿は頼もしく、ラオは負けじと力強く頷いた。

息の合った、理想のコンビである。

「無事に帰って来いよ。」

……坊主、嬢ちゃん」

紡がれた言葉。

その不安が入り交じった声は、嵐の中へ吸い込まれていった。

E
×
I

城の一室。

銀でできた部屋の一つで、千里は白銀のドレスを脱ぎ捨てた。

ネクタイを締め、ベルトを留め、ブーツを履いて大剣を背負う。
元のとおり、モノクロカラーの服装に戻ったことで、千里は安堵の息を吐いた。

「さて、と」

ナーリヤの居場所は、聞き出した。

ダンスホールがどこなのかを聞き忘れたのは痛い、城の中心から伝わってくる“プレッシャー”を辿れば、問題なく行き着くことができるだろう。

「プレッシャーって

……なんだか、漫画のキャラクターみたいだ」

弟が持っていた漫画。

勇者が冒険するような英雄譚から、とんでも設定の超能力モノ。そんな作品に出てきたキャラクターのことを思い出して、千里は苦笑する。

「あっち、かな」

部屋から出て、廊下に立つ。

なんとなくでもいいから方角を確かめると、全力で走り出した。
絨毯を叩く音は次第に大きくなり、やがて地面に罅を入れるほどに加速する。

飛ぶように階段を下りて、壁を掴んで直角に角を曲がり、駆け抜

ける衝撃で調度品の壺やランプを叩き落とす。

そうして辿り着いたのは、玄関ホールだった。
ここから更にまっすぐ抜ければ、大きなプレッシャーの元へ辿り着く。

玄関脇の扉から出てきた千里は、エクストと対峙する覚悟を決めて、
玄関から真っ直ぐ伸びた位置にある大きな扉を見上げた。

「よしっ！」

待っていてね。ナーリヤ

扉を開けるために、銀のドアノブに手を伸ばす。
けれど千里は、唐突に“嫌な予感”がして飛び退いた。

「っ！」

ガンッ

扉の前に突き刺さる、銀の剣と、槍と斧。
まるで壁のように突き刺さったそれらに眉をしかめると、千里は
大剣の柄に手を掛けながら振り向いた。

「そこまでですニヤ」

愛くるしい声。

だが、その声には明確な“敵意”が宿っていた。

自分の周囲に鉄塊のような巨大な剣を浮かべた、猫妖精^{ケルト}。
ダークは、執事服姿で綺麗に背筋を伸ばして佇んでいた。

「主の所には、行かせませんニヤ」

「ダーク……」

ダークは鋭い目で千里を睨む。
脅されてうつかり居場所を喋ってしまったことは、忘れることにしたようだ。

「あのね私はナーリヤの所へ行くの！

……例えそれが言葉の上でも、

誰があんな“エセイケメン”の所へ行く、なんて言うもんかつ！」

子供の理屈。

だが千里は、本当に嫌そうに吐き捨てた。
そんな千里に、ダークは首をかしげる。

「似非……いけめん？」

「え、えーと。」

イケメンって言うのは、顔が良いとかそーゆー……」

「主を褒めていらっしやるのですニヤね？」

「違う！似非だってばっ！」

緊張感のないやりとりだ。

思わず説明して、そして突っ込んでしまっ。

千里は顔を怒りで赤くして叫びながらも、時間を取られてしまったことに歯がみした。

「とにかく！」

……ナーリヤの所へ、行かせて貰うから！」

「させません。」

そういったはずですよニヤ」

ダークは、ピンクの肉球を空に掲げる。

千里はダークの側に浮かぶ三メートルもある大剣を警戒しながら、アギトを抜き放った。

「ふっふっふっ

見るがいいニヤ……これがボクの最高傑作！

【来たれ！猫専用強化鎧骨格三式！】」

ダークの詠唱で、天井が割れる。

ギミツク的な意味ではなく、文字どおり天井を突き破って、“それ”は出現した。

分厚い鋼鉄と白銀。

全長三メートルほどの、強大な体躯。

従えられた鉄塊剣を掴み取り、身体の前に掲げて立つフルプレートアーマー。

巨人のような西洋騎士が、あるべき“中身”を持たずに仁王立ちしていた。

「とっつ！ニヤ！」

ダークはそれに向かって跳躍すると、左肩の上に乗る。

そして、兜を外して被ると、ロボットを操縦するかのようになり込んだ。

千里はその様子を、ただ呆然と眺めていた。

「ろ、ろぼつと？」

「これがボクの、決戦兵器だニヤ！」

小物を動かす程度の念動力。

それが本来の、猫妖精の能力だった。

だが、ダークはただの猫妖精ではない。

銀月の吸血王という異名で恐れられた、最強の吸血鬼。

その血を分けられて眷属となったダークは、巨大なモノを動かすだけではなく、魔法も操る事が出来るようになっていたのだ。

重鎧の腕が動き、剣を振りかぶる。

その圧倒的な存在感に、しかし千里は怯むことなく対峙する。

ここで退いたら、それで終わり。何も解決することはない。

だから千里の双眸には、未だ強い意志の炎が燃えさかっていた。

「行くですニヤ！」

突くことを考慮していない、分厚い剣が振り下ろされる。

殺すつもりなのか、その一撃は縦一直線に風を切って突き進んできた。

それを千里は、真正面から迎え撃つ。

左から横薙ぎに振るわれたアギトが、鉄塊剣に接触する。

「ツらあっ！」

ズンッ！

瞬間、千里を中心に地面が陥没。

華奢な身体から想像もできないような腕力で、鉄塊剣をはじき返した。

ダークは返ってきた衝撃に驚くが、それも僅かな時間に過ぎない。再び振るわれた鉄塊剣が千里を襲い、千里はそれを迎え撃つ。

ガンッ

火花が散り

一合混じり、火閃となる。

ガンッ

瓦礫が舞い

二合交じり、突風となる。

ガンッ

空間から、音が消える！

三合音が重なる頃には、ただ剣戟の残滓が、光の筋として残るだけとなった。

衝突し合う度に巻き起こる衝撃は、既に人知の及ぶモノではない。人間では辿り着くことのできない、“化け物”同士の境地というべき、極限の世界。

力によって生み出された嵐は、豪華絢爛な玄関ホールを、痛々しく戦場の傷跡を残す瓦礫の山へと変えていった。

「は、あっ！」

千里は、もう何合目か解らない一撃を以て鉄塊剣を弾くと、その衝撃で後ろへ飛んだ。

距離を取ってダークを見据えると、ダークもまた距離を取って千里を睨む。

鉄塊剣は折れることなく存在し、鎧にも傷は見あたらぬ。
稼働時間は解らないが、確実に“人間”を上回る体力を持つ鎧。
その重鎧を前に、千里は思案する。

「アギトで攻撃してたら、いつまでたつても終わらない。
光の剣で攻撃したら、物理攻撃を受けられず倒される」

ならば答えは、簡単だ。

既に先ほど解答が用意されていた、問題用紙。
それに千里は、自信を持って書き記す。

「イル＝リウラス― 光より顕れる者” よ！
我が声に応えて、その力をここに示せっ！」

千里の身体から、金の粒子が吹き上がる。

やがてそれはアギトを覆い、その剣真を黄金に染め上げた。

威厳と荘厳を併せ持つ、華美にして重厚な大剣が、そこにあった。

そして黄金のアギトを持つ千里もまた、黄金の光を放っている。
千里は咄嗟に、自分自身も光の剣を纏わせる対象に含んだのだ。

「ま、まずい気がするニャ」

ダークは小声でそう呟く。

だがそれも束の間。すぐに気を取り直して千里に飛びかかった。

「せいニャー！」
「ふっ」

ダークの声に、千里はただ小さく息を吐いた。

今度は先ほどまでのようには行かない。

一合交わされた瞬間に、千里は素早く手首を返して鉄塊剣の腹を打つ。

対して、アギトによって弾かれた鉄塊剣を、ダークは構え直そうと念動力をかけた。

だがそれは、一步遅い。

千里はアギトの柄を大きく引き刃を水平に構えると、“突き”の体勢を作った。

そして本能で身体を動かすと、足首からネジのように回転して、身体で螺旋を描きながら強力な“突き”を放った。

「ふニヤっ?!」

巨大なハンマーで殴られたような、衝撃。

右太ももを貫かれた重鎧は、大きく体勢を崩された。

「ええい、小癩ニヤ!」

ダークは、鎧からアギトを抜いた千里に、鉄塊剣を振り下ろす。

千里はそうして振り下ろされた鉄塊剣を、身体を斜めに傾けるだけで避けた。

そして、身体を回転させて、その腕をアギトで切り落とした。

「ニヤに?!」

「はあっ!?!」

返す刃で、足と胴を切り分ける。

重鎧はたまらずバランスを崩して、その鋼鉄の体軀を銀の地面に投げ出した。

黄金の力を纏ったことで、千里の身体能力は更に上昇していたのだ。

「くっ、撤退ニヤ！」

不利を悟ったのか、ダークが兜ごと脱出する。

それはいかなるギミックか、兜に銀の翼が生えたと思うと、飛行機に様に滑空を始めた。

「駆け抜ける、光よっ！」

それを千里は、逃さない。

縦一文字に振り下ろされたアギトは、己が纏っていた黄金を、飛翔する刃に変化させてダークに飛来する。

「あわわわっ」

ダークは器用に身体を捻ると、その一撃を避ける。だが避けることができたのはダークの身体だけだ。窓から飛び出ると同時に翼を斬られた兜は、茨の庭に墜落していた。

「ニヤンですとっ?!」

ズドンッ

庭から響く、ダークの悲鳴。

それを聞き届けると同時に、千里は膝を突く。

「っ……はあっ、はあっ、はあっ」

黄金の力を、元々上げられていた身体能力の上昇に上書きする。その発想は千里に絶大な力をもたらしたが、同時に膨大な負担を強いていた。

「ナリーヤ」

名前を、呼ぶ。

たったそれだけの行為で、己を奮い立たせる。疲労で擦れる声には、彼女の“痛み”が込められていた

「ナリーヤ」

二度呼んだ頃には、どうにか立ち上がるまでに至っていた。失いたくない、友達。“大切”な……人。

「ナリーヤに、会いたいつ」

目を閉じて、唇を噛みしめ叫ぶ。その感情が、友情なのか、千里は解っている訳ではない。ただ、ただ会いたいと、震える足に力を込めて立ち上がる。

千里は大きく息を吸うと、震える手で扉の前に突き立った“壁”を取り払う。

ドアノブを回し、開け放つ。

視線の先には、ダンスホールに続く、一直線の長い廊下があった。

「ナリーヤっ」

最後にもう一度、その名を叫ぶ。

そして千里は、長い廊下に力強い一歩を踏み出すのだった。

十

時は、エクスとナーリヤが対峙していた場面まで、遡る。

降り注ぐ稲妻。

刹那の間に着弾する閃光を、ナーリヤは経験のみで避けていく。

「どつした！」

避けてばかりでは終わらんぞッ！」

エクスは、一步も動かず手を挙げているだけだ。
だというのに、ナーリヤは弓を構える暇すらなく走り回っていた。

「【雷霆／散開】」

詠唱を重ねる。

エクスの纏う暗雲の内側から稲妻が迸り、それが無数の雷球に変化した。

それをエクスの指がなぞると、雷球が更に分裂して、百を優に越える雷の針になる。

「さあ、踊れ。

私を愉しませろ……【雷針／無限震域】！」

雷の針が、拡散する。

見ながら避けられるモノでない以上、経験で避けるしかない。

だが、いくら“先見”の技を継承したナーリヤであろうと

“雨”を避けるような、経験はない。

「あぐつ！」

右足を貫通し、体勢を崩す。

左足を掠め、膝を着く。

右手に電撃が走り、感覚が麻痺し。

左脇腹を穿たれて、痛みから意識を手放しそうになる。

鋭い針は、ナーリヤを地面に叩きつけた頃に、漸くその動きを止めて霧散した。

立ち上がるように、身体が麻痺して思うように動かず、ナーリヤはただ芋虫のように這いずる。

「っ、くう」

痛みすら麻痺し始めたのは、不幸中の幸いだろう。

そうでなければ、意識を手放していたところだった。

それでも歓迎できる状態ではないからこそ、ナーリヤは喉の奥で悪態を吐く。

「はあ、終わりか？」

ああ、そうか……私を傷つけられる“自信”がないのだろうか？」

エクスが、傷一つ無い身体で嘲笑する。

どんなに矢で貫かれても、霧になって戻ってしまえば回復している。

人ならざるモノ、その中でも吸血鬼というずば抜けた“再生能力”を持つ者だからこそ許された、強者の力だった。

「だれ、がッ」

凶星を突かれながらも、ナーリヤはエクスの言葉に噛みついた。

エクスはそんなナーリヤを見て、ただ笑みを浮かべている。

「くっハハハッ」

……よし、では希望を持たせてやろう」

「なにを……？」

霞む視界で見上げた先。

そこでは、エクスが燕尾服の袖をまくり上げていた。

銀の炎のランプに照らされた、エクスの右腕。

そこには確かに “裂傷の痕” が残っていた。

「それは、いつたい」

思わず、声が出る。

どうやっても傷つかなかったエクスの身体。

そこに残されていたのは、明らかに他者に傷つけられた痕だった。

「貴様の後ろで斃たおれている、その男」

エクスが指で示したのは、横たわる騎士の骸だった。

白骨化した槍騎士の、その槍こそがエクスを傷つけた武器。

そして、その鎧を纏っていた戦士こそ、エクスが傷を残すことを許した者だった。

「その男は、私を“邪悪”だと言って退治しに来たのさ。

クククツ……今思い出しても胸の高鳴る、良い夜だったよ。

邪悪な存在として、光の“勇者様”を屠ることは、強者の義務だからな」

心の奥底から愉快そうに、エクスは声を上げる。

本当に楽しかったのだらう、その顔は喜悦に歪んでいた。

「だがまあ、貴様にそれを望むのも、酷な話しか」

落胆したような、呆れたような。

そんな表情で、目を瞑りながら肩を竦める。

それに反論する言葉も見つからず、ナーリヤは苦い息と共に口を閉ざした。

「私が怖いなら逃げればいい。」

私が憎いのならば立ち向かえばいい。
私は欲望に忠実な者を好む……だが、貴様のことはどうにも腑に落ちん」

過度な憎しみもなく、付随する恐怖も薄く。

そして何より、倒してどうしたいという欲望が見えない。

エクスは這いつくばるナーリヤに、嘲笑と共に言葉を投げかけ続けた。

悔しい、憎い、怖い。

そんな感情を増幅させればさせるほど　その“血”は味に深みが増すのだ。

「そうか、貴様は千里が“怖い”のだったな。

ふむ、いいぞ。ここで彼女を“見捨てて”逃げるのならば、生きて帰してやろう」

「見捨て、る？」

その言葉は、紛れもなく嘘だった。

エクスは始めから、ナーリヤを逃がすつもりはない。

千里の心を折りその魂を掌握するためには、ナーリヤの“死”が必要だと、そう思っているからだ。

ここまで増幅させた負の感情を宿した血を、飲み干したいという欲求もあるのだが。

「怖い……千里、が？」

ナーリヤは、擦れた声で自問する。

確かに、光の柱を見た時、ナーリヤは言いしれぬ恐怖感を抱いた。

それは今更否定できることではないだろう。

「でも、本当に？」

じつとナーリヤの“絶望”^{こたえ}を待つ、エクス。

嘲笑を浮かべるエクスの前で、ナーリヤはただ思考を展開していく。

「ずっと、一緒に歩いてきたのに？」

ずっと隣を歩いてきた。

言うほど長い時間ではないかも知れないが、その時間は宝石のように輝いていた。

それなのに、今更恐怖感を抱く自分の心が、ナーリヤは理解できずにいた。

「ずっと、隣を………ああ、そうか」

小さく、苦笑を零す。

それが自嘲の笑みに見えて、エクスは頂垂れるナーリヤを嗤う。

「ククツ、もうすぐか」

歪んだ感情を喰らおうと、エクスが笑みを濃くする。

そんなエクスの言葉は、すでにナーリヤには届かなくなっていた。

「隣を、歩いてきた」

「なに？」

「隣を歩いてきた。」

だから僕は、ずっと隣を歩いていたと思った」

光の柱を千里が出した時、ナーリヤは胸のざわつきを覚えた。それは恐怖なんかではなく……不安と、焦りだった。

「もう歩けないかと思った。

遠くへ行ってしまうのだと思った。

……そんなくだらないことを、考えた」

近くに転がっていた、騎士の槍。

それを支えにして、ナーリヤは立ち上がる。

俯いているため目元は見えないが、その体躯から先ほどまでの弱々しさは、感じられない。

「僕は千里が大切だ。

彼女の隣を歩いて、彼女の側にいて、彼女を支えてあげたい」

「何を言ってる」

「だから」

エクスの言葉を遮ると、ナーリヤは顔を上げる。

優しい少年という“殻”を破った、ナーリヤという“存在”の顔。

炎よりも熱く氷よりも冷たく、そして何より“重い”激情の本性。

「貴様は僕が、ここで討つッ！」

「ッ……戯れ言を」

大切な女の子を、奪わせないために。

誰よりも隣にいたいと思った少女を、守り抜くために。

ナーリヤはその瞳に漆黒の炎を宿して、身構える。

「貴様はここで死ぬ。」

【雷霆／大槍刃】ツ！」

エクスが、右腕を弓なりに引く。

すると、銀の稲妻が槍の形を作り、収束しはじめた。

超圧縮された、魔力の稲妻。

その結晶は、まともに受けようものなら、塵すら残ることを許してはくれないだろう。

その暴虐な力を前に、ナーリヤは支えにした槍を強く握る。

エクスを傷つけたという、唯一の技を求めて、強く握る。

「悔いを残し、消え去れ」

小さな宣言。

その死刑宣告を受けながら、ナーリヤはエクスを見据えた。

右腕に持つ極光のせいで逆光となり、その顔が暗く見える。

その最中にあってもなお、エクスの双眸は真紅に輝いていた。

「赤い、光

……………ツ?!」

言いようのない頭痛を覚えて、ナーリヤは額を抑える。

もう放たれようというのに時間が遅く感じるのは、走馬燈でも見せるためか。

視界の奥でチカチカと赤い光が明滅し、やがて意識が拡散する。

……………ならば、自身の過去を覗き見よう。

ナーリヤは痛む頭を抑えながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

拡散した意識は徐々に収束していき、やがてナーリヤの脳裏に映像を投影し始めた。

その映像に己のルーツがあるのならば、そこから状況を抜け出す術を得ることができないか。ナーリヤはそう、固まって飛び往く意識を捕まえた。

行ってくる、アイシヤ。

「え？」

だが、脳裏に浮かんだのは、とても自分のものとは思えない光景だった。

流れるような金系の髪を持つ、壮年の男性。

その男性は、同じように金の髪の女性を、抱き締めていた。

また逢えますか？

ああ、必ず会いに行こう。

脳裏で展開される、花畑での一幕。

その光景に、ナーリヤは強い戸惑いを覚える。

おおおおおおおつっつ！

十字架を握りしめ、男が駆け抜けるのは……“戦場”だった。

火薬の爆ぜる音、肉を裂く痛み、骨を砕く不快感。

その全ては“主”のためであると、男は駆け続けた。

どこだ、ここは？

場面が、切り替わる。

男が目を覚ましたのは、見たこともない森の中だった。戦場で意識を失い、気がついたら森で寝ていた。

その奇妙な感覚に、男は首を捻った。

本当に行かれるのですか？

ああ。それが俺に残された、唯一の“道”だから、な。

再び場面が切り替わる。

最初の女性の面影を感じる、アッシュブロンドの髪の女性。

その女性に、男は不器用な笑みを浮かべていた。

見つけたぞ、吸血鬼ツ！

ほう？まだ私と対峙しようなどと考えられる、“気概”を持つ者が居たとは、な。

男は、ここが“自分の世界”ではないと解っていた。

だというのに、男は自身の世界の“神”へ、祈りを捧げ続けた。

その結果、男は“力”を得る。

圧倒的な“信仰心”によって生み出された、悪を討つ“聖なる”力。

浄化という極めて特殊な分類に特化した、“魔法”だった。

すまない、アイシャ。

ぐ、ぬう。まさか傷を負うことになるうとはッ！

そうして、男の人生は幕を閉じる。

ナーリヤによって見つけられるまで、男はずっとこの場にいたのだ。

浄化に特化した特性により、エクスやその眷属に喰われることなく。

「っ、はぁ」

息を吐く。

槍から伝わってきた、他人の人生の“追体験”に、ナーリヤは唇を噛んだ。

あまりに報われない、不器用な男の短い生涯を、ナーリヤは自分の事のように感じていた。

「貴方の力

その“想い”と共に、受け取ります」

大切な人に、もう一度会いたいと願った騎士。

己が信じる神のために、この世界の神託を受けることを“望めなかつた”男。

その想いを、その心を、その魂を……ナーリヤは、確かな形で受け取った。

時間が戻るまで、あともう少し。

それを何となくだが解っていたナーリヤは、スローモーションの世界の中で、槍に引つかかっていた十字架を握りしめた。

「【天に在す、^{まじ}我らが父よ

願わくは、御国の尊まれんことを。御国の来たらんことを。

御旨の天に行われん如く、地にも行われんことを】」

十字架のロザリオ。

それをナーリヤは手首に通して、槍を構える。

朗々と語られる詠唱は、この世界に住まう者では聞くことの叶わぬモノ。

だというのに、ナーリヤは言い慣れた言葉のように、それを紡いでいく。

「【我らの日用の糧を、今日我らに与え給え。^{たま}我らが人に許す如く、我らの罪を許し給え】」

百戦錬磨の戦士のような、洗練された構え。旋律のように流れる、主への“祈り”の詠唱。それはまさしく、騎士より受け継いだものだった。

「【我らの試みに、引き給わざれ我らを悪より、救い給え】」

時間が、戻る。

エクスが槍を放とうとするその一瞬に、ナーリヤは鋭い突きを放った。

「何ッ?!」

稲妻を掴んだ右腕。

その付け根を、青白い光を纏わせた槍が斬り裂く。ちぎれこそしなかったが、肩口から大きく血を噴き出させられたエクスは、驚きと久しく感じていなかった“痛み”から、体勢を崩した。

「貴様が何故、“それ”を使えるッ!？」

ナーリヤは突き刺した槍を引き抜くと、今度は薙ぎ払いに形を変
える。

悪態を吐きながらも、エクスはその薙ぎ払いに対して、跳躍する
ことで避けて見せた。

それは、エクスにとっては“何時か”の焼き回しに過ぎない。
だから“当時”と同じように避けたのだが、それは彼の失策だっ
た。

「先見三手」

三手先を読んだ、必中の攻撃。
洗練された技と先読みの術が合わさり、その一撃を鋭くする。

振り上げで左手を裂き、振り降ろして右足を貫き、突きで胸を穿
つ。

流れるように放たれた銀刃は、エクスの身体を鮮血により染め上
げた。

「三閃必殺」

エクスの身体が、浮き上がる。
神の騎士だった男が、己の全てを賭けて鍛え上げた必殺の一撃。
身体の全ての力を乗せて放つ、零距离投槍術。

青い白い光を放つ槍によるその一撃は、エクスの胸を貫くと同時
にナーリヤの手を離れて、エクスの身体をはじき飛ばしたのだ。

「 Amen アーメン 」

最後の一言が紡がれる。
そのキーワードにより、槍から吹き上がった蒼白の光が、エクス
の身体を焼く。

「ぐああああああッッッッ?!?!?!」

目を覆うほどの極光。

それはまるで、邪悪な闇を討ち払う、陽光のようだった。

ゆっくりと光が収まる。

砂埃のせいで全容はよく見えないが、焼け焦げた肌の一部は、確
認できた。

そのことに安堵の息を吐くと、ナーリヤは落ちていた弓を拾った。

「千里を、探さない」と

まだ終わりではない。

ナーリヤはそう呟くと、千里を捜すために歩き出す。

そして、丁度その時……ナーリヤの背後で、扉が開いた。

「ナーリヤ、無事っ?!」

色濃い疲労は見られるが、大きな怪我は無い千里。

疲労と共に、体中ズタボロなナーリヤ。

どちらが非道い状態であるかなど一目瞭然で、だからこそ千里は
目を睨りナーリヤに駆け寄った。

「ナーリヤ!」

……非道い。だ、大丈夫?」

触れても良いか解らず、戸惑う。

どうしたらいいか解らない、そう行動で訴えかける千里を見て、ナーリヤは俯いた。

「ナ、ナーリヤ？

どうしたの？や、やっぱり痛いよね。

……早くラオさんの所へ戻って、手当を　　っ?!」

慌てる千里に、ナーリヤは倒れるように抱きついた。

そして、突然のことに反応できずにいる千里を、強く……強く、抱き締める。

「ナーリヤ……」

「……心配した」

零れたのは、そんな言葉だった。

心配を掛けたこと。

そのことが、千里の胸に痛みを残す。

ナーリヤがそれで傷ついてしまうのが、千里は嫌だった。

「無事で、良かった。

……本当に、良かった」

抱き締める力が強くなり、声が震える。

千里は何も言わずに目を瞑ると、自分もナーリヤの背に手を回して、優しく背中をさすった。

「ありがとう、ナーリヤ」

一言だけ。

それでも、その一言に全てを込めて、声に出す。
その想いが伝わったのか、ナーリヤの抱き締める力が、少しだけ弱くなった。

「ま、ただッ」

二人に投げかけられた、声。

炭化した四肢と、半面が焼け焦げた顔。

胸に大きな槍を突き刺したまま、エクスは立ち上がった。

「千里、行くよッ!」

「え、あ……う、うんっ」

エクスに背を向けて、ナーリヤが駆け出す。

千里は訳がわからないと言った表情で、ナーリヤに手を引かれていた。

だが直ぐに状況を呑み込むと、ナーリヤの手を強く握り返す。

「逃がさんぞ、人間　　ッ!」

暗雲を従えて、エクスは駆け出す。

その速度は目に見えて遅くなっているが、それでもぼろぼろの二人よりは速い。

逃げ続ければいとも簡単に捕まってしまうだろう……だが。

「よつと!」

「わわわっ?!」

ナーリヤは、エクスが最初に立っていた場所。踊り場まで走ると、その脇にあった螺旋階段を上る。更に踊り場の更にも上まで走り抜けて、肖像画の上に伸びた階段まで駆け上る。

踊り場の上からエクスがそうしたように、ナーリヤが肖像画の上から見下す形になっていた。

「飛ぶよ、千里！」

「う、うんっ！」

ステンドグラスを突き破り、外に飛び出す。

空高くを飛んでいるという状況に、千里は目を回しそうになった。

「こんなところでは、終わらんぞ　　ッ！！」

エクスの叫び声を背に受けながら、ナーリヤは千里を抱き締める。頭を下にして垂直に落ちる先は、海だった。

強く、暖かい身体。

千里の背中に回されたその手は、何よりも優しく何よりも儂げだった。

千里はそんなナーリヤの背に手を回して、包み込むように優しく抱き締める。

「ナーリヤ

……お願い、“イル”リウラス”」

覚悟を決めて、海に落ちる。

高い丘の上から落下していく二人を、金の粒子が覆った。すると、その落下速度が、僅かだが緩やかなモノになる。

ザブンッ

和らげられた衝撃と、身体を包む冷たい水。

透き通った青を全身で感じながら、千里はゆっくり目を閉じる。

抱き締めるナーリヤを離さないように、背に回した手の力を強めながら。

「ええい、無茶な真似しやがって！」

意識を失う、その直前。

最後に耳にしたのは、渋く優しい声だった。

五章 第三話 吸血城のロンド 後編（後書き）

これにて五章は終了。

次回からおそらく一番長い章になるであろう、第六章に入ります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次章もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第一話 帝国リックアルイン

闘技大会が迫ったこの季節は、帝国は年で一番の賑わいを見せる。様々な国から訪れた人間が集まる港が、そんな帝国の一面を表していた。

そんな中、漁船の波止場は、一般の波止場よりも賑わいが少ない。もちろん大都市特有の賑わいはあるのだが、わざわざ漁船で他国に渡る者などいないため、他の場所よりは混み合っていないかった。

『ありがとうございます！』

そんな波止場の一角で、元気な声が響く。

頬を掻きながら顔を逸らすラオの前で、千里とナーリヤが頭を下げていたのだ。

「借りを返したただけだ」

素っ気なく言ってみせるも、どうにも照れているように見受けられる。

そんなラオの様子に、二人は顔を見合わせて小さく笑った。

「はあ………ったく」

見つめ合う二人を見て、ラオはからかわれたような感覚を覚えた。だがすぐに、そんな千里とナーリヤの雰囲気“あてられて”ラオは砂糖を飲まされたようなげんなりとした表情を浮かべ、肩を落とす。

「いつまで見つめ合っているつもりだ？」

ツツコミたくない。

けれどそうしなければ先に進まない、ラオは嫌そうに……心底、嫌そうに声をかけた。

ぼろぼろで海に落ちてきて、それを拾ってから妙に“仲が良い”二人。

光の膜に包まれて“怪我が目に見えて治っていく”ことなど、ラオは早々に考えるのを止めていた。追求してどうにかしたい訳でもないし、このどうにも甘ったるい空気に入っていくのもまた、嫌だったのだ。

「み、見つめ合ってなんか！」

「そそそ、そうですよう！ラオさんっ」

慌てるナーリヤと、どもる千里。

そんな二人に、ラオは大きな大きなため息を吐く。

「まあなんだ、さっさと行け。

さっさと行って……勝ってこい」

ラオは追い払うように手を振ると、応援の言葉を残す。

そう言われてしまったら、頷かない訳にはいかない。

二人はそう……力強く、頷いた。

『はいっ！』

荷物を持って、帝国までの馬車に乗り込む。

集団で移動する、馬車のバスのようなものだ。

その窓から顔を出している二人の様子を見届けると、ラオは少し馬車を見てから、軽く手を挙げて踵を返した。

そんなラオを見ながら、二人は馬車の中で言葉を紡ぐ。

「絶対勝とうね、ナーリヤ」

「うん、勝とう」

応援してくれた人がいて、背中を押してくれた人がいる。そして隣りに立つ人がいるから、頑張ることができる。

目指すは、帝都。

帝国“リックアルイン”の首都にして、闘技大会の会場である。

白い建物が建ち並ぶ街。

街を彩るように飾られた金と真紅の装飾が、太陽の光を反射して輝いている。

人間や亜人に拘わらず、露店を開く商売人。

その露店に列を成す者もまた、種族を問わず賑わっていた。

「すごいね、ナーリヤ」

千里は、感慨深くそう呟いた。

その規模も、その賑わいも、アロイアやルルイフとは比べものにもならない。

世界各国から人が集まりその腕を試す、闘技大会。

その影響力を反映する、壮大な景色だった。

「うん、前に来た時よりも賑わっている気がするよ」

ナーリヤが来たのは、せいぜい二三年前だ。

そこまで大きな変化はないはずなのだが、まるで見る度にその表情を変えているような感覚を覚えていた。

「街の中心に闘技場があるから、たぶんそこで受付をしているんだと思う」

「それじゃあ、早速行こうよ」

ナーリヤが記憶を辿りながらそう言うと、千里はそれに頷く。そして二人は、はぐれないようにと、自然な動作で手を繋いだ。

闘技場まで歩く、道すがら。

千里は、隣を歩くナーリヤの顔を盗み見る。

自然な動作で手を繋いでしまったはいいのだが、どうにも脈拍が速くなるのを抑えられそうになかったのだ。

「大きい、手」

ナーリヤに聞こえないように、小さく呟く。

刹那、大きく高鳴った胸の音に、千里はため息を吐いた。

どうにも、自分よりもだいぶ大きな手の感触が、頭から離れそうにない。

熱に浮かされたような思考は、千里から正常な判断力を奪っていた。

冷静だったのなら、もう少し自分を客観視することができただろう。

頬に朱をさして首を振り、時折隣の少年の顔を盗み見る少女。十人いれば九人は、生暖かい目で見ることだろう。

「どうしちゃったんだろう、私」

全身に傷を負い、血だらけになりながらも来てくれた、優しい少年。

自分を助けてくれた時に、ナーリヤが浮かべた安堵の表情を、千里は頭から離せずにいた。

「はあ、どうにか落ち着かないと。うん」

自分に話しかけるように、胸を押さえる。

拳動不審で、頬が赤いことから、千里は誰がどう見ても“夢見る乙女”をしていた。

……そして、そんな千里に気がつかない姿もあった。

道行く人ですら気がついていないのに、隣で歩くナーリヤは気がつかない。

いや、“気がつかない”と言った方が、正しいだろう。

「小さい、な」

はぐれるといけないから。

そんな“言い訳”を自分にして、ナーリヤは千里の手を握っていた。

振り払われる心配もしていたが、千里はあっさりと握り返してくれたのだ。

その小さく柔らかい手に、ナーリヤは鼓動を大きくしていた。

心なしが頬も赤く、いつも隣にいた千里の顔も見られないほど、動揺している。

「これは、アレなのかな？」

自分がエクスにした宣言。

ずっと隣にすることを望むのは、それはもしかしくなくても“アレ”だろう。

生涯を共にする約束事なんて、一緒に墓に入ってくれという“アレ”くらいだ。

「はあ、どうにか落ち着こう。うん」

奇しくも、二人はほぼ同時にそう呟いていた。

だが、当然ながら互いの言葉に気を払う余裕もなく、二人はぶつぶつと呟きながら歩く。

微妙なすれ違い。

そのあからさまな仕草についに気がつくことなく、二人は並んで歩いて行くのだった。

右を向いて、見渡し。

左を向いて、見渡す。

上を向けば、頂は遠く。

奥行きを見れば、震えるような熱気で満たされていた。

賢帝に治められし大國。

帝国リックアルインの首都に構えられたその闘技場は、千里の想像を遙かに超えるモノだった。

教科書や映画でしか見たことのない、ギリシャのコロッセウム。

写真や映像で見たその大きな建造物よりも、なお大きい。

威風堂々とした、という表現がよく似合うその門構えに、千里はしばし呆然と見上げていた。

「千里、あっちが受付みたいだよ」

「え……」

あ、う、うんっ」

受付を探していたナーリヤが、千里の背から声を投げかける。

千里はその声によって我に返ると、慌てて頷いた。

これから闘技大会に挑むというのに、こんなところで呆けてはいられない。

「こんなに大きいんじゃ、見上げちゃうよね」

「み、見られてたんだあ……うう」

だらしなく口を開けて見上げていた。

背中からならば、ナーリヤはその表情を伺うことはできなかったことだろう。

それでも、千里は沸き上がる羞恥の感情を、上手く抑えられずに小さな呻り声を上げていた。

ナーリヤの後について、闘技場から斜め右に移動した場所にある、広場へ行く。

そこでは、やはり沢山の人が賑わいを見せていた。

誰も彼も、闘志をみなぎらせた屈強な“戦士然”とした雰囲気醸し出している。

「女性部門の受付は、左だね。」

終わったら、また闘技場の前で待ち合わせをしよう」

「あ、うん。」

それじゃあ、また後だね。ナーリヤ」

千里は、そう手を振ってナーリヤと別れると、人が集まるテントに並ぶ。

煌びやかな服装の女性から、重厚な鎧を纏う大柄な女性。

黒い蝙蝠のような翼を生やした女性に、角の生えた女の子。

ちょっとした異界のような場所を目の当たりにして、千里は眉をしかめた。

誰も彼も強そうで、どうにも踏み込むのを躊躇ってしまう。

「でも、行かなきゃだよな」

小さく紡ぐのは、自身への激励だ。

気合いを一つ、それで充分。

勇気や根性なら、とつくの昔にナリーヤから貰っている。

列に並んでしばらく経つと、千里の順番が巡ってきた。

資格は問わない、というフレーズを出すだけあって、名前と戦闘スタイルくらいしか聞かれないので、人数の割りに順番が巡るのは早かった。

「はいはいはいっ！」

そこなお嬢さん、お次の希望者さんですねっ」

「は、はい」

受付をしていたのは、やたらとテンションの高い女性だった。

毛先の黒い紺色の髪と、髪よりもやや濃い紺色の目。

外ハネのロングヘアの頭頂部から生えた一對のネコ耳が、彼女を“亜人”であると示していた。

最近、どうにもネコに縁がある。

それが、千里が真っ先に思い浮かべた感想だった。

「さてさてさてっ！」

お嬢さんの、お名前はなにかな？」

もう何人も受付としてこなしているだろうに、女性は活気に満ちあふれていた。

千里は、そんな女性のテンションに早くも押されそうになり、苦笑いをしている。

「千里＝高峯ですっ！」

千里も、負けじと声を張り上げる。

ここで引くのは嫌だと、じっと前を見据えて。

「お？おおお？

元気のいい女の子は、お姉さん大好きだよっ！

それではではでは、そのまま戦闘スタイルを言ってみようか！？
手の内を零さないように、剣士とか、魔法使いとか、簡単なので
良いからねえー」

快活に笑いながら、千里に促す。

その表情は本当に楽しげで、千里はだんだんと自分も楽しくなっ
てきていた。

「剣士……」。

えーと、魔法剣士ですっ！」

「おやおやおやつ！？」

魔法も操る方でしたか！

ここだけのお話、実はこの私も魔法使いなのですよ〜」

ここだけの話し、とはいうが、周囲に響き渡るほどの大音量だ。
実際に隠す必要な無く、ノリで言っているのだろう。

「ではではでは、登録完了ですっ。

闘技場の中で予選を行いますので、明日になったらまたいらして
くださいなあ〜」

「はいっ」

手を振って、受付の女性から離れる。

まだ戦ってもいないのに疲労が溜まり、千里は小さく息を吐いた。

「ふう。」

それにしても、予選……かあ」

少し考えられれば、わかる事だった。

千里が思わず目を回すほど、人や亜人が集っている。

それはつまり、ある程度人数を絞らなければ、本戦へ進めないということだろう。

「予選って、どんな感じなんだろう？」

ナーリヤよりも早く闘技場前に戻ってきた千里は、予選のことを考えることにした。

詮無きことと言われてしまえばそれまでだが、所詮は暇つぶしだ。

明日、とりあえず集結している者達で予選が始まる。

もうすでに何ブロックか終了していて、本戦出場者も何人が決まっているという話しを、千里は受付で立ち聞きしていた。なるべく情報を集めたかったのだ。

「集団で、何かするのかな？」

闘技場の壁に背中を預けて、腕を組む。

背中を預けるため邪魔になったアギトは、自分の横に立てかけていた。

「早く来ていれば有利、とも限らないか」

一定人数が集まったら、予選。
それからまた集めて予選と行っていき、受け付け終了までに集まった者たちで予選を終了させる。その後、締め切りまで人を集めて本戦に入るのだ。

「なんにしても、頑張らないと」

そう、決心が鈍らないように声を出す。
喧嘩など得意ではないが、それでもやらなければならないことなのだから、と。

十

千里が物思いに耽っている時、女性部門よりも遙かに人数が多い男性部門では、ナーリヤが漸く登録をする段階まで辿り着いたところだった。

「あー、次」

面倒だという感情を滲ませた、不貞不貞しさの宿る声。その声に従って、ナーリヤは一步踏み出した。

「名前と戦闘スタイル」

要件だけ告げる、事務的なやりとり。

木製の机の前でそう言ったのは、赤い髪に緑の目の男性だった。帝国特有の、銀を基調としたメタリックブラックの軽鎧を、その身に纏っている。

「ナーリヤ＝ロウアンス。」

弓と槍、それから補助に短剣を使うことができます」

「うん？ロウアンス？」

……あー、いいや。なんでもない」

男性は、何か引つかかったことがあったのか首をかしげる。

目の前にいるナーリヤに聞こえないよう小声で復唱し、記憶を辿っていた。

だがすぐに思い直して、登録完了の旨をナーリヤに伝える。

「これで終わりだ。」

明日また来い。その後、予選だ」

「はいっ」

男性の言葉に、しっかりと頷く。

そして、男性がナーリヤから視線を外すのと同時に、登録の列から離れた。

「時間かかったな。」

千里ももう、終わっちゃってるだろうな」

待たせてしまったから、急ごう。

そんな感情を苦笑と共に浮かべながら、ナーリヤは足を速める。

広場周辺は止まることなく人が流れていき、その様は洪水のようだった。

「おっと」

そうして急いでいると、前から歩いてきた人にぶつかりそうになった。

獣を狩っていただけあって鋭い反射神経を持つナーリヤは、その影を簡単に避ける。

「ちっ、危ないじゃないか」

だが、その行動は、避けられた方の思惑には合わなかった。

紫がかった青い髪は、左房だけ長く垂らしている。

やや幼さの残る整った顔に乗る浅葱色の双眸は、気の強さを表すようにつり上がっていた。

帝国騎士のそれではなく、個人発注の軽鎧。

銀をベースに青と金のラインが入ったそれには、家の物と思われる紋章が、左肩に飾られていた。

「オレの体捌きがなかったら、ぶつかっていたところだった。貴様……その辺を理解しているのだろうか？」

傲慢な物言い。

気の短い者なら、この時点で食ってかかっていたことだろう。

だが、その点で言えば、穏やかなナーリヤがそうそう挑発に乗るはずもなく、ただ苦笑いを浮かべていた。

無意識のうちに、エクスト“傲慢さ”を比較してしまったということもあるのだろう。

実力の伴った、強大な威圧付きの傲慢。

それに比べたら、ナーリヤより幾分か年下に見えるこの少年の横柄さは、可愛いものだった。

「なんだ、何を笑っている？」

このオレを前にして、大した余裕だな」

肩を竦めて、鼻を鳴らす。

“かん”に障る仕草だが、ここで挑発に乗ったりはしない。

闘技大会前に、余計な騒ぎを起こしたくなかったということもある。

「そろそろ、行っても良いかな？」

「はっ、満足に謝罪もできないのか」

ナーリヤは避けた方だし、そもそもぶつかってすらいない。

謝ろうにも謝る事柄が見つからず、ナーリヤは早速厄介ごとに“絡まれた”自分の運の悪さに、ただただ大きなため息を吐いていた。

「坊ちやま、そろそろ」

少年にそう促すのは、空気のように追従していた老人だった。皺だらけの肌と真っ白な髪で、相当の高齢に見える。だが、ぴんと伸ばされた背筋と綺麗に着こなされた執事服が、彼の年齢を実際よりも若く見せていた。

「フンッ、まあいい。」

せいぜいそうやってへらへら笑っている、“腰抜け”」

少年はそう言い捨てる。

その表情は侮蔑の感情に満ちていた。

「腰抜け、ね」

「なんだ、怒ったのか？」

ナーリヤを怒らせて何がしたいのか、少年は厭らしく笑ってみせる。

俯いているため前髪で表情が見えないのを、怒りのためだと判断したのだ。

「怒るのは構わないが、相手を見た方が良いぞ？」

少年は、そういうと左肩の紋章をナーリヤに見せつける。

青い鷹の背景に浮かぶ、金色の剣。

それが、少年の家の紋章だった。

「解つただろう？平民。」

オレの名前は“ジック・デュン”アクルサルト”

アクルサルト伯爵家の長男だ！」

怒らせて、名を伝え、見下す。

闘技大会の運営に係わる“家”だからできる、歪んだライフワーク。

本当に運悪く、ナーリヤはその標的に選ばれてしまったのだ。

「改めて聞こう。」

何かオレに、言うことがあるんじゃないか？」

「坊ちやま、その辺りで」

「控えている、爺じい」

傲慢に言い放つ少年　ジックに、老執事が割って入ろうとする。どうにも他者を見下さなければ気が済まないこの少年は、老執事にとって悩みの種だった。

周囲の人間も、足を止めて二人を見守る。

こうやって横暴な態度を取る貴族は、珍しくない。

そして、激昂した相手が斬りかかり大惨事になると言うことも、また。

ジックは、よほど自分の腕に自信があるのか、余裕を持ってナーリヤの出方を見ていた。

周囲の人間も、何も喋らないナーリヤの様子を見て、とばっちりがないように警戒していた。

「怒るって、僕がかな？」

「ハア？」

そうして、漸く顔を上げたナーリヤは……実に穏やかな表情で、笑っていた。

「ははっ、

子供の“悪戯”や“雑言”程度に、怒ったりはしないよ」

「子供、だと」

子供、それも幼子に言い聞かせるような言葉。

生暖かい目に伴って放たれたその言葉には多分に毒が含まれていて、周囲の人間の顔を引きつらせた。

「貴様、オレをバカにしているのか?!」

「まさか!

君みたいなの“子供”をいじめるようなことは、できないよ」

激昂するジツクに、ナーリヤは大げさに返した。

普段のナーリヤでは言わないような言葉が連ねられていく様は、ジツクの言葉がナーリヤの琴線に触れたことを、如実に表していた。

そう……見ず知らずの人間に“腰抜け”呼ばわりされて黙ってられるほど、ナーリヤもまた大人ではなかったのだ。

「貴様ツ!

そこになおれ、切り捨てて」

「坊ちやま!」

腰の剣に手を伸ばそうとしたジツクに、老執事の声がかかる。

張り上げられたその声を聞くと、ジツクはばつが悪そうに柄から手を離れた。

「チツ!

この闘技大会、無事に終わると思うなよツ!」

「君も、転ばないように気をつけるんだよ?」

捨て台詞を残して、ジックは踵を返す。

その後ろ姿に、ナーリヤは“本気”で気遣うような声をかけた。

「爺!やはり……」

「いけませんよ、坊ちやま」

「チッ」

舌打ちを一つ。

最後にそれだけ残して少年が去っていくことを確認すると、周囲の人たちもまた、足を動かしてその場を離れていく。

その中心で、ナーリヤは大きいため息を吐いた。

「はあ、大人げないなあ」

息と共に吐き出すのは、軽い自己嫌悪だった。

ここで手を上げてしまえば、怒鳴り声を上げてしまったら、千里の目標ごと水泡に帰す可能性がある。

それを考えてしまったら、“ああ”して場を治めるしかなかったのだ。

「なんか僕、すごく“イヤなヤツ”だ

ああ……千里に聞かれなくて、ほんつとくに良かった」

ナーリヤはそう呟くと、歩き出す。

闘技場前に立つ千里にその暗鬱とした心境を感じられないように、必死に自分を抑えて。

帝国の、まだ初日。

遭遇するトラブルがこれで終わればいいのにと、ナーリヤは深く深く息を吐く。

そう願ってしまったている時点で、どこか諦めに似た感情を覚えながら……。

「千里っ！」

……ただ今は、笑顔で手を振る千里に、できる限りの笑顔を以て返すのだった。

六章 第一話 帝国リックアルイン（後書き）

これまでで一番長くなるであろう、第六章の開始です。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第二話 大会予選

夕暮れの広場。

登録の用紙が集められたテントの中で、赤い髪の男性が書類整理をしていた。

こんな雑用も、立派に“騎士”の役目なのだ。

「あー、今年も多いなあ………つたく」

面倒くさそうにしながらも、整理を進める手は速かった。

少しでも速く片付けて休みたいと、そんな希望が透けて見える。

それは彼と一緒に仕事をする他の騎士達も同じ気持ちなのか、悪態を吐きながらも仕事はしっかりとこなしていた。

「よう、アーク。

はかどってるか？」

赤い髪の男性　アークに声をかけたのは、ダークグレーの髪と同色の目を持つ、大柄な男性だった。筋肉質な身体とオールバックに撫でつけられた髪は、彼を獰猛な肉食獣のように演出させていた。

「茶化しに来たんなら帰れ、第四番隊分隊長」

「そう邪険にすんなよ、第十番隊分隊長」

アークは、手頃な椅子に座る男性に、厳しく言い放つ。

男性はそんなアークに、椅子に背を預けて寛ぎながら笑って返していた。

二人とも、神経が図太いのだ。

「これが参加者か……どれ？」

「見るのは良いが汚すなよ、ガラン」

「解ってるって、汚さねえし無くさねえし破かねえよ」

男性　ガランは、アークの言葉を気にした様子もなく登録用紙に目を通す。

そして……ある一点で目を留めた。

「なあ、アーク」

「あ？なんだよ」

ガランは、その“名前”を見て獰猛に笑う。

その好戦的な笑みに、アークはただ面倒くさそうに眉をひそめた。他の騎士達は、背筋を凍らせているというのに……。

「今回、俺も参加する」

「はあ？まあ、騎士枠はまだ残っているけどよ」

アークは面倒そうにぼやきながらも、深くは聞こうとせず、騎士の書類を探す。

騎士達は予選を行うことなく、本戦から出場できるのだ。

「ククッ……俺は、運が良いみたいだ」

心の底から愉しそうに、登録用紙を見る。

そこには　“ナーリヤ＝ロウアンス”の名前が、あった。

E
x
I

帝国に来て二日目。

爛々と光る太陽が眩しい、リックアルインで迎える初めての朝だ。

闘技場からやや離れた、宿屋の一室。

そこで千里は、ベッドから気怠げに起き上がった。

見知らぬ場所と船の上でしか寝ていなかったため、ベッドで眠る

のは久しぶり。
そうになると、安らいだ眠りの代償に、ベッドから起き上がるのが辛くなるのだ。

「ふぁ……ねむ」

寝ぼけ眼を擦りながら、ふらふらと起き上がる。
こちらに来て経験を重ね、子供っぽさはだいぶ抜けた。
だが、それでも朝は幼さが出てしまうのだ。

この寝起きの悪さは、もう一生ものだろう。

寝間着を脱ぎ捨てると、いつもの鎧に着替える。

制服を着ると気が引き締められた気になれるのは、中学生時代から変わらない。

この制服に似せられた鎧を纏うと、千里はその当時のように気を引き締めることができていた。

「よしっ」

アギトを背負い、深呼吸。

これで意識は切り替えられて、千里は大きく頷いた。

チエーン式の鍵を外して外に出る。

するとそこには、ノックをしようと手を挙げたナーリヤの姿が、あった。

「あ……と。」

おはよう、千里

「わ……うん。」

おはよう、ナーリヤ」

朝方特有の、穏やかな気分。

どこか浮いた感情のまま二人は朝の挨拶を交わし、連れだって宿屋を出た。

「えーと、これから予選、だよな？」

「うん、そうだね。」

予選の方式は解らないけれど、何が来ても良いようにしないと

闘技場までの道のりで、千里の質問にナーリヤはそう答える。

まだ、確かなことは言えないのだ。

「と、ちよつと寄り道してもいい？」

「うん、いいけど……どうしたの？」

ナーリヤは、あらかじめ予定していたかのように足を止めた。

千里がそれに対して首をかしげると、ナーリヤは小さく苦笑する。

「槍が扱えるって言ったんだけど、肝心の槍を買うのを忘れてたんだ」

「槍……エクスト戦った時に、使ったって言う？」

「そう、その槍」

エクストとの戦闘。

その事について、ナーリヤは千里に説明をしていた。

何故か記憶が流れ込んできたことも含めて、である。

「その、大丈夫？」

「うん？なにが？」

記憶とは、脳に係わる部分だ。

千里に脳外科の知識などがあるはずもなく、それ故に記憶が流れ込んで来るといふ現象に対して、ナーリヤを心配していた。

どこかに負担がかかっていたとしても、千里には解らないのだから。

「うっん……なんでもない」

それでも、何でもないように笑うナーリヤに、千里は首を振った。これ以上心配を重ねても、仕方がない。

それは、思い出して心配してから、もう何度もしている決断だった。

「ちょっと行ってくるから、待っていて」

「うん、わかった」

武器屋と思わしき建物。

その看板を千里は読むことができないが、剣と兜のマークはなるほど“武器屋”だと思えた。

武器屋に消えていくナーリヤの背中を、千里はじつと見つめる。

その大きな背中を見ると、それだけで胸が“とくん”と鳴るのだ。

「平常心、平常心」

千里は自分の胸に手を当てながら、大きく深呼吸をする。

人に相談すれば、それは“恋”だと言われるかも知れない。

だが千里は、自分自身に“恋をしている”と訴えることが、でき

ず

「ナリーヤは、友達」

友達だと、あの夜空の下で頷き合った。

その頃から、大きくその認識が変わったつもりはない。

「それに……」

自分が経験したことのある“恋”は、憧れにカテゴライズされるものだった。

だから千里は解らないのだ。

胸に宿り始めた感情が、本当はなんであるのか。

「はあ、止めておこう。」

こんなことを考え続けるのは、なんか、不毛だ」

答えのない問いかけで、時間を潰すつもりはない。

今考えるべきことは、とにかく闘技大会のことだ。

上位十八人に入って、ノーズファンへ行く。

それが最優先事項なのだ、千里は頭を切り換えた。

とたん、集中して外部の音を遮断していた千里に、周囲の声が届き始める。

「チツ、あの男……どこだ？」

そうして周りを見てみると、視界の端に少年の姿が映った。

紫がかった、濃い青色の髪の少年　ジックだ。

「誰か探しているのかな……？」

昨日のやりとりを知らない千里は、少年を見て首をかしげる。きよるきよると周囲を見回して、ガラスの悪い男達に指示を出す。その手に金色の硬貨が輝いているのを見て、千里は眉を寄せた。

「関わらない方が良い、みたい」

そう小さく零すと、目立たないように一步下がる。

そうすると武器屋の看板の影になり、こちらからは見えてもジツクからは見にくくなるのだ。

「探し出せた者には報酬を上乗せする。

いいか、絶対に探し出して、痛めつける！」

不穏な空気を感じ取り、千里はため息を吐く。

放っておけないような気もするが、へタに首を突っ込む訳には行かない。

そう納得することはできるのだが、今までの経験的に巻き込まれるような気がしてならないのだ。

「とにかく、いきなり巻き込まれないようにしよう」

千里はそう呟くと、更に下がり武器屋の横の脇道に入る。

そうして奥には行かず、ナーリヤが出てくれば解る程度の位置で、背を壁に預けた。

「おいジツク！」

こんな街中で、いったい何をやっているんだ！」

影から見守っていると、鮮やかな金髪の少年が、ジックを問い詰めていた。

顔立ちは整ってはいるが、幼さが強く残っているため“美少年”という言葉がよく似合う。輝きの宿る双眸は新緑色で、美しい。

ジックはそんな少年に対して、鼻で笑って肩を竦めてみせる。

「君には関係のないことだよ、ライアン」

「そうやってまた嫌みったらしい表情をして。

そんなことだから“ひねくれ者”呼ばわりをされるんだぞ？」

まるで、“本当は違つのに”というような口ぶりだ。

そのどこかズレた言葉に、ジックは顔を紅潮させる。照れではなく、怒りだ。

「なんだそれはッ?!」

……チツ、興が削がれた」

ジックは吐き捨てるようにそういつと、金髪の少年　ライアンに背を向ける。

ライアンは、そんなジックの肩を掴んで引き止めた。

「待て、ジック。

まだ最初の話が終わっていないぞ」

ライアンはジックの肩を掴むと、自分の方へ振り向かせる。

強く問いただす言葉の影には、ジックに対する不審と心配の色が込められていた。

「フンッ……」。

オレの話しはこれでお終いだ。

「貴様もせいぜいガラの悪い連中には気をつけることだ」
「おい、ジック！」

肩に置かれた手を振り払うと、ジックは今度こそ去っていく。
ライアンはそんなジックを見て逡巡し、やがて踵を返した。

ジックとは真逆の方向へ歩いて行く、金色の影。
その背中には、どこか哀愁が漂っていた。

「なんか、絵になる二人だったなあ」

千里は別れていった二人を見て、そう零す。

既に自分たちに関わっているとは知らないからこそ、気楽な発
言だった。

武器屋からナーリヤが出てきたのは、それから少し経った時だった。

鋼でできた新品の槍を肩に担いで、やり遂げた表情をしている。

「なんとか三割引まで値切れたよ。」

爺ちゃん流交渉術が、初めて役に立てられた」

セアツクに教わったはいいが、使う機会の無かった技能。

それができる時が来たことが嬉しく、つい長い時間を掛けてしまったのだ。

「おかげで今日はちよつと良い物が食べられるかも。」

つて、どうしたの？千里……」

そこまで話して、ナーリヤは漸く千里の反応がないことに気がつく。

千里は、脇道から身を乗り出すような形で、人の流れを眺めていた。

暇つぶしに、二人の関係を少しだけ考えていたのだ。

「生き別れの兄弟？」

いや、我ながら突飛すぎる」

……訂正。

少しだけ、ではなくどっぴりと考えていたようだ。暇つぶしな為、当てるつもりはない適当な予想だ。

「千里ー、おーい？」

「え……あ、あぁっ！」

も、戻ってきてたんだね！おかえり！」

「う、うん。ただいま？」

両手を振りながら、千里は慌てて向き直る。

どんなことを考えていたかなど知られるはずがないのだが、それでも慌てて思考を打ち消した。

「そそそ、それじゃあ行こうか！」

「いや、闘技場はあっちだよ？」

「あう」

踵を返した千里に、ナーリヤの苦笑交じりな声が届く。

千里はその段階まで来て漸く落ち着きを取り戻すと、恥ずかしげに俯いた。

そうして、漸く連れたって歩き出す。

人通りが多いところを通っているため、千里の視界にガラの悪い人間が入ってくることは、なかった。

千里はその事に、言いしれぬ不安を隠しながらも、安堵の息を吐いた。

「さて、予選の説明は中で行われるみたいだね」

そんなことを考えている内に、どうやら到着していたようだ。

千里は顔を上げると、巨大な闘技場の門を見上げた。

「行こう、千里」

「……うん」

意気込んで、踏み出す。

五階建ての建物ほどの高さの天井には、剣を持つ騎士達の絵画が刻まれていた。

思わず息を呑むほどの、神秘的な光景だ。

「わあ」

階段を上って、長い入り口を抜ける。

すると、東京ドームを越えるほど在りそうな、巨大な闘技場。

その場に、沢山の戦士達が、己の腕を示していた。

その雄大な景色に、千里は今度こそ息を吐く。

「こんなに広いんだあ」

「うん……僕も入るのは初めてだから、驚いた」

門から入って、階段を下りる。

そうすると、白い砂の地面に降り立つことができた。

すでに何十と人が集まっていて、それぞれに準備運動や素振りをしている。

千里とナーリヤもその輪に入るように、足を進めていた。

『あー、音響魔法の試験中、音響魔法の試験中ですよ〜』

間延びした声には、隠しきれない“テンション”の高さが込められている。

千里はその声を聞いて、それが受付にいたネコ耳の女性だと、直ぐに気がついた。

『はいはいはいっ！』

予選に集まった皆さんに通達ですよっ。

えーと、男性陣は西側のブースへ。女性陣は東側のブースへ移動してくださいなっ』

声に反応して見てみると、東西にそれぞれ簡易テントが設置されていた。

それぞれに纏めて説明を受けさせる、ということなのだろう。

「それじゃあ、千里」

「うん、また後でね！」

ナーリヤと共に頷き合い、千里は東側のブースへ走っていく。

その後ろ姿を見送ると、ナーリヤもまた西側のブースへ歩き出した。

簡易テントの前では、屈強な男達が台の上に立つ騎士を見上げていた。

騎士の立つ台の両隣には、他の騎士が長机の後ろで控えるテントがあった。

「俺が受付、予選、本戦司会進行を任されている“アーク・オウル”リックカル”だ。

これから予選の説明を行うから、良く聞いておくように」

そういうと、騎士の男　アークは、面倒そうに男達を見回した。今一やる気の感じられない態度だが、これでも戦士の力量に於いては並ぶ者無しと言われる帝国の騎士だ。実力は相当なモノである。

ちなみに、魔法騎士ならばノーズファン、魔法使いならば王国、バランス型でかつ戦略ならば民主国家のスエルスルドという形で、特化されている。

「各自指定された円の中で試合をして貰う。

武器はこちらで用意した物を一つだけ使う、という形だ。

ちなみにこれらの武器は刃が潰してある。本戦ならともかく、予選で死者は出すな」

持ち前の武器ではなく、用意された武器を使う。

数を減らすために行う予選で、無用な血を流させるつもりはないのだ。

貴族も多く参加する闘技大会で、予選から死なせる訳にはいかない、という配慮もあった。本戦で命を落とすことは、黙認されているようだが。

今日急いで槍を購入する必要はなかったという事実には、ナーリヤはこっそりと嘆息していた。無駄ではないのだが、もっと余裕がある時でも良かったのだ。

「対戦相手はテントで籤くじを引いて決める。

そこから勝ち抜きで進めて、上位四名のみを本戦出場者とする」

ナーリヤはその言葉を聞くと、周囲をさつと見回した。

狩猟で鍛えたナーリヤの目は、瞬時に性格な頭数を数えることができるのだ。

「四十四人……四十人も、落ちるのか」

一対一で戦い、勝者同士で再び戦う。

そうしていけば、多くても四回戦えば本戦出場者が決まる。

「左のテントで籤を引いたら、右のテントで武器を受け取ってくれ。……説明は以上だ、諸君の健闘を祈る」

アークは最後にそう付け加えると、台から降りて奥へ戻っていた。

まだ仕事が残っているのか、面倒さをあからさまに浮かべている。

「よし、まずは籤か」

ナーリヤは小さくそう呟くと、緊張からか静まりかえった列に並ぶ。

全員、すでに戦闘をする姿勢を、整えてしまっていたのだ。

「それでは、次の方」

「あ、はいっ」

ナーリヤは、自分の番が回ってくると、大きな木箱に手を入れた。中にはいくつもの紙片が入っていて、これに試合の場所が書いているのだろう。

同じ場所に来た者と戦う、という寸法だ。

「四の八番、か」

「それでは、右のテントで武器を受け取ってください」
「はい」

アークよりも真面目そうに仕事をしている騎士に促されて、ナーリヤは右のテントに移動する。そしてそこでも同じようなやりとりをして槍を受け取ると、指定された場所に足を向けた。

闘技場の砂を踏みしめて歩くと、女性部門も同じようにばらけている姿が見受けられた。

この中に千里がいて、そして同じように緊張しながら指定され場所に向かっていているのだろう。

そう考えただけで安心している自分に気がつく、ナーリヤは一

人苦笑する。

そして直ぐに気を取り直して、半径十二丁十四メートルほどの円の中に立った。

「貴様が俺の相手か。」

ハッ、こんなのが相手とは、俺も運が良い」

ナーリヤの正面に立ってそう行ったのは、禿頭の男だった。

手にはモーニングスターと呼ばれる鎖付きの鉄球を持っていて、上半身は露出している。

「それでは、両者構えて」

審判役の騎士が、ナーリヤと男に告げる。

ナーリヤは男の言葉に反応することなく、一瞥だけしてから騎士へ頷いて見せた。

「それでは 始め！」

「ぬうおおおおおッッッ！！！」

腰を引いて半身に構えるナーリヤに、鉄球が投げつけられる。

直径六十センチはある鉄球が向かってくる姿は、見る者に大きな恐怖を与える光景だろう。

だがナーリヤは、怯まない。

冷静に男の呼吸を読み、経験からその軌道を読み取っていた。

「先見一手」

槍を構えたまま。鉄球に沿うように右回転をする。

そしてその遠心力を利用して、鉄球を投げるために踏み出した男の足を、ナーリヤの槍が打ち据えた。

「ぐぎッ?!」

弁慶の泣き所。

足の脛にあたるその場所は、神経が集中しているため衝撃を受ければ、武蔵坊弁慶が泣くほどだと言われた人体急所の一つだ。

刃は潰してあるとはいえ、鉄の槍であるということには変わらない。

男はあまりの痛みに、鎖を手から落として片膝を着いた。

その首筋に、ナーリヤの槍が容赦なく突きつけられる。

「そこまで!」

審判の声がかかり、ナーリヤは槍を引く。

勝負に決着がつくと、ナーリヤは審判からその場で待つように言われて、頷いた。

「き、貴様、なんて卑劣な……」

未だ立ち去ることもできずにナーリヤを睨む音に、ため息を吐く。最近侮辱されてばかりだと、ナーリヤは地味にストレスを溜めていた。

「僕も、貴方が一番手で“運が良かった”みたいです」

「ぬぐッ」

激昂しかけるが、それもここまで。

男はそのまま他の騎士達に運ばれていき、そうしてすぐにいなくなつた。

「はあ、どうなることやら」

ナーリヤの万感の思いが込められた眩きが、喧噪の響く闘技場の中へ、小さく消えていくのだった。

六章 第二話 大会予選（後書き）

次回その次辺りが、六章の中間地点となります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第三話 金色の少年

台の上に立つネコ耳の女性が、音響魔法用の道具を口元にあてていた。

その形状がどう見ても“マイク”であるという事実にも、千里は口を半開きにする。

『はいはいはーいつ。』

私が受付や予選から、本戦の司会進行まで努めてしまう勤労魔法使い！

その名も……………“レイニ・リユン”フレイアル”レイリアム”ですよっ』

ネコ耳の女性　レイニはそう叫ぶと、その三角形の耳をぴんと尖らせた。

まさしくネコといった様子で、エクス所のロボットパイロットとは訳が違う。

いや、ダークも可愛いことは可愛いのだが、アレは色々違う。

『皆さんでちゃっっちゃっか籤を引きます。』

続きまして皆さんで武器を言っつて、刃の潰された武器で対戦ですつ。

指定された範囲から出たりどうみても勝負が決まっていたりすると敗北です』

どうやってテンションを維持しているのか、レイニはテンポの良い口調で説明を続ける。

千里たち女性部門の選手には解らないことだが、男性部門とは真逆の空気だった。

向こうは、むしろ普通よりもローテンションで、淡々としている。

『それではでは

……本戦への素敵な出場権を目指して、皆さん頑張りましょう！』

レイニの言葉で、左側のテントに人が並び始める。

千里は気を取り直して大きく頷くと、他の人たちのように列に並ぶのだった。

爛々と輝く太陽に、余すことなく照らされた白い砂。
喧噪と緊張と土気で満たされた闘技場の一角で、千里は軽くスト
レッチャをしていた。

屈伸運動と前屈、それから支給された大剣の素振り。

思っていたよりもずつと手に馴染む剣の柄に、千里は小さく息を
吐く。

手に馴染まずに上手く振るえなかったらどうしよう、などと心配
をしていたのだ。

「よしっ」

一息吐いて、大剣を背中の鞘に収める。

無骨なツヴァイハンダーを収める黒革の鞘には切れ込みが入って
いて、横から刃を入れることが出来る形になっている。そうでなけ
れば、抜くこともできないのだ。

「ここかしら」

千里が審判に促され円の端に立っていると、番号札を持った女性
がやってきた。

黄金と白銀で裝飾された、煌びやかな鎧。

支給品のレイピアが霞んで見えるほどの、豪華な金髪美人だった。

「おお、「お嬢様」っぽい」

事実、どこかの“令嬢”なのだろう。

縦ロールの髪はツインテールにされていて、白銀のリボンで留められている。

勝ち気な吊り目の美人で、光の加減で赤にも見える紫色の瞳が特徴的だ。

「あらあらあら、貴女が私のお相手？」

「むむっ」

豊満な胸を張り、鼻で笑いながら口元を扇子で隠す。

その紫の目は、千里を見下すことで赤に輝いていた。

その態度に、千里は小さく呻り声を上げる。

「身長に見合わない大剣、それから貧相な身体。

お金目当てに出場なさるのですしたら、恵んで差し上げてもよろしくてよ？」

自分以外をなんだと思っているのか、嘲りを孕んだ視線だった。

その瞳に対して、千里は小さく笑ってみせる。

……明らかに頬が引きつっている辺り、相当“無理”をしていることが解ったが。

「あら？」

お似合いですわよ、その卑屈なえ・が・お

そうして、千里から笑みが消える。

俯きながら大剣の柄を強く握りしめる様は、非常に怖い。

「両者、私語は慎みなさい」

騎士の男性が、そんな二人を呆れながら促す。

開始前に私闘に発展されては、審判としても困るのだ。

「それでは……」

千里がツヴァイハンダーを抜き放ち、女性が半身になってレイピアを構える。

大振りに構えただけの型と、美しいフェンシングの型だった。

「……始め！」

「【氷よ、射抜け！】」

剣士スタイルに見せかけて、開始直後から放たれた氷の槍。

魔法は有りだが、殺傷能力を持つものは禁止されている。

だというのに、女性が放ったのは鋭い穂先を持つ氷柱だった。

「さようなら、おチビちゃん」

試合開始前の挑発で判断能力を狂わせ、家の権限で握りつぶせる程度の“危険”な魔法を放つ。これが、女性が持つ独自の“戦法”だった。

ドンッ

審判が、鋭い目で女性を睨む。

だがすぐに、魔法が着弾した地点に目を移した。

土煙が舞うその一角には、とても誰かが立っているようには見えなかった。

「くっ」

騎士は小さく歯がみすると、担架を呼ぼうと口を開く。

だがすぐに異変に気がついて、呆然と首をかしげた。

「いな、い？」

土煙が晴れた後、そこにはただ氷柱が地面を抉った後が残るだけだった。

即席で組み上げられた魔力は形を維持できず、砕け散る。

だから氷柱がないのは理解できるが、千里がいなしと言っことは、説明できなかつた。

だが、その疑問もすぐに解消されることになる。

他ならぬ……千里の、声によって。

「でえりやああああああっっっ！！！」

「なんですの?!」

女性が驚いて上を見上げると、そこには落下しながら大剣を振り降ろそうとする、千里の姿があった。太陽が逆光となっていてその表情は伺えないが、威力と速度は音と風で感じていた。

ドゴンッ

「ッ……【氷の壁よ!】……あうっ?!」

即席で生み出された氷の壁は、あっさりと碎かれる。

それだけで威力が収まることは当然無く、女性は左肩部分の鎧を砕かれながら、大きく背後にはじき飛ばされた。

「むぎゅっ!」

そして、十メートルほど離れた場所に落ちる。

どこか間抜けな悲鳴を最期に、女性は動かない。

「安心なさい、峰打ちだよ!」

刃が潰された剣に、峰打ちも何も無い。

だが、インパクトの瞬間に限定してこっそり纏わせられた光の粒子が、強力無比な一撃に“不殺”の効果を与与していた。

「そ、そこまで!」

……救護班、担架急げ!」

ツヴァイハンダーを鞘に収めて、肩を怒らす。

その頬を膨らませて怒る様と攻撃の威力のギャップに、審判の騎士は頬を引きつらせるのだった。

人数も削られて、残る試合はあと四回。

つまり、これで四人の予選出場選手が決まる。

試合が長引いたため、辺りはもう薄暗くなっていた。

それでもなお、止まることなく剣戟の音が闘技場に響き渡る。

「ふっ」

その一角で、ナーリヤが小さく息を吐く。

放たれた槍は重厚な鎧を持つ戦士の籠手を打ち、そのまま剣を絡めて跳ね上げる。

二メートルに届く巨大な槍、支給品の長槍は、本来ならば大柄な人間を想定して用意された物だった。

大柄でない人間が持つても、それはまさしく無用の長物。

ただ動きを阻害するだけの物となってしまう。

「せいっ！」

「ぐあっ」

だがそれも、達人と呼ばれるレベルの戦士に持たせれば、第三の腕のように操る事が出来る。ナーリヤは槍を持ち始めたことなど、それこそ最近だ。

だが、その動きはまさしく“達人”のものだった。

胸を狙った、ただ一直線に放たれる突き。

単純なその一撃も、それ相応の速度が加われれば避けることなどできなない。

風を切る鋭い音共に放たれたその一撃は、重厚な戦士を大きく弾く。

「が、は」

短く息を吐き、それきり男は立ち上がらなくなる。

その姿を見ながら槍を掲げて瞑目する姿は、歴戦の戦士の物に間違いはないだろう。

予選最後の敗者に向かってただ目を瞑るナーリヤの首元には、異世界の神を模したロザリオが、月明かりを反射して輝いていた。

「勝者、ナーリヤ！！ロウアンス！」

これで、終了だ。

全ての行程を終えて、本戦出場者が決まる。そう宣言するアークの声を耳にして、ナーリヤは漸く一息吐いた。

「ふう、なんとかなった」

口元に苦笑を浮かべて、もう一息。

槍をエクスト戦った時同様に動かせるかどうかは、軽く練習済み

だ。

だが、実戦で通用するかどうかとなると、本番で確かめるより他に方法がなかったのだ。

「千里はどうなったかな？」

そう呟くと、ナーリヤは女性部門の方へ目を移す。するとそこでは、男性部門同様最後の試合が行われていた。

「えーと」

目で追って、探す。

暗がりの中でモノクロカラーの千里を捜すのは、いくらナーリヤでも骨が折れる。

必死に目を凝らして見回すも、月が雲間に隠れて視界が悪くなってしまうと難しい。

「どこだろう」

……と、あれかな？」

結局ナーリヤは、視界に頼らず耳で捉えた。

激しく重い剣戟の音。身体に見合わぬ大剣が、空を切る旋律。

それを辿ることで、ナーリヤは千里の姿を確認する。

「はあっ……！」

少し近づいて、ナーリヤは試合の観戦を始めた。

千里の相手は体格の大きい女性で、両手に手斧を持っている。

おそらく傭兵であろうその女性を、千里は大剣を振り回して追い詰めていた。

「その身体の、どこにそんな力がっ!？」

褐色の肌に浮かぶ、大小様々な傷痕。

それらが物語る歴戦の経験も、千里には通用しなかった。

「せえい!」

千里は、肩に担ぐように大剣を持つと、そのまま女性を睨み付ける。

そして、一步引いた女性の懐に、神速の踏み込みを持って飛び込んだ。

「速いッ

……だが、その距離では振れないだろう!」

近すぎれば、剣を振ることはできない。

それは、懐に飛び込んだ千里も、良く理解していることだろう。

だからこそその瞬間は、相手の“油断”を突くことが出来るのだ。

光の剣を振り続けてきた千里もまた、外部からの恩恵を受けるように戦闘技術を身につけていた。

「はあっ!」

「なに!？」

千里は、大剣を肩に担いだまま前蹴りを打ち込む。

強力無比な蹴撃は、その一撃で女性の大柄な身体を宙に浮かした。

その三步ほど下がらされた空中こそ、千里の必殺の間合いだ。

「でええいつー!!」
「ぐあつ?!」

女性の肩口に打ち込まれた、大剣の一撃。
空中という逃げ場のない場所で放たれたその一撃に、女性は地面にクレーターを作りながら沈んだ。

そうして、千里の勝利が告げられる。
その様子を、ナーリヤは感心しながら眺めていた。

「すごい」
……もう、あんなに」

まだ戦いの世界に巻き込まれて、一ヶ月も経っていない少女。
……千里は、この短期間で見事に“戦士”になって見せたのだ。
その姿に、ナーリヤは素直な賞賛と純粹な拍手を送っていた。

「って、こんなことしている場合じゃないか」

この後は、千里と合流して宿に戻る。
その前に、街で夕食を食べる必要があったのだ。

「折角だからこの後、街を回ってみるのも良いかもしれない。
ああ、でも……本戦まで時間があるんだし、その時でも良いかも」

ナーリヤはそう小さく笑うと、本戦について説明を受けるために、
司会の元へと戻っていった。

十

月が真上に昇る頃、千里はナーリヤと合流をした。

結果がどうなったかなどと言うことは、表情を見れば解る。

千里はナーリヤが満足げな表情なのが嬉しくて、自分も小さな笑みを浮かべていた。

「お疲れさまっ」

「うん、お疲れ。千里」

本戦は十日後。

まだまだ時間はあるので、この間にやるうと思つことは沢山あった。

「差し当たっては、観光とか？」

「あはは、この機会に“技”も磨いておいた方が良さと思うよ？」

「あう、そうかも」

千里は気楽に、帝都の風景を思い浮かべて頬を緩ませる。

だが、ナーリヤに苦笑されて肩を落としてしまった。力押しだけではいつか負けてしまうから、ナーリヤの提案は呑んでおくべきだろう。

「でもまあ

……潤いは必要だから、明日はひとまず回ってみようか？」

「あ……うんっ！」

ナーリヤは、気落ちした千里に、優しいな笑みを浮かべて提案を重ねる。

やはり休憩や潤いは大切だ、といいながらも、千里の笑顔を見て嬉しそうだった。

頬を綻ばせて、千里が少し前を歩く。

月がやや西に傾き始めると、ナーリヤは空腹を感じて腹をさすった。

「そろそろ、どこかで夕飯にしようか」

「あー、確かにお腹すいたかも」

千里もどこか恥ずかしそうに俯きながら、同意する。

体内時計でいえば、夕飯を食べる頃だろう。

千里はそう、食い意地が張っている訳ではないのだと、誰に言う訳でもなく自分に言い訳をした。

「何を食べようかなあ……って、あれは」
「千里？」

千里は、不意に微かな音を拾い、首を横に向けた。
人の賑わう大通りから、僅かに外れた路地裏。
じめじめとした暗い脇道、その奥で瞬く金色。

「……っ！」

小柄な金色に振りかざされる、銀の刃。
それが昼間に見た少年だと解った時には既に、千里は走り出して
いた。

「大人しくてろ、このガキ！」
「っ……っ?!」

顔に傷を持つ、無精髭の男。
明らかに破落戸だと解るその男は、少年に剣を振り下ろした。
如何なるいきさつがあったのかわんて、千里は知らない。
だからといって、このまま凶刃が少年を傷つけるのを、放って置
く事なんて出来なかった。

「でえええいつ!!」
ガギンツ!
「ぐあっ?!」

ノーモーションで抜刀から振り上げられた、白い大剣。
帝剣アギトの一撃が、少年に降りかかる刃を下から掬い上げるよ
うに弾いた。

その威力は、剣を弾くに止まらず、その鉄を両断して男に尻餅をつかせる。

「退きなさい」

「ひいっ」

喉元に突きつけられた、白刃。

その剣真は月明かりを反射して、妖しく輝いていた。

「ひいっ?!?!」

すぐにその恐怖に耐えきれなくなったのか、男は何度も転びながら走り去る。

そんな男の姿と、男に向かって剣を構え続ける千里を、少年は新緑の瞳でぼんやりと見上げていた。

「ち、千里、速いよ……」

男が逃げ去った、ちょうどそのタイミング。

そこで漸く追いついたナーリヤは、ため息と共にそう零した。

大通りの方を見れば、ここまで百メートルほども距離があったことが解った。

「う、ごめんナーリヤ。

っと……君、大丈夫？」

「え……あ、は、はいっ！」

千里に手を差しのはされて、少年は漸く我に返って立ち上がる。

金砂の髪がはらりと一房少年の頬にかかり、どこか悩ましげな雰囲気を醸し出していた。

「よくわからなかったけど、暴漢……かな？」

「うーん、私もちよっとわかんない」

首を傾げるナーリヤを見て、千里も同様に首を捻る。顎に手を当てて考えつつ、千里は少年に声をかけた。

「何か心当たり、ある？」

「い、いえ！」

「……金盗り、だとは思うのですが」

「貴族をわざわざ狙うのは、おかしいか」

少年の言葉を引き継ぐように、ナーリヤが答える。

少年の鎧に描かれた紋章は、上位の貴族を示すもの。

そんな鎧を着ている子息を狙うのは、リスクが高すぎる。

唯一その話についていけず、千里はひたすら首を捻っていたが。

「と、とにかく。」

「ありがとうございます！」

俺の名前は、ライラン・ライク＝ランタートっています」

少年　ライアンは、貴族の少年にしては珍しく殊勝な態度で、

丁寧な礼をする。

そうして恐縮するナーリヤ達に頭を上げて見えたその表情には、尊敬の色が宿っていた。

「俺、驚きました！」

あんな鋭い剣戟を放つことができるなんて……名のある冒険者の方でしょうか？」

「へ？……あ、いや。
そ、そんなんじゃないよ。普通の旅人だよ」

純粹な瞳で詰め寄られて、千里はしどろもどろになりながら後退した。

こうして尊敬されるのには慣れていなく、思わず頬を赤くして両手を振る。

「む」

「うん？ナーリヤ？」

「あ、いや……なんでもないよ」

ふと後ろを向くと、ナーリヤが眉根を寄せていた。

そのことに千里が首を傾げると、ナーリヤはやや顔を逸らしながら首を振る。

「あの、これから俺の家に寄ってくれませんか？

このお礼に、是非帝都の名物料理でも……」

「ええ？！」

「……ど、どうしよう？ナーリヤ」

帝都の名物料理。

そう聞いて、千里は喉を鳴らしながらナーリヤに聞く。

先ほどから腹の虫はなりっぱなしで、千里はそれがどうにも恥ずかしかったのだ。

「ええと……チサト、さん？」

「……の恋人さんですよ？是非、ご一緒にいらしてください」

「じ、こいつ？！」

ライアンが微笑みながらそう付け加えると、今度は千里が慌てる。両手をぱたぱたと振りながら、弁解しようとして口を開く。だがどうにも喉から声が出ず、恐る恐るナーリヤを見上げた。

「ええと、いいのかな？」

「ええ、もちろんです！」

「では……お願いしてもいい、かな」

「はい！」

だが、ナーリヤは平然と流して、受け答えをしていた。

その様子がどうにも面白くなく、千里は小さく唇を尖らせる。

「それじゃあ、行こうか。千里」

「……うん」

もやもやとした気持ちで、差し出された手を握る。

千里はどうにもしっくり来ない気持ちのまま、どこかうわの空でナーリヤとライアンの様子を見ていた。

だから、気がつかなかったのだろう。

暗がりの中で頬に朱を刺し、普段は冷たい手が僅かに温かくなるほど、胸を逸らせたナーリヤが、“恋人”という言葉を一度も否定しようとしなかったことに。

僅かなすれ違いを抱えたまま、二人は夜の道を歩く。

金砂の髪の子の背中を、じっと見つめながら手を繋ぐ二人は、互いの表情に気がつかない。

……三者三様の表情を見るのは、ただ雲間から輝く三日月のみだった。

六章 第三話 金色の少年（後書き）

帝国編前半が終了です。

この後中間を三話から四話ほど続けてから、後半になります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第四話 月光の下で

帝都にある王城。

その眼下には、貴族達の屋敷が広がっている。

千里達を連れてきたライアンの屋敷も、そんな城下の家々の一つだった。

左右対称の庭園と、大きな噴水。

広がる屋敷は外国の大使館のようで、千里に衝撃を与えていた。

「お家で、“これ”なんだ」

「侯爵家、だとこんなにあるんだ……すごいな」

呆然と見上げる千里の隣で、ナーリヤは感心したように呟く。

爵位は下から、男爵、子爵、伯爵、侯爵、公爵と続く。

つまりライアンは、上から二番目という荣誉ある家柄の出だったのだ。

それを鎧に描かれた紋章から見ていたナーリヤは、感心を飲み込めないまま、ただ頷いて驚きを滲ませていた。

「さあ、どうぞ。」

今、家の者に食事を用意させています」

「あ、う、うんっ」

ライアンに促されて、敷地に踏み込む。

綺麗に整えられた石畳の感触は、千里にアスファルトを思い出させた。

補正されている道。魔法のある世界ならではの、時代背景に合わない歩道だ。

千里とナーリヤは出迎えの人間に恐縮しながら、緊張と共に屋敷の中へ入っていくのだった。

E
x
I

白い長机に並べられた、豪華料理の数々。

脂の乗ったステーキ、色とりどりのサラダ、黄金のスープ。行ったこともない高級レストランのフルコースを用意されたような感覚に、千里は食欲を通り越して目眩を覚えた。

「私の息子を危機から救っていただいたとお聞きしました。主人は王城に出向いているため不在となっておりますので、代理として妻である私が、ここにお礼を申し上げます」

そういつてナーリヤ達に微笑んで見せたのは、ライアンよりも淡い色の金髪を後ろへ流した貴婦人　ライアンの、母だった。

「ささ、どうぞ召し上がってくださいな」

「今日は本当にありがとうございました。」

さあどうぞ、ご遠慮なさらずに」

にこやかに料理を勧める貴婦人と、似た様な微笑みで促すライアン。

よく似た顔立ちと新緑色の瞳が、二人を親子なのだと示しているようにも見えていた。

「は、はあ……ありがとうございます」

先にそう頭を下げたのは、ナーリヤだった。

ナーリヤは緊張しながらも振る舞いに礼を言い、その律儀さに苦笑されながらも胸の前に手を置いた。

「こ、こんなにまでしていただいて……」。

あ、ありがとうございまふゅっ?!」

そんなナーリヤを見て、千里も慌てて頭を下げる。だが、勢い余って舌を噛み、目を見開いて俯いた。その顔は、耳まで赤くなっている。

「大丈夫？」

「うう、らいじょうぶ」

ナーリヤに心配されながら、千里は胸の前に手を置いて祈りを捧げた。

まだ口調は拙いが、痛みはもうほとんどない。回復速度の上昇、さまざまである。

「あ……ナ、ナーリヤ」

「おお、おいし……うん？」

器用に鶏肉を切り取り口に運ぶナーリヤは、実に様になっていた。そんなナーリヤに、千里はおずおずと声をかける。

もう何度目かの焦りと緊張がたたって、ナーリヤの服を掴む千里の手は、小さく震えていた。

ナーリヤはその仕草にどこか胸を打たれるものを感じながら、千里の方に首を向ける。

「マナーが、わかんないかも……」

「あ……そ、そうだよね。」

えーと、僕も爺ちゃんにさわりを教えて貰っただけなんだけど……」

そうは言つものの、女性男性で違いがあるのかどうかすらもわからない。

ナーリヤもなんとなく食べ進めてしまったが、よく考えてみれば自分も教えられるほど解っているのか、解らなくなっていた。気に始めたら、止まらないのだ。

「えーと……あれ？」

僕のもこれ、合っているんだらうか？」

「ええっ?!」

テーブルマナーが必要そうな料理の数々。

垂涎ものの料理を目にして食べることができなくなり、二人は途端に慌て出す。

そんな二人に助け船を出したのは、ライアンだった。

フォークとナイフを握りしめたまま口を開けたり閉じたりしている二人の様子に、苦笑いを浮かべている。

「え、えと。」

細かいことは気にせず、好きに食べてください。

これは“お礼”なのですから、そうしてくださるのが俺たちとしても一番です」

「あ、あう」

「面目ないです」

項垂れつつも、千里はゆるゆるとフォークとナイフを手に取った。ナーリヤも慌ててしまったことに頬を熱くしながらも、食事を再開するのだった。

慣れないことはすべきではない、で片付けられそうにないことなのだ。

なにせ、美味しそうな料理を目の前にしているのだから。

十

夕食後、千里達は宿に戻ることになくこの屋敷に泊まっていくことになった。

明日の朝には戻るので、宿から荷物を回収してはいないのだ。

緊張しながら使用人に案内された、客室。

貴族用に造られたその部屋は、エクスの居城のような趣味の悪さこそはないが、品の良い色とりどりの調度品によって飾られていた。

「恋人、か」

白い天蓋付きの、柔らかいベッド。

その暖かさに背を預けながら、千里は小さく呟いた。

服装は、アーマー付きのブレザーとスカート、それにネクタイを外してブーツを脱いだだけの簡易な格好だった。

もう、月が西側に傾こうという時間なのに、ライアンに言われた言葉が千里の頭から離れない。

「男の子を、好きになる」

小さく唇を動かして、震えるように声を零す。

朱色の唇から白い歯がちらりと覗き、その戸惑いを音にして虚空へ溶かしていた。

571

異性への愛情を考えたことなど、無かった。

過保護な友達に“吊り橋効果”に気をつけると言われたことはあって、これもその一環なのかとも思っていた。

「でも」

切なげな吐息が、小さく零れる。

緩やかに熱を持ち始めた頬に意識をすると、頭が上手く回らなくなつた。

切羽詰まった状況で、心を焦がす未知の思考に、千里は困惑を隠せずにいたのだ。

「あー、ダメ。」

全然、眠れないや」

熱が頭を支配して、焼け付くような痛みが胸に走った。こんな感情は知らないと、栗色の瞳が小さく揺れる。

起き上がって、スカートを穿いてアギトを背負う。

ブレザーは部屋に置いたまま、それで十分だと千里は部屋から抜け出した。

人に見つからないように廊下を歩いて、屋敷の中庭に出る。

肩で風を切れば肌寒さに襲われるはずなのに、気持ちを焼き切る熱が冷たさを吹き飛ばしていた。

そうして辿り着いた芝生の上で、千里はアギトを抜き放つ。

月光を呑んで輝く白刃は、千里の心を落ち着かせる。

「身体を動かせば、眠れるかな」

内側に宿る熱を払うように、千里はアギトを振る。

千里は戦闘時以外では何故だか剣を上手く振れず、実戦よりも疲れる素振りになってしまっていた。極限状態にならないと、身体の動かし方が解らないのだ。

「せいっ！」

振り下ろして、振り上げる。

身体を回転させて横に薙ぎ。

遠心力で、斜め下から切り上げた。

思い出しながら振るっているため、疲労は溜まる。

それに、本当にこの振り方であっているのかも解らない。

それでも、心に宿る熱が急かすのだ。
もっと動け、動いて動いて、熱を忘れる……と。

「はあっ！」

もう何度振るったか。

芝生に剣戟の軌跡が刻み込まれて、千里は小さく嘆息する。

「まずい、かな」

微かに動いた朱唇から、ゆっくりとこぼれ落ちる空っぽな音。

人の家の中庭。

そこに剣筋を残してしまったのだから、もっと焦るべきだろう。
けれども千里は、焦ることができるほど、冷静に周囲を見られな
かった。

「もっと……速く」

いつしか千里は、剣を振ることに意識を集中させていた。

もっと速く、もっと強くとアギトを振る度に、鈍い風切り音が空
間に響く。

ショートした思考はノイズすらもかき消し、一つの機械のように
空を斬って夜を砕いていた。

だんだんと視線の焦点が合わなくなり、耳鳴りすらも消える……
その時。

その空間に、唐突に“気配”が飛び込んだ。

「ダメね」

「っ?!」

鋭く、そして冷たい声。

鋭利な空気を肌で感じ取り、千里は飛ぶようにその場から跳躍して下がる。

中庭の端、月明かりに照らされた、黄金の光。

「力だけでは、鋭くはなれない」

水面に映った月を溶かし込んだような、淡い金のショートヘア。その月を更に薄めて雲を織り交ぜたような、金がかかった銀色の目。

血のように赤い、深紅のドレスを身に纏った女性が、腕を組んで佇んでいた。

「貴女は……だれ？」

「力だけで振るっているから、鋭くなれないの」

千里の問いかけを無視して、女性は一步近づいてくる。くびれた腰と豊満な胸、すらりと長い足はどこか儂げで。

「剣は腕で振るものじゃないわ」

そしてどこか、艶やかだ。

千里は身構えることも忘れて、女性の歩みを受け入れていた。

「剣はね。

……足と腰、それから“魂”で振るのよ」

「たま、しい？」

女性は手の中にあつた銀フレームの眼鏡を掛けると、千里の眩きに頷いた。

冷たい声なのに、その音はどこまでも“熱”い。

その感覚に、千里は何故だかアレナの姿を思い出していた。

「意識しなさい」

声が、脳を叩き心を揺さぶる。

伴うのは痛みなんかではなく、どこまでも熱だった。

「え、あの……」

「まずは足」

千里の困惑など、欠片も意に介さない。

ただ力強く言い放つその姿は、妙な説得力を持っていた。

「地面から、力を引き出すように踏み込みなさい」

戸惑いながらも、千里は大きく左足を踏み込む。

芝生からを踏み抜く勢いで土を蹴り、足の裏から振動を伝える。

「次は腰。竜巻をイメージしなさい」

千里が従ったことに、反応はしない。

ただ淡々と、続きを促すのみだ。

「動きは螺旋。

大岩をも持ち上げる、嵐の渦」

「螺旋……螺子、みたいに」

右に傾かせて、それから左を向かって大きく腰を回す。
その勢いに巻き込まれて、千里の栗色の髪がふわりと舞い上がった。

「そして腕。力を抜いて、振り抜きなさい」
「振り、抜く」

今までと同じように、手の力だけで剣を振る。
だが、今までよりも力は抜いて、剣の重みに任せて薙ぐ。

ブウンッ

風切り音。
だが、いつもよりも少しだけ高い音だ。

「最後に魂」

最後だというのに、その声に抑揚はない。
ただただ、どこまでも平坦でどこまでも熱い。
冷たさと矛盾した、魂の輝き。

「その一撃は貴女の必殺。」

ならば、全身全霊全てを乗せるのが、礼儀」
「全身全霊……全力で、振る」

千里の復唱に対して、女性は表情を変えないまま頷いた。
そして、最後の仕上げにかかる。

「その全てを、繋げなさい」
「……はいっ！」

千里は疑問を捨てて、ただ大きく頷いた。
言われたことを繰り返す。

ただ、それだけで“強くなれる”気がしたのだ。

ただ、それだけで“なんでもできる”気が、していたのだ。

「足を、踏み込む」

芝が散り、土が抉られる。

「螺子のように、腰を回す」

足の裏から伝わった力が、腰の回転で増幅される。

「腕から力を抜いて」

増幅された力が、弛緩した腕より剣に伝わり、その身を研ぎ澄ませる。

「全身全霊を込めて　振り抜く！」

全ての力が繋がり、やがて一つの純粹な“力”となり……そして、空を斬り裂く。

実戦の間、千里はこれらを無意識で行っていた。

だが、無意識は所詮無意識……意識されない力に、経験の重みはない。

そして千里は今、初めてその重みを手に入れた。

片鱗とはいえ、意識により重みを増した力。

その力は　夜空を両断する。

……オン

何よりも、静かな一撃。

だがその一撃は突風を起こし、千里を中心に円球状に芝生を刈り取る。

緑の草がふわりと舞い上がり、それだけでは収まりきらない力が溢れ出した。

横薙ぎに振るわれた大剣から放たれた衝撃は空を斬り、五メートルほど離れた場所にあった庭木を切り倒す。

それは重く、強く、速く……そして何より“鋭い”一撃だった。

「あ」

開放感と共に、千里は小さく喉を振るわせた。

無意識で行っていたことを、意識しただけ。

それだけで、剣を振った後の“世界”が変わった。

「すごい。」

……あ、あのっ！ あれ？」

礼を言おうと周囲を見るが、既に女性の姿は無かった。

まるで始めから何も居なかったかのように、しんと静まりかえっている。

一夜の幻でも見ていたかのような、不可思議な感覚。

それを感じて、千里は切なげな吐息を零していた。

「どこ行っちゃったんだろう？」

心を落ち着かせて、改めて周りを見る。

人影の一つもなく、あるのはただ……“荒れた”庭だけ。

「……って」

そこで漸く、千里は事の重大さに気がついて顔を青くする。刈り取られた芝生、抉れた大地、倒された庭木。

荒れ果てた中庭の惨状。下手人は、推理するまでもなく自分自身。犯人は私だ、などと名乗り出る余裕があるかどうか。アリバイ作りはどうしようなどと、益も体もないことを考えて千里は思考を紛らわせる。無駄な足掻きだ。

「ど、どうしよう」

素直に謝る。

これが一番だし、この選択肢を外すつもりはない。だが気になるのは、その後のことだ。

この惨状……これを弁償しろなどと言われたら、千里は闘技大会どころではなくなってしまう。

牢屋は嫌だな、と千里の頭の中に、白と青のストライプの囚人服を着て鉄格子を掴む自分の姿が浮かんでいた。微妙に古い刑務所像である。

ガサッ

とりあえず、気がついて駆けつけた人に事情を説明しよう。

そんな結論に達した千里の後ろから聞こえた、芝生　残り少ない　を踏む音。

その音に、千里は冷たいご飯を食べる決心をした。思考が飛躍しすぎている。

「すみません、実はこれ」

「ち、千里？」

勢いよく頭を下げながら、千里は振り返る。

その視線の先にいたのは……ある意味今一番会いたくなかった、ナーリヤだった。

誰よりも耳が良いナーリヤが最初に駆けつけるのは、ある意味当然のこと。

だというのに千里は、その考えを放棄していた。考えたくなかったともいう。

「これ、え？全部、千里、が？あれ？」

ナーリヤは混乱しながら、周囲を見回す。

確かにその有様は、複数人で荒らしたようにも見えた。言うなればそれほど“非道い”ものだったのだ。

「え、その、あーうー

……………てへ」

自分でも“イタイ”と思いつつも、上手い言い訳が思い浮かばない。

だから、小首を傾げて舌を出すという、なんとも子供っぽい仕草しかできなかつたのだ。

眠れなくなつた原因とはまた違った熱で、頬が熱くなる。

「そう、なんだ」

「ナ、ナーリヤ」

俯いて声を震わすナーリヤに、千里は心配そうな声をかける。

こんなところで、軽蔑されたくはなかつた。

だから千里は、大きく息を吸って謝罪の準備をする。

正直に話す。これだけは、外すことができないのだ。

「ごめ

「なるほど」

「へ？」

だが、その決意は他ならぬナーリヤによって、遮られる。

顔を上げたナーリヤは満面の笑みを浮かべていて、そしてどこか目が虚ろだった。

危ないクスリをキメているようにも見えて、不気味だ。

「はっはっはっ、千里がこんなことをするはずがないじゃないか。

これじゃあまるで、後先考えない“脳筋”だもんね」

色々とストレスが溜まっているのか、妙に辛辣だった。

ナーリヤが言った“脳筋”という言葉に、千里は頬を引きつらせた。

脳筋……すなわち脳みそ筋肉、ハイパー単細胞である。

「まったく、千里のことを考えていたせいで寝付きが悪かった

……とはいえ、こんな“夢”を見るなんて」

「へ？」

あ、そうそう、夢だよ、夢！」

ナーリヤの“現実逃避”かんちがいに、千里は華麗に便乗した。

ナーリヤはそんな千里を見ると、満足げに頷いて踵を返す。

「さあて、さっさと起きないと。

ベッドで眠れば、目をも覚めるかな？」

あはははははっ」

おぼつかない足取りで自分の部屋へ帰っていく、ナーリヤ。千里はその後ろ姿に、控えめに手を振った。そして、一人残された中庭で、両膝をついて頂垂れる。

「うう……」。

これじゃあ、問題の先送りだよ」

何も解決していない。

おまけに、ナーリヤが最後に零した言葉は、千里に問題を増やしていた。

「私のことを考えていた、って」

解決の糸口が見えない問題と、先送りにした問題。

そして、新たに増えた問題に、千里は膝を抱えて落ち込みだした。類は熱いが心は寒い。羞恥と疑問と困惑と現実逃避で、脳はパンク寸前だ。

そんなことだから、気がつかなかったのだろう。

「さて、片付けをしておいて頂戴」

『はい！お嬢様！』

女性はただ、後片付けの人材を呼んできただけという事に。

「あら？」

あの子、何をしているのかしら……」

体育座りをし始めた千里が、女性に気がつくまで、まだまだかか
りそうだった。

六章 第四話 月光の下で（後書き）

次話で六章の折り返し地点になります。
次話は、長めになるかと。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次回もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第五話 金と藍／黒と金 前編

朝のランタート家。

その食卓には、一人の女性が増えていた。

淡い金のショートヘアと白銀色の瞳。

そして、大きく胸元の開いた真紅のドレスと、淡い桃色のショート。

銀の長方形の眼鏡を掛けた、クールな女性がその場に座っていた。

「なんかおかしな“夢”を見た気がするんだけど……あれ？」

「おおおお、思い出せないなら、大したことじゃないと思うよっ！
うん！」

「そうかなあ？うん」

「そそそそ、そうだった！」

昨晚とは一転して、賑やかな食卓。

ライアンと貴婦人はそんな二人を見ながら楽しそうに笑い、女性
はただ淡々と食事を続ける。

なんとも奇妙な光景が、朝の食卓を包み込むのだった。

「うーん？」

「ははは、はい！ナーリヤ、あーん」

「へ？あ、う」

千里は思わず、ミニトマト似の野菜を突き刺したフォークを、ナ
ーリヤに差し出す。

急に行われた謎の状況展開に混乱しながら、ナーリヤはそれを口
で受け取る。

この行動の意味に気がつき千里が行動停止フリーズするまで……あと三秒。

E
x
I

朝食を食べ終わると、二人に紅茶が出された。

そうして恐縮しながらも受け取る二人に対して、女性が漸く口を開く。

「昨晚一悶着合ったのにも関わらず、千里は女性の名前を知らなかった。」

もっとも、髪の色から、親族だろうと当たりはつけていたが。

「私の名前は“ララ・ライラ”ランタート」

……ライアの姉、になります。初めまして、旅の御仁さま方」

簡潔な挨拶を終えると、女性　ララは眼鏡を指で押し上げる。

クールな雰囲気彼女の彼女によく似合った、仕草だった。

ライアンと姉弟と言うだけあって、口元や鼻の形がよく似ている。目元だけは、ララの方がややつり上がっているため、可憐というよりは気丈なイメージを他者に与えていた。

「え、えーと。」

「私は千里。千里”高峯です」

「ナーリヤ”ロウアンスです」

恐縮しながら頭を下げる千里に、ナーリヤが追従する。

日本人らしい深い礼だった。

「そんなに畏まる必要はないわ」

「は、はいっ」

だからだろう。ララは無表情のままそう指摘をする。

貴族と旅人という身分差はあれど、そこまで畏まられると困るの

だ。

なにせ、ライアンが招待した“客”なのだから。

「……ライアンの恩人、ということだったからつい口を挟んでしまったのだけれど」

ララはそういうと、一息置いて涼しげな表情で二人を見た。
射すくめられるというよりは、人形に見られているような曖昧さを覚える視線だ。

「あなたたちも、闘技大会に？」

「あ……はいっ。」

私と、ナーリヤ。それぞれ男性部門と女性部門に出場します」
「そう」

そこで話しが途切れてしまう。

聞きたい事だけ聞いて後は紅茶を飲むのに戻ってしまったララを見て、千里は慌てて言葉を繋げる。不自然に間が開いてしまうと、
気まずいのだ。

「えと、昨日はありがとうございました！」

「庭木？」

千里がそう言って、頭を下げる。

深く頭を下げてしまうのは、千里と言うよりは日本人としての習性だろう。

こればかりは、すぐにどうこうできるものでもなかった。

身についた習慣だということを感じ取ったのか、ララはただ首を傾げて見せた。

そして、そんなララの言葉に反応したのは、千里ではなくその隣のナーリヤだった。

「え？あれって、夢じゃ」

「あわわわわっ！」

あのね、ナーリヤ！昨日ララさんに剣の指導をして貰ったの！そのお礼！」

恩を返すためとはいえ、豪勢な食事に寢床まで提供してくれたライアン。

その立派なお屋敷の中庭を、一晩で廃墟にするというとんでもない行為。

その凄惨な光景を全て“夢”だと自分に思い込ませていたナーリヤは、昨晚の光景を思い出そうとしていた。

「でも今、“庭木”って……」

「ちょ、ちよつと剣を振った時に……そう！

剣を振った時に、庭木が少しだけ傷ついちゃったの！」

千里の必死な弁解に、ナーリヤはしきりに首を傾げながらも曖昧に頷いた。

そこまで必死に隠す必要はないし、別にナーリヤもそのことで呆れたりするだろうが、そんなに怒ったりはしないだろう。

だが、一度隠し始めてしまったら、もう引っ込みがつかないのだ。

「そ、そう？うーん……」

「そうだからっ！ねっ！」

「あ、ははは。そうですよ、ナーリヤさん」

見かねたライアンが、千里をフォローする。庭もすでに、修復作業専門のお抱え魔法使いのおかげで修復されている。

口裏さえ合わせておけば、まあ問題はないだろう。

千里は小さく、ライアンに目と仕草で感謝を伝える。

するとライアンは、すぐに意味に気がつき苦笑を零した。

普通は、目の前で両手を合わせる仕草を“礼”だとは思わないのだが、ここはライアンの洞察力の賜だろう。

「それで、その。」

剣技と体捌き、すつごく為になりました!」

「別にいいわ。」

弟の“後始末”を、手伝ったに過ぎないのだし」

ララはそう言うと、紅茶をほんの少しだけ口に含んで嚥下した。

彼女は、ほんの少しアドバイスをしたに過ぎない。

そのことでそう畏まれる謂われはないのだ。

「それに、いずれ戦う可能性があるのなら

より強い相手と戦いたいじゃない」

「え?」

ララが付け加えたのは、予想だにできなかった言葉だった。

千里にアドバイスをし、その内容から戦士なのは解っていた。

だが、“より強い相手”とやらを求める雰囲気ではない。

「姉上は、腕試しのために闘技大会に出場したんです。

俺も本戦まで上がることはできましたが、実力は姉上に遠く及びません」

「閉じた世界で腕を試しても、意味はないから」

捕捉をしたライアンに、ララはそっと付け加える。

そんな二人を、貴婦人はただ優しそうな表情で見て、笑っていた。

「チサトさんたちも、闘技大会には出られるんですよね？」

「いったい、どのような目的が？」

「……ああ、もちろん言いにくいのだったら構いません！」

途中で聞かれたくない理由だった場合に思い至ったのか、ライアンは慌てて両手を振って見せた。その仕草に、千里はほんの少しだけ苦笑を零す。

「私たちは、えーと……」

「ノーズファンに、行きたいんです」

地名が出てこず首を傾げる千里を、ナーリヤが苦笑しながら補足する。

地名なんて、そうそう覚えられるものではないのだ。

「それでは、神聖騎士に？」

「……それは、大変な時期に来てしまったのですね」

「大変な、時期？」

気の毒そうに目を伏せるライアンを見て、千里は身を乗り出した。もうこの時点で、千里とナーリヤは“イヤな予感”を覚えていた。経験に基づく、確かな“勘”である。

「ええと、ご存知ない……ようですね。」

今年は例年までのように、上位数名がノーズファンへ入国できる

訳ではありません」

ライアンの目は、ただ気の毒そうに伏せられたままだった。そして少し逡巡すると、その理由を話す。

「なんでも、新たに“神託”が下ったようで……

ノーズファンに入国する資格を得ることができるのは、各部門の優勝者に限る、と」

「え？」

「な……っ」

ライアンがもたらした情報。

それを聞いて、二人は口を開けて驚く。

まさかこんなところで“道”が狭められるなど、想像もしていなかったのだ。

お茶会を終えて屋敷を去るその時まで、千里とナーリヤはただ不安そうな表情を浮かべるのだった。

とにかく、勝ち抜かなければならないことには変わらない。
ひとまず、千里達は屋敷を出て宿に戻ることにした。

「あ、送ります！」

「ライアン君……」

そうして広い門を潜り抜けたところで、ライアンが走ってきた。
高位の貴族にしては珍しい好青年で、そしてお人好しだった。

「でも、悪いよ」

「いいんです。」

道中で、少しお話もしておきたいですし」

遠慮する千里に、ライアンははにかみながらそう言った。

そんなライアンを見て千里が困ったように眉をしかめながらナ
リヤを見ると、ナリーヤは苦笑しながらも、確かに頷く。

「実は、宿までの道のりをよく覚えていないんだ。

大通りまでで良いから、教えて貰っても構わないかな？」

「はいっ！是非」

気を遣った、良い提案だ。

このナーリヤの提案に、ライアンは強く頷く。
話したいこと……それも、家族に聞かれたくないことがあったの
だろう。

「そういえばさ、言いそびれてたんだけど」

「はい？」

千里はそう言いながら、首を傾げるライアンに声をかける。
なんとなく……本当になんとなく、笑い合うナーリヤとライアン
の間に入りたかったようだった。

「その、そんな畏まった言葉じゃなくても良いよ？」

私たち、そんなに偉い人でもないし……なんか、むず痒くって」

学校の後輩に敬語で話されるのとは、訳が違う。

ライアンは千里達よりも遙かに偉くて、それでいて大きく年が離
れている訳ではない。

こうして畏まられたままだと、どうにも背中が痒かった。

「えーと、ああ。」

それなら、普通に話すよ、チサト。

えーと、ナーリヤ、もいいのかな？」

「もちろんだよ。」

僕もただの狩人だし、そんな畏まられるのは苦手だから」

「ああ、わかった。」

それなら気楽に行くよ。ナーリヤ、チサト」

ライアンは、そう笑って見せた。

このどこか大人びた口調が、彼の素だったのだ。

屋敷から出て、貴族街を歩く。

周囲には大きな家ばかりが建ち並び、千里はどうにも場違いな空気を感ぜずには、いられなかった。

「それで、ライアン。」

話したい事ってというのは？」

「ああ、そうだった。」

その……どうやったたら、強くなれるんだろう、と」

ライアンは苦笑しながら、そう呟く。

その声には、どうにも力がない。

「えっと……。」

なんで、ララさんじゃなくて、私たちに？」

千里は、ほんの一時だがララの指導を受けた。

それだけで、理解の易い教え方だったと感じていたのだ。

「姉上は確かに教え方も上手いし、本人もすごく強い。」

けれど、もっと広く請わなければ、狭い世界だけの力しかつかないと思う。

姉上だって、そうして闘技大会に毎年出場しているから、な」

ライアンは、強い決意の込められた目で語る。

だが不意に、その瞳が小さく揺らいだ。

「俺は、今年で初出場なんだ。」

ある程度力をつけるまで出場は許されなくて、今年は漸くそれが叶った。

でも姉上は、十二の時に初出場している……俺は、姉上より二年も遅い」

姉弟だからこそ感じる、コンプレックス。

千里は弟と、とくに能力を競う場面があった訳でもないため、その気持ちはあまりわからなかった。それでも、理解しきれない訳ではないが。

「もっと強くなりたい。

強くなって、騎士になりたい。

いずれ皇帝陛下に見え^まることができるような、立派な騎士になりたい」

「……ライアン君」

足を止めて、ライアンは空を見上げる。

夢と希望を携えて、ただ蒼天を仰いで腰の剣の柄を強く握っていた。

「でも、私は……」。

その、“魔法の力”を借りてるから、あんまり上手にアドバイスできないんだ」

「僕は、そもそも弓兵だから、力になれるかどうか……」

千里の力は、ある意味で“先天的”なものだ。

能力自体は後天的に得たものだが、過程が千里自身にも解らない以上、知恵を貸すこともできない。現に、ララから教わったのは、基礎の基礎にすぎないのだから。

「ああ、いや。

そんなに気にしないでくれ。

その言葉だけでも、俺は嬉しい」

ライアンは、そうはにかむと再び歩き出した。そしてどこか恥ずかしそうに、付け加える。

「その、小さな事でも良いから

……思い当たることがあれば教えて欲しいんだが」

「うーん、そうだなあ。」

僕の場合はひたすら経験、かな。

反復練習と実践の積み重ねだね」

同じ動きを何度も行っていると、脳の電気信号がその動きを覚える。

すると、意識せずとも自然に電気信号のショートカットが行われるのだ。

ナーリヤはそんな小難しいことは知らずとも、経験でそのことを感じ取っていた。

「え、えーと、えーと……」

ナーリヤに続いて、千里も何か言わねばと思ったのだろう。

反復練習という言葉に頷くライアンに、迷いながら口を開く。

「……ど、度胸と根性！」

迷いに迷って口から出たのは、まさかの精神論だった。

もともと千里は、頭を使って立ち回るといっなのは得意な方ではない。

だから結局、こんな突拍子もない答えに行き着いてしまったのだ。

「なるほど……。」

度胸と根性が、深いな」

「……うん。」

僕も、教えてばかりとはいかないみたいだね。

踏み込む勇氣と、乗り越える強靱な意志、か」

千里本人も、どうしようもない言葉だと解っていた。

だからこそ……この答えに、誰よりも困惑してしまう。

「へ？」

え、いや……あれ？」

微妙に天然気味な二人。

その二人に言い切ってしまったがために、千里はまるで考え尽くされた言葉を残してしまったように思われていた。

「い、いや、ちょっと……。」

歩きながら何度も頷く二人に、千里は上手い言い訳ができずに戸惑う。

笑って欲しかったとまでは言わないが、苦笑しながら流して欲しかったのだ。

「と、到着したみたいだ」

「え？いや、その」

「けっこう短く感じられたね、ライアン」

「ね、ねえ」

「ああ、そうだな。ナーリヤ」

千里が弁解できないまま、大通りに辿り着く。

もう、通りを抜けて宿に帰るだけ、という位置だった。

「有意義な時間だったよ。」

「本当にありがとう、チサト、ナーリヤ」

「うん……。」

「こちらこそ、ありがとう。ライアン君」

「うん、こちらこそ」

肩を落としながら手を振る千里と、笑みを浮かべながら軽く手を挙げるナーリヤ。

そんな二人に、ライアンは笑顔を返す。

気分が晴れたのか、先ほどまでよりも爽やかな表情をしていた。

「では、本戦で会おう！」

「うん、楽しみにしているよ」

「じゃあね、ライアン君！」

道を引き返すライアンを少しの間見て、それから二人は踵を返す。昼時近くと言うこともあって、大通りには人が溢れていた。この中を縫って帰るのは、少し骨だ。

「うん、ちょっと回っていった方が楽かも」

ナーリヤがそう提案すると、人の流れに苦い表情をしていた千里も頷いてみせる。

このまま抜きたいと思うほど、切羽詰まった状況ではないのだ。

「そうだね」。

「ちょっと戻った方が良いのかな？」

「うん……顔を合わせたら、少し気まずいけどね」

脇道に戻ってライアンがいたら、少し気まずい。
今別れたばかりなのだから、仕方がないことだが。

「本戦、かあ。」

うう、そういえば、優勝しなきゃいけなくなったんだよね……」
「ああ、そういえばそうだったね」

二人揃って肩を落としながら、脇道に戻る。

世界から屈強な戦士達が集まる闘技大会。

それに優勝するのは、並大抵のことではない。

「どうしようか　　と?!」

「わわっ!?!」

そうして俯いていると、二人の間を押し除けるように男が走り去っていた。

二人組の男で、肩には大きな麻袋を抱えていた。

「危ないなあ」

「なに、あれっ」

正面から来た二人に気がつかなかったのは、注意力が散漫していたためだろう。

だから仕方がないといえない、強引な動きだったのだ。

「もっつ。」

なんなんだろう、ほん……と?」

悪態を吐きながら更に足を進めると、千里は少し先の地面に何か

が落ちていることに気がついた。

「ねえ、ナーリヤ」

「うん？」

「……あれって」

ナーリヤは駆け寄ると、膝を突く。

千里もナーリヤの後ろで屈んで、落ちていたものを覗き込んだ。

「銀色の剣……」

「この装飾は……ライアンの？」

「言われて見れば……って。」

それってまさか！

剣士の腰から離れた、愛用の剣。

その意味するところに気がつき、千里は驚きを滲ませる。

「さっきの男達……まだ、間に合うかも知れない」

「追おう！ナーリヤ！」

「うん！」

剣を手にとると、慌てて踵を返す。

ガラの悪い男達と、残された剣。

強引に二人の間を抜けていった男達と、麻袋。

イヤな予感を抱えたまま、二人は先ほどの男を捜しに走り出すの
だった。

六章 第五話 金と藍／黒と金 前編（後書き）

後編は長めになります。

あまり時間を置かずに、更新したいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。後編も、どうぞよろしく願います。

第六章 第五話 金と藍／黒と金 後編

大きな何かが転がる、鈍い音が響く。

頭部に感じる鈍痛に顔をしかめながら、ライアンはゆっくりと目を開けた。

「ここは……」

床に転がされているため、身体の側面がひどく冷たい。冷たい石畳の上で、ライアンは後ろ手と両足を縛られていた。どうしてこんな状況なのか、思い出そうと目を閉じる。

「なんだ？また寝るのかライアン」

「っ」

見下すような、特徴的な声。

その音の主を目の前に見つけて、ライアンは目を瞪る。

趣味の悪い金の鎧に身を包んだ、彼のよく知る青い瞳の少年だった。

「ジツク、おまえ」

「こんな簡単に捕まるとは」

「……くくっ、無様だなライアン」

ジツクはそう、目を睨ったまま固まるライアンにそう告げた。ライアンはそんなジツクに、躊躇しながらも口を開く。

「いや、まあ我ながら無様だとは思っ、が。」

どうしておまえも転がっているんだ？」

そう……ジックもまた、後ろ手と両足を縛られて転がっていた。ライアンが目を覚ました切っ掛けは、ジックが転がる音だったのだ。

「ふっ」

ジックはそう、自信ありげに笑う。

……虚勢だった。

「アイツら、契約を破ったのだ。

ちっ……忌々しい！」

ライアンを痛めつけるように。

ジックはそう、ガラの悪い男達に告げて金を払った。

だというのに蓋を開けてみれば、何故か二人揃って転がっていたのだ。

「オレ達を捕まえて、一体どうする気だ？」

伯爵家と侯爵家……リスクの高さは並ではあるまい」

「だからと言って、リターンがあるのかと言われれば首を捻るな。

そんな厄介ごと、犯罪者であろうと関わりたいと思つとは、考えられん」

互いに頭を回して、目的を探る。

周囲に人の気配が無い以上、こつするより他にできることがないのだ。

「縄は切れそうにない、か」

「フンッ、そう簡単に切れれば苦労はしないッ」

話しながらも腕を動かしていたライオンが、小さく呟く。
それを聞いて、ジックは苦々しく吐き捨てた。
気を失っていなかったジックは、ここに運ばれてくる間に散々試
したのでらう。

「男の顔は？」

「みんな猿のような、似た様な顔つきだったぞ」

要は、覚えていないということだろう。

そういうライオンも、後ろから殴られたため覚えていなかった。

「とにかく今は、情報を集めるしかなさそうだ」

「ああ、どうしてこのオレがこんな目に！」

「いや、自業自得ではないのか？」

「うるさいッ！」

なんだかんだで息が合うのだろう、二人は叫びながらも周囲を確
認する。

だがそこにはやはり人の気配はなく、結局状況の想定程度しか、
できることは無いようだった。

燦々と輝く太陽が、じりじりと街を焦がす。
顔を上げるだけで眩しいと感じてしまうほどに、澄んだ空の下。

「ついつたい、どこへ」

憔悴した声が、人混みの中へ溶けていった。
人の波を潜り抜ける体力は、普通に走り抜けるより何倍も疲れる。
まして、これは人探し。周囲に注意を払わなければならない分、
疲労は溜まる。

「千里、そっちはどう!？」

「だめっ……どこにもいない！」

人混みから抜けて脇道に入り、肩で息をしながら声を掛け合う。
麻袋を担いだ男の姿は、もうどこにもなかった。

「……手分けをしよう。」

僕は北側から東へかけて探すから、千里は南側から西にかけてお願い。

情報が見つからなかったら、大通りを伝ってこの道に戻ってこよう
「うん」

「うん……わかった！」

頷き合うと、走り出す。

千里はナーリヤの気配が背から感じられなくなると、自分も速度を上げた。

「さっきまで、一緒に居たのに……っ」

道行く人にぶつからないように、南へ向けて小道を走る。

速度を増す足下からは土煙が立ちあがり、やがて足を動かす突風でそれすらも吹き飛ばし始めた。

「ただ走るだけじゃ、見つけれっこない。」

「だったら……お願い、”イル”リウラス！」

千里の言葉に、光が生まれる。

その金色の粒子は膜となり、千里を淡く包み込んだ。

……は、しょうか。

だっ……も……い……。

こん…、…う……。

途切れ途切れに、耳に届き始める音。
光の粒子が補助することで生まれる、超感覚。
それによって捉えた音が、千里に届く。

「もっと、音が拾えるところに……」

足に力を入れて、飛ぶ。

踏み込んだ場所を中心に石畳に罅が入り、飛び上がると同時に小さなクレーターが生まれる。

ドンッ

それはまるで、重い鉄球でも落としかのような“クレーター”
だった。

石畳に刻まれたモノは、人間の足によって作られたものとは思えないほどに、凄惨な傷跡になっている。

空に飛び上がると、千里は背の高い建物の天井に降り立つ。
風が舞い上がり着地したその場所からは、周囲の風景が一望できる。

そこで千里は、両手を胸に当ててゆっくりと目を閉じた。

「お願い……声を、私に」

震える唇から、焦燥の言葉が漏れる。
蒼天を見上げて夢を語った、少年。
その姿を、鮮明に思い描いて願う。

だからさあ、昨日のあれは間違いだって！
あつちで喧嘩だ！憲兵呼んで来い！
今日の晩ご飯なんにしようかー？
もういいって、悪かった。

耳に届く雑音は、選ばれたものではない。
ただ周囲に満ちる雑音を、とにかく拾っているだけだ。
その全てを脳で処理するのは至難の技といえるだろう。
しかしそれを千里は、光の粒子を使うことでカヴァーしていた。

手、貸そうか？

お姉さまは指をくわえて見ていなさい。

上玉が手に入ったぜ、俺たちも運が良い。

あんの、小娘！今に見ていなさい……！

拾い続ける音。

その中の一つに、千里は気を留めた。

「今の、三番目！」

千里を覆う光の粒子が、その密度を濃くする。

金色の雪を身体から吹き上げるように、千里の周囲には光の珠が溢れ出していた。

雑多な音を全て消し去り、一カ所のみ集中する。

すると、やがて世界から色が抜け落ち始め、薄く開かれた千里の両目から、光を無くしていた。

こんなことして、捕まらねえのかよ？

貴族相手にびびったか？でも、依頼主も貴族だぜ。

そうそう、どこの世界にもいるんだよ。お偉いさんに、変態つてやつが。

金をたまなり貰ったら、闘技大会の隙を狙って国外逃亡。スエルスルードにでも逃げれば、一生遊んで暮らせるぜ。

男達の声。

その声と一緒に“感情”の波までも、千里に伝わってくる。

世界の裏側、闇を歩き続けた男達の “欲望”の音が。

「どこに捕まえているの？」

どこに捕まえているんだっけ？

千里の口から、感情のない声が零れる。

それと同時に、男の一人から声が零れた。

その男の目に……光は、無い。

おいおい忘れちゃったのか？南街の、教会の地下辺りだった、よな？

俺に聞くなよ。まあ、あの辺りの地下はわかりにくいからな。

“千里の”質問に、男達が答える。

南街……この周辺の、地下。

「わかりにくい？」

わかりにくかったかな？

再び、声が重なる。

可憐な声と重なる低い声。

アンバランスな音が、千里の中で響いていた。

そりゃそうさ。何代か前の王族の、脱出経路って話しだからな。俺たちもここそ入ってはいるが、正確なルートは王族しかないぞ。

ゆらりと、空間がぼやける。

光の粒子が集まったことにより空間を歪め、蜃気楼のようになっ
ていた。

「入り口は、どこ？」

どこから入るんだったかな？

千里がリンクしている男の口から、再び言葉が零れる。
その力のない瞳に、周囲の男達は気がつかない。

おいおい、味見でもするつもりか？

なんだよおまえ、“ソッチ”かよ。

ま、傷つけんなよ？大事な大事な商品だからな！

口々に男を囁しながら、男達は大きく笑う。

そうしてついに、情報を零し始めた。

教会の裏手だ。信者どもに気がつかれるなよ？

アイツらがなんにも知らねえから、今までバレてねえんだから
な。

千里が、薄く口元を歪める。

それはどこか千里らしくない、妖艶さを含んだ笑みだった。

「そう、ありがとう」

そう、ありがとう。

男の口から、高い声が零れる。
それは……千里の、声だった。

うん？おまえ、今……っおい！

どうした、大丈夫か！

なんなんだよ、いったい。

困惑した声。

千里が口を借りていた男が崩れ落ち、その場は騒然とし始めていた。

そうして、千里の世界に“色”が戻る。

その目にも光が戻り……千里は、その場に座り込んで、震える手で口元を押さえた。

「なに、今の……？」

見知らぬ人間を操ったような、不快感。

誰も彼も問わず世界に溶け込んでゆく、快感。

その二つが混じり合うことによる、無常感。

「とにかく……とにかく、今は」

千里は自分を奮い立たせると、手をかざして光の粒子を集める。

これ以上この力を使い続けるという事への忌避感も、今は全て後回しだ。

「導け “イル＝リウラス”」

かざした手から、光が伸びる。

指し示すのは、男達が話していた教会の場所。

その方角を千里は栗色の両目で捉えると、再び足に力を入れた。

このまま建物の上を跳んでいった方が、ずっと早い。

「
ぶっ
」

小さく息を吐いて、跳ぶ。

光の粒子を纏う千里の両目が

ほんの一瞬、黄金に瞬いた。

十

北側から搜索していたナーリヤは、荒くなった息を整えると裏路地に潜り込んだ。

漆黒の風貌を持つナーリヤは、この淀んだ空間に身を溶け込ませていた。

地形に溶け込み気配を消すのは、狩人にとっては必須の技術だ。

影から影へ、縫うように移動する。

その途中で見ていくのは、ガラの悪い男達の……その顔だ。

「すみません、お聞きしたいことがあるのですが」

「あん？なんだ、テメエは」

ナーリヤは目当ての人物を見つけ、薄く笑う。

千里が真正面から困難を打ち破る“光”だと例えるのなら、ナーリヤは絡めてから裏を掴んでいく“影”だ。

「あなた方の仕事に、一口噛ませていただいけませんか？」

「あ？……チツ、どこで嗅ぎつけた？」

ライアンを最初に助けた時。

ナーリヤは遠目だったが、男の顔を確認していた。

そしてその時点ではかなり遠くにいたナーリヤを、男は見えていなかった。

「この街で、それはないでしょう？」

情報を引き出す。

その時に必要なことの一つに、望まれる“役”になりきる必要がある。

そんな知識を“持っていた”ナーリヤは、それを実践していた。

「情報屋、か」

顔に傷を持つ、大きな男だ。

この道は長くとも、ナーリヤの“擬態”は見破ることができない。ナーリヤは自分でも知らぬ事だが、こういった“役作り”が得意だった。

(記憶に関係しているのかな?……いや、今は後回しだ)

薄い笑みで、思考が漏れないようにする。

自分でもよく知らない技術が増え始めてきたのは、つい最近のこと。

……切っ掛けは、まず間違いなく“騎士”の記憶を引き出したことだろう。

「まあいい、来い」

男が、ナーリヤに背を向けて歩き出す。

そうやって後から増えた犯罪者が、何人か既に居るのだろう。どうにも、疲弊した背中のように見えていた。

「しっかし、いくら金が余っているとはいえ、悪趣味なこと」

「しかし、僕らも人のことは言えないでしょう?」

「クツ……まったくだ」

どんな仕事なのかなど、ナーリヤには解っていない。

趣味が悪いということだけ見れば、利己的な目的で行われる犯罪など、大抵が“そう”だ。とくに、誘拐となれば尚更。

「その井戸。」

あそこから地下通路に繋がっている。

あとはひたすらまっすぐ歩いて、適当なヤツを捕まえて詳しい話を聞きなッ?!」

男が振り向くのと同時に、ナーリヤが男の腹に膝を入れる。

完全に無防備な状態で放たれたその一撃は、男の意識を簡単に奪った。

「できるから、やったけど。」

うん……この演技は、二度とやりたくないな」

下卑た笑みが、顔に張り付いてしまいそうで。

ナーリヤはそう、吐き気を覚えながら眉をしかめた。

「さて、と」

男の身体を持ち上げると、周囲を見回してほどよい大きさのゴミ箱の影に転がした。

当分目は覚めないだろうし、この裏路地は薄暗くて見えづらい。

さらに、不全に存在する洩れ井戸が目立っているため、他に目が行きにくかった。

「千里を呼ぶのは……間に合わないか」

一人で行ったとなれば、後で怒られそうだ。

ナーリヤは頬を膨らませて拗ねる千里の顔を思っかべて、小さく笑った。

その笑みは、先ほどまで浮かべていた厭らしい“仮面”とは打っ

て変わって、優しいものだ。

「暗いな……でも、行けないこともないかな」

井戸の壁に手を掛けて、飛び込む。

井戸の底が見えない訳ではないのだ。見えてさえいれば、どうにでもなった。

浮遊感と風を肌で感じながら着地のタイミングを見据えて、ゆっくりと膝を曲げる。

「っと」

やや体勢を崩しながらも、暗い井戸の底に降り立つ。

すると、洄れ井戸の側面に、成人男性二人は余裕で潜ることができらるであろう扉があった。

「偉い人や力のある人って、どうして隠し通路や隠し部屋が好きなんだろう？」

ナーリヤは首を傾げるが、すぐに頭を振って余計な思考を取り払った。

考えていても仕方のないことならば、今は考えるべきではない。

扉を潜り抜けると、小さなランプが灯った石造りの道が現れた。

ここをひたすら真っ直ぐ行けば、そこで事が進展するだろう。

ナーリヤはそう強く頷くと、足音をなるべく立てないように、静かに走り出した。

捕まっただからどれほどの時間が経ったかは、解らない。

だが、身に溜まる疲労感などから、さほど時間は経っていないだろうと、ライアンは判断していた。

「ジック、動けるか？」

「フンッ、貴様に心配されるほど落ちぶれては居ない」

そうは言うが、その声に覇気はない。

自業自得とってしまったえばそれまでだが、すんなりと納得できるものではないのだ。

「なあ、ジック」

「なんだ、ライアン」

ライアンの小さな声に、ジックは疲労を滲ませた声で応える。先ほどから縄を切ろうと腕を動かしてはいるのだが、一向に切れる気配はなく、ただ精神的な疲労のみが蓄積され続けていた。

「何故、俺を襲わせた？」

それに、大会参加者を挑発して、

……自分に手を出させて問題にしようとしたそうじゃないか」

ジックは、ナーリヤ以外にもそうして突っかかっていた。

ナーリヤは理性で抑えて手は出さなかったが、出した者も居たの
だろう。

憲兵に捕まってしまうば、大会どころではなくなってしまう。

今まで問題とされていなかったのは、欠場に至った選手が出てい
なかったためだった。

「普段も狡猾に立ち回ろうとしようとするが、

少なくとも、今回のように迂闊な手段は狙わず、確実に事を為そ
うとするじゃないか。

なんだかんだと言っても自分のできる範囲で事を行う。

共感はできなかったが、俺はそんなジックに好感は持っていたつ
もりだ」

ライアンはそう、一息で言い放つ。

そして、共に転がる友人の顔を、真剣な目でじつと見つめた。

ジックはそんなライアンの視線から、目を逸らすことができずに
息を呑んだ。

「おまえ……が」

「なに？」

やがてジックは、唇を僅かに振るわせながら、目を伏せた。そして、正面のライアンに向かって、真っ直ぐ見返す。

「おまえの“姉”が、あんな条件を出すから！

だから、だからオレは、この大会で強者にならなければならなかったんだッ！」

「姉上の……まさか、ジック、おまえ」

ジックがそう、悔しそうに吠える。

その言葉の意味するところ、それにすぐ気がついたライアンは、大きく目を睜った。

そしてどこか申し訳なさそうに、それでいて“嬉しそうに”言葉を続ける。

「何故、相談してくれなかった？俺たちは、友達だろう？」

「こんな相談、貴様にできるか！」

ジックはそう吐き捨てながらも、ライアンの“友達”という言葉に反論はしなかった。

ただただ、悔しそうに呻り声を上げている。

「こんなんて……それは俺にも関わる」

「静かにしろライアンッ」

続けよとしたライアンを、ジックが咎める。

石畳に耳を近づけていないと解らないほどの、小さな足音。完全に気配を殺した、“達人”のものだった。

「どつする、ライアン」
「どつしよつか、ジック」

声を潜めて、相談し合う。
どつしよつかもない状況下。
だが、諦めるつもりはなかった。

ギイ……

そうしている内にも、時間は進む。
現状維持以外に執るべき手段が見あたらず、二人は何が起こっても言いように、真剣にドアを睨み付けていた。

「ジック！」
「っああ！」

そして、扉が開くと同時に銀の光が瞬いた。
投擲に特化されたナイフが、ライアンとジックに一本ずつ投げられる。

それを、二人はエビのように身体を跳ねさせることで、辛うじて避けた。

「良い勘だ。」

実に惜しいが……依頼主は貴様らの“死”をお望みだ」

黒い布を全身に巻き付けた、長身瘦躯の男だった。
ボ口絹を鎧に仕立て上げたような不可思議な格好が、男を不気味に演出させている。

「オレたちの死、か。」

フンツ……その先に、何を望む」

這いつくばったまま、ジックは男を見据えてそう問う。

黄色く淀んだ男の目は、邪悪な人間としての姿を映していた。

「金と、荣誉だ」

「はんつ……金が欲しいのならオレに下るか？」

「この仕事は、信用第一でな」

地面に転がっていてなお、ジックは態度だけで男を見下していた。そうしながらもライアンに目配せをすることを忘れない辺りから、ジックという少年本来の、頭の回転を見せていた。

「その割りには良く喋るな。」

「忠誠心の持たぬ下等民族ならば、その程度か」

「よく吠えるな？」

「これから死ぬのだ。命乞いをしてもいいのだぞ？」

そういう男の目元は、小さく引きつっていた。

他人の神経を逆なでするジックの姿は、ここ最近で一番輝いている。

「命乞い？」

「したところで……はたしてオレ達の崇高な声が聞き取れるかどうか」

ため息を吐いてみせる。

男はジックの言つとおり、それほど腕の良い暗殺者ではないのだらう。

すぐに殺そうとはせず、ナイフを見せながらジックの恐怖心を煽

ろうとしていた。

「ふん、強がりか？」

言ってみなければ解らんぞ、小僧」

石畳に転がった、銀のナイフ。

ライアンは、男がジックに気を取られている内に、ナイフの上に転がる形で縄を切っていた。

銀の刃で手のひらや指が傷つく痛みを表情に出さないように、必死にそれを堪えながら。

「そうか、それならば言つてやろう」

ジックが目配せをすると、ライアンは小さく頷いた。

それを見て、ジックはどこまでも傲岸不遜に笑ってみせる。

自分の役割を解っていて、友を信頼しているから、縛られてもなお命に関わることがいえる。ジックは、そんな少年なのだ。

「下衆に屈する言葉など持ち合わせん。

消えろ、下等種族が」

「ッ……貴様はもう、死ね！」

逆上した男が、ナイフを振りかざす。

転がるジックに刃を突き立てようとしている男は、自由になった手で足の縄を切るライアンに、気がつかない。

「そうは……させん！」

「なにイ?!」

飛び上がったライオンが、男に体当たりをする。
その衝撃でぐらついた男の足を、ジックが縛られたまま身体を仰
け反らせて払った。

「ハアッ！」

「ぐあっ?!」

腰を石畳に打ち付けながら、男が転倒する。

その隙に、ライオンは素早くジックの縄を切って男にナイフを突
きつけた。

「形勢逆転だな。

どうする？命乞いをするか？」

ジックが胸を張って言い放つと、男は膝を突いたまま小さく呻り
声を上げた。

先ほどまでとは、まるで逆の光景。

その命のかかった状況下で、男はなお……笑って、見せる。

「クツはハハッ!……バカめ」

「気でも違えたか？」

そんな男の様子に、ジックは訝しがる。

だが直ぐに、その理由に気がつかされる事になった。

「う、あ」

「ライオンツ?!」

ぐらりと身体を傾かせて、ライオンがその場に崩れ落ちる。

片膝を付きながら息を荒げるライオンの顔は、血の気が引いて蒼

白だ。

「貴様、何をした！」

ジックがナイフをかざすと、男は暗い瞳で立ち上がる。

一対一で、ジックは慣れない得物であるナイフ。

形成は、再び逆転することに、なってしまっていた。

「何もしていないさ。」

暗殺を生業にする者は、刃に“毒を塗る”のは常識だ。

……それを知らなかった時点で、俺の勝利は決まっていた」

先ほどまでの悔しそうな表情の一切を消した、無情の風貌。

幾人もの人間を手に掛けてきた、暗殺者の表情だった。

あまり腕が良くないのは、事実なのだろう。けれど、豊富な毒の知識を持つ暗殺者は、それだけで重宝される。男は、そんな暗殺者の一人だった。

「だが、迂闊だな。」

よくもそんなおしゃべりな者で採用されたものだ。

……使う者の気が知れん」

そう軽口を叩きながら、ジックはライアンを庇うように動く。

少しずつ背に逃がしながらも、男から目を離そうとはしなかった。

「ククツ……私に構っていて良いのか？」

後ろの“お友達”が、助からなくなってしまうぞ？」

事実、男は迂闊なのだろう。

すぐに殺せる状態から動こうとはせず、ただ、額に汗を滲ませて

気丈に振る舞うジツクを見ながら、黒い布の下で厭らしく笑っていた。

「さて、依頼主は二人の“事故”をお望みだ。

そろそろ……死」

「なるほど、迂闊だね」

「ッ……なに」

ナイフを構えていた男が、驚愕に目元を歪めながら振り返る。

男は振り向きながらも横に一迅、ナイフを薙ぐ。

だがその一撃は、声をかけた影の頭上を通り過ぎ、男は大きく手を広げた形で無様な隙を晒した。

「シッ！」

「ぐアッ!？」

そして、晒したその隙。

男の腹に、鋭い膝が入れられた。

男はその衝撃に身体をくの字に曲げると、泡を吹いてその場に倒れ伏す。

その一連の様子を、ジツクはただ目を瞞って眺めていた。

「貴様……何故」

「あれ？君も一緒だったんだ。

………って、そんなこと言っている場合じゃないか」

影 ナーリヤは、切られたロープの中で一番長いものを選ぶと、それで男の後ろ手を縛る。そして、荒い息のライアンに近づいた。

「答える、何故貴様が！」

「ライアンを助けに来たんだよ。いいから、どいて」
「くっ……わかった」

ナーリヤからも庇うように、ジックはライアンの前に立ちふさがっていた。

だがライアンがジックのズボンの裾を弱々しく引き、その仕草に道を明け渡す。

「ライアン……ひどい熱だ」

「あの男、オレ達を“事故”で殺すと言っていた」

「事故？いや……まさか、これは」

ナーリヤは静かにライアンを横たえると、その症状を診て唇を噛む。

蒼白だった顔がだんだんと赤くなり、熱を発し始める、その症状

「拐かされた貴族の子息が、その先で“毒蛇”に噛まれる。

誰だか知らないけれど、誰がそんなことを……」

「毒蛇？……おい、いったい何を言っている」

ナーリヤはライアンの両手の止血をしながら、毒が回ってしまっているのを確認して悔しそうに舌打ちをする。

そんなライアンの肩を、ジックが焦ったような表情で掴んだ。

「アグネーク」

……洞窟や地下みたいなじめじめとした場所に生息する、毒蛇。

特效薬でもない限り、噛まれたら一晩で命を落とす」

「そんな、な。」

なんとかか……なんとかならんのか！」

元はといえば、悪いのはジックだ。
そんなつもりはなかったとは言え、きっかけを作ったのは彼だ。
だが、それでも……………。

「帝国の医療院なら、あるいは。とにかく今は、外へ運ぼう！」
「わかった！オレの“好敵手”ならば、耐えるよライアンツ！」

ジックはライアンを背負うと、先行するナーリヤに続く。
武器がない以上、ナーリヤの腕に頼るより他に方法はなかった。
構えてこそ見せたが、彼はナイフを扱えない。

「急ぐよ」

「ああ！」

部屋の外へ出ると、一本道だ。
ここをひたすら北へ上ったところから、ナーリヤは来た。
だがその道は、使えない。

「おい貴様ら……………そこで何をしている！」

「っ、気がつかれたか。」

「行こう！えーと、そう……………ジック！」

始めに名乗られていたことを思い出し、ナーリヤはその名を呼んで急がせる。

後ろに向かって素早く矢を放つと、ジック達に先行して走り出した。

「ぐあっ?!」

「今のうちに行こう！」

「わかった！」

ナーリヤに促されて、ジックは素早く動き始める。精神的な疲弊はあれど、体力的に一番余裕があるのはジックだ。人を一人担ぐ程度で後れを取ったりは、しない。

緊張から足が纏れそうになっても、背中^{コロッキ}の重みで持ち直す。石畳を叩く音が地下道に響くと、その音に向かつて破落戸が集まりだした。

「明かりだ！」

「一気に走るよ！」

「あぁっ！」

廊下の奥から差し込む光。

その先を目指して、二人は走る。

ナーリヤは時折背後に牽制の矢を放ちながら、ジックはライアンを落とさないように注しながら、その光の下へ飛び込んだ。

「そこまでだ、ガキども」

響く声。

地下道の先にある、開けた部屋。

地上の陽光が天井と壁の境目から僅かに差し込むその部屋は、おそらくどこかの地下室なのだろう。

その部屋でナーリヤ達を待ち構えていたのは、無数の破落戸だった。

「悪いが、ここでお終いだ」

リーダー格の男が、歪んだ笑みを浮かべながら一歩前に出る。手に大きな斧を持った、無精髭の男。

その背後には、巨大なモーニングスターを持った禿頭の男が立っている。

予選でナーリヤに敗れた、鉄球の男だった。

「クハハハハッ！」

よう、また会ったな小僧」

嘲笑に顔を歪ませた男を睨みながら、ナーリヤは一步下がろうとする。

だが、ジツクはライオンを抱えたまま、悔しそうに前に出てそれを阻害した。

なにも、ナーリヤの進行を阻止しようと思った訳ではない。

「追いついたぞ、ガキども！」

ただ、後続の部隊が追いついてしまったというだけの、事だった。

息を切らせて追いかけてきた、破落戸達。

その大小様々な顔には、追い詰められたナーリヤ達を見る嘲笑が浮かんでいた。

「どうする小僧？」

「クハッ、無様だなあ」

リーダー格の男と禿頭の男が、交互に笑う。

ナーリヤは弓と槍を扱う戦士だ。閉鎖空間で戦うのは、難しい。

だが、それでも。

「ジツク、ライアンを頼んだよ」

「おい、貴様、なにを？」

逃げる訳には、いかない。

ナーリヤは弓に矢を番えると、鋭い目でリーダー格の男を見る。

戦力にならない、むしろ足手まといといえる人間二人を守らなければならぬ上に、一体多数の絶望的な状況。その最中であつてなお、ナーリヤの目から光は消えない。

その重く鋭利な殺気は、男達の肝を冷やしていた。

そう……動いたら、“死ぬ”のだ、と。

「僕の矢がその心臓を貫くのと、僕の首が飛ぶの。

……どちらが早いか、試してみようか？」

「なん、だと」

重くのしかかる圧力。

その緊迫に、男達は動くことができない。

他者の経験と己の経験。その全てを身に纏うナーリヤは、年齢にそぐわない強大なプレッシャーを、その身に宿していた。

沈黙と緊張が途切れることなく続いている。それは今にも崩れそうな、圧迫した空気の中での対峙だった。

光が、散る。

左から右へ、金の軌跡を残しながら大剣が流れる。

黒帝と呼ばれた魔獣の骨でできた重厚な剣は、その一振りですべての者に他者を蹂躞する。

「ぐあつ!？」

「邪魔っ!」

聖堂の裏手。

入口を捜していた千里に群がる破落戸を、アギトでもって薙ぎ払う。

暴風のようなその進撃を止める力を持つ者は、その場にはいない。なんども他者を苦しめてきた屈強な男達は、ただ逃げ場を求めて

走り回っていた。

「逃がさない！」

「ひいつ?!」

駆けだそうとした男の一人に、千里は肉薄する。

そして、刃を後ろへ退いた剣の柄で、男の腹を突き上げた。

「がはっ」

空気の塊を吐き出しながら、男はその場に膝を突く。

すると千里は、柄を突き上げた反動で刃をくるりと回し、男の喉元に突きつけた。

その刃の軌道を目で追うことすら叶わず、男は自分よりも遙かに小柄な千里を、畏怖の眼差しで見上げる。

「入り口はどこ？」

「え、あ、う」

「答えなさい！」

「ひいつ」

千里の放つ、プレッシャー。

その圧力に負けて、男はその場に崩れ落ちる。

気を失ってしまったのは、聞き出すことはできない。

そのことに千里は、唇を噛みながら悔しげに俯いた。

……周囲で動く気配は、もうない。

千里は大きく上下に動く肩を抱き締めながら、膝をつく。

焦燥ばかりが先に立ち、後悔ばかりが後に残る。

そのことがどうしても悔しくて、地面に強く拳を落とす。

ド……ン

「あ、れ？」

すると、音がおかしな具合に響いたことに、千里は気がついた。街の石畳、その一部に、千里は耳を当てて目を閉じる。

そして、神経を薄く鋭く研ぎ澄ませ始めた。

……ッ

「誰かが、戦っている？」

石畳の、その遙か下。

常人では聞き取ることのできない音も、超感覚を光の粒子によって備えた千里は確実に聞き取って見せていた。

「それ、なら。」

……一番の、近道がある！」

千里は、蒼天を貫くように剣を掲げる。

剣の腹を正面に見せるように掲げていたが、やがて石畳を鋭く睨み付けると、刃の向きを変えて剣の刃が下に来るように掲げた。

そして……大きくアギトを振りかぶる。

「打ち砕け……“イルリウラス”！！」

光を纏ったアギトが、勢いよく振り下ろされる。

白と金で彩られた、高速の剣閃。

刹那の間、無音となり、一拍遅れて轟音が響いた。

ズ……ウンッ

「せやあああああッ!!」

アギトが石畳に突き刺さると、その場所を基点にひび割れが広がる。

半径三メートルほどまでひび割れが広がると、円形にベコンと沈んだ。

そして 大地が、崩れる。

十

緊迫した空気の中、ナーリヤは僅かな違和感を感じて天井に視線を移した。

誰かが、強く石を叩くような音。

その音に感じた違和感を、ナーリヤは拭うことができなかった。

「ジツク……伏せて！」

「っなんだ!？」

ジツクは戸惑いながらも、ナーリヤの気迫に押されて身を低くする。

鉄球を持った禿頭の男は、それを好機と見て大きく踏み込んだ。

「はっ！諦めたのか、小僧」

ベコンツ!

「は?……なああああつ?!」

鎖を強く握った男。

その上に、天井が崩れ落ちる。

地上から漏れ混んだ光が、薄暗かった地下を照らす。

それはまるで 雲間から地を差す、“天使の梯子”のようだった。

「なんだ貴様は!」

「通りすがりの……え、と。」

な、流れ人だ!」

訊ねられて千里が答えたのは、そんな気の抜けたものだった。

胸を張って言った割りに、声には気恥ずかしさと躊躇いが見え隠

れしていた。

そんな千里の、常識外れな行動の上から見せる間の抜けた言動に、ナーリヤは小さく微笑んだ。こうして殺気に包まれて居た自分を無自覚に救ってくれた、その暖かさに感謝しながら、ナーリヤは晴れた表情で矢を番える。

「それなら僕も 。

同じく、通りすがりの流れ人」

流れ人と名乗っても、普通は通じない。

だから、別にそうでなくてもいいだろうと、ナーリヤは千里に合わせて不敵に笑った。

「き、貴様ら……。

オイ、テメエら……やっちなえ！」

『おおおおおおお!!!!』

剣に斧、槍に弓。

様々な武器が火花を散らして、ナーリヤ達に襲いかかる。

「先見二手、二拍双雨」

穴の開いた天井に向かって、ナーリヤが四射の矢を放つ。

それを隙と見て襲ってきた破落戸の剣の前に、身体が霞むほどの速度で移動してきた千里が立ちふさがった。

「させないよ！」

「あぐつ!?!」

男が弾き跳び、宙を舞う。

その身体がちょうどジツク達を飛び越えた時、踏み込もうとした男達四人の右足に、ナーリヤの放った矢が降り注いだ。

「ナメるなああッ!!」

リーダー格の男が、斧を手にナーリヤに襲いかかる。その男を見てナーリヤは、ただ冷静に矢を番えた。

「死ねッ！」

「先見二手」

斧がナーリヤの頭上にまで、迫る。

だが、その一撃は、轟音と共に白の剣によって弾かれた。

「させないって、言ったよ！」

「な、あッ」

斧が弾かれたことにより、男の身体が大きく仰け反る。

その頃には、ナーリヤの右手は弓から離れていた。

「一射必中」

仰け反った男の、右腕。

その服の裾に、引き絞られた矢による一撃が絡まる。

対大型魔獣の弓から放たれた一撃は、それだけで男を持ち上げた。

「あああああッ!?!?!?!」

右腕に引つ張られるように、男の身体が宙に浮く。

そしてそのまま、数歩下がった先に身を落とし、その衝撃で男の

意識を刈り取った。

「すごい……」

ジツクの声　素直な賞賛　が、地下室に響く。
その声と破落戸達の叫びが、ほぼ同時に放たれる。

「あ、ああ……に、逃げろッ！」

一連の動作。

ほんの僅かな時間の中に討ち斃された仲間達の、姿。
それを見て、他の破落戸達は蜘蛛の子を散らすようにその場から逃げ去った。

「ふう……終わったかな？」

ナーリヤは息を吐くと、弓を降ろして安堵の表情を浮かべる。
そしてすぐに気を引き締めると、ジツクに背負われたライアンの元へ、近づいた。

「ジツク、ライアンは?!」

「あ、ああ……先ほどまでよりも、熱が重い」

ジツクはライアンを背から降ろすと、悔しそうな表情を浮かべる。
千里もそんな二人に近づくと、よくわからないままに横たわるライアンを見た。

「ね、ねえナーリヤ。」

ライアン、どうしちゃったの?」

「ミドイルの村で起きた時のと、同じ。」

アグネークの毒で、高熱を出しているんだ。早く特效薬を持って来ないと、命が危ない」

動かして運べる段階は、過ぎている。

アグネークの毒は、感染者が動けば動くほど毒が広がるものなのだ。

このまま動かさずに薬を持って来なければ、危うかった。

「そんな……ひどい」

そう言いながら千里は、苦しそうに息を吐くライアンの手を、しっかりと握る。

千里も、ナーリヤも、ジックも……その場を動くことが、できない。

「ミドイルの村の時は、

近くにアルナの花があつて、そこでイルルガさんが……そう、だ」

「メリアが救われた状況。

その過程を思い出す内に浮かび上がった、一人の少女の横顔。村長の孫娘にして、薬師見習いの、レネという少女。

その少女が渡してくれた。

「万能、解毒薬！」

鎧の内側。

丈夫なポケットに入れられた、小瓶。

それは千里達がミドイルの村を離れる時に、レネが餞別として渡

したものだっただ。

「これがあれば！」

「ライアンは、助かるのか?!」

「うん！」

ジツクの縋るような顔に、千里は笑顔で頷く。

その様子を見ながらナーリヤは、ライアンの身体をそっと抱き起こした。

「今助けるからね、ライアン」

千里の、暖かい言葉。

その声が届いたかどうかは分からない。

だがナーリヤは、ライアンのその眉が、音に反応して小さく動いたように見えた。

赤い大きな椅子には、金の装飾が施されている。
そのクッションの上には、脂ぎった男が座っていた。
男は指を噛みながら、時折苛立たしげに机を叩いている。

「ええい、報告はまだか！」

「所詮は破落戸ども。」

信用はなりませんよ、旦那様」

そんな男を、年配の執事が窺める。

男は執事の態度に苛立たしげにしながらも、窓の下に目を移すこ
とで気持ちを落ち着けていた。

「ランタートとアクルサルト。」

この両家が潰れてしまえば、怖いものなど無い」

ライアンとジック。

二人の家は、この男とつて“政敵”だった。

目の上の瘤だった両家の嫡男を殺して、血を絶やす。
長女もその後、似た様な方法で殺す。

そうして殺した後は、破落戸に罪を着せて“自ら”処刑するのだ。
これで大義名分も立ち、皇帝からの評価も上がり、政敵もいなく
なる。

だが、殺したことを確認をするための暗殺者が、まだ戻ってきていなかったのだ。

「そうだ、焦ることはない。」

これで、そうこれで、終わりなのだ。」

「貴様の、な」

「ッ?!」

男が勢いよく椅子から立ち上がると、入り口に壮年の男性が立っていた。

後ろで束ねられた黄金の髪と、金がかかった銀色の目。

ライアンによく似た、大人の男性だった。

「ライト・ラウル＝ランタート……ッ!」

そう、彼の名前はライト。

ライアンの、父親だった。

「ずさんな計画で短い生を終える、か。」

“アウトフ・セフム＝オンサウラ”……貴様を、連行する」

ライトの言葉に合わせて、部屋に騎士が流れ込む。

そうして、男　アウトフは、金欲に塗れたまま栄誉の道を閉ざした。

「まったく。」

“彼ら”には、感謝してもしきれんな」

ライトはそう、少年と少女の顔を思い浮かべる。

おぼつかない足取りの息子ライアンと共に、事件のことを知らせてくれた、

勇気ある少年達。

その姿を思い浮かべて、ライトは小さく微笑むのだった。

六章 第五話 金と藍／黒と金 後編（後書き）

今回で、六章の前半が終了。

次話に折り返しの小話を挟んで、後半へいこうと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第六話 帝都 DE デート!?

広大な屋敷、その一室。

最初に呼ばれた時とは比べものにもならないほど、豪華な料理の数々。

それらを目にして、ナーリヤはごくりと唾を飲む。

「ナ、ナーリヤ。」

「……………いいのかな、これ？」

それは千里も同様だったのだろう。

笑顔のまま固定されて動けない千里の身体は、小刻みに震えている。

まるでマツサージ器のような動きを、似た様な状態のナーリヤは笑えなかった。

「い、いいというか。」

「……………逃げ道が、無いというか」

ナーリヤ達に料理を振る舞い、笑顔で佇む二人の男性。

金の髪に銀の目をした壮年の男性　ライアンの父、ライト。

そして、紫がかった青い髪に群青色の目をした、カール髭の男性
ジックの父、ロウクだった。

その両脇には、ライアンの母であるラナと、ジックの母である群青色の髪に青い目の女性、マリーが座っている。ライアンとララ、ジックは更にその隣だ。

ライアンは相変わらずの笑顔、ララは無表情。
そしてジックは、しかめ面だ。

「ささ、遠慮なさらずに」

ライトに促され、ロウクに微笑まれ、暖かい歓迎に包まれて言葉
が出ない。

ナーリヤは喉を鳴らすと、良い笑顔で頷いた。

「いただきます」

「ナーリヤそれ日本式っ！」

どうにも、この緊張には慣れることができそうにない、二人だっ
た。

心ゆくまで料理を堪能した後、二人は中庭で紅茶を飲んでいた。すぐに帰ろうとしたのだけれども、それをライアンが引き止めて、結果こうしてお茶会となったのだ。

メンバーは、ライアンとジック、ナーリヤと千里の四人だ。仄かに果実の香りが漂う紅茶を口にしながら、千里は思う。何故こんなにも、ジックとナーリヤの間の空気が悪いのか、と。

「ナーリヤ？」

「なに？千里。」

「ああ、クッキーに手が届かないよね」

「あ、いや、うん」

お皿を引き寄せられてしまい、千里は口を嚙む。

ナーリヤは千里と話している間だけは、和らいだ笑みを見せるのだ。

そんな顔をされてしまったら何も言えず、千里はチョコレート風味があるクッキーをかじった。ほろ苦い、ビターなココアクッキーだ。

「それで？」

結局どうして、僕やライアンを襲わせようとしたのさ？」

それは、千里も気になるところだった。

終始ライアンの体調を気にしていた、ジック。

友人だと言えるほど仲が良いのならば、何故罠に嵌めるような真似をしたのか。

ジックは顔を逸らしたまま、話そうとしない。

「あとちょっとで、ライアンは死んでいた。

僕も千里も、運が悪ければどうにかなっていたかも知れない。

それほど危険なことだったっていうのに、君は」

ジックを責めようと、ナーリヤが腰を浮かせる。

ナーリヤは、それほどまでに怒っていたのだ。

故意に“友達”を傷つけるような行為をした、ジックに。

「はあ。

言わないなら俺から言うぞ、ジック」

そんなナーリヤを制したのは、呆れ顔のライアンだった。

ライアンはジックの沈黙を許諾の合図と受け取り、まずはナーリヤに頭を下げる。

一狩人に過ぎないナーリヤに、貴族のライアンが謝罪の言葉を紡いでいた。

「まずは、済まない。

ジックがあのような愚拳に走ってしまったのも、俺の家族に理由

がある」

「……うん。」

でも、ライアンが頭を下げることにできないから、顔を上げて。

もう、ジックにもそうは言わないから」

「ありがとう」

ライアンは、ナーリヤの言葉に頭を上げる。

その顔には僅かだが気疲れのような色があり、笑顔に力がない。

千里はそんな空気に入り込むことができずに、四枚目のクッキーに手を伸ばしていた。

お菓子みたいな甘いものは、女の子の動力源。

だというのに、最近まったくとれていなかったのだ。

ここで食べておかなければ、謎のガス欠を起こしてしまうかも知れない。

「千里、はいおかわり」

「うん、ありがとう」

ライアンが口火を切るまでの、ほんの僅かな時間。

その一瞬で、ナーリヤと千里は短いやりとりを行う。

端から見れば、恋人同士……というより、仲の良い兄妹だ。

「はっ！」

あれ、私なんか、餌付けされて」

「実は、ジックの行為には訳があるんだ」

千里が何かに気がつき、顔を上げる。

だが丁度その時にライアンの話が始まってしまい、千里は疑問を氷解できぬまま口を噤むことになった。

「訳？」

「ああ」

ナーリヤとライアンが真剣に話を始めてしまい、千里は所在なさに視線を泳がす。

そして散々迷った後、ナーリヤが千里の手が届かない位置から取ってくれた小皿に手を伸ばし、そうしてクッキーを摘み始めた。まごう事なき、餌付けである。

「俺の姉上、ララは、二十三になる。」

だが、まだ結婚もせずにいることを、父上も母上も嘆いていらした

急にララの話になり、ナーリヤ達は戸惑いを見せる。

だが最後まで聞いておこうと、ぐっと口を閉ざして続きに耳を傾けた。

そんな中、千里は小さく首を傾げる。

「二十三で、結婚？」

「うん、十七歳くらいで、普通は結婚を勧めるんだ」

話しの中でよく理解できなかった“価値観”は、千里が小声で聞くとナーリヤがすぐに教えてくれた。十七歳と言うのは、結婚の平均年齢に過ぎない。早いところでは十二歳で婚約なんて家もあるのだ。

「そこで姉上は、

……結婚相手に条件を設けた上で、申し込みを受け付けると言った」

つまり、お見合いしたければ望む釣書を持って来い。
ララはそう言い放ったのだという。

「条件？」

「ああ、そうだ。」

そしてその条件が……“ 闘技大会で勝ち上がれる、自分よりも強い男” だったんだ」

闘技大会に勝ち上がる。

それを為し得るのはいつも腕の立つ騎士で、そういった騎士には既に婚約者が居ることがほとんどだ。

まあ、結婚などしないと言い続けていた時よりはマシだ。

ライトとラナは、その条件に頷いた。

そうなる困るのは、そんなに強くはないのにララに思いを寄せ、人間だ。

「つまりジックは、とにかく勝ち上がろうとしたのだ。

なるべく、強そうな者を削っていくという方法で」

「なんでそんなに、ネガティブで積極的なのよ……」

そう、彼は……ジックは、想いを諦めきれなかったのだ。

千里の呆れた声に、ナーリヤは苦笑いを浮かべる。

暗い方向に思考が寄っている、にしては積極的な行動。

なんだかんだと狡猾に立ち回ろうとしてはいたが、ジックは不器用な少年だった。

「ほら、ジック。君も謝るんだ」

「むう、その、なんだ……すまなかった」

胸を張って顔を逸らしたまま、ジックは小さく謝罪の言葉を口に
する。

ともすれば聞き取れないような微かな音は、しかしナーリヤと千
里の耳によく響いた。

ピンチ続きで張り詰めていた、気持ち。

それが溶けていく感覚に、千里は緩んだ笑みを零すのだった。

十

ライアン達に見送られて、宿へ帰る。

宿への説明はライアンの家の使用人がしてきてくれたというので、二人は余計な気を負わずに帰れることに、少しだけ安心していった。

太陽は真上よりも西側へ傾いている。

昼時を過ぎて今は、千里の感覚でいうところの“おやつ時”だった。

午後三時、その前後くらいだろうと頭の中で当たりをつけながら、千里は空を見上げる。

「良い天気だねー」

「うん、本当だ」

何気ない会話。

そこで途切れてしまってもさほど気にならないのは、気安い友人だからこそ。

いつの間にかこんなにも静かな空気を生み出せるようになっていたのかと、千里は頬を緩ませる。

「闘技大会、考えてみればあと七日だね」

「一週間、かぁ。早いなぁ」

それを考えれば、ため息も吐きたくなる。

気がついたらそんなに経っていたのだ。どこかで身体を鍛えるのは必要だろうが、観光をする時間は取れそうになかった。

大通りを抜けてしばらく歩くと、宿に辿り着く。

宿屋の気の良い主人に会釈をして、二人は一度ナーリヤの部屋に集まった。

「さて、今後のことだけど……」
「うん」

この後、どう動いていけばいいのか。
千里は、ナーリヤの提案に耳を傾ける。
ナーリヤはベッドに腰掛けていて、千里は木の椅子に座っていた。
対面に座ると、ナーリヤの真剣な黒い目がいつもよりも高い位置
に見えて、少しだけ胸が跳ねる。

「修練場を借りようと思うんだ」
「修練場？」

修練……練習する場所のことだろうか。
千里は首を傾げながら、続きを促した。

「うん。本来は兵士の修練のための場所……なんだけど」

闘技場の間は、参加者のために一般解放がされている。
ナーリヤはそう、続けて説明をした。
そこら中で暴れたらたまらない。そう考えた上での、ストレスの発散場でもあるのだ。この時期になると、酒屋が物理的に潰れてしまうことも、珍しくないのだ。

「そっか……それなら、そこで？」
「うん。修練を積むなら、そこが良いと思う」

他の手段として、ギルドに仕事を斡旋して貰い、帝都周辺の魔獣を狩るというのもある。

だがこれは、修練では飽き足りない参加者達がこぞって参加するので、早く申し込まないと帝都周辺はすっかり平和になってしまっ

ているのだ。悪いことでは、ないのだが。

「それなら、早速……」

「いや、なるべく朝早い時間から入った方が、場所が取れて良いと思うんだ」

立ち上がるうとした千里を、ナーリヤが手で制する。

千里は行き場を無くした力を解放するようにすとんと座ると、首を傾げた。

「そうなの？」

「それじゃあ………これからどうしようか？」

「うん、それなんだけどね」

ナーリヤは、真剣な表情を一転させて、優しい笑顔を浮かべる。千里が好ましく思っている、柔らかな微笑みだ。

「今日の所はとりあえず……“観光”でも、どうかなって」
「えっ」

覚えていて、くれたのだ。

この異世界の地、その光景を見て回りたと言った、千里の言葉を。

「どう？」

「行く！」

腰を浮かせて、立ち上がる。

その様子が微笑ましくて、ナーリヤは微かに声を出して笑った。

帝都の名物は、闘技場を始めとした建造物にある。

何代か前の皇帝が、この街に多くの建築家や芸術家を呼び寄せて作らせたものなのだ、ナーリヤは千里に説明をしていった。

「まず最初は、六聖噴水かな」

「六聖、噴水？」

ナーリヤに導かれるまま、千里は隣に並んで歩く。

街の中心に向かって水道が流れていく様は、教科書で見たローマの街並みを千里に連想させていた。

「そう。街の六方向、星形に置かれた噴水なんだ。

大昔の古い師が、そこに守護者を置くと街が発展するって言ったんだって」

「へえ……発展した……んだよね」

「いや、実際にこの街が発展したのは、それから何十年も後のことらしいよ」

そう簡単にはいかなかった。

ナーリヤはそう説明を続けている。

千里が大きく感心してくれるからか、ナーリヤも得意げだ。

街を端から回っていくと、各名所の合間にこの噴水が見える。

流石に全て回っていたら他が見えなくなってしまうから、他の名所のついでに眺める形にしようと、ナーリヤは千里に告げた。

「最初に一カ所噴水を見て、そこを出発地点にしよう」

「うんっ」

大通りを抜け、人混みを潜り、橋を渡って街の端へ行く。

そうして歩くこと十五分ほどで、その噴水に辿り着いた。

噴水の形は、鳥だった。

大きな鶏冠の鳥が、四枚の羽を広げている。

その瞳に埋め込まれた緑色の宝石が、どこか静寂さを感じさせていた。

「ニワトリ、みたい」

「ソボルネアっていう魔獣だね。

風を支配する能力から、自由を象徴するっていわれているんだ。

ちなみに、今日は行かないけれど、ここから東へ行くとシーラの像もあるよ」

シーラが象徴するのは、平和だ。

平和や平穩を象徴するシーラが、東側で石像になっているという。シーラは王国に住む生き物だが、帝都に飾られている。

これは、石像の制作に携わった人間に、王国の者が居た為なのだろう。

千里はその説明に、納得の色を交えつつ頷いた。

「たしかに、シーラは“平和の象徴”っぽいかも」

「自由、平和、愛、道徳、正義、繁栄

……それぞれが、象徴とされる生物と共に街に飾られているんだ」

そうして恒久的な発展を望む。

それがこの街の……帝都の、在り方だ。

「次は……」

ナーリヤはそういうと、地図を広げる。

宿を出発する前に、近場のギルドでナーリヤが仕入れてきたものだ。

次の目的地を指さすナーリヤの、その横顔。

千里を楽しませようと朗らかに笑うその顔を、千里はそっと盗み見る。

まつげはあまり長くないし、鼻筋もすっと通っている。

女の子とは違う、男の子の顔だ。

「さ、行くぞー！」

「うん……行くぞ、ナーリヤ」

差し出された手は、冷たくて。

千里は伝わる熱を受け取りながら、俯いて微笑む。

ありがとう、と……万感の、想いを込めて。

十

次に千里達がやってきたのは、小洒落たカフェだった。

女性客が集い楽しそうに会話をしながら、何かを買っているよう

だ。

男性など一人もない、なんてことはなく、女性の方が圧倒的に多いだけで男性の姿も絶対数こそ少ないが、見えていた。

「ここは？」

「うーん……お菓子屋さん、かな」

ナーリヤはそう言いながら、千里を残して店に入る。

女性だらけの所へ堂々としていく姿は、妙な男らしさを見せていた。

千里はそんなナーリヤの後ろ姿を所在なさげに見つめながら、佇んで待つ。

「今、気がついたけど……これって、“デート”だよな」

本当に、今更だ。

今更だが、考えてみると胸が跳ねる。

スプリングでも内蔵しているかのように、とくんとくんと胸が鳴る。

「え、ええっと。デートって、どうすればいいんだろう？」

そんな経験は無い。

だからこそ千里は、頬を赤く染めながら慌てだした。

どうすればいいか解らない。デートってどうすればいいんだろう。

「デート……ナーリヤ、と」

胸に手を当てて、それから呟く。

朱色の唇から零れだした言葉には、微量の熱が宿っていた。

その熱を確かめようと、千里は自分の唇に、ゆっくりと人差し指を這わせる。

「お待ちせ」

「っ!?!……っ、うんっ」

「?」

聞こえてきた声に、千里は慌てて返事をする。

顔を赤くして戸惑う千里の姿に、ナーリヤは小さく首を傾げた。だがすぐに笑顔を浮かべて、千里の側へ行く。

「あ、危なかった」

千里はそんなナーリヤに聞かれないように、小さく小さくそう呟いていた。

人の流れが早いのか、待ち時間は三分ほどだった。

戻ってきたナーリヤの手、そこに握られているのは、二つのカップだった。

白いカップは紙に似た千里の知らない材質のものでできていて、いかにも使い捨てといったチープさを醸し出している。

その中に入っているのは、爪楊枝みたいな木のフォークと、それから黒い球体のお菓子だった。黒い球体には、黒いソースのようなものがかかっている。

「ルクっていう木の実を加工して、球体に固めた焼き菓子なんだ。

お菓子作りの料理人は、まずは帝都にきて修行をする。

だから、こんな新しいものが生まれやすいんだ」

その“新しいもの”をナーリヤが知っている理由は、簡単だ。街の地図を購入する際、事前に調べておいたのだ。

お菓子情報は女性に聞くのが一番だ、とギルドの受付の女性に。

「へえ……おいしいそう」

千里は感心しながら、ルクの焼き菓子を口に運ぶ。

とろみのあるソースを絡めることも、忘れずに。

「あ……チョコレート、だ」

「そんな風に加工したルクのみのことを、“ルクロト”っていうんだよ」

「ルクロト……そっか、焼きチョコとチョコソースなんだ」

となると、ライアンの家で食べたクッキーにもルクロトが入っていたことになる。

帝都では割とポピュラーなお菓子である、ルクロト。

それを贅沢に使ったのが、この焼き菓子だった。

まさか異世界で食べられるとは思っていなかった、焼きチョコ。

黒い球体の焼きチョコはサクサクとしていて、口の中でふわりと蕩ける。

そして、苦みのあるビターなチョコソースが、甘味を絡めて深みを増すのだ。

「おいしいーっ」

ナーリヤも食べてはいるが、そこまで甘いものを好む訳ではないため、あまり食が進んでいるようには見えない。それに対して千里は、六個も入っていたのにもう最後の一つを頬張っていた。

女の子と甘いものは、切っても切れない縁なのだ。

「こっちも食べる？」

「ホント?!」

「……でも、悪いよ」

「あんまり、甘いものは得意じゃないんだ」

ナーリヤの苦笑を真実と受け取り、千里はそれならとルクロトの容器を受け取る。

申し訳なさそうな顔をしてはいるが、隠しきれない喜びで頬が緩んでいた。

その嬉しそうな顔を見るだけで、なんだかナーリヤも嬉しかった。

「ああ、幸せだー」

サクサクと食感を楽しむ、千里の横顔。

幼さの色濃く残る容姿は、それでも年相応の輝きを宿していて愛くるしい。

ぱっちりと開いた丸くて大きな瞳と、ふっくらとした朱色の唇。柔らかそうな頬と滑らかで美しい、栗色の髪。

「うん 僕も、幸せだ」

夢中になっている千里に、その声は届かない。

そもそもナーリヤは、聞かせる気なんて無かった。

言える訳がないのだ……“君が幸せそうだから、自分も幸せだ”なんて。

「ナリーヤ？」

「なんでもないよ。さあ、次に行こう？」
「うんっ」

その柔らかな手を引いて、ナリーヤは笑う。

この一時の幸せを、空っぽの記憶に刻みつけよう。

ただ朗らかに、笑う。

+

斜めになって、崩れそうで崩れない屋敷。

魔法使いが遺した、熱くない炎の柱。
青い薔薇の庭園と赤い花の木をモチーフにした、巨大絵画。

一番早いルートで回っても時間は過ぎ、そろそろ空の色が変わってきた。

「千里、最後に一カ所行こうと思うんだけど、いいかな？」
「もちろんだよ。」

あ、でも……どこへ？」

首を傾げる千里の手を、ナーリヤは微笑みだけ携えて引く。
その優しい力に千里は緩やかに身をゆだねると、連れられるままに歩いた。

いつもよりも、やや早足。
そう思ったが、千里は気がつく。
ナーリヤは今、普通に歩いているだけだ。急いでいるからか、気にしている余裕がないのだろう。

そう、いつもは……自分の半分ほどの、千里の歩幅に合わせていてくれたのだ。

石の階段を登って、橋を渡り、また階段。

建物の脇道を抜けて、ちょっと高い塀を越えて、小さな小川を跳び越えて。

また階段を登って、登って、登って。

ふと上を見上げると十二の数字が書かれた時計が見えた。

「時計塔？」

……というか、時間の単位って同じだったんだ」

十二に分けられた時間。

それを見ながら進むと、ナーリヤの足が止まった。

千里もそれに合わせて、緩やかに足を止める。

「ほら……これを、見せたかったんだ」

ナーリヤが指したのは、千里……ではなく、その後ろだ。

千里は首を傾げながらもその指の先を目で追うように振り返り、そして息を呑んだ。

「わぁ……」

夕焼けに照らされた帝都。

六聖噴水を含めて全てを一望できる、街で一番高い時計塔。

朱色に塗り固められた街並みは、魂を引き摺られるほどに美しい。

「……きれい」

もうそれ以上、言葉が出なかった。

一瞬止まった息を、興奮で震える唇から吐き出す。

両手を胸に置いて強く握っても、高鳴る胸を押さえられそうになかった。

「爺ちゃんと帝都にきた時、

用事がある爺ちゃんを置いて、一人で来たことがあるんだ」

忙しく手が空かなかった、セアック。

一人で待っていたナーリヤは、迷いに迷ってここに辿り着いた。

時計塔の脇にある、ちよつとした踊り場。
人の入り込まない、秘密の場所。

「それなら、セアックさんとここに？」

「ううん。ここは僕だけの場所なんだ。」

大切な、秘密の場所。……いつか、大切な誰かと行きたいと思っ
ていた、場所」

「え？」

千里は、ナーリヤの方へ振り返る。

最後の言葉が、よく聞こえなかったのだ。

小さな声で紡がれた言葉は、耳の良くなっている千里でも“何か
を言った”ということしか分からなかった。

それでも、その前の言葉で……なんとなく、解った。

セアックとも行ったことのない、秘密の場所。

そこに自分を連れてきた　その、意味。

「宿に戻るうか、もう日も落ちちゃったしね」

「あ……ほんとう、だ」

朱色の太陽が西に沈み、東からは純白の月が顔を覗かせている。

空も茜色から瑠璃色へと移ろいでいき、帝都には黒の天蓋が落ち
ていた。

自分の手を引く、ナーリヤの手。

その手が、いつもよりもなんだか暖かくて。

千里はそつと、握り返す。

言葉で伝えきれない思い。

自分でも理解しきれない想い。

ほんの欠片でも良いから、それが
うに、と。

この熱から、伝わりますよ

六章 第六話 帝都 DE デート!? (後書き)

えー、今回は後始末と一休みのお話です。

次回から、六章のメインに入っていきます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第七話 過日の宿命

灰色の光が、白い砂の上を奔る。

一つ、二つ、三つ、四つ。

四度繰り返された動きの後に、最後の一闪が軌跡を描いた。

「フツ……セアッ！」

闇に近い灰褐色。

ダークグレーの髪と、同色の目。

黒を讃えた光が、修練場で煌めいた。

「妙に熱心だな。ガラン」

「アークか……まあな」

ダークグレーの男　ガランは、灰色の籠手を嵌めた腕で風を切りながら、答えた。

右手に嵌められた鋼鉄のガントレットには、対峙する存在を圧倒させる凶暴さがにじみ出ている。

帝国の黒い鎧と、足に嵌められた灰褐色のグリーブ。

右手には殴打だけでなく掴み取ることも考慮された鋼鉄のガントレット。

そして左手には　弦を張った、アイムドクロスボウ手甲弓アームドクロスボウをしていた。

「昔年の願い、さ」

「どういことだ？」

アークの問いに、ガランは笑う。
凶悪に、凶暴に、笑う。

「親の喧嘩だよ」

左手が、突き出される。

すると、手甲から短い矢が発射されて、勢いよく離れた場所の的に突き刺さった。

「どつちもいねえ」なら、その雪辱は子で晴らす」

右手が突き出される。

するとその一撃は、空を揺らした。

「帝国の“テルクス”と王国の“ロウアンス”」

強いのは、どつちだと思う？

アークにそう目で語りながら、ガランは腕を突き出し続ける。

大柄な身体は筋肉質で、一歩踏み込むだけでその一撃は凶器となる。

その“本気”を受け止めなければならぬ相手に……アークは、心の底から同情をした。

その一撃を受ければ、間違いなく立つては居られない。

その後生き残れるかは、本人の運次第だ。

「面倒ごとだけは起こしてくれるなよ」

「ああ、気をつける」

その獰猛な笑みを見て、アークはただただ、大きなため息を吐く

の
だ
っ
た。

E
×
I

太陽がまだ、東から顔を覗かせたばかりの時間。
空が紫色から青へと変わっていく、早朝。

眠気に閉じていく目を擦りながら、千里は王城の前に立った。

修練場は、王城の一角にある。

そのため、まずは入場許可を取る必要があったのだ。

入場許可、と言っても予選突破者であるという確認だけなので、時間のかかるものでは無いのだが。

事実ナーリヤは、千里を置いて二人分の入場許可を取りに行っていた。

簡単な手続きなので本人が居る証明は要らないという、表れだった。

「お待たせ、入ろっか？」

「うんっ」

ナーリヤは千里と連れだって、修練場へ向かう。

王城の大きな門を潜り、そのまま右方向へ歩き進むと見えてくるのが、石の堀で囲まれた大きな修練場だ。

「お城を一般開放って、大丈夫なのかな？」

「ああ、あれは帝国の、自信の表れでもあるんだよ」
「そうなの？」

例え門を潜らせても、建物の中にはネズミ一匹通さない。

軍隊に強い自信を持つ帝国ならではの、催しなのだ。

事実、数十年にわたるこの大会で、誰かに侵入されるといふ失態は一度も侵していないのだ。

ナーリヤがそう伝えると、千里も“なるほど”と頷く。

それは諸外国への牽制でもあるのだ。

「許可証を」

「はい、これで」

塀の前にいた兵士に、許可証を見せる。

二人分の許可証を見て、次にナーリヤと千里の姿を見て、兵士は頷いた。

「解放は夜までだ。」

終了はこちらから宣告する」

兵士の言葉に頷き、ナーリヤ達も修練場に入る。

修練場は、闘技大会同様に白い砂が敷き詰められた、だだっ広い空間だ。

数百人は一度に訓練できそうな大きさでありながら、まだ闘技場の方が大きいのだが。

「ナーリヤはどうするの？」

「弓は実戦で訓練した方が性に合ってるから、ここでは槍をね」

ナーリヤはそういうと、背負っていた槍を回して、肩に担ぐ。

ちなみに、今日の所は弓は宿に置いてきている。

対大型魔獣の弓となると、専用の矢がそれなりの値段になるためだ。

お金に還元できる狩りをするという訳ではない以上、練習で使っていたら資金に底がつく。

試合というどうしようもない場面以外では、なるべく使いたくはなかったのだ。

既に、ライアン救出の際に財布を傷めることになってしまったと

いつもの、あるのだが。

修練場の一角で、ナーリヤと千里はそれぞれに素振りを始めた。まずはこうして、ウォーミングアップをする。そうして身体が温まったら、軽く手を合わせてみるのだ。

「よっ、と」

回した槍を、突きの軌道に変える。

一回、二回と突き放ち、薙ぎから叩き付けへと変化させる。そうして、全身を使った強烈な突きを、空に向かって放った。

ブウンッ

風を振るわせる音が、人の疎らな修練場に響く。その洗練された型は、見ようによっては舞踏のようにも感じられる。

神に仕えた騎士が到達した一つの極み、その“再現”^{コピー}だった。

「さて……温まった？」

「あ……う、うんっ」

槍を振り降ろし、残心をする。

最後の最後まで洗練された動きに、千里は魅入っていた。だが、ナーリヤの言葉で我に返り、慌てて頷く。

「それじゃあ軽く、行こうか？」

「うんっ、お手柔らかにお願いします」

「こちらこそ、だよ」

丁寧に頭を下げる、千里。
それにナーリヤは、柔らかな笑みを以て答えるのだった。

十

槍と剣を、交じらせる。

ナーリヤの放った高速の突きが千里の首を狙い、千里はそれを避けながら前に踏む混んだ。

黒帝を思い起こさせる、速くて重い一撃。

鋭く放たれたその一撃を、ナーリヤは槍を盾にすることで防いだ。
まさしく、一進一退の攻防といえる手合わせだ。

「ふう」

どちらからともなく、得物を収める。

こうして手合わせを続けていたら、いつの間にか昼時になっていたのだ。

朝から初めてこれならば、もう数時間も続けていたことになる。

「少し休憩しようか？」

「うん、そうしょー。」

さすがに疲れてきちゃったよ」

肩を落とした千里を伴って、ナーリヤは修練場の端へ行く。持ち運んだ水筒を手に壁に背を預けて、二人並んで座った。

ナーリヤは木製の水筒に口をつけて、中のお茶を飲む。

ミドイル村で採れる茶葉は常に持ち歩いていて、これもそのお茶だ。

こうして運動をする前には、ナーリヤは必ず持ってきていた。

「あ、私も貰った水筒持つてくれば良かった……」

ミドイル村でイルルガに貰った、様々な旅の道具。

水筒もその一つではあるのだが、千里は生憎それを持ち歩くという習慣ができていなかったのだ。

「それなら、はい」

「えっ？」

ナーリヤはそんな千里の呟きを聞いて、飲みかけの水筒を渡した。

千里はそれに目を瞞って驚くと、ナーリヤの瞳を恐る恐る覗き込んだ。

「どうしたの？」

「う、ううんっ！なんでもないよっ」

言いながら、慌てて水筒を受け取る。

ナーリヤの目に浮かんでいたのは、純粹な善意。

そこに千里の“思う”ような意図は、当然ながら含まれていない。

「か、間接……い、いや、気にしちゃダメだ！」

そう、こちらの世界ではおそらく無いであろう意識。

飲み物の回しのみという……“間接キス”と呼ばれる行為。

それを意識して、千里は頬を赤くしながらお茶を飲んだ。

「ああああ、ありがとう！美味しかったっ」

「そっか、良かった」

ナーリヤは千里の妙な言動に首を傾げながら、水筒を受け取る。

そして再び　千里が口をつけた場所と、同じ場所から　お茶

を飲んだ。

「っ！？」

それを、千里は真っ赤になった顔で見る。

少し前ならば、こんなにも意識はしなかっただろう。

だが、エクス之城を出た後からは、どうにもダメだった。

どうにも、“なんでもないこと”を意識しすぎている。

そんな気がして、千里はナーリヤに気がつかれないように、熱い吐息を零していた。

「そろそろ再開しようか？」

「う、うんっ。それがいいよっ」

だからか、返事もどこか必死である。

千里は、早く練習に没頭して、この“もやもや”を追い出したかったのだ。

二人は立ち上がると、修練場の一角に戻る。

辺りを見てみると人も増えてきているようで、そこから中から剣戟の音が響き渡っていた。

「さて、それじゃあ」

「ちよっといいか？」

軽く素振りをして、再び構え合う。

そんな二人に、いや……正確にはナーリヤに、声がかけられた。

「はい？」

聞こえてきたのは、ナーリヤの背後から。

返事と共に振り向くと、そこには一人の男性が立っていた。

ダークグレーの髪と、灰褐色の瞳。

顔面やむき出しの二の腕に刻まれた、無数の傷。

帝国の兵士特有の黒い鎧に、中隊長であることを示した銀のライン。

大柄で獰猛な目つきの、兵士だった。

「俺と手合わせしてくんねえか？」

一緒に練習するはずだったヤツが、遅れちまつてるんでね」

そういつて気前よく笑う男を見て、ナーリヤは千里を伺う。

そうして千里が笑顔で頷くのを確認すると、ナーリヤはそれを受け入れた。

「ええ、いいですよ」

「そうか、ありがとうな」

男はそういつと、銀の手甲を嵌めた手で構える。

徒手空拳……今まで、渡り合ったことのないタイプの相手だった。

「俺はガラン。

ガラン＝テルクスだ。アンタは？」

「僕はナーリヤ。

ナーリヤ＝ロウアンスです」

ナーリヤの、その名前。

それを聞いて、男　ガランは、ほんの僅かだがその顔に凶暴な
歡喜を浮かべた。

獣のような、齒をむき出した笑み。それを、誰に気がつかれるこ
ともなく隠す。

「嬢ちゃん、合図を頼む」

「あ、はいっ」

千里が、二人の間に立つ。

そこから真つ直ぐ離れて十分な距離を取ると、アギトを背に収めて右手を挙げた。

「よーい」

しん、と空気が凍る。

静まりかえった空間に満ちるのは、純粹で力強い戦意だった。

「始めっ！」

合図と共に駆けだしたのは、ガランだった。

砂煙を上げながら、大柄な図体に似合わない驚異的な速度で走る。その突進を見て、ナーリヤは冷静に動きを測り取った。

「疾ッ！」

向かってくる方向へなぞらえた、槍の一撃。

ガランはそれを、左手で軽く外へ弾いた。

「っな」

「ハッ！」

見事な力加減で、ナーリヤの槍が逸らされる。

そのことに驚きの声を上げている間に、ガランは右足を振り上げていた。

前方向に体重を乗せた蹴り　千里の世界でいうところの、“ヤクザキック”だ。

「まだまだ！」

ナーリヤは急いで槍を引き戻すと、蹴りの軌道に突き刺して盾にする。

そして、衝撃のほとんどを地面に流すと、槍を引き抜いた。

「おせえよ」

だが、その頃には既に、ガランはナーリヤの懐に入っていた。拳が鋭く突き出されて、ナーリヤの腹を打つ。

「ぐっ」

「まだだ、小僧」

ガランは空気の塊を吐き出すナーリヤに、小さく呟く。

そして、衝撃から一歩下がったナーリヤの首めがけて、左の上段の回し蹴りを放った。

その一撃を防ごうとナーリヤは咄嗟に槍を動かすが……今度は、蹴りの軌道が変わる。

「オラッ！」

「がッ?!」

上段に見せかけた、下段蹴り。

足を振り上げた状態から、真下へ振り下ろすという簡単なフェイントだった。

その鋭く重い一撃を右足に受けて、ナーリヤは体勢を崩す。

「おいおい、これで倒れてくれるなよ?」

ガランは、どこかつまらなそうにそう呟く。

そして、体勢を崩したナーリヤの胸板に、右の膝を叩き込んだ。

鎧の上からでも通じるほどの衝撃を持つ、一撃だった。

ズンッ

「あぐっ」

「ナーリヤっ」

千里の音が響く中、ナーリヤは一メートルほど後退する。それでも倒れようとしなないのは、彼の意地なのだろう。

「ハッ、その程度か？」

“ロウアンス”の血縁者だと思ったから、期待したんだがな……」

そのまま距離を取ろうと下がったナーリヤに、ガランは失望した目で呟く。

見下した目に宿る失意の色に、ナーリヤは動揺を隠すことができなかった。

「なに、を？」

「あん？あー、すまねえ。

てつきり王国の弓使い“セアック”ロウアンス”の血縁者かと思っただが」

ガランはそう区切ると、ため息を吐きながら言い捨てる。

「名前だけ同じ“他人”だったみたいだ。

勝手に期待して悪かったな。“あの”ロウアンスの後継者が」

失意が、色を変えていく。

期待は失望へ、興味は嘲笑へ。

ガランは、感心の失せた目でナーリヤを見下していた。

「こんなに“弱い”はずがねえから、な」
「っ！」

その言葉に、ナーリヤは目を見開く。
そして、強く歯がみすると、ガランに向かって一直線に駆けだした。

「ああああああっっっ！！！」

槍を携えて走る、ナーリヤの足。
それを、ガランは身体を低くして槍を避けながら、冷静に払う。
そして、空中で体勢を崩したナーリヤの腹に……後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

「がはっ！？」

数メートルはじき飛ばされて、今度こそ地面に転がる。
意識が朦朧とし、ナーリヤは白い砂を噛みながら起き上がれず
いた。

「こんなのが“ロウアンス”？
そうか、あのジジイ、名誉も栄光も全部 名ごと“捨てた”か」

ガランはそう吐き捨てながら、ナーリヤに近づく。
失望を通り越したその顔に浮かぶのは……怒りの色だった。

「チツ……期待させやがって」

倒れ伏すナーリヤ。

その顔面に向かって、ガランは足を振り上げた。

「目障りだ。」

……ここで消えとけ」

その足がナーリヤの顔面を、踏み　。

ガンッ

「あ？」

潰せなかった。

ガランの右足と、ナーリヤの身体。

その間に割り込んだのは、巨大な白の大剣だった。

「これ以上は……やらせないっ」

千里は、鋭い目つきでガランを覗き込みながら、言い放つ。

ガランよりも頭三つ分も小柄な体躯でありながら、二メートル近くあるガランに怯まず向かい合っていた。

そんな千里を見て、ガランは身体を退く。

その灰色の双眸には、もうなにも映ってはいなかった。

「……テメエはそうやって、女の尻にでも隠れてる。」

二度と、その耳障りな名前を名乗るなよ？ “ただの” ナーリヤ君」

背を向け、ガランは歩き去る。

そうしてナーリヤ達から顔を背けることで、ガランは歪めた口元を隠していた。

そう、どこか“期待”するような笑みだった。

その後ろ姿を引き止めようと、千里は足に力を入れる。

「ち、さと」

「アイツっ！」

……っつて、ナーリヤ?!」

だがその一歩は、自分の名を呼ぶナーリヤによって阻止される。ナーリヤはその必死な声で、千里を引き止めていたのだった。

修練場の一角。

だれも見向きのされないその空間では、沈痛な静けさが漂っていた。始めていた。

ガランが立ち去って、少し経った頃。

ナーリヤは震えながら身体を起こすと、片膝をつく。

そして、血液交じりの胃液を、白い砂の上に吐き捨てた。

「ぐっ、ゴホッ……いい、から」

「で、でも」

「いいん、だ」

そう言いながらも、ナーリヤは鋭い目で前を睨み付けていた。

そこは、ガランが先ほどまで立っていた場所で、立ち去った彼の足跡がある。

「僕、は」

「ナーリヤ？」

「……ナ、ナーリヤっ?!」

ナーリヤは、小さく呟きながら、体勢を崩す。

千里はそこへ身体を滑り込ませて、なんとか抱き留めた。

「僕は、誰よりも、千里のために戦おうと、思ってた」

「……ナーリヤ？」

千里の背に手を回し、倒れまいと抱き締める。

千里はそんなナーリヤにされるがままになりながら、ナーリヤの慟哭に耳を傾けていた。

「でも、でも。」

この闘技大会は、僕に 僕だけのために、戦わせて欲しい」

ガランは言ったのだ。

セアツクはナーリヤに名を譲ることで、全てを“捨てた”のだ、と。

ナーリヤはそれが、我慢ならなかった。

自分に全てを“与えた”セアツクが、捨てたなどと言われるが、許せなかった。

「ごめん、ね。千里……」

「謝ることなんて、なーんにもないよ」

千里は小さく苦笑いを零すと、子供をあやすようにナーリヤの背を叩く。

抱き合っていて互いの表情は見えないが、だからこそ言えることもあった。

「ナーリヤはナーリヤのためだけに、戦って。」

それで、しっかり勝って、あんなやつぎゃふんって言わせてやる
うよ
「うよ」

千里の声は静かで、そして何より優しかった。

千里はナーリヤに、ゆっくりと柔らかな言葉を重ねていく。

「ナーリヤが誰よりも強いってことは、

一番近くで戦ってきた私が、誰よりもよく知っている。

……だから、さ、勝とうよ？勝って、アイツの思い違いを修正してやるうよ
「うよ」

千里は、強くナーリヤを抱き締める。
思いが伝わるようにと、強く強く、抱き締める。

「ナーリヤがおじいちゃんに貰ったモノは、どんなものより素敵な
んだ、って」

千里の言葉に、ナーリヤは答えない。
ただ、ただ、震える声を隠すように、頷いていた。

夕焼けの修煉場。

人も疎らになって、互いの顔も見えなくなる黄昏時。

ナーリヤは千里を抱き締めながら、強く強く決意をする。

「絶対、勝とう」

「うん、絶対勝とう」

ナーリヤの言葉に、千里が頷く。

負ける訳にはいかない戦いが、負けられない戦いとなった。

その事実にも、ナーリヤは強く手を握りしめる。

本戦まで、あと六日。

その六日間でできる全てを行おう。

そして必ず、ガランに打ち克とう。

ナーリヤは自身の心に、そう　深く、刻みつけるのだった。

六章 第七話 過日の宿命（後書き）

次回から、闘技大会に入ります。
今回はその種となるお話でした。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 開幕

槍を収め、弓を構える。

矢を番えずに右手を添えて、ナーリヤは想像の中で矢を射った。その矢は一直線に飛来して、心の中の的の中心を射抜いた。

「ふう」

早朝の修練場。

ナーリヤはそこで、最後の仕上げをしていた。精神集中と、それから瞑想。

これから戦い、そして勝ち残るための準備だった。

同様に最後の仕上げをしていた千里も、アギトを収める。そして、持ってきた水筒のお茶を、一気に飲み干した。

「行くっ」

ナーリヤの声は、小さくとも力強い。

その揺れることのない漆黒の双眸に、千里は力強さを感じて微笑んだ。

「うんっ」

ナーリヤの後に追従しながら思うことは、ただ一つ。不安も恐怖も希望も緊張も、全て呑み込んで考えること。

「絶対勝とうね、ナーリヤ」

「うん、もちろんだよ……千里」

世界最大規模のイベント。

最強を決める、巨大な大会。

帝国の闘技大会の幕が　ここに、開催の狼煙を上げるのだった。

白い砂の上に、本戦出場者達が集まる。

闘技場の最上階に皇帝、その下に王族が並び、更にその下には貴族達が配置されていた。

開幕の合図を述べるのは、実況席に座る男性、アークだ。その隣には、ネコ耳のレイニも座っている。

『まずは制約^{ルール}の確認をします。

- 一つ、試合中に於ける他者の協力や毒薬の使用の禁止。
- 一つ、敗者への不必要な追い打ち。
- 一つ、降伏宣言を撤回した攻撃や降伏後の挑発。
- 一つ、時間制限を越えた際、終了の呼びかけを故意に無視した試合続行。

大まかな制約は以上となります。各自、戦士の誇りに恥じぬ戦いをするように』

大会ルールの説明や細かな注意事項を述べていく。

一般の観客だけでなく、王族や貴族も含めて数千人の人間が見守る中。

出場者達は、興奮や緊張、不安や希望など様々な感情を胸に佇んでいた。

アークの長い説明が終わると、皇帝が立ち上がる。

プラチナブロンドの髪に空色の目をした壮年の男性で、威厳に満ちた雰囲気醸し出していた。巨大な帝国を支える、皇帝という“王者”のプレッシャーだ。

受けた屈辱を晴らすため、名につけられた泥を注ぐため。

そして何よりも……認めさせる、ために。

『これより、リックアルイン帝国闘技大会を 開催する！』

皇帝の宣言の下、戦いの火蓋が切って落とされた。

その声を聞いて、出場者達は各々に動き始める。

まずは選手控え室に行つて、戦う順番を確認する必要があるのだ。

「ナーリヤっ」

女性部門のブースに立っていた千里が、ナーリヤに駆け寄る。

ナーリヤは険しい表情を収めると、それを笑顔で迎えた。

「千里……」

「出場の順の発表つて、どうするんだらうね？」

「うーん、控え室に行けばわかる……のかな？」

ぞろぞろと控え室へ向かおうとする中、音響魔法が発動する前の“キーン”という独特な耳鳴りが響く。それに、出場者達は首を傾げながら足を止めた。

『えー、試合順は控え室で配られる用紙で確認してください。』

でもでもでも、一番最初に限り投写の魔法で空に映しちゃいますのでっ！

各自で注目してくださいっ！っ！』

レイニの、妙にテンションの高い声が響く。

投写の魔法……つまり、“光”に特化した魔法使いによるホログ

ラムだ。

異世界でありながら、ファンタジーとは趣向の違うSFチックな魔法。

それに千里は「おおっ」と、微妙に目を輝かせていた。嫌いではないのだろう。

『ではでは……どうぞっ!』

レイニが大きく手を振り上げる。

するとそれを合図に、闘技場の上空に巨大なスクリーンが投写された。

どの方角からでも見えるように、八方向八面のスクリーンだ。

そこには、所謂“トーナメント表”が、男女別に二つ映し出されていた。

「えーと……あれ？読める、かも」

確かに、知らない字だ。

だがどういった作用なのか、自分の名前とナーリヤの名前しか、認識することができなかった。

「知っている人だけってことかな？」

そう考えてさっと見回すと、ララの名前も読めることに気がつく。万能翻訳能力といっても差し支えない、便利能力だった。

「えーと、私は……ひ、ふ、み、よ、い」

「五番目？」

「うん」

指で示しながら数えていると、ナーリヤに声をかけられて頷いた。左から第一試合としてスタートして、五番目。

男性と女性で交互に試合を行うため、実質十番目なようだった。

「そういえば、各十六人ずつみたいだね」

「あつ、ホントだ」

これまでは上位十六人以内ならば、ノーズファンへ行く資格を得ていた。

だが今回は、優勝者二名のみがノーズファンに“招かれる”という事になっている。

その変更に伴ってか、帝国も予選で削るという方法をとったようだ。

これまでが多すぎたので、日程も考えて今回は削る。

ナーリヤ達は、知らず知らずのうちに本戦出場という狭き門を潜らされていたのだ。

「ナーリヤは何番目？」

「僕は第二試合……三番目だね」

男性部門からのスタートとなるため、第二試合は三番目。

男性部門と女性部門がちょうど一回ずつ終わった後となる。

「早いな、なんか」

「そうだね……まあ、早く大会の“空気”を知ることが出来ると思えば、ね」

そういつて笑うナーリヤの顔は、戦意に満ちあふれていた。

その横顔がどうしてか魅力的に見えて、千里はほんの僅かだが、胸を跳ねさせる。

「さ、控え室へ行こう」

「あ……う、うんっ」

歩き出すナーリヤの後ろについて、千里も控え室へ向かう。

その後ろ姿に怯えはなく、ただ大きな戦意と小さな緊張のみが宿っていた。

十

闘技場の中の控え室は、さながら牢獄のような場所だった。鉄格子が嵌められていないだけで、質素な石造りの部屋は牢屋といつでも差し支えがない。

そのはじめめとした空気に耐えられずに、千里は外に出てきた。選手が試合を観戦できるのは、観客席のやや下の専用ベンチだ。ここで、出場者達は試合を観戦することができる。

「あれ？」

そうして出てきた先にナーリヤが居ることに気がつき、千里は駆け寄る。

だが、その背に声をかける前に、足を止めた。

普段なら、背後から人が近づけば即座に反応するだろう。

だがナーリヤは今、石造りの塀に手をつきながら、ただ眼下の闘技場を眺めていた。

余裕がない、そう言われても仕方がない様子に、千里は目を伏せる。

(背負いすぎ、だよ)

背負わせているのは、きっと自分も同じだ。

この優しい少年をこつも追い詰めてしまっているのに、自分にも一端の責任がある。

ただ出場するだけなら、ただ戦うだけなら、こんなにも気負わなかったのかも知れない。

そんなことはないかも知れない、けれど、そう思わずには居られなかった。

千里は伸ばした手を引くと、背を向ける。
ナーリヤに気がつかれないようにその場を離れようと、小さく歩き出した。

でも。

本当に、それでいいのかと自問する。
立ち去ることが、そっとしていくことが、本当に彼のためになるのかと。

大切な、“友達”の……。

「あ」

小さな声を漏らして、顔を上げる。

最近“妙な思考”に囚われてはいたが、根本的なことを忘れていた。

そう、ナーリヤは……対等な“友達”なのだということを。

千里は踵を返すと、身体を前のめりにして走り出す。

勢いをつけすぎた気もするが、それは気がつかないナーリヤが悪いのだ。

「ナーリヤっ!!!」

どんっ

「うわっ!?!」

その背中に、その首に、巻き付くように抱きついた。

思いの外衝撃があったのか、ナーリヤはバランスを崩して前に踏

み出す。

だが前は、闘技場に落ちないための塀があつて、当然ながらこれ以上踏み出せない。

ガットン

「っっ」

よつて、つま先を潰すように塀に打ち付けて、声にならない悲鳴を上げる。

例えるのなら、箆笥の門に足の小指をぶつけたような感覚だ。

そうして前のめりになろうとするが、そこにも当然塀がある。

だが、咄嗟に足を抱えようとしたナーリヤは気がつかない。

これに首に巻き付いた千里の体重（+鎧+アギト）と、抱きついた時の衝撃が加算されるのは、もう解りきつたことだった。

ガットン

「あつっっ!？」

この一連の動きを、千里は理解していなかった。

飛びついて目を閉じた、ほんの一時の間に起こった悲しい事件。

これは、加害者を巻き込む形で終止符を打つことになる。

「へ?」

額を打ち付けたナーリヤは、大きく後ろに仰け反る。

当然、首に巻き付いている千里も一緒に。

更に言つならば、千里の体重とアギトも加算された状態で。

「あわわわっ」

「ち、さと?」

涙で朦朧とする視界の中、ナーリヤはここで漸く千里に気がついた。

崩れる体勢を最後の力で整えて、身体の向きを変える。

そして、千里に衝撃を与えないように覆い被さった。痛い目見ても、紳士である。

だがそれが必ずしも良い方向にいくとは、限らない。

「ふ、二人とも、なにを?」

「仲睦まじいのは良いけれど、場所は弁えるべき」

「こここ、こんなところでなんと破廉恥なッ」

上から、ライアン、ララ、ジックである。

ここは出場者用の観戦席。

三人がいるのは不自然ではなく、むしろ自然なことである。

ちなみに、この鈍痛が治まるまでナーリヤは動けないため、この状況を抑えるのは千里一人で行わなければならない。自業自得だが、明らかに巻き込まれた人（N氏十八歳）も居るので、千里は思いきり慌てていた。

「あ、ああああの、ここここ、これはっ」

しかし残念、呂律が回っていなかった。

「初戦はライアンの試合だというのに……ええい、貴様らは動物か
!」

「ど、動物ってなにさ!猿ってこと?!」

とりあえず、応戦。

だがそれで、妙に“大人の世界を知ってしまった”という目になって
いる純情な少年の目は誤魔化せない。

いつもどおりのララだけが、千里の救いだっただけ。

いや、興味がないだけなのだが。

「拳式には……呼んで……ください……」

何故かライアンは、敬語になっていた。

ジックは憤り、ライアンは足下をふらつかせ、ララは自然体。

そんな状況はナーリヤが回復するまで五分間ほど続くのだが、後
に千里はその時間が永遠のように感じられたと語ったという……。

試合開始直前にまさかのハプニングに遭遇したライアンも、なんとか初戦は勝ち抜くことになった。ちなみに、この動揺がなければ割と余裕な相手だった。

「千里つて、けっこう大胆だよな」

「……はい、ごめんなさい」

ライアンが戻ってくるまでの間、ナーリヤは千里にジト目でそう言った。

千里はそれに、身体を小さく丸めながら、頭を下げる。

その顔は、トマトのように赤い。

「でも、元気出たよ」

「えっ？」

紡がれた言葉に、千里は勢いよく顔を上げる。

その先ではナーリヤが、苦笑を浮かべながらも穏やかな表情で前を見ていた。

ナーリヤのその顔に、先ほどまでの焦燥は無かった。

「元気づけてくれようとしたんだよね？だから、さ」

そして、左手で口元を隠しながら、ナーリヤは顔を逸らした。

……赤くなっただ頬と緩む口元を、見られないために。

「ありがとう、千里」
「……うんっ」

そんなナーリヤの顔を見ないであげようと、千里は前を向いて頷く。

二人とも頬には朱が刺していて、こんな場所なのにどこか初々しい。

「俺の試合、ちゃんと見ていたのか？」

『も、もちろんっ』

だからだろうか、後ろから近づいてきたライオンに気がつかなかったのは。

そろそろ耐性がついてきたのだろう。先ほどまでのように、見て照れている様子はない。

二人は勢いよく振り向きながら、声を合わせて頷いた。

「はあ……まあいい。

それよりも二人とも、次は女性部門で姉上に次ぐ優勝候補の試合だぞ？」

「え？」

千里はライオンの言葉に、首を傾げる。

そしてナーリヤと共に、闘技場に目を向けた。

『女性部門の第一試合は、これだあ〜っ！！』

左側から歩いてくるのは、熊のような女性だった。

大柄な、という形容詞ではない。

熊の肉体に熊の顔、その上から皮鎧を身に纏った獣人種。両手には、トマホークと呼ばれる手斧を握んでいた。

「えーと、あの人が？」

「いいや、違う。その対戦相手だ」

千里は、ライアンの言葉に頷きながら右を向く。そうして……その目を、瞠った。

『西門からは、力と速さの申し子……熊獣人“リイクア”選手！東門からは、名実ともに“最優種族”……エルフの里より推参した』

流れるプラチナブロンドの髪。

髪間から覗く、長い耳。

空を呑み込んだような、青を讃えた碧眼。急所を守る、ドレスのような銀と緑の鎧。背負った剣は、深紅と白銀の西洋長剣。

『優勝候補、“苛烈の戦乙女”……“フィオナ”フェイルラート”選手です！』

アロイアの地で、千里と語り合った“友達”が、艶やかな微笑みを携えてその場に立っていた。

「あの人って……千里の話してた？」

「う、うん……そっか、そういえば、そっだ」

フィオナはこの闘技大会に出るために、千里達よりも早く定期船に乗っていった。

この帝国に辿り着くまでの一連の騒動で、千里はすっかり忘れていたのだ。

「何年か一度出場しては、必ず優勝をもぎ取っていく女戦士。炎の魔法と身の丈を越える長剣を巧みに操り、怒濤の攻めで他者を突き崩す。

その戦いから名付けられた二つ名が……“苛烈かれつの戦乙女”」

千里の後ろでそう語るのは、ララだ。

ジックがその声色に違和感を覚えてララの顔を覗き込むと、頬を赤くして視線を逸らした。

ララは、普段は動かないその表情を、笑みの形に緩ませていた。他者を魅了する、妖しくも艶やかな微笑みだった。

闘技場では、試合開始の合図を受けた二人が睨み合っていた。リイクアは、熊獣族ゆまじゅうの中でも飛び抜けて強い戦士だ。

そのため、同じように強い存在は“嗅ぎ分ける”事が出来る。

「ぬう」

だから彼女は……“動けない”のだ。

「良い闘志だ。だが……僅かに足りん！」

そんなリイクアに対して、フィオナが動く。

足の裏と背中、合計三カ所で起こる局地爆発。

ドンツという轟音と共に、フィオナの姿がかき消える。

チンッ

リイクアは、何が起こったのかも解らずその場に立ち竦む。そして、何故か背後に気配を感じて、振り向いた。

「貴様ツ」

悠然と背を向けて佇む、フィオナの姿。

その長い金砂の髪が風に靡いて、緩やかに余裕の姿を体現していた。

リイクアはその姿に激昂し、手斧を振りかぶる。

だが……。

パキン

ガラスが割れるような、乾いた音。

その音共に、根本から斬られた二本の手斧が、リイクアの足下に転がった。

「【閃光紅蓮】」

澄んだ声が、闘技場に響く。

その冷やかな旋律が闘技場にいる全ての人間に届くのと、ほぼ同時に。

ドンッ

「ぐうあああつつ?!」

リイクアの身体が、燃え上がった。

余りに速すぎる攻撃は、その苛烈な痛みを置き去りにした。

深紅の鞘に収めたまま抜き放つことの無かった、細く鋭い長剣。

それが、彼女の存在を強烈に浮き彫りにさせていた。

『リイクア選手、ダウンッ！』

勝者は “フィオナ” フェイルラート” 選手だあーっ！！”

歓声と拍手の中、フィオナが拳を掲げる。
その姿を、千里は驚愕の表情で見ている。

「目で、追えなかった」

「うん、僕もだ」

女性部門と男性部門。

これを分ける意味を見いださせなくさせる、圧倒的な存在。
彼女の存在がために、帝国はこの課題を考えさせられている。

「私と同時に出場したのは、今回が初めて。」

そして今回の大会には……チサトが、いる」

ララはそう呟くと、真紅の手袋を強く握りしめる。

例え闘技大会だとしても、必ず纏う紅のドレス。

その服に包む己の心は、燃え上がる闘志の赤だと、体現するための
戦闘服。

「楽しい大会に、なりそうね」
たにかい

ノーズファンの神託。

例年よりも質の良い出場者。

拭い去ることのできない因縁。

波乱の闘技大会が、今日この日……苛烈に、幕を開けた。

六章 第八話 波乱の闘技大会？ 開幕（後書き）

今回から六章の要に入ります。
だいぶ長くなるかと。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 二対の矢ノ過ぎ去りし栄光

次に出場する戦士の控え室は、試合場の入り口のやや手前にある。牢屋だったことがあったのか、鉄格子がない以外はほとんど手が加えられていない部屋。

その硬いベッドに腰掛けていたナーリヤは、脇に置いてあった弓を手に取るとゆっくりと立ち上がった。

弓と矢筒を背中に、長い槍を手に、短剣を腰に。

投げナイフを手甲の裏とグリーブの裏に装備する。

『男性部門一回戦第二試合、西門選手 “ナーリヤ” ロウアンス “！”』

自分の名を呼ぶ、アークの声。

司会が委譲されたことで、声は最初の試合同様落ち着いた人間のものになった。

この後、女性部門に変わると、再びレイニの騒がしい声になる。

闘技大会の、その熱気。

喧噪と闘志が吹き荒れる中、ナーリヤは真剣な眼差しで踏み出した。

「必ず、勝つ」

短く放たれた言葉。

その声に込められた力は、戦意となってナーリヤに溶ける。

控え室から出て白い砂を踏み、太陽の光を浴びると、それだけで

戦士としてのナーリヤが完成されていた。

『東門選手 “トムニティック”！』

簡潔な呼び出しと共に、東門から選手が入場する。

前歯の出た小柄な男で、手にはナイフを握っていた。

トムとそう呼ばれた男は、ナーリヤを見ながらナイフを遊ぶ。

『それでは……試合、開始！』

アークの声が響き渡り、ここにナーリヤの初戦が幕を開けるのだ
った。

選手用の観客席。

その一角で、千里達は試合の観戦をしていた。

「そういえば、ナーリヤの戦いをしっかりと見るのは、初めてだな」

ライアンが、ふと気がついたようにそう呟く。

それはジックも同じで、ナーリヤが体術を使ったところ以外は、ライアンを担ぐのに必死で見えていなかった。

正確には見てはいたのだが、千里の剛剣のインパクトが強すぎて、あまり記憶には残っていなかったのだ。

「む、動くぞ」

ライアンの呟きに、千里は闘技場を注視する。

小柄な体軀を生かした、鋭敏で複雑な軌道で動くトム。

目で追えるスピードではあるのだが、動きが複雑なため次に来る場所が予測できない。

そんなトムを、しかしナーリヤは冷静に見ていた。

わざと焦点を合わせずに、ただ全体を見る。

そして、おもむろに狙いを上空に向けて構えた。

「あれは地下で見たが……集団戦への足止めにはか使えんだらう」

ジックがそう呟くのも、無理はなかった。

瞬時に複数の矢を放ち、それを狙いどおりに打ち込むなど不可能に近い。

だが千里は、そんなジックの声に首を傾げる。

弓の技術がまったく解らない千里は、ナーリヤとナーリヤの話しに出てくるセアックを弓使いの基準として考えていた。

「え？でも、ナーリヤは普通に当ててるよ？」

「うん？いや、それは偶然の類ではないのか？」

千里の答えに、ライアンは首を傾げる。

ララはそれで感じ取ったのか、闘技場のナーリヤを鋭い視線で注視した。

複雑な軌道でナイフを投げってくる、トム。

それをナーリヤは、弓を構えたまま少し横に動くだけで避ける。

「先見二手、二拍双雨」

一息二射、合計四矢の雨。

トムは放った瞬間を好機と見てナーリヤに飛びかかるが、その軌道はナーリヤの思考の内側にあるものだった。

「取った！」

一步踏み出した、トムの右足。
その軌道上に落ちてきた矢が、トムを躓かせる。
更にそれを追撃するように、ほぼ同時に落ちてきた矢が、前のめりになったトムの肩当てだけを綺麗に貫いた。

それによつて転んだトムを縫い止めるように、次いで二矢落ちてくる。

トムの服の裾、両腕部分を縫い止める矢。それにより、トムは動けなくなった。

「どうする？」

「へ？」

俯せのまま動けなくなったトムは、首筋に冷たい物が当たる感覚を覚えた。

ほんの一瞬の間に起こった出来事に呆然とし、やがて首筋の槍の感触に我に返る。

「い、降参、です」

弱々しい声は、しかし性格に音を聞き取る魔法がかかった審判席には届く。

そうしてナーリヤの勝利が告げられる様を、ライオン達は目を瞪りながら見ていた。

「なんだ、あれは……おいチサト！なんなんだ、あれは！」

「え、えーと？」

ジツクに問い詰められる理由が分からず、千里はただ首を捻る。
これまでにナーリヤの戦いを見たこの世界の人物といえ、ファ

ングたちが挙げられる。だがその時は、千里が“悪”のみを斬るといふ何よりもインパクトのある技を操っていたので、そこまで気が回らなかったのだろう。

その他でナーリヤの弓を見ているものは、皆倒される側に立つ敵ばかり。

そのため千里は、ナーリヤがどう“おかしい”のか、解っていないのだ。

「あー、チサト」

「ライアン？」

混乱して目を白黒させる千里に、ライアンがそつと声をかける。

ジツクと千里の齟齬を、端から見ていて感じ取ったのだ。

「学園で弓のことは習うから、少しは俺もわかる。」

そしてナーリヤの弓は、そんな受講で習った程度の俺でもおかしいと感じるのだ」

闘技場を見ると、勝利宣言されたナーリヤが、ちょうど千里に手を振っていたところだった。千里は混乱を顔に出さないように気をつけながら、笑顔で手を振り返す。

「通常、弓を扱う者は対象の軌道を読んで、そこに矢を放つ」

「それなら、ナーリヤも……」

「いや、ナーリヤのは、同じに見えるかも知れないが全くの別物だ」

軌道を読んで、矢を放つ。

それは、まっすぐ動くものか若しくは知り尽くした対象に限られる。

それだって、そのみを狩り続けて何年、という熟練の技だ。

それをナーリヤは、初見の相手だというのに軌道を読んで見せた。

「それはもう、先読みという括りにある技ではない。

限定的な未来予知という “術” に数えられるものだろう」

ナーリヤは、経験によって動きを読んでいる。

だがその経験を技術に反映させる際、今までの全ての経験と複合させているのだ。

そんなことをできる人間など、そうはいない。

それこそが、他の弓使い達が、ナーリヤのような技を使ってこない理由だった。

「それがナーリヤの…… “先見”」

「うん？……その、“先見”というのは、どこかで聞いたことがあるような？」

ライアンは改めてナーリヤの技の名前を聞き、顎に手を当てて考える。

そうして、横目でそつとララを見た。

「……ロウアンズとテルクスの、出来事」

ララの声に、ライアンだけではなく千里とジックも耳を傾ける。

語るつもりはなかったのだが、千里の真剣な目に、ため息を吐いて思いを切り替える。

そうして、ララはゆっくりと語り始めるのだった。

+

トムに打ち勝ったナーリヤは、余裕を見せながら砂地を出る。

そうして、選手用の観客席に戻るために闘技場の中を進んでいた。だが途中で、ふと足を止める。

選手用の観客席へ向かう途中。

そこで、選手が利用できるように置かれた簡易屋台。

その一角に、ナーリヤは自分の前の試合で見た女性の姿を見つけたのだ。

「あ……ファイオナさん、ですよね？」

さらりと流れるプラチナブロンドの髪と、緑がかつた青い碧眼。尖った耳と緑の鎧、そして真紅の長剣を抱える美女……エルフの、フィオナだった。

「うん？……すまないが、どこかで会ったことが？」

困ったように首を傾げるフィオナに、ナーリヤは慌てて手を振った。

「あ、いえっ！直接面識はありません。ただ、千里から話を聞いていて……」

「チサト、から？ああ、それでは貴殿が、“ナーリヤ”殿かな？」

千里の話に出てきた、千里の“友達”であるという少年。

話した内容に合致する優しい雰囲気、フィオナはなるほどと頷いた。

「申し遅れました。」

僕の名前は“ナーリヤ”ロウアンス”……千里の、友達です」

「丁寧に済まん。私は“フィオナ”フェイルラート”だ。」

それからこれは千里にもいったのだが……堅苦しい口調は止めてくれ、ナーリヤ」

「あ、うん、わかったよ。フィオナ」

さっぱりとした雰囲気は、ナーリヤとしてもやりやすかった。

堅苦しいままで進めるのは、育ちが良いとは言えないナーリヤにとっては中々に大変なものだったのだ。

「それで？わざわざ挨拶だけに来た、という訳ではないのだろう

「？」

「……わかってしまう、よね」

「当たり前だ」

フィオナはそういうと、苦笑を零す。

外見こそ若く見えるが、実年齢はナーリヤの二倍以上あるのだ。そうそう隠し事なんて、できるものではなかった。

「ララさん 他の出場者から聞いたんだけど、

フィオナは、もう何十年も前から闘技大会に出ているんだよね？」

「ああ、そうだな。これで十四度目の出場となる」

治める皇帝が代替わりを迎えても、闘技大会はずっとあった。

女性部門が存在しない頃でも、種族として他を圧倒するエルフは、出場が許されていたのだ。

「過去の出場者のことで、教えて欲しいことがあるんだ」

「ふむ、知っていることならば構わんが……？」

ナーリヤの真剣な目に、フィオナは薄く笑う。

ここで休んでいた彼女は、ナーリヤの戦いは見ていない。

だがそれでも、目の前の少年がそこの戦士よりも力を持つことを見抜いていた。

「“ロウアンス”と“テルクス”

この兩名について、知っていることを教えて欲しい」

ナーリヤはそういうと、深く頭を下げた。

真剣な態度と、誠意。

フィオナという戦士にとっての代価は、それで十分といえた。

「ふふ、チサトが胸を張って“友達”だというのも解るな。

……顔を上げる、ナーリヤ＝ロウアンス」

「フィオナ……」

フィオナは屋台の側のテーブルに近づく。

そして、優雅な動作で椅子に座ると、正面の席をナーリヤに勧めた。

「まあ、まずは座れ。

……店主！フリット揚げを適当に頼む」

「毎度！」

フィオナは、屋台の店主が持ってきた唐揚げのようなものを頼張る。

そんなフィオナの前に、ナーリヤは常備しているカップを置いて、これまた持ち歩いている水筒から茶を注いだ。

「気が利くな。ありがとう」

それを一口飲んで唇を濡らすと、ナーリヤにも唐揚げを勧める。

ナーリヤはそれを受け取りながらも、ただじっと耳を傾けていた。

「さて、彼らの因縁、だったな」

そうしてついに……フィオナはその出来事を、語り出すのだった。

十

選手観客席の一角で、ベンチに腰掛ける。

そこで、ララはゆっくりと抑揚のない声で語り始めた。

「人伝に聞いた話で、私が見ていたことではないのだけれど」

ララはそう前置きをすると、思い出すように目を伏せる。

そうしている間、千里はナーリヤと対峙したあの灰色の男の姿を、
瞼の裏に思い浮かべていた。

ガラン＝テルクスと名乗った、灰褐色の男。

その姿を一言で形容するのならば、きつと“狼”だ。

月明かりを浴びて丘に立つ、灰色のニホンオオカミ。

凜猛で洗練された、美しく強い獣の姿が相応しいように思えて、ならなかった。

「かつて帝国には、世界一と呼ばれた弓使いが居た。どんなに素早い獲物でも、どんなに遠くの敵でも、どんなに小さな動物でも

……確実に射抜いてみせる、最優の弓士」

灰色の髪を短く切りそろえた、灰色の男。

帝国の騎士、世界一の弓使いとして名を馳せた戦士。

「それが、テルクス。帝国騎士“クルド”テルクス」

ララの語りが、身体に染み渡っていく。

千里の脳裏には、既に空想でできた男性の姿が浮かんでいた。凜猛な目をした、灰色の男の姿が……。

「それが起こったのは、三十七年ほど前のことらしいわ」

三十七年前ならば、ララはまだ生まれてもいない。

だからこれは、聞いた話、なのだ。

「名誉のために出場した、闘技大会。

当然のように勝ち進み、決勝戦までのし上がり、そこに現れた同じ弓使い。

黄金の髪と空色の瞳、端麗な顔立ちの青年 “セアック”ロウ

アンス”」

「ナーリヤの……お爺さん」

ナーリヤが“爺ちゃん”と慕っていた、恩人。

千里はその顔を見たことがある訳ではない。
それでも、ナーリヤの話しから優しげな人物だったことは、わかっていた。

「身体の弱い妻を助けるため。
その治療法を探すためには、ノーズファンへ行けなくてはならない。

その当ても今回と同じように、優勝者のみにしか道は開かれていなかったそうよ」

上位数名がノーズファンへ行けるようになったのは、今から二十年前だとララは告げる。

女性部門がなかったため、それまではずっとただ一人だけに開かれた門だった。

「結果としてテルクスは地を這うことになり、
再戦を望んだが、ロウアンスは二度と、闘技大会には訪れなかった」

クルドは結局、世界一の称号を取り戻すことはなかった。
敗北したのならまだしも、再戦すら望まれぬという状況だったのだ。

「それが……セアックさんたちの、因縁」
ゆっくりと語り終える、ララ。

千里はその因果を自分の中で噛み砕いて、小さく唇を噛むのだった。

+

「さぞ、悔しかったろうよ。」

聞くところによると、彼は王国まで足を運んだこともあるそうだ。非公式でも構わないから、もう一度弓を交えたい、と」

フィオナの語る昔話。

その戦いを見ていた彼女は、目を瞑り思い出しながら語っていた。

「しかし、王国にロウアンスの姿は無かった。

どこかへ旅に出たのか、それともこの夜には居ないのか。十年ほど前のことだそうだ」

ナーリヤは、その時にはセアックがすでにミドイルの村に入ったことを知っていた。
セアックから聞いた沢山の話。その中でも、あまり語られることの無かった彼の昔話だ。

「ロウアンスの名を持つ貴君がテルクスと何があったのかは、知らない。」

けれど、この話して何か参考にはなっただか？」

ガランが見せた、失望の表情。

その意味が、ナーリヤはわかり始めていた。

彼は果たそうというのだ。……父親の、無念を。

「うん、わかったよ。」

参考になった、ありがとう。フィオナ」

ナーリヤのその漆黒の瞳にゆらめく、闘志の炎。
静かだが、その輝きは強く滾っていた。

「ガラン」テルクス……負けられない、な」

元より負ける気は無かった。

だがその思いも、強くなる。

受けた屈辱を晴らす、汚名を雪ぐ、認めさせる。
そのどれも始めから決めていたことだ。
だがこの話でもう一つ、戦う理由が生まれた。

大切な人が遺した、試練。

父の代でつかなかった、気持ちの決着。

乗り越えるべき、一つの“過去”の一幕。

強く握りしめられた手を目の前までかざすと、ナーリヤは大きく息を吐く。

その様子を見ていたフィオナは、口元を緩ませて微かに笑った。何時の時代も変わらない、強さを競い思いを連ねる“戦士”という生き物の姿。

こんな感情がぶつかり合う場所で戦えることを、フィオナはそつと“神”に感謝した。

十

観客席に戻ると、ナーリヤは変わらぬ笑顔で千里の元へ戻ってきた。

千里はそんなナーリヤを迎えるも、同じく笑顔で、とはいかなかった。

「あ、あのね、ナーリヤ。

ララさんに昔のことを聞いたんだけど、ね」

千里は、ロウアンスとテルクスの因縁を自分の口から話しても良いのか、迷っていた。

ナーリヤが自分から聞いた訳ではないから、どこか言いつらい。セアックともクルドとも関わりを持たず、世界まで違う千里は、こうして彼らの因縁を語って良いのかと悩んでいた。

「ちょうど今、フィオナさんに聞いて来たんだ」

「え？そ、そうなんだ」

千里は余計な気を遣ったのか、と肩を落とす。それでも、聞いてしまった以上黙っていることはできなかったことは事実。

だからこそ、無駄に緊張してしまった心を解きほぐす。

「改めて、負けられないって思った。

だから……だからこそ、一緒に勝とう　千里」

「あ……うん。

絶対勝とう、ナーリヤ！」

二人で、こつんと拳を合わせる。

この闘技大会で、過去の因縁に終止符を打つ。

そのためにも、こんなところで躓いては居られない。

「決勝戦まで勝ち上がり、そして前へ進む。」

改めて決意を固めた二人は、強く頷き合うのだった。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 二対の矢ノ過ぎ去りし栄光（後書き）

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、次話もどうぞよろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 漆黒の幽騎／氷剣の令嬢

東門奥の選手控え室。

その中の一室で、ガランは大きく欠伸をした。

「隊長、暇そうッスね」

そんなガランに、声がかかる。

黄色の髪で目を隠した、大人しそうな青年だ。

黒い鎧を着ていることから、帝国の一兵士であることが伺える。

暇そうに椅子に腰掛けて寛ぐガランに、青年は苦笑を零す。

彼はガランの部下で、警備の合間に自分の隊長の様子を見に来たのだった。

「はぁ……当たり前だ。

蒔いた種が萌芽しねえ限り、退屈なまま終わるだろうさ。

発破が無駄手間だったら、それだけで骨折り損だ」

「種に……発破、ッスか？」

青年は、壁に背を預けながら首を傾げる。

真面目そうな外見の割りに、気楽な性格のようだ。

自分の隊長を前にしてなお、寛ぐことを止めない。

「それよりも、テメエはさっさと持ち場に戻れ。レウ」

「俺一人いなくてもかわんねえッスよ」

彼　レウは警備の予備要員で、本格的に警備をしているメンバ

「ではない。」

だから、ガランも本気でレウを咎めては居なかったのだ。

「アーク隊長の司会でも見てればいいじゃないですか」

「無駄がなさ過ぎてつまらん」

ガランは親友の司会に対してそう吐き捨てると、再び大きな欠伸をする。

面倒なことはしない主義であるアークの司会は、観客側からすればあまり面白いものでは無かったのだ。

「隊長は、最後ですよね？」

「そうだ。賭けるなら俺にしとけ」

「優勝の賭け、ですよね？」

賭けになんねえッスよ、それ」

呆れたように言い捨てるレウに対して、ガランは笑う。
獰猛で凶暴な……獣のような、笑みだった。

「さあ……わかんねえぞ？」

「へ？……それってどういう」

「そろそろ交代の時間だ。顔くらいは出せ」

レウはガランの言葉を疑問に思い、問いただそうとする。
しかし、それ以上は言わないという態度に、渋々と引き下がった。
ガランがこういう態度に出て、答えたことは一度もないのだ。

「はあ……わかりました」

レウは肩を落としながら、控え室を去った。

その後ろ姿を見送ることもせず、ガランは笑みを浮かべ続ける。
一回戦で見た、待ち望んだ“弓使い”の戦い。
その姿を思い出して、笑う。

「さて、どうくる？」

退屈だけは、させるなよ……“ロウアンス”」

低い声が空気を震わせて、ゆっくりと控え室に響いた。

選手用の観客席。

その一角で、ナーリヤ達は闘技場へ視線を落としていた。白い砂の上、そこで行われるのは……ジツクの、試合だ。

『西門選手、“ジツク・デユン”アクルサルト”！』

西側から出てくるのは、青い髪の少年。

指先から肘まで程度の長さの剣に、金と銀で装飾された鎧。

ジツクのその姿は、遠目からでもよく見えていた。

「うわぁ、こうしてみるとなんか……」

「うん、遠くから見ても、なんか……」

千里とナーリヤは、“なんか”の続きを言おうとはせず口を噤む。そんな二人に、ライアンは苦みを含んだ笑みを浮かべた。

「あれはもう、ジツクの趣味のようなものなのだよ」

フオーししようとしたのだろうが、失敗している。

何か止むに止まれぬ事情があるというのならまだ弁解もできたのだろうが、趣味となれば痛々しい感想しか湧いてこなかった。別の意味で、弁解できない。

ジツクもまた、闘技場から千里達四人の様子を確認していた。

流石にその表情までは読み取れないが、下からでも誰が見ている

かくらいは解る。

ましてや、赤いドレス型の戦闘服など、一人しかいないのだから。

「結局良いところは見せずじまい。」

「……それでは、オレの気が治まらん」

剣を抱えて、東門を睨み付ける。

用意周到こそが彼のポリシーだったのだが、今はそんなことは言っていない。

企みが全て失敗したことで、ジツクの頭は逆に冷静になっていた。

『東門選手、“トラスト”！』

名字のない、名前。

とくに家名を必要としない村人や、先祖から受け継ぐ名前が無い場合。

そういった人は名字を持たず、また持っている者の方が圧倒的に少ない。

自分の相手もそんな“農民”の出か、若しくは冒険者か。

本戦に残っている以上実力はあるのだからと、ジツクは気を引き締める。

「……なに？」

だが、ジツクの予想は外れた。

フルプレートアーマーに大剣を担いだ、漆黒の騎士。

身の丈を越えるほどの大剣を片手で操るのか、左手には大きな盾を持っていた。

『……貴君が私の相手か』

くぐもった声だった。

鎧の中で反響しているのか、幾重かに重なって聞こえる。

そのなんともいえない不気味さに、ジツクは小さく眉根を寄せた。

『それでは……男性部門一回戦、第四試合、始め！』

アークの声が響く。

だが両者は未だ動かず、じつくりと相手の様子を伺っていた。

そうして動かぬ中、先に痺れを切らしたのはトラストだった。

『ふむ、埒があかな』

それだけ言うと、トラストは悠然と歩き出す。

隙のない堂々とした歩みにジツクは聞こえぬように舌打ちをした。

出方をうかがおうと思えば、ただ先手を譲るだけの結果となった。

このままでは、ペースを奪われてしまうと考えたジツクは、黄金で装飾された剣を構えた。刃を水平にした、突きの構えだ。

「先手は貰う！」

突きの型を維持したまま、ジツクはトラストへ向かって一直線に走る。

体勢を低くし身体を半身にしているため、捉えにくい動きだった。

「はあっ！」

身体を弓なりに引き絞った、鋭い一撃。

それをトラストは、どつしりと構えた盾で防御しようとする。

「そんな見え見えの動作で！」

ジツクは強く放った突きを、戻す。

元より戻すつもりだったのか速さだけで力は込められておらず、正面からのフェイントという形でトラストの隙を突く。

その一連の企てに嵌ったことを知り、トラストは小さな呻り声を上げた。

「せえい！」

『ぬう……ッ！』

盾の間、そこへジツクの剣が滑り込む。

その鋭い刃は容易く防御を突破して、トラストの胸を突いた。

装飾で威力が低いように“見せた”特性の剣は、その気になれば鋼鉄すら貫くことができるのだ。

そしてジツクは、突きに関してだけならば、それを実行できる技術があつたのだ。

突き以外は、平凡な剣なのだが。

「なにっ」

『今のは良い動きだ』

だがその一撃を受けてもなお、トラストは健在だった。

突きのインパクトの直前、トラストは威力を削ぐために、ほんの少しだけ前に出ていたのだ。着弾地点が予定とずれれば、それだけで威力は削がれてしまう。

『だが、我には足りん』

トラストは淡々と、黒の大剣を振るう。

シンプルながらに装飾の施された業物で、その破壊力は折り紙付き。

そんな刃を前にして、ジックは冷静に身を退いた。

「力だけでは、オレには当たらん！」

そう言い放ちながらも、ジックの額には汗が滲んでいた。

千里のように速く鋭い連撃ではない。剣速ならば、千里の剣の方が速いだろう。

しかし、トラストの一撃にはどこまでも重い必殺の力が込められていた。

その一撃は、掠めただけでもジックの身体を容易に引き裂くだろう。

『そうか、ならば技を加えよう』

トラストの、小さな宣言。

漆黒の大剣を振り降ろし、それをジックは紙一重で避ける。

ギリギリまで引きつけてから避けるその身のこなしは、反撃には適しているだろう。

しかし、その判断は誤りだった。

「なにつ」

突き出されたのは、トラストが左に構えた盾だった。

盾によるタツクルを、剣撃の間に挟む。

嵐のような怒濤の攻めに、ジツクは身を守ることと精一杯だった。

『終いだ』

それは、トラストからの死刑宣告だ。

盾のタツクルで体勢を崩したところへの、唐竹割り。

縦一閃に振りかぶられたその一撃を、ジツクは睨み付ける。

「ここで終わって」

轟音のその一撃へ、ジツクは飛び込む。

風圧で頬を裂き鮮血が舞い、それをジツクは目くらましに利用した。

そして、トラストの喉に向けて、剣の一撃を突き放つ。

「 たまるかアッ!!」

ドンッ

『ゲウツ!?!』

弓のように引き絞られた身体から放たれた、一撃。

その一撃は……トラストの頭を“吹き飛ばした”。

『いい、一撃だ』

「そんな」

トラストの遙か後方に、兜が落ちる。

それでもなお止まらずに動いたトラストは、ジツクの喉に剣を止めた。

『ここで死ぬには惜しい』
「く……降参、だ」

苦虫をかみつぶすような顔で、ジツクは降伏を訴える。
それをアークが聞き取り、ここに男性部門四回戦の、決着がついた。

そうして選手控え室へと戻っていくジツクの、上。
選手用の観客席で、千里は震える手で会場を指した。

「ななな、ナーリヤ、あれって……？」

首が飛んでも生きている。

その上、首の中にはなにもない。
そんなホラー映画のような光景に少し驚くだけだった周囲の反応が、千里には信じられなかった。まさか昼間から“お化け”を見ることになるなどとは思っても居なかったのか、心なしか顔が青い。

「幽族くろいづの騎士、だね。

まさかトウーユヨークの精霊族まで出場しているなんて、ね」
「トウーユヨーク？」

初めて聞く単語は、地名だろうと当たりをつける。

自動変換の有無で解るのは、地名や人名といった固有名詞なのだ。

「エクスエクスの居城があった“ニーズアルへ”同様に、強力な存在が統治する島の一つだよ」

去りゆくトラストの姿をよく見ながら、ナーリヤは千里に説明をする。

「ノーズファンと南西の国、スエルスルードの間にある西の大陸。そこには、精霊族といって肉体を持たず精神だけで生きる存在が暮らしているんだ」

「へえ……精霊、妖精さんとか？」

「うん、そうだね」

妖精がいると聞き、千里はメルヘンな雰囲気のところを思い浮かべる。

だが、その筆頭に首無し騎士の姿が再生されて、可憐な花畑が一気におどろおどろしいものになった。

「あう……」

「千里？」

苦い表情で眉をしかめる千里に、ナーリヤは首を傾げる。

だがすぐに、いつものことだと気を取り直した。

彼女の百面相は、今に始まったことではない。

「休憩後は、千里の試合だね」

呻り声を上げている千里を現実に引き戻すために、ナーリヤは話題を振る。

まさか妙な妄想に囚われていることに気がつかれているとは思ってもいなかった千里は、その言葉ですぐに我に返る。

「そ、そうだった。確か、次は休憩を挟んだ後なんだよね。」

私の相手は……これ、なんて読むの？」

千里が懐から取り出したのは、控え室で配られていたトーナメン

ト表だった。

知っている名前ならば読めなくとも“理解することは出来る”のだが、知らない名前は難解な記号にしか見えなかった。

「えーと……“ランウィーナ・アル＝エルトワル”かな」

「すごく、貴族っぽい名前だね」

「まあ、確かに」

ミドルネーム持ちなんか、貴族や古い家の出にしか見られない。本当に歴史を積んでいるだけの家の人間なんか、長い名前だったりするのだが。

「一緒に優勝だよ、千里」

「任せて、ナーリヤ！」

千里は力強くガッツポーズを作ると、ナーリヤに背を向けて西門へ走る。

その気合い十分な表情に、ナーリヤは優しく頬を綻ばせた。

「あいつら……負けたオレの前で堂々と」

「ふむ、あれが男女の自然な逢瀬か。勉強になるな」

そんなナーリヤの耳に届く、二種類の声。

興味がないのか何も言わないだけなのか、ララの声は聞こえない。だが確実に響いた言葉に、ナーリヤは身体を硬直させた。

「いいいい、いや、あれは、その」

「否定するのは女性に失礼」

ララも聞いていたということには、間違いないようだった。

ただ、押すことも退くこともできなくなってしまつたという結果つきだったが。

「我々は近づくこともできなかつたな、ジツク」

「あの二人は、もう少し“人に気を遣う”ということを感じるべきだ」

確かに一回戦敗退という形で見事な失恋を経験することになったジツクが、そう言いたくなる気持ちも分かる。

だがそれでも、彼にだけは言われたくない言葉である。

「これは、その、えっと」

針の筵。

そんな言葉を脳裏に掠めながら、ナーリヤはただおぼつかない口調で弁解を続けるのだった。

アギトを背負い、鎧の確認をする。
目を閉じて回想するのは、これまでの経験だった。

薄暗い控え室、その中で瞑目をする姿は、祈りを上げているように見える。

名前が呼ばれるまでの短い時間を、千里はこうした形で精神を集中させていた。

沢山の観客の前に出ることなんて、中学の文化祭以来だった。

その時は、クラスの出し物で演劇をして、役割は白雪姫の“こびとこ”だ。

一言二言喋るだけで、あとは適当に動きながら進行を待つだけ。その受動的な役割を淡々とこなしながら、ほんの僅かだが白雪姫役のクラスメートに羨望の眼差しを注いでいた。

「でも、こんな背の低い私じゃ、彼女みたいにはなれない。

確か、そう思って“主役”になることを早々に諦めたんだっけな」

吐き出すように紡がれた言葉には、諦めた時の感情が込められていた。

結局中学を卒業しても伸びることの無かった、「コンプレックス身長。

どうしようもないことなのだと諦めて、努力しようとするしなかった。

「今度は、私が主役。役柄は、友達と約束を交わした騎士さま」

ナイト

目を開くと、そこにはただ光が宿っていた。
力強く輝く、翳りのない光だ。

『東門からは、氷の魔剣士“ランウィーナ・アル”エルトワル”選手ですっ！』

今大会最年少の十四歳ですですよっ！』

テンションの高いレイニの声に、千里は小さな笑みを浮かべる。
自分も気分を盛り上げておけば、誰にも負けないような気がしてきた。

『西門からは、黒輝の重剣士“チサト”タカミネ”選手ですっ！
身の丈を越える大剣を操りし、異国の女の子！』

名を呼ばれて、紹介される。

そこに乗せられた照れくさい言葉を、千里は気分を盛り上げるのに利用する。

白い闘技場へ踏み出して太陽を身に浴び、観客の声を聞くと、ただそれだけで揺らぐ気持ちが消し飛んだ。

「日本に帰ったら、主役になれるように頑張ってみようかな」

案外、性に合っているのかも知れない。

そんなことを口に出すと、千里は背中からアギトを引き抜いて、天に掲げた。

「ふふふ、お待ちしておりますわ」

ランウィーナは、千里よりも少しだけ背の高い少女だった。二つ下の少女に身長で抜かれるということは、慣れていても少しだけ悔しく、息を零す。

光の加減で赤にも見える紫色の目は、勝ち気で鋭い。流れるようなブロンドの髪は、縦ロールにした上で“ポニーテール”に結われていた。

「あれ？なんかデジャブが……？」

髪型を変えてくれれば、何か思い出すかも知れない。そう思っても口には出さず、千里はただ首を傾げる。

「愚姉の仇などとは言いませんわ。ただ、私たちエルトワルに汚名が着せられるのだけは、我慢できませんの」

そうは言われても、思い出せない。

千里はそのままを抱いたままではまずいと、いったん思考を放棄した。

「その様子だと、誰のことだか解っていませんわね。」

「ああ、こんな単細胞相手に予選落ちとは……本当に駄目な姉ね」「予選……って、あぁっ！！」

そこまで言われて、千里は漸く思い出す。

予選でレイピア片手に氷の魔法を打ち込んで、派手に負けた女性だ。

言われて見れば、顔立ちや口調といった、雰囲気がよく似ている。

これでツインテールにでもしてくれれば、うり二つと言えるだろう。

『それではでは……試合、開始〜っ!〜!』

レイニの声が響き、試合が始まる。

千里が剣の切っ先をランウィーナに向けると、彼女もまた剣を抜いて構えた。

黄金の装飾が施された、流麗な双剣だ。

「【凍てつけ】」

ランウィーナが、魔力を乗せて言葉を紡ぐ。

すると、彼女の周囲から冷気が発せられ始めた。

「【氷域剣舞】ひょういきげんぶ」

ランウィーナを中心に、半径一メートルほどの冷気の空間。

その効果が解らず、千里はじっくりとランウィーナの動きを見ていた。

「あら？来ませんの？」

でしたら……こちらから行きますわ」

ランウィーナはそう言うと、両手をだらりと下げた。

そして、体勢を低くしてから、ネコのよう俊敏な動きで駆け出す。

「速い、けど!」

目で追うことのできない速度では、ない。
ならば迎撃しようと、千里は剣を振りかぶる。
当然、薄く光の粒子を纏わせることも忘れない。

「今……っ?!」

だが、振り抜こうと思ったところで、何故か一拍遅れが生じる。
その遅れは、ランウィーナに懐を許すことになった。

「愚姉と一緒にしないで頂きたいのですわっ!」

地面すれすれから、双剣が襲いかかる。

大地を這う黄金の牙、その一撃は鋭く速い。

すでにランウィーナの頭上を通り過ぎてしまったアギトを引き戻すことはできない。

ならば、と千里は一か八かでアギトを支えていた左手を離して、前に突きだした。

「【壁よ!】」

ガガキンツ

二連撃が、光の壁に阻まれる。

そこに生じた隙を逃さぬように、千里は右腕だけで振り抜いたアギトを戻した。

「っ」

だがその必殺の一撃も、やはり一拍遅れてしまう。

そのことにより、ランウィーナには距離を取られてしまった。

「寒い……そうか、冷気なんだ」

凍てつく空間。

その作用で感覚が狂い、一拍遅れた攻撃になる。

気がついてしまえば調整することもできるのだろうが、初見で避けられなければそこで終わっていたことだろう。

千里は、ランウィーナの姉に対峙した時の感覚なままでは終わってしまふことだろうと、ここに来て漸く意識を切り替えた。

思えば、姉を意識させることも、彼女の策略の内だったのだろう。鋭さを増した千里の視線をぶつけられても、ランウィーナは動揺することなく佇んでいる。

「案外早く見破ったようですね。さて、それなら次の舞踏へ切り替えますわ」

今度は、右の剣を空に掲げて、左の剣を後ろに引く。

千里の視界からでは剣の柄しか見ることができず、剣真の軌道が読みにくい。

「【氷剣よ、死へと誘え】」

再び詠唱をする。

けれど今度は、なんのエフェクトも起きなかった。

「倒れなさい！」

パターンの多い戦いに、千里は攻めあぐねていた。

そのため、完全に“待ち”の姿勢で戦わなければならないことを、

余儀なくされていたのだ。

「そう何度もっ」

今度はすぐに迎撃しようとはせずに、まずは避けようとする。剣の幅は、先ほど掴んだ。一度見ている以上、今更剣真を隠されたところで負けはしない。

だが、その予想すらも覆される。

振り下ろされた右の剣と、左から薙がれた左の剣。

十字を描くように振られた双剣は……“青い”軌跡を描いていた。

「え……わわわっ」

急に伸びた、剣真。氷で長さを水増しする魔法だ。

千里は避けることはできなと感じて、慌てて光の壁を張る。

すると、再び金属音が二つ連なり、しかし連撃は止まらなかった。

「守ってばかりでは、埒があきませんことよ！」

反撃に移ることもできずに、千里はただ凶暴な剣から身を守り続ける。

このままでは埒があかないことは、千里にだって解っている。

それでもどうしようもないじゃないかと悪態を吐きそうになり……

…それを、呑み込んだ。

「こんなところで諦めていたら、きつとなにも変わらない！」

壁に守られたまま、千里はアギトを振りかぶる。

そして、目の前の壁に向けて、アギトを勢いよく振り抜いた。

「でやあああああつっ！！！！」

ドオンッ

「なん、ですって?!」

壁が迫り、ランウィーナは悲鳴を上げる。

先ほどまで余裕を見せながらも破れないことに苛立ちを覚えていた、光の壁。

それが、圧迫感を以て迫ってきたのだ。

「【氷の道よ、私を運びなさい!】」

スケートリンクのように、道が延びる。

その上を滑ることにより高速回避を行い、ランウィーナは壁の軌道から逃れた。

だがそこには……決定的な“隙”が生じる。

「全身を使つて、螺旋を描く」

小さく呟かれた言葉。

その一言と同時に千里が右足を踏み込むと、ズンッという音と共に、白い砂が舞い上がった。

「【氷よ、銀幕の壁を……」

咄嗟に盾を展開しようとするが、一步遅い。

光を纏って振り抜かれたアギトの一撃が、ランウィーナの胸に入る。

「あつっ」

その一撃はランウィーナの身体を易々と持ち上げて、遙か後方に吹き飛ばした。

そして、白い砂の上を十五メートルほど滑り、一度バウンドして俯せに倒れる。

「あ……まず」

オーバーキルにもほどがある。

もちろん光の粒子のおかげで大した怪我もなく意識を刈り取るこ
とができたのだろうが、端から見ればとんでもない攻撃だった。

これでは千里が、容赦の欠片もない悪役ヒールである。

そんな風に、ちょっととした自己嫌悪を覚えて千里は密かに肩を落
とした。

だが、静まりかえった観客席は、千里の予想しない方向に声
を上げる。

『一撃必殺！これほど痛快な一撃を、我々は見たことがあったでし
ようか！』

どうにも熱気の無かった地味な闘技大会、それを全盛期に戻すよ
うな攻撃！

今大会は、どうにもこうにも素晴らしいっっっ！！！！』

レイニの声と共に、観客席も騒然とし始める。

新たな戦士を迎え入れる、歓迎の声。

無名の剣士が才能在る貴族を討ち倒すという演出に、観客は沸い
ていた。

六章 第八話 波乱の闘技大会？ 漆黒の幽騎／氷剣の令嬢（後書き）

今回で、闘技大会編の折り返しとなります。
年内には六章を終えられたらな、と。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 望みの先へ

空には星が輝き、月は雲間に隠れてなお明るい。

頬を打つ風が少しだけ冷たかったが、千里はその程度の寒さなど気にならなかった。

一日の日程を終えると、宿に帰ってナーリヤと一回戦突破を祝った。

一回戦で一日、明日は一日使って二回戦を行う。そのため、今日はひとまず宿で夜を明かすのだ。

本当はもう、寝ていなければならない。

だというのに、千里はベッドを抜け出して宿の屋根の上に来ていた。

「歓声、すごかったな」

思い浮かべるのは、今日の風景。

戦うことに快樂を見いだすことができるほど、剣を振るのは好きではない。

だが、魔法剣士を打ち破り、広い闘技場に一人で剣を掲げた時。

その場は “熱” に支配された。

葛藤もコンプレックスも、全てを吹き飛ばす高揚感。

不安も緊張も、残らず消し飛ばした勝利の咆吼。

「私でも、“主人公”になれるのかな？」

常に平凡で在り続けた少女。

周囲が自分よりも優れていることを当然だと思っていた、なんて後ろ向きなことは考えていない。

けれど、脇役の方が似合いそうだと何度か考えたことがあった。

「主人公なら、きっと」

物語の主人公は、いつも困難に遭遇する。
だがそれが本当に“主人公”ならば、困難など乗り越えられる。

「そんなこと考えても、仕方がないか」

千里は大きく息を吸い込むと、気合いを入れて立ち上がる。
その頃には、雲間を抜けた月が、千里の姿を照らしていた。

そうして千里は、ベッドに戻る。

そして毛布に包まれる頃には、千里にはもう、なんの翳りも無かった。

白い雲が浮かぶ、晴れた空の下。

雲間から降り注ぐ太陽光は、闘技場をじりじりと焼き焦がす。

その熱に包まれながらも、今日の闘技大会も盛大に賑わっていた。

選手用の観客席の一角。

そこでは、千里とララ達が真剣な眼差しで試合場を見ていた。
今日の初戦、それはナーリヤの試合だ。

いや、正確には。。

『二回線第一試合、東門選手 “ナーリヤ” ロウアンス”！』

歓声が、響く。

ナーリヤの卓越した弓の技術は、初戦から人気を生んでいた。その戦いのスマートさに、惹かれるものも居るといふ。

真剣な表情で東門からナーリヤが現れる。

それを見届けると、アークは次いで西門の選手の名を、読み上げた。

『西門選手 “ライアン・ランク＝ランタート”！』

太陽の光で煌めく金の髪と、森林に吹く風のような緑色の双眸。

第一試合、第二試合と連戦だった彼らは、ここで対峙することになったのだ。

「ナーリヤ……ライアン……」。

うう、どっちを応援すれば良いんだろう」

千里が情けない声を上げると、横で聞いていたジックが胡乱げな眼差しを千里に向けた。

「ライアンとて、恋人そつちのけで応援されたら気まずかるう」

「だ、だからそれはっ……」

「二人とも、うるさい」

口げんかに発展しそうになった二人を、ララが諫める。

すぱっと切り捨てながら諫める辺りが、実に彼女らしい。

「ふ、二人ともーっ、頑張ってーっ！」

「日和ったか」

ジックの言葉に反論することもできず、千里は目を逸らす。ここで負けたらダメだと自分に言い聞かせる辺り、“ダメ”な感じだった。

そんな千里の戸惑い交じりの応援を、ナーリヤはしっかり聞いていた。

そして、結局二人とも応援し始めるその声に、微かに笑みを浮かべた。

「余裕だな、ナーリヤ」

「そう見える、かな？」

ライアンが剣を引き抜き、ナーリヤが弓を構える。

まずは遠距離から牽制、そのまま倒せるのなら倒す。そう考えて、槍にはまだ手を掛けない。

「騎士になることは、俺の夢だった。

そしてその夢は、この闘技大会で実績を残すことで、大きな一歩とすることができる」

ライアンは剣の腹をナーリヤに見せるように、掲げる。

それは、帝国騎士の決闘の構えだった。

「……始めは、“大切な友達”のため」

目標を語るライアンに合わせて、ナーリヤも口を開いた。

左手に弓を持ち、だらりと下げた右手に矢を持つ。

それは、狩人が精神を集中させている時の構えだった。

「次は、“父”の名誉を守るため」

瞑目していた目を、薄く開く。

漆黒を讃えた双眸……その奥に宿る、冷たくも苛烈な炎。

「今は……昔日の禍根を断ち切り、明日への道程を切り拓くために」
目を開いて、ライオンを見る。

そしてその溢れ出る闘志を隠そうともせず、黒い弓に黒い矢を
番えた。

「勝ち抜いて、宿命を打ち破るッ！」

その宣言と同時に、アークが試合開始の合図をする。
そして、漆黒と黄金が、ぶつかり合った。

選手用の観客席、千里達が見る場所のちょうど反対側。

そこで灰色の男　ガランは、愉しげな笑みを浮かべていた。

「うわあ、隊長その顔怖いッス」

そんなガランに声をかけたのは、レウだった。

周囲の人間が明らかに退いているのを見ても近づいてくる辺り、
豪胆だ。

鈍感なだけ、という可能性もあるのだが。

「うるせえ。普通の顔だ」

「えー、そんな泣く子供が気を失うような顔がッスかー？」

「ほう？」

流石に睨まれて、レウは苦笑いをする。

そして、対峙する闘技場の二人に目を向けた。

「気になる試合でもあるんスか？」

「まあな」

そういうガランの視線を追い、その目が黒髪の少年に注がれていることに気がつく。

ガランよりも明らかに年下で、かつ関わり合いを持つようなタイプには見えない。

だがそれでも、その飢えた獣のような鋭い目は、確かに“ナーリヤ”に注がれていたのだ。

「一回線は見ていなかったんだっただか？」

「ええ、そうなんスよ」

レウはそういうと、大きく肩を落とした。

サボるつもりだったのが、結局かり出されたのだ。

「この時期は出場者達の“肩慣らし”で魔獣が激減する……はずだったんスけどね」

「あん？減らなかつた、のか？」

ガランの不思議そうな声に、レウは疲れたように頷く。そして、今までよりも少しだけ真剣な表情を浮かべた。

「はい、“まったく”減っていませんでした。

聞けば、他国でも魔獣が活性化するという事例が増えているようです」

そのレウの言葉に、ガランもやや厳しい表情になる。

縄張りの中ならば獲物が入らない限り大人しい魔獣も、不必要に暴れ出すようになった。

二人は知らぬことだが、ナーリヤ達が戦った“森の主”も、普段はアグネークが村に降りるほど暴れたり、しない。

「はあ……面倒だ。

闘技大会が終わるまでには体裁を整えておけ」

「了解ッス」

レウの返事を聞くと、ガランは胡乱げな表情で会場に目を戻す。そうして意識を固めたちょうどその時、ナーリヤの声がガランの耳に届いた。

『 昔日の禍根を断ち切り、明日への道程を切り拓くために』

昔日の禍根。

過ぎ去った日々に残った、因縁。

ガランはナーリヤの言葉に、どこか自嘲めいた笑みを浮かべた。

『 勝ち抜いて、宿命を打ち破るッ！』

「 ならば俺は、それすらも穿ち砕こう。」

だから足掻いてみせな、小僧」

何か言いたげにレウが下がった後も、ガランはそうしてただ笑っていた。

黄金の軌跡を描いて、ライオンが疾駆する。
体勢を低くして半身になることで、ナーリヤの照準を狂わそうと
していた。

だが、ナーリヤの本業は対人戦ではなく、飛ぶ鳥を落とす“狩り”
だ。
地を這う人間を落とすことなど、容易と言えた。

「先見一手」

先を見て、矢を放つ。
その矢は地面を走るライオンの肩に……当たらなかった。

「ふっ」

一息一閃。

左から右に薙がれた剣が、飛来した矢を落とす。
対人戦で使うには強すぎる黒帝の弓は、ナーリヤに“手加減”を
強いていた。

その力加減を行う際にできる、矢を放つためのタイムロス。

「はあああっつ！！」

その隙を縫うように、ライアンは大上段から剣を落とした。
卓越した瞬発力……それが、ライアンの“武器”だった。

「っ！」

ほんの僅かの間に距離を詰められて、ナーリヤは咄嗟にその剣を弓で受けた。

並の刃は通さない黒帝の骨でできた弓は、普通の木の弓とは訳が違う。

ナーリヤが力負けでもしない限り、弾かれはしない。

「はあっ！」

そして、腕力で勝ったナーリヤは、右に持った矢をライアンに突きだした。

対大型魔獣専用の矢は、その穂先がナイフほどもある。

それは、ちよっとした“手槍”ともえる代物だった。

「くっ」

身体を反らすことで、ライアンはその一撃を避ける。

だがその動きは、ナーリヤの想定外の範疇。

二人の実戦経験の差が、ここに大きく現れていた。

「先見一手」

弓だけには止まらない先見の技術と、これまでに培った経験。

その全てが収まった漆黒の双眸は、ライアンの動きを読んでいた。

「一撃必中　ッ！」

矢を突きだした右手を返して、身体を反っているため動けないライオンに振り下ろす。

身動きのとれないライオンはその一撃を避けることができず、ただぐつと目を閉じた。

だが、その一撃は通らない。

来るべき衝撃が来ないことに、ライオンは体勢を崩して片膝を突きながら目を開けた。

自分の喉元、そこに輝く黒の矢。

「遠いな、まだ」

「そう簡単に、追い越されはしないよ」

「ははっ、そのようだ」

ほんの僅かな時間に、ついた決着。

矢を突きつけられているというのにも拘わらず、ライオンは笑みを浮かべる。

悔しげで……なのに、どこか清々しさの残る笑みだった。

「俺の負けだ」

その一言。

それによって、静まりかえった会場が沸き上がる。

瞬く間の試合だというのに、その戦いは見るものたちに確かなものを、残っていたのだった。

試合が終わり、選手用の観客席に戻る。

そこでは、千里がどこか心配そうな表情で佇んでいた。

「二人とも、大丈夫？」

二人が試合を通して、険悪になったりはしないか。

そんな問いかけをぐっと呑み込んで、千里は無難な言葉をかける。

「うん、大丈夫だよ」

「残念だが、“怪我をさせる”には、まだ経験が足りないようだ」

「もう少し鍛錬されたら、僕も危ないかも知れないけどね」

そう言って、ナーリヤとライアンは笑い合う。

その下手をすれば試合前よりも中の良さそうな二人の姿に、千里は小さく安堵の息を吐いた。

それでも、思うところはある。

どちらも譲れない目標を持っていて、そして戦った。理解してはいるのだけれども、どこか歯がゆい。

「そんな顔はしないでくれ。俺たちは互いに斬り結び、互いの意志を感じ取った」

穏やかな表情で語るライアンの言葉に、千里はハッと顔を上げる。そして、見透かされていたことに、小さく顔を伏せて頬に朱を差した。

「一撃に、自分の全てを乗せるんだ。そうすれば、心は伝わる」

わかりにくいかな、と最後に付け足した、ナーリヤの言葉。

その声に、千里は小さく首を振る。勝敗に拘わらず、満足した表情でここに立つ二人を見れば、嫌でも解るのだ。

「心配してくれてありがとう、千里。」

僕たちは大丈夫だから、いつもみたいに笑っていて」

「うん……なんか、ごめんね」

顔を上げた千里に、二人は揃って首を振る。

夢を叶えるためには、誰かの夢の実現を遅らせなければならぬ。それで叶わなくなるかも知れないけれど、それでも自分の夢は諦められない。

「だから、真剣に……“想い”を、乗せる」

自分に背を向けて、ジック達の方へ行くナーリヤとライアン。その後ろ姿を見ながら、千里は小さく呟いた。

握りしめた手を胸に当てて、見上げるのは二人の笑顔。

諦められない夢があるのなら、せめてそれを乗せて真剣に戦う。それが、挑む者がしなければならぬことなのだ。

「今日までだって、できたんだ」

できないはずはない。

むしろやってみせるのだと、千里は強くその手を握りしめるのだった。

そうして幾ばくか経った後の、千里の試合。

その様子を、ライアンとナーリヤは選手用の観客席から見ていた。

「危うい、な」

ライアンの、静かな言葉。

それに、ナーリヤは神妙に頷いた。

「意志が揺らぎはしない、とは思う。でも……」

「どこか追い詰められてはいる、か」

命を賭して戦うことなど、知らない世界。

日常の片隅で常に命の危機がある世界などではなく、よほど危ない場所や人に関わらない限り、傷つけ合う必要のない平和な場所。

そんな場所から来た、とナーリヤは千里から聞いたことがあったことを、思い出す。

「折れないように支えることができるのは、君ただぞナーリヤ」

「うん……もっと頼れる人が他にもいれば、良かったんだけど」

流れ人という、異なる世界から来たというそのポジション。

ここに最初に来た時に触れ合い、かつどこか似た感性があるナーリヤだけは彼女を“理解”することができる位置にいる。

つまりそれは、ナーリヤ以外の人間とは、決定的に孤独であるという証明だった。

『チサト選手の攻撃！しかしファリリナ選手には当たらないっ！』

レイニの実況が、響く。

選手が試合に集中できるようにと考慮されているため、この実況は試合中の選手には聞こえないように魔法がかかっている。

『ファリリナ選手の攻撃は……風の流星群だアツ！！』

十五センチほどしかない、小柄な体躯。

透明なトンボのような羽を持ち、緑のドレスに身を包んだ妖精族の少女。

その少女　ファリリナが用いたのは、直径一メートルほどの風の塊を大量に落下させる魔法だった。

「【風よ風、流星となりて攻撃しちやえっ！】」

「わわわわっ！？」

慌てて避ける、千里の声。

だがその動きの中でも、千里は正確にファリリナを見ていた。

「これで終わり、かな」

ナーリヤの声。

それとほぼ同時に、光の粒子を纏わせたアギトを、千里は大きく横に薙いだ。

すると、風圧が光を纏った刃となり、ファリリナに襲いかかる。

「ななな、なにそれっ?!」

あまりにも発動が早すぎる魔法。

その暴風のような一撃に、ファリリナは走馬燈を浮かべながら目を閉じた。

「へ?」

そして、通り過ぎた風のみを感じ……意識を、落とした。痛み無く他者の意識を刈り取る、千里の剣の効果だった。

『ファリリナ選手ダウン!』

勝者は、期待の新星 “チサト” タカミネ” 選手だぁーつつつ
!..!』

沸き上がる会場、一回戦同様剣を掲げる千里。

その様子を、ナーリヤはただ心配そうに見つめていた。

「……千里」

その声は 届かない。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 望みの先へ（後書き）

第六章も残すところ、あと三話となりました。

年内には片付きそうにありませんが、帰省するまでにあともう一話は上げたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 双黒の円舞／黄金と轟鎚

昨日とは打って変わって曇り空な、夜。

星どころか月も見えない夜空を、千里は一人で見上げていた。

「はあ」

大きく息を吸って、吐き出す。

ため息ばかり吐いていると幸福が逃げ出すとはいうものの、どうにも止められそうになかった。

「はあ」

勝利への高揚。

それ以上に沸き上がる理解できない不安。

「絶対勝てる……絶対」

自身の口から零れる“絶対”という言葉。

今までだってやれたのだから、今回だってできるはず。

その自信を確かなものにするためには、同時に“確かな勝利”が必要だった。

翌日の試合相手は、ララ。

自分が一時とはいえ指示を受けた、強敵だった。

夜が、耽る。

E
X
I

全四回戦の行程で進む闘技大会も、気がつけば三回戦。準決勝という、大きな基点に立つことになっていた。

「これに勝てば、次は」

東門の控え室で、ナーリヤは一人呟く。

黒帝から削り出された鎧と、弓。

帝国に来てから購入した槍と、首にかけたロザリオ。

クリフに貰った短剣と、セアックから譲り受けた万能ナイフ。

その全てが、ナーリヤに力を与えていた。

「幽族の騎士、トラスト」

漆黒の大剣と大盾。

その攻略法を、頭蓋の裏で組み立てる。

『東門選手』

アークの声が届く。

その声にナーリヤは大きく息を吐き出すと、前を向いて踏み出した。

まずはこの戦いを乗り越えなければ、先へ行くことはできないのだ。

『ナーリヤ』ロウアンス！』

昨日とは違い、今日の天気は曇りだ。

昼間だというのに太陽は隠れて、薄暗い。

風も強く、今にも雨が降り出しそうな空の下、漆黒の騎士が悠然と歩いてきた。

『西門選手』トラスト！』

互いに沈黙したまま、己の獲物を手に取る。
トラストは背に抱えた大剣を、ナーリヤは同じく背負った弓を持ち構えた。

『試合、開始！』

アークによる開始の宣言がされてなお、場は動かない。
そもそも実態のないトラストは表情などから感情が読みにくく、ナーリヤはやりにくさを覚えていた。

『仕掛けんのか？弓使いよ』

トラストは、ただ佇んでいるだけだ。

動くこともせず剣と盾を構える“待ち”の姿勢は、彼が完全な力ウンター型の戦士であるという証だった。

「仕掛けるさ……だから、動くな」

小声で、ナーリヤはそう零した。

カウンターというのなら、それでもいい。

その防御が鉄壁であるというのなら……それを、突き崩してしまえばいい。

「ふう」

短く、それでいて強く息を吐く。

海の魔物を射抜いた時と同じように、限界まで弦を引き絞る。

対大型魔獣の弓の、本領は……硬い皮膚（防御）を貫き、その命を絶つことにあるのだ。

「穿ち抜け」

ドンッ!

「ウルド!! ガル!! バリスタ― 闇を穿つ大弩”!」

空気の壁を打ち破るような、轟音。

その威力に驚く暇もなく、風を貫いて飛来した矢は、カウンターを狙って構えていたトラストの盾に、撃ち当たる。

『なんだとツ?!』

その一撃はトラストの漆黒の盾を砕きながら貫き、そして矢よりも遅れて来た突風に、トラストは緩く体勢を崩した。

「ハアツ!」

その隙を逃すはずもなく、ナーリヤは槍を手に攻める。

トラストは崩れた体勢を戻すために一度距離を取りたいが、完全にペースを握られているためそれは叶わない。

『ぬう!ぐっ』

「はあああああっつ!!」

薙ぎ、突き、払い、斬り上げ、打ち落とし。

トラストはがりがりとした鎧を削られながらも、なんとか砕けた盾を捨てて大剣を両手持ちするに至った。

『あまり嘗めるな、人間!』

「貴方こそ、あまり人間を嘗めるな!」

力任せに振られた大剣を、ナーリヤは技でもって流す。

一度槍で受けてそのまま威力を地面に流されて、トラストは大きく体勢を崩した。

「せい！」

『ぐアツ！？』

放たれた突きが、トラストの腹をえぐる。

鎧で隠されて見た目では解らないが、尋常ではない力を必要とする大弩を用いることによつて鍛え上げられたその双腕。

その腕から放たれる槍の一撃は、漆黒の鎧を打ち砕いた。

通常の敵ならば、これで終わりだろう。

けれど、トラストは幽族であり、生身を持つ種族ではない。

故に、この程度で膝をつきはしなかった。

『吼えろ、哭獣』

穴の開いたトラストの腹部。

そこから、黒い狼が飛び出てきた。

霧のような靄でできた、アインウルフだ。

「僕に獣の攻撃は、通用しない……ッ！」

不意打ちではあるが、何かあると思っていたナーリヤは注意を払うことを怠っては居なかった。

そうして案の定出てきたのは、ナーリヤが狩り慣れた相手を模倣した存在。

その性質や動きは、その形を造ったトラストよりも遙かに詳しい。

「シッ！」

短く息を吐き捨てて、槍を回す。

体勢を低くした状態のまま頭の上で槍を回すことにより、飛び出したアインウルフの四肢を切り落とした。

ガウツ?!

それにより、哭獣は地面に降り立つ前に消滅する。

だがその隙に、トラストは辛うじてではあるものの距離を離すことに成功した。

『私の油断か……闘技大会を甘く見ていたようだ』

身を削って出した哭獣すらも切り伏せられて、トラストは秀囲気で苦笑する。

そして、油断無く自分を見据えるナーリヤに向き合った。

『幽族の騎士、トラスト。』

貴殿の力を見誤ったことを、謝罪しよう』

トラストはそう言うと、漆黒の重剣を腰の脇に構えた。

『ここからは、正真正銘“全力”だ』

そう短く宣言すると、トラストは一気に走り出す。

そして、ナーリヤよりもだいぶ離れた位置で、大剣を振った。

『哭風、烈黒！』

「なっ!?!」

トラストの二の腕。

肘から先がトラストから離れて、遠くに立つナーリヤに襲いかかる。

実態がないからこそできる、遠隔直接攻撃だった。

「くっ!」

『避けてばかりでは、終わらんぞ!』

今度は、ナーリヤが劣勢に立たされる。

激しく自身を攻撃する、漆黒の大剣。

それを受け流しても、カウンターが入る位置に取らすとはいない。

ザンッ

「くっ!」

振られた一撃が、ナーリヤの左手を斬り裂く、鎧の隙間に丁度入り込んだその一撃により、ナーリヤの腕から鮮血が舞い上がった。

例えここを切り抜けられたとしても、鎧を全て削らなければ勝てないと言われてしまえば、負けるのは体力に上限が存在するナーリヤの方だ。

このまま避け続けてばかりでは、なるほど勝利はないだろう。だからナーリヤは……賭に出る。

「せえいッ!」

『なにっ?!』

ナーリヤは大きく腕を退くと、助走をつけて槍を投げた。まさかそう来るとは思わず、兜を弾かれながらもなんとか避ける。

その再び生まれた隙に、ナーリヤはトラストに肉薄した。

『ぬう、だがもう武器は』

「先見二手」

腰から短剣を引き抜くこともなく、素手で肉薄するナーリヤ。

そんなナーリヤにトラストは、遠隔から一瞬で戻した腕を使つて大剣を振り下ろすが、その軌道はすでにナーリヤの脳内で描かれた道だった。

「双掌二撃！」

振り下ろされた大剣の腹に左の掌底をたたき込み、軌道をずらす。

一撃目で大地を抉らされたトラストは、咄嗟に剣を引き抜くことができずに固まった。

ナーリヤはそんなトラストの横から右足を主軸に背後へ回り込み、その背中に右の掌底を叩き込んだ。

ドンッ！

『我に打撃が聞くとでも思つたか！』

実態のないトラストに、打撃は効かない。

だがそんなことはナーリヤは、百も承知だ。

「【我らに主の、光あれ】」

トラストの背に叩き込まれた右の掌底。

その手のひらの中に収められた、銀のロザリオ。
ナーリヤの詠唱にロザリオは青い光を以て呼応し、トラストの身体を灼く。

「【Amen】」

ドオンッ！

『ぐあああああつっ！?!?!?!』

清浄なる青の炎が溢れ出し、幽族であるトラストの身体を呑み込む。

それは本来不可能とされた魂への直接攻撃であり、この世界にはない言霊の力だった。

『が、あ』

光が収まると同時に、トラストは膝をつく。

全身から煙を上げたまま動くことができずに、ただ大剣を支えに片膝で動きを止めていた。

『……なにをしたか解らんが、まさか指の一本すら動かなくなるとは、な。』

『こんなことは初めてだ、くくっ』

擦れた声で、トラストは背後のナーリヤにそう言った。

言葉の節々に宿る愉しそうな色に、ナーリヤは警戒を怠らない。

『身構えるな弓使い。』

『私の負けだ、誇れ……勝者たる戦士よ』

トラストの宣言とともに、会場が沸き上がる。

その歓声を聞いて初めて、ナーリヤはこれが観客の居る試合であることを思い出した。

ナーリヤの武器である“集中力”を極限まで高めていたため、周囲のことなど頭に入っていなかったのだ。

『準決勝勝者は　ナーリヤ!!ロウアンス!』

その声に、その音に、ナーリヤは漸く息を吐く。

そして、どこにいるかも解らないガランを思い浮かべて　闘志に燃える目で空を睨み付けるのだった。

選手用の観客席に戻ったナーリヤを出迎えたのは、千里だった。千里はナーリヤの姿を見つけると、子犬のように目を輝かせて近寄ってきた。

「すごいよナーリヤ！あんなすごい相手を倒しちゃうなんて！」

実態がない相手にどう立ち回ればいいのかなど、千里には解らない。だからこそ彼女は、こうして勝利を掴んで見せたナーリヤを、素直に賞賛していた。

「ははは、最後のあれが成功していなかったら、“ああ”はいかなかったよ」

「それでも成功してたんだから、すごいよっ！」

「うん……ありがとう、千里」

興奮する千里に、ナーリヤは照れたように笑う。

こうして彼女に喜んで貰えると、どうしてもだかナーリヤの胸には喜びの感情が広がっていたのだ。

「私も、負けてらんないね」

「あ……そっか、千里の相手は」

「うん」

千里は、ナーリヤの言葉に深く頷く。

彼女の相手は、短い間だが指示を受けた女性

ララだ。

「千里」

「うん？なに？」

思い詰めたような表情。

ほんの一瞬浮かべたそれを、ナーリヤは見逃さなかった。駆けることができる言葉など、あまり多くはない。

だからナーリヤは、千里の背を押す笑顔を浮かべた。

「思いつきり、やっておいで」

「思いつきり？」

首を傾げる千里に、ナーリヤは笑顔を浮かべたまま頷く。

その優しく力強い黒の双眸に、千里は自然と引き込まれていた。

「そう、ガッン！って」

「思いつきり、ガッン？」

「……あははっ、なにそれ？」

千里はナーリヤの言葉に、頬を緩ませる。

こんな笑顔を見せられて、こんな風に元気づけられてしまったら、もう不安だなんて言っていられない。

「うん、元気出た。」

「……私も頑張るよ、ナーリヤ！」

「うん、良かった。」

「……気をつけてね、千里」

互いに元気づけ合って、そして笑い合う。

もう大丈夫、戦える。

そう口ずさむ千里の心は、昨日よりもずっと晴れていた。

……そんな二人が、千里の試合が昼食を挟んだ後だと気がつくま

では、もう少しかかりそうだった。

十

女性部門三回戦第二試合。

それは、今日最後の行程だった。

東門の控え室で瞑目する千里は、脳裏に午前中のことを思い浮かべて、赤面していた。

「はあ、恥ずかしかったなあ」

散々決心して、さあ挑もうと思った。

だが、当然ながら試合はまだ後で、気がついたら生暖かい目でライアン達に目撃されていたのだ。

「でも」

それでも、その前にかけられたナーリヤの言葉。その言葉に、千里は確かに元気づけられたのだ。

「負けないよ、私」

そう呟くと、ゆっくりと立ち上がる。

挑む先は、曇り空の闘技場だ。

『東門選手、チサト〓タカミネ選手の入場ですつつつ』

テンションの高い声に促されて、闘技場に踏み出す。

白い砂を踏みしめながら歩く先には、ララの姿があった。

鎧の嵌められたドレスアーマーと、銀の細長い眼鏡。

その腕には、鈍色に輝く巨大なハンマーが握られていた。

『西門選手は、轟鎚烈風“ララ・ライラ〓ランタート”選手だあつ』

ララは一言も発することなく、ただただ無言で眼鏡を投げ捨てた。白い砂に銀の眼鏡が落ち、それを合図にレイニが声を上げる。

『それではでは……試合開始っ……！』

開始の合図。

それとほぼ同時とも言えるタイミングで、ララが飛び出してきた。下から持ち上げるような、ハンマーによる力ち上げだ。

「碎けなさい」

「碎けません！」

それを千里は、アギトを使って迎撃する。

だが、押し返す時にまったく力を必要としなかったということに、千里は戸惑いを覚えた。

「【我が腕は、大地を砕く】」

淡く銀色に輝く、ララの両腕。

千里がアギトでハンマーの力ち上げを押し返そうとした時、ララはハンマーを退いて力を流したのだ。

そしてそうやって流した力をそのまま、次の一撃に加える。

魔法の詠唱による肉体強化も、しっかりと施した上で。

「落ちなさい」

押された力を利用して、振り向くように回転。

そのまま、千里の頭上からハンマーを振り下ろした。

「っ………光の壁！ あうっ！？」

ド、ズンッ

頭上に降り注ぐ、鈍色のハンマー。

それを防いだ瞬間、千里は腹部に衝撃を感じて大きくはじき飛ば

された。

痛む腹をさすりながら見た先には、右足を振り上げたララの姿がある。

防がれたと解った瞬間、ララは隙ができた千里の腹に、蹴りを叩き込んだのだ。

「その程度？」

淡々と言い放たれた、言葉。

これで終わりだなんて思われてしまったら、千里としても面白くない。

強い相手と戦いたいと自分に技を覚えてくれた、ララ。

その恩義に報いたいという気持ちも生来の負けん気になり、千里は勢いよくアギトを掲げた。

「まだまだ！」

そうして、アギトに光の粒子を纏わせる。

どこまでも黄金に輝く、清廉な光だった。

「【吹きさすべ、黄金の風！】」

思い浮かんだ言葉を叫びながら、全身の回転を乗せた一撃を放つ。

その一撃は風を切り、黄金の刃となって飛翔した。

「軌道が、見え見え」

「【散！】」

その軌道を冷静に読んで、ララは避けようとする。

だが千里の叫びによりその刃は分裂し、小さな無数の刃となってララに襲いかかった。

「すごいけど、手品では私は倒せない 【轟咆】」

百を超えるとはいえ威力の弱まったその刃を、ララはハンマーを振る風で弾く。

魔法の込められた衝撃は、たったそれだけで刃を消した。流石に消しきれないものもあつたが、白銀の魔法が込められたララの身体は城砦よりも頑強で、抜くことはできない。

「っ」

そうして千里に視線を向けて、そして僅かに目を瞪る。

先ほどまで立っていた場所に千里が存在せず ララは咄嗟にハンマーで頭上に盾を造った。

「はああああああっっっ！！！！」

ズドンツツツ！

「ぐっ」

ララを中心に、大きな砂埃が舞い上がる。

空高く跳んだ千里の、落下速度を利用した強力な攻撃だった。

白い砂がララの身長のご二倍ほども沸き上がることにより、その威力を表現していた。

「【バースト！】」

「っあ！？」

アギトから更に光が溢れ出し、威力を増させる。

「ララはその力をなんとか地面に流すと、肩を上下させながら大きく後退した。」

「ふ、ふふふ。」

「いいわ、すごく……楽しんでそうね。」

「そういつて、ララは笑みを浮かべる。蠱惑的で、そして妖艶な笑みだった。」

「もつと貴女を感じさせて、チサト。」

「言われなくても、こんなものじゃ終わらないよ！」

「千里は、今度は自分で砂を蹴って砂埃をあげた。そして、極限まで体勢を低くして突進をする。」

「【我が鎚は、空を割る】」

「そこへ、ララは更に詠唱を重ねる。よく響く流麗な声が魔力を含むと、鈍色のハンマーが白銀に輝いた。」

「【轟鎚割閃】」

ズドンッ

「縦一直線に振られた、鎚。」

「その一撃は衝撃波を起こし、ハンマーを振り下ろした地点から一直線に斬撃を発生させた。砂地を割って進む衝撃波は、非常識の一言に尽きるだろう。」

「だが非常識な力を持つのは、千里もまた同じだ。」

「トラストの重い斬撃に、ナーリヤは、確か……」

光の粒子がふわりと舞い上がり、千里を包む。

一時も見逃さないように注視していたナーリヤの試合。

その一幕を思い浮かべて、千里はアギトを背負いながら光の剣の形を変える。

「ふっ」

短く息を吐いて、手に持った“光の槍”を構える。

そして、槍の腹で受けながら、衝撃波を完全に後方へ流した。

「っ【我が足は、地を揺るがす】」

足止めすることも叶わず避けられたことに、ララは僅かだが驚きの表情を浮かべた。

そして咄嗟に詠唱を重ねて、白銀に輝く足で強く地面を叩く。

ドンッ

先ほどの攻撃が一直線に集中して放たれたものならば、こちらは地を這って周囲全てに衝撃波を発生させるものだった。

だが、地を這うその一撃も、跳んでしまえば無効化できる。

「はあっ！」

極限まで低くされていた体勢を、足のバネで空へ持ち上げる。

衝撃波は普通に跳んだだけ、千里の身長程度までならば効果範囲

という強力な技だ。

だが千里の脚力は、その身長のおよそ四倍ほどの高さまで、千里の身体を持ち上げた。

「そこでは、“的”よ」

身動きのとれない空中。

そこへ舞い上がった千里の姿を、ララは冷静に見ていた。空からただ落ちてくるのであれば、冷静に迎撃すればいいのだ。

「そんなことは、解ってるっ！」

だから千里は、体勢を変える。

空中に作り上げた黄金の足場。

それに乗って、ハンマーを構えたララの背後へと跳んだ。

「打ち砕け！」

「なっ!？」

急な軌道変換に、ララは追いつくことができない。

そしてその背中に、千里は槍を投げる。

ナーリヤがトラストにしたのと同じように、光の槍がララへ向かって飛来した。

「ッはああっ！」

ミシミシと身体の骨が悲鳴を上げる。

それを実感していながらも、ララは無理な力で振り向いて光の槍を迎撃した。

ヒュンッ

光が霧散すると同時に、耳に届く風切り音。

ララは唇を噛みながら再び背中の方へ軌道を変えて、ただ直感でハンマーを振り抜いた。

ガインッ

「くっ……!!」

飛来してきたのは、モノクロカラーの大剣。

光の粒子を纏ったアギトが、トラストがやったように遠隔操作で振られてきていたのだ。

その攻撃をなんとか弾くが、同時にララの手からハンマーが落ちる。

「吹き飛べ」

「っー!」

その背中に、千里は両手を当てた。

先の連撃は、ここまで肉薄するためのブラフだったのだ。

千里の両手から溢れ出した、黄金の輝き。

観客席から見ることのできない千里のその双眸は、刹那の間黄金に輝いていた。

「イル＝リウラスー 光より顕れる者」

ドンッ

「かはっ!?!」

自分の攻撃が通らないことは、魔法の刃を無数に放った時に解っ

ていた。

ならばどうすればいいか……そう考えた千里は、咄嗟の思いつきを極限状態の中で“実現”させてみせたのだ。

光の閃光が、一瞬煌めく。

手から発せられたその一撃は全ての防御を貫通し、ララの“内部”へ溶けきった。

そうして……ララの身体が、崩れ落ちる。

黄金に輝いていた千里の目に栗色の光が戻り、それと同時に選手にも唯一聞こえる実況である、勝利宣言が響き渡った。

『ななななんとっ！』

あの、ララ・ライラ選手を打ち破り、

勝利を収めたのは “チサト” タカミネ選手だあッッッ
！……！』

沸き上がる会場の中心で、千里は荒くなった息を整える。

意識を刈り取ったとはいえ、ララは無傷。

集中しすぎていて記憶が曖昧になっていた千里は、それを確認して安堵の息を吐いた。

『今大会の決勝戦進出者が、これにて出そろいましたっ！』

最後の出場決定者に、みんな、歓声だアアアアアアアア……！』

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！』

そのあまりの音量に耳を塞ぎながらも、千里は勝利の喜びに、小さく頬を綻ばせる。

これで、決勝戦の選手は揃った。

男性部門の決勝は、ナーリヤとガラン。

強敵を打ち破ってきたナーリヤと、当然のように勝ち上がってきたガランのカードだ。

女性部門の決勝は、千里と……フィオナ。

全力を尽くして駆け上がってきた千里と、決勝までほとんど手の内を見せることがなかったフィオナのカードである。

試合を終えた直後から、急に降り出した雨。

その暗い空に映し出された、最後の試合のトーナメント表。

それを栗色の瞳に刻みつけるように、千里は鋭い目で睨み付けるのだった。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 双黒の円舞／黄金と轟鎚（後書き）

闘技大会編も、残すは決勝戦のみ。

間に一話挟み、決勝戦は前後編で書きたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございます。次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 一時の安らぎ

豪風と、強い雨。

特殊な結界が張られる闘技場は、雨天でも試合可能だ。

しかし、決勝戦がそれでは縁起が悪いと、魔法使い達が総力を挙げて雨雲を退ける間の一日が、休日となった。

その間にできることなど、ほとんど無い。

そうして暇を持て余していた千里は……何故だかライアンの家の厨房を借りるに至っていた。

「どうして、こうなったんだらう？」

「どうしたの？」

「な、なんでもないよっ」

隣で同じくエプロンを着ける、ララの姿。

戦いを経て、この展開は予想できるものでは無かった。

そうして千里は、ゆっくりと思い浮かべる。

こんな状況になった、その経緯を。

事の発端は、ジツクだった。

よく騒動を引き起こす彼が、厄介ごとを持ち運んできた。

……なんてことでは、無かった。

「はあ………」

貴族など立ち寄らない宿屋。

そのロビーでため息を吐くのは、ライアンに連れてこられたジツクだった。

「はあ………」

あからさまに元気がない様子に、自分の部屋から出てロビーに降りてきた千里は、首を傾げる。

そして、千里よりも早く起きてこの現状を見ていたのであろう、苦笑を浮かべたナーリヤに問う。

「どうしちゃったの？あれ」

「あ、はは。休日ができて時間を置くことになって、思い出したみたいなんだ」

「思い出したって……ああ、考えないようにしてたんだね、ジック」

そう、ララの結婚条件である。

相手が悪かったとはいえ、一回戦敗退。

その上三回戦でナーリヤが打ち破ったとあれば、“相手が悪い”など、ジックにとってはなんの慰めにもならないのだ。

「ああ、チサト、ナーリヤ」

「ライアン……」

憔悴した表情のライアンが、千里達に声をかける。

ジックが元気がないのと同様に、彼もまた元気がなかった。

「どうにもジックがああ調子では、俺も調子が出ないようだ」

ライアンもまた、二回戦でナーリヤに負けている。

これはジックよりはまだ“相手が悪い”といえるのだが、落ち込むジックを慰める内に、気持ち伝染したようだ。

はた迷惑な話だった。

「どつすれば、元気づけられるだろう？」

そういわれてしまえば、一緒に考えない訳にはいかない。
なにより、あのジックがここまで大人しいと、千里達も調子が狂
う。

「男の子を元気づけるには……ララさんの手料理、とか？」

小さく零した、千里の声。

それを、ライアンとナーリヤはしつかり聞き取っていた。

「なるほど……好いた相手の料理ならば、元気づけるには一番か」
「食は何者にも勝る特効薬になり得るって、爺ちゃんが言ってたな
……」

すっかり乗り気になって、ライアンとナーリヤは頷き合う。

けれど、千里はその様子を見て慌て始めていた。

「え、あの、その」

真剣にジックの好みの味について話し出した二人に割って入れず、
千里は両手を振って戸惑う。言ってみたはいいが、腕を磨くこと以
外に無関心なララが、簡単に料理を作ってくれるとは思えなかった
のだ。

「厨房は俺の家のもので充分だろう。」

ナーリヤはジックから、苦手なものなどを聞いておいてくれ」
「わかった。」

それなら千里は、ララさんに話しをしておいて」

「へっ？」

千里は、どうやって約束を取り付けるんだろっ、などと他人事のように考えていた頭を停止させた。目を見開いて次の句が唱えられず、ただ固まるだけとなってしまった。

そしてその一拍が、致命的な隙となる。

「ねえジツク、あのさ……」

「それでは俺はいったん戻って準備をしてくる。

姉上は修練場にいるはずだから、そちらは頼んだぞ。チサト」

ナーリヤもライアンも、それぞれ行動を開始する。

ナーリヤはジツクを外に引引っ張っていつてしまったため、その場に残ったのはチサト一人となってしまった。

「あーっ、もうっ！」

怒ってみても、誰もいない。

そのことに少しして虚しさを感じた千里は、とぼとぼと肩を落としながら宿を出た。

その際に、光の粒子を薄く纏って雨を防ぐことも、忘れない。

「どうやって話せば良いんだろっ？」

「というか私、昨日戦ったばかりなのに……」

まだ、試合の後から一度も顔を合わせていない。

それに気がつくのと、どうにも気まずさで足が止まってしまった。

「でも、どう考えても退けないよね……」

虚ろな目で、ぼんやりと遠くを見る。

そして頬を引きつらせながら、千里はララをどろやちって誘つか考えるのだった。

そうして歩いて行く千里の後ろ姿を、ナーリヤは振り返って見つめていた。

「これが切っ掛けになればいいけど……」

ララに勝ったことで、関係がぎくしゃくする。

そんなことはララも千里も望んではないだろう。けれど、なにか切っ掛けがなければ、踏み出す先も見つからない。

「頑張つて、千里」

ナーリヤはそう小さく零すと、ジックに話を聞くために、踵を返した。

決勝戦以外に試合を残していないためか、修練場は閑散としていた。

その賑わっていた名残もない寂しげな空間で、ララは一人鎚を振るっていた。

鈍色のハンマーを肩に担いで、フルスイング。

すると白い砂が轟音と共に舞い上がり、空に純白の道を造った。

魔力で身体を覆っているため、身体が濡れることはない。

けれども、千里の光の粒子のように寒さまでは防げないため、このままでは体調を崩してしまう危険もあった。

「いた……」

そんなララの姿を見つけて、千里は足を止める。

何を話せばいいのか、今更ながらに解らなくなってきた。

要件だけ告げればそれで良いのかも知れない。だけれども、そんな淡泊なやりとりで終わってしまうのは、いやだった。

「……チサト？」

「あ」

声をかけようと口を開いた時、先にララが千里に気がついてしま

った。

そのことに気まずさが増長されて、千里は開きかけた唇を閉じて目を瞑った。

「こんなところで、どうしたの？」

敗者に何の用だ。

そう告げられている気がして、千里の心は萎縮する。

それでも、このままでは嫌だと自分に言い聞かせて、千里は今度こそと口を開いた。

「あの、ララさ」

「待って」

だがその勇氣は、ララに止められた。

ララに止められたことで口を噤んで俯く千里に、ララはゆっくりと近づく。

その足取りは……軽やかだ。

「戦いを通して、貴女の信念は伝わったわ。

心を賭して刃を交えたのならば、それはもう“友”といっても良
いはずよ」

「え……？」

ララの言葉に、千里は勢いよく顔を上げる。

思っても居なかった言葉の数々に、思考が追いつかず、千里はただ立ち竦んでいた。

「それなら、敬語なんて必要ないわ。

対等でありたいと思うのが、私だけでなければ、ね」

「わ、私もララさんと、友達になりたい！」

僅かに小さくなった、ララの言葉の終わり。
それを否定するものと、千里は声を荒げた。

「“さん”はいらないわ」

「え、でも」

ため息を吐きながら首を横に振るララの様子に、千里は戸惑う。
生まれてこの方、年上の人を呼び捨てにしたことなど無いのだ。
ナーリヤは、年上というのとは少し感じが違ったので、数えては
いないのだが。

「ララ、よ」

「えーと……」

「ラ・ラ」

何度も告げるララに、千里は金魚のように口をぱくぱくと開閉し
た。

そして、じっと目を見つめられて、千里はついに顔を逸らす。

「うう……ララ」

「よろしくね、チサト」

「はい……」

結局押し切られてしまい、千里は肩を落とす。
そうして隠した顔に、嬉しそうに笑う顔を隠しながら。

「それで、なんの用だったの？」

「あっ！」

本題をすっかり言い忘れていたことに気がつき、千里は大きく声を上げる。

「そつだ、料理！」

そして、過程を飛ばしてキーワードだけを先に言ってしまった。

結局、どうやってジツクを元気づけるために協力を請うのか、考えていなかったのだ。

ララの性格から考えて、ジツクが落ち込んでいるから作って、と言われて作るとは思えない。

「料理……が、どうしたのかしら？」

「えーと、うーんと」

千里は顎に手を当てて、眉を寄せる。

閃きを求めて呻り声を上げる姿は、滑稽だ。

そんな近寄りがたい姿を前にしても、ララはじっと返事を待っていた。

「ラ……ララと一緒に料理が作りたいつ！」

結局、口から出たのはそんな言葉だった。

一緒に作りたいつてなんだ、とか。

そもそもこの世界の調理器具で自分が料理できるのか、とか。

そんなツツコミを自分自身にし続けながら、千里は頬に朱を差し、目を瞑った。

「……そつ」

対してララは、冷静に返事をしていた。
だが、声には出ていないものの驚きはしたのか、目を瞠って一拍
静止していた。

「や、やっぱり」

「いいわ」

「へっ？」

今度は、ララが驚く番だった。

驚いて肩を跳ねさせた千里は、目を開いてララを見た。

ララはその銀の瞳をどこか楽しそうに眇めると、了承の言葉を繋
げる。

「作ってみましょう、一緒に」

「あ……うんっ。」

と、食べる時にナーリヤやジック達も呼んで良い？」

「そうね、ええ、構わないわ」

ララは、一步近づくことができれば、積極的な女性だった。

そうして、ぎりぎりの所で本題を思い出した千里は、確認が取れ
たことに安堵の息を吐く。

ここで断られていたら、流石に申し訳ない。妙な妬みでジックが
元気になる可能性もあったのだが。

「それは、考えなくて良いかも」

「チサト？」

「な、なんでもないよっ」

千里は聞かれていたのかと心配し、咄嗟に首を振って誤魔化す。

そして二人は、自然な足取りでランタート家へ向かうのだった。

十

ランタート家の厨房は、最新の発想を元に魔法職人の手によって造られている。

庶民どころか下流貴族でも手が出せない、高級な厨房。

火の調節ができるコンロや、冷蔵庫など、現代に近いハイテクな設備になっていた。

「これなら、なんとかなるかも」

そう呟いてララと厨房へ入っていく千里の姿を、ナーリヤとライアンは見送る。

ちなみに、ジツクはすでに席についてそわそわと落ち着き無い様子で待機をしていた。

「いやあ、ララさんをどうやって説得するか、なんて全く考えて無かったよ」

「ああ、俺もだ。チサトはすごいな」

ナーリヤの言葉に、ライアンはしみじみと頷く。

ララと千里が話せる機会を作りたい、と千里の呟きに乘ったナーリヤだったが、肝心なことは完全に念頭になかったのだ。

「しかし、これで

……ナーリヤもチサトの手料理を食べることができるということか」

「そうみただね。

……って、え？あー、ライアン？」

ライアンの声に思わず頷いたナーリヤだったが、直ぐに言葉を止めてライアンを見る。

ライアンは「計画どおりということか」などと人聞きの悪いことを呟きながら、ジト目でナーリヤを見ていた。

これでは、ナーリヤがジツクを“ダシに使った”ように聞こえてしまう。

「い、いやいやいや！

そんなじゃないからね？！」

それで頼むのは、あまりに邪すぎる。
楽しみすぎてジックの耳に入らなかつたのは幸いだが、だからと
いって放っておけることではない。

「僕はただ純粹に」

「チサトの手料理が食べたかつた、と？」

「そうそう……じゃなくて！」

ライアンは、話しの流れで思わず頷いてしまったナーリヤを見て
ため息を吐く。

いい加減誤解を解かないと、と慌てるが、あまり強くは言えな
かつた。

……なにせ、千里の手料理を望んでいるかと問われれば、首を縦
に振ってしまいそうだったのだから。

「くくつ、すまんすまん。」

つい冗談を言ってみたくなくなってしまったただけだ」

口元に手を当てて肩を震わすライアンに、ナーリヤは安堵する。
そして、本気でなくて良かったと、苦笑ともに大きく息を吐いた。

「な、なんだ。そつか……よかつた」

「普段からああも見せつけられては、な。」

ちよつとした八つ当たりだと思ってくれて構わんよ」

「……反省します」

ライアンの言葉にこれまでの行動を振り返り、ナーリヤは小さく
肩を落とした。

八割方千里が原因だが、二割くらいはナーリヤにも非がある。

ライアンの誤解の元はほとんどが事故なのだが、今更言い訳することでもないのだ。

「さて、あの二人は何を作るつもりなのか」

「うーん、千里、大丈夫なのかな？」

千里の世界の厨房環境は、本人から聞いていた。

そのためナーリヤは、この世界の厨房でどうにかなるのか、心配していたのだ。

「君たちは、本当に仲が良いのだな」

そういうライアンの目は、先ほどのようなからかいの目ではない。ただ純粹に、二人の仲の良さを讃えていた。

「二人は、どこで出会ったんだ？」

ライアンは、ナーリヤに席を勧めながら椅子に座る。

ナーリヤは促されるままにライアンの正面の席に腰掛けると、出逢いの時を振り返った。

「森で倒れていた彼女を、助けたんだ」

「森で、倒れていた？」

「うん」

アインウルフの縄張りで倒れていた、千里の姿。

幼い少女だと勘違いしていたことを今更ながらに思い出して、ナーリヤは苦笑した。

「訳あって故郷に帰れなくなった彼女と、故郷を知らない僕。

互いに故郷を探すために、村を出て旅に出たんだ」

黒帝を討ち斃して見上げた、満天の星空。

その夜の天蓋の下で誓った友情を忘れたことなど、一度もない。

「君とジックは、どんな出逢いだったの？」

「俺とジック、か」

ナーリヤの問いに、ライアンもまた振り返る。

横目でジックの方を見ると、幸いなことに彼はライアン達の会話に耳を傾けては居なかった。

「俺もジックも、学院に通っていてな。」

同期で受けている講義も似通っているため、元より接点はあった」

騎士にせよ宮廷職にせよ、国の役職を目指すために学ぶ場所。

それが、仕官養成学院 通称“学院”である。

「始めは互いに無関心だったのだが、切っ掛けがあつて友情を結ぶに至ったのだよ」

「切っ掛け？」

ライアンは「ああ」と、どこか楽しそうに笑いながら頷いた。

そして、使用人が運んできた紅茶を傾けて、唇を濡らす。

「学院の地下には魔獣の住む“遺跡”があつてな。」

学院に通う生徒達は、ここで時折実戦演習を行う」

学んだ知識を試すために、地下遺跡に潜ってチームで行動する。

指定された範囲内を探索し課題をこなすという、伝統的な授業だ

った。

「そのチームの中にジックが居てな。
あるうことか、俺とジックだけ迷子になってしまったのだよ」

そういつて頬を掻くライアンは、恥ずかしいのか小さく目を伏せた。

情景を思い出しながら語っているため、羞恥の感覚もひとしおだ。

「始めはどんな人間かよくわからなかった。

だが、一緒に出口を探す内に、捻くれてはいるが案外と“良いやつ”だと感じた」

それが馴れ初めだ。

そう語るライアンの表情に、ナーリヤは頬を緩ませる。

懐かしそうに、そして楽しそうに語るライアンの顔には、柔らかな笑みが浮かんでいた。

「ナーリヤっ！できたよーっ」

達成感に満ちた笑みを浮かべた千里が、ララを伴って食卓に入る。その手の上に置かれた銀のトレイには、キツネ色に焼かれたミートパイが乗っていた。

食欲をそそる芳しい香りが、食卓に広がる。

「エルファアのミートパイ」

「うんっ。牛っぽい肉があって助かったーっ」

ララが淡々と料理名を述べて、それに笑顔の千里が続く。

エルファアとは、緑色の体毛を持つ森に住む牛のような動物のこ

とだ。

調理済みのものを千里はララから少し分けて貰い、牛と豚の合い挽き肉に近い味だったことからミートパイの調理を提案したのだ。

「これからも、時折作って見るのも、良いかもしれない」

ララは予想以上に出来が良かったことに満足して、ほんの僅かに頬を緩ませながらそう言った。千里も、それに笑顔で頷いている。

「ララの、手料理……」

小声で唾を呑む、ジック。

その期待で爛々と輝く瞳を伺ったライアンは、小さく苦笑した。

「姉上、早速頂いても構わないだろうか？」

「うん」

「どっぞどっぞっ！」

頷いたララに続いて、千里も促す。

すると、ジックは普段よりも強い口調で神への祈りを捧げた。

「おおっ………宮廷料理にも負けていない！」

そう喜ぶジックの姿に、ララも心なしか嬉しそうだ。

もちろんジックの褒め言葉は過剰なのだが、調理者込みで本人はそう感じているのだから、文句は込められようもなかった。

「それじゃあ、僕も」

ジックに続いて、ナーリヤも切り分けたミートパイを口に運ぶ。

さくつとした食感に、口の中で広がる芳香な味わい。
料理屋の、というのではなく、家庭でしか味わうことができない
暖かみのある味だった。

「うん……おいしいよ、千里！」

「ほんとっ？」

「そっかー、よかったーっ」

味見はしたけれど、やはり心配だったのだろう。

千里は安堵の表情で胸をなで下ろすと、ナーリヤの隣に腰掛けた。

「お母さんに習っておいてよかったあ」

胸の前で手を合わせて、千里はそういつて笑う。

その表情は楽しそうで……そしてどこか、寂しげだ。

「それなら、早く帰って“ありがとう”って、言わないとね」

ナーリヤはそう、優しく微笑む。

帰れるよ、だから帰ろう、とただただ暖かい声をかけた。

「うん……うん。」

「そうだね。早く帰って、“ごめんね、ありがとう”って言わない
とっ」

前向きに笑う千里に、ナーリヤは頷く。

キツネ色のミートパイと、楽しそうな笑顔に囲まれて。
ただ、ただ、絶やさず笑顔を浮かべていた。

ひどい雨の、昼時。

翌日に控えて、楽しそうに食卓を囲む。

決勝戦は 明日。

因縁の終止符を目前にして、ナーリヤは日常の中で決意を噛みしめるのだった。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 一時の安らぎ（後書き）

第六章も残りはおと二つ。

決勝戦を前後編で行い第六章を終えたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 旭日の決戦 前編

昨日の雨雲が嘘のように晴れ渡った、雲一つ無い快晴。

人が集うと必ず歓声に包まれていた闘技場は今、しんと静まりかえっていた。

『古代の皇帝アクルイトは、民への娯楽の場としてこの闘技大会を始めました』

朗々と響く声は、レイニのものだ。

普段の過剰なテンションはなりを潜め、ただ淡々と演説をしていた。

『その後代々と年月を経て、何時しか名誉と栄光を勝ち取る場となった、この大会』

物音一つしない闘技場。

響き渡るレイニの声。

その場集う誰もが、興奮を抑え込んで拝聴している。

『今やノーズファンへの数少ない入り口としても作用するようになり、

そこには舞台劇にまでなった出来事も、数多くありました』

司会席で座っていたレイニは、淀みない動作で立ち上がる。

そして、静けさが壊れそうなほど張り詰めた闘技場に、大きく声を轟かせた。

鉄格子の嵌められた窓から、一条の光が差し込む。

その煌びやかな陽光が、瞑目するナーリヤの鎧に反射して、僅かに黒く輝いた。

森の主の素材で鍛え上げられた漆黒の弓を、大きな鎧で覆われた左手で掴むと、その黒の弦に遮られた光が陽炎のように揺らめく。

その揺らめきの向こう側で、ナーリヤは静かに目を開いた。

「爺ちゃん……必ず、勝つよ」

溢れ出した意志が、声となって喉から零れる。

矢を番えずに右手で弦を引くと、闘技場へ続く門に向けて、空の矢を放った。

イイイイン

空気の震えが、空間に伝わる。

聞き馴染んだその音が、ナーリヤの心を静かに落ち着かせた。

『男性部門決勝戦、東門選手　　ナーリヤ⇨ロウアンス!』

響いてきた声に、ナーリヤは一步を踏み出す。
セアツクのナイフ、黒帝の弓、クリフの短剣、教会騎士のロザリ
才。

恩人の想い、仲間達の餞別、絆の証、託された異界の感情。
その全てが、ナーリヤの“一步”を強くする。

『続いて西門選手は　　ガラン⇨テルクス!』

白い砂を踏み佇む、ナーリヤ。
その正面の門、冷たい廊下の奥から現れるのは、灰褐色の暗闇だ
った。

重厚な右腕と奇妙なギミックのついた左腕。
灰銀のガントレットとグリーブ以外には、一般兵よりやや上等な
軽鎧のみを身につけていた。

『最優と最高。

至高と究極。

完全と完璧。

世界最高峰と呼ばれし弓使い、ロウアンスとテルクスの終わりな
き競合。

挑むべきは目の前の強敵か、世界よりもたらされた限界という名
の壁か。

今ここに、伝説は再現される……!!』

アークの声が響き渡り、闘技場が沸き上がる。
ナーリヤは荒れ狂う心を一息で落ち着けると、余裕の表情で構え

るガランを見た。

その熱く、それでいてどこまでも冷たい視線に、ガランは愉しもうに笑ってみせる。

そして、獰猛に、荒々しく。

己の感情を迸らせた。

『決勝戦……開始!』

アークの声は、それきり聞こえなくなる。

遮断された音声はナーリヤ達の耳に届かず、二人は己達だけの世界で睨み合っていた。

彼らの耳に届く観客の声も、その集中力で静かに遮られているのだ。

「先見二手」

先手必勝と、ナーリヤは素早く矢を番える。

鏃を向けるのは上空……まずは、牽制だ。

「二拍双雨!」

一息二射、四矢の雨がガランに放たれる。

ガランはそれをあくまで冷静に、躲す。

肩に降った一撃を半身になって避け、避けた先に降った矢を拳で弾き、残りの二本も同様に弾いて叩き折った。

直線的な一撃でない以上、視線を上に向ければある程度の軌道は読める。

それ故に、動きを見通す一撃を、淡々と回避して見せたのだ。

だが、その動作は、ナーリヤに次の手を打たせる隙となる……。

「先見二手、二射必中！」

「ハッ」

……はずだった。

高速で飛来する二本の矢を、ガランは冷静に見る。

いや、ガランが見ているのは、矢ではなく　ナーリヤの“動き”だった。

「“過視”」

流れるような動きで、前に出る。

弧を描きながら手を動かし、まるでナーリヤの“先見”のように、飛来する位置を読んで矢を弾いた。

「なっ」

「今度は、俺の番だ」

獰猛な笑みと共に言い放たれた、宣言。

足に力を入れて疾走するガランの姿は、森林を駆けるアインウルフを連想させる。

異常なまでのプレッシャーを放ちながら走る姿に、ナーリヤは齒がみしながら弓を腰に提げて槍を構えた。

「槍で俺に、敵うとも思ったか？」

接近してきたとはいえ、まだガランは槍の間合いにいる。

中距離に立つガランは、拳をナーリヤに当てることはできない。

ならば、まずは槍で迎撃すればいい。

「シッ！」

短く息を吐いて、鋭く槍を突き出す。

その動きを、ガランはよく見ていた。

焦点を一カ所に集めずに、全体を見るように。

「過視」

短く紡がれた言葉。

その声が、今度こそナーリヤに届く。

そして、その言葉をナーリヤが理解するよりも早く、ガランが動いた。

柳のような、柔らかな動き。

圧倒的な技術と経験が込められた鋭い槍の一閃を、ガランは焦点の合わない目で“見極める”と、半身になって避けて右手で槍の柄を掴んだ。

「くっ?!」

「捕まえたぜ」

力を込めて、腕を引く。

筋力ではガランに負けるナーリヤは、あっさりとガランの方へ重心を許してしまう。

その前のめりになった身体の頭部に向けて、ガランの左手が突き出された。

「ッ先見一手！」

「射抜しやぼつ！」

左手の重厚なガントレット。

その甲の部分の出っ張りがきらりと煌めき、ナーリヤは危機感を覚えて首を捻った。

ダンッ！

「っ！？」

首を捻ったナーリヤの、右頬。

目の真下を、銀の光が鋭く抉る。

頬骨を削られる勢いで放たれた一撃は、白い闘技場に強烈な真紅を吹き散らした。

「これを避けるか……だがまあ、“俺の番だ”って言っただろ？」

痛みで右目を閉じるナーリヤの、右頬。

そこへ、銀の籠手が鈍く輝いた左腕が、鋭く放たれる。

脳を揺さぶることを目的とした一撃に、ナーリヤは槍を放して飛び退くことで躲した。

「得物を離して大丈夫なのか？」

ガランは左腕を引きながら、槍を後方に放り投げた右腕を戻す。

その勢いを保ったまま、ナーリヤの顔面に右のストレートを放った。

「くっ！」

ガギンッ

その一撃を、腰から引き抜いた短剣で防ぐ。
クリフから譲り受けた、武器だった。

「自分の得物に自信が持てないヤツは、そうやって予備の武器を沢山持つ」

ガランは嘲笑を浮かべながら立て続けに左を振る。

左右を交互に、それでいて緩急つけて放たれる連撃に、ナーリヤは焦りを覚えていた。

「ロウアンスの名を持つ者は、何時の時代も臆病者ばかりって訳だ！」

ズンッ！

「ぐあっ?!」

拳に気を取られていたナーリヤの、腹。

そこへ、鋭い蹴りが放たれる。

その重い一撃にナーリヤの身体は浮き上がり、遙か後方へ飛ばされた。

「親父の申し出に怯えて逃げた、セアック〃ロウアンス。」

同じ名字だと期待してみれば……ククッ、同じ“臆病者”とはなあ？」

「なん、だと……」

気泡と共に僅かに血液を吐き出しながら、ナーリヤはふらりと立ち上がる。

再び戻ってきた弓の間合いだ、素直に喜べる体調ではなかった。

「再戦申し込みから逃げて、王国まで行ってみれば騎士は辞任。」

どこかの村に引っ込んで、やることは隠居生活か？」

ガランは右手で目元を覆い隠しながら、大きく笑う。

「弟子の育成に時間を注いだのかと思えば、やってきたのは臆病者」
笑い声を止めて、ガランは右腕を振り払うように、顔を顕わにする。

そこに浮かぶのは笑みではなく 煮えたぎるような“憤怒”の表情だった。

「結局“セアツク”ロウアンス”ってヤツは、

“無駄な時間”を他人に注いで、のんびり隠居生活を楽しんでいたってか？

親父を……テルクスを嘗めるのもいい加減にしろッ！」

怒りの声。

その声に、その感情に、ナーリヤは俯いた。

そんなナーリヤの仕草に、ガランは舌打ちをする。

演技ではない、失望の怒りと共に。

「無駄な、時間？」

腰に剣をしまって、弓を抜く。

その巨大な弓を携える左手には力がこもり、ミシミシと軋んだ音を放った。

「妻の……“ミレイア”の療養のために、森へ入り」

ガランは、そんなナーリヤに気がつかない。

向かってきたのを叩きつぶす。

それで、この“つまらない”仕合を終わらせようとしていた。

「栄光も名誉も全て捨てて、治療法を探し」

腰に当てた万能ナイフ。

セアックからの形見であるそのナイフが、ナーリヤに彼の“記憶”を垣間見せる。

「最後の一瞬まで諦めず、叶わなかった後も村を護り続けた」

絶望も、悲しみも。

全て味わったその後で、セアックは失意に埋もれながらも村を護った。

そうして、彼は見ず知らずの少年をも、救ったのだ。

「爺ちゃんの生、その時間が無駄だったなんて、あるはずがない」

無駄ではない。

無駄では、なかった。

「その証拠を、見せてやる」

それが証明できる方法は、ただ一つ。

生涯最後に自分の全てを伝えた存在による、戦い。

「あ？」

ガランは、矢を番えたナーリヤを、見る。

明らかにやる気は感じられないが、手は抜いていなかった。

セアツクの“先見”に対抗すべくテルクスが二代にわたって編み出した、奥義。

相手の動作や呼吸から、放たれた後にその軌道を見極める。情報処理能力と判断力と瞬発力が無ければ扱うことのできない、一つの究極。

それが、ガラン＝テルクスの“過視^{かし}”だった。

「先見三手」

身体に流れ込んでくる情報。

経験と記憶と記録と、感情。

その全てを噛み砕き、ナーリヤは矢を番えた。

「三撃必殺！」

限界まで引き絞られた、対大型魔獣の大弩。

その一撃は空を切り、ガランよりも五歩ほど前に突き刺さった。

その軌道を“視て”いたガランは、その場から動くことなく首を傾げる。

ドンッ

土煙と共に、砂地の下の大地が抉れる。

大きな塊が空中へ浮かぶことで、ガランはそれを“派手な目くらまし”と判断した。

「結局小手先に走るってか？」

だが、ガランはなにも“目”だけで判断している訳ではない。空気を感ずる触覚や音を拾う聴覚も、過視の判断材料の内だった。

「……一直線か」

まだ、岩が宙に浮いたまま。

落ちきつてもいないというのに接近してくるのには、驚きがあった。

今までと比べてあまりに早く、また矢に頼った一撃を放つ訳でもなかったためだ。

「その速度じゃ、軌道は変えられねえぜ？」

ガランの脳裏には、すでに正面から叩きつぶされるナーリヤの姿があった。

だが その予想は、覆される。

「あああああああつっつ！……！」「
「つっ！？」」

闘技場に響き渡るような、大声。

それにより、研ぎ澄まされていた神経がかき回される。

集中しようと耳に神経を集めていたのも、それに影響されていた。

「チツ、過視を防ぐか！」

だが、今更軌道は変えられねえだろうが……！」

そう言い放ち、ガランは右手を突き出す。

それだけで、ナーリヤは顔面を潰されて、その場に崩れ落ちる……はずだった。

「壁へき駆か」

浮き上がった、大地の破片。

岩を壁に見立てた疾走。

ナーリヤの右腕に持たれた短剣が伝える……クリフの、技。

「疾しっせん閃せん」！

空を駆ける、移動術。

その複雑な動きで、ナーリヤはガランの背後を取る。

「せいッ！」

「づあっ?!」

振り返ることができなかった、ガランの左腕。

そこを、すれ違い様にナーリヤが決る。

聴覚麻痺による過視の妨害と、壁駆疾閃によるクロスボウの使用封じ。

これで、“二手”だ。

「チイツ!？」

「はあああっ!?!」

懐でコマのように回転し、短剣を振るナーリヤ。

その一撃を回避するために、ガランは後方へ跳ぶ。

と同時に、ナーリヤは短剣を放り投げて、弓を構えた。

ガランが着地して再び踏み込めば、防げるほどの近距離。

矢が威力を出せるギリギリの距離とはいえ、それは明らかに“悪手”だった。

「バカが、功を焦ったか！」

着地してすぐに踏み込めるように、前方へ意識を集中させる。

だがそれこそが、ナーリヤが引き出したガランの“油断” 三
手目だった。

「ウルド!! ガル!! バリスタ― 闇を穿つ大弩”」

「もらっ……… たっ?!」

着地をした、その瞬間。

足の下に転がっていた“槍”が、ガランの体勢を崩す。

大地を抉り壁に見立てるためだけではなく、この槍を隠すために吹き上げられた砂煙。

「穿てッ！」

ドゴンッ!!

「ぐあっ?!」

風をたたき割るように放たれた漆黒の矢が、ガランの右肩を貫く。容易く貫通したその一撃は、咄嗟に左手で矢を掴んでしまったため抜けきることなく、ガランの身体を持ち上げた。

「があああっ!?!」

ドンッ

そして、後方に数十メートル低空飛行し、ガランの巨体を闘技場の壁に縫い付ける。

その衝撃に、ガランは痛みから悲鳴を上げた。

「これが、僕と爺ちゃんの “ロウアンス” の力だッ!!!」

土煙が晴れ、弓を構えたナーリヤの姿が浮かび上がる。

頬から血を流しながらも悠然と佇む、その姿。

それに、静まりかえっていた観客席が、徐々に沸き上がっていった。

「ガラン!! テルクス行動不能により、男性部門優勝は ナーリヤ

!! ロウアンス!!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「!!!」

観客から響き渡る、歓声。

ナーリヤはその声を全身に浴びながら、ただ右腕を振り上げるのだった。

「勝ったよ、爺ちゃん」

その双眸に、セアックの瞳のような大空の青を、映しながら。

試合を終えたナーリヤは、まず東門の控え室で軍医による手当を受けた。

傷が深いため確実に痕は残るだろうと言われたが、そんなものは“勲章”だ。

現在は、頬には四角い布が当てられている。

そして、千里達の下へ向かう道すがら、担架で運ばれるガラんに遭遇した。

「よう、坊主」

「ガラん……」

ガラんは包帯で巻かれた両腕を気にもせず、上半身を起こす。焦る軍医を手で遮って黙らせる姿に、余裕は感じられない。

「まあなんだ。

……やるじゃねえか、“ナーリヤ”」

たった一言。

それだけ言い放ち、ガランは担架に身を沈める。
その姿を見ながら、ナーリヤは小さく笑みを浮かべた。

「貴方も、強かったよ……ガラン！」

担架で運ばれていくガランに、ナーリヤはそう声を上げる。
その声が届いているかは解らない。

だがそれでも、戦いを通じて想いが伝わったと言うことだけは、
確かに実感していた。

「ナーリヤ！」

「……千里」

そうして選手観客席まで行くと、同じく控え室に向かおうとして
いた千里と会う。

どうやら、ギリギリ間にあっただようだ。

「すごいよナーリヤ！」

「すっごくカッコ良かった！」

「あ、ありがとう」

興奮した様子で詰め寄られて、ナーリヤは頬に朱を差す。

そこまで言われてしまうと、照れてしまうのだ。

「次は千里の番だね」

「うんっ！」

ナーリヤが勝ってくれたんだもん。負けられないよ！」
「でも、あんまり気に負わないようにね。

肩の力を抜いて、ただ全力でやってみようよ」

どうにも、焦っているように見える。

ナーリヤはそんな一縷の不安を、笑顔で覆い隠していた。

それに千里は気がつかないまでも、アドバイスを受けて強く頷いた。

「うんっ！肩の力を抜いて、全身全霊全力で頑張る！」

小柄な身体で胸を張る姿は、幼い子供の背伸びのようにも見える。勇ましくもどこか不安の残る仕草に、ナーリヤは胸の支えを覚えていた。

「それじゃあ、行ってくるね。ナーリヤ！」

「うん、頑張ってるね。千里！」

手を振って走る、千里の姿。

その背に声をかけながら、ナーリヤはただ真剣に、千里を見ていた。

残す戦いは、あと一つ。

千里とフィオナの、決勝戦だった。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 旭日の決戦 前編（後書き）

前編はナリーヤ、後編は千里。

次話以降から七章に入りたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。
後編も、どうぞよろしく願います。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 旭日の決戦 後編

闘技場に於いて、一番高い場所には皇帝が座っている。そのため、司会者達の席はそこよりもやや下に位置する。

音響や投写の魔法がかかった、白い席。

その持ち前の場所に、レイニは笑顔で腰掛けた。

女性部門の最終戦 その一幕を実況することができる喜びに。

「ふふふのふー」

笑い方も、突飛だった。

そんなレイニの隣に座る金髪眼鏡の青年は、彼女のサポートだ。

レイニの笑い方やテンションに思うところがあるのか、嫌そうに眉をしかめている。

842

「師匠、もう少し落ち着けませんか？」

「魔法使いならこの程度の態度は当然のことだよ。」

君はまだまだ甘いねえ、クランカルルくん」

「……はあ」

クランカルルと呼ばれた青年は、やや大げさに肩を落としてみせる。

レイニのサポートと言っても、実際は師匠の仕事を手伝う小間使い。

適当にあしらわれてしまうのも、仕方のないことだった。

「さてさてさて、いよいよ決勝戦だよっっっ」

「愉しそうですね……」。

確か、伝説級のエルフと無名の少女、でしたっけ？」

あまり闘技大会に興味がないのか、首を捻りながら克蘭カルルが言う。

それに、レイニは舌なめずりをしながら大きく頷いた。

「そうっ！」

君も魔法使いの端くれなら、フィオナ「フェイルラートの魔法に刮目なさいな」

「伝説級のエルフですもんね。よく、見ておきます」

「相手の娘の魔法は……まあ、参考にはならないかも」

「え？」

小さく紡がれた、レイニの言葉。

それに克蘭カルルは聞き返すが、妖しい笑みに誤魔化されてしまった。

そうして不服そうな克蘭カルルをよそに、レイニは時間を見て司会の準備に入る。

『あーあー、実験実験……よしっ』

マイクのテストを繰り返すように、闘技場に声を響かせる。

その魔力の伝わり方を、克蘭カルルは真剣な表情で見始めた。

そこに、先ほどまでの“不満”はもう、残っていない。

『紡がれてきた歴史の中、朽ちることなく輝き続けた戦士達の軌跡。今日この日もまた、過去を司りしエルリスに加護された歴史に、一筋の軌跡を残す』

今までのテンションを鎮め、静かに響き渡る声。
張り上げていた声を落ち着かせただけで、彼女の声はどこまでも
静かなものになっていた。

『東門からは、生ける伝説。』

エルフ達の故郷ルトルイムより参戦されし、高貴なる“炎燐の戦
乙女”』

東門から、一人の女性が現れる。

金の髪を後ろに流した、澄んだ碧眼。

緑を基礎にした軽鎧と、背負った真紅の長剣。

『業炎苛烈、焰閃烈火。』

“フィオナ”フェイルラート”！！！！”』

歓声に包まれながら、フィオナが小さく笑みを作る。

高揚した気分を抑えきれず溢れ出た、笑みだ。

『西門からは、無名の新星。』

王国より黒を従え顕われし、荘厳なる“光と闇の戦姫”』

西門からは、千里が出る。

栗色の髪と栗色の目。

黒と白のモノクロカラーを基調とした、重厚な鎧と大剣。

『輝黒闇煌、淵光白影。』

“チサト”タカミネ”！！！！”』

再び、会場が沸き立つ。

その中で千里は、静かに瞑目して……そして、目を開いてフィオ

旭日蒼天。

雲一つ無い空から降り注ぐ陽光が、二人を焦がす。

「ふふ、まさかあの港街での出会いが、こんな再会を演出するとは……な」

フィオナは愉しそうにそう言うと、背負った長剣に手をかける。それを見て、千里もアギトを抜いて構えた。

「私もびっくりしたよ。フィオナさん」

油断無くフィオナを見つめながら、千里はアギトに光の粒子を纏わせる。

ぼんやりとした光は徐々に強くなり、やがてアギト全体を覆い隠した。

フィオナの初手を読もうにも、彼女は未だその剣を抜き放とうとしていない。

フィオナはこれまでの全ての仕合で、最後までその剣真を観客に晒すことはなかった。

鏗鳴りの音のみを会場に響き渡らせ、遅れて来た紅練の炎により勝鬨を上げる。

そうして勝ってきたため、フィオナの仕合を見て得られる情報は、

無かったのだ。

「来ないなら、私から行くぞ？」

「うっん、私から……行かせて貰うよ！」

腰を落としたフィオナに、千里は警戒心を抱く。

先手をとられてペースを握られることの危険性は、一回戦で味わっていたのだ。

「【行け！】」

力を乗せた、かけ声。

それとともにアギトを振ると、光の剣がフィオナに飛来した。衝撃波と光の粒子を合体させた、千里の得意技である。

「【閃光紅蓮】」

チンッ

鏗鳴りの音が、静かに響く。

すると、フィオナに飛来した光の剣が、空中で二つに割れて彼女の背後へ流れた。

だが、これで終わらせるつもりはないと、千里は意識を集中させる。

「【戻れ】」

たった一言、紡ぐ。

すると、フィオナの背後に流れたはずの光の剣が、二つともその軌道を転身させた。

「ほう……面白い技だ」

フィオナはその一撃に焦ることなく、対応してみせる。
振り向こうとすらしらないのは、彼女の余裕の表れだった。

「【閃光紅蓮】」

チンッ

再び紡がれた、詠唱。

鞘鳴りの音は一度きりだったはずなのに、二つの刃は同時にかき消されていた。

「簡単には、行かせて貰えないかな」

そう呟きながらも、千里は警戒を解かずには佇む。

光の粒子による斬撃は強力で、それ故に初手から動じることなく捌かれたのは衝撃的だった。フィオナのその悠然とした姿勢に僅かな焦燥を覚えながら、千里は頬から伝った汗が流れ落ちるのを感じていた。

「では、次はこちらの番だな」

フィオナはそう宣言すると、背負った長剣を腰に移動させる。

千里はその構えに、故郷の時代劇で見た“居合抜き”を連想していた。

「【炎迅】」

ドンッ

フィオナの両足の裏と、背中。

その三力所から吹き出た炎が、彼女の身体を加速させる。爆発による神速行動という、フィオナが得意とする魔法だった。

「光よ……」

それに対して、千里は自分の身体に粒子を収束させて纏わせた。身体能力の強化に伴う、認識能力の上昇。

それにより、誰も捉えることができなかったフィオナの剣を、その目で捉える。

「【閃光」

「はあっ！」

「ぐれ……ッ」

正確に薙がれた、大剣による一撃。

それは、視力を強化してなお霞んでいたフィオナの剣を、強く弾いた。

ガキンッ

一撃に威力ならば、千里はフィオナを遙かに凌ぐ。

その衝撃に押し戻されて、フィオナは数十メートルほど後退した。

「ほう、中々」

そう呟くフィオナの手には、抜き放たれた長剣が握られていた。初めて観衆の目に晒された、彼女の愛剣。

真紅の鞘に収められていたその剣真は、鞘同様真紅で彩られている。銀の刃に炎を象った真紅の紋様……それが、フィオナの剣の姿だ

ったのだ。

「綺麗……って、感心してる場合じゃないよね」

その美しさに、息を呑む。

しかし、千里はすぐにそれを振り払ってアギトを構え直した。

今度は、大上段。頭上に剣を掲げた、縦一直線の構えだ。

「【光よ、天を割れ！】」

イメージするのは、ララの轟鎚。

縦一直線に闘技場を割ったその一撃を、千里は光によって再現する。

「模倣では……私には届かんぞ！」

フィオナは前に強く踏み込むと、そのまま半身になって斬撃を躲す。

そして、もう一步踏み込みながら剣を鞘に収めると、抜き放ちながら左から右へ薙いだ。

「【天空紅蓮】」

爆発による剣撃の超加速。

神速の抜刀術から放たれた紅蓮の炎が、斬撃となって飛来する。

「壁よ……あうっ！」

バキンッ

千里は咄嗟に光の壁を展開させるが、その強力な一撃により割ら

れてしまう。

そうして仰け反った千里に、フィオナは肉薄する。
炎迅による、神速の踏み込みだった。

「【閃光紅蓮】」

「まず……っ?!」

ガンッ

咄嗟にアギトを盾にして、抜刀による一撃を防ぐ。

だがどんなに力があるうと、魔法で加速された技を伴う力を前に
よろけてしまう。

「どうした」

縦、一閃。

「それで」

薙ぎ、続いて二連。

「終わりか!」

納刀、抜刀一撃!

連続攻撃を前に、千里は防ぐ以外の手段を持てなかった。

防ぎきれなかった斬撃は千里の腕や足を掠め、鎧を裂いて防御を
削っていく。

そしてその連撃は、ついに……。

「せあっ!」

ザシユッ!

「うあっ?!」

鮮血が、白い砂を染める。

千里の左腕から流れ落ちる、赤。

その強烈な熱と、次いで襲ってきた痛みにも、千里は目を見開いた。

「ひか、り、よっ!」

咄嗟に出したのは、目くらましのような閃光だった。

それに乗じて、千里は大きく後方へ跳ぶ。

「いた、い」

我慢しても、痛みで一筋涙がこぼれる。

それを拭おうともせず、千里はただ震えを隠していた。

ここにきて、千里は漸く気がついたのだ。

「あの刃は 私を“殺せる”んだ」

銃刀法違反によって、短剣すら見ることの無かった生活。

包丁や鋏で人を傷つけるという発想が生まれたことがなかった千

里は、目の前の“刃物”に確かな恐怖を覚えていた。

「どっ、しよっ」

何度も乗り越えてきたこと。

そのはずなのに、一度考え出してしまうたら止まらなかつた。

実際に身体を傷つけられたのだから初めてではないが、こつも追
い詰められたことはなかつた。

それが、冷え始めた千里の心の怯えに、拍車を掛けていた。

そんな自分を警戒してフィオナは距離を取っている。

けれど、気がつかれたらそこで終わりだ。

なにか乗り越えられるものは無いかと、千里は縋るように顔を上げる。

「あ」

その視線の、先。

身を乗り出して心配しながらも、千里のことを信じて疑わない漆黒の双眸。

「約束、したんだ」

剣を構える。

天に突き刺すように、アギトを掲げる。

「一緒に優勝して、ノーズファンへ行くって」

その身体から、その剣から、金色のオーラが吹き上がる。溢れた水が行き場を無くして吹き出るように、強く。

「約束、したんだああああっつっつ！！！！！！」

「なにっ?!」

光の柱が、上がる。

海の魔物と対峙した時のような、金の柱。

それは観客全てに見えていた訳ではない。

千里と関わり在るナーリヤやララ、ライアン達。

そして、フィオナたちのみがその光を視ていた。

「光より顕れる者」イル＝リウラス”！！！！」

千里の双眸が、黄金に染まる。

周囲に漂う情報を強制的に蒐集し、そしてそれを自分に適用していく。

「【走れ、閃光！】」

剣を振るったその軌道上に、光の柱が立つ。

一つ二つではなく、無数の柱がフィオナに集中し始めた。

「これしきの……【重輝・閃光、紅蓮！】」

連続抜刀による、連撃。

フィオナの周囲を真紅に染めるほどの斬撃の嵐は、千里の攻撃を確実に防ぐ。

だが、千里はそれだけでは、終わらない。

「【集え、極光！】」

光の柱が上がった先。

空中に漂う光の粒子が槍の形に変わると、その全てがフィオナに殺到する。

全方向からの集中攻撃に、フィオナは小さく舌を打った。

「ちいっ……【重輝・天空紅蓮！】」

衝撃波となった閃光紅蓮による、連撃。

それを用いて自分よりも離れた位置から槍を迎撃すると、フィオナは再び炎迅を用いて千里に接近する。遠距離にいたままでは、あまりに不利だ。

「避けられるか？ 【炎太陽炎】」

強力な炎によって、剣真が霞む。

文字どおり陽炎を纏わせた不可視の斬撃が、千里に襲いかかる。

ザンッ

その一撃を避けきることができずに、千里の右太腿から鮮血が舞う。

だがそれでも、千里は怯むことなく剣を振るう。

つい先ほどまでと比べて、明らかに纏う“空気”が変わっていた。

「【断て、光輝！】」

どこまでも鋭い、ただそれだけの斬撃。

だがその一撃には、避けるという次元を超えた速度があった。

「くう……あつ?!」

ドンッ

咄嗟に鞘でガードをするも、衝撃に身体が浮き上がる。

鞘には大きく罅が入り、同時に欠けた破片がフィオナの左腕を傷つけた。

「っ……あああつ!!」

自分の攻撃で、他者が血を流す。

それに伴って生じた躊躇いを、千里は意志の力で跳ね返す。

それは、戦闘に伴う一種のトランス状態だったのだろう。

千里の心に反映された光が、より輝きを増した。

「【穿て、閃駆！】」

光を纏った、突き。

その一撃が、よろけたフィオナの心臓めがけて放たれる。

光の粒子の効果で殺傷能力は無いと解っているからこそ、その一撃に躊躇いはない。

「嘗めるな！」

だが、フィオナは甘んじて受け入れるほど脆くはない。

長剣を背中側に回すことにより重心を移動させて、半身になって突き避ける。

そして、更に長剣を回転させて勢いをつけて、極限状態に於いていっそ流麗と言わしめるほど鋭いカウンターを、千里に放った。

「揺らげ 【蜃気幻楼】」

剣真に炎を纏わせて、蜃気楼を生み出す。

それは幻に変化して、千里の目に複数の斬撃が襲いかかるように見せた。

完璧なタイミングによるカウンターと、視覚を惑わす斬撃。

二つの要素に、千里は刃を受け入れる以外の術を持たなかった。

「【遮れ、斜光】」

ガインッ

だから千里は、受け入れる。
身体に纏わせた光で鎧を作り、弾くという手段を用いて。

「はぁあつ!!！」

「ぐうぁああつ!?!」

弾かれたことにより、フィオナは今度こそ仰け反る。

その隙を突くように、千里は右袈裟にフィオナを斬り裂いた。
咄嗟に炎で鎧を作るも、詠唱すらしていない魔法は大した防御力
を持たず、フィオナは大きく弾かれた。

「あうっ」

そして、闘技場に背中から落下する。

その様子を油断無く見ながら、千里はアギトを構え直した。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ」

息が乱れ、肩を大きく上下させる。

気温だけでは説明できないほどの、異常な汗。

喉が渴き腕が重くなる感覚に、千里は目眩を覚える。

極限状態での能力行使。

限界を超えて放たれ続けた、強大な力。

そのガタが、千里を確実に追い詰めていたのだ。

「まだ、倒れる訳には、行かないんだ」

立ち上がらないことを祈ることは、できない。

すでに片膝を突いてしまっているフィオナに、そんな“期待”は

できなかった。

「強いな」

砕け散る間際の、鞘。

そこへ、フィオナは剣を収める。

納刀による抜刀術の構えだった。

「わたし、は……。」

私は、約束を守るために。

そして、故郷へ帰るために、勝たないとならないんだ！」

自身を奮い立たせるために、千里はそう叫んでアギトを構える。

既に瞳は栗色に戻り、黄金の輝きは消え失せていた。

それでも千里は、最後の力をアギトに集中させる。

とつくに限界を迎えた身体は、鈍く悲鳴を上げている。

それでも、この剣を降ろす訳にはいかなかった。

この意志を　折る訳には、いかなかった。

「それが、チサトの願いか。

ならば……私も、己の願いを口にしよう」

互いにこれが、最後の一撃。

それが解っているからこそ、フィオナも千里の想いに応える。

「我が故郷ルトルイムに住まう兄を助けるため。

兄と友に、故郷の地を救うため。

私はノースファンにて神託を受け、その術を得る」

初めて口にした、フィオナの目的。

数十年ぶりに大会に出場した彼女の、本当の理由。
それを語る彼女の双眸は、決意の光で爛々と輝いていた。

互いが互いの故郷のために……負けられない戦い。

「【光よ、来る日を切り拓け!!】」

「【天迅・紅蓮陽炎!!】」

二つの光が、衝突する。

黄金と真紅が混ざり合い、ぶつかり、衝撃波となって爆発した。

ドオンツッ!!

『はあああつつつつ!!!!』

その影から勢いよく飛び出す、と互いにすれ違う。

最後の最後、極限の力。

フィオナの鞘は砕け散り、互いに背を向けた状態で硬直する。

静寂と沈黙。

観客たちの声も聞こえず、誰もが息を呑む。

そして ついに、動き出す。

ピシッ

罫の入る音が、小さく響く。

発生源は……千里の、アギトだった。

剣真の真ん中から、徐々に罫が広がっていく。

白濁していく、意識の中。

最後に聞いたのは、連続する足音と、大切な人の必死な声だった。

「千里 ツ……！」

闘技大会女性部門決勝戦。

優勝は、フィオナ「フェイルライト」。

刻みこまれた覆しようのない事実と共に、闘技大会は幕を閉じるのだった。

第六章 第八話 波乱の闘技大会？ 旭日の決戦 後編（後書き）

十一月から書き始めた第六章も、これで漸く終了です。
次回からは、第七章に入りたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次章もどうぞ、よろしく願います。

七章 第一話 偽装の従者

空を突き破るほどの、極光。

誰の目にも見える訳ではない、不思議な光。

その光を視たのは、闘技場にいた一部の人間だけではなかった。

帝国よりも南。

嵐に包まれたその場所で、一人の男が口を歪める。

傍らに従えた黒猫と共に、“短い”銀の髪を靡かせながら、愉しそうに笑う。

帝国から西へ渡った地。

窓辺から見えた閃光に、少女は身を起こす。

だが三拍ほどもそれを見つめると、興味を無くしたようにベッドに横になった。

更に西へ渡った地。

純白に包まれた女性が、その光を強く視る。

そして、静かに祈りを捧げると、その場でしばらく瞑目していた。

開花し始めたばかりの光は、それよりも遠くへは届かない。

けれども、確実に、その影響を伝えて行った。

その光景に、鳥が鳴く。

純白の渡り鳥が、喉を嚔らして“泣き”続けた。

E
x
I

身体に籠もった熱が、溶けて消えていく。

暖かさと同時に感じる冷たい寒気。

何か重大なことを頭から追い出してしまったような、寂しさ。

悲しみに痛みを伴う、どうしようもない焦燥感。

洪水のように押し寄せる感情の渦。

その渦中の息苦しさには耐えきれず、千里は切なげな息を吐く。小さく胸が上下して、その感覚で目が覚めていった。

混濁した意識に吞まれまいと足掻き、両手を天に伸ばすと……その手が、優しく包まれた。

「あつたかい」

零れたのは、そんな言葉だった。

自分の手を包んだ相手が誰であるか、理解することが出来ない。全身を真綿で包むようなもどかしい疲労感に、正常な思考を妨げられていた。

だから千里は、温もりを求める。

掴んだ手を握りしめて胸にかき抱くと、途端に安堵感で包まれた。

そのことに、千里は頬を綻ばせる。

「あつたかい、な」

そう一言零すと、千里は意識を落としていく。

瞼の裏に差し込む陽光など、気にならないほどにゆっくりと。

そこに苦しみはなく、ただ安らぎのみがあった。

と、目を開ける。

つい数瞬間前の出来事のように感じていたが、周囲は暗い。

「ここは……宿屋の、部屋、かな」

どこ、と呟くまでもなく、そこが帝国に来てから借りていた自分の部屋だと言うことに、千里は直ぐに気がついた。

「どう、なっただっけ」

疲労感はすっかりと取れ、頭はすっきりとしている。

そうして頭を回転させると、“最後”の光景は直ぐに浮かんできた。

閃光　黄金と、真紅。

衝撃波から飛び出し、刃を交わし。

極度の疲労感と腹部に走った鈍痛。

歪み、白濁する視界と、揺れ、混濁する意識。

「そっか、私」

歓声を背後で聞いた、虚無感。

「負けたん、だ」

せり上がってきた悔しさに、強く唇を噛む。

だがベッドに置かれた手を強く握りしめると、そこには温もりがあった。

「え？」

放り出された、自分の右手。

そこへ視線を這わすと、ベッド脇で眠るナーリヤの姿があった。

一度意識が戻り、そうして感じた暖かさの正体。

「ナーリヤ……ごめんね」

ナーリヤの顔を見てしまうと、負けた悔しさよりも強く、申し訳なさが溢れ出す。

ナーリヤは千里との約束を守り、一度敗北した相手から勝利をもち取って見せた。

そうして優勝し、ノーズファンへ行く権利を得た。

「なのに……なの、にっ」

空いている左手で、目元を拭う。

溢れ出して、止らない涙。

ナーリヤが起きる前に拭いたくとも、拭うことのできないそれを、千里は必死で止めようとしていた。

「手がかりを見つけて、やっと帰れるって思って、ナーリヤと約束してっ」

支離滅裂に、言葉を発する。

声を上げないように必死になる余り息が荒くなり、胸が苦しくなる。

もうどこにも怪我なんかはないはずなのに、どうしようもなく“心”が痛かった。

「わ、わたし、私、守れなかったっ！

ナーリヤと……やく…約束、したのにつ、守れなかった」

目尻が熱を持ち、腫れて痛くなる。

でもそれ以上に息苦しく、千里は陸に打ち上げられた魚のように、

ただただ肩を上下させていた。

「わたし、私はっ」

「千里」

意味のない言葉の羅列。

それが、小さく遮られた。

ベッド脇で眠っていたはずのナーリヤが身体を起こし、空いていた右手でそつと千里の目元を拭う。

「大丈夫だよ。」

僕が側にいるから。だから、今は泣いても良いんだよ」

ナーリヤは身体を起こすと、右手で千里の頭を抱え込む。

安心させるように、その手を握ったまま、千里を優しく抱き締めた。

「う、あ」

千里は左手を、ナーリヤの胸に置く。

そして手に力を込めて、ナーリヤの黒い服を固く握りしめた。

顔を見られないように、ナーリヤの胸に強く顔を押しつけながら。

「ああああああああっっっ！！！」

涙で濡れていく、白いベッド。

斑を作りながら泣き声を上げる千里を、ナーリヤは優しく受け止める。

抱え込んだ頭を撫でて、彼女が苦しみから解き放たれるように。

帝国の、ある一夜。
少女の瞳から零れる雫を拭う、夜色の少年の姿がそこにあった。

十

一夜、明ける。
窓辺から差し込む陽光に、千里は朝になったことを悟った。
おもむろに右手を握ってみても、もうそこに温もりはない。

そのことに一縷の寂しさを覚えて 赤面した。

「うう、約束を破っちゃったのは私なのに、結局慰められちゃった」

ナーリヤの前で涙を流す。

そのことに抵抗がなくなっているという事実には、千里は触れようとはしない。

男性に泣き顔を見られて、すんなり受け入れている自分。

それを考え出したら、恥ずかしさで目を逸らすことは解りきっているためだ。

「はあ……それにしても、これからどうすれば良いんだろう」

ノーズファンに招かれるのは、優勝者二名のみ。

行かないという選択肢が選べそうにない以上、ナーリヤはノーズファンへ行くだろう。

その間、自分はどうしていればいいのか。

「うーん……わかんないや」

提示された道からは、すでに外れている。

ここからどうすればいいかと考えても、すぐに答えが出てくるものではない。

「コン、コン」

「あ、はいっ」

控えめなノックの音に、千里は思わず返事をする。

心の準備が、などと考えるよりも早く、口が動いてしまったのだ。

「千里……良かった、元気そうだね」

「ナーリヤ……うん。ありがとう。それから、ごめんね」

心の底から安心したような、柔らかい笑顔。

千里はその表情を見つめていることができず、頬に熱を感じながら目を逸らした。

「あれから、どうなったの？」

「……千里、君は五日間も寝込んでいたんだ。だから、心配したんだよ？」

「五日……五日間もっ?!」

重く頷くナーリヤに、千里は愕然とする。

何度か視界が暗くなったり明るくなったりしていたことには気がついていたが、それがまさか昼夜の明かりだとは思いつかなかったのだ。

「そっか、そんなに……」

「でも、目が覚めて本当に良かった」

ナーリヤはそう朗らかに笑うと、右手で千里の頬に残った涙のあとを拭う。

明るく振る舞っては見せたが、本当に心配していたのだろう。

その表情からは、憔悴の名残が見えていた。

「あ……」

頬に手を添えたことで、二人の距離が短くなる。

栗色と漆黒の双眸が混じり合い、互いに離すことが出来なくなっていた。

千里の瞳に映る、ナーリヤの顔。

普段の優しげな表情はなりを潜め、よく見れば整っていることが

解る顔立ちが、すぐ側にあった。

ガランとの戦いでついた、右頬の傷。

目の真下に刻み込まれたその傷は、ナーリヤの勲章だ。

その傷を見て、千里はナーリヤの仕合を思い出し、更に頬を熱くする。

「千里」

「ナー、リヤ」

ナーリヤは、千里を見つめると、そつと身を乗り出す。

もう体力は戻っているし、疲労感もない。

押し返そうと思えば簡単なのに、身体は動こうとしなかった。

そして、あと、数センチ。

「見舞いに来たぞ！すまん、帰ろうライアン！」

の所で、嵐が過ぎ去った。

バンツと音を立てて扉が開き、次いで直ぐに閉まる。

文字どおり嵐のようにやってきて、そして嵐のように去っていったのだ。

「……………」

硬直して、動けない。

流れる沈黙と静寂の時間に、二人は身動きがとれなくなったいた。

目を伏せて戻すと、互いに信じられないほど赤面していたことに、驚く。

「ぷっ」
「くっ」

そして、ほとんど同時に吹き出した。

「あははははははっ」
「はははははははっ」

お腹を抱えて笑い、そして先ほどまでとはまったく違う涙を流す。
一通り笑い合つと、もうそこに重い悲しみは無かった。

「とりあえず」
「うんっ」

ナリーヤに続き、千里が頷く。
勢いよくベッドから立ち上がると、シーツをはね除けた。

「待ってジツク、いや本当に!」
「ライアン、ララもいたんじゃないよね?!」

そして、部屋から飛び出す。
真っ赤になつた顔を誤魔化すように、大きな声を上げながら。

そんな二人の手は……固く、結ばれていた。

宿屋の中、場所を移してナーリヤの部屋。

そこで、ライアンは大きく……大きく、ため息を吐いた。

気まずげに身を縮めるナーリヤと千里の姿を一瞥し、今度は小さく息を吐く。

「元氣そうで何よりだ」

ライアンの隣で何度も頷く、ジック。

不幸中の幸いかララは現状を見ておらず、また耳にも入っていないためただ首を傾げていた。

「あ、あはは」

「モウシワケアリマセン」

苦笑するナーリヤと、赤い顔で俯く千里。

ライアンの皮肉に、どう答えて良いのか解らなかったのだ。

「さて、それで、今後の話しだったな」

埒があかないし、問い詰めるつもりなど最初から無い。

だからライアンは、さっさと流して本題を切りだした。

見舞いに行つて元気なら相談に乗ろうと、決めていたのだ。

「ナーリヤの出立は明後日。

闘技大会終了から七日目の朝となる」

「あ、そっか。

私、五日間も寝てたんだ……」

表彰もとうに終えて、出立の準備期間もあと僅か。

千里が目を覚ましたのは、そんなタイミングだったのだ。

「うーん、どうにか一緒に来る方法があれば良いんだけど……」

ナーリヤと千里、ライアンとジックで一緒になって頭を捻る。

密航が可能なほどノーズファンへの船の警備は甘くなく、それ故に頭を悩ませていた。

そんな中、ララが小さく、口を開く。

「一緒に行ける方法……無いこともないかも、しれないわ」

「えっ? ……ほ、ほんとっ? ララ!」

ララの言葉に、千里は大きく声を上げる。

そんな千里に、ララは短く逡巡の表情を見せてから、頷いた。

「しかし姉上、いったいどのような方法が？」

ライアンは、ララの考えに思い至らず首を傾げて訝しげな声を出す。

それはジックも同様で、ララの答えを待っていた。

「従者指定なら、どうにか」

「従者指定？いや、あの制度は……」

ララの答えに、ライアンは首を捻る。

そうして小さく呻り声を上げていると、先にジックが声を上げた。

「いや、行けるぞライアン！」

「ようは、変装すればいいのだ！」

「変装……そうか、それならば」

納得し合うライアン達の様子に、ナーリヤと千里は訳も分からず顔を見合わせる。

その様子にいち早く気がついたララが、二人に説明を始めた。

「貴族が優勝した場合を想定して、ノーズファンへ行く船には同乗者が認められるの」

「同乗者？」

「身の回りの世話をする人間……給士や執事だな」

千里が首を傾げると、ライアンが素早く細くする。

姉弟だけあって、息のあった会話だった。

「ノーズファンという神聖な地への旅路に“いかがわしいこと”が

あつてはならない。

そういつた決まりから、自分と同性のものに限り一人同乗させることができるのだ」

「同性つて……それじゃあ」

そう、同性……つまり、ナーリヤと同じ男性でなければならぬ。ちなみに、フィオナは全て一人でこなしていると言うことが周知の事実であるため、頼み込んで従者にして貰うというのは、不自然すぎてできない。

特別な条件がなければ入国できない国というのは、それだけ大変な場所なのだ。

「そう、チサトが変装すればいいのよ。

ナーリヤと同じ、男性に」

「え？だ、男装つてこと……？」

正直に言えば、“コスプレ”のように感じてしまうため、素直に頷くことができない。

現代で身についた羞恥心、それを乗り越える必要があるのだが……。

「それなら、一緒に行けるね！千里！」

こうして隣で喜んでくれるナーリヤの姿を見れば、それだけでちっぽけな羞恥心は吹き飛んだ。

「うん、やるよ、私！」

男装して、ナーリヤと一緒にノースファンへ行く！」

拳を振り上げる千里に、ナーリヤは強く頷く。

そうと決まれば、話は早い。
早速手続きを、とライアンとジックが動き出す。

「チサトは私と、衣装選び」

「あ、うんっ」

「それなら僕は、武器屋で代用の剣を探してくるよ」

「ああ、そっか！」

アギトは、フィオナとの戦いで半ばから折れてしまっている。

そのため、代用に剣が必要だったのだ。

魔法使いの優勝者を想定して、従者が剣を持つ許可を取ることも
可能なのだ。

慌ただしく、移動する最中。

千里は小さく、頬を綻ばせる。

確かに敗北して、敷いた道を外れてしまった。

「でも、みんなと力を合わせれば」

こんなにも、前を向くことができるのだ。

そう千里は実感して、嬉しそうに笑う。

諦めなかったその先にある、未来を信じて　。

七章 第一話 偽装の従者（後書き）

今回から、第七章に入ります。

ペースも、六章以前のものにある程度戻っていくかと思えます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

七章 第二話 嵐上の航海

旅立ちの日。

空は常に、旅人達を笑顔で送り出してくれるとは限らない。栄誉在るその出立の日の空は、生憎の曇り空だった。

騎士達が並ぶ中、その中央を優勝者が歩く。

緑の鎧を身に纏い、砕けた鞆の代用に白銀の鞆に剣を収めたフィオナが右を。

左隣には、右頬に一筋の傷を持つ漆黒の少年、ナーリヤが並んで歩く。

むずがゆさすら感じる送迎の中、フィオナはしきりに首を傾げていた。

ナーリヤの散歩後ろに付き従う、人影。

栗色の“短い”髪と栗色の瞳。

黒を基調とした“ズボン”タイプの鎧服に、腰に提げた白い剣。

「どこかで、見たことがあるような？」

フィオナがそう呟くと、隣のナーリヤが小さく肩を揺らす。

幸いなことに後ろに注意を向けていたフィオナはナーリヤのそんな様子に気がつかなかったが、代わりに“小柄な少年”が、ナーリヤを恨めしげに見ていた。

「いや、まさか。……うーむ？」

フィオナの声。

その疑問が答えに到達する前に、一同は船に乗り込むのだった。

E
X
I

ノーズファンへ向かうための船は、豪華な客船だった。

大量の火石で動力部分を動かし、魔法使いの補助を以て航海をする巨大な船。

建設費だけで城が建つ、かなり上等なものである。風を受けるための帆も巨大で安定感があり、全体を見るとその美しさが解る整ったフォルムをした船だった。

当然、乗組員の中でも“主役”と呼べるナーリヤ達闘技大会優勝者にあてがわれた部屋も、相応に豪華なものだ。

質素ながら匠の技を感じさせる、木製の家具。

寝室はまた別に用意されていて、その一部屋だけでナーリヤとセアックが暮らしていた森の小屋に匹敵する広さだ。

その部屋で、ナーリヤと従者の少年が、大きく安堵の息を吐く。

「はあ、何とかなってみただね。ちさ」

「陸人。今はそう呼んでつてば」

「あはは、そうだったね。陸人」

人の目を気にする余り、小柄な少年　千里はそう小声で訂正を求める。

どこで誰が聞いているか解らないのだから、仕方がない。

「でも、気がつかれなくて良かったよ」

「私も、自分でも思っていたより“男の子”になれてびっくりだよ」

一人称は、改めない。

従者ならば一人称が“私”でも不自然ではないからだ。

むしろ、使えるものとしての礼儀を考えたら当然だろう。

もつとも、それが異界の住人達に“どう”変換されているかは、千里のあずかり知らぬ所なのだが。

「それにしても……」

千里はそう言うと、姿見の前に立ってくりりと回る。

髪は、元と同じ栗色のカツラ。

来ていた改造制服のスカートをズボンにして、重厚な鎧を取り去っただけ。

それだけでスーツのように見えるのは、ブレザータイプの恩恵だろう。

だがそれよりも千里が気になるのは、その容姿だった。

「似てるんだよなあ……“陸人”に」

もう少し髪の色を濃くして背を伸ばせば、うり二つだ。

千里はそう呟いて、肩を落とす。

実の“弟”という男性に似ているというのは、なんとも微妙な気分だった。

もつともこれは、千里が少年のような顔立ちなのではなく、どちらかというと彼女の弟の陸人が女顔ということなのだが。

「あとは、このまま如何に見破られずに過ごすか……だね」

ナーリヤが真剣な顔で呟くと、千里は苦々しい表情で頷いた。

他の人なら何とかしてみせる、と言うだけでも言えるのだが、この船にはフィオナが居る。

果たして彼女のような聡い女性を欺き続けることができるのか。
千里はそれがどうにも不安で、胃の痛い話だった。

「はあ、大丈夫かなあ」
「フィオナ、か」

千里の心配。

その原因に思い至り、ナーリヤは真剣な表情を苦笑に変える。

「いつそ、自分から説明しておいた方が良くかもしれないね」
「うーん……考えてみる」

千里は呻り声を上げると、ゆるゆると頷いた。

海のと真ん中で放り出されてしまったらたまらない。
だからこそ、あまり迂闊なことはしたくないのだ。

「それで、陸人 従者は、どうしていればいいって言われたの？」
「んと……従者は、主が必要としていない間は従者用の部屋に
いるんだって」

千里は、従者として受けた説明を思い出しながら語る。

従者は主の指示を聞き、それを終えたら従者用の部屋で待機する。
主が必要とする時は、特殊な音響魔法がかかったベルを鳴らすと、
それが従者の部屋に伝わるようになっていたのだ。

「それならまあ、もうしばらくはゆっくりしていようか？」
「うん、そうだね。へたに動き回るのも怖いし」

この“怖い”は、偶発的なハプニングを示している。
つまり、うっかりばれたら目も当てられないので、大人しくして

いよいよと言つことだ。

「部屋から出る必要があるのは……ご飯とか？」

「部屋で食べるっていうのができれば良いんだけど

……儀礼的に集まって食べるみたいだね」

ナーリヤの言葉に、千里は眉を寄せて額を指で揉む。

テーブルマナーは、ララから学んでいたが、たった一日しか練習できなかつた付け焼き刃。心配は山ほど残っているのだ。

「まあ、この客船で移動すれば、

ノーズファンへ行くのにたった三日で良いみたいだからね。

夕食時には到着するらしいから、食事と言つても七回だけだよ」

今日の昼と夜。

翌日の三食翌々日の朝昼の食事で七食だ。

朝はさほどマナーが必要なメニューではないということを考えれば、大変なのは五食だけだ。それさえ乗り切れば、ノーズファンでまた違った振る舞いが可能となる。

「やること、いっぱいだね」

「あはは、まあ、ね」

気負いを隠すように笑う千里に会わせて、ナーリヤも小さく笑う。彼女の肩の力を抜いてあげることが、現段階に於いて一番必要なことだと、ナーリヤは判断していたのだ。

「はあ……やっぱり、外にでようかな」

千里は、そう呟くとドアに向かって一歩踏み出した。

じつと部屋に閉じこもって、怯えて時間が過ぎるのを待つ。
それはどこか、“違う”気がしたのだ。

「うん……そうだね。」

その方が、千里らしいかな」

最後の眩きは、千里の耳には届かない。

それでもナーリヤのそのどこか嬉しそうな気配は、仄かにだが千里に伝わっていた。

十

高速で、それでいて静かに航海を進める船。
その甲板の上で、千里とナーリヤは風に当たっていた。
男装のためのカツラはしっかり止めてあるため、多少風が強くて
も飛びはしないのだ。

「気分転換にって思ったけど、あんまり天気は良くないねー」
「そうだね。生憎の曇り空……嵐に変わらなければいいけれど」

自然の中で生きてきたナーリヤは、ある程度ならば天気は読める。
けれど、どんよりとした曇り空だというのに、そこからどう天候
が動くのか、まったく判断できずにいた。こんなことは、余りない。

「この船の高さじゃ魚も見えないし……」。

海の醍醐味みたいなのは、天気が回復するまで拝めそうにないね」
ナーリヤはどこか残念そうに、そう言った。
船を並走するフリックの群れや、音に合わせて唄う渡り鳥のラム

ルウ。

レビアルスやレビクルスの狩猟風景など、海に見えるものは沢山
ある。

それも、この静かすぎる曇り空の下では、味わえそうになかった。

「うん？そこにいるのは、ナーリヤか？」

甲板に立ち海を眺める二人は、背後から聞こえてきた声に固まっ
た。

凜とした綺麗な声。透きとおるような、音色。

こんな声の持ち主など、一人しか思い至らない。

「フィ、フィオナ……」

「ああ、やはりそうか。」

そちらの“少年”は……」

千里を見て訝しげに首を傾げるフィオナ。

その様子に、千里は努めて低めの声を出す。

ここを乗り切ってしまうえば、もう少し気を抜くことができるだろう。

「初めまして、フィオナ。フェイルラート様。

私はナーリヤ。ロウアン様にお仕えする従者で、陸人と申しま
す」

「従者？ナーリヤ、君は従者など雇っていたのか？」

見るからに貴族といった出で立ちではないナーリヤの姿。

それを鑑みて、フィオナは頭上にクエスチョンマークを浮かべながら首を捻る。

そも、従者が必要な狩人など聞いたことがない。

「あ、ああ、まあね。」

といつても、僕の元で戦いを学びたいと彼が志願をしてね。

このまま帝国を去ると次はいつ会えるか解らないから、期間限定で、ね」

「ふむ……そうだったのか」

二人が事前に考えていた、二人の“設定”をフィオナに話す。

すると、フィオナは訝しげな表情を浮かべながら頷いた。

「しかし、どこかで見たことがあるような？」

「そ、そうでしょうか？」

フィオナに覗き込まれそうになり、千里は一步身を引いた。これ以上下がると海に落ちてしまうため、ここが限界。だからこそ、これ以上近づかれるのはまずかった。

「そういえばナーリヤ」

「な、なに？」

だが、フィオナはあっさりと下がる。

そのことに不思議に思いながらも、千里は安堵の息を吐いた。当然、気がつかれないようにこっそりと。

「あれからチサトを見ないのだが、彼女はとうしたんだ？」

「最終的に王国に戻るつもりだったから、彼女は先に南へ行ったんだ」

「ほう？そうか、別れの挨拶くらいはしたかったのだが、な」

どこか寂しさを垣間見せて笑うフィオナの表情に、千里の胸がズキリと痛む。

互いに全力で戦って、そうして意志を伝え合った。

その真摯な気持ちに翳りがなければこそ、千里はもう一度フィオナと友好を築きたいと思っていた。

けれど、こうしている間は、それは叶わない。

その落胆を、千里は表情に出さないように、小さく唇を噛んで耐えた。

「ところで、リクト……だったか？」

「はい。なんででしょうか？」

フィオナは一つ頷くと、じつとリクトの目を見た。
横のナーリヤは、その様子に息を呑んで、そつと胃を抑える。

「貴君は、チサトの血縁者……か？」

「つい、いえ。私は遠目でしか拝見したことがないので……。私とその少女は、容姿が似通っているのでしょうか？」

本人だから、似ているもなにもない。

そう言いたい気持ちを、千里はぐつと呑み込んで答えた。

「ああ、いや、そうか。」

それはすまなかった。許せ」

「いえ」

漸く問答が終わり、フィオナは二人に背を向ける。

そして、甲板を出ながら後ろ向きで手を振った。

「私はそろそろ降りることにするよ。」

もうすぐ昼食だそうだから、遅れんようにな。チサト」

「うん、ありが」

背を向けながら、吹き出す声。

フィオナはそのまま特にツッコミを入れることなく、愉しそうに去っていく。

その後ろで、千里は両膝を突いて頂垂れた。

「わ、私の努力は、いったい」

「ち、千里……ごめん、なにもできなかった」

「ナーリヤは悪くないよ。」

悪いのは、気を抜いた私なんだから。

……あ、あはははは」

気落ちした千里の背中を、ナーリヤがさする。

ある意味和解といえる状況になれたのは良かったのかも知れないが、千里はとりあえず頂垂れ続けるのだった。

十

昼食、夕食と終えて、その夜。
従者用にあてがわれた部屋で、千里は大きく息を吐く。

「漸く、一日が終わりかあ」

現段階で、だいたい三分の一ほどの行程を終えた。
あと二日ほどかけて、ノースファンへ行く日程となる。

千里は案外と長い一日を憂鬱に感じながら、茶髪のカツラに手を掛けた。

「いったん外しておこうかなあ。

いや……でも、その前に」

ベッドで横にしていた身体を起こすと、カツラから手を退かす。
そして、ゆつたりと立ち上がって、姿見の前まで歩いて行った。

「陸人……どうしてるかな？」

鏡に映る、弟の姿。

目の前の姿がまがい物であると解っていても、家族の姿を目に映すと心が痛んだ。

「待っててね、陸人。

お姉ちゃん、絶対に帰るから……ね」

語りかけたところで、答えが返ってくる訳ではない。

それでも言わずにはいられなくて、千里は姿見に両手を合わせた。
そうすることで、故郷と繋がっているような……そんな、気がしたのだ。

「みんな　っ?!」

ドンッ!

轟音と、激しい揺れ。

千里は崩れそうになる体勢をどうにか抑えて、鋭く周囲を見回した。

チリンツ

「ナーリヤ……まずは、行ってみないと」

ベルが鳴り、それによって呼ばれていることに気がつく。

千里は絶えず揺れる船内で転ばないよう壁に手を付ながら、立ってかけてあった剣を手に取り廊下に出た。

「うあつ……いったい、なにが？」

揺れに不快感を感じながら、走る。

といつても余り早くは走れないため、その足取りは鈍重だ。

それでもどうにか走っていると、漸く人影が見え始めた。

慌ただしく動き回る乗組員。

とても捕まえて話が聞ける状況では、無さそうだった。

「陸人！」

「っ……ナーリヤ、様！」

呼び捨てにしそうだったのを慌てて直すと、千里はナーリヤに駆け寄った。

まずは状況を聞かないと、どうにもならない。

「いったい、何が起こったの……ですか？」

「嵐だ。それも、事前兆候がほとんど無い、突発的な」

「突発的な……嵐」

千里が繰り返すと、ナーリヤはそれに強く頷く。
その切羽詰まった表情が、状況の異常さを表していた。

「とにかく、このままではメインマストが危ない。

今協力して帆を畳んでいるから、僕たちも行っ手伝おう！」

「あ、はい！」

ナーリヤの後ろについて、船内を駆け巡る。

流石にバランス感覚が良いのか、真っ直ぐ走っていても、ナーリヤの体勢は崩れない。

そうして階段を駆け上がり甲板に出ると、すでにフィオナがロブを引いて手伝っていた。

「来たか！リクトはこっちを、ナーリヤは向こう側を頼む！」

大粒の雨と、ともすれば身体が浮き上がってしまいそうな突風。
荒れた海は巨大な波を生み出し、船体を大きく上下させていた。

ドンッ

「きゃっ」

空が光り、船の近くに雷が落ちる。

千里が最初に聞いた轟音は、この稲妻によるものだったのだ。

「早く！」

「はい、今行きます！」

「僕も、向こうを手伝ってくる！」

冷たい雨と風、高波による水飛沫。

それらをかいくぐって、千里はフィオナの後ろにつく。
そして、閃光と豪雨に紛れて解らないように、薄く光の粒子を纏
った。

「せーのっ」

「はあっ!」

帆を引き、バランスを整える。

一秒が一時間にも感じる、緊迫した状況。
その中で、千里は一心不乱に帆を引いた。

ドンッ

「うわあッ?!」

千里達の反対側。

そこで、六本のロープの内一本が、掴んだ人間ごと持ち上がる。
浮き上がって投げ出されたら、まず助からないだろう。

「まずい!」

「ナーリヤ?!」

それを、ナーリヤが助けに走る。

投げ出された人の腕を掴み、決死の力で甲板の方へ放り投げる。

その瞬間、海に一際大きな閃光が走った。

ズドオンッ!!

「うわあああつつつ?!」

悲鳴、閃光、突風、轟音。

海に投げ出されていくナーリヤに手を伸ばそうとした瞬間、千里達の真上で空が瞬く。

「邪魔、しないで！」

腰に提げた剣を、落ちてくる稲妻に向けて振る。

人の限界を優に超えた超反応で放たれた一撃は、その稲妻を正確に捉えた。

だが、千里には一つの“誤算”があった。

「え きゃあっ?!」

ド……バンツ!!

「リクト!?!」

代用の剣では、千里の一撃を受け止めきれなかったのだ。

一瞬にして碎け散った剣は、千里の手元で爆発する。

咄嗟に光の粒子を濃くするも、衝撃と閃光を防ぐには、一瞬遅かった。

「ナー、リヤ……」

その衝撃で、千里の意識が混濁する。

そして為す術もなく 静かに、意識を落とした。

嵐に巻き込まれた、千里達の船。

その遙か遠方の海に、一隻の船が浮かんでいた。

巨大な船体と帆を持つ船。

だがその全容を見るとぼろぼろで、とても“豪華”なものとは言いづらい。

一言で表現するのなら “幽霊船” という言葉がよく似合う。そんな、今にも沈没してしまいそうな船だった。

「ええい、見えん！」

その上で、一人の男が不機嫌そうな声を出す。

白銀の短い髪と、血のように深紅の瞳。

すらりと長い足に、よく似合った燕尾服。

ぼろぼろの船には似つかわしくない、絶世の美青年がそこに佇んでいた。

「【雷雲／嵐海！】」

一言言葉を発することに、遙か遠くで轟音が鳴る。だが求めた結果が現れないのか、苛立たしげに舌を打っていた。

「ええい、“当たり”はまだか！」

男の言う“当たり”だった場合、“光の柱”という目印が現れる。それを待っているのだが、一向に出てくる気配がなかった。

「あの、主………？」

そんな男に、傍らに控えた黒毛の猫妖精が声をかける。執事服に身を包んだ、愛くるしい二足歩行の猫だ。

「なんだ、今私は忙しい！」

そんな彼に、男は声を上げる。

それでも彼には、言わなければならないことがあった。

「仮に“当たり”でしたら、

沈没して海の藻屑になってしまう可能性があるように感じるのですか………」

「あ………」

男は、その言葉に身体を固まらせる。

そして、指を弾いて稲妻を消した。

一度喚び出した嵐はそう簡単には消えないが、これでそうそう沈没することはないだろう。

「よし 次海へ行くぞ！」

「……………はいですニヤー!!」

猫妖精は主に倣って華麗に流すと、その後ろについて歩く。

そのやりとりにツッコミを入れることが出来る者は……残念ながら、いなかった。

七章 第二話 嵐上の航海（後書き）

第二話から、本格的に七章に入ります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

七章 第三話 凍土の国ベルファ

燦々と光る太陽に照らされた大地は、白銀に染め上げられている。建物や木々に至るまで、その全てが雪と氷で覆われた世界。

その割りに強い寒さはなく、むしろどこか暖かさすら感じられていた。

氷塊が所々に浮かぶ海。

その海岸を、一人の少女が歩いていった。

鮮やかな桃色の髪はツインテールに纏められていて、幼い容姿を際立たせる。

その小さく、そして整った顔に乗る二つの目。

それは、縦に割れた眼孔を持つ黄金色の双眸だった。

黒と白、それから桃色をあしらったフリル付のドレス。

ゴシックロリータな服装にマッチした、フリル付の黒い日傘を差しながら、少女は歩く。

よほど暇で退屈なのか、時折欠伸をしながら目元を擦っていた。

「ふわぁ……なんか面白いことないかなあー」

そうぼやきながら、少女は傘をくるりと回す。

すると、背中で大きななにかが動いた。

よく見ると、少女には人間にはない“器官”があった。

コウモリのような形をした、一對の翼。

右側は溶けた氷のような淡い浅葱色で、左側は燃えさかる炎のよ
うな赤色の羽。

臀部からひょっこりと生えている、先が三叉になった黒い尻尾。

少女は物語に登場する、“悪魔”のような外見をしていた。

「うっん？あれ、なんだろう？」

海岸に打ち上げられた、黒い“なにか”に、少女はあどけない仕
草で小首を傾げる。

そして、幾ばくかの興味を元に、小走りで“それ”に近づいた。

「ニンゲンさん、かな？」

俯せに倒れた、男性。

その身体を少女が軽く指で押すと、簡単にひっくり返った。

亜人ならではの力業である。

「ん？あれれ」

少女は慌てて少年の側に座ると、水で張り付いた髪をかき分ける。

そして、そこに隠れた顔を見て、自身の頬に手を当てた。

「まずい、ど真ん中で好みだわ」

頬を赤らめて、切なげな吐息を零す。

そして、十二歳前後の外見に似合わない、妖艶な表情で微笑んだ。

「ふふ、お持ち帰りするね。おにーさん」

少女は少年を、片手で軽々と持ち上げる。

そして、先ほどまでよりもずっと軽やかな足取りで、海岸を歩き出した。

少年　ナーリヤは、未だ目が覚めず呻り声を上げていた。

これが今回の事件の幕開けであることなど気がつくはずもなく、ただ少女の肩で眠るのだった。

静かな、さざ波の音。

鼻孔をくすぐる潮風の匂い。

身体に降り注ぐ暖かな日差し。

その明かりに照らされて、千里はゆっくりと目を開いた。

「チサ リクト、目が覚めたか？」

「フィオナ……？」

首を傾けて、声のした方を見る。

そこには、氷塊に腰掛けるフィオナの姿があった。

「雪？ここは……そうだ、ナーリヤ！」

身体の下に敷かれた、白雪の絨毯。

その感触に目が覚めて、千里は勢いよく身体を起こした。

一面の銀世界と、海岸に乗り上げた船。

千里は周囲を見回しながら、ナーリヤを探す。

「フィオナ、ナーリヤは……」

「まだ、見つかっていない。

あの嵐で投げ出された荷物などは、不思議なことに全てこの島に流れ着いていた。

「だが、ナーリヤはまだ見つかっていないのだ」

「そんな……」

嵐で投げ出された人間は、ナーリヤだけだった。

船の積み荷なども投げ出されたが、それらは全てこの海岸に流れ着いていた。

ならばナーリヤもと乗組員達で搜索したが、結局見つからなかったのだ。

「この島の住人が見つけて、救出したという可能性もある。まだ肩を落として“主を見捨てる”のは早いぞ、リクト」

「あ……はい、そうでしたね。フィオナ様」

千里は取り乱した心を、すぐに整える。

ナーリヤと離れてしまうということがこつこつと心細いなんて、知らなかった。

フィオナに諭されて男装のことも思い出し、今は何とか取り繕っている。

だがその内側は、未だ大きく揺れ動いていた。

「ナーリヤ……」

船員にナーリヤを搜索する旨を伝えに、フィオナが立つ。

その三步後ろに、千里が付き従った。

「さて、彼もまた私の友人だ。

搜索は手伝おう、リクト」

「はい、ありがとうございます！」

千里が勢いよく頭を下げると、フィオナは照れくさそうに頬を掻く。

どうにも、畏まった話し方をされるのは苦手だった。

「行方不明者の搜索へ行ってくるが……船はどうだ？」

船員の一人に、フィオナが声をかける。

護衛としてついてきた帝国の兵士で、彼は船の技師と相談をしているところだったようだ。

「ああ、はい。わかりました。」

船はまあ、損傷はありますが魔法使いもそれなりに乗っていますし、

遅くとも五日以内に出発できると思いますよ」

黄色の髪で目元を覆った青年は、そうどこか気の抜けた表情で説明した。

フィオナはその軽々しさにこぼれ落ちそうになるため息を隠すと、「そうか」と頷いて青年に礼を言う。

「引き止めて済まんな」

「いえ、主役不在では出航もできませんので」

後ろ手で青年に手を振り、千里と並び立つ。

あまり下がって付き従われると、息が詰まりそうだったためだ。

「まずは陸地をこのまま進んでみよう」

「はい、わかりました」

恭しく頭を下げた千里に頷くと、フィオナは雪を踏みしめて凍土の奥へ向かう。

その後ろで、千里はそっと光の粒子を集めていた。

「もしかしたら……」

ライアンが捕まった時のように、情報を吸収できるかも知れない。だが、今までの戦いと船上の雷の迎撃が影響しているのか、上手く力を集められなかった。

「お願い……無事でいてね、ナーリヤ」

胸に手を置き、願う。

ただナーリヤが無事であることを、千里は必死に願っていた。

十

熱に浮かされているような、鈍重な感覚。

心地よさとはかけ離れたまどろみを振り払うように、ナーリヤは目を開けた。

「くっ……あ」

身体に傷はなく、故に痛みはない。

けれど、強い疲労がナーリヤの身体に重くのしかかっていた。

高い持久力を持つナーリヤは、滅多に疲れを残さない。

だから、これほどまでに身体が重いということは、本当に久しぶりだった。

「ここ、は」

なんとか絞り出した声は、擦れていた。

ナーリヤはそれでも重い身体をなんとか起こし、霞む視界を瞬きで調整しながら周囲を見回した。

黒を基調とした、シックな部屋。

フリルのついたカーテンと天蓋と、高級感のある上品でどこか暗い雰囲気の家具。

十畳ほどの広さの空間で、ナーリヤは首を傾げた。

「どこ、なんだろう」

声を出すと、頭に鈍痛が走る。

風邪でも引いたのか、体調が優れているとは言えなかった。

「確か、僕は……そうだ、あの嵐で、投げ出されたんだ」

朧気な記憶を繋ぎ合わせる。

投げ出された船員、伸ばした腕、轟風豪雨、浮遊感、稲妻の音。そこから先の記憶はなく、今日が覚めるまでの過程が解らなかった。

「ん？……これ、は？」

そうして、ナーリヤは自分の服装が替わっていることに気がついた。

白いシャツに黒いネクタイ。それと、黒いズボン。ベッドの下には黒い革靴があり、壁には黒い上着が掛かっている。胸元にはネックレスがかかっている、手で掬い上げると、それがコウモリの羽を模した銀細工であることがわかった。

「誰かに助けられた……訳では無さそうだね」

徐々に回復してきた思考は、ナーリヤに現実を見せる。

右足に嵌められた鉄の枷、そこから伸びる黒い鎖。壁に繋がっている鎖は長く、これなら部屋の中を歩き回るくらいはできるだろう。

けれど、部屋から出ることはできない……束縛の、鎖だ。

ナーリヤはベッドから足を降ろすと、革靴を履いて一息つく。ベッドに腰掛けて改めて周囲を見回すと、扉には沢山の鍵がついていて窓には鉄格子が嵌っているという、“如何にも”な部屋だった。

「捕まった？」

「にしては、貴族を幽閉するような部屋だけど……」

見るからに高貴な身分ではない自分を、身なりをよくして“良い部屋”に入れる理由が分からない。もしかしたら、牢になる部屋がここしかなかったということも考えられるのだが。

「どんな意図があるのか解らない以上、迂闊に動けないか」

ナーリヤはそう呟くと、立ち上がる。

だが、途端に目眩がしてベッドに身体を預けることになってしまった。

緩やかな動作で右手を額に当てると、ひどく熱を持っていることに気がつく。

嵐の中で海に投げ出されて、風邪を引かないはずがなかったのだ。

「千里、心配しているんだろうな」

気がかりなのは、船に残ってしまった千里のことだ。

感じているフィオナがいる以上、男装のフォローはしてくれるだろう。

そう考えると、少しは気が楽になった。

「まずは、回復、しないと……」

最後にそう零すと、ナーリヤは革靴を脱いで瞼を閉じる。

悲鳴を上げていた身体は、たったそれだけで簡単にナーリヤの意識を落とした。

そうして、ナーリヤの眠りが深くなる。

回復を望む身体は、そう簡単に彼を起こそうとはしない。

そんなナーリヤの眠る部屋を、ノックする影があった。

コン、コン

短く二回、続けて音が鳴る。

返事がないことに気がつかないのか、それとも最初から気にしていないのか。

鍵を開けて、小柄な影が部屋に入ってきた。

「おにーさんっ！

ってあれね？まだ寝てるんだあ」

桃色の髪の少女 ナーリヤを拾ってきた、羽の生えた少女だ。

彼女はナーリヤが寝ていることに肩を落としながら、彼の眠るベツドにふわりと飛び乗った。

「ふふふ、かわいいー寝顔」

ナーリヤの胸に、幼い手を乗せる。

病的なまでの白い手は、きめ細やかで美しい。

その細い指を、少女は艶やかに動かす。

胸から鎖骨へ、鎖骨から首へ。

首から頬へ移動させて、少女はナーリヤに馬乗りになる。

「早く良くなって、早く目を覚まして、私と遊んでね。おにーさん」

少女はそれだけ呟くと、指をナーリヤの唇に這わせる。

そしてその指を自身の唇に持っていき、妖しく舐め上げた。

「んっ……ふふふ」

ナーリヤはまだ、目覚めない。

少女はナーリヤの寝顔にあどけない笑みを向けると、ベッドから降りる。

そして、軽く指を弾くと、彼女の影がゆらりと蠢き、盛り上がり始めた。

「アイン、看病をお願い」

「畏まりました」

少女と同じような、コウモリの翼。

だがその翼は少女のものよりも小さく、そして黒い。

そんな翼を持つ者が、少女の影から現れる。

白い髪に、縦に割れた銀の瞳。

クラシッくなメイド服に身を包んだ、二十歳前後の外見を持つ女性だった。

「ふわぁ……わたしも眠くなってきちゃった。

ツヴァイ、寢床の用意をお願いね」

「はっ」

再び影が盛り上がり、メイド服の女性が現れる。

最初の女性と、まったく同じ顔立ち。

違うのは、ポニーテールに纏められた髪と、縦に割れた青い目くらいだらう。

少女がメイド連れて、部屋を去る。

そこには、ナーリヤと“アイン”と呼ばれた女性だけが残されるのだった。

十

エクスの居城があつたニーズアルへ同様、船の立ち寄りのみ許された自治国家。

一年を通して氷雪で覆われた陸地であるここ“ペルファ”も、そんな国の一つだ。

「ここは魔族の住む地。

狡猾な知恵に優れたものが多いと聞くが、

まあ、一般人まで“そう”という訳ではないだろう」

幾つか存在する、集落。

その入り口で足を止めて、フィオナは千里に説明をしていた。

「まあ、用心するに越したことはないが、気を引き締めすぎるのも問題だ」

「うん……わかった、フィオナさんっ」

二人の時は、いつものように。

そう頼まれていた千里は、周囲に人がいないか確かめながら、力強く頷いた。

「夕刻ほどまで情報収集。」

その後、ここからまっすぐ南の海岸で集合だ。

「そこでいったん、情報を纏めよう」

「うん、その……ありがとう、フィオナさん」

「言っただろう？彼は私にとっても友達だ。気に負うことはない」

フィオナは照れくさそうに頬を掻くと、踵を返す。

そして、背を向けながら手を挙げた。

「それでは、夕刻にまた会おう」

「うんっ！了解っ、フィオナさん！」

去っていったフィオナに手を振ると、千里も目の前の集落に入る。必要ないということなのか、門番のような人影は見えなかった。

人捜しがしたいのなら、やはり基本は“聞き込み”だろう。

犯人を捜す刑事ドラマの、敏腕刑事。

その捜査風景を思い出しながら、千里は周囲を探索していた。

「うわあ、どこもかしこも……」

雪で覆われた大地。

その白銀は、家々をも包んでいる。

だが注目すべきなのは、そこではなかった。

道行く人々、その全てが“人”とは違っていた。

黒い翼と、黒い尻尾。

縦に割れた眼孔と、人並み外れた整った顔立ち。

千里は初めて見る“亜人”のみで構成されたコミュニティに、目を丸くしていた。

ちなみに千里は、住人と呼べる存在が二人しかいなかったエクス
の居城は、カウントしていない。

「気後れしてちゃ、ダメだよね」

気合いを一つ。

千里はきびきと歩き出す。

井戸端に集まる三人の女性は、主婦だろうか。

それならば、聞くのはここが良い。

「あの、少々お聞きしたいことがあるのですが」

なるべく違和感の無いように、男性的に振る舞う。

背筋はぴんと伸ばして、声色はやや低めに。

変声期前の少年に見えるように、千里は少し前までの弟の姿を思
い浮かべた。

「あら？どこの子かしら？」

「やだあ、可愛らしい子ね、ニンゲンかしら？」
「ふふふ、良いわよ。お姉さん達が“なんでも”教えて、あげ
る」

どこの世界、どの場所でも、“主婦”は強かで情報通だ。
若々しい外見だが、その口調は成熟した女性を思わせる。
同性である千里ですら“くらり”ときてしまうのだから、異性だ
ったらどうなることか解らないだろう。

清純な美しさを持つフィオナとは、真逆の美貌。
艶やかで妖しい美しさを持つ、この国の女性達だった。

「私たちは嵐でこの地に流れ着いたものなのですが……一人、行方
が知れないのです」

「あらあら、大変ねえ」

「そうねえ、それってどんなコ？」

口々に話し合う女性の姿は、圧巻だ。
悲しげに眉をひそめる千里に同情の念を込めた視線を送りながら、
噂話を交換する。

尾ひれ背びれがつくため正確さは期待できないが、煙の立つ場所
は聞けるかも知れない。

その可能性に、千里は真剣な表情で期待を寄せていた。

「はい、黒い髪に黒い瞳。」

それから、黒い鎧におおきな黒い弓を持った男性です」

「全身真っ黒ね」

「目立ちそうだわあ」

「ここなら逆に目立たないかも」

全身が黒に覆われている。

それは、言われて見れば目立つ格好かも知れない。けれど、黒い翼や黒い服のヒトが数多く存在するこの地ならば、なるほど逆に目立たないと言つこともあるだろう。

「あ、そうだね。」

ねえボウヤ、その男の子……“カッコイイ”？

「え　はい」

千里は、思わず頷いてしまう。

これでは自分がナーリヤを“カッコイイ男の子”と意識しているようで、恥ずかしさから火照る頬をさつと隠した。

「ああ、なるほどねえ」

「そうよね、可能性、あるわよねえ」

「え、と……？」

首を傾げる千里に、女性の一人が微笑む。

眉を寄せながら浮かべる笑みは、どこか気の毒そうなものだった。

「あそこに、大きな山が見えるでしょう？」

「え……えーと、はい」

女性が指さした先。

そこには、一際目立つ山があった。

なにせ、他の場所は晴天なのに、その山だけ吹雪に覆われているのだ。

「あそこに、ここ“ペルファ”を統治されている“魔王さま”がお

られるの」
「魔王、さま」

吹雪に覆われた、白銀の山。

その頂上に立つ城には、“魔王”と呼ばれる存在が居た。
外的からこの大陸を護る以外では、王として振る舞わない存在。

自治体として住人達が暮らしている中、ただその統治者として
鎮座するだけの王。

確かな実力を持つてはいるが、とくに支配する気は無いと言っ
珍しい存在だった。

「えーと、それって……王様、なんですか？」

王と名のつく存在にしては、なんとも不思議なポジション。

「そうねえ……」。

でもまあ、私たちをお守りくださっているのだから、とくに思っ
ところはないわよ」

「はあ……それで、その？」

千里は曖昧に頷きながら、逸れてしまった話を修正しようと問
う。

すると女性は、それから脇道に逸れてしまったことを誤魔化すよ
うに、甲高く笑った。

「お、おほほほ、ごめんなさいな。

それでその魔王さまなんだけど……“ツバメ”を飼うのが、好き
でらっしゃるのよ」

「ツバメ……って、鳥の？」

千里が心底不思議そうな顔で首を傾げると、周りの主婦達が頬を赤らめた。

いたいけな少年に悪いことを教えてしまったような、そんな感覚である。

「そうじゃなくてね、えーと」

「ようは、男の子を恋人にして困っちゃうっていうこと」

「一方的だから、愛人で言った方が正しいかも」

「愛人も違っんじゃない？やっぱりツバメよ」

結局話しがループしている。

黄色い声を出して興奮したように話す主婦達の、目前。

そこで千里は 固まっていた。

「え？愛、人……え、へ？」

千里の瞼の裏には、空想でできた女性とナーリヤの姿が浮かんでいた。

真紅の天蓋、薔薇のベッド、痛々しく巻かれた鎖。

横たわり弱々しく抵抗するナーリヤに近づく、艶やかな女性。

シルバールブンドの髪と深紅の瞳の、豊満な身体の女性が妖しく笑う。

どこか、エクスを女性にしたような女性が、その牙をナーリヤの首筋に

「ダメ ーっ!」

『!?!?』

強く目を閉じて千里が叫ぶと、主婦達が目を見開いて驚く。
千里はそんな彼女たちに気がつくことなく、暴走した思考を振り
払うように首を振った。

「だ、大丈夫?」

「え、あっはい!

あの、情報ありがとうございます!」

「え?ええ、いいのよ?」

走り去る千里に、主婦達は顔を見合わせる。
そして、誰からともなく、大きくため息をついた。

「いいわね、叶わぬことのない禁断の愛」

「そうね、ステキだわ」

「可愛い男の子と格好良い青年の恋」

『はあ……』

壁の多い恋にときめかない女性など、存在しない。
そう示すように、主婦達は盛り上がる。

その後しばらく、悪魔達の井戸端会議は、黄色い声で包まれてい
た。

十

情報を得て、走り去った後。

千里は一人、集合場所の海岸で蹲っていた。

「ナーリヤが、その女性と……？」

確定した訳ではない。

だが、それらしき男性の目撃情報はなく、怪しい噂話なら存在している。

それが事実で、それが現在起こっている事ならば。

「私、は」

その女性のことを、ナーリヤが好きになってしまったら。

そうすれば、“ただの友達”である自分は、側にいることができないだろう。

ナーリヤに恋人ができてしまったら、厚かましく一緒に居ることなんかできないだろう。

体操座りになり、膝の裏に顔を埋める。

潮の香りとさざ波の音が、千里の心に静かに響いていた。

「そうしたら、私は……」

一人は不安だ。

それでも、いつかは一人になる。

そんなことは解っているのに、千里の心は揺れ動いていた。

大きな手。

無骨で見た目よりも鍛えられていて、力強い。

広い背中。

自分の為に立ちふさがってくれたこともある、頼もしい背。

優しい、笑顔。

悲しくなった時に、いつも側にあった笑顔。

「ナーリヤと、離ればなれになる？」

別れはくる。

どんな人とも何時かは別れ、それが永遠ではないのなら、一人にはならない。

それでもきつと心の何処かで繋がっていると、千里はそう思っていた。

だから、悲しい別れの後でも、笑顔で前を向ける。

家族に会えない重圧に耐えられてきたのも、千里のこの“芯の強さ”があったからだ。

けれど、何故かそれが働かない。
締め付けられるように痛む胸が、千里を縛る。
両手で肩を抱き、唇を噛みしめ、強く瞼を閉じて震えを隠す。

「ナーリヤ……私、は」

脳裏に浮かぶのは、ナーリヤの笑顔。
時に激情を浮かべることもある、端整な顔立ち。
ナーリヤのその優しい笑顔が、瞼の裏で千里に、語りかける。

僕で良ければ、その……喜んで。
ずっと“それ”を、貫いて。

僕の前に現れてくれて、ありがとう、千里。
無事で良かった……本当に、良かった。

これからもよろしく……千里。

「あ」

満天の星、明るい夜空、月明かりの下。
すぐ側に在った、優しい笑顔。
暖かい感情を　くれたひと。

「わたし、は」

顔に手を当てると、目元から熱を持った雫が流れ落ちていることに気がついた。

拭っても拭っても、止まることのない 涙。

「わたしは、私は」

強く強く、下唇を噛みしめて、手を握る。

「私は、ナーリヤのことが」

これまでの関係が崩れてしまう、恐怖心。
不安と恐れがない交ぜになり、躍動する。
それでも、高鳴り始めた感情は……止らない。

これ以上、言葉を紡いではならない。
そう思っているのに、溢れた熱は、激しく動き出した。

「好き」

言葉にしてしまった途端、想いが溢れる。
荒れ狂う感情の波を支配する事なんて出来るはずもなく、千里は
ただ涙を流す。

「ナーリヤ……ナーリヤ、ナーリヤっ！……！」

どんなに名前を呼んでも、自分を包むあの暖かい笑顔は来ない。

「あ、ああああ……あああああつつっ！……！」

声を上げて、泣き叫ぶ。

せめてフィオナがやってくる前に、全て吐き出してしまおうと。

初めて降り立つ大陸。

白雪に包まれた海岸に、拙い叫びが、何時までも響いていた。

七章 第三話 凍土の国ベルファ（後書き）

次話から、七章のお話が動き始めます。

七章は、恋愛を中心よりにしたお話に構成したいと思います。

ご意見ご感想のほど、よろしく願います。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

七章 第四話 結成 即席冒険団！

連続して聞こえる、高い音。
時計の針が秒を指す、音だ。

その音を聞いていると、不思議と心が安まった。
そうして目を開けようとした時、ナーリヤは額に冷たいものが乗る感覚を覚えて、反射的に目を瞑る。

「あ、れ？」

「……目が覚めましたか？」

なんとか、ゆるゆると目を開けてみる。
するとそこには、白い髪に銀の瞳の、女性の姿があった。

「君、は？」

「私のことはお気になさらず」

表情の変わらない顔、感情の込められていない声。
冷たく突き放されたというよりも、始めから“こころ”であると思わせるような、無機質さ。

「君が、僕を？」

「いいえ」

短い言葉だが、意味は伝わる。
額に濡れた手ぬぐいを乗せて看病をしてくれてはいるが、助けたのは自分ではないと、女性は断言した。

「誰が、僕を？」

まだしつかりと声が出せず、短い問答しかできない。それにもどかしさを覚えながらも、ナーリヤは自分の体調が徐々に回復していることに、気がついていた。

「お嬢様にございます」

女性の答えに、ナーリヤはただ頷いた。

自分が助けられ、そして囚われているのは、その“お嬢様”の意図によるものなのだろう。

情報は得られた。

けれど、これ以上引き出せはしないだろうと、無機質な女性を見てナーリヤは結論づけていた。余分な情報を口外するような、そんな人には見えなかったのだ。

「僕は、ナーリヤ。君は？」

せめて名だけでも、と問う。

けれど答えは、帰ってこない。

自分の名を名乗る権限すら与えられていないというのなら、ここはある意味“想像どおり” 厳しい環境にあるのだろう。

「【はい、畏まりました】……私はアインと申します。ナーリヤ様
「え、あ……よろしく、アイン」

だが、女性　アインは、小声で何事か呟くと、先ほどまでの沈黙を破って名乗った。

そのことがどうにも不可思議で、ナーリヤは首を捻る。

「まだ体調は回復しておりません。

回復の魔法は常時展開していますので、今しばらくお眠りくださ

い」

「え？ あ」

アインの言葉と共に、強烈な眠気に襲われる。

ナーリヤはまだ気になることが幾つかあったのだが、それを聞く間もなく意識を落とすのだった。

氷塊の浮かぶ海を眺めながら、千里はゆっくりと立ち上がる。日も落ち始め、もう少ししたらフィオナもここに来るだろう。その前に、千里はやっておきたいことがあった。

「私は、ナーリヤと一緒に在りたい。」

ナーリヤの隣を歩いて、生きたいんだ」

改めて言葉に出すと、それはしっくりと心に収まる。

もう目を逸らすことはできない。

もう耳を塞ぐことはできない。

もう口を閉ざすことできない。

もう……自分を偽って笑うことは、できなかった。

「お願い、お願いイル」リウラス。

私にもう一度、“貴女”の力を貸して……」

祈りを捧げるように、両手を重ねて胸に当たる。

ふわりと舞い上がった金の粒子は、徐々にその光を強くしていた。

「光よ……【光よ！】」

吹き上がる、黄金。

光の奔流が渦を作り、天に舞い上げられた。

雲のように広がる粒子は、やがてその形を矢の形に変える。
それはまるで千里の意志を反映したかのように、空で大きな矢印
となった。

「やっぱり、ナーリヤはお城にいるんだ」

一直線に、光が城を指す。

その矢印に千里が手をかざすと、矢印は大きさを手のひらサイズ
にまで変えて、千里の手に収まった。

「示し続けて」

千里がそう呟くと、光が消滅する。

だが、千里の視界には、常に方向を示し続ける光の矢印が残って
いた。

「リクト！……あれはなんだ？」

「フィオナ、さん」

走り寄ってきたフィオナに、千里はゆっくりと振り向く。
そしてすぐに、言い訳を口にした。

「えつとね、探索魔法ってやつなんだ。

稲妻のショックで使えなくなってたんだけど、頑張ったら少し使
えたんだ」

「頑張ったら……って」

フィオナは、苦笑する千里に近づくと、その顔を覗き込む。

そして、呆れたような咎めるような声を出した。

「目が充血するほど頑張るな。」

ナーリヤを探し出す前に倒れでもしたら、どうするつもりだ？」

「へっ？あ、ああ、うん、気をつける！」

これは違う。

なんて言えるはずもなく、千里は慌てて頷いた。

目元に触れると、腫れているのが解る。

それほど涙腺が緩い記憶はなかったのだが、ここ最近泣いてばかりだと苦笑した。

「さて、情報交換……と行きかけたが、見つかったのなら話は早い。」

まあ、私を得た情報は、どれもこの地に関するものばかりだったのだがな」

凍土の国、ペルファ。

曰く、魔王の力で適度な気温に保たれている。

曰く、魔王の姿を見たものはいない。

曰く、絶世の美女であり、美青年を困っている。

ペルファに関するもの、というよりもほとんどが魔王に関する情報だった。

その噂には必ず魔王の“ツバメ”の話が出てきていて、その度にフィオナは頭痛を覚えていたのだ。

「直ぐに救出……という訳にも行かないか」

「え？な、なんで？」

「引きこもってはいるようだが、一国の主だぞ？」

「あ」

まずは一度正式に訊ねて、はね除けられたら今度こそ救出に行けばいい。

どうしても後手になってしまいが、まずはこちらが悪くならないように、一度対応が必要だった。

「素直に渡してくれるのなら、それで良し。

なんにしても、まずは行ってみる必要があるだろうな」

「そっか……それなら、早めに」

「ああ。しかしまあ念のため、一人帝国の兵士を連れて行こう」

役職に関わる人間がいるのといないのでは、相手の対応も大きく変わるだろう。

逆に言えば、その状態で“嘘”をつかれれば、それだけでこちら側の“口実”になるのだ。

「でも、兵士って誰を？」

「それは……まあ適当に捕まえよう」

「適当って……そっか、うん、適当以外にないか」

千里はフィオナと連れ立って、船まで歩く。

現在船は修理中で、完了するまでは乗組員達の寝床になっているのだ。

「そついえば、なんで寒くないんだろう？」

暖かい日差しに包まれているといっても、周囲は雪に覆われている。

海には氷塊が浮かび、海岸も陸地も家々も白銀に染まっているというのに、肌寒さはまったく感じなかった。

「なんでも、特殊な魔力がこの島に満ちていて、その影響らしい」「
フィオナがそう語ると、千里は目を丸くした。
明らかに常識から外れたことでも可能だというのだから、魔法は
すごい。」

「ううん……ファンタジーだ」

「ふぁんたじー？」

「う、ううん、なんでもないよ」

聞かれていたことに、千里は慌てて首を振る。
変なことを言う人だと認識されては、たまらない。

「よし、誰か捕まえてくるからそこで待っていてくれ」

「あ、うん」

船のある海岸に辿り着くと、フィオナが兵士に話を持ちかけに行
く。

黄色い髪で目元を隠した青年……最初に、船の状況を聞いた彼だ。

始めは嫌そうにしていたが、フィオナと一言二言言葉を交わす内
に、追い詰められていく。千里は遠目で見ているため話の内容は分
からなかったが、青年の戸惑いだけは見て取れた。

そうしている内に、観念したのか。

青年は肩を落としながらも、しっかりと頷いた。
もしかしたら、開き直りかも知れないのだが。

「リクト！彼が“快く”同行してくれるそうだ」

「あ、あはは……なんでこんなことに」

青年は、おぼつかない足取りでフィオナの後についてきた。その様子に、千里は苦笑いを零しながら、青年に手を差し出した。

「私の名はリクトといいます」

「これはご丁寧に。」

でも、俺は大した身分でもないから、気楽で構わないよ」

「ああ、ありがとう……と、貴方の名は？」

握手を交しながら、笑い合う。

どうにも頼りなさそうに見えるが、気の良さそうな青年だった。

「おおっと、ごめんごめん。」

俺の名前はレウ・ソル＝リウスだ。よろしく、リクト」

青年　レウは、そう言うと千里の手を強く握った。

その友好の証に心えるように千里が握り返すと、その横でフィオナが嬉しそうに頷いた。

「いや、気の良い仲間ができて何よりだ」

「あはは、すごい神経ツスね」

「何か言ったか？」

フィオナにジト目で見られて、レウは勢いよく首を横に振る。

帝国らしい黒の鎧を身に纏う兵士にしては、どこか軟弱なイメージを持つ青年だ。

「それでは、出発だ！」

「はい！」

「了解ッス」

エルフの女剣士と、男装の騎士と、頼りない帝国兵士。
奇妙な即席冒険団が、ここに結成されるのだった。

+

乾燥した場所に一人残されたような、そんな喉の渇き。
息苦しくなるほどの渇きを鎮めようと、ナーリヤは藻掻くように
手を伸ばした。

「み、ずを」

「はい、どーぞ」

子供のよくな、高い声。

その声に導かれるまま、ナーリヤは身体を起こしてグラスを手にとった。

そして、よく冷えたその水を、一気に煽る。

「ん……く……っ……はあっ」

そうしてナーリヤは、漸く目を開けるに至った。

霞みがかつた思考は晴れ渡り、身体を覆う疲労感はない。

鈍痛も目眩もなくなって、ナーリヤは自分の体調が完全に回復していることに、少なからず驚いていた。

「大丈夫？おにーさん」

「え、あ……君は？」

ベッドの横に座るのは、桃色の髪と真紅の目、そして赤と青の翼を持つ幼い少女だった。

その傍らには、最初にナーリヤが出会った女性　アインが、佇んでいた。

「わたし？」

わたしの名前は“リ・リリア・ウィル”オルクスフォンハイド”

……そうね、わたしのことは“リリア”って呼んでちょうだいな

「あ、うん……僕はナーリヤ、ナーリヤ”ロウアンス”」

起き抜けにテンションの高いリリアと会話することになり、ナーリヤは少しだけ置いていかれていた。

「もう体調は回復したと思うんだけど……どう？」

「え？ああ、すっかり良くなったよ。」

え、と……君が、僕を助けてくれたの？」

助けた、と言っても未だ足に鎖が嵌められているのは事実。

だからナーリヤは、努めてリリアの機嫌を損ねないように、笑顔で問うた。

それが 彼女の“熱”を加速させていることになど、気がつかず。

「ふふ、そーよ。」

わたしが貴方を助けて、ここで治療をしていたの。

ちよつと、メイド達にも手伝って貰っちゃったけどね」

口元に握り拳を当てて、リリアはくすくすと笑う。

その表情に妙な危機感を覚えながらも、ナーリヤは笑顔を崩さないようにしていた。

「なにか、お礼ができれば良いんだけど……」

「あら、お礼なんて良いのよ？」

「え？」

お礼という形でリリアの求めるモノを探ろうとしたナーリヤは、予想外の返答に首を傾げる。未だ怪しい笑みを崩さないリリアに、底知れぬ“ナニか”を感じながら。

「だって、おにーさん ナーリヤは」

リリアはナーリヤの左手を掴むと、自分の方へ引き寄せせる。

そしてナーリヤの首に巻き付くように抱きつく、耳元に声を投

げかけた。

妖しく艶やかな 悪魔の囁き。

「ずうつとわたしと、一緒に居るんだもの」

「え、あ」

脳髓を揺さぶるような、甘い匂い。

その匂いに崩れそうになる理性を、ナーリヤは意志の力で押しとどめた。

「僕、は。」

僕は、帰らなければならないんだ。リリア」

「あら？ “魅了” を跳ね返したの？」

ナーリヤの反応に、リリアは目を丸くする。

そして、愉しそうに笑いながらナーリヤから離れた。

「いいわ、ナーリヤ。時間をあげる。

大丈夫、時間なんていくらでもあるもの。よく考えて」

「時間はないよ、リリア。」

僕たちには、“君たち” ほど時間がないんだ」

ナーリヤの言葉を意に介することもなく、リリアはただ笑う。

そして、部屋にナーリヤを残して去っていった。

その去り際で、リリアは一度だけ、振り向く。

「しがらみ” なんて、時間には敵わないの。」

だって、過ぎ去ってしまえば、それは遺物でしかないもの」

荒くなった息を整えようとするナーリヤは、リリアの言葉に反論することができない。

だが確かな意志を示すために、強い瞳でリリアを見るのだった。

「また後でね、ナーリヤ」

重い扉が閉じて、ガキがかかる音がする。

何度か鳴った音が鳴り止むと、ナーリヤは力が抜けたように、ベツドに転がった。

「僕もつくづく、運がない」

ため息と共に零れるのは、そんな言葉だった。

ルルイフでは船に置いていかれ、漸く乗ったと思えばエク스에襲われて。

帝国では誘拐事件に巻き込まれ、闘技大会では因縁をつけられ。

漸くノーズファンへ行けるかと思えば嵐の海に投げ出され、助かったと思えば籠の鳥。

これを運がないと言わずして何と言おうと、ナーリヤはもう一度、大きなため息をつくのだった。

「なんにしても、まずは逃げ出す手立てを考えなきゃ」

リリアが心変わりをするまで待つ気は、無い。

それこそ、人間の短い一生が終わってしまう可能性の方が高いだろう。

ナーリヤには、魔族であるリリアほど、時間的な余裕はないのだ。

「足枷は……外れない、か」

ただの鉄の輪とはいえ、鍵もない枷。
剣やナイフも無しに外せるものではない。

また、武器は全て取り上げられてしまっているため、今は丸腰。
こういった状況から抜け出す手立てを“持つてくる”ことも、でき
ない。

「とはいえ、自分でもよくわかっていない力を使うのもなあ」

ナーリヤは、今日何度目になるか解らない息を吐く。

エクスの居城で戦っていた時から使っていた、“記憶を読み取る”
力。

何気なく使い始めた能力だったが、気味悪くもあった。

「僕は、魔法使いの家系だったのかな？」

魔法とは関わりのない、特殊な能力。

だがこの世界で不思議な力と言えば“魔法”なのだから、ナーリ
ヤの思考も自然とそこに集中していた。

物に触れれば、記憶が読める。

通りすぎる人間で試してみたこともあるが、生き物はダメだった。
能力が強くなったのは、ガランとの戦いの最中。

それからナーリヤは、どんな物に触っても、その“物が宿す記憶”
を読み取ることができていた。

「僕は、誰なんだろう？」

魔法使い？ いや、魔法の使い方は、よく解らない。

貴族？ いや、高貴なものとは無縁な気がする。

巫人？ いや、すくなくとも人間ではある、はず」

答えの出ない問答。

自分自身に問いかけて答えを求めても、帰ってくるのはがらんとした空っぽの過去だけ。

「千里 僕は」

そうして最後にこぼれ落ちたのは、船上で別たれてしまった“友達”の名前だった。

隣を歩いて行きたいと言ったのに、あの月の夜、そうエクスに宣言したのに。

「ここで躊躇っていたら、君には会えないよね……千里」

意識を集中して、足枷に手を触れる。

井戸の水をくみ上げるような感覚。

渴いた身体に水を仕込み混ませるような、開放感。

この刹那の快樂が……ナーリヤは、嫌いだった。

記憶が、ナーリヤに流れ込む。

この足枷が嵌められた人間達。

その末路が、ナーリヤの頭に逆流していく。

「【継承把握】」

完全に意識を切り替えたナーリヤは、自分でも意図していないところで、その言葉を紡いでいた。第三者が聞いてナーリヤに教えない限り、ナーリヤ自身で知ることができない、ナーリヤの無意識下

の声であった。

ねえ、わたしと遊ぼう？

き、きみは？

一人称の視線で展開される、過去の記録。

それを余すことなく、ナーリヤは“追体験”していく。
そこに活路があるはずだと、信じて。

ふふふ、イイわ、その顔。

ひ、や、め。

だが、だんだんと雲行きが怪しくなってきた。

慣れた仕草で、“自分の”ボタンを外していくリリア。

やがてリリアは、自分の服に手をかけて……。

「っ【中断！】」

反射的に、ナーリヤは記憶の奔流をせき止めた。

そして、恥ずかしさやら謎の申し訳なさやらで赤くなった顔を、
両手で隠す。

「うう、こんなのはっかりなのかな……」

ナーリヤは、なんとか流れ込む記憶の取捨選択ができないものか
と、奮闘する。

それが自分の能力を“鍛えてしまう”ことに繋がったとしても、
人様の赤裸々な情事なんか拝みたくなかった。

「集中、集中……」

それからナーリヤは、孤軍奮闘することになる。
流れ込む記憶の取捨選択という技能を身につけるまで。

七章 第四話 結成 即席冒険団！（後書き）

今回で、七章の折り返し地点となります。

そのため、次回への布石等で今話の終了とさせていただきます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

七章 第五話 灼けつく吹雪と凍てつく城

時は遡って、闘技大会終了から二日目の夜。
帝国内に存在する軍病院に、レウは足を運んでいた。

目的の部屋は、最上階の個室だ。
レウが見舞いする相手は“どこでもいい”と言ったのだが、隊長としての威厳を、と部下達に止められたのだ。

コンコン、コン
「失礼しまーす」

レウは、実に軽い口調で個室に入った。
礼がなっていないというよりも、これは彼の“気質”なのだろう。
中にいた人物も、それを気に咎めた様子はなく受け入れる。

「おう、入れ」

灰色の髪と灰色の目。

レウの隊長に当たる人物　　ガランが、ベッドの上で身体を起こしていた。

「いやあ、元気そうツスね」
「軍医に止められなきゃ、退院している程度にはな」

ガランは、疲れたようにそう零す。

驚異的な回復力などではなく、肩を貫通し腕の骨を折るほどの大怪我をしておいて平然とした顔をしているという、ただの“根性”

だった。

大けがを一瞬で治す医療専門の大魔法使いがわざわざ彼のために治療に来たりはしないので、後遺症が出ないように治療はされたが、当然三日四日で治療できるものでは無かった。

「それで、喚び出した要件はなんなんツスか？」

「ああ、ちよつと“頼みたい”ことがあってな」

そう不敵な笑みを浮かべるガランに、レウはあからさまに嫌そうな表情を浮かべる。

厄介ごとを嫌う性分故なのだが、この男の直属の部下になった日から、彼の苦難は運命づけられていた。

「えー……」

「なに、簡単な仕事だよ」

「本当ツスかあ？」

レウの言葉に、ガランは二度ほど頷いて見せた。

彼がどんな態度だろうと、信用ならない。

それはこれまでの経験からいえる“確か”な事だった。

「ただの“観察”任務さ。監視というほどでも偵察というほどでもない」

「観察ツスか？それなら別に、俺じゃなくても……」

「今使えるのはおまえだけだ。諦めろ」

そう言われては、頷くしかない。

ガランの下から離れて働く方が苦痛な以上、彼の命令には従わざるを得なかった。

結局、彼が一番“ソリ”が合う上司だったのである。

「俺の権限で、ノーズファン行き船に護衛として乗せてやる」
「えー、あの無駄な箇所を出さないほど金使った船ツスよね？」

レウが船の外装を思い出しながら呟くと、ガランはそれに頷く。
普通なら一生に一度も乗れない船ではあるのだが、それ故に“怪しさ”抜群だ。

「で……何を視てくればいいんツスか？」

「現住生物だ」

「はあ、動物や魔獣を？」

「そうだ」

真剣な目つきになったガランに対して、レウは未だ自然体だ。
これこそが、彼の“スタイル”なのだろう。

「各地で起こっている魔獣の凶暴化。
ノーズファンの内情はひた隠しにされているからこそ、それを視てこい」

もつとも神に近い国。

それが、ノーズファンだ。

だからこそ、調べておく必要があると考えたガランは、既に“上”に申請していたのだ。

「視て、帰る。」

それでいいんツスよね？」

「あー、そうだが……なんだ」

「まだなんかあるんスかあ？」

打って変わって気の抜けた表情になるガランに、レウも少し肩の力を抜いた。

切り替わった空気に鋭敏に反応できるからこそ、彼は“そういった”任務に向いているのだ。何事も、適材適所である。

「一緒に乗っている優勝者。

何かあったら帝国のメンツに関わる」

「どうにもツイてなさそーな人だから、フォローしてあげたい。

でも自分は動けないから俺に託すって訳ですね。いやー、お優しいッスね」

瞬時にガランの意図を読み取ったレウが、非常に楽しそうに笑った。

そんなレウに対して、ガランは笑顔を作る。

その手に、持ち運んでいたガントレットクロスボウを嵌めて。

「エルリスの元で眠れ」

「うわぁと?!」

容赦なく発射された弓を、レウはすれすれの所で避ける。

当てるつもりはなかったのだろうが、レウでなければ右耳は持つて行かれた可能性がある。そんな危険な一撃だった。

「任務了解！これより準備に向かいます！

それではまた旅の後で。“お優しい隊長殿”」

それだけ言うと、レウは素早く病室を出て扉を閉めた。

すると、先ほどまでレウの頭があった位置に、二射目が突き立った。

「いやあ、アレな見た目でカワイイところもあるもんツスねえ」

後にレウは、これについてこう回想する。

すなわち “ からかいすぎた罰が当たったのだ ” と。

嵐に巻き込まれて魔王城に乗り込むことになる、数日前の一時だった。

空は、信じられないほど澄んでいた。
少なくともあと三日は、晴れ渡ったままだろう。
そう確信することができる空なのに、少し前に視線を移せば、それも変わってくる。

切り取られたような、暗い雲。
雪山の頂上にそびえ立つ、大きな城。
その真上だけは、何故だか薄暗い雲が覆っていた。

「ほんとう、RPGみたい」

千里はそう、小さな声で呟いた。
もう目前まで迫った、淡い空色の城。
それが空色ではなく氷壁のような青だと気がついたのは、触れるほど近寄ってからだだった。

ゲームを余りやらない千里は、弟がやるゲームを隣で見ている。とくに自分でやりたいとは思えなかったが、進んでいく物語を見るのは好きだった。
エフェクトやグラフィックに心を躍らされることだって、無いとは言えなかったからだろう。

「ゲームなら、ボスに挑む感じかな？
でもそれなら、伝説の剣とか持っていそうだけれども」

近づいてくる吹雪。

その音で、千里の独り言は共に歩く二人には、届かなかった。

千里の腰に提げられているのは、なんの変哲もない鉄の剣だ。鋼鉄でできた幅広の剣は、予備として船に置かれていた物で、申し訳程度の手入れしかされていない。

どうにも不安な剣ではあるが、無いよりマシだと千里は開き直っていた。

「悪の居城って感じよりも、悪い魔女のねぐらって感じッスね」
「ああ、そうだな」

吹雪に一步踏み込んだ、レウの第一声。
確かにその荘厳な城は、来る物を招き入れて絞り尽くしてしまうような曇惑さがあった。

「流石に吹雪の中はさむ……くない？」

気温に変化がなかったということに、千里は気がついて首を傾げる。

降り積もり吹雪は、頬に当たると千里に熱を伝えた。

この吹雪は、“熱い”のだ。

「魔法か、能力か、その両方か」

「なんにせよ、厄介ってことッスよね」

「能力を魔法で底上げということでしょうか？」

千里の言葉に、フィオナは軽く頷いた。

が、すぐに少しだけ目を瞞って千里を見る。

「そういった方に、詳しいのか？」

「あ、はい。以前少し関わったことがあるのです」

「ほう……珍しいな、そうはいないと思ったのだが」

確かに、能力と併用で魔法を扱う者などそうはいない。

詠唱による能力のブースト……それは、吸血王エクスが用いた技だった。

もっとも、千里はそれをナーリヤ伝手に聞いたに過ぎないのだが。

「さて」

フィオナはそう一息入れると、城の門前に置いてあったベルを鳴らした。

この青いハンドベルは、船の中にあつたものと同様に音響の魔法が込められたものである。

それを鳴らして少し待つと、重い音と共に門が開いた。

開くのは、正門脇にある簡易出入り口だ。

「何か、ご用でしょうか？」

淡々とした声で言葉を紡ぐのは、白い髪の少女だった。

左目は前髪で覆い隠されていて、後ろは肩胛骨まで伸ばされている純白の髪だ。

唯一見える右の目は、夕焼けのような朱色である。

メイド服に身を包み、少女は滑らかに礼をする。

その背中に見える黒い羽は、彼女が人ならざる者であるという証明だ。

「事前に何の約束もなく申し訳ございません。
私たちはリックアルインからノースファンへ向かう途中の、帝国
の者です」

一歩前に出たレウが、軽快な口調と親しみのある笑みで事情を紡ぐ。
その手慣れた様子に千里とフィオナは小さな驚きを覚えていたが、それを顔に出そうとはせずただ佇んでいた。

「先日そちら様に運ばれた者。
その者は私たちの旅の仲間です……助けていただき誠にありがとうございました」

滑らかな動作で、レウは頭を下げる。
引き渡せ、ではなくまずは救命の礼を言っていた。

「ここに、そのような人物は運ばれておりません」
それに対して少女は、感情の込められていない瞳で、レウの言葉を
をはね除けた。

レウは、その言葉に心底不思議そうな表情で首を傾げる。
「おや？貴方の主から、何か聞いていませんか？」
「はい。そのような事実は、ありません。
遠方よりはるばるお越し頂きご無礼だとは思いますが、現在主は
所用で出ております。」

今日の所は、どうぞお引き取りくださいませ」
そう言葉を連ねながらも、少女は感情を揺らさない。

まるで人形が言葉を話しているような、奇妙な光景がそこにあった。

「いえ、しかし、黒い髪に黒い鎧の」

「そのような男性は知りませんと申し上げたはずです。

これ以上の滞在は主への無礼と認識致しますが、よろしいでしょうか」

「いえいえいえ、そんなとんでもない！

わかりました、私たちは引き上げましょう」

レウはそう、焦った口調でやや大げさな礼をした。

そのスピーディーな展開についていけずに固まる二人に、声を投げかけることもなく。

そうして二人がレウに詰め寄ることができたのは、重い扉が閉まる頃だった。

「よ、良かったのか？あれだけで」

「そ、そうだよ。あれじゃあ本当に中にいるのかすら」

言いかけた千里の顔の前に、レウは手のひらを向けた。

その制止の合図にぐっと思を詰まらせて千里が黙ると、レウはただ軽薄な笑みを浮かべたまま首を横に振ってみせる。

「いや、中にいることは確定したよ」

「なに？」

「さっきの問答ツスよ、フェイルラート様」

「さっきの ああ、そうか」

感心したように頷くフィオナに、千里はまだ解っていないという

表情を浮かべる。

そして、どうにか自分もその答えに至ろうと、頭の中で先ほどの問答を思い浮かべた。

「ああ　そっか」

千里が思い浮かべて気がついたのは、レウの言いようとそれに対する少女の答えだった。

どうにも、不自然な部分があるのだ。

先日そちら様に運ばれた“者”。

“その者”は私たちの旅の仲間にして……

そのような“男性”は知りませんと申し上げたはずです。

そう、レウは一度も、仲間が“男性”であるとは言っていないのだ。

言い間違いにすれば、状況ができすぎている。

だからこそ、これを盾にいくらかの行動は許される。まあ、グレーだが。

「それじゃあ早速、侵入経路を探しますか？」

「ああ、そうだな」

「うん！ありがとうございます、レウ」

こうして、三人はなんとか挑む段階にまで来ることができた。

この凍土の国ペルファにそびえる、蒼赤の魔王城に　。

十

朝も夜も夕暮れも、この城から見える風景に移ろいなど、ほとんど無い。

常に吹き荒れる吹雪は、天気の影響を遮断していた。

「く……あ」

その一室で、ナーリヤは蹲る。

部屋に置いてあるあらゆる物……先住者の遺物を手にとっては何も記憶を読み、そしてその度重なる負荷から、息苦しさを覚えていた。

助けて。

愛してる。

終わりにたくない。
終わらせて。
愛おしい。

喜怒哀楽、すべてが不幸なものでは無かった。
悲喜憂苦、すべてが幸福なものでは無かった。

「はあ……はあ……はあ……つ、ぎ」

曖昧になっていく境界。

痛みと傷みと悼みが、心に爪を立てていく不快感。

その全てに、ナーリヤは自身の心の境域が揺らぎ始めていることに、気がつかなかった。

そうして、その手に新しい遺物を取る。

机の引き出しにしまわれていた、先端が銀色の筒。

それはこの世界の人では知る由もない品　万年筆と、呼ばれるものだった。

冷たい万年筆を手に、強く瞼を閉じる。

意識を集中させ、意図的に混濁させ、そしてまっさらな状態にしていく。

これは、何度も繰り返すうちに習得した、記憶を読む力の“コツ”であった。

「　読み込み、開始」

無意識下で紡がれた言葉とともに、意識が反転する。

これまでとは違う、無意識下への深いダイビング。

そこにナーリヤ自身の意志はなく、いつしか視界の全ては闇に閉

ざざされていた。

/

世界は、漆黒に包まれていた。
それ以外の世界は知らず、見たこともない。
けれど彼は、自身の感覚に絶対的な自信を置いていた。

「おい、ジャック」

声をかけられて振り向く。
だが振り向いた後で、青年は小さく首を傾げた。
自分は……“そんな名前”だっただろうか、と。

しかし、現に自分は振り向いた。
そして今もうすでに、そのことを“疑問に思っ”ていない。
なら、なにも問題はないだろうと、小さく息を吐いた。

「どうしたんだジャック。」

そんな辛気くさい顔……まあ、おまえらしいが」

「ピーター……君は僕をなんだと思っているんだい？」

ピーターと呼ばれた青年は、ジャックが聞いたところによると
“茶色”だと思われる髪の毛をガシガシと掻きながら、笑った。

「なに”もなにも、聞いたぞ？」
「なにをだい？」

ピーターはジャックの肩に手を置くと、厭らしく笑う。
もつとも、そんな“雰囲気”としか解っていないのだが。

「【ロンドンの麗しき“盲目の建築家”さま】……だろ？」
「……なにさ、それ」

ジャックが心底解らなそうに首を傾げると、ピーターは再び笑みを浮かべた。

これもやはり、雰囲気を感じ取っている。
なにせジャックは、生まれてこの方、目で何かを捉えたことなど無いのだから。

「世界の色は、いつも黒ってか？」
「いや、世界の色は、いつも“無”だよ」

何も無い世界。
それでも、何も無いところに線を引けば、何かが出来上がる。
ジャックはその感覚に意味を見いだし、またその感覚のみに価値を抱いていた。

/

視点が、切り替わる。

ロンドンの大学を卒業し、田舎町へ行くことと思った。けれど、気がついたら“知らない空気”の場所にいた。

「アロイア、ですか？」

「ああ、そうだ」

現地の男性に地名を聞いて、ジャックは首を傾げる。

普通の感性を持つ人間ならば、ここで混乱して錯乱してしまっただろう。

けれどジャックは、生憎そんな感性は持ち合わせていなかった。

「あの、すみません」

「どうした？兄ちゃん」

「僕に お仕事をいただけないでしょうか？」

そこがどんな場所であろうと、関係ない。

ただただジャックは、愛用の万年筆で線を引く。

無色と無機質で構成された何も無い世界に、ただ、線を引いていたかったのだ。

/

見知らぬ世界に来たジャックは、一つの特技を身につけていた。今までは、歩いた場所の地図を書くことができた。けれど今は、わざわざ歩く必要すらない。

パンッ

ただ手を叩けば、帰ってくる音で周囲の地形を掴むことができる。その時だけ、何も無い世界に、ほんの一瞬“光”のようなものが見えるのだ。

「ジャック、海の上で“それ”って、何か意味があるのか？」

ここで知り合った船乗りが、ジャックに声をかける。

ジャックはその問いかけに、何とも言えない笑みを浮かべた。

「さあ、ね」

その手元に、“海図”を描きながら。

/

そうしてジャックは、道を辿る。

建築家としてノーズファンへ招かれ、そしてペルファに立ち寄り

た。

そこでも仕事を渡されて、嬉々として取りかかり、そして 出
会ったのだ。

「お兄さんが、建築家さん？」

「そうだけれど、君は？」

屋敷の娘と名乗る少女。

幼い容姿に人々が抱く感情は、親愛のものが常だろう。

けれど目が見えないジャックは、少女を“心”で視て、判断して
いた。

その出逢いが、ジャックの運命を加速させる。

「ねえ、私と遊びましょう？」

「息抜き程度で、良ければ」

悪魔の魔眼、魅了の瞳。

その効果は、。盲目のジャックには届かない。

けれどジャックは、彼女 リリアに惹かれていた。

リリアのその、深い愛情の裏に隠された、一縷の寂しさに。

/

そうして彼は、少女と約束を交わした。
今までにない速度で仕事を完遂し、それでも満足のいく出来にすると、ジャックは建築から離れた。

生きる意味、生きている実感、生きていく価値。

その全てを建築に傾倒していたジャックは、新たに見つけた“興味”に惹かれていたのだ。

「ジャックのそれは、癖？」

「うん？ああ、そうだよリリア」

万年筆をくるりと回す。

ただのペン回しだけでも、ジャックはわざわざ半回転させて、万年筆の尻で机を叩く癖があった。

「ふうん」

「君を“視て”いない訳ではないよ、リリア」

「すごいなあジャックは。なんでもお見通しなんだね」

ジャックの、何もない世界へ向けられる深い愛情。

その全てが、リリアは好きだった。

その全てを、リリアは愛していた。

ジャックと共にあることを、リリアはただ神に感謝していたのだ。

「ジャックの髪は、綺麗だね」

「リリアの声は、誰よりも美しいよ」

「ありがとう、ジャック」

リリアは、ジャックの金の髪を指でとくと、嬉しそうに微笑む。

それに笑い返すジャックもまた、幸せそうだった。

だが……幸せも長くは続かない。

/

よく、晴れた日だった。

ジャックは体調を崩し、そのまま動けなくなった。
定期的に降る吹雪の寒さに、盲目からかあまり身体が強いとは言えないジャックは、耐えきることができなかったのだ。

「人間は、やっぱり脆いわね」

「そうだね、本当に……そうだ」

ベッドで横になるジャックに、リアはつまらなそうに呟く。

退屈そうな横顔からは、愛した人が死の淵にいることに対する感慨など、伺えなかった。

「僕は、もうすぐいなくなる」

「そうね。わたしもそう思うわ」

淡々とした切り返し、青白い顔のジャックはただ微笑みを浮かべていた。

「僕は絶対、君を忘れないよ」

「わたしは忘れるかも知れないわ」

「それでも、僕は君を忘れない」

「そう、好きにすれば」

冷たい口調だった。

突き放すような声を放つ顔は、依然として変化しない。

ただただ、おもちゃを失った子供のような顔だ。

「だから、そんなに“泣かない”で、リリア」

だがそれも、そんな“仮面”も、盲目のジャックの前では無意味だった。

頬に這わされた冷たい手、その手に雫が落ちることはない。

リリアの表情は未だ変わっていないのに、その唇は震えていた。

「君が忘れても、僕は忘れない」

「もうすぐ、死んじゃうのに？」

「死んでも、僕は君を忘れない」

吐き出す声は、微かに震えていた。

そして漸く、その頬に涙が滑り落ちる。

暖かい、涙の雫だった。

「だからお願い、どうか」

「ジャック？ねえ、ジャック？」

切ない声、身を切るような旋律。

その全てに込められた感情が、リリアを包む。

もう動かない、最愛の人。

最後の言葉すら聞くことができなかつた、種族の違う恋人。その亡骸に、リリアは顔を伏せた。

その日から、魔王城には吹雪が吹き荒れている。冷たさを持たない、暖かい吹雪が。

/

痛みが奔る。

骨に、肉に、血に。

痛みが奔る。

怒りに、喜びに、悲しみに。

悼みが奔る。

過去に、現在に、未来に。

固く握られた万年筆。

それを視界に納めながら、ナーリヤはゆっくりと立ち上がった。万年筆を手に持ったまま椅子に腰掛けて、白紙の紙を置く。

ただそれだけで、不思議と落ち着いた。

「あれ？なんで僕は、“目が見える”んだろう？」

まあいいか、と小さく呟く。

そして、何も無い紙に、インクの出なくなった万年筆で線を引き
た。

必要な事は“線を引く”という行為であって、本当に線が引かれ
る必要はないのだ。

「確か、庭園を造ろうと思っていたんだ。

この吹雪じゃ寒くて花は枯れてしまっただろうから、晴れた日にや
らないと」

そう呟いて、ナーリヤはその手を止める。

震える左手で、微動だにしない右手を掴んだ。

からんと小さく音がして、万年筆が机に転がる。

その万年筆を見ながらナーリヤはふらりと立ち上がると、そのま
ま後退していった。

そして、その両手で、頭を抑える。

「僕は、いったい何を？」

思い浮かべるのは、自分のこと。

記憶を失いその後得た、自身の全てを思い出そうとする。

生まれはロンドンの郊外にある、貧しくはないが裕福でもない
家。

「違う、生まれなんか覚えてない。僕はミドイルの村で、拾われた」
明るい父と厳しい母、それから犬が一匹。

「違う、僕の親は爺ちゃんだ。弓の名手、セアック・ロウアンスだ」
盲目ながら絵を描くことが好きで、建築家の道を目指した。

「違う、僕は爺ちゃんと同じ狩人だ。絵を描くよりも、笛を吹くことの方が得意なんだ」

ロンドンの大学に通い、卒業して夢を叶えた。

「違う、僕は今、記憶を取り戻すための旅路にいる」

混濁する記憶、熱を持つ意志。

知らない感情と知る由もない記録。

無用の痛みと不要な悼み。

ただっ広い“無”の世界から、闇に包まれるような感覚。

旅路の途中で出会った、一人の少女。

「旅の出发点で出会った、小さな女の子」

記憶と照らし合わせながら、記録に侵食される。

それでも、それでも、侵されることのない感情があった。

僕の愛した少女……リリア。

「僕の、違う、僕は、僕は！」

浮かぶのは、桃色の髪の少女ではない。

太陽のように笑う、前を向く少女。

大切な、女の子。

声を、聞かせて。

「君の声が、聞きたい」

せめぎ合う、心。

吹雪と闇は、いつこうに収まることはなかった。

七章 第五話 灼けつく吹雪と凍てつく城（後書き）

七章第五話、終了です。

次話を前中後編三部で、七章を終えたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 前編

黒で包まれた、部屋だった。

黒いベッド、黒い天蓋、黒い絨毯。

アクセントに赤と白、それからフリルとレース。

極力下品な色合いは避けた、高級感漂う部屋だ。

その部屋の、キングサイズのベッドの上。

そこでリリアは、己の使い魔の報告を受けていた。

「それで、お客様はどうなったの？ドライ」

「はい、お帰り頂きました」

「ふーん」

左目を前髪で隠した少女　ドライは、リリアの質問に淡々と答える。

アインも同じように無感情な雰囲気だが、ドライはアインよりも覇気がなかった。

「大人しく帰るとは思えないけど、まあ仕方がないかな」

「はあ」

リリアは、首を傾げるドライを気に留めた風もなく、一人でそう呟いた。

特に、彼女に説明する気は無いのだろう。

「まあいいわ。」

わたしはこれからナーリヤの所へ行ってくるから」

「畏まりました、ご主人様」

頭を下げるドライの脇を通り抜けて、リリアは扉に手をかけた。そして、外に出る前に、見送りの体勢になったドライに声をかける。

「そうそう、ドライ」

「はい、なんでしょうか」

「侵入者とかが来たら、そうね……ま、適当に遊んであげて」
「畏まりました」

それだけ言い残すと、リリアは部屋の外に出る。

そして、楽しげな　それでいて、どこか寂しげな　笑みを浮かべて、ナーリヤのことを考える。

もう侵入するかも知れない人間達のことなど、リリアの頭には、既に入っていないかった。

雪は溶かすと水になる。

雪を溶かすには火をくべればいい。

では、熱を持った雪が積もっていたら、どうすればいいのか？

吹雪はやがて積もり、壁となる。

積もった壁が扉を隠し、城壁を築く。

そうしてできた砦は、まさしく自然の要塞といえることだろう。

「この城はおそらく数年前に彗星の如く現れた建築家の設計だと思
うんですけど……」

レウはそう言いながら、大きくため息を吐いた。

建築家には建築家のパターンや癖がある。個性を出せば出すほど、
その創造主の“味”が出る物なのだ。

「建築家？……ああ、盲目の？」

「流石フェイルラート様。ご存知でしたか」

レウはそう、感心したような口ぶりで頷く。
その様子に、千里はただ首を傾げていた。

「えーと……有名な人なのか？レウ」

「八年ほど前に突然名を上げた建築家だね。」

王国、帝国、それからノーズファンへ至るまで沢山の建築物を遺したんだ。

それも七年前に消息不明になったって聞いたんだけど、

……まさか辺境の国である、ペルファにも来ていたとは、ね」

レウは千里に説明をすると、視線を城に戻した。

降り積もった雪が、“盲目の建築家”といわれた男性の癖である、
出入り口を隠している。

庭園を造れば必ずそこへ通れる扉を作るのが、彼の癖だったのだ。

「突然、現れた？」

「そう。誰が聞いても“霧の都から来た”としか言わなかったらしいよ」

「霧の、都……」

聞いたことがあるフレーズに、千里は黙り込む。

突然現れて突然になくなった建築家。

霧の都から来たという言葉。

その状況と単語に、千里には思い浮かんだ地名があった。

「そう、霧の都。確か、霧の都」

「ロンドン」

千里が呟くと、レウとフィオナはきよとした表情で首を傾げた。

霧の都という“謎”のキーワードで、レウが思い出しにくそうにする程度には馴染みのない単語を千里が言ったためだ。

「なんだ、詳しいじゃないか」

「ロンドンから来た？イギリスの？それって　流れ、人？」

フィオナの言葉も耳に入らない様子で、千里は呟く。

ロンドンから来て、そして消息不明になった盲目の建築家。八年前と言えば、そんなに昔でもなかった。

「確かに彼は流れ人ではないかと言われていたけど、

……リクトは、流れ人について研究でもしているのかい？」

レウが問う後ろで、フィオナは思案下に俯いていた。

故郷に帰るためにノーズファンへ行きたい。

そう話していた千里の言葉が、緩やかに符合していた。

「あ、私は、その　」

「　まあ、流れ人だというのは公表する物でもないからな。

研究したいと思う人間が増えても、あまり不自然では無かるう」

自分は流れ人だと、千里は咄嗟に答えようとした。

けれどもそれをフィオナに結果的に止められることになり、口を噤む。

「そう、なんですか？」

千里が問うと、フィオナは真剣な視線を流しながら頷いた。その視線に応えて、千里も話を合わせることにする。

「そうだ。何時の時代何処の場所にも、好奇心で他者を侵害する存在は居るからな」

「まあそうでしょうねえ。流れ人には不思議な力がある、なんて話しもありますし」

そう語るフィオナに、レウが頷く。

フィオナ達の言葉に、千里は今更ながらに、散々危ない橋を渡っていたことに気がついた。

その可能性は、まったく考慮していなかったのだ。

流れ人について深くは知らなかったナーリヤもまた、同様に。

「まあ、とにかく……」。

その建築家ならここに扉があるはず、なんすけどね」

レウは、ため息を隠そうともせず話しを戻した。

あるはずといわれても、そこに広がるのは雪の壁のみ。

溶かそうにも、雪は熱を持っている。

打開策も思い浮かばず、レウはただただ息を吐く。

ため息で幸せが逃げるといふのなら、今日一日で一生の何割かの幸せを逃がしてしまっているのではないかと思えるほどだった。

「まったく、恨みますよ、隊長」

レウは二人に聞こえないように、呟いた。

彼に同行を命じた隊長　ガランの顔を思い浮かべながら。

攻略はまだ始まったばかり。
魔王城を探索するには、まだまだ問題が残っているようだった。

十

まどろみと現^{まどろみ}の境界。
夢と現実の狭間。

揺れる意識の中で、ナーリヤはどうか、自己を取り戻した。

「ジャック……君は僕に、何を伝えたいんだ？」

記録を読むことを止めようとしても、何度も繰り返し掘り起こされる記憶。

それは流れ人だったジャックが、こうして流れ人と旅をしているナーリヤに、何かを伝えようとしているようにも思えた。

「ロンドンの郊外で生まれた、盲目の建築家。

何かを創る事が出来ればなんでも良かったけれど、一番肌にあっただのが建築家だった」

ジャックという、一人の青年。

僅か二十四歳でその人生に幕を閉じた、身体があまり丈夫ではなかったひと。

その生涯の追体験は、ナーリヤの内側を動かしていた。

「二十四年の生涯。二十四年の思考。二十四年の葛藤。

その年月を上書きするだけの記憶は、僕には……僕の、内側には

「

記憶を持っていなかったナーリヤ。

自身のこと何一つとして解らない彼は、確実に侵食されていた。

コンコン

「っはい」

ノックに、慌てて返事をする。

当初考えていた脱出のための手はずは思い浮かばず、それなのに時間は確実に進んでいた。

「良かった、元気そうだね。ナーリヤ」

「リリア……ありがとう、体調はだいぶ良くなったよ」

アインを従えて入ってきたリリアに、ナーリヤは笑みを返す。病気で居ることは彼女に悪いと　そこまで考えて、ナーリヤは内心で頭を振った。

（呑まれちゃ、ダメだ！）

葛藤は顔には出さず、ただ困ったような笑みを浮かべているだけだ。

リリアはそんなナーリヤに、嬉しそうに……本当に嬉しそうに、笑った。

寂しがり屋で、笑うと空気が温くなる。

僕はそんな彼女の頬に触れて、彼女が笑っているのだと感じ取っていた。

「ナーリヤ？」

「え……あ、ご、ごめんっリリア！」

気がついたら、ナーリヤはリリアの頬に手を添えていた。

その笑顔を感じ取るような、優しい手。

その笑顔を感じていたかったような、切ない表情。

「ジャック　いや、そんな、はずは」

頭を振って我に返ろうとしていたナーリヤは、リリアの呟きに気がつかない。

ベッドに腰掛けたまま、万年筆を手にして座るナーリヤを、リリアは訝しげな視線で捉えていた。

「あ、そうだ、リリア」
「な、なーに？ナーリヤ」

リリアは、感情を隠すのが上手かった。
そのため、抱いた懐疑心にも似た複雑な感情を、素早く笑顔の下にしまい込むことができていた。

「僕は今旅の途中で、もう行かなければならないんだ」

ナーリヤはそう、申し訳なさそうにリリアに言う。

「助けてくれて、本当に感謝してるよ。でも」
「ダメ」

リリアはそう言い放つ。
灼けつくような熱を抱いた、どこまでも冷酷な瞳だった。

「なーんちゃって」

だが、リリアはその感情を“隠して”愉しげに笑う。
ナーリヤは、先ほどの冷酷な表情を気に留めながらも、安心したように表情を作って見せた。狐と狸の化かし合いのような、奇妙なやりとりだ。

「わたしはまだ、ナーリヤにいて欲しいな」

「そう、なんだ。でも、僕もずっと居る訳にはいかないから」
「どうして？」

「待っている人がいるし、それにノースファンへ行かなくちゃならないし」

両者とも朗らかな笑顔だが、あからさまに妙な空気が漂っていた。二人とも表情の裏に感情を隠すのが上手く、それ故に奇妙だ。

「それなら、迎えが来るまでここに居て。ね？」

「……そう、だね。解った、そうさせて貰っても良いかな？」

迎えが来ても通さない。

そんな意思表示を前に、ナーリヤは抜け出すことを前提に了承する。

「やった！ふふ、“これから”よろしくね、ナーリヤ」

「……そうだね、“それまで”よろしく頼むよ、リリア」

互いに安心したような笑顔を崩さないまま、頷き合う。

そうして、リリアはいったん退出するために、ナーリヤに背を向けた。

「また後でね、ナーリヤ」

「うん、また後で、リリア」

リリアは扉から出る時に、もう一度振り返ってナーリヤに手を振る。

そして外へ出てすぐに、アインが鍵を閉めた。

部屋の中においても空気であり続けられるのは、従者の鑑と言えよう。

「はあ」

リリアは廊下に出て、まず大きなため息を吐いた。

そして、扉に背を預けるように、もたれかかる。

「お嬢様？」

「ああ、大丈夫よ、アイン」

心配するアインに、リリアは気怠げな返事をした。

思い浮かべるのは、先ほどのナーリヤとのやりとり。

本当はナーリヤに対して、最後まで“内側”を見せずに行動するはずだった。

「でも、あの時」

リリアの頬に手を添えたナーリヤは、そのまま誤魔化すように笑った。

そして、会話の最中、無意識の最中。

「ペンを半回転回してから、ペンの後ろでとんと自分の膝を叩く」

ナーリヤが行ったその仕草は、“彼”の癖だった。

時折見せる表情も、仕草も、笑顔も、空気も。

全てが全て、“ジャック”とよく似ていた。

「帰ってきて、くれた？」

出会ってから、僅か一年。

それだけで自分の側から居なくなってしまった、最愛の人。

「ジャック」

声に出して、名を紡ぐ。

そうするともう、感情は止まらなかった。

「ジャック、ジャック、ああ……ジャック」

顔を両手で押さえて、何度も何度も名を紡ぐ。
そうして顔を上げた時　　リリアはそこに、凄惨で妖艶な笑みを
浮かべていた。

「もう、二度と離さない。

過去を司るエルリスよ……もう貴女の元に、彼を送りはしないわ」

アインを従えて、歩き出す。

適当に遊ぼうと思っていた侵入者とも、本気で“遊ぶ”必要が出
てきた。

そうして微笑む彼女の表情は、悪魔達を束ねるのに相応しい“魔
王”の貌だった。

放任主義の悪魔王。

その本質は、箱庭に閉じ込め平穏を与えて飼い慣らす、監視者で
あった。

世界に悪魔という種族がほとんど見られないのは、この国から悪
魔が出ないため。

このペルファから出る必要はないと、感じさせられているためだ
った。

「ふふふふ……あは、あははははははははっ」

リリアの愉しげな笑い声が、魔王城に響き渡る。

これは祭典だ。悪魔が己の欲望に動くための、儀式だ。

ここに、彼女の舞台が、幕を開けた。

十

そこは、ただただ静かな空間だった。
石畳で覆われた床と壁と天井。
ぼんやりと光る魔法のランプ。

「まさか地下道があるとはな」
「ここの人って、地下が好きなのかな？」

フィオナの呟きに、千里が小声で同意する。

アロイア、帝国ときて、ペルファの城にも地下の道。こつくれば、千里のこの感想も仕方がないものと思えた。

「いやあ、すっかり忘れてましたよ」

先頭を歩くレウが、音の反響に気をつけながら、そう零した。

盲目の建築家の特徴として、必ず建物から人を逃がすことができるように設計されている隠し通路が造られる、というのがあった。

その出入り口には現地の魔法使いに協力して貰って造る、扉を塞がない魔法がかかっているのだ。

そうそう災害にも巻き込まれないため安心以上の価値はなく、故に彼の建築物の特徴として思い浮かばなかったようだ。

「自分の造った建物を捨てても、逃げて欲しかったのかな？」

千里は純粹に、思ったことを口にする。

盲目の建築家と呼ばれた青年は、命の価値をよく知る人だった。当たり前のこととは言い切れないからこそ、千里は顔も知らない青年に、好印象を抱いていた。

「さて、この扉の向こうが、たぶん城の内部ツスよ」

レウはそう言うと、取っ手のついた石の扉に手をかける。

横にスライドするタイプの扉で、そこを開くとカビの匂いと共に広い空間が目に入った。

「城の地下倉庫ツスね」

「甲冑や剣が立ち並ぶ、薄暗い部屋だった。要らないものを詰め込んだのか、ろくに整理もされておらず雑多な風景である。」

「リクト、折角だから大剣類を物色しておいたらどうだ？」

「ええ、泥棒ではないでしょうか？」

「そういつてナーリヤを盗られるくらいだったら、いいのではないか？」

「あう」

フィオナに促されて、千里は倉庫を見て回る。

気になるものでもあるのか、レウも同様に見ていた。

そうしている内に、千里は倉庫の一部が輝いたような印象を覚えた。

そして、何かに引き寄せられるように、部屋の奥へ行く。

そこには、壁に立てかけられた、一本の剣があった。

「これが、一番丈夫かな？」

そういつて千里が手に取ったのは、柱のような大剣だった。

千里の身長の一・二倍ほどもある剣で、石柱から削りだしたような、切っ先の平らな両刃の剣である。

「リクト、君力持ちだね」

「へっ？あ、ああ、うん、まあ、ね」

レウに掠れた声で言われて、千里は慌てて頷いた。

千里の身長の一・二倍ということとは、レウの身長よりも大きい剣と言

うことだ。

それを片手で軽々と持ち上げられては、そんな感想以外に持てなかった。

「でもそれ、魔法使いの作品ツスね」

「そうなのか？」

「はい。署名があります」

フィオナはレウの言葉に、千里の持つ剣を覗き込む。

丁度鐔の当たり、擦れて見えにくくなっているが、確かに魔法使いのものと思われる刻印があった。

「それじゃあ、そろそろ行きましようか」

レウは物色したと思われるものを腰のポーチにしまいながら、二人を促す。

急いだ方が良かったかどうかはまだ解らないが、千里は胸に宿る嫌な予感に焦燥を覚えながら、頷いた。

地下倉庫にある階段を登ると、城内の廊下に出た。

内装は大理石のような石造りを基調として、高級感のある黒色の装飾品で飾られている。

エクス銀びか城と違って、目に痛くないことに千里は密かに安堵していた。

「さて、ナーリヤ君の居場所って、探れるんだっけ？」

「あ、うん。ここから直線で斜め上」

千里が目を眇めると、そこには彼女にしか見えない矢印があった。これでナーリヤの居場所を探れるので、入ってしまえばどうに

もなつたのだ。

「それじゃあ早速移動を」

「はいはいはい、そのアンタら」

背後からかけられた、女性の声。

その声に、千里達は咄嗟に振り返った。

黄色の釣り目に白のショートカット、悪魔らしい黒い翼と黒い尻尾。

メイド服に身を包んだ女性が、鋭い視線で腕を組んでいた。

「誰に断って、リリア様の居城に入ってるワケ？」

見るからに好戦的な態度だった。

最早戦闘は避けられないと、千里はフィオナ達と頷き合う。

「私が、合図を」

「頼んだ、リクト」

小声で話すと、千里は腰の通常サイズの剣に手をかけた。

念のためと持ってきた大剣は、廊下で振るには大きすぎるのだ。

「三十六計！」

「へえ、詠唱か？面白い！」

無手で構えた女性相手に、千里は叫ぶ。

そして、前に飛び出ようとしつつ、振り向きながら後ろに飛んだ。

「逃げるにしかず！」

「へっ?!」

と、同時に残りの二人も走り出す。

その行動に思わず固まる女性を、その場に置き去りにして。

「はははっ、良いハツタリだ、リクト！」

「あ、あはは、は」

声を上げて笑うフィオナに対して、千里は苦笑いをしていた。割と知名度のある諺なので、故郷ではまず使えない手だ。

「待あてええええつつつ！！！！！」

後方から聞こえる、怨嗟の声。

逆鱗に触れるのは解りきっていたが、仕方がない。

「こちらフィーア！エントラスホール方面にネズミが三匹！」

共感の魔法でも使っているのか、それとも別の力か。

女性　フィーアは、額に血管を浮かべながらそう叫んだ。

そうして大きな扉を抜けると、そこは玄関口だった。

大きなエントランスで、フィーアは三人がここに向かっていてことを示していたのだ。

「ふん、我らが主様の居城に侵入者とはな」

エントランスホール。

そこに佇んでいたのは、一対の剣を腰に提げた、ポニーテールの女性だった。

リリアに直接指示を受けてやってきた、青い瞳の使い魔　ツヴ

アイだ。

「後悔に苛まれながら、疾く逝ね」

青色の双剣が、抜かれる。

剣真は半透明で、青色に澄んでいた。

「とりあえず、切り抜けるしか無さそうだね」

千里はそう零すと、背負った大剣を引き抜いて構えた。

広い空間ならば、この大剣を扱うことができる。

「二対三か、気が乗らん」

「俺は頭数に数えないでくださいよ」

フィオナも剣の柄に手をかけ、レウも腰の短剣を抜く。

レウの短剣は、柄だけ拳五つ分の長さを持つ剣だった。

柄頭に、緑色の宝石が装飾されているのが、特徴的だ。

「よくも逃げてくれたな、テメエら」

フィーアがそう呟くと、その手に黒い鎧が出現した。

近接戦闘が得意なのだろう。彼女の武器は、ナックルだった。

「二対三が気にいらんか？」

賊のわりに真つ当な戦士の魂があったか」

ツヴァイはそう言うと、好戦的に微笑んだ。

「そう言われれば、私も気が乗らんよ。」

……“四対三”と、いうのは、な」

ツヴァイの言葉と共に、“天井から”二人の少女が降りてくる。

一人は気怠げな表情を浮かべた顔の左半分を髪で覆った、朱色の目の少女　ドライ。

もう一人は、紫色の髪を二つお団子にした少女だった。

「さっさと、終わらせる」

「ファイちゃん登場ですよっ！」

ドライは淡々と、長い柄の突いた斧　ハルバートを構える。

同時に紫色の髪の少女　ファイは、長い棒を器用に振り回した。

「私は青いのと朱いのを片付けよう。リクトは？」

「紫の、かな」

「ええ、それじゃ俺が、あの妙にいきり立つてる黄色いのツスカ
く？」

挑発的な言い回しに、黄色いの　フィーアは額に浮かべた青筋を増やす。

今にも断ち切れてしまうのではないかと思わせられるほど、怒りに打ち震えていた。

「挑発に乗るな、フィーア。」

私とドライはエルフへ。折角だ、お誘いに乗ろう」

そう言うツヴァイも、言葉の端々に苛立ちが垣間見える。

苔にされて黙っていられる悪魔ではない。彼女は言うなれば、武人であった。

「わわ、それじゃあ私の相手は、あのカワイイ男の子なのかつ、な
」？」

「チツ、こいつ一人か。まあいい、ぶちのめしてやるよ」

上手く、人数を割ることができた。

そのことに、フィオナは小さく微笑んだ。

「何を笑っている？」

「いや、二人だけで私に敵うとでも思っているのか、とな」

「主に“女は徹底的に打ちのめせ”と仰せつかっている。心配
はいらん」

安心して本気で行くことができる、とツヴァイは付け加える。

そして、その双剣に水の雫を纏わせた。

「【水練・疾風】」

両手を振り回すような、高速斬撃。

それをツヴァイは、フィオナから離れた場所に立ったまま、放つ
た。

超高速の斬撃を遠くに当てる技。それは、初見で相手の命を刈り
取る技だ。

けれど、それはフィオナの得意とする剣に、似通っていた。

「【閃光紅蓮】」

炎が煌めき、斬撃音と共に水蒸気が上がる。

それは、ツヴァイが飛ばした“水”が、蒸発する音だった。

「ぬるい」

「でも、隙だらけ」

そう呟いたフィオナの上空から、飛び上がったドライが襲いかかる。

その巨大なハルバートに纏わせるのは、朱色の光だった。

「喰らい尽くせ【朱紅の大牙】」

「つと」

空気の壁を抜くような、ゴウツという轟音が響く。

フィオナはそれに警戒しながらも、太刀筋を読んで余裕を持って避けた。

ドオンツ

同時に地面にハルバートが当たり、朱色の光が床に流れ込む。

そして、その光は避けた先のフィオナの足下で、輝いた。

「【二重大牙・咬】」

「ちっ！」

地面から飛び出る、朱色の牙。

それをフィオナは、高く飛ぶことで避ける。

だがその先には、二本の剣を大上段に構えたツヴァイの姿があった。

「墜ちろ」

「【閃光紅蓮】」

「つくく?!」

フィオナは咄嗟に、抜刀でもってその二連撃を弾く。けれど、同時に、ひび割れる音が彼女の耳に届いた。

「やはり、この鞘では持たないか」

苦々しく呟くも、その焦りを敵に見せたりはしない。

フィオナはあくまで余裕な表情を崩さず、鞘から剣を引き抜いた。

「その戦士の力、しかと見届けた。

先の無礼は、この剣の輝きを以て許されよ」

「ふむ、漸く抜いたか」

フィオナの言葉を、ツヴァイは疑うことなく受け入れる。

ドライはそもそも考えるのが面倒なようで、特に反応はなかった。余裕の表情を破られれば、つけ入れられる。

だからこそフィオナは、得意とする抜刀がさも前座であるかのようには振る舞っていた。

「さて、ここからが 本番だ」

フィオナの宣言には、歴戦の威圧が込められていた。

その燃えさかる劫火のような気配に、ツヴァイは頬を緩ませる。

戦闘はまだ始まったばかり。

緑と朱と青が、ここに交じろうとしていた。

ヒュンツと、鋭く風を切る音が響く。

一度や二度ではない、三度四度でもない。

十や二十の拳による連撃が、レウに向かって放たれていた。

「このオ、チヨロチヨロとツ！」

レウはそれを、柳のような体捌きで躲していた。

決して余裕のある表情ではないが、それがフェイクだと思わせるほど当たらない。

「【震撃！】」

「おわっ！？」

フィーアの拳が、レウに向かって放たれる。
それをレウが避けると、その拳は彼の後方にあった柱にぶつかった。

ドンッ！

「うわっ?!」

その柱が、一拍間を置いて破裂する。
当たった場所の内側から力を爆発させる能力。
それが、リリアの使い魔であるフィーアの力だった。

「当たれば終わりか、スリリングなこと」

そうぼやきながら、レウは短剣を逆手に構える。
柄頭の宝石を、フィーアに突きつける形だ。

「漸く戦う気になったか、腰抜け！」

「まあ、そろそろ動きは覚えてきたし」

「戯れ言をッ！」

フィーアの拳を避けつつ、レウは大きく後方へ跳躍する。
そして、己の身体に魔力を滾らせた。

「【大地よ、我が傀儡となりて彼の者を討ち滅ぼせ!】」

地面が盛り上がり、それがやがて人の形となる。
岩石のような大きな身体は、典型的なゴーレムといえた。

「【大地の兵よ、その身を鋼鉄と成して鉄壁の守護を得よ!】」

更に、そのゴーレムの身体が鈍色に変色する。

内側からも破壊されないようにと造られた、鋼鉄の兵だった。

「手の内見せ過ぎなんだよね、君」

レウは余裕を持って、ゴーレムの背後に回る。

大地の力を持った魔法使い、その真髄は生成にある。

それを体現するような、“壁”であった。

「魔王の居城に入り込んだ悪の魔法使いか？笑えないな」

フィーアはそう吐き捨てるように言うと、黄色の光を両腕に纏わせる。

そのぼんやりとした光は徐々に強くなり　そして、消えた。

「【震撃・剛】」

風を切って、拳が振るわれる。

光が消えたことに訝しみながらも、レウはフィーアにゴーレムを向かわせた。

「行け」

「逝け」

レウの指令と同時に、神速の踏み込みを持ったフィーアが突貫する。

フィーアはその右腕を弓なりに引くと、撃鉄を以て放たれた弾丸のように拳を打ち出した。

ドンッ

そのあまりの威力に、全長二メートルはあるかというゴーレムが後退する。

一步二歩と下がり、だがそこで踏みとどまった。

「馬鹿力だねえ。でもまあ、俺も急ぎなんだ」

レウはそう言うと、表情を変えないフィアに向かって笑みを浮かべてみせる。

そして、短剣を右手で構えながら、左手で指を弾いた。

「【大地よ、並列を成せ】」

ゴーレムが複数、大地から出現する。

その数は、ざっと数えて十数体もあった。

「【隊列形成、号令……鉄騎の凱旋！】」

ゴーレムがそれぞれ、手に斧や剣を構えて立ち並ぶ。

レウという魔法使いを中心とした、たった一人の軍隊だった。

レウは横目で千里を見ると、その方向にも兵を向かわせる。

「リクト、そつちのも俺が相手をしておくよ」

そして、千里を見て声を上げた。

千里もそんなレウの言葉に頷いて、返事をする。

「っ……レウ、解った！」

「あっ、まだ数合交えただけなのにい」

千里とその相手のフィフは、まだ探り合いの最中だった。故に能力を使うことなく引き離されて、フィフは唇を尖らせる。

「まあでもいいですけど。女の子を通さなきゃ」

「協力してさっさと倒して追いかけるぞ、フィフ」

「はいはいはい、もうフィーアちゃんはせっかちなんだよ」

じりじりと距離を詰める二人に、レウはただ笑みを浮かべていた。実のところ、レウは防衛中心で決定打に欠ける節がある。そのため、彼の本領は“足止め”だった。

だが、どうせ千日手ならば、さっさとナーリヤを救出してくれた方が良い。

「期待してるよ、“準優勝者”さん」

レウはそう、誰にも聞こえないような小声で呟く。

そして、前髪で隠された瞳で鋭く二人を見ながら、ただ笑みを浮かべた。

魔王城の玄関口で、四つと二つが 激突する。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 前編（後書き）

前中後編三部で、七章は終了。

今回は長めですが、次回その次はもっと長いです……。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
中編も、どうぞよろしく願います。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 中編

吹雪の音が、ごっごっごつと響く。

熱を持った吹雪が与えるのは、寒さではなく暖かさだ。

城壁が丁度良く熱を遮断しているのか、部屋の中は丁度良い温度に包まれていた。

そのうちの二室、鉄格子の嵌められた部屋。

城の最上階にある、王座の裏から伸びる渡り廊下でしか訪れることができない、孤立した塔の中にナーリヤは居た。

ガンツ、ガンツ、ガンツ

何度も何度も、調度品の黒いランプを、足枷に叩きつける。

そうしている内にランプが壊れてしまったら、次は椅子に叩きつけたりと、ナーリヤはどうか枷を外そうとしていた。

お願い、僕を。

脳裏に響く声に、ナーリヤは心の中で何度も首を振る。

侵食してこようとしてまで伝えなかった、ジャックの心。

それを伝えなければならぬとは思っているが、このままでは“手遅れ”になる。

ドオオ……ン

遠くで響く、轟音。

それは、この城の住人と“何者か”が戦闘している音だろう。

「千里、僕は」

共にありたいと願った少女の名を、口にす。
リリアに向ける愛情の逆流の中、ナーリヤの心を保ち続けてきたのは、千里に対する感情だった。

リリア、僕は。

「ごめん、ジャック。僕は君と“同じ”にはなれないんだ」

愛しているよ、リリア。

「僕は違う。僕はリリアのことを、よく知りもしない」

響く問答の数々。

それを幾重にも繰り返す内に、ナーリヤはかえって落ち着き始めていた。

自分の内側に、自分の想いを問う。

そこにあるのは、しがらみをかなぐり捨てた、純粹な感情だった。

「千里は、故郷に“帰らなければならぬ”」

なら、リリアと居ればいい。彼女は、最期まで共に在ってくれる。

「そうかもしれない、でも……」

でも？

別れの日は、そう遠くないだろう。

住んでいる世界が違うと言うことは、そういうことだ。

「けれども僕は、僕自身を偽りで塗り固めたくない」

記憶の継承により、ナーリヤは“誰にでも”為ることができる。けれど、だからこそ、ナーリヤは自分自身の心根だけは、偽りたくなかった。

「僕は、千里のことを　愛している」

いいの？本当に、それで。

「叶わないことかも知れない。それ以前に、伝えて良いものかもわからない」

それでも。

それでも、とナーリヤは告げる。

記憶の逆流によって一時的な人格を持ったジャックに、自分の全てを吐き出す。

「それでも僕は、彼女の隣を、歩きたいんだ」

そう、か。そこまで言うのなら、僕に言えることはない。

「僕は僕にできることはする。だから君の想いは必ず伝えるよ、ジャック」

ありがとう、ナーリヤ。

感謝の言葉が、ナーリヤの内側に染み渡る。

それと同時に、ナーリヤは自分の心が解き放たれたような、そんな感覚を覚えた。

万年筆を、壁に差し込むんだ。

「え？」

枷の周辺、そう、そこだよ。

ジャックに促されるまま、ナーリヤは枷の元の周辺にあった穴に、万年筆を差し込む。

すると、駆動音と共に、ナーリヤの脚から枷が外れた。

彼女に頼まれて造ったけれど、設計したのは僕だからね。

それは、ジャックが肉体を得ることを諦めて、ナーリヤに全てを託した証。

ナーリヤを信頼して、己の心を預けたのだ。

これで部屋の鍵も、開いたはずだよ。

「ありがとう、ジャック」

手元に武器は、一つもない。

けれども、ここで逃げ出す訳にはいかない。

ジャックとの約束を果たし、千里の笑顔を見るために、立ち向かわなければならぬ。

行こう、ナーリヤ。

「そうだね、ジャック。行こう！」

ナーリヤはそう言うと、扉に手をかける。

そして一度だけ寂しげな部屋を振り返って、廊下に飛び出るのだった。

玄関エントランスを抜け、廊下を走り、階段を駆け上る。
背負った大剣の重みを感じないほどに、身体に黄金の粒子を纏い、
千里は矢印に従って魔王城を駆け抜けていた。

「ナリーヤは……この先！」

長い廊下が見えると、そこへ矢印が一直線に伸びていた。
だが、ただで通してくれはしないということが、廊下には羽を持
った黒い異形の生物が壁や天井から沸き出していた。

「本当に、ゲームの“悪魔”みたい」

城下の住民たちのように、美しい容姿ではない。全身が闇色で覆われた、角と羽と尾を持つ悪魔。それが、無数に出現し始めていた。

「廊下で、大剣は振れない……なら」

千里は、ただ空中に手を伸ばす。

相手が大した堅さを持っていないのなら、剣に纏わせる必要もない。

ただ……振り抜けば、いい。

「イル＝リウラス――光より顕れる者」

黄金で象られた、光の剣。

それを千里は、腰だめに構える。

『おおおおおおお』

群がってくる悪魔を一瞥すると、千里は目を閉じる。

そして渾身の力とララより受け取った技術を用いて、その大剣を振り抜いた。

「せいっ！」

ドンッ！

光の剣の大きさならば、廊下の壁に引っかけたことだろう。

だが、その剣真は、千里の意志を反映するが如く、壁をすり抜けて薙かれた。

その衝撃波は凄まじく、ただの一閃で飛来した刃の軌道上にいた悪魔達がかき消える。

「ふう」

一息、吐き出す。

そして千里は、今度こそと廊下を走り抜けた。

再び揺らめき始めている廊下の壁や天井から第二陣が溢れ出す前に、千里は正面にあった重厚な扉を開け放った。

バンッ

空間に響く、扉を開いた音。

黒い壁に黒い床、黒い天井に銀のシャンデリア。

深紅で彩られた黒を基調とする絨毯が伸びる先には、十三段からなる大きな階段。

その上に置かれた黒と深紅の玉座に、足を組んで座る影があった。

右の翼は青。

淡く澄んだ浅葱色の翼。

左の翼は赤。

揺らめく炎のような翼。

双眸は黄金。

淀みのない無垢な純金。

桃色の髪をツインテールにした、ゴスロリ系のドレスの少女。

無垢な容姿に反して妖艶な笑みを浮かべた幼い女の子が、足を組んで座っていた。

「子供……?」

「ふふ、さあ、どうかしらね?」

高い声は、甘ったるい砂糖菓子のような色を帯びていた。

声も容姿も幼い少女だというのに、その雰囲気だけはそれを否定している。

「あーあ、あの子達によく言っておかなきゃ」

少女はそう、やれやれと首を振ってみせる。

そのどこか芝居じみた仕草に、千里は警戒心を高めていた。

「女の子は通しちゃダメ”って、言ったのに”
”なっ”」

カツラと体型と服装。

誤魔化したのはこの程度だが、それでも身長の高さも相まって中々ばれずにこれた。

それを一目で言い当てられて、千里は目を瞠る。

「ふふ、なんでって?」

解るわよ。だって貴女 “女”の目を、してるもの」

「へ……?」

言われた意味に気がつくまで、千里は僅かな時間を必要とした。そしてその意味に気がつく、途端に頬を赤くする。

「そう、その顔。ホント、イヤになるわ」

リリアは気怠げにそう言うと、玉座から降り立つ。
階段の上から千里を見下ろすリリアには、苛立ちが垣間見えた。

「好きなんでしょう？彼が。」

でもね、ダメ。貴女に“あのヒト”は渡さない。渡せないの」

「っ……私だって！」

「違うわ」

千里の言葉を遮り、リリアが声を上げる。

静かで、それでいて心を震わす声だった。

「重みが違うの。わたしの元に、彼は“帰って”きてくれたの。」

貴女なんかとは、時間も重みも想いも、何もかもが違うのよ」

腕を組んで、噛みしめるように言い放つ。

彼女が普段浮かべている無邪気な仕草は、この時ばかりは感じられない。

重く狂おしい“愛”が、ただリリアを支配していた。

「帰ってきた？ナーリヤが？」

「そう。彼は帰ってきたの。」

前とは“器”は違うかも知れない。

それでも、わたしの前に現れてくれた彼は、確かに“彼”だったわ」

リリアの言っていることが今一理解できず、千里は首を捻る。

彼女の言っているところ、そこには確かに“引っかかる”所があるのだが、それがなんであるのか思い出せずにいた。

「器……？」

それって、いやでも、まさか……っ」

ナーリヤが話してくれた、彼の“能力”を思い出す。物に触れることで、記憶を少しだけ読むことができる能力。それを聞いた時千里は“すごい”としか感想を持つことが出来なかった。

もちろん身体に良くないかどうか位は聞いたが、それ以上は追求しなかった。

その予測できなかった“危険性”に、千里は今になって漸く思い至り、愕然とする。

「それは、それはナーリヤの能力で……」

「本人じゃない？それがどうかしたの？」

「……どうか、って、だってそれは、貴女の求めたヒトじゃないよっ！」

千里の悲痛な叫びに、リリアは大した反応を見せない。ただ「ふうん」と零して、階段の上に佇んでいた。

「やっぱりそう、貴女はわからない」

「え？」

「狂おしいほど、人を愛したことがないのね」

リリアは額に手を置くと、眉をしかめて首を振る。

そして、硬直する千里を、まっすぐと見下した。

「無益な会話は好きじゃないわ。」

さっさと貴女を倒して わたしは“ジャック”と、生涯を過ごすのよ」

「上手く言えないけれど、それが違っつてことは解る。
だから貴女を倒して　私は、私の想いを、私の心を貫き通す！」

リリアが両手を広げると、それに呼応するように翼が広がる。
それを見ながら、千里もまた背中の石柱のような大剣を引き抜いた。

「いいわ、相手をしてあげる。

私の前で冷たき灰燼と変わりなさい、蛮勇の英雄よ！」

リリアの両手の平、そこに光が生まれる。

右手の上には炎　燃えさかる、蒼色の灯火。

左手の上には吹雪　渦巻く、赤色の氷雪。

二色の光を携えて、リリアは宙に浮かび上がった。

「我が名はリリア！」

灼雪蒼炎の悪魔王　“リ・リリア・ウィル” オルクスフォンハ

イド”！！」

空間に満ちる、目眩がするほどの殺意。

箱庭を管理せし眠れる魔王が、ここに目醒めの声を上げた。

双剣が、炎を反射して煌めく。

空間を縦横無尽に蹂躪する、鋭い水の刃。

その輝きの合間に放たれる、獣の咆吼が如き朱色の牙。

一閃ごとに空気を震わせるその攻撃を、フィオナはすんでの所で
躲していた。

「どうした？逃げるだけが脳か、エルフの戦士よ！」

「そう言うのなら当ててみせるがいい、悪魔の従僕よ」
「戯れ言を！」

余裕を持った表情で、フィオナはその攻撃を避け続ける。

だがその内心は、ツヴァイが今し方語ったように“逃げ続けるだけ”の現状に対する焦りが、確かに隠れていた。

(こんなことでは、“兄上”になんと言われるか)

内心で、フィオナはそう苦笑する。

故郷の平穩をかけて勝ち上がってきたというのに、こんなところで剣を振るうこともできずに避け続ける。

「ダメだな、こんなことでは　チサトに、笑われる」

追い詰めても追い詰めても、真っ直ぐ自分を見続けてきた少女。その太陽のような笑顔を翳らせるのは、どうしてかイヤだった。太陽のような少女と、月影のような少年が、一緒に輝いているところを見るのが、フィオナはいつの間にか“好き”になっていた。

「なにをぶつぶつと！」

「なに、そろそろ攻勢に出ようと思ってな……ッ！」

気合いは十分だと、フィオナは長剣を腰だめに構える。

閃光紅蓮とは、鞘の内部で炎を爆発させて剣速を速める技だ。それ故に、文字どおり爆発的な加速が付加されて、捉えることのできない斬撃となる。

「だが、鞘がなければなんにもできんようでは　エルフの戦士は、名乗れない」

空間に炎を形作る。

魔法に必要なのは、魔力を構成する冷静な頭と、魔力を生み出す激情だ。

そうして造って操る魔力を形にする時、その時には“固定概念の壁”を突き破る、強烈で安定した“イメージ”が必要になる。

「【大牙・八重苦境】」

ドライの声が響き、朱色の牙がフィオナの周囲に生え揃う。

牙による八重の捕縛結界は、大きく動けばそれだけでフィオナの身体を細切れにしてしまうことだろう。

「【水迅水破・二閃の飛剣！】」

そこへ重ねられる、二本の大きな水の刃。

×印に重ねられた刃を避ければ、朱色の牙に刻まれる。

防げばその反動で後ずさり、同じ事だろう。

「鞘がないなら、造ればいい」

炎が形になり、やがて揺らめく鞘となる。

極限状態は、彼女が認識する時間を緩やかなものにさせていた。

その間に、フィオナはその長剣を炎の鞘に納める。

「【天空紅蓮】」

体感速度が元に戻ると同時に、水の刃がはじけ飛ぶ。

そしてツヴァイが目を見開くよりも……速く、フィオナは納刀していた。

「【翔空陽炎】」

剣真を陽炎でぼかして不可視にする技、炎天陽炎。それをフィオナは、炎の刃に纏わせて撃ち放った。

「ちっ、それを防ぐ　かッ?!」

一拍遅れて反応した、ツヴァイ。

再び振り上げたその双剣を、炎の刃が両断する。

そして、目を睜った頃には既に、フィオナはツヴァイの後ろへ回り込んでいた。

「【閃光紅蓮】」

「な……に？」

通り過ぎた後、ツヴァイの肩口から炎が吹き出す。

あまりの速度にドライが助けに行くことも叶わないまま、ツヴァイは地に伏せた。

「くっ、なんとか退いて……」

「させんっ！」

大きく後方に飛んだ、ドライ。

そこへ、フィオナは張り付くように飛んだ。

そして、そのまま剣を、ドライの胸に突き立てる。

「あああっ?!」

悲鳴と共に、ドライの身体が後方に投げ出される。

そして、ツヴァイと同様に、地に伏せて動かなくなった。

「いくら“死なない”といっても、しばらくは復活できまい」

使い魔は、主に依存する生命体だ。

たとえ塵一つ残らず消滅しようとも、主の命ある限り、復活することができる。

「とは、いえ」

フィオナは、目眩と共にその場に膝をつく。
初使用の魔法の行使は彼女の身体に負担を与え、強い疲労をもた
らしていた。

「私もしばらく動けんか。」

情けないが、無事を祈ることしかできそうにない」

そう苦みのある笑みを浮かべながら、フィオナは顔を上げる。
その先には、千里が走り去っていった、重厚な扉があった。
。

十

鋭い打撃音が、響く。

高速で駆け抜けるフィーアの残像が、幾重にもぶれてその場に残っていた。

「【震撃・剛！】」

「防げ、鉄兵」

迫り来る右の拳を、レウは冷静にゴーレムで防ぐ。

その重厚な体躯を衝撃で揺らしながらも、ゴーレムはただ悠然と構えていた。

「【空刻螺旋！】」

次いで背後から聞こえる、ファイフの声。

回転を伴って放たれた棒の一撃は、防ごうと動いたゴーレムに吸い込まれる。

鋼鉄のゴーレムは、どんな一撃でも防いでみせることだろう。

だが、ファイフの放ったその一撃は、まるで和紙を貫くようにゴーレムを貫通した。

「くっ」

己に迫る棒を、レウは後退することで避ける。

防げないことが解った以上、射程範囲内で待ち構えるのは自殺行為だ。

「もう、避けちゃダメじゃん！」

「そういう訳にも、いかないんでね」

軽口を叩きながらも、距離を調整することを忘れない。

前後で囲まれながらも、レウは立ち回りを器用に調整していた。

「終わらないってワケにも、いかないんだよ」

フィーアはそういうと、レウを見て不敵に笑う。

レウがその表情に警戒していると、フィーアはその場で強く拳を合わせた。

「【追撃・震】」

ドンッ！

「なっ?!」

フィーアの言葉と共に、レウの側に在ったゴーレムが爆散する。

飛び散る鋼鉄の礫に晒されながら咄嗟に後退すると、そこにはフィフの姿があった。

フィフは明るい笑顔を貼り付けたままレウに棒を突き出し、レウはそれを体勢を低くすることで辛うじて避けきる。

「まだまだ! 【追撃・震!】」

ドドンッ!

「くうっ……遠距離攻撃……いや、違う!」

礫と棒。

散弾と一点突破をギリギリのところまで避けながら、レウは相手の手口を探る。

焦燥に襲われて鈍くなる思考を、魔法使い特有の感情と思考の分割を用いて、冷静にさせながら。

「時間差攻撃か!」

「へえ……」名答。

まあ、どれが【震撃・剛】を受けたのか覚えてないと、意味はないけどなッ！」

少し強力な一撃。

そう思っただけのことなのに回したことが、悪手だった。

魔法使いというだけあって、レウは体力はそんなにない。

このまま避け続けるだけでは、近いうちに“終わり”がくることだろう。

「本当に厄介な仕事ツスね、隊長」

ベッドに伏せるガランの、不敵な笑み。

それを思い浮かべながら、レウは苦笑する。

あれで中々勘が良い隊長が、親友に話すよりも先に自分にこの話を持ちかけた理由。

その信頼が解らない、レウではない。

「任務完遂、させてみせますよ。隊長」

礫が一撃、額を掠める。

頬を伝って流れ出した一筋の赤を、レウは舌で舐め取った。

その鉄臭い味が、レウの感情を静かに滾らせる。

「お遊びは、ここまでにしようぜ？」

「はあ？何いってやがる」

「ちよつとおかしくなっちゃったのかなあ？」

好き放題言い放つ二人の前で、レウは短剣を腰に納める。

彼の杖は、魔力操作を補助する役割を持ったもので、数十のコー

レムを操るのには必要不可欠だったのだ。

「崩れる」

そうレウが一言零すと、ゴーレム達のがらくたのように崩れ落ちる。

折角の防御を自ら廃棄したレウを訝しげに見ながら、フィアとフィフは突進する。

魔法使いに魔法を使わせる隙を与えるほど、彼女たちは甘くはない。

「爆ぜろ【震撃・剛！】」

「貫けっ【空刻螺旋！】」

前と後ろの両側から迫る、命を刈り取る一撃。

その一撃に対してレウは、ただ両手を挙げていた。

そして、二人の攻撃が届く一拍前に、レウの唇が微かに震え、詠唱を発する。

「【鋼鉄の腕かいな】」

その両手を覆い隠すような鋼鉄の腕が、地面から出現する。

片手でレウの身長ほどもある巨大なガントレットを、レウは自身の側に浮かせていた。

「奇妙なことを……だけど、学習能力がないッ！」

「内から砕き紙のように貫けば、同じことだよあ〜っ」

大きな腕を浮かせているだけで、それはゴーレムと何ら変わらな

今までどおり破壊するだけだと、二人は攻撃の手を緩めない。
だが、それは今までとは、違った。

「よっと」

軽く一声上げながら、レウは鋼鉄の腕を、自分の腕と一緒に動かす。

巨大な物体が動いているとは思えないほどの滑らかで生き物じみた動きで、レウは二人の攻撃を、弾きながら流して見せた。

「なっ」

「へっ」

驚きの声を零す二人に、レウは追撃をかける。

フィーアとフィフをそれぞれ左右に置くよう身体的位置を変えると、レウは掌底の形を作った。すると、鋼鉄の腕もそれに追従して、掌底をつくる。

「はっ！」

短く一息、同時に鋼鉄の腕が“射出”される。

フィーアはナツクルで、フィフは棒で、それぞれ防ぐがその衝撃までは遮ることはできない。

トドンッ！！

「あぐっ！？」

「あぐっ？！」

二人の身体が、大きく浮き上がる。

レウはその姿を視界に納めることなく、一度パチンと指を弾いた。

「【鋼鉄の槍】」

地面から姿を見せる、二本の巨大な短槍。

鋼鉄の腕のサイズに合わせたためか、レウの身長は四倍はある槍だ。

それをレウは鋼鉄の腕で掴み取ると、後ろに吹き飛ばされて着地する間際の二人に、投げた。

「飛べ！」

ドンッ！

空気を切り、槍が飛来する。

それは投槍などという生易しいものではなく、破城鎚が如き巨大な“暴力”だった。

「あぐっ！！？」

「な、める、なアッ！」

為す術無く槍に貫かれ、フィフが壁に縫い付けられて棒を手から落とす。

だが、フィアはナックルで以て槍の側面に拳を打ち付けると、その軌道を逸らして見せた。

「ぐうっ」

だが完全に逸らすことはできなかったのか、その左手が落ちる。

落ちた左手から鮮血などが零れる事はなく、ただ黒い影が切断面から覗いていた。

「へえ、影で整えられた使い魔か」
「チツ」

レウの感心したような声を聞いて、フィーアは舌打ちを零す。
一瞬の逆転により完全に優勢を取られたことが、屈辱だった。

「どうせ死なないんだし、さっさと楽になっておけば？」
「はっ、ずいぶん舐めたことを言うんだな、魔法使い」

フィーアは満身創痍であろう状態を、表情に出さず片手で構える。
未だ戦う姿勢を崩さないフィーアに、レウは小さく苦笑する。

「足掻くヤツは嫌いじゃない。
でもさ、そろそろ終わりにしておこうか」

レウはそういうと、気怠げに前髪を掻き上げる。
普段は黄色の前髪に隠された、レウの双眸。

その焼けた鉄の如き赤銅色の瞳が、今までにない“本気”の気合
いと共に、フィーアを睨み付けた。

「【鋼鉄の双剣】」

レウの言葉と共に、地面から二本の剣が現れる。

右の剣は細身のレイピアで、左の剣は波立つ剣真のフランベルジュ。
ユ。

二本の剣を交差させ構えて、肩で息をするフィーアに突きつけた。

性根に誇りを持った“戦士”を数多く抱える帝国。

その兵であるレウは、それなりに“戦士”のことを理解していた。

「誇りに応えるのは、帝国流だね」

「へえ、ニンゲンどもの住処にも、少しはマシな場所があるって事か？」

冷静に言い返すフィーアだが、その表情はどこか楽しげだ。

主への忠誠と誇りある戦いを第一に考える彼女は、レウの言葉に凜猛な笑みを浮かべる。

その笑顔が彼の“隊長”であるガランのものと重なって、レウはほんの僅かに目を睨った。

「ま、そーゆーこと」

レウが一直線に走り出すと、それに合わせてフィーアも走る。

レイピアの突きを潜り抜けて、一步。

フランベルジュの薙ぎ払いを、脇腹を斬り裂かれる代償に一步。

その巨大な二連撃を決死の覚悟で潜り抜けると、フィーアはその右手を突き出した。

「碎けるオツ！」

能力を使うほどの体力はないのか、ただの殴打だ。

けれど人間以上の力を持つ彼女がそれを放てば、普通の人間は碎け散るだろう。

「ここで負ける訳には、いかないんでね」

レウの小さな声を、フィーアはその耳に捉えていた。

だがその心意を探るよりも早く、自分の胸を貫く衝撃に、その黄

色の瞳を落とした。

「あ……」

胸を貫通する銀の刃。

それは、レウが“杖”として使用していた、短剣だった。

最期の一步が届かなかったことは悔しく思う。

だがそれ以上に最期にレウの全てを引き出したことに、フィアは小さく笑みを浮かべていた。

そうして、フィアが崩れ落ちる。

と同時に、レウもまた膝をついた。

長期戦による魔法の使用は、彼の魔力と体力を確実に削っていたのだ。

「援護には向かわせて貰えないか」

役目を成し遂げて倒れたフィアを見て、レウは苦く笑みを浮かべる。

そしてその笑みを保ったまま、大きく後ろに倒れた。

「あー、動けます？フェイルラート様」

「君より早く終わったが、助けには入らなかったらどう？」
「なるほど」

背後から聞こえるフィオナの声に、レウはため息を吐きながら頷いた。

両者とも動けないのなら、ここでこうしてあの小さな少女を信じて待つしかない。

「さつさと動けるよう、今は休憩だ」

「了解ッス、フェイルラート様」

「フィオナで構わん」

「あー、はい。わかりました。フィオナ様」

軽口をたたき合ってはいるが、二人とも声に疲労がにじみ出ている。

もうしばらくは動けそうにないからこそ、ここでこうして焦る気持ちを紛らわせていた。

「せめてここで祈ろう　チサト」

フィオナの呟きをレウは聞いていながら聞かなかった振りをする。今できるのは、こうして待つことだけなのだから、それ以上のことができない気がしなかった。

レウとフィオナ、二人の祈りの声が、静かになったエントラスに響いていた。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 中編（後書き）

次回で七章が終了。

なるべく期間を置かぬようにできればと。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。後編も、どうぞよろしく願います。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 後編

昔々あるところに、とても寒い大陸がありました。

地面は冷たい氷で覆われていて、空はいつも灰色の雲に包まれています。

ここに住む生き物は、食べ物を作ること出来ず、凍えて死んでしまいます。

だからここには住めないと、誰もいない寂しい場所になってしまいました。

けれどある日、ここに住みたいという酔狂な悪魔が現れました。歪んだ子供が生まれてしまうからと禁じられていた、人間との契りを結ぶため、愛した女の人と共にここにやってきたのです。

悪魔は、燃え上がることでだけが得意でした。

自分の身体をごうごうと燃え上がらせて、契りを結んだ妻を、いつも温めていました。

二人は長い間幸せに暮らしていましたが、それも終わりが訪れます。

それは、悪魔の子供が女の人に宿り、十月ほど過ぎた頃でした。

女の人の家族が、女の人が悪魔に騙されたのだと言って、追いかけてきたのです。

誰も知らないはずのこの場所は、悪魔の友達の裏切りによって、既に沢山の人が知っていました。

歪んだ子供を誕生させる訳にはいかないと、悪魔と人間を止めるためでした。

人間達がお屋敷に攻め込み、悪魔の友達たちはそれをこっそり誘導します。

悪魔は女の人が好きでしたので、女の人を護るために一生懸命戦いました。

悪魔がごうごうと燃え上がることで氷が溶けて、やがて大きな雪崩が起きます。

悪魔は自分の側の雪を全て溶かしてしまうことで、雪崩から抜け出しました。

けれども、人間と悪魔の友達たちはその雪崩に逆らえず、大きく押し流されてしまいます。

悪魔は追い払えたことを喜びながら、女の人元へ帰ります。けれど、女の方は、既に動かなくなっていました。

燃えさかる悪魔が側にいなくなったことで、暖炉の火もに消えてしまい、女の方は凍え死んでしまったのです。

悪魔が女の人に縋って泣いていると、女の人すぐ下から泣き声が聞こえてきました。

なんと、女の人に宿った赤ちゃんが、息も絶え絶えながら生まれてきたのです。

悪魔譲りの黒い尻尾と、女の人譲りの桃色の髪。

左右で違う色の羽は確かに歪いびつでしたが、それよりも赤ちゃんの誕生の方が、悪魔はずっと嬉しかったのです。

それからしばらく、悪魔は娘と楽しく過ごしました。

娘は大きな力を持っていて、冷たい吹雪は暖かくなり、逆に熱い炎は冷たくなっていました。

娘を中心に他の悪魔たちが移り住み始めて、ここが国ヘルファと呼ばれるようになった頃。

悪魔が病気に罹かかってしまいます。

悪魔は自分を心配する娘に、女の人との思い出を語ります。

生まれてきたことを祝福している、素敵な恋をしなさい、人を愛しなさい。

悪魔は娘に伝えたかったことの全てを伝えると、そつと息を引き取りました。

娘は悪魔の言葉を胸に留めて、沢山の人を愛しました。

しかし悪魔は、娘に大切なことを伝えていませんでした。

それは、自分の思う誰かからの……愛され方でした。

太陽の色といえば、思い浮かぶのは金や赤だろう。
奇抜な色をしていたら、それはもう太陽ではなく別の何かだ。

青や緑なら化学反応や温度の変化であり得るかも知れないが、空と見まがうほどの蒼色なんて、千里は知らない。

「ほらほら、きちんと避けないと、あっという間に氷像になるわよ
っ……っ」

ましてやその蒼い炎が、信じられないほど冷たいなんて。

「あーもうっ……っせいっ!」

無数に出現する蒼炎の巨大な弾丸を、千里は石柱のような剣で斬り払う。

思い切り振り抜かれた剣は周囲に余波を残し、それによって切り損ねた弾丸も落としていた。

既にカツラは吹き飛び、どこにあるのか解らない。

炎で燃える訳ではないというのなら、どこかで氷像になっていることだろう。

もっともそれは、もう一つの攻撃に晒されていなかったら、という条件付なのだが。

「そろそろ肌寒いでしょう？」

私の雪で、身体の芯から温めてあ・げ・る」

ひとたび触れれば、それだけで取り返しのつかない火傷を負いかねない、赤い吹雪。

とても剣で斬り払うことなど叶わないそれを、千里は光の粒子で編み込まれた鎧によって、防いでいた。

「【光よ！】」

千里は、二つの光を捌きながら、剣に光を纏わせる。

このまま避け続けていても、勝てる訳ではない。

むしろ体力的には、人間である千里の方がずっと早く終わりを迎えるだろう。

「あら？反撃かしら？」

宙に浮かび二色の極光を従えたりリアが、愉しそうに笑う。

如何なる状況に於いても享楽を見つけることができるのが、悪魔という種族の特徴だった。

「【断て、光輝！】」

ただただ、鋭い一撃。

横薙ぎから放たれた光の刃は、空気を斬り裂きながらつき進む。それはフィオナの鞘を打ち砕いた、“最高の一撃”だった。

「【蒼炎／鏡遮】」

対してリリアは、蒼い炎をカーテンのように広げる。そしてそれを、やや斜めに傾けた。

ドンッ

カーテンに当たった衝撃波は、ほんの僅かな時間その場所に縫い止められる。

そして、斜めになったカーテンの上を滑るように、リリアの右側へ飛んでいった。

「良い一撃だね。ま、当たればだけど」

当たらなければ、意味がない。

そういつて微笑むリリアの表情に、千里は唇を噛む。なるほどそのとおりだろう。どんな一撃も、逸らされれば意味はない。

けれど、鋼鉄すら打ち砕く千里の一撃にほんの僅かでも耐えうる障壁を持つことは、至難の業であり彼女にとって“予測できないもの”であった。

「ねえ、わたしそろそろ飽きて来ちゃったんだけど？」

リリアは空中で足を組んで、腰掛ける仕草をする。半目になって口元に手を当て欠伸をしてみせる姿に、リリアの余裕が見て取れた。

「まだ、飽きるには早いと思うよっ」

それでもなお止まない、炎と雪の猛攻。

千里は玉座の間を走り回ることに対応していたが、そろそろ限界が近かった。

「わたしは彼とこれから楽しまなきゃいけないの。

……あなたと遊んで無駄な体力を使いたくないから、そろそろ終わらせるわね」

さようなら、と口ずさむ。

そして、左手を頭上高くに持ち上げた。

「【灼雪煉氷】」

リリアの左手の中に生まれるのは、熱によって光を放つ、真っ赤な氷だった。

それは最早、雪というよりも炎に沈めたルビーのようで、美しい。

「灼き断て【離別の氷槍】」

薄暗い玉座の間、その光を全て呑み込むような、冷酷な赤。

打ち出された槍は通り抜ける空間を瞬く間に焦がし、あまりの高温に能力によるものでは無い純粹な炎が立ち上がる。

「……【遮れ、斜光！】」
ドゴオンッ！！

千里が生み出した、光の壁。

そこに氷槍と名付けられた赤の槍が衝突する。

絶対の防御力を誇る盾は槍が衝突した衝撃で大きくたわみ、やがて両者に罅を入れた。

「あ、まず……」

ドゴンッ！

そして、爆発する。

巨大な力同士の相殺は局地的に強力な爆風を生み、その周辺を煙で覆う。

それを見下すように、リリアは冷たい目でため息を吐いた。

「はあ、これじゃあ見えないじゃない。

いいわ、煙が晴れるまで休憩時間をあげる」

気怠げにそう言うと、リリアは目を瞑る。

先ほどから連絡が取れなくなっている、己の使い魔の一人。

ナーリヤの監視を命じたメイド……アイン。

「完膚無きまでにたたきのめせば、彼も諦めることでしょうし」

如何に抵抗しようと無駄だ。

そう教え込む必要があるが、リリアはナーリヤに暴力をふるって解らせる気は無かった。

人間は脆いということを、よく知っているから。

「立ち上がりなさい、ニンゲン。
せいぜい足掻いて藻掻いて……折れなさい」

煙は未だ、晴れない。

十

玉座の間と幽閉の塔を繋ぐ長い廊下。
空中回廊と言っても差し支えのないこの場所は、天井や床、壁が
透明の板に覆われていた。

少し気を抜けば地上へ落下してしまいそうなほど、足下の危うい場所。

けれども如何なる材質なのか、不安げな箇所は何処にも無かった。

空の上、その廊下の先。

そこに佇む人影を、ナーリヤはまっすぐと睨む。

「止まってくださいます、ナーリヤ様」
「アイン……」

白い髪に銀の瞳の女性　アインが、ナーリヤの前に立ちふさが
る。

軽く目を伏せながらも、その手に持つ銀のナイフが、彼女の意志
を表していた。

主人の命に従い、ナーリヤを決して通さないという、意志表明だ。
「僕は、先に行かなきゃならない。

それがリリアの意志ではなかったとしても、それはリリアの“た
め”になる」

ナーリヤはそう、一度だけ目を伏せる。

彼の中に芽生えたジャックの疑似人格は、ナーリヤをしきりに急
かしていた。

既に生者ではないせいか、ジャックは納得と焦燥を交互に滲ませ
ているのだ。

「僕はリリアを救いたい。救ってみせるって、約束する」
だから。

だからとナーリヤは顔を上げて、アインを見据える。

その真摯な双眸に偽りはなく、アインもそれを感じ取っていた。
だが。

「私はリリアお嬢様の従者です。

死して生を終え、使い魔として救っていただいたその時から」

アイン達は元々、名も無き動物だった。

事故、悪意、寿命。様々な理由で命を落とそうとしていた彼女たちを救ったのが、リリアだ。

「己の影を分け与えることで二度目の生を得る。^{たましい}

そうしてお嬢様に命をいただき使い魔となったその瞬間から、

私は 私たちは、お嬢様に絶対の忠誠を誓っています」

アインはカラス。

ツヴァイはキツネ。

ドライはコウモリ。

フィーアはオオカミ。

フィフはネコ。

千里の世界とは名称や細かい形は異なるが、それぞれ余力を持たない種族だ。

「お嬢様は私たちと約束してくださいました。

永遠に共に在ると、尊い約束をしてくださいました」

そう語るアインの顔からは、感情が伺えない。

けれど僅かに揺れた瞳に、ナーリヤは息を呑む。

幸福と葛藤と苦しみと喜び。その全てがない交ぜになった、瞳に。

「ですから私も、お嬢様との約束は破りません。
お嬢様がくださった命に報いるためにも、お嬢様の幸せのためにも」

銀のナイフを、ナーリヤにまっすぐと向ける。
研ぎ澄まされた切っ先に揺らめく、銀の輝き。
その鋭利な煌めきに、ナーリヤは目を眇めた。

「ここは絶対に、通しません！」

振りかぶって、アインはナイフを投げる。

ナーリヤはそれを、軌道を読みながら躲した。

放たれる動作を見ていてなお避けられないほど、彼は鈍くはない。

「リリアの幸せを願うのなら、解っているんじゃないのかッ！」

一つ二つ三つ、四つ五つ六つ七つ。

次々と放たれるナイフを躲しながら、ナーリヤは廊下を駆け抜けて、アインに近づいていく。

「このままじゃ、リリアは幸せにはなれない。」

踏みにじった先にあるものが、幸福であるはずがない」

失いかけた命。

誰かの悪意の延長で死にかけたものも、アイン達の中にはいただろつ。

だからこそ、ナーリヤは問いかける。

「不幸を造って築いた絆に、幸福になるための力なんかあるもんか」

幾つもの人生を経由してきたからこそ、出てくる言葉なのかもしれない。

けれどナーリヤのその震える声には、それだけでは言い表せない“何か”があった。

どこか痛みを堪えるような表情で、ナーリヤは歯を食いしばる。

どこから取り出しているのか、アインの放つナイフは止まらず、ナーリヤを追い詰めていた。

「どのような経緯であろうと、そこにある幸福になんの違いがありません。」

過程の不幸を顧みるのは、臆病者の言い訳に過ぎないと存じます。

アインはそう言い放つと、駆け寄るナーリヤから距離を取るよう後ろへ飛ぶ。

そして、誘い込むように手招いた。

「戻れ 【銀奏刃】」

「くっ」

周囲に転がったナイフが、跳ね起きる。

そして、ナーリヤを背中から射抜く勢いでアインの手元へ逆流し始めた。

「戻っているなら……下ッ」

ナーリヤは咄嗟に這いつくばると、ナイフの流れを避けた。

それでも避けきけることは叶わず、掠めたナイフがナーリヤの背に

幾筋かの赤を残していく。

「過程を顧みぬことができない幸福に、安らぎなんかあるもんか。どうしようもないってことだって、あるかもしれない、けど」

「ッ」

焼けるような痛みを受けてなお、ナーリヤは駆ける。

瞳を揺れ動かすアインに、己の想いをぶつけるために。

「 どうにかできる選択肢を捨ててまで、悪意の果てを目指す意味はないッ!!」

慟哭のような訴えに、アインは始めてその人形のような表情を歪める。

溢れ出す感情を隠しきれず、アインは仮面を脱ぎ捨てた。

「黙りなさいッ！」

集い、奏でよ……【銀謡刃!】」

再び放った無数のナイフが、ナーリヤを取り囲むようにぴたりと止まる。

ここまでくれば、ナイフの次の動きは解る。

だが解っても、無手で全方位から襲撃するナイフを退けるには、それら全てを認識する必要があった。

「使い魔となれば、生き残ることもできましょう。

その命、ここで一度使い果たし、永遠に共に生きながらえましょう」

「永遠なんて、欲しくはない。

途切れることの知らない人生なんて、僕はごめんだ」

唇を噛みナーリヤを睨むアイン。

その鋭い視線を浴びてなお、ナーリヤは静かに目を閉じた。

「……諦めましたか？」

ですがこの指揮を止めるつもりはありません 【終幕】

ナイフが一齐に動き出す、その一歩手前。

その刹那の空白に、ナーリヤはただ両手を打ち合わせる。

たった一度の 祈りにも似た、拍手だった。

「空間掌握」

たった一度の、音の反響。

それだけで、ナーリヤはナイフの位置を全て“掴んで”いた。

右から飛ぶナイフを逸らし、斜め左のナイフに当てる。

頭上のナイフは左手で弾き、そのまま落とした手のひらで正面のナイフを弾く。

舞を舞うように両手で円を描き、その過程で掴んだナイフを投げて迎撃に用いる。

ほんの僅かな時間。

それこそ瞬くような時間で、ナーリヤは全てのナイフを叩き落とした。

「その、技は 旦那、様？」

「はあああッ！」

驚きに目を瞪るアインに、ナーリヤは突進する。

その驚愕こそ隙であり、ナーリヤに次の一手を与えていた。

「くうっ?!」

声による音の反響。

身を翻しアインの後ろに回り込んだナーリヤは、自分の位置を気配から探ることができぬよう、攪乱する。

それは少し前までは縁あるものを持ちながらでなくては発動できなかったはずの、クリフの短剣に宿った技だった。

トン

「しまっ

ナイフを手に振り返った、アインの腹。
そこへ、ナーリヤの掌底が当てられた。
身を低くしていたナーリヤにアインのナイフは当たらず、ほんの一瞬、二人の視線が交差する。

「ごめん、アイン。」

謝らないでください、旦那様。

瞬く間の意思疎通。

そこに思うような意図が込められていたかは、解らない。
その瞬間も、もう過ぎてしまったのだから。

「【Ame】」

ド
ン
ッ

「あうっ?!」

蒼い光に吞まれて、アインは衝撃と共に悲鳴を上げる。

「お嬢、さ、ま」

そして……どこか穏やかな瞳で、ゆっくりと背後に倒れた。

これでもうしばらくは、指一つ動かすことはできないだろう。

そう安心する、ナーリヤの表情を視界に納めながら、アインはただ目を閉じた。

「はあっ……はあ、はあ、はあ」

途端に、物を通して“視た”時とは比べものにもならない疲労感が、ナーリヤを包む。

肩に重くのしかかる疲れと、頭の奥から響く鈍痛に、ナーリヤは眉をしかめて蹲った。

「いかな、きや」

それでも、なんとか立ち上がる。

急げ、急げと焦りを滲ませるジャックに、その背を押されながら。

「行かなきゃ……!!」

走ることはできない。

けれど、止まることも出来ない。

だからナーリヤは、のしかかる重圧に耐えながら、ゆっくりと空中回廊を歩き始めるのだった。

+

舞い上がる土煙の、向こう側。

衝撃で大きく後ろに弾かれた千里の足下には、剣と足と合わせて
三つの轍わたちが刻まれていた。

「つう……」

びりびりと痺れる手を、閉じたり開いたり。

千里は若干涙目になりながら、一際大きな柱の後ろに身を隠した。
気休め程度だし、逃げられる気も逃げるつもりもない。

けれど、なんの対策もないまま飛び出すのは、自殺行為だと解つ

ていた。

「それに、最初から全力で飛ばしたら、後が続かないし」

それは、フィオナとの敗北で学んだことだった。

後先考えずに力を使った結果、最後まで体力が持たなかった。

「それにしても」

千里はそう零すと、握りしめた大剣に目を落とす。

その瞳には、もどかしさを含んだ不満の色があった。

「振りにくいなあ……ホントに剣なのかな？これ」

そう一度考えてしまったら、もう止まらなかった。

剣として用いることが考えられていないようなフォルム。

切っ先はなく、菱形にすることで刃に見せているような石の柱。

「どこかの柱に柄をつけました……なんてこと、ないよね？」

千里は訝しげな表情で、剣真を叩く。

そして、ある一点で、首を傾げた。

「あれ？」

二度三度と叩いている内に、千里は奇妙なことに気がついた。

叩く場所によって、微妙に反響音が違うということに。

「中に、空洞がある？」

柱の影から玉座の間の様子を見ると、未だに土煙は晴れていなかった。

ならば今がチャンスか、と千里は大きく頷き、膝を突いて大剣を調べ始める。

「柄が、回る？」

柄の部分を回そうとすると、何かに引っかかっているようであるが左右にカタカタと動いた。

「よし……せいっ」

千里は一息気合いを入れると、思い切つて柄を捻ってみる。バイクにアクセルを入れるように、思い切り。

バンツ

「わわっ」

大きな音と共に、大剣が“開き”千里は腰を退かせる。

地面に置かれたままの大剣は、何故だか二つに割れていた。

「これって……箱？」

柄の部分が箱から飛び出していたから、剣だと勘違いしていました。そんな感想が千里の頭をよぎり、眉をしかめる。

石柱型の、大きな箱。

中には西洋剣の、台形の鍔が片方取り外された、柄だけの白い剣。それから、取り外された部分が何故か個別で置いてあり、ついで

にそれを装着するためのベルトまで置いてあった。

「よくわかんないけど……とりあえずこの四角いのは何だろう？」

柄だけの剣を持ち上げると、鏢の中心に透明なガラス片が輝いていることに気がつく。

それは取り外された別個の鏢も同様で、まるでメーターのような四角いガラスが嵌め込まれていた。

「ひ、ふ、み、よ、い、む……六個か」

箱の中に安置された別個の鏢は、合計で六個。

千里はひとまずベルトを腰に巻き付けると、六個の鏢を左右に装着する。

柄だけの剣は、腰に提げられるようになっていた。

「うーん……スカートの時でも、着けられそうかな？」

そう言いながら、千里は改めて柄と鏢を取る。

鏢の形をよく見てみると突起があり、剣に取り付けることができるようになっていた。

「うう、かな？……ん、できた」

そうして取り付けると、見知った西洋剣の柄が見えてくる。

左右に伸びた、台形の鏢だ。柄だけだが。

「で、どうすればいいんだろう？」

柱の影からもう一度覗き見ると、煙はほとんど晴れていた。

完全に晴れるまでは動かないとでも決めているのか、空中で気怠げに腕を組むリリアの姿が、ぼんやりと見え始める。

「……武器が無くなって、残ったのは柄だけの剣。ま、まずい」

他に何か無いかと、千里は箱をひっくり返す。

すると、一枚の紙が、ひらりと舞い落ちた。

「こつこつという物についているといえば、やっぱり“説明書”！」

千里は目を輝かせて紙を拾い、次いで両膝をついて頂垂れる。

この間僅か一秒。最速で砕けた希望だった。

「だから、知ってる名前とかじゃないと、読めないんだって……」

今から飛び出ても、頼りない鉄の剣だけではすぐに砕けてしまうだろう。

光の粒子を纏わせた大剣で弾かれたのだから、光の剣だけでは心許ない。

「えーと……えーと……あーもうっ」

千里は立ち上がると、身体に光の粒子を纏わせる。

ふわりと光が舞い上がり、それが紙に吸い込まれていった。

「光よ……よ、【読んでっ】」

こんな使い方ができるか、解らない。

だができると信じなければ、やっていけないような気がしたのだ。やけっぱちともいうが。

『おおっと、まさかこの剣を見つける猛者が居るとは思わなかったよ』

「うええっ?!」

読めるようになれば。

そう考えた千里だったが、光がもたらした効果は別のものだった。脳裏に響く、嫌みったらしい男性の声に、千里は驚きの声を上げる。

『さてさてさて、どんな魔法が知らないが私を一時的に復元しているのかな?』

どうやら、読み上げているのではないようだ。

できてしまった事態に、千里はげんなりと眉を落とす。

『実に実に興味深いっ!が、今はそんな場合じゃないという訳だ』
「う、うん。えーと……私は千里っていいいます。貴方は?」

ちなみに千里の脳裏に響く声なので、周囲には聞こえていない。つまり独り言にしか見えないのだが、幸いなことにそれを聞き届ける第三者はここにはいなかった。リリアが聞くには、距離が離れすぎているのだ。

『私か?私はそう……説明書だっ』

名乗る気は無いようだ。

説明書はそう叫ぶと、鼻で笑ってみせる。

その姿が脳裏でジックのものと重なり、千里は額を抑えた。

『さて、簡単に“君に”わかりやすく説明しよう』
「私に？」

そうだ、と説明書は声だけで頷く。
それと同時に、煙が完全に晴れてリリアの声が響いてきた。

「なあに？諦めるの？
だったら帰ってもいいよ。面倒になっちゃった」

そうは言つが、リリアは千里が帰ろうとすれば後ろから貫く気なのだろう。

その金の双眸は、殺意に満たされていた。

「誰が、帰るもんですか」

千里はそう言いながら、柱から飛び出す。

これ以上柱の裏にいて柱ごと攻撃でもされたら、たまらない。

『さて、ハリウッド映画でイカしたギャングが拳銃を持っているだろっ？』

「言い回しがすごく気になるけど……ってハリウッド？」

『“君に”わかりやすく、といっただろっ？』

千里はリリアに聞かれないように、説明書へ小声で返事をしていった。

そんな風に動こうとしない千里に、リリアは苛立ちを募らせる。

「はあ……来ないならこちらから行くわよ？」

そう、リリアは空に手をかざす。

溢れる光の色は、赤。灼雪による、超高温の吹雪だ。

『この平行四辺形のパーツは、マガジンだ。柄の部分は拳銃本体になる』

「マガジン？つて、えーと」

弾倉とも呼ばれる拳銃のパーツで、弾丸を補充するための部分だ。映画の中でオートマチックの拳銃の下からマガジンを取り出す光景を思い浮かべ、千里は頷く。

「ぶつぶつと、独り言？頭、おかしくなっちゃった？」

「し、失礼なっ」

リリアが中々攻撃に映らなかったのは、一人で百面相をしながら唇を動かす千里の姿を、訝しんでいたためだった。聞こえなくても、視界には映るのだ。

『おあつらえ向きにデカイのを飛ばしてくれるみたいだな』

「おあつらえ向き……つて」

リリアは訝しむのを止めると、左手を弓なりに引く。

そこに浮かぶのは、灼けつく雪を纏う、氷の槍だった。

「灰燼と帰せ【灼雪煉氷】」

リリアは小さく呟くと、千里を睨む。

その瞳を、千里はただ真正面からにらみ返した。

「【離別の氷槍】」

練り上げられた魔力が詠唱に呼応し、獰猛な暴力と化する。
その様を見せつけられてなお、千里は折れることなくリリアを睨
んでいた。

『合わせる、千里』

「うんっ」

説明書が脳裏にイメージを描く。

それに合わせて、千里は身体を動かした。

マガジンを剣から外して、接続部分を対象に向ける。

その手に力を通して、照準を定めた。

『望み、求め、訴えよ』

「【望み、求め、訴えよ！】」

声に合わせて、詠唱を重ねる。

すると、マガジンが透明な光に覆われ始めた。

『ブレット・ロード』

「【ブレット・ロードっ！！】」

空を灼きながらつき進む、赤の槍。

その一撃がマガジンに衝突する寸前で、光のカーテンに包まれる。

まるで聖母の抱擁のような輝きに、リリアは耐えきれず目を閉じ
た。

『マガジン・セット』

「【マガジン・セット！】」

マガジンの透明なガラスの部分に、赤い光が宿る。

その頃には灼雪の氷槍は姿を消していて、後には赤く輝くマガジンだけが残っていた。

それを千里は、脳裏に浮かぶイメージに従い、剣に装填する。

「貴女……わたしの魔法になにを？」

訝しむリリアを、千里はただまっすぐと睨み付けた。

そして、柄だけの剣を、リリアに向ける。

「 【イグニッション】 」

千里の声と共に、赤の光が剣に溢れる。

切っ先はなく、形は肉切り包丁のよう。

でも向こう側が透けてしまいそうなほど薄く、赤透明に輝いていた。

『合計六本まで魔法を閉じ込めることができる、私の最高傑作^{としておき}。』

そこまでの容量を手にすることができ、使い手が居なかったためお蔵入りとなつたが』

どこか興奮の交じつた声に、千里は自身でも計ることのできない高揚感を覚えていた。

それは、説明書の感情が流れ込んでいるためか、それとも千里自身的心境か。

『その剣の名はイグゼ “煌億剣— イグゼ” だ。』

……私の役目はここまでだ。後は上手くやれよ、千里』

「うん、ありがとう。説明書さん」

もう声は響かない。

けれど、千里は、剣の使い方を深く理解できていた。

「なによ、それ」

「灼氷剣― リズィイグゼ ー」

その眩きは、反撃の狼煙。

光に満ちた千里の瞳に、リリアは苛立たしげに舌を打つ。

折れることのない心が、更に強くなったような輝きを、リリアは無意識下で感じていた。

「【蒼炎 ー」

「灼氷翔刃」

リリアが掲げた両手の上に、青い炎が集つ。

それを千里は、赤の斬撃を飛ばすことで斬り裂いた。

「あつっ……わたしの灼雪を、盗んだの?!」

「はあああつっ!!」

千里は背中に光を集中させると、それを爆ぜさせる。

それはフィオナが用いた移動術、炎迅を模した技だった。

だがそのことを知らなければ、それは“瞬間移動”にしか見えな
いという、強力な技だ。

「【蒼炎冷輝・愛苦の熱槍!】」

青い炎で槍を生み出し、リリアは肉薄してきた千里と剣を交える。

相手が飛べないのなら、自分は飛んで攻撃する。

それが有利に働くと言うことは、千里も解っていた。

「【光よ、翼となれ！】」

だから千里は、光に命ずる。
信じた現象を実現させるために、ただ光に形を与える。
その黄金の輝きで象られた翼は、神話に出てくる天使のようだった。

「わたしの魔法で、わたしを倒しきれないと思わないことね！！」
「こうなった時点ですでに、これは私の魔法。だからこれで、倒しきる！！」

青の炎が、冷気と共に爆ぜる。
赤の氷が、熱気と共に膨らむ。

二色の光が幾重にも交じり、剣と槍が激しくぶつかる度に、虹色の光を撒き散らしていた。

「わたしに追いつがる？そんなこと　っ！」

リリアはそう叫ぶと、一気に高度を上げる。
そして、手に持った槍に渾身の魔力を込めて、振りかぶった。

「永遠に眠れ【蒼炎槍刃衝！】」

「【パージ】」

音の壁を突き破り、大気を震動させ、一直線に降り注ぐ槍。
それを前に千里は、マガジンを取り外して腰に提げると、別のマガジンを槍に向けた。

「【望み、求め、訴えよ】」

透明のカーテンに槍が触れると、耳をつんざくような甲高い轟音が周囲に響く。

燃えさかる炎は冷たく、カーテン越しに千里は震えるような寒さを感じていた。

「【ブレット・ロード】」

カーテンに包まれた青い炎が、マガジンに吸収される。

ガラスに蒼い光がぼんやりと灯ったことを確認すると、千里はそれをイグゼに装填した。

「【マガジン・セット】」

「まさか、貴女……これまでもっ?！」

「【イグニッション】」

最後のワードと共に、蒼い光が剣真を満たす。

鋭い切っ先を持つ、幅広の蒼い剣。

けれどもその刃は、肉を斬り裂くノコギリのように、ぎゅぎゅと波打っていた。

「 蒼炎剣一 アルク＝イグゼ 」

千里が剣を振るう度に、軌跡が陽炎となってその場に残る。

その残った陽炎に触れた床や壁の破片は、たちまちのうちに凍り付いていた。

「あは、あははははっ、なによそれ?」

ふわりと舞うように、リリアは距離を取る。

目を伏せて前髪でその瞳を掻くし、リリアはただ笑っていた。その不気味な様子に、千里は警戒しながらもじりじりと距離を詰める。

「心を折ろうと思っていただけ、もういいわ」

リリアはそう、気怠げに両手をあげる。

幾度となく見てきた仕草、だが千里はそれに、どうしようもなく肌が粟立つ感覚を覚えた。

「滅びなさい【灼雪蒼炎の魔槍】」

赤の吹雪を纏う、青の炎でできた巨大な槍。

それをリリアが両手で掴むと、大気が爆発するような轟音と共に、槍が膨れあがった。

「上手く避けないと、死ぬわよ？」

まあ、その方がずうっとありがたいけど」

リリアは腕を交差させると、頭上で魔槍を回転させ始めた。

すると、灼けつくような吹雪が竜巻を生み、そこに青い炎が巻き付く。

「あれは、まずいつ」

千里は直感で、その竜巻に危機感を覚えていた。

周囲を巻き込むような暴風と、痛みを伴う吹雪。

「マガジンは……いや、同じ魔法は吸収できない、みたいだね」

合成されてだけで、既に千里が吸収した二色の魔法と同じ物。一度吸収したら変えることは出来ないという代物だった。

「【灼雪蒼炎の魔嵐】」

最後のワード共に、竜巻が解き放たれる。

真正正銘、リリアという悪魔王の“本気”の一撃は、衝撃で玉座の間の天井を吹き飛ばし、それでもなお千里につき進んでいた。

「【光よ……蒼炎纏いて、彼の者を絶て！】」

千里が大きく剣を振ると、蒼い巨大な刃が竜巻に向かう。

一つの力だけでは足りないだろう。だから千里は、“足す”ことにした。

「【パージ！マガジン・セット！イグニッション！！】」

次のマガジンがセットされて、赤透明の剣真が出現する。

千里はそれを、間髪入れずに振り抜いた。

「【光よ……灼雪纏いて、彼の者を絶て！】」

蒼炎の刃が竜巻にぶつかった、直ぐ後。

追いついてきた灼雪の刃が蒼炎の刃と混じり合い、竜巻と拮抗し始めた。

「【パージ……断て、光輝！】」

そこへ千里は、最後の一手をかける。

黄金に輝く光の刃。それを、持てる全ての力を利用して、解き放

った。

「碎けるっ！！！！」

「そ、んな、そんなんっ?!」

三色の輝きは、共に交わり極光となる。

そしてその空間を黄金で満たすほどの輝きは、竜巻を貫き、魔槍を砕き、そしてリリア自身を斬り裂いた。

「あ、ああああああっっっ!?!?!?!」

光に痛みはなく、ただ安らぎに似た何かがあった。

強制的に改心させるようなものではなく、ただリリアの四肢から力を抜く。

「ジャック」

一言呟いて、リリアが落ちる。

闇に抱かれるようにそっと、リリアは地面に倒れ伏した。

「終わっ、た」

千里も同様に地面に降り立つと、疲労感に包まれる身体を前に進める。

未だ光の矢印が示す、玉座の裏。

そこにある小さな扉へ、千里を導いていた。

「ナーリヤ」

「ジャッ、クは、わたさ、ないッ!」

ドアノブに手をかけた瞬間、千里は目を睜りながら振り向いた。光の剣によって戦意を喪失させられてなお、リリアは魔力を込めて槍を投げる。

何の属性も持たない、ただ影を固めただけの黒い槍を、“愛”という執念に突き動かされてリリアは撃ち放った。

「あ、だめ」
どんっ

スローモーションになって、槍が千里につき進む。疲労感も相まって避けられず、千里はただそれを呆然と見ている。槍はコマ送りのように千里へ向かい……そして、視界が“白”で覆われた。

「え？」

自分に多い被さった白いシャツと、額にかかる黒い髪。開け放たれた扉の向こうに消えていく槍と、背中に回された力強い熱。

「千里」

ずっとずっと聞きたかった、優しい声。

「千里」

耳に響く、暖かい音。

「千里」

切ない旋律、頬に伝う熱い雫。

その全てに千里は、胸を震わせる。

「ナーリヤ、ナーリヤ、ナーリヤっ!」

「僕はここにいて、ここにいてよ、千里」

「わ、私、わたし、ずっと、会いたかったっ」

もっと言いたいことは、沢山あった。

そのはずなのに、涙が止まらず、声が上手く出せない。

ナーリヤの声が自分と同じように震えていることが解ったからこそ、千里はナーリヤをただただ抱き締めていた。

「僕はここにいて。」

だから千里も “ここ” にいて

「うん、うん、うんっ!」

私はここにいて ずっと、“ここ” にいて!」

強く抱き締められてなお、千里は涙を流し続ける。
ナーリヤの傷だらけの身体に、涙を落とし続ける。

「あ、あはは、は」

そんな二人の背後で、か細い声が響いた。

ナーリヤは千里を抱き締めたまま振り返り、倒れ伏すリリアに顔を向ける。

「所詮、わたしに愛は叶わなかった。たったそれだけのこと。

ふ、ふふふふ、いいわ、もう。殺したいのなら、好きにどうぞ。

わたしは「

「リリア」

ナーリヤが名を呼ぶと、リリアは倒れ伏したまま肩を震わせる。その表情は、ナーリヤからは伺えない。

それでもナーリヤは、リリアの泣きそうな顔が、“視えて”いた。

「僕はジャックじゃない。

僕はジャックには、なれない」

リリアはただ、黙ってナーリヤの声を聞いていた。

「それでも僕はジャックに触れて 彼の、“ことば”を得た」

「え……?」

思わず、リリアは顔を上げる。

黄金の瞳を真っ赤に腫らして、ただ呆然とナーリヤ達を見上げていた。

「『僕は君を愛していた。

そして、君を愛していたのは、きっと僕だけじゃない。

もっと周りを見て、君はもう本当に欲しいものを、持っているか

』」

「……ジャック?」

ナーリヤの姿に、リリアはもう一度だけ、ジャックの姿を幻視する。

金色の癖毛に、細められた優しい瞳。その笑顔を、思い浮かべる。

「『君は愛されている。だから、怖がらずに愛しても良いんだ。リ

リア』」

「あ、あああ

リリアが、両手で顔を覆う。

愛されているか解らない、だから臆病な愛し方を続けてきた。その重く苦しい箍が、音を立てて崩れ落ちる。

と、同時に、ナーリヤ達の後ろから白い影が飛び出して、リリアに走り寄った。

「お嬢様っ！」

「あ、いん？」

アインは満身創痍の身体に鞭を打ち、走り寄る。だが途中で足を縛れさせて、転んでしまった。

「アインは、わたしのこと……愛してるの？」

不安げに瞳を揺らして問いかけるリリアに、アインは泣きそうな顔を浮かべる。

「使い魔といえど、心までは縛れません。

それでも私は、私たちは、お嬢様を愛しております。

ですからっ！ですから……ご無理をなさらないでください、お嬢様」

アインは身体を引き摺りながらリリアに近づき、多い被さるように抱き締める。

その温かさとは無縁なはずの冷たい身体に、リリアは熱を感じていた。

「ごめん、なさい。ごめんなさい……ごめんなさい、アイン」

アインの胸で、リリアは涙を流し続ける。
これまでに抱えてきた全てを、吐き出すように。

「これから彼女は、幸せになれるかな？ナーリヤ」

恋人を死の淵に失った、一人の少女。

その姿が、千里は自分と重なってみえていた。

危険な冒険の最中で、何度も傷ついているナーリヤを、顔も知らないジャックと重ねていた。

「なれるよ、きつと」

「うん……うん」

千里は、優しく抱き締めてくれるナーリヤを、そっと抱き返す。

「ナーリヤ……私ね」

「うん」

千里は逡巡し、そしてぐっと前を向く。

そして、ナーリヤの瞳を真正面から見つめた。

「私、ナーリヤのことが」

「リリア様っ！」

千里の言葉が続く前に、ぼろぼろの身体のフィーアが飛び込んできた。

次いで、レウが追いつがり、フィフとドライが飛び込み、フィオナが入ってツヴァイが飛び込む。

「あー……えーと」

ナーリヤは突然のことに身動きがとれなくなり、俯いて表情がみえない千里を覗き込む。

千里はナーリヤから身体を離すと、玉座の後ろへ飛び込んで、ナーリヤの腕を引っ張った。

ほんの僅かな時間。

気がついたのは、フィオナだけ。

玉座の後ろに飛び込む際、千里は目があったフィオナにウィンクを一つ、落としていた。

「もう、逃げないって決めたから」

「え？」

そして、首を傾げるナーリヤの頬に右手を添えて、笑う。

咄嗟の機転でフィオナが玉座の後ろに投げてくれたカツラを左手に取り、呆然としていたナーリヤに向かって……背伸びを、した。

「あ」

ほんの僅かに重なり合った、唇。

柔らかさと熱を感じて、ナーリヤは身体を固まらせる。

そんなナーリヤに千里は、満面の笑みを浮かべて、笑った。

「好きだよ、ナーリヤ。」

もう逃げないから、覚悟しててね」

ウィンクを一つ落とすと、千里はカツラを被って玉座から出る。頬に朱を刺し、唇に指を這わせながら。

「え、あ」

残されたナーリヤは、玉座に背を預けてずるずると腰を落とす。
その顔を、千里よりもさらに赤く染めながら。

響く喧噪、交わる熱。

ナーリヤは虚空に向かって、一人小さく微笑むのだった。

七章 第六話 灼雪蒼炎の悪魔王 後編（後書き）

漸く七章が終了。

次回から第八章、やっと名前だけ出続けていたノーズファン編へ。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次章もどうぞ、よろしく願います。

八章 第一話 晴れ渡った空の下で

水滴が、湖に“昇って”波紋を描く。

透明なのに向こう側を覗き見ることができない、水晶の球体。

それが、やはり透明で透けることのない水晶でできた大広間の中央に、浮いていた。

水晶から涙のように零れ昇る、透明な雫。

冷たさも暖かさも感じられないその水は、絶えず空へ昇り、水晶の天井で波紋を描く。

「時が、近づいているのですね」

威厳に満ち、それでいて澄んだ声。

水晶の前で手を握り跪く女性から、憂いの込められた吐息が零れる。

…は…い。

ほとんど聞き取ることが“できなくなった”声。

弱々しく、か細い声だった。

その声に、女性は瞳に切なさを映して、緩やかに首を振る。

「どうか」

口ずさむのは、きつと唄だ。

求めて止まない、切望の旋律。

未来を望む、希望の音。

「
どつか」

女性だけしかいない空間。
たった一人のはずである、水晶の部屋。

「
どつか」

その中央に、刹那の間　　黄金の、影が浮かんだ。

E
x
I

晴れ渡った空。

城に降っていた灼雪が止み、爛々と輝く太陽が顔を覗かせていた。雪に覆われていた城も、本来の澄んだ空色の壁を見せて、優しい綺麗な姿を見せている。

そんな中、ナーリヤ達はペルファにある数少ない港で、リリアとその使い魔達と対峙していた。

「貴方たちにしたことが、許されることだとは思っていないわ」

神妙な表情で、リリアは言う。

彼女とて一国の主。暴走のツケくらい払おうと、静かに頭を下げた。

そんなリリアの謝罪を受けて、レウはゆっくと、口を開く。

「帝国としては色々と言いたいこともあります、が」

レウはそういうと、ナーリヤと千里の顔を見る。

被害を被り怪我までしてきたのに、その表情は澄んでいた。

そんな顔を見てなお憤りを見せる事が出来るほど、レウは“熱くはないのだ。”

「結果的に見れば船の修理期間的にも出航が遅れた訳ではなく、またそちらのご助力により予定よりも早く修理が完了しました」

レウが言いたいことを悟ったのか、リリアはどこか申し訳なさそうに頷く。

愛に振り回され結果愛を得た彼女は、憑きものが落ちたような表情をしていた。

「ですので、処断等は直接の被害者であるロウアンズ氏にお任せします。

……どーせ記録にも残らない事件ですし」

最後の呟きは、比較的近くにいたフィオナにしか聞こえなかったようだ。

やる気なさげに肩を落としてため息をつくレウに、フィオナは苦笑を一つ零した。

どうにも苦労性なのだろう。レウは、息を吐きながらも緩んだ表情をしている。

「ナーリヤ、それからチサ……リクト」

リリアは、千里の名前をナーリヤが呼んだ時に知ったので、それで呼びそうになっていた。だが、軽くナーリヤから説明を受けて、慌てて言い直した。

「自分勝手だとは思っけれど、わたしはこの国と、改めて向き合いたい。

だから、命を差し出せと言われても、頷くことはできない」

リリアはそう、決意に満ちた表情で語る。

どんな処分でも受けようと、けれど死ぬことはできないのだと。強い瞳で、語っていた。

「けれども、願いがあんなら、どんなことでも叶えるから」
「僕の“お願い”は、一つだけだよ。リリア」

遮るように、語りかける。

その優しい表情と暖かい声に、リリアは下げた頭を上げて、目を見開く。

視線を上げた先では、ナーリヤの隣で千里が、頭痛を覚えるかのように額を抑えていた。

だが、その表情はどこか嬉しそうで、優しい。

「ジャックとの約束を、守って」

「あ……」

愛されてもいい。

君は、愛されている。

だから大切な人を愛して、愛されて。

そうリリアに語りかけるジャックの表情が、ナーリヤと重なる。

緩やかに細められた眼、優しい微笑み、暖かい声。

重なって、やがて消えた最愛の人の残照に、リリアは一筋の涙をこぼした。

「うん……うん。」

ありがとう、ありがとうナーリヤ」

その涙を、横に控えたアインが、白いハンカチでぬぐい取る。

優しい感情を、その銀の瞳に浮かべながら。

「わたしは、リ・リリア・ウィル＝オルクスフォンハイドは、

貴方たちに危機が訪れようとした時、この力を必ずお貸しします。

その証として、これを」

リリアは畏まった表情で、ナーリヤの手を取る。

その時に少しだけ眉を寄せた千里を、どこか楽しそうに見ながら。

「これは？」

ナーリヤの右手、その中指に輝く赤い指輪。

金のリングに赤い宝石、太陽を模した円形の紋様。

「わたしたちの一族と特別な繋がりを持つ指輪。

ペルファの秘宝 “太陽の指輪”よ」

「太陽の、指輪？」

リリアはこくりと頷くと、千里に視線を移し、苦笑する。

その視線の意味が分からず首を傾げる千里の前で、リリアはステ
ップでも踏み出すようにふわりと浮き上がった。

「貴方に、太陽の加護を」

それは、儀式だ。

深い愛の歴史を持つペルファに於ける、一つの儀式。

愛により絆を結ぶ、愛の魔王のしきたり。

「え？」

「なっ!？」

リリアの幼い唇が、ナーリヤの頬に当たる。

本当は唇でなければならぬのだけれど、と苦笑を一つ零しながら
う。

リリアはゆっくりと、地面に降り立った。

「色々ありがとう。楽しかったよ、おにーさん」

固まるナーリヤと、赤い顔で二人を交互に見る千里。

口元を抑えて肩を震わせながら顔を逸らすレウと、額に手を置き首を振るフィオナ。

ジト目でリリアを見るアインとツヴァイと、ニヤニヤと笑みを浮かべながらその様子を見るフィーア達。

そんな中リリアはただ、頬に朱を差して、微笑んでいた。

千里に手を引かれて、ナーリヤが引き摺られるように去っていく。船に乗り込み出航するその様子を、リリアは最後の最後まで見送っていた。

「さて、と」

「お嬢様？」

リリアはアインから日傘を受け取ると、踵を返す。

「街の様子を見てこよう。」

住んでいるひとたちの姿も、ちゃんと見ておきたいし」

リリアはそういって、日傘をくるくると回す。

そんなリリアを、アイン達は優しげな表情で見っていた。

晴れ渡った空。

久遠に広がる青空の下、リリアは笑う。

その空によく似た、澄んだ笑顔で。

十

ノーズファンへ向けて出航した船の甲板で、千里は一人海を眺めていた。

虚ろな目でぼんやりとため息を吐き、俯いて肩を落とす。

顔を上げたと思ったら唇にそつと指を這わせて、再び大きく息を吐いた。

「うう、顔を合わせられない」

ナーリヤは今、自室にいる。

いい加減短剣や弓を手入れしておかなくては、いざという時に使えない。

そういつて、部屋に籠もっているのだ。

「私、なんであんな大胆な……だ、だめだ、思い出さないようにしよう」

こんな時は、深呼吸。

吸って吐いてを繰り返して、その度に浮かぶナーリヤの笑顔。なんだか色々ダメだった。

「なんにしても、ナーリヤの反応も見ないとわかんないか」

気にされていなかったら、それはそれでショックだ。

そう千里は、一人で考えて一人で落ち込む。

このままでは、見事な悪循環に陥ってしまいそうだった。

「あー……会おう」

そういつて、踵を返す。

目指すはナーリヤの部屋。

きちんと会って話しをしないと、もうどうにも進めそうになかった。

甲板を降りて、船の中へ。

揺れの少ない廊下を歩き、階段を下りてナーリヤの部屋へ向かう。たいして距離がある訳でもないので、ドアノブに手をかけるまで

あっという間だった。

「深呼吸、深呼吸」

吸って、吐いて、もう一度。

息を整えると、千里はノックをするために手を挙げた。

……っ

「うん？」

しかし、中から聞こえてきた声に、その手を止める。

荒々しい息づかい、軋むような 悲鳴。

「っ ナーリヤ！」

扉を開ける手に躊躇いはなく、千里はナーリヤの部屋に飛び込んだ。

散乱した荷物、無造作に転がった弓や短剣。

ベッドに腰掛けて、胸を押さえるナーリヤの姿。

「ちさ、とっ？」

「っ」

薄く目を開いて千里を見るナーリヤに、勢いよく駆け寄る。

「どうしたの？！」

ど、どこか痛むの？今、船医さんに連絡を っ

走り出そうとした千里の手を、ナーリヤが掴む。

苦しそうにしながらも首を振るナーリヤの姿に、千里は幾分か

逡巡を見せて、それからゆっくりとナーリヤの隣に腰を落とした。

「ナーリヤ」

かき抱くように、ナーリヤの頭を抱え込む。
強く、優しく、ナーリヤを抱き締めていた。

「側にいるから、だから大丈夫だよ」

風邪を引いた時、体調が悪い時。

誰かが側にいることの暖かさを、千里は知っている。

どうしようもなく苦しい時、側にいてくれたナーリヤに、その優しさを教わっていた。

「大丈夫、大丈夫だから」

「千里……ありが、とう」

ナーリヤは自分の頭を抱く千里を、かき抱く。

細い腰に両手を回して、暖かさを求めるように抱き締めていた。

そしてゆっくりと瞼を落として、そのままベッドに横になった。

額は熱く、熱でもあるのかと思うほど汗を掻いている。

千里は手ぬぐいでも持ってきた方がいいのかと思ったが、ナーリヤの手が固く、抜け出せそうになかった。

仕方なく千里は、ゆっくりとナーリヤを見下ろす。

男性にしては柔らかい、癖のない髪。

すっと筋の通った鼻梁に、きつく閉じられた瞳。

右目のすぐ下、頬に走る傷跡は、ガランと戦った時に出来たもの。

黒いシャツの下から覗く肌には、他にも沢山の傷跡があった。

「ナーリヤ」

名前を呼ぶが、返事はない。

解っているが、呼ばずには居られなかった。

十八歳といえば、まだ大学に入学したばかり、といった年頃だろう。

もしかしたら、まだ高校生という可能性もある。

「ずっと一人で、なんでもこなしてきたんだよね」

セアックが死んでからは、ナーリヤは交流もそこそこに、形見の家で暮らしていた。

それが孤独だったのか、それとも不幸だったのか、千里が勝手に想像して良いことではないだろう。

それでも、思ってしまう。

「寂しくは、無かったのかな」

頭を抱く手に、力が入る。

今こうして苦しんでいる理由すら理解できていないということが、千里は無性に苦しかった。

胸を刺す痛み、心を締め付けるような、疼痛。

寂寥を秘めた瞳に映る、最愛のひとの顔に、千里は目を瞑る。

そうしている内にだんだんと意識が薄れ、千里もナーリヤ同様に、緩やかな眠りにつくのだった。

十

音が響く。

甲高い音が、強く反響する。

身体を奔る灼熱に、ただ肺の中の空気をはじき出すように、咳き込んだ。

『あつ、い』

身体を蝕む痛み、縋り付きたくなるような末練、満足感にも似た

諦め。

辿って、辿って、辿って、辿り着いたその先に見えた光明の、更に奥。

そこは深紅に染まる、地獄のような場所だった。

『いたい、な』

思い浮かんでくるはずの人たち。

その顔を、ナーリヤは知らなかった。

浮かんでは消え、消えては浮かぶ水泡のように。

知らない思い出が逆流する。

『ねえ起きて、お願いだから　っ！』

温かい雫が、頬に流れ落ちる。

誰かが泣いているのが見えて、その表情を見ると胸が痛む。

なのに、それが誰だか、どうしても思い出すことができない。

『なか、ないで』

『　っ！どうして、　はこんな時でも、笑ってるの？』

そんなに、頬を腫らして、泣かないで欲しい。

“いつも”みたいに笑って欲しいと思うのに、それは言葉にすることができなかった。

『今、人を呼んでくるから、だから………』

背を向けて走り出す姿に、手を伸ばすこともできない。

身体を起こすことを拒む灼熱に、苦しげな息を吐く。

『雨、かな』

もう、目が見えなくなっていた。
しとしとと降り出した雨が肌に当たり、涙のような筋を作る。
やがて自身から流れ出した赤と交わって、混ざり合う。

『じゅめ、ん』

ただ、謝る。

もっといいたいことはあったはずなのに、その一言しかこぼせな
い。

歯がゆくて、悲しくて、悔しくて。

『あり、が、とう』

それでも、今側にいなくても、この一言だけは伝えたかった。

雨の音が、空に吞まれて　消える。

目を、覚ます。

唐突に開いたことで、部屋の明かりが顔の右側を照らした。
左側と正面は真っ暗で、暖かい。

布団でも抱いて寝たのかとナーリヤは身じろぎして 気がついた。

「う、ん」

自分の頭を抱いて眠る、千里の姿。
あろうことか、その柔らかな体軀に顔を埋めている自身の体熱。

(ここに、これは一体っ?!)

状況判断が追いつかず、困惑する。

体力を消耗しきっているためか身動きをとるこすら叶わず、自分より強い力で抱き締める千里に、されるがままになっていた。

(お、思い出さないと。どうしてこんな状況に?!)

えーと、眠る前は……あれ？今何時だろう？ってそうじゃなくて
！)

とりとめのないことも、考え始めてしまつと止まらない。
ここが船だと思いついて、その前にどこにいたのか思いついて、
何故か記憶が遡って。

「柔らかかった、な……ってだから、この思考展開はマズイっ!!」

焦る余り、ナーリヤは思わず声に出していた。

ペルファの城で、アインに打ち勝ち、玉座の後ろで……。

その感触を思い出し、思わず口に出し、そしてそれを、一番まず
いタイミングで目を覚ました少女が聞き届けた。

「や、やわらか、い?」

「っ!?!」

胸に抱かれたまま、ナーリヤは恐る恐る顔を上げる。

そこにいたのは 首から耳まで顔を真紅に染め上げた、千里の
顔だった。

『つつつっ!?!?!?!』

同時に飛び起きて、離れる。

両者とも顔を赤くしたまま、ベッドの上で正座で向き合った。

奇しくも自分を大いに意識しているのだと知ることができた千里
は、熱で暴走しそうな頭にとつとつをかける。なにかこの状況
を打ち破る展開を、むしろ偶然フィオナ辺りが訊ねてこないかなど
と考え始めるが、そう都合良く事は運ばない。

「や、やわらかかった?」

何を聞いているんだ、いや本当に。
千里はそう自問しながらも、ナーリヤが苦笑して流してくれることを望んでいた。

しかし、混乱しているのはナーリヤも同様……というより、ナーリヤの方が上だった。

「う、うん。そ、それに、暖かった」

何で余計なことまでいった、いや本当に。

ナーリヤは内面でそう自問しつつ、目を伏せた。絶対ここは流すべきだったのだと冷静な部分が告げるが、手遅れにもほどがある。

「そ、そっか」

「う、うん」

二人とも、声がうわずっている。

互いに沈黙するが、時間ばかりが過ぎてどうにもならない。

打開策を、どうにかと考え、千里は漸く思い立った。というより、思い出した。

「ねえ、ナーリヤ」

「な、なんでしよう」

途端に冷静になった千里に比べて、ナーリヤの顔はまだ赤い。

その表情を見て自身も再び赤くなりそうになるのを、千里はぐつと抑え込んだ。

「どうして、苦しそうだったの？」

「え、ええっと、記録の逆流が……って、あ」

そうしてナーリヤは、思わずそれを口にした。
心配をかけまいと黙ってしようとした、その事実を。

「ナーリヤ……それって。」

「そういえば、リアが“ジャック”っていつたのも……」

「え、えーと、その」

もう、誤魔化せなかった。

訝しむような表情から、徐々に真剣な顔へ変わる。

そして千里は、身を乗り出してナーリヤに顔を寄せた。

「説明、してくれるよね？」

煙にはまけない、とナーリヤは悟る。

そうしてゆるゆると、首を縦に振った。

「読み取った記録が、強く流れ込むんだ。」

取捨選択ができるようになったから、それを試そうとしたら、突
然」

無茶がたたったのか、直接触れていない物の記録まで流れ込んで
きた。

幾重にも重なる人生の足跡。その過ぎ去った轍に、ナーリヤは侵
食されていた。

その苦しみも、何故だか千里が側にいただけで、収まったのだが。

そこまで話すと、千里がナーリヤの胸に顔を埋めてきた。

強く押されて体勢を崩しそうになるも、ナーリヤは千里をしっか
りと抱き留める。

「私じゃ、ナーリヤの力になれない？」

「千里……」

隠そうとした。

黙っていようと、した。

「ナーリヤが私の力になってくれたみたいに、私もナーリヤの力になりたい」

そう、アロイアで、千里は言った。

それなのに頼ろうとしなかったことを、ナーリヤは静かに認めていた。

「情けない姿を、見せたくなかった」

「情けなくなんか無い。救おうとして一人で苦しむ姿が、情けないはずがないよ」

ナーリヤは、そつと、多い被さるように千里を抱き締める。

そうしているだけで、どうしてか胸が軽くなっていくような、そんな気がしていた。

だから両手に力を込めて、その温もりを享受する。

「私はもっと、ナーリヤが知りたい。」

ナーリヤと一緒に、色んな事を知っていききたい」

だから、だからと千里は顔を上げる。

漆黒の瞳を覗き込むように、おおきな栗色の瞳でナーリヤを見る。

「もっと私を頼って。」

なにもできないかもしれない。でも 側にいることなら、できるから」

夢の中の“誰か”の姿と、重なる。

その残照はすぐに消えてしまったが、それでもナーリヤの心は満たされていた。

自身を見つめる千里の頬に、そっと右手を置く。

千里からこぼれ落ちた一筋の涙を拭くと、そのまま顎まで手を這わせた。

指から伝わる千里の温度は熱く、ナーリヤの心を震わせる。

柔らかな頬に滑らせた指、その感触に、脳を揺さぶる目眩を覚えていた。

「千里……」

小さく名を呼ぶと、千里がそっと目を閉じる。

迷わない、迷うものかとナーリヤはゆっくりと顔を近づけていった。

「ありがとう、千里」

「ノックをしたら返事くらい失礼したすまんッ」

唇が重なる、寸前。

もう少し前まで望んでいた人物の音が、響いた。

どうやらノックはしていたらしいが、気がつかなかったのは二人の落ち度。

だからといって、放って置くことではない。

「ま、待ってフィオナさん！」

跳ねるようにベッドから降りると、硬直するナーリヤを残して千里が走る。

そして扉を出る寸前で、ゆっくりと振り向いた。

「これからもよろしくね、ナーリヤ」

唇に指を当てて、そっと微笑む。

眼を細めて笑い、そしてフィオナを追いかけて走り出した。

一人残された部屋の中。

ナーリヤはベッドに仰向けになって寝転がり、右手で目元を覆い隠す。

「こちらこそ、だよ。千里」

そして嬉しそうに、微笑んだ。

船内に響く明るい声。

脳裏に残る、柔らかな笑顔。

過ぎ去った記憶の端、昔日の夢。

どんなことがあるうとも、二人なら乗り越えられる。

そんな想いと共に　ナーリヤは楽しげに、目を閉じた。

八章 第一話 晴れ渡った空の下で（後書き）

今回から第八章。

八章への繋ぎ的な役割が強いお話になります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
第八章も、どうぞよろしく願います。

2011/04/10

誤字修正

八章 第二話 神聖国家ノースファン

光の翳る、朧月の夜。

滑らかな材質によつて構成された、白亜の神殿の中。

法衣の上から白金の鎧を身に纏った青年が、書類を片手に歩いていた。

「嵐により到着予定がずれこんだ、か」

澄んだ声だった。

深い底を余すことなく透かす湖のように、澄んだ声だ。

ため息と共に吐き出される言葉、憂いげに揺れる淡い空色の瞳。

「歓待の準備が整った、と思えばいいのでは？」

金の髪に青年が手を当てて息を吐いていると、そのやや後方から声がある。

「こちらは、砂漠に吹きさすぶ風のように、どこか荒々しくも熱い声だった。

「ズレ込みが無くても、用意は整っていた」

金の青年が振り向くと、先ほどの声の主が見える。

編み込んだ白い髪に群青色の瞳、それから赤褐色の肌。

白い法衣に、やはり白金の鎧を着込んだ青年だった。

「余裕を持つことは、どちらにせよ良いことだろうか？」

「余裕を持ちすぎて、気を抜きすぎることは寛容できない」

白の青年は、堅い表情ながら柔らかく思考する。

金の青年は、表情こそ堅くないが、堅く思考する。

どこか似通っていないながら、どこか正反対な二人だった。

「それで、何をそんなに気に負っている」

「歓待に浮かれた神官達のことだ。まったく、それで抜かれては意味がない」

金の青年は、資料の束を己の副官である白の青年に渡す。

そして渡された資料にざっと目を通すと、なるほどとため息をついた。

「小型の魔獣、デプシーモルトか？」

「そうだ。それも大量に」

デプシーモルト。

有り体に言えば、黒いネズミである。

小型の魔獣というものの、全長二十五センチから四十センチほどの大きさで、顎の力が強くすばしっこい。おまけに夜目が利くものだから、夜に活動されては目も当てられないという、はた迷惑な魔獣である。

「いくらふ抜けていても、そうそう侵入は許すまい」

「だから頭を抱えているんだ。神殿が魔獣まみれなど、示しがつかない」

金の青年はそう、再び頭を抱えた。

魔獣の気が立っている今、下手な騒ぎでノーズファンをぐらつかせたくない。

そう考えていても、些細なミスで乱されているようでは話にならない。

「神託」は？」

「そんなことで、オリヴィア様の気を遣わせる訳にはいかない」

白の青年が訊ねると、金の青年は真剣な瞳で首を振る。

ノーズファンの最高権力者にして神に通ずる巫女である女性の顔を、思い浮かべながら。

「これ以上なにも、起きなければいいのだが」

「これ以上なにも、起こさせはしない」

金の青年の、決意の込められた声。

それに白の青年は、不安げな表情を押し隠すのだった。

水面を見下ろせばフリックが泳ぎ、空を見上げれば渡り鳥のラムルウが飛ぶ。

吹きさすぶ風は肌を打つ程度には強く、それ故に会話が周囲に零れることはない。

「何故、異性の従者ではないのか、聞いていなかった訳ではあるまい？」

もうすぐノーズファンが見えようという、船の上。

その甲板で、ナーリヤと千里は肩を落として説教を受けていた。額に手を当てながら注意を告げているのは、金の髪を靡かせているフィオナだ。

「神の言霊を授けられるという神聖な地。

そこへ行くまでの間に“いかがわしい”ことがあったとなれば―
大事だ」

フィオナはそこで一度言葉を句切ると、必死に目を逸らす二人を

睨む。

といつてもその視線に含まれているのは、若干の呆れであった。

「要件を告げ戸を叩き、そうして手順を踏んで中に気配が在れば、返事がなかったとしても入室はしてくるだろう。偶然、私だったというだけのことだ」

それもフィオナの要件というのは、もうすぐノーズファンに到着するというもの。

伝えに行こうとしていた船員を引き止め、病み上がりのナーリヤの調子を見てこようと、メッセンジャーを引き受けたに過ぎないのだ。

「男性同士にしか見られなかったとしても、問題であることには変わりない。

むしろ、“主の営み”から外れると言うだけ、他国で行うよりも問題だ」

勢いに任せて、というのとは少し違う。

確かに両者の意志の元で及んだ行為であるからこそ、ナーリヤと千里は気まぎれに肩を落とす。

そも、こんな説教を“させてしまっている”という時点で、申し訳なかった。

「……頼むから、到着後に追放騒ぎなど起こさないでくれ」
「は、はい」

頂垂れてそう零すフィオナに、ナーリヤは慌てて頷く。

視線があつて、鼓動が速くなってしまう。

それを見とがめられて連鎖的にバレでもしたら、ノーズファンを
“欺いた”のだと騒ぎになるだろう。

「向こうでは、少し距離を離していた方がいいかもしれない」

真剣な顔でそう呟くナーリヤに、千里も頷く。

必要なのが緊張感であるというのなら、ある程度離れて行動した
方が良いだろう。

「それじゃあ私は、なるべくレウかフィオナさんについての方が良い
のかな？」

「そうだな。まあ従者繋がりでレウだろう。異性間という認識を考
えると、な」

男装して入るのだから、扱いは男性である。

それはつまり、フィオナとは“異性”と認識されるという事だ。

「リアの時みたいに、すぐばれるのは避けなきゃ」

「そうだね。っていても、対策がある訳じゃないけど」

千里とナーリヤが、揃って肩を落とす。

そんな二人に、フィオナは訝しげに眉を寄せた。

「まずバレはしないだろう……と、解っていたのではなかったのか
？」

「へっ？」

「えっ？」

目を開いて驚く二人に、フィオナは今日何度目かも解らないため
息をつく。

額に手を当てて首を振る仕草からは、なんといえない気苦労が漂っていた。

「異性の従者は連れてこない。」

……そんな常識を、まさか歓迎まで受けつつ真っ向から破られるとは思わない」

それが常識である以上、女性っぽいと思われても問題ない。自信満々に門を潜り、神の御前で堂々としているのだ。

それがまさか女性であるなどと疑うのは、神託により招いた“神”そのものを疑うことに他ならないのだ。

「解ってやっているものだと思ったのだが、な」

フィオナの言葉に、二人は揃って気まずげな笑みを浮かべる。そうしていると、船から汽笛が響いてきた。

「到着だな。気をつけてくれ、本当に。本っ当に、な」

「は、はい！」

「う、うん！」

同じタイミングで返事をし、そのことに若干の照れを見せて顔を逸らす二人。

その姿に、フィオナは深く……深くため息を吐くのがあった。

その街の形容を一言で表すのなら、“純白”だ。

白亜の、石造りの建物が並び、白い布のような服を身に纏った人たちが歩いている。

活気はあるのだが、それも度を越えることなくどこか物静かで、和やかな光景。

そんな静かな街並みの奥。

高い丘の上にそびえる白亜の神殿に、千里は感嘆の息を吐く。

「パルテノン神殿みたい……あ、でもどこか教会っぽいかも」

歓迎を受けて進んでいく、ナーリヤとフィオナ。

その後方からついていく船員や軍人たちのなかに、千里は混じっていた。

大きな丸い石柱を揃えた、巨大な玄関口。

その奥にそびえる城のような教会。

圧倒的な存在感と息を呑む神聖さが両立された、荘厳な建物だった。

両端に列を作って頭を下げている人たちは、みんな黒い法衣を身に纏っていた。

奥に行くにつれて白い法衣の人が見えることから、階級によってある程度分けられているのだろう。

「鎧を着た人も居る？」

「ああ、あれは神殿騎士だね」

横から聞こえてきた声に顔を上げると、そこにはレウが歩いていた。

周囲に私語が聞こえないように、小声で千里の疑問に答えているようだ。

「白い法衣に鎧を着た人が、神殿や“巫女”の警備をする神殿騎士、通称近衛騎士」

顔を向けて説明するレウの、視線を追う。

誰も彼もが美青年に美女という、華やかな騎士達だった。

「で、手前にいる黒い法衣に鎧を着た人たち」

入港から警備をしていた、黒い法衣の上から白金の鎧を着た人たち。

どこか無骨なイメージのある騎士達だ。

「彼らは、街の治安維持を行う騎士だね。」

扱いとしては、白い法衣の神殿騎士の“分団”にあたる人たちだ」

こちらは、男女の対比が同程度だった神殿騎士に比べて、ほとんどが男性。

それも、一部を除いて大柄で厳つい人たちで構成されていた。

レウの説明に相づちを打ちながら、周囲を見回してみる。

誰も彼もが歓迎ムード。数年ぶりに“神託”によって招かれた戦士達を、心待ちにしていたようだ。心地よい明るさが、場の空気を支配していた。

自分の扱いは、所詮オマケだ。

それでもどうしてか気恥ずかしくなり、千里はレウとは反対側へ大きく顔を逸らした。

「え」

その、視線の先。

黒い法衣に、黒金の鎧。

背に抱える、暗い漆黒の大剣。

夜を溶かしたような髪と無精髭、宵闇を讃えた右目。

盾に一本傷の入った左目は、空虚な蒼色の。

「あれ、は……“なに”？」

千里は、“誰”ではなく“なに”と呟いた。

その右目が捉えているのは、千里ではなくナーリヤ達。

いや、それよりももっと先　神殿を、見ているように思えていた。

その瞳が　どうしようもなく、怖い。

「あの鎧は……噂に聞く“第十三分団”かな」

「十三、分団？」

千里が首を傾げると、レウは「そう」と頷いた。

そうして声をかけられると、もう視線の先にいる大柄な男性に、奇妙な恐怖心は抱いていない。あくまで刹那的に感じた、妙な感覚だった。

「犯罪者の中でも特に凶悪な者を取り締まる、近衛騎士と対を成す騎士達だ」

ノーズファンの治安が乱れることがないのは、信仰の元に集った治安維持の騎士達によるものだが、それでも“あぶれた”ものは出る。

そういった通常の騎士達では対処できないような凶悪な犯罪者や魔獣と相對するのが、第十三分団である。

「黒に黄金の装飾となると、十三分団、団長……かな」

分団の統括者。

その横にいる病弱そうな青年は、副官だろうか。

白い髪に細い眼と、長方形の眼鏡をかけた男性だ。

「十三分団、かあ」

それだけ呟くと、千里は最後にもう一度だけ、団長の姿を視界に納める。

そしてすぐに視線を逸らし、神殿の中へ踏み込んでいった。

十

神殿の内部も、やはり白で覆われていた。

まっすぐと伸びる青の絨毯、その先に見える玉座は、この地の最高権力者のものだ。

その謁見の間の玉座の前で、ナーリヤとフィオナは跪いていた。

荘厳な音色を奏でる、パイプオルガン。

聖歌を歌う乙女達と、目を伏せて並ぶ白金の騎士。

ステンドグラスから差す陽光に、ナーリヤは二度ほど瞬きをした。

右側から誰かが入ってくる気配。
まだ、顔を上げはしない。盗み見て無礼だと判断されるわけには、
いかないのだ。

「面を上げてください」

心の内側を揺るがすような、魂の中へ染み渡るような。
そんな、清涼で透きとおった声が、ナーリヤ達に当てられる。

そうして顔を上げて、ナーリヤはほんの一瞬息を呑んだ。

「ようこそ、神の伝達者達の国、ノーズファンへ」

月を溶かし込んだような、黄金の髪。
星を呑み込んだような、淡い金の瞳。
光を纏い込んだような、白く儂い肌。

純白の法衣、簡易的なドレスのような服に身を包んだ、美しい女
性。

その姿はまさしく、“神秘的”という言葉がよく似合う。
いや……それ以外に、表しようがないような、気さえするのだ。

「あ、れ？」

だが、ナーリヤが驚いたのは、それとは少しだけ違っていた。
もちろんその容姿の美麗さに驚きはした。

けれどもそれ以上に、輝きを纏ったその雰囲気、
“似て”いたのだ。

光の粒子を纏い、黄金に輝いた時の、千里の姿に。

「む、う」

それは、ナーリヤの左隣で跪くフィオナも、同様だった。周囲に感づかれない程度に、ほんの一瞬訝しげな声を上げたのだ。同じ疑問を持ったナーリヤでなければ気がつけないような、微かなものだった。

「私はノーズファンにて神の意志を受け取る資格を持つ者。

神託の巫女 “オリヴィア”リウリアス”イルエレス”」

リウリアス”イルエレス。

その名前の響きに、ナーリヤは再び思考を巡らせる。

「長い旅路、本当に」

一度思考に潜ってしまったためか、オリヴィアの言葉がほとんど耳に入らない。

それでも考えておかなければならないような、そんな気がしたのだ。

「イル”リウラス？」

小さな声で、そう言葉を紡ぐ。

響きが似ているだけといわれれば、そうかもしれない。けれどあらゆる部分で、似すぎているのだ。

千里と、千里の“力”に。

「神託を行うのは、月が完全となるその夜です。」

それまであと三日ほどしかございませんが、どうぞごゆるりとお過ごし下さい」

オリヴィアがそう告げ微笑むことで、ナーリヤははっと我に返った。

そして、フィオナが頭を下げたのに倣って、ナーリヤも慌てて頭を下げた。

本来ならばもう二日ほど早く到着する予定だったのだが、嵐で思わぬ足止めを受けてしまった。そのため、神託までの暇が、ほとんど無くなってしまったのである。

オリヴィアが立ち去った後、ナーリヤ達は玉座の間を出て騎士に対面した。

白い法衣に白金の鎧と、金の装飾。

黄金の髪と、淡い空色の瞳。

近衛騎士の名に相応しい、端正な顔立ちの美青年だった。

「私は神殿騎士団団長、

“アルトレイ・アラカニディンニソルトオウズ”と申します」

丁寧に洗練された礼に、ナーリヤは僅かにたじろぐ。

そんな慣れない様子のナーリヤを節目に、フィオナは薄く微笑んで受け入れていた。

「こちらは私の副官で、名を“クラウト・セルスニメセレナセ”といます」

「以後お見知りおきを。ロウアンス様、フェイルラート様」

続いて頭を下げたのは、白髪に群青色の瞳、赤褐色の肌の男性だった。

こちらもちやほり、端正な顔立ちの美青年である。

「え、えと、ご丁寧にありがとうございます」

慌てて頭を下げ返すナーリヤだが、それではどちらが客か解らない。

そんなナーリヤに苦笑しながら、フィオナは軽く目を伏せて顎を引いた。

「手厚い歓待、感謝します」

こちらもちまた短すぎるといえばそうなのだが、心は籠もっている。両者の形は違えど思いのこもった礼に、アルトレイは僅かに微笑みを浮かべていた。

だがそれを、生真面目にもすぐに打ち消す辺りが、彼の性格を表しているようにも感じられる。

挨拶を済ませると、白い法衣の侍女達に連れられて個室に案内される。

白を基調とした質素な装飾の、一人部屋だった。

「ふう、緊張するなあ」

品の良い木製の椅子に腰掛けて、ナーリヤは大きく息を吐く。戦士として招かれたためか、武器は取り上げられていない。だがあまり多く持ち運ぶのは邪魔なため、ナーリヤの腰には短剣しか提げられていなかった。

「たぶん、戦意を削る結界とか、張ってあるんだろうなあ」

一度も武器に触れようと、思えなかった。

それは神殿に入る直前、“鋭い視線”を感じても、なお。

「僕に向けられたものじゃ無かったみたいだけど」

それでも、厄介ごとである可能性は、高い。

ただ神託を受けて国を出るということには、なりそうに無いと、ナーリヤはこれまでの経験から感じ取っていた。

「気は抜かないようにしないと」

そう零しながら、ナーリヤはふらりと立ち上がる。

愛用の弓と帝国から使用している槍は、現在千里に預けている。従者として預かって貰えるという事が、頼もしい。

備え付けられた窓。

そこから覗く光景は、静かで和やかなものだ。

城の庭園に咲く花と、吹き上がる噴水、静かな空気。

乱れることが考えられない。

だからこそ、注意しておく必要がある。

ナーリヤはそう決意を胸に、ただじっとその光景を眺めていた。

ナーリヤ達とは別の案内を受けて、千里は従者用の部屋の前にいた。

緊張が抜けきっていないためか、千里の表情はやや堅い。

「こちらが、リクトさまの部屋になります」

侍女の少女が、そう笑顔で頭を上げた。

その人を安心させる笑みに、千里も幾分か肩の力を抜く。

「こちらが、神殿の地図になります。

赤い線で区切られた場所は立ち入り禁止区域ですので、ご注意ください
くださいね」

「この侍女は、みんな優しい笑みを浮かべている。

そのことを思い浮かべて、千里は少しだけ感動していた。最近会った侍女は、斧やら棒やらを振り回していたのだから、仕方がないだろう。

「部屋から出る時は、この紙をかざしてください」

「これは……カード、かな」

長方形の、堅い紙。

堅さに、紙というよりはプラスチックなどでできたカードのような感覚だ。

その表面は蒼く光沢があり、銀色でなにか見たことのない刻印が施されている。

「魔法を用いた、特製の鍵になります」

「鍵、なんだ。なるほど」

ようは、指紋センサーのように、かざしただけで作用するカードキーである。

千里もそう納得すると、鍵を受け取った。

「日が落ちるまでは、基本的に自由に行動することができます。

ですので、それまではどうぞご自由に過ごしてください」

「わかりました。色々、ありがとうございます」

侍女の少女に頭を下げ、別れる。

あてがわれた部屋は、品の良い、質素な部屋だった。

ナーリヤ達よりもランクは下がるが、それでも彼女たちは客人。

一般騎士よりもランクの高い個室が、一人一部屋に与えられていた。

そうして部屋に入ると、白いシーツのベッドまで歩み寄る。

「はあ、緊張したあ」

千里はそう、ため息と共にベッドに腰掛けた。

手元には、煌億剣イグゼと、ナリーヤの弓と槍が置いてある。

従者として預かったはいいが、軽い気持ちでこれらのものを持っている気には、なれなかった。

「なにも無いと良いんだけど……そんな風にいつてられるかなあ」

そう零しながら、イグゼのマガジンを遊ぶ。

現在中身が入っているのは、二つ。

灼雪と蒼炎という、両極端な二属性だ。

「使わずに済めばいいけど、でも」

気になるのは、あの暗い瞳。

十三分団団長という男性の、空虚な左目だ。

脳裏に浮かぶその闇を、千里は首を横に振ることで、払う。

「あー、だめだ。息抜きしよう」

ここの侍女たちに渡された案内図を広げると、それに光の粒子を流し込む。

すると、書かれていた内容　地図と、立ち入り禁止区域が千里の脳裏に浮かんだ。

「っ……説明書さんみたいに、声が流れるとは限らないんだ」

唐突に脳裏に浮かんだ、明確なイメージ。それに千里は、驚きながらも感心していた。素直に納得できてしまうのは、純粹な“慣れ”であろう。

「えーと……庭園なら、出歩いても良いんだ」

千里はそう零すと、ドアを開けて外へ出る。

白を基調とした廊下と、蒼い絨毯の道。

脳裏に浮かぶ地図に従いながら、千里は庭園まで歩いて行った。

「えーと、ここを曲がって……わぁ」

思わず、息を吐く。

青、黄色、橙、桃色、緑、藍色、白。

七色か、それとももっとか。

色々な種類の花が、美しく咲き乱れていた。

「すっごーい……」

歩いて回ると、花々が綺麗に並んでいるさまがよく見えた。

形も整えられていて、また華やかすぎず、上品だ。

千里が“こちら”に来てから、花園のような場所なんて一度も見ることができなかった。

だからこそ、この光景に目を輝かせて、見回る。

「あ、良い匂い……」

花びらに顔を近づけて、軽く匂いを嗅ぐ。

自然の花の匂いというのは香水のように濃いものでは無く、爽やかで甘い。

ここ最近で、もっとも肩の力を抜くことができる、光景だった。

……だから、気を抜いてしまったのだろう。

ゴウッ

「わわっ!?!」

一際強い突風は、風の気まぐれか。

舞い上がった花びらと共に……茶色のカツラがふわりと舞い上がる。

「つまず!」

飛んでから直ぐ、常識離れた脚力でカツラを取り。

慌てて頭に乗せる。飛んでいってしまったら、本当に目も当てられないことになっていただろう。フィオナにも、ナーリヤにも顔向けできなくなるところだった。

「あ、あぶなかつたあ」

「え?あれ?今の……」

背後から聞こえてきた、声。

高い、少女のものと思われる声に、千里は肩を振るわせた。

振り向かなければならないのは解っているのに、流れる沈黙が千里の身体を縛る。

「え、えーと……」

「……ひ、秘密にしてくださいっ!」

反転と同時に、勢いよく頭を下げる。

それはそれは見事な礼で、サラリーマンもののドラマに出てきそうなほど、美しい礼だった。

「秘密つて……今の、ですよね？」

「えーと、はい、今見たものをどうかつ」

少女の顔を、見ることができない。

顔を上げるどころか目を開くこともできず、千里はぎゅっと目を閉じていた。

「うーんと……いいですよ」

「そこをなんとか……つて、へ？」

驚きながら、顔を上げる。

そこで漸く、少女の姿を見ることができた。

背丈は、千里と同程度。

白い法衣は、千里を部屋に案内した侍女のものより、やや上等な色合いだ。

白に近い、淡い色の金髪と、少し濃い海のように青い瞳。

幼げだが整った顔立ちの、優しげな少女だった。

「ほ、ほんとにつ?!」

「は、はい。えーと……でも、その代わりに」

「な、なに？」

交換条件があったか、と千里は肩を震えさせる。

なるべく無茶なことではなければいいけれど、などと思いつながら。

「代わり、というか、お願いなんですけど……私と、お友達になって」
最後の一言は、敬語が抜けていた。
はにかんだような、可憐な微笑み。
突然何を言っているのだろうと小声で呟いている姿を見るに、気
恥ずかしいのだろう。

「えと、その……私でよければっ」

「ほ、ほんとうに？」

突然こんなこといっちゃったから、断られたらどうしようかと……
…」

状況的に、イヤでも断れないのだが、そのことは考えていなかったの
たのだろう。

千里とて嫌と思うことはなかったため、そのことには思い至らな
かったが。

「私はルフィル。オリヴィアさま付きの侍女をしているの。貴女は
？」

「私は陸人……って名乗ってるけど」

友達になろう。

そういわれて、本名を隠すのは、嫌だった。

だから千里は、胸にのしかかる籠を笑顔で外して、笑う。

「千里……千里＝高峯っていうの。でも、これは秘密、だよ？」
「うんっ、いいよ。えへへ……早速お友達との“秘密”だあ」

そう、嬉しそうに微笑むルフィルの姿に、千里もつられて微笑む。

友達がいるということに慣れていないのか、会話を一つするにしても、戸惑いが垣間見えていた。

「えーと、向こうに腰を下ろせるところがあるから、少しお話ししよう?」

「うんっ……と、そっつて」

「大丈夫、人はあんまり来ないから」

ルフィルに手を引かれて、駆け足で庭園の奥へ行く。

始めは強く引っ張られて引き摺られがちだった千里も、すぐに歩幅を合わせた。

その顔に、安心と安堵の笑みを、浮かべながら。

走り去る二人の様子を、じつと見る影があった。

庭園の端、花々の下、土の上。

黒い体と赤い瞳を持つ、大柄なネズミだった。

走り去る二人の姿を最後まで見ると、ネズミは踵を返す。

そしてまた、建物の間を抜けて、走り去っていった。

八章 第二話 神聖国家ノーズファン（後書き）

漸く、名前だけ出続けてきたノーズファンに辿り着きました。今回から、本格的に第八章を進めていきたいと思えます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読み下さりありがとうございました。次話もどうぞ、よろしく願います。

八章 第三話 友情と疑惑と黒い影

白亜の廊下を叩く硬質な音が、強く響く。
重く、それでいて威圧感のある音だ。

「首尾は」

音の主が、低い声で呟く。

大柄な身体から放たれるその声は、足音同様に重みがあった。
その声に、音もなく歩いていった細身の影が応える。

「やはり、神託の者で間違いないかと」

か細く、男性にしてはやや高めの声だ。

大柄な男性のものと正反対な、弱々しい声だった。

「むう……やはりそうか」

「いかがいたしますか？」

呻る声に、伺う声。

大柄な男性は鋭く前を睨み付けると、鼻を鳴らした。

そして、引きつったような笑みを浮かべて足を止める。

「まあ、いい。やりようはある」

「と、いいいますと？」

大柄な男性は、似合わぬ笑みと共に、傍らの男性に告げる。

すると、傍らの男性は、実に似合う歪んだ笑みで頷いて見せた。

ネズミの鳴き声が、どこからともなく響く。

E
x
I

庭園の端。

滅多に人の来ないこの場所で、千里はルフィルと話しをしていた。

庭園に咲く花の色は、多種多様。

だが花卉の形が違うものは一つとしてなく、同じ種類の花が色を変えて咲いていた。

七色も超えようかという色の、同じ花。

それを千里は、首を傾げながら見る。

「レラ」

「え？」

聞こえた声に振り向くと、面白そうな表情でルフィルが告げた。どこか得意げで、それでいて楽しげな笑みを浮かべている。

「その花の名前だよ」

ルフィルはそういって、千里の隣に腰を下ろす。

ルフィルの動きは、仕草の一つ一つが洗練されていた。

まるで箱入りのお嬢様のような、丁寧で綺麗な動き。

その仕草を目で追いながら、千里は故郷の親友の顔を思い浮かべた。

故郷にも、彼女のように丁寧な仕草の友人が、いるのだ。

「気まぐれでどんな色にも咲くから、未来を司る花って呼ばれているの」

ルフィルは、そう言いながら花を撫でる。

花卉に指が触れると、淡い橙の花が小さく揺れた。

決して摘み取りはせず、ただ撫でるその姿は優しげでどこか儂い。

「だから、闇色の花が咲けば、凶兆を案じているっていう風にも言われるんだよ」

「そっか……それで、黒い花はないんだあ」

千里は、ルフィルの言葉に深く頷く。

見渡す限り、美しい花が咲いている。

だが、黒や血色、それに深い瑠璃色の花などは見あたらない。

「人が未来を見なくなれば、可能性は色を失い闇に墜ちる。

するとエルリスさまが過去より顕れ、人の“今”を奪い去ってしまふの」

「未来の神イルリスと、過去の神エルリス……」

子供に“お化けが来る”と言い聞かせる時に、エルリスの名を出す。

千里は何となくだが、ルフィルの話しにそんな印象を覚えた。

「未来を見ないということは、積み重ねられた過去をも否定するという事」

ルフィルは花を見つめながら、ゆっくりと語りかける。

その姿は、教えを導く司祭のようだった。

「イルリスさまは新たな可能性のためにそれすら見逃してしまっけれど、

過ちを内包してきたエルリスさまは、昔日の悔恨を繰り返さないために人を罰する」

天国と地獄。

千里の世界のように、様々な宗教があって数多の考えの元で神を

定義づけている訳ではない。実際に二柱の神が居て、半ば確認じみた言い伝えがあるのだ。

「過去を忘れず未来を見続ける。」

それが、“現在”を託された私たち人間の役目なんだよ」

現在いまを託された人間。

現在過去未来、その全てが揃わないと、人は何処へも行けなくなる。

そういつて微笑むルフィルに、千里もまた笑みを返す。

「長話、しちゃったね」

慈愛に満ちた笑みを浮かべていたルフィルは、はっと我に返ってはにかむ。

頬に朱が差している様子から、よほど照れていることが分かった。

「あはは……でも、すぐくためになったよっ」

「ほ、本当？ありがと。チサト」

ルフィルは千里に礼を言いながら「でもね」と付け加えた。

「これ実は、全部オリヴィアさまからの受け売りなんだ」

「オリヴィアさま……神託の、巫女さま？」

謁見の時、千里はレウ達と一緒に後方で跪いていた。

ナーリヤ達の位置よりもだいぶ後ろで、それ故に顔をよく見ることができなかつたのだ。

「そう、私はオリヴィアさまの身边のお手伝いをする侍女だから」

通常の侍女とオリヴィアの侍女は、当然違う。
食事の配当から湯浴みまで、一手に引き受ける侍女達のエリート。
それが、ルフィル達だった。

「えーと、神殿で私たちを案内してくれた侍女さんたちとは違う、
つてこと？」

千里の言葉に、ルフィルはこくりと頷く。

「オリヴィアさまに 巫女さま付くことが出来る侍女は、
みんな小さい頃からその教育を受けてきた人たちだけなの」

巫女の血脈の傍系から、より資質の高い者が選ばれて教育を受け
る。

巫女に従事することのみを考えて育てられる、他の侍女達とは一
線を画する従者。

それが、ルフィルを含めた“近衛侍女”である。

「同じ侍女たちはみんな、私よりも十も二十も年上の方ばかりなん
だ」

可愛がっては、貰えている。

ルフィルはそう呟くも、そこには僅かな寂寥せきりょうの感情が見え隠れし
ていた。

「やっぱり、その、だから……同年代の友達ができて、嬉しいなっ
て」

「そっか……うん、そういわれると、なんだか私も嬉しい」

互いに、微笑み会う。

両者の頬は淡く朱色が差していて、照れ合っていることが見て取れた。

「え、えと、ルフィルっていくつなの？」

「数えて十六。千里は？」

一瞬、考えて頷く。

数え年で十六ならば、千里も同じだ。

「うん、私も同い年」

千里がそう答えると、ルフィルは目を輝かせて手を合わせる。

同じ年の友達に憧れていたのだろう。今にも小躍りしてしまいうなほどに、喜んでいた。

「そうなんだ！同い年の、友達だねっ」

「うん、同い年の、友達」

千里も、歳が同じで性別も同じという友人ができるのは、この世界では初めてだ。

王国で知り合ったアレナは年上だし、年が比較的近いライアンは性別が異なる。

女の子で、同い年。その友達ができたのは、千里としても嬉しかった。

「あ……そろそろ、休憩時間が終わっちゃう。

ねえ、チサト……また明日、ここで会えるかな？」

申し訳なさそうに、それでいて不安そうにルフィルが告げる。

近衛侍女たちの休憩時間は、そこそこ長い。

だが時間を忘れて話していたせいで、休憩時間が終わりそうなくとを、ルフィルは太陽の位置で気がついたのだ。

「うん、もちろんだよ。また明日、ルフィル！」

「ふふ、うん……また明日だね、チサト」

急ぎ足で、ルフィルが走り去る。

その途中で何度も振り返っては千里に手を振り、千里も笑顔でそれを返していた。

「転ばないと良いけど……あ、でもけっこう身のこなしいいなあ」

何度も手を振り返しながら、千里はそう呟いた。

振り返りながら走るといふ奇妙な動作は、見るからに危うげだ。それでも、何度か体勢を崩しながらも転んでいない様子を見ると、それなりに運動神経がいいのだろう。

「ルフィル、か」

突風には焦ったが、代償に友人を得た。

そのことが嬉しくて頬を緩ませると、千里もそつとその場から去る。

今日はもう、戻って休もうと呟きながら。

黒い影が、疾走する。

ネズミ型魔獣デプシーモルトが、神殿騎士の手を避けて走り回っていた。

「ええい、数が多い！」

そう悪態を吐くのは、アルトレイだ。

神殿の中を血で汚す訳にはいかない以上、捕縛するしかない。

そして捕縛するのに手が足らなくなり、立場在る彼もこの捕り物に参加しているのだ。

高みの見物、というのには状況が悪すぎる。

神殿騎士であるアルトレイは、剣と魔法の両方を器用に操る。

だが、神殿の内部で許可無く魔法を使用してはならないという決まり事があるため、アルトレイは律儀にそれを守っていた。

このような事態に於いての魔法使用など、誰も咎めはしないのに。

「アルトレイ」

「なんだ、クラウト」

そんな中、控えていたクラウトがアルトレイに声をかける。

本来は敬語を使うべき立場なのだろうが、彼らは敬語を使い合うような仲ではなかった。

そんな気の置けない仲な為だろうか、アルトレイは普段は抑えている私的な苛立ちを隠そうともせずクラウトに返事をして見せた。

「黙って客人に知られるよりは、いい手があると思うのだが？」

クラウトの言葉に、アルトレイは僅かな動揺を見せる。

そして幾度か逡巡を見せ、ゆっくりと首を振った。

「駄目だ」

その一言に、クラウトは大きくため息を吐いて首を振る。

呆れている、というあからさまな主張だった。

それでも、アルトレイはかたくなに、首を縦に振ろうとはしない。

「あと片手で足りる数で、討伐できそうなのだろうか？」

だったら、と一拍おいてアルトレイはクラウトを見る。

真摯な意志の込められた、澄んだ色の瞳だ。

「だったら私たちで十分だ。」

こんな恥ずかしいことを、客人に頼めるものか」

自分たちでどうにかできないのなら、他から手を借りればいい。
さらに、儀式への万が一を考えると、神託のある三日後 明後
日 までにどうにかする必要がある。

それでも身内の恥を濯ぐのは、他人に任せて良いことではない。

「あと少し、あと少しであるのならば」

そういつてアルトレイは、拳を強く握りしめる。

堅物で生真面目。だが、融通が利かない訳ではないという事を、
クラウトはよく知っていた。

「何か起こってからでは遅い。

我々だけで片付けたいという気持ちは分かるが

……それでは万が一に対応できないということも、あり得るぞア
ルトレイ」

クラウトの淡々とした言葉に、アルトレイは言葉を詰まらせる。
正論ではあるのだが、神殿騎士としてのプライドが邪魔をする。
堅物といわれるほどの、生真面目な青年だからこそその葛藤だった。

「そして、アルトレイ。君は一つ勘違いをしている」

あと一押し。

クラウトは、アルトレイに最後の一押しをする。

ギリギリまで自分たちの力で解決しようと心血を注ぐのは、アル
トレイの美德である。

だったら、それで解決しない事態への判断に押しを加えるのが、
クラウトの仕事なのだ。

もつともこの“一押し”は、実にくだらなないものなのだが。

「残りの魔獣の数は、片手で足りる数……に、一桁加えなければならぬぞ？」

ぴしり、とアルトレイが固まる。

報告書にミスがあったのか、と手元の資料に目を落とせば、追加資料に情報が加えられていた。

「昼時、魔獣の数が増加。再度侵入された模様？」

その報告書の内容に、アルトレイは頭痛を覚えて額に手を当てる。身内の恥を自分たちで片付けたいと、真摯に願って行動をしていた。

その間、自分の部下達や他の分団の人間は、いったい何をしていったのかと。

アルトレイは、何度か低く呻り声を上げる。

そして悩みに悩んだあげく、大きく……大きく、息を吐いた。

「一晩だ」

胸の内側、喉の奥。

根深い部分から絞り出すように、アルトレイはそう零す。

そのか細い声に、クラウトはしっかりと頷いた。

「一晩私たちだけで数を減らし、翌日申請をする。

……それでいいな、クラウト副官」

続けて放たれた声は、先ほどのものよりもしつかりとした声だった。

前を向き直りそしてほんの僅かに苦みのある笑みを浮かべながらも、芯の通った力強い声である。

せめて一晩は、自分たちで何とかしたい。

その声に、クラウトは恭しく頷いた。

仕草に若干の呆れと、僅かな安心感を見せながら。

「了解致しました。

今宵一晩、矮小なる魔獣達に神殿騎士の力を見せつけましょう。

アルトレイ団長殿」

クラウトの仕草にやるせなさを感じつつ、アルトレイは神殿騎士達に指示を出しに歩き始めた。

今夜は、いつもより長くなりそうだ。

そんな予感を塞ぎつつ、アルトレイは息を吐くのだった。

ノーズファンの夜は、他のどの国よりも静かだ。

賑わってはいけない理由でもあるのか、それとも神の言葉を受け取る地としての習慣か。

しんと静まりかえった神殿の下の街並みに、レウは小さく息を吐く。

彼は今、城から抜け出し民家の屋根の上に乗り、気配を消していた。

「行儀のイイ国なこと」

神聖国家ノーズファン。

古来より神と共に歩み、様々な神意を汲んできた街。

その光景は美しく洗練された“澄んだ美”といえた。

「だけど、どうにも隠せない」

そんな神聖な国に於いてもなお、獰猛な視線で街を彷徨く魔獣の姿。

黒衣の神殿騎士に討伐されてはいるが、その数は未だ減らず、このままでは住民達に被害が及ぶのも時間の問題と言えた。

「まったく、隊長の勘とやらも、侮れないなあ」

土の魔法の中には、周囲に溶け込み姿を消すというものがあつた。といつても魔法なんかほとんどは魔法使い自身のオリジナルなので、レウが周囲に溶け込む術を持っていると知っているのは、彼の上司であるガランとその友人であるアークくらいなのだが。

そうして誰がどう見ても風景の一枚にしか見られない状態で、レウは観察を続けていた。

「うん？アレは確か、十三分団の……」

やがてレウは、視界の先に覚えのある顔を見つけた。

黒い髪と黒い無精髭、鋭い漆黒の右目と感情の見えない青色の左目。

神殿騎士第十三分団団長の鎧を身に纏った、大柄な男だった。

「アレは、底が見えないな。ああ、やだやだ」

視界の先の人物、その実力。

強さを計る観察力は、優れたものを持っている。

だからこそレウは、男の“底”が見えないことに眉根を寄せて呻り声を上げていた。

「部下に指示を出しているのかな？指示系統を把握しておきたいが……」

これ以上近づいたら、ばれるかも知れない。

空気に溶け込んでいるためその心配は無いかも知れないが、実力

の計れない相手の側に近寄るのは、嫌だった。

「うん？動きを、止めた？」

男は数人の部下を指示していた手を止めて、訝しげに上を見る。

そして幾度か虚空に視線を這わせて……ゆっくりと、レウを見た。

「見つかった?!」

声は荒げないように、ただ驚きに目を瞪る。

男は、気がつかれることを恐れて身動きのとれないレウの周辺を、ただじつと睨み付けている。

そのまま固まり、両者の間に沈黙が流れる。

何秒経ったのか？それとも何分も経ったのか。

永遠ともいえる体感時間に、レウは唾を飲み込む喉を振るわせた。

男はそんなレウの様子に気がついていないのか、いないのか。

傍らの部下に手を差し出し、一言一言呟いた。

そして、おもむろに 部下から鈍色のナイフを受け取り、振りかぶる。

ヒュンッ

「っく」

ほんの僅か右側に、顔を逸らす。

するとそこを、銀の煌めきが風を切って通過していった。

避けていなかったら今頃は、エルリスの下でガランの父親に愚痴を零していたことだろう。

男はナイフの先に何もなかったことを確認すると、一度だけ眉を寄せて睨み付け、踵を返した。その後、彼の部下も続いて居なくなる。

「……はあつ。どんな神経してるんだよ」

その後ろ姿を見送り、レウは大きく安堵の息を吐いた。
重くのしかかるようなプレッシャーと、鋭い目。

敵を目前にしたガランの視線に慣れていなければ、気を失っていても知らない……というには大げさだが。

「しかし、あんまり迂闊なこととはできない、か」

下手に動き回って見つかりでもしたら、言い訳の暇なく“片付け”られる。

そんな空恐ろしい予想に、レウは背筋を粟立たせた。

「魔獣の凶暴化の観察……だけじゃ、済みそうにないなあ」

勘の鋭い大男。

正体を偽った男装の従者。

妙に騒がしい神殿の内部。

今までとは空気の違う神託。

「悩めることは山ほど在るが、解決できるのはどれほどか」

胃を痛めて考えるのは、自分のようなお調子者の役目ではない。

そう自負しているからこそ、ここ連日の“らしくない”立ち位置に、レウは辟易する感情を押し隠せずにした。

「今日は風が悪い。いったん、帰りますか」

なんにしても、どうせ逃げられることではないのだ。

だったら最後まで付き合おうと、レウは苦笑と共に跳躍する。

強化した脚力で屋根の上を跳び、そのまま指すはあてがわれた己の部屋だ。

彼の厭う面倒ごと。

その影は、神殿へゆっくりと伸びていた。

八章 第三話 友情と疑惑と黒い影（後書き）

今回で第八章の折り返し地点になります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読み下さりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

八章 第四話 神殿鳴動鼠百匹！

神殿の中には、幾つかの講堂がある。会議のためだったり、年若い騎士達のための座学の間だったり、用途は色々だ。

今日はそこに、神殿騎士以外の人間達も含めて集合の音がかけられていた。

「今日お集まりいただいたのは、
一つ皆様をお願い申し上げたいことがあったためです」

壇上が上がって肅々と告げるのは、神殿騎士団団長であるアルトレイだ。

アルトレイは心の底から申し訳ないと思っているのか、苦みを含んだ憂いのある表情で、集めた人たちを見る。

不思議そうな顔ではあるものの、不満を滲ませる人は一人もいない。

ナーリヤ、フィオナ、千里、レウ、船員達に他の騎士。

同じく肅々としている騎士達はともかく、ナーリヤ達の表情に煩わしさのような感情が含まれていないという事は、せめてもの救いだっただった。

「数日前より、神殿に魔獣の侵入がありました。

デプシーモルトと呼ばれる小型の魔獣で、

噛まれてしまうと大きな傷を残してしまう可能性があります」

ようは、“痛い”だけということだ。

それにしたって許容できることではないし、魔法である程度の対策はできるとはいえ、病原菌を運んでくる可能性だつてあつた。

「我々としても被害を広めまいと対処に当たつていました。けれど神殿を血で汚さないためにも捕獲となりますと、手が足りないという在つてはならない事態が起こつてしまいました」

この辺りで、千里はなるほどと頷いた。

ここまで言われれば、アルトレイの言いたいことは解る。

「そこで、皆様のお力をどうかお貸し願いたく、今日ここに集まつていただく形となりました。

皆様……どうぞ我々に、そのお力をお貸し願いませんでしょうか？」

アルトレイが深々と頭を下げた。

魔獣が居る中で神託を行う訳には行かず、それ故に八方ふさがり。神託に影響を及ぼすような事態を防ぐためにもと、アルトレイは頭を下げる。

「僕で良ければ、力をお貸しします」

そんな中、ナーリヤが最初に名乗りを上げる。

団長自らによる要請ということもあり、発現しづらい空気になつていた。

だというのに、ナーリヤは了承の旨を告げると、同意を求めるように周囲を見回してみせた。

「ふむ、求められては応えるしかあるまい」

まず、フィオナが立ち上がる。

不敵な笑みを携えて名乗りを上げる姿は、正真正銘いつもの彼女だ。

「わ、私で良ければ！」

次いで、一拍遅れて千里も立ち上がる。

戸惑いから復帰するのが遅くなったという事が、少しだけ悔しそうだった。

だがすぐに自分の“立場”を思いだし、一言付け加える。

「あ、主の決定です。私に異存はありません」

今更もつともらしいことを言っても、と頬を赤らめる。

そんな千里を、ナーリヤは苦笑と共に一瞥していた。

「まあ、自分たちで良ければいくらでもコキ使ってください。

……じゃないと、コワイ上司にどやされるんスよ。いえ、ここだけの話し」

そうしてレウがおちゃらけた口調で同意を示すと、それに絆された船員達が口々に参加の旨を上げ始めた。誰も彼も、気の良い人たちだ。

「皆様……ありがとうございます」

アルトレイは、そんなナーリヤ達に肅々と頭を下げる。

歴代の闘技大会優勝者の中には、こちらの揚げ足を取ろうとするものや、足下を掬おうとするものなど、色々な人間が居た。

そのことを神殿に残った記録で把握していたからこそ、この暖かい対応が、アルトレイには貴重で嬉しい物のように感じられていたのだ。

こうして、ノーズファン二日目の日程が決まる。

そう、人材を総動員してでの魔獣捕獲 所謂、“ネズミ退治”の幕開けであった。

デプシーモルトは、見た目からして“ネズミ”の魔獣である。主な被害は穀物や野菜に限らず、鉱石の類まで噛み砕き、食べる。ネズミに食い荒らされるほど神殿は柔ではないが、一般騎士達の使う武器の類は、そうはいかない。

ようは、特別にあしらえたような剣や鎧を持つ者以外は、武装を丸裸にされてしまうのだ。

「もちろん、神託の儀式に差し障りがあるとまずいつてというのが重要。

でも一般騎士の戦力低下、すなわち防衛力の低下という側面も捨て置けないんだよ」

ネズミ（デプシーモルト）による被害について訊ねた千里に、同じ従者組の枠にいたレウが答えた。

それに千里は感心を覚えながら、目を丸くして頷く。

二人は現在、侍女達の居住区のネズミ捕獲のために行動していた。ここは、通気などの理由から木製であり、また侍女達に捕獲能力がないため一番怪しまれていたところだった。だが下級騎士たちでは発見できず、上級騎士は重要な箇所を手一杯という状況だったため、帝国兵や従者達はここに回されていたのだ。

「いざという時に対応できる人がいないと駄目ってことだね」

「そういふこと。」

あの騎士団長は見たところかなりの腕前だけど、量で来られたらたまらないしねえ」

そう説明しながらも、周囲の警戒は怠らない。

今のところネズミの姿は見えない。けれど、油断はできないのだ。

「リクトは、ロウアン様を捜した時の“魔法”でネズミ探しってできないのかい？」

「え？え、えーと……そう、だね。うん、ちょっとやってみる」

レウの言葉に頷くと、千里は両手を祈るように重ねた。

思い浮かべる対象の姿も解らないけれど、それでもどうにかならぬか。

千里はそう“信じて”祈る。

「【光よ】」

すると、淡い光がその手の中に生まれた。

ゆつくりと明滅する、黄金の光。

それはやがて、矢印に変化して、浮かび上がった。

「おお、すごいねそれ」

「あ、ありがとう。っと、【光よ、指し示せ】」

千里の詠唱に反応して、光の矢印がぐるぐると回る。

対象は、千里達に一番近いネズミだと、千里が無意識下で“設定”をしていた。

やがて矢印は、一つの方向へぴたりと止まる……と、僅かに震えだした。

「えーと、上？」

「ちゃんと定まってるんじゃないか？震えてるけど」
「うーん」

千里がそう首を捻っている、レウが手の中に石を生み出し、そしてそれを天井に向けて投げつけた。

……ッ

「うん？」

すると、天井から微弱な音が響いた。

板目張りの天井は美しく整えられていて、とても何か居そうな雰囲気ではない。

けれど木製という事は、ある程度の侵入を許している可能性もあった。

「どれ……【石弾・礫！】」

レウの詠唱に従い、無数に生み出された小石が浮き上がる。そして、一斉に天井に打ち当たった。

ガッ、ガガッ

「な、何の音?!」

「うーん……木でも噛んでるのかね？」

戦く千里の隣で、レウは冷静に呟く。

そして……二人の背後で、ドスンッと何かが抜ける音がした。

「へ？」

「ん？」

ゆつくりと振り返った先。

僅か後方の天井に開けられた大きな穴から飛び出す、無数の黒い影。

影というよりも洪水といった方が正しいような、大群。

『チユウウウウツッ!!!』

「きゃあっ」

その形容しがたい光景に、千里は悲鳴と共に仰け反る。

そんな千里をレウは、胡乱げに見つめた。

千里に気がつかれないように、僅かな呆れをその瞳に滲ませながら。

「きゃあ?」

「こ、声が裏返っただけだ!それより、追おう!」

「まあ、いいけど」

訝しげなレウの様子に隠しようもない冷や汗をかきながら、千里は黒い洪水を追いかける。本気で走ればレウより遙かに速いのに彼の速度に合わせているのは、単純に“アレ”に一人で追いつきたくなかったからであった。

レウの隣を、疾走する。

煌億剣は強力すぎる、かといって他に得物はない。

けれどもものみち、捕獲が必要ななら使用はできないだろう。

「気絶させるだけ……っ」

千里は走りながら、見えてきた黒い絨毯を睨み付ける。

意識を集中させて腕に宿らせるのは、光の粒子。
ぼんやりと鎧のように右腕に光を纏わせると、千里はそれを大きく横へ振った。

「行け！」

淡い輝きを放つ真空の刃が、千里の腕から放たれる。
刃は真っ直ぐ進むとその軌道を下方向へ修正し、地面すれすれを
低空飛行でつき進んでいた。

『チユウツ?!』

その刃が、ネズミたちを後ろから襲う。
淡い輝きはほんの僅かに紫電のエフェクトを放ち、それに反応する
ようにネズミが倒れていった。

「【大地よ、枷となれ!】」

そこへ続いたレウが、ネズミたちを石の鎖で掴み取った。
気絶しているものも、千里が撃ちもらしたものも。
なるべく多くを絡み取りながらも、二人は疾走していた。

即席にしては、息のあったコンビネーション。
だがこれは、相手の力を観察し見抜く能力に優れたレウによる、
チームワーク術だった。

誰と組んでも最大限の力を発揮できるようにという、彼の特技の
一つだ。

「うう、踏まないように気をつけないと」

十を超えた辺りで、千里はそう呻る。

辺り一面に拘束されたネズミの群れをなるべく視界に納めないように走っていた。

現代人である千里にとって、ネズミはあまり直視したくない生き物だった。

「もうすぐ外に出る。そうだったら、捕まえるのが難しくなるぞ！」

「そ、そうだよね……だったら」

千里は、鋭く前方向を睨み付ける。

そして、再び祈るように手を組んだ。

足を止めることなく祈り、己の内側に訴えかける。

普段ならもっと集中しなければならぬはずなのに、何故だか“この地”にいと、通常よりもずっと意識が澄んでいたのだ。

「【光よ……壁となりて、彼の者の行く手を阻め！】」

足を止めると同時に、両手を突き出す。

レウがそれに合わせて足を止めると、千里の正面に半透明な壁が出現した。

ぼんやりと輝きを放つ、陽炎のような壁。

それが、瞬く間に射出されて、ネズミを追い越しその先の扉に張り付いた。

『チュウウツ?!』

ネズミたちは突き破るつもりで扉にぶつかり、そして予想外の衝撃に目を回す。

これで先頭のネズミたちが、纏めて気絶した。

「よし！」

「おお、やるなあ……で、この後は？」

「え？」

レウの言葉の意味を聞き出す前に、千里も気がつく。

正面の扉を防がれ、周囲に扉はない。

そうならばネズミたちの取る行動は、一つだ。

『ヂュウウウウツツッ！！！』

「も、戻ってきたあああつ！？」

千里はそう叫ぶと、思わず飛び退く。

先で衝突したネズミたち、その中でも気を失わなかったネズミ、およそ十数匹。

それが千里達めがけて突進してきたのだ。輝く紅い目の効果もあって、怖い。

「はあ……ま、任せつきりとは言わないさ」

涙目で飛び退く千里は、完全に自分が演技をしていることを忘れていた。

最早男性の演技も何もない、女の子らしい驚き方だ。

レウはそんな彼女にため息を吐くと、この場に自分しか居ないことに密かに安堵を覚えながら杖の役目を持った短剣の柄に手を伸ばす。

「【大地よ、呻れ……その鼓動を、発現させよ！】」

レウの詠唱と共に、彼の足下から流砂が生まれる。

それはゆっくりと波打ち、次いで弾かれたように盛り上がった。

ザアッ

『チユウウウツツ?!』

土の属性でありながら流れといった“水”のような性質を持つ流砂。

その操作は土を得意とするものにとっては難しく、操れる範囲が狭い。

そのため、向かってくる敵を包み込むくらいしかできないのだが、この状況はそれを成す条件が揃っていた。

「【土砂海流】……こんな技が使える機会、滅多にないからなあ」

慣れない魔法の行使で僅かに息を切らせながら、レウは砂に埋もれるネズミたちを一瞥する。そして、やや手遅れ気味に気丈な表情を作る千里へ、苦笑いを一つ零すのだった。

「後、反応は？」

「うーん……この辺りには、もういないみたいだね」

「そっか。それならまあ……ひとまず、コレ纏めておかないと」

レウの言葉に、反応を示さなくなった矢印を見つめていた千里が、固まる。

枷やら砂やらに捕らわれて目を回すネズミたち。

当然このままにはしておけないので、これから檻に入れるなりにして纏めておく必要があったのだ。

「うう、やらなきゃダメ、なんだろうなあ」

千里は大きく肩を落とすと、レウの後ろについて歩く。

まだまだ、このネズミたちに付き合う必要が、ありそうであった。

十

炎が、揺らめく。

あらゆる生物にとって、“火”とは何よりもわかりやすい“脅威”である。

それは、縦横無尽に神殿をかけ巡るネズミたちにとっても、例外ではない。

「【炎上網】」

フィオナが地面に手を置くと、魔力が浸透し魔法となった。そして極限まで熱を削った赤い炎が、神殿の石の上を奔る。その烈火の如き火線に、石の狭間に隠れたネズミたちが飛び出し
てきた。

「先見二手」

それを見ながら、ナーリヤは徐々に矢を番える。

先端が丸くなっていて、威力でネズミを気絶させるための特殊な
矢。

それを用いて、ナーリヤは己の予測範囲にネズミたちを配置した。

「二拍時雨」

何度も遡り、そして何度も使用し続けてきたことで、ナーリヤの
技量は上がっていた。

その成果がこの“二拍時雨”……一息三射の二連続範囲攻撃であ
る。

ガガガガッ

『チュウウウウツ!?!?』

出て来たネズミが、動きを予測されていたため避けることもでき
ず、気絶する。

丁度六匹、ほとんど同時の迎撃だった。

「先見二手、一撃必中」

更に、混乱に乗じて逃げようとしたネズミを落とす。

これで七匹、瞬く間の捕獲に、フィオナは満足げに頷いていた。

両者とも力を合わせるのは初めてだが、そうとは思えないほどのコンビネーションである。

「こんなに隠れていたとはな。手に負えないというのも頷ける」

「うん、そうだね。相当捕獲した後みたいだったしね」

フィオナのため息混じりの言葉に、ナーリヤも頷く。

特別に魔法の使用を許可されたとはいえ、骨が折れることには変わりない。

両者の声には、どうにも隠しきれない疲れの様なものがあつた。

捕獲を始めて一時間、捕獲できたネズミの数は、これで二十を超えるのだ。

「当初の目的よりも、どうにも増えている気がするね」

「むう、そうだな。どこかに入り口でもあるのか？」

まだ神殿騎士達でも気がついていない侵入口の存在。

ナーリヤとフィオナは、ともにそれを疑い始めていた。

そうして二人で首を捻っていると、後ろから聞こえてきた足音に気がつく。

「お二人とも、捕獲は順調でしょうか？……ごほっ」

そう声をかけたのは、白髪に眼鏡をかけた青年だった。

耳にかかる程度の髪と、眼鏡の下に隠れた色素の薄い紫色の瞳。

病的なまでに白い肌を包む黒い法衣と、白銀の鎧。

端正な顔立ちも、やせ細った身体と合わせ非常に儂く見えていた。

「はい、二十匹ほど終了しました。それで、えっと……貴方は？」

ナーリヤが問いかけると、青年は名乗っていなかったことに気がつき苦笑する。

笑み一つ浮かべるのにも労力があるのか、顔が引きつっているようにしか見えなかったのだが。

「ごほっ……申し遅れました。

私は“ラック＝ルトム”第十三分団団長の副官を務めておりま……ごほっ」

所々に咳が入り、とても健康そうには見えない。

顔色もよく見れば白いというより青白く、ナーリヤは一筋冷や汗を流した。

「僕は、ナーリヤ。ナーリヤ＝ロウアンスです。

それで、ええっと……具合が優れないようですが、大丈夫でしょうか？」

「私はフィオナ＝フェイルラートだ。

その、なんだ、ここは私たちだけでも大丈夫だから、無理はしなくて良いと思うぞ？」

ナーリヤとフィオナは、冷や汗を流しながらラックを気遣う。

ラックはそんな二人に大丈夫だと笑ってみせるのだが、やはりどう見ても顔を引きつらせているようにしか見えなかった。

「ははっ、ごほっ、この程度は問題在りませんよ。

すぐにどうこうなる病ではありませんし、付き合いも長いので」

そう言われてしまえば、これ以上強くは言えない。
ナーリヤとフィオナは気まずげに目を合わせると、とりあえず気にしないことにした。

「それで、ごほっ、なにか問題でもありましたか？」

問題というか、問題視すべき事はあった。

けれど、今にも倒れそうなラックに告げるのは申し訳なく、ナーリヤとフィオナは声を詰まらせる。

「……ごほっ、げほっ。私の体調のことはお気になさらず。

どうせ私の仕事は、ティン団長たちに情報をお伝えするだけでぐふっ、がほっ」

そんな二人の気配を正確に読み取ったラックがフォローを入れるのだが、心配を募らせるだけとなった。不憫である。

「ああ、ティン団長というのはごふっ私たち十三分団のげほっ団長ごほっぐふっ」

「わわわわ、わかった、わかったから！ 安静にしてくれ！」

二人の視線を勘違いしたラックが、説明を重ねようとする。

だが長く話せば話すほど身体に触るのか、唇の端からつつすらと血が滲んでいた。

ナーリヤは神殿騎士とは思った以上に大変なのだな、などと少しずれたことを考えながら、慌てるフィオナを落ち着かせる。

「ええとそれで、問題なのですが……」

「う、うむ、どうにも魔獣が増えているような感がある。

どこかに我々の知らない侵入経路があるのかも知れないと、な」

話題を修正したナーリヤに、フィオナはすぐさま便乗した。
このままでは、どうにも話が進まないということに気がついたの
だ。

「なるほど……わかりました。」

「ごほっ……これから上に伝えてきますげほっ……ふっ」

ラックは二人の言葉を受け取ると、ふらふらと千鳥足でラックは
その場を歩き去った。

そのなんとも頼りなさげな動きに、二人は揃って息を吐く。

「大丈夫だろうか、彼は」

「う、うーん……それなりに地位のある人みたいだし、たぶん」

ナーリヤも断言することはできず、フィオナもそれは同様のよう
だ。

仕方なく二人は少しだけ休憩を挟むと、ネズミ探しを再開するの
であった。

結局、捕まったネズミの数はおよそ百匹。

神殿の裏、探していなかった倉庫に置かれた家具の裏に、大きな穴が開いていたことが判明したのだ。これでは、いつまで経っても終わらない。

「もう、ほんと大変だったよ」

千里はそう、夕暮れの花壇で息を吐く。

その隣で、ルフィルは気の毒そうに眉をひそめていた。

「私は戦闘はからっきしだから、参加することはできなかつたんだあ」

「あはは、まあ結局何とかなったみたいだし、気に病むことはないと思うよ」

肩を落とすルフィルに、千里はすぐさまフォローを入れる。

どうにもルフィルは、力不足を悔やむような思いがあるようだった。

「やっぱり私もね……」

いざという時にオリヴィア様をお守りできればって、思っちゃっ
んだあ」

もちろん、そんな時が来ない方がずっといい。

ルフィルは苦笑しながらそう付け加えると、ため息と共に夕日を見上げた。

神託の巫女付きの侍女という選ばれたスポットにしながら、何も出来ない。

無力な自分を、ルフィルは小さく恥じていた。

「ねえルフィル」

「うん？」

「オリヴィア様って、どんなひと？」

千里の問いに、ルフィルは首を傾げ、そしてすぐに柔らかい微笑みを浮かべた。

「すごく、優しくて綺麗なひと。

街の巡礼に出ると、困っている人に手を差しのばしているの。

柔らかい微笑みで、祈りを捧げながら、みんなの平穩を祈っておられる」

温かいひと。

ルフィルはそう言外に、眼を細めた。

侍女でしかない自分にも、絶えず笑顔をくれるのだ、と。

「神殿騎士団団長のアルトレイ様は、オリヴィア様の婚約者なの。

二人でおられる時は本当に幸せそうで、なんだか見ていて私たちも幸せになっちゃっ」

ルフィルは微笑みと共に、柔らかい目で空を見上げた。
その優しい横顔に、千里はほんの僅かな時間、動きを止めて見
つめる。

「うん、そう……みんなのお母さんがイルリス様とエルリス様なら、
オリヴィア様はきつと、みんなの“お姉ちゃん”なんだって、思
っちゃうんだあ」

そう言って、ルフィルは千里と目を合わせる。
すると千里も、彼女に合わせて柔らかい笑みを浮かべ、頷いた。

「大好き、なんだね」

「えへへ、うん。恐れ多いけどね」

そして共に、笑い合う。

千里はその笑みを見ると、それなら、と微笑んだ。

「それなら、さ。そうやって幸せですよって笑顔返して差し上げ
るのが、

「うーん、なんというか……オリヴィア様への、一番の“贈り物”
なんじゃないかな？」

「ありがとう。」

その言葉に込められた思いを無視するような人では、ないのだろ
う。

だからこそ、それが何よりの糧になるのではないのだろうかと、
千里はどうしてだか他人事ではないような感覚と共に答えた。

「そう、かな」

「そっだよ」

「そうだと、いいな」

「絶対、そう」

「そっか」

「うん」

だから、笑おう。

だから、笑って。

千里の言葉に、ルフィルは微笑む。

胸にすっと落ちた言葉に、嬉しくなって、満面の笑みを浮かべてみせた。

「ありがとう、チサト。」

私、チサトと出会えて、本当に……」

「私だって！」

ルフィルと“ともだち”になれて、本当に良かったって思うよ」

今度は千里が、ルフィルに負けないほどの笑みを浮かべてみせた。その笑顔がルフィルの心に響き、ほんの僅かに彼女の瞳を濡らす。ただ、この出会いに感謝の思いを浮かべながら。

二人を包んでいた夕日が、ゆっくりと落ちる。

優しい太陽が沈み、やってくるのは眠りの夜だ。

互いに夕飯などもあるため、千里はルフィルに手を振り、別れる。その花壇に、離れ行く長い影を残して。

八章 第四話 神殿鳴動鼠百匹！（後書き）

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

八章 第五話 凶兆の花

夜の色に染まった、神殿。

その一角に、デプシーモルトたちは集められていた。

これから、もともといたであろう地区に放つ必要があるのだ。

「無益な殺生はせん、か」

大きな黒い影……ティンは、それを見て顔を歪ませる。

餌も与えられずに喚く生物に対して、ただただ残酷な笑みを浮かべていた。

「貴様達は、贅だ」

告げる。

ただ一言、それだけで空気が震える。

その重く険しいプレッシャーから、ネズミたちは本能で声を上げ、やがて恐怖から静かになっていった。

それは一つの悟りだったのだろう。

なにをしても、どう足掻いても、助かることはないだろう。

そんな強い力を前に、彼らにできることなど無い。

「もうすぐ、終わる。」

始まりにより、全てが終わるのだ」

黒い法衣の上から纏う、黒金の鎧。

その重厚な鎧につけられたマントを翻し、ティンはその場を歩き

中庭に広がる花畑。

そこに入るのにも慣れてきた千里は、空を見上げて眉をしかめた。

「ヤな天気だなあ」

空に広がる、灰色の雲。

太陽の光を翳らせるその雲は、今にも泣き出しそうなほど淀んでいた。

ノースファンに来て三日目。

今晚は“神託”という重要なイベントがあるのに、生憎の曇り空だ。

どうにも不安が拭えない、そんな天気だった。

「まあ、気にしない方が良いのかな」

千里はそう呟くと、ルフィルの姿を探して歩く。

広がる花畑、その更に奥。

約束の場所へ、千里は足を進めていった。

） …… ）

「あれ？この声……」

そうして聞こえてきた歌声に、千里は足を止める。

優しく、透きとおった歌声。千里のよく知る、友達の声。

その温かな旋律に導かれるまま、千里は前へ進んでいく。

近づけば近づくほどに、はっきりと耳に届くようになる声。

その先に千里は、ルフィルの姿を見つけた。

救いあれ、我が愛しき我が子らに。

金の髪が風に舞い、柔らかく靡いて空に広がる。

導きあれ、我が最愛の優しき子らに。

青い瞳は固く閉じられ、長い睫毛が瞼を可憐に彩る。

遙か悠久より渡りし者よ、我らの愛に誓いをたてよ。

風に舞い上がった七色の花弁が、雪のような白い肌の上を踊る。

遙か未来を望みし者よ、我らに永遠の愛を捧げよ。

求めるように伸ばされた白い指は、流れる水をかき分けるように滑らかで。

救いあれ、救いあれ、救いあれ、築きし過去と拓かれし未来に愛を紡げ。

可憐だとか、美人だとか、そういった言葉ではきつと表すことが

できない。

「愛しき我が子らよ……」。

「そっか、神秘的、なんだ」

薄く目を開いていくルフィルと、呆然と彼女を見る千里の瞳が合う。

互いにぼやけていた焦点はやがて互いの瞳に合わせられ、そして僅かな間二人の時を止めてみせた。

「え？あ、あれ？いつから」

「すっごく良かったよ！ルフィル！」

頬を徐々に上気させながら慌てだしたルフィルを、千里が遮る。

やや興奮した面持ちで千里はルフィルに駆け寄ると、その手を握って笑いかけた。

「なんだか、アイドルとか、えと、歌手さんみたいっていうか！

……うん、なんか、すごく綺麗で、優しい唄だった」

「綺麗、で、優しい？」

「うんっ」

屈託のない笑顔。

曇り空を吹き飛ばす、太陽のような笑顔だった。

その真っ直ぐで胸を打つ表情に、ルフィルは呆気にとられ、やがてはにかむ。

「そ、その……ありがとう、チサト」

漸く出た言葉は、短く、そして消え入りそうな声だった。

ルフィルは沸き上がる感情にどうしたらいいか解らず頷くも、すぐに上目遣いで千里を伺い微笑む。

「うん？」

「ううん、なんでもないよ。ありがとう、千里」

何故礼を言われているのか解らず、千里は混乱の表情を滲ませる。だがそれもすぐに拭い去り、もう一度、屈託なく笑ってみせた。

「どういたしましてっ。」

でも、あーんな良い歌聞かせて貰ったんだもん。私の方こそ“ありがとう”だよっ”

本当に嬉しそうな笑顔で、その瞳は真っ直ぐで、その声は澄んでいて。

だからルフィルも、千里のように屈託なく笑ってみせる。

「ふふ、それじゃあ私も、“どういたしまして”だね」

そうして笑い合うと、どうしてだか二人は楽しくなってきた。だから、声は収まらず、結局それから数分間笑い続けたのだった。

少し経つとそれも収まり、二人は並んで座り込む。話題はもちろん、先程までルフィルの唄っていた、歌だ。

「あの歌は、オリヴィア様に教わったの」
「オリヴィア様に？」

ルフィルは千里に頷くと、嬉しそうに微笑む。

教わった時のことを思い出しているのか、その瞳はどこか遠くの風景を映していた。

「イルリス様とエルリス様が、私たちへ宛てた“愛の歌”なんだって。

私がまだ今よりもずっと幼い頃、失敗ばかりしていた私に歌ってくれたの」

選ばれて直ぐに、仕事ができるようになる訳ではない。

一生懸命仕事を覚えようとするルフィルを、周囲は叱りこそした責めはしなかった。

けれどもルフィルは自身で自身を責め、時折悔しさから影で泣いていたのだ。

「オリヴィア様のお役に立ちたくて頑張っていたのに、
肝心のオリヴィア様に慰められてばかり。こんなじゃダメだって、解っているのに」

そうして涙が止まらないルフィルに、オリヴィアはいつもこの歌を唄ってくれた。

そうやって心を和らげてくれていた歌が、こうして仕事をこなせるようになった今でも、ルフィルの中に強く根付いているのだった。

「大好きなんだね、オリヴィア様のこと」

「そう、だね……うん。大好き、なんだ」

上手く言葉にできなかった、気持ち。

それを千里は、あっさりと言葉にしてみせた。

その言葉がルフィルの胸にストンと落ち着き、やがてルフィルは嬉しそうに頷く。

「なんだから、チサトと話せて良かった」

「私も、ルフィルとお話するのが、楽しい」

眼を細めて笑い合つと、心が軽くなる。

今日の神託を終えたら離ればなれになってしまうけれど、それでも。

この出逢いは、千里にとってもルフィルにとっても、大きなものだった。

そうして見つめ合い、やがて千里は照れを感じて視線を逸らす。

柔らかい色に咲く可憐な花々。

その中心を、目を眇めて見て……それから千里は、首を捻った。

「あ、れ？」

「チサト？」

千里は立ち上がると、身体を前のめりに傾けて、花畑の中心を見る。

色とりどりに咲く花々、その内の、一輪。

「ねえ、ルフィル、あれ」

そんな千里を訝しげに見ていたルフィルは、千里の指が示した場所へ目を向けた。

そして……言葉を詰まらせて、目を瞪る。

「 黒い、花弁」

ルフィルは黒と言ったが、千里には少しだけ別の色に見えていた。それは、千里が前のめりになって少しだけルフィルよりも近くから花を見ているためか、それともまた別の要因か。

千里のその栗色の双眸には、その花が赤黒く　深い血色に見えていたのだ。

「ごめんね、チサト。私は念のため報告してくるね」

「う、うん」

「それから、このことは……」

「そう、だね。混乱させちゃうから、言わない方が良いんだよね」
ルフィルの言わんとしていたことを汲み取り、千里は慌てて頷いた。

曇り空の下、神殿は徐々に、暗い雲に覆われていくかのようになり、千里は感じて、不安げに胸を押さえるのだった。

窓から眺める空は、灰色に淀んでいる。

その曇り空に言葉にできない胸騒ぎを感じて、ナーリヤはため息を吐いた。

「浮かない顔をされているようですが、どうかしましたか？」

「あ……えーと、アルトレイさん」

金の髪に空色の目、白い法衣に白金の鎧。

神殿騎士団団長であるアルトレイが、窓の側に佇むナーリヤに声をかける。

「いえ、生憎の天気だなあ、と」

「そうですね……」

ナーリヤの言葉に頷き、アルトレイも憂いげに空を眺める。

神託の日に照らし合わされたかのように、淀んだ空。

そのことに胸騒ぎを覚えていたのは、ナーリヤだけではなかった。

「しかし、それで神託が滞るような事態にはなりません。」

ですから、今宵の事は安心してお待ち下さい、ロウアンス様」

アルトレイがそう、不器用な笑みを浮かべてナーリヤを安心させようとした。

もちろんその気遣いはナーリヤにとって嬉しい物なのだが、気に掛かる部分もある。

「えーとですね……その」

「いかが致しましたか？ロウアンス様」

「そう、“それ”なんですが」

依然として首を傾げるアルトレイに、ナーリヤは気まぎれに目を逸らす。

そして、頬を掻きながら呻り声を上げて、アルトレイに視線を戻した。

「僕は王国の一狩人に過ぎません。

ですからその、“ロウアンス様”というのは、なんだかむず痒くて」

見るからに高貴な装いをしたアルトレイに、ナーリヤがため口を利くというのは躊躇われる。そしてその逆となると、やはりナーリヤが気まぎれになるのだ。

「しかし、ロウアンス様は神託によりお招きされた客人ですし……」

「ああいえ、無理にとはとも言えません。

けれどその我が儘を言ってしまうようで申し訳ないのですが……」

生真面目な男と真面目な少年。

互いに遠慮し合ってしまった、それ故にまったく進まない。

そうして譲り合い、結局折れたのはアルトレイだった。

彼も今年で二十五歳になる青年だ。ある程度は、大人の“妥協”を覚えている。

それでもこうまで引つ張ってしまったのは、むしろ性分であり、中々変えられないものなのであろう。

「はあ、負けましたよ」

そう言うと、アルトレイは悪感情の含まれていない、どこか喜色を含んだ苦笑を零す。

彼の周囲の人間には、ナーリヤのような“好青年”といった人は、少なかった。

故にアルトレイは、ナーリヤに好感を抱いたのだ。

「ではそうですね……ナーリヤ殿、でよろしいでしょうか？」

「は、はい！ありがとうございます！」

呼び方がある程度フランクにただけでここまで感謝されてしまったとなると、アルトレイも苦笑を深めざるを得なかった。

「あれ？ナーリヤ……様と、えーと」

「リクト、どうしたの？こんなところで」

「え、ええっと、庭園を見に外に出ていました！」

アルトレイの名が咄嗟に出てこず焦る千里を、ナーリヤがフオロ―する。

ナーリヤの従者である千里はアルトレイと直接言葉を交わしたことがなく、名前は知っていても顔と照らし合わせることができなかったのだ。

「ああ、レラの花園ですね」

「あの、綺麗な花畑、だよな？」

「はいっ」

アルトレイトと、次いでナーリヤも納得して頷く。

ナーリヤは時折外を眺めていたので見ては居たが、実際に見に行つたことはなかった。

だが遠目でも解るほどに美しい光景だったという事は、よく覚えていた。

「アルトレイト隊長」

そうして三人で花畑について話しをしていると、アルトレイトに声がかかった。

赤褐色の肌に白髪青年、アルトレイトの副官である、クラウトだ。

「少し厄介なことになりました」

「厄介なこと？」

「そはい……もうすぐそこまで」

クラウトが全てを言い切る前に、足音が響く。

重厚な足音と、それに続くか細い足音。

黒い法衣に黒金の鎧を身に纏った、大柄な男性と細身の男性。

神殿騎士団第十三分団の団長とその副官が、鋭い目で歩み寄ってきた。

「なにか問題が発生したのか？ティン」

黒い髪に黒い右目、そして空虚な青い左目を持つ大柄な男性
ティンは、アルトレイの問いかけに対して小さく頷いてみせる。

「外からの人間　客人を集めていただきたい」

重い声だ。

威圧と迫力を乗せて深く響く、重厚な声だった。

「理由を聞かせて貰おうか」

「少々疑わなければならぬ情報が入った」

「疑わなければならぬ情報？」

アルトレイとティンが、眉をしかめて話をし出す。

その不穏な空気を感じ取り、千里は僅かな戸惑いを乗せた瞳で、
ナーリヤの顔を伺った。

「なんなんだろうね、いったい」

「うん……」

ナーリヤの声に、千里はただ頷くことしかできない。

どうにも、嫌な予感が止まらないのだ。

「あれ？なあリクト、これなんの騒ぎ？」

「異常事態でも起こったのか？」

そうして緊迫な空気が流れる中、昼時だからと部屋から出て来た
フィオナと、面倒に思いながらも不穏な空気を感じ取ったレウが駆
け寄ってきた。

「これだけ居るのなら、丁度良い」

「さつきからどうしたんだ、ティン」

アルトレイが詰め寄ると、ティンは一つ頷き前が出る。そしてその漆黒の右目が……刹那、千里を捉えた。

「あ」

小さく、声が漏れる。

捉えたのはほんの僅かな時間、だというのに胸鼓動が速くなり、千里は己の胸にそつと左手を当てた。

「確定した訳ではない。だが、疑うべき情報が入った」

客人が居る中でどうどうと言いつ放たれた言葉。

それにアルトレイは、視線でもって続きを促した。

「神聖なる“神託”を望む一団の中に

己の“性”を偽り潜り込んだ者が居る、とな」

息を、呑む。

揺れ動く心を必死に己の内側に隠すことしかできず、千里はただ固まっていた。

よく見れば冷や汗を掻いていることも解るだろうが、それを気がつかせる訳にはいかない。

だから千里はただ、状況が進むのを受け入れることしか、できなかった。

「神託により導かれし客人を疑うというのか、ティン」

アルトレイが、鋭い視線でティンを睨み付ける。
その瞳を真っ向から受けてもなお、ティンは怯むことなく言葉を続ける。

「オリヴィア様をお護りし神託を正常に遂行させるためにも、疑いは晴らすべきだ。」

調査の協力を要請する許可を戴きたい。いかがする、騎士アルトレイ」

確かな意志を宿し、ティンはアルトレイを睨む。

一色触発の空気の中、千里は揺らいでいた。

それはナーリヤだけではなく、事情を知るフィオナやレウも同様だ。

もつとも、レウは“知らない事”になっているのだが。

「……いいだろう。ただし、客人の意志は尊重しろ」

「疚しいことがないのであれば受け入れるだろうよ。許可を感謝する、騎士アルトレイ」

立ちふさがっていたアルトレイを超えて、ティンが歩み寄る。

その漆黒と空虚な青はまっすぐと千里を睨み付けていて、それだけで彼が“確信”を以てここにやってきたのだということが、伺えた。

「さて、まずは貴殿からだ……ロウアンス様の、従者殿よ」

ティンの手が、千里に伸びる。

その手の先にあるのは、千里の髪だ。

誰も動くことができず緊張する中……その無骨な手を、ナーリヤ

が掴んだ。

「なにか？」

「いえ、アルトレイさんも僕たちに許可を求めるよう言ったと思うのですが？」

やっていることは、時間稼ぎに過ぎない。

けれども、このまま手をこまねいて見ているだけというのは、できなかつた。

「疚しいことがないのであれば、断る理由はないのでは？違いますか？」

「ええ、そうですね。しかし僕たちへの意思の尊重を省略してもいい理由にはならない」

ナリーヤは言いながら、嫌みっぽい反論をしていることに密かに落ち込んでいた。

いちやもん以外の何ものでもない文句であり、だからテインも眉をひそめる。

「ならば」

「失礼ですが、それを強行するほどに焦っていらっしやるようですが……」

二の句は告げさせない。

先程までとは別の方向に緊迫し始めた空気に、千里達は息を呑む。

「疚しいことがないのでから、僕たちは逃げたりはしません。

今はまだ昼時、神託まで半日もあるというのに過剰に焦っているように見えます」

言いながら、ナーリヤは僅かに身体を動かしティンを正面から睨み付けていた。

ナーリヤよりも更に頭一つ半ほど背の高いティンに対して喧嘩を売っているように見える構図だが、ナーリヤの意図はティンの視線から千里を外すことになった。

「できれば貴方がそうにまで焦る理由を、教えていただきたい」

その場しのぎに過ぎないことは、誰よりもナーリヤ自身がよく理解している。

それでもこれでよしとする訳には、いかなかった。

「そうだな、ティン。何かあったのか？」

それに追撃をかけるアルトレイの目は、真剣そのものだ。

この場に滞っていたためまだ花壇に咲いた花のことは聞いていないが、それでも今回の神託に不穏な影を感じ取っていたという事は、間違いではない。

「ごほっ、ティン様はただ」

「ラック、君の話は私が聞こう」

フロローを入れようとしたラックを、クラウトが引き継ぐ。

その刹那に歪められた眉を、レウは鋭く観察していた。

この状況はナーリヤのその場しのぎの対応だったのだが、どうにもきな臭い。

一触即発。

そんな空気が漂う中、更に足音が神殿の廊下に響く。

「その方々に“偽り”はありませんよ、ティン」

滑らかな黄金の髪に淡い金の瞳。

神々しくも美しい気配を纏わせた絶世の美女。

神託の巫女オリヴィアが、その背に己の侍女達を引き連れて、ティンたちに歩み寄る。

「オリヴィア様、何故こちらに？」

どことなく悔しげな声。

だがその機微を感じ取ったのは、鋭く観察していたレウだけだった。

「あっ」

ナーリヤの背で、千里が小さく声を上げる。

侍女達の中で息を整える少女、ルフィルの姿を見つけたのだ。

急いで花のことを、オリヴィアに伝わるように報告したのだろう。

ナーリヤの時間稼ぎが、思わぬ方向にに功を奏していた。

「私からもお伝えしなければならなかったことができました」

そういいながら、オリヴィアは一度、千里に視線を移す。

そしてその瞳が交わった刹那の間、柔らかなく微笑んでみせた。

「騎士達を集めていただけますか？アルトレイ、ティン」

「はっ」

「……諒解、致しました」

アルトレイとティンは、ナーリヤ達に一礼すると、踵を返してオリヴィアにつく。

神託の巫女である彼女に言われてそれに背けば、それは謀反の罪となることすらあり得るのだ。

「申し訳ありませんが、私たちはこれで失礼します。
次は神託の時に、お会いしましょう」

そういつて頭を下げ、オリヴィアが去っていく。

その背後から小さく視線を移したルフィルに千里は手を振ると、大きく息を吐いた。

「はあ……っ」

全員、力が抜けたのか肩を落とす。

真剣に胃に悪い状況だったのだから、仕方がない。

「いや、口が上手いな君は」

「からかわないでくれよ、フィオナ」
「む、褒めているんだぞ？」

含み笑いを零しながら、フィオナはナーリヤの背を叩く。

その思いの外に強い力に、ナーリヤは少しだけ身を屈めることになっっていた。

「いやあそれにしても、きな臭いっスねえ」

そんな中、レウは鋭くそう言い放つ。

ティンとラック、その一つ一つの仕草。

普通は気にせず流してしまおうようなその挙動を、レウはしっかりと見ていた。

「そうだな。少し注意して置いた方が良くかもしれない。ナーリヤ、君の弓は？」

「それなら、私が持っています」

「ふむ、ならば安心していいか」

純粋な身体能力で、素早い機動を可能とする千里。

その千里が持っているのなら、有事の際届けに行くことも可能である。

「気は抜くなよ、ナーリヤ、リクト」

「うん」

「はいっ」

そこで、一息つく。

なんにしてもまずは腹ごしらえが必要だ。

色々と考えることがあるとしても、その後の方が良いだろう。

「リクト？」

「ナーリヤ……様。はい、大丈夫です」

咄嗟に笑ってみせるも、どこか空元気だ。

ティンが自分を調べようとした時、その手は躊躇いなく髪……力ツラに、伸びた。

ショートカットの女性だって居るだろうし、潜入するのに散髪せずカツラで入るなど、普通は思わない。

それでもテインの目と手には、欠片の躊躇いもなかったのだ。

誰も居なかったはずの庭園。

見られていたと言ふことは、考えにくい。

考え始めたら止まらない不安に、千里は大きく息を吐く。
目前まで迫る胸騒ぎを、誤魔化して振り切るように。

八章 第五話 凶兆の花（後書き）

八章も、残すところあと二話。

次回の前後編と、エピソードで八章を終了と予定しております。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

八章 第六話 深淵の鼓動 前編

黒い影が、集まる。

一つや二つではない、大きさも不均等な影。それが黒い空間に、ただただ伸びていく。

「忌々しい」

吐き捨てるように言い放つ、異彩を持つ影。大柄な男、ティンは苛立たしげに壁を殴る。

「時間がない……」

「ごほっ、急ぐ必要が、ありそうですね」

黒い絨毯により広がる影の中、黒に置かれて目立つことなく佇む白。

ラックは咳き込みながら顔を歪ませ、ティンにそう告げた。

「最早手段は選ばん。正攻法で為し得なかったのであれば、次の手段をとるだけだ」

「なるほど、“仕方ありません”から、ねえ。ごほっ」

ラックの頬が、引きつる。

それは、力ない身体で作った、精一杯の笑みだった。

唇の端から鮮血が零れてもなお、浮かべることを止めようとしな
い笑みだ。

「これは終わりだ。終わりにして始まりだ。

行くぞ、ラック！今日、この日、全てが変わるのだ！」

「はっ！」

影は、嗤う。

ただただ、狂ったように……嗤い続けた。

E
x
I

灰色の雲も、日が落ちれば黒の帳に紛れて解らなくなる。
だが厚く空を覆っている雲は、自身の姿を隠すと同時に、月や星の輝きすらも隠してしまった。

「もうすぐ、神託かあ」

最後の夕食を終えて、千里はあてがわれた部屋から空を眺めていた。

神託を行うのは深夜、満月が真上に昇った時を見計らって行われるのだが、肝心の月は僅かな光しか発せていなかった。

千里は横目で、ナーリヤの武器を見る。

神託の間、武器を持っていくことは出来ない。
儀礼的に一つの武器を持っていき、それを神託直前にアルトレイへ預けるということはできるが、ナーリヤのように多くの武器を持つ場合は、叶わなかった。

だから“なにか”在った時に一度部屋へ取りに行くというプロセスを踏むくらいだったら、千里が持っていて届けた方が良いのだ。

「心配、だなあ」

凶兆の花を千里とルフィルが見つ付けてからというもの、神殿内部は慌ただしかった。

その騒ぎを客である千里達に伝えられないよう配慮はされていたようだが、千里達も警戒している以上感づいてしまう。

ガタッ

「っ……だれ？」

部屋の外から響く、音。

その音に、千里は小さく声を上げる。

だが、いくら待っても返事は来ない。

刻印のカードがなければ、部屋に入ることはできない。

だから外にいる何かは、それを知らない存在という事になるだろう。

「外部の人間？」

千里は小さく呟くと、ナーリヤの弓と矢筒、それから槍を持つ。

ガタタツ、ガタツ

断続的に扉に当たる音。

決定的な行動に出られる前に、千里は手の中に光を生み出した。

輝く矢印……それが示すのは、ナーリヤの居場所だ。

ガタンツ！

一際大きな音。

それが終わると、途端に静かになった。

だがそれも束の間の静寂に過ぎず、再び音が始める。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ

何かを嚙むような音。

その音に、千里は眉をしかめた。

故郷で見たホラー映画のワンシーンを体験しているようで、背筋

断末魔の叫びを具現化したような、泣き声。
それに釣られて、無数のネズミが集まりだした。

「ひどい……どうして、こんなことに」

ネズミたちは、確かに一度死んだのだろう。

そうして無理矢理蘇らされて、血の涙を流して泣いているのだ。

「でも」

力在于千里の所にまで来るのならば、力のない人たちはどうなっているのか。

千里は脳裏にルフィルの顔を思い浮かべると、徐々に集まり逃げ場を無くしていくネズミを睨み付けた。

「ごめんね、でも……押し通らなきゃ、ならないんだ」

千里は腰に提げられた剣、煌億剣イグゼを右手で抜き放つ。
弓や槍は紐で纏めて、左手一本で持っていた。

「蒼炎剣一 アルクイグゼ」

ノコギリのようにぎざぎざとした刃を持つ、鋭い切っ先の青い剣。
その刃から吹き上がる蒼炎は、残酷なほどに冷たい。

「はあっ！」

徐々に距離を詰めていたネズミに、一振り。

それだけで、青い炎がネズミの大群を凍り付かせる。

「じめんね」

千里は最後にそれだけ呟くと、凍り付いたネズミたちの間を縫って外に飛び出る。

その時には、神殿の内部は異様な空気に包まれていた。

「早く、合流しないと！」

足に力を入れて、駆け出す。

まずは弓をナーリヤに届けて、それから現状把握をしながらネズミを倒す。

目まぐるしく変わる状況を、どうにか理解するのだ。

他にすべき事があるのなら、随時対応していけばいい。

足音が、神殿に響く。

不穏な影は、ノーズファンの夜に牙を剥いていた。

突如として出現した、無数のネズミ。

それは、明らかに“生きていない”姿をした、デプシーモルト達だった。

「これは、いつたい」

腰に提げた短剣で、ナーリヤは飛びかかるネズミを斬り払う。その手応えは普段狩っている生き物のものとは少し違う。

まるでそれは、狩って時間の経った獣を捌いている時のような感覚だった。

ナーリヤが短剣を振るう後ろでは、フィオナも同様に長剣を用いてネズミを斬り、焼き払っている。炎はよほど相性が良いのか、ネズミたちを効率よく減らしていた。

「ナーリヤ、無事か！」

「うん、こっちは。……フィオナの方は？」

「少し、まずいことになった」

フィオナの視線の先、ネズミに群がられて息絶えた騎士達。

助けられなかったその姿に歯がみする暇もなく、息絶えたはずの騎士達がゆっくりと立ち上がった。

「嫌な予感はしていたのだが、まさかこんな禁忌を犯す者が居るとはな」

「フィオナ……あれがなにか、知っているの？」

ナーリヤが問うと、フィオナは忌々しそうに頷いた。

エルフとして生きた長い時間、フィオナは様々な術に出会ったことがある。

これも、そんな秘術の一つであった。

「しりょうかいらい
“死霊傀儡”

……エルリスの元へ送られるはずの魂を強制的に従属させ肉体に縛り付ける術。

死者であるため生者に戻ることはできず、討ち斃す以外に救済方法はない」

剣を持ち、槍を持ち、斧を持ち、杖を持ち。

斃されたものは敵になり、戸惑うものは斃され、そしてまた敵が増える。

生と死のルールを冒涇した、最悪の禁術であった。

「討ち斃す方法は？」

「死霊は右胸に偽りの心臓を持つ。それを穿つか、焼き払ってしま
うか」

「わかった……やってみる」

あまり素早くは動けないのか、行動する暇はある。

神託への道、この先にいるアルトレイとクラウトへの負担を軽くしてオリヴィアを守るためにも、ここで足止めをしなくてはならなかった。

「ハアッ！」

短剣を逆手に持ち、走る。

死霊騎士の剣は生者のものとは比べものにもならないほど速く、強い。

けれどそれも、先の一手を読むナーリヤには、意味のないことだ。

『お、おおお』

「ごめん……眠って」

逆手のまま、死霊騎士の右胸を貫く。

すると死霊騎士は漆黒に染まった瞳を見開いて、崩れ落ちた。

灰になって消えてしまったため、死体は残らない。

家族の元に、帰ることは出来ないのだ。

「こんな、ことが……」

ふらりと立ち上がる死霊騎士。

その数は今や、十を超える。

神殿を守っていた騎士達の、なれの果て。

「……許される、はずがないッ！」

鋭い目で死霊達を睨み付けると、ナーリヤは駆ける。

背中をフィオナに任せて、己を激情に任せて、ナーリヤは短剣を振りかざした。

「ハアアッ！」

戦いはまだ、始まったばかり。
ノーズファンを覆う闇は、晴れない。

十

神託の間に行く、“聖域の門”の前、剣戟の音が響いていた。
群がるネズミを、かつて仲間だった騎士を、神殿で働く一般の侍
女だった者を。
歯を食いしばり、それでも最後までその姿を目に納め、剣を振る
って斬り裂いていく。

「イルリスの救いと、エルリスの赦しあれ！」

アルトレイの持つ純白の西洋剣が、死霊達を灰に変えていく。倒れた仲間の死を悼む暇もなく、死霊と化した仲間を斬る。

この場には既に、アルトレイとクラウト含めて三人の騎士しか残っていないかった。

オリヴィアを守る騎士達は、十五人もいたというのに。

「【風よ、斬り裂け！】……まだ行けるか、アルトレイ」

「当たり前だ。死霊と化し魂が罪を重ねる前に、救ってやらねばならん」

余裕がないのか、それとも余裕を持たせるためか。

クラウトの口調は公の場のそれではなく、アルトレイの友人としてのものになっていた。

「ならば、早々に楽にさせよう……我が同胞達を」

「言われなくとも！」

アルトレイの正確無比な剣が、死霊騎士の手を落し、返す刃で胸を突く。

二連撃の剣閃は、その軌道を読ませないほどに精密な動きで死霊を狩っていた。

クラウトもまた、負けじと死霊を斃していく。

手甲のようなパーツから剣が伸びる武器、ジャマダハルと呼ばれるその剣を振り、更にその剣撃に風の魔法を纏わせて切り刻む。

舞いを舞うようなその動きは、アルトレイの素早さとは別の意味で、剣閃の軌道を捉えることができなかった。

「安らぎを……【風刃】」

飛来する風の刃が、死霊の胸を斬り裂く。
その一撃で、死霊は灰となり流れて消えた。

「ごほつ……ご無事なようですね」

そんな中、ナーリヤ達とは別の方向の入り口から、ラックが現れた。

周囲に剣を浮かせて歩く彼の魔法は、猫妖精たちが好んで使う“物体操作”によく似た力だ。

「ラック！……ティンたちは無事か！」

「ええ、ティン様はご無事ですよ……ごほつ」

ラックは咳をしながら、悠然と佇む。

そんなラックに背中を任せるアルトレイと、死霊に専念するクラウト。

その構図にラックは……小さく、頬を歪めた。

「さようなら」

ラックが浮かせて振り上げた剣が、死霊を捉える。

だが死霊はラックに見向きもせず、アルトレイに向かっていった。そして、その死霊に向けた攻撃が……その軌道を、急激に変える。

「アルトレイ！」

「な……ッ」

ガキンッ！

クラウトの声で、アルトレイは咄嗟に振り向く。
だが目前にまで迫った剣は、避けられるタイミングではない。

それが“近衛騎士団団長”である、アルトレイで無ければ。

手に掴んだ剣を振る暇は無い。

だからアルトレイは咄嗟に剣を逆手に持ち直し、迫った刃に柄頭を当てた。

金属音と共にラツクの剣は軌道を変えられ、アルトレイの横へ虚しく流れる。

「何のつもりだ。ラツク＝ルトム第十三分団団長副官！」

厳しい目で、アルトレイはラツクを睨む。

精錬された剣技は、奇襲程度で鈍るものではない。

全ての神殿騎士の頂点という肩書きは、伊達や酔狂で背負えるものではないのだ。

「「」ほつ「」ほつ……流石に仕留められませんか」

「ぎゃっ」

ラツクはそう呟きながら、逸らされた刃を返して生き残っていた騎士を斬った。

するとその身体が淡く輝き、ふらりと立ち上がる。

「貴様……“死霊使い”か！」

「ええ、そのとおりです」

淀みなく肯定し、そしてふわりと浮き上がる。

その周囲を守るように、死霊騎士達が壁を作った。

「で？それが解って、何か意味があるのですか？……」こぼっ

他の部屋からも集まった、死霊達。

その壁を抜けるのは至難の業だろう。

「何故このようなことをした……」答える、ラック！

「貴方が我が死霊騎士に加わった時にでも、お教えしますよ」

話す気は無いと、ラックは見下すように告げる。

他の場所からも集まってくるのか死霊騎士の壁は目に見えて厚くなり、これではラックを斬るところか身を守ることすら困難になるだろう。

「アルトレイ！……くっ」

クラウトは、その分集まってきたネズミを退治せねばならず、アルトレイの救援に向かうことができない。

「さあ……行きなさい、我が騎士達よ！」

ラックの声に従い、緩やかな動きで死霊騎士達が動き出す。

その数は最早十を超え、神殿騎士の総数をどれだけ削っているかが伺えた。

そんな騎士達に対してアルトレイは、俯き動かない。

「神殿騎士の誇りを嘗めるな 【光あれ】」

アルトレイの身体が、黄金の力に覆われる。

それは光……魔力によって編まれた、陽光の力。

千里の扱う力は、魔法ではなく能力だ。

魔法だと言いつつ、魔法ではない。それは別物の力。

光属性の魔法を操る魔法使い、その力は。

「救いあれ」

アルトレイの姿がかき消え、瞬きの間にラックの目前に出現する。フィオナの魔法のように直線的なブーストをかけた訳ではない。

光の魔法による、全ての動きの“高速化”こそが、その力の本質だった。

「な」

「エルリスの元で、果てる」

ラックを取り囲んでいた、全ての死霊騎士が灰となる。

神殿を襲う外敵でも現れない限り、近衛騎士たちの力は解らない。そのある意味秘匿された力を目の当たりにして、ラックは驚愕から目を瞠った。

「エルリスの元へ行けるのなら本望、だが」

ギヤインツ

「ぐっ……なにっ?!」

だがその高速化された一撃は、横合いから伸びた漆黒の剣によって阻まれた。

アルトレイの身長ほどもある漆黒の大剣、大柄な体躯と黒金の鎧。

「それは全ての終焉を迎えた後に、求めるべき結末だ」

神殿騎士第十三分団団長、ティン。

民からも外部の敵からも恐れられる、対凶悪犯罪者のエキスパート。

アルトレイとは対になる立ち位置で頂点に座す男が、神殿騎士達に対峙してみせた。

「貴様……これはいったいどういうことだッ!!」
「革命だ」

事も無げに、ティンは言い放つ。

その瞳に淀みなく、その瞳は歪んでいた。

まるで、苦しみを捨て憎しみを呑み込むかのように。

「未来への加護などと言う在りもしない幻想に縋り付く者達への、革命だ」

「なに、を」

「そのための礎となれ……神殿騎士の要よ!!」

神殿に張られた特殊結界。

戦意を削る効果のあるそれを跳ね返すほどの“狂気”が、ティンの瞳に込められていた。

動揺するアルトレイに、漆黒の大剣が振り下ろされる。

純粹で強大な力によって放たれたその一撃は、ラックのものとは訳が違う。

立て続けに起こった裏切りに、動揺していなければ避けられたであろう一撃も間に合わず、受け流したり防ぐには力が強すぎる。

最早刃を受けきるしかないのかと、アルトレイは目の前の刃を睨

み付け 目を瞪る。

「壁へきか駆」

声が響いたのは、天井。

何かが壁を蹴り、天井を蹴り、降ってくる。

「疾しっせん閃！」

頭上を捉えられたティンは、咄嗟に剣の軌道を変える。

尋常ではない腕力によってあり得ない軌道で上空に振られた大剣は、その黒い影の一撃を見事に防いでみせた。

ガインツ！

「ぬ、うっ！」

剣を持ち上げ、振り払う。

すると影 ナーリヤは、身を翻してアルトレイの正面に降り立った。

「大丈夫ですか？アルトレイさん」

「ナーリヤ殿……助かりました」

ナーリヤとアルトレイ。

二人に追撃をかけようと、ティンが一步踏み出す。

だがこの場に駆けつけたのは、当然ながら彼だけではない。

「【天空紅蓮】」

火焰を纏った斬撃が、ティンに襲いかかる。

牽制ではなく直接的に首を狙った斬撃。

その一撃を、動揺から復帰したラックが浮かせた剣で以て防いだ。

ガツンッ

だがラックの予想を上回る威力の込められた斬撃は、浮かせた剣を半ばから叩き折ってみせる。

「こちらを手薄にしたのは失策だったな、謀反者よ」

先の欠けた真紅の長剣を手に佇む、エルフの女傑。

フィオナの炎が、空間を包み込む。

「さて、どうする？ テイン」

クラウトが、ジャマダハルを構えてそう告げる。

周囲に死霊騎士の姿は無く、残るは身動きのとれないネズミたちのみ。

この一連の間に、アルトレイ達は逆転への道を切り開いていた。

「どうする？ フンッ……やれ、ラック」

「はっ……畏まりました。 テイン様」

取り囲まれてなお、ティン達は怯まない。

それどころかラックは、ティンの指示により身体から血色の魔力を吹き上げた。

「【開け、冥界の門。築け、死者の砦。戦^{おの}け、生を妬む者】」

「まずい……止める！」

憔悴の駆られた、アルトレイの声。

それによつて、ナーリヤとフィオナ、クラウドが走り出す。

「させん！」

だが、テインのたった一振りの剣撃により、一番速く前に出たフィオナが弾かれる。

倒すためではなく、後退させるためだけの一撃は、正確にその役割を果たしてみせた。

「ティン！貴様アツ！」

「フンツ！ハアツ！」

横薙ぎの一撃により、クラウドも吹き飛ばされる。

だがそれを縫うように、ナーリヤとアルトレイがつき進んできた。

「ここは僕が！」

「させんと言つたはずだ！」

テインの声と共に、地を這うネズミが突出したアルトレイに食らい付く。

咄嗟に避けるもその隙は大きく、テインの前で晒して良いものは無かった。

「纏めて、飛べ！」

「うわっ！？」

「くうっ！！」

ナーリヤは、読んでいても避けられないほどの剣撃で。

アルトレイは、胸ぐらを掴まれて遙か後方へ。

それぞれ吹き飛ばされて、倒れた。

その隙に隠れていたネズミたちが群がり、ナーリヤ達の足を止めさせる。

「【憎め、憎め、憎め。其らに救いはなく、其らに安らぎない】」
「アレを完成させる訳には！」

詠唱の内容を知っている訳ではない。

けれどアルトレイは、集まる不穏な空気に声を張り上げていた。

アルトレイの扱う、光の魔法。

その欠点は、持続時間の短さと終わりの隙にある。

今、光の魔法でネズミを切り抜けても、ラックの正面にいるティンによって隙を突かれて妨げられてしまうだろう。

風、炎による遠距離攻撃。

それが可能な者は、やはり更に後方でネズミに襲いかかられている。

このままではラックの得体の知れない術によって、甚大な被害を受けることになるというのは、誰の目にも予想できていた。

「【恨め、恨め、恨め。世界に色はなく、世界に光はない】」

血色の魔力に惹かれるように、空間が歪みだす。

なにをしようというのか、無数の黒い“手”が、ラックの足下から出現し始めた。

「馬鹿な！エルリスの元から、“過去の死霊”を召喚するつもりかッ！？」

アルトレイの声で、ナーリヤもそれを把握する。

エルリスの元へ送られ、罪を犯して罰を受ける怨霊たち。
その空間に繋げて行う大量召喚術。

それは皮肉にも、神の座するこの神殿でなければ為し得ない奇跡であつた。

ナーリヤ達に、現状を打開する力はない。

けれど　ナーリヤ達、以外ならば、あるいは……。

八章 第六話 深淵の鼓動 後編

彼の人生は、失望から始まった。

魔法使いの名家の嫡男として誕生し、その時点からあまりの病弱さに失望された。

魔法の才能だけはあったのだが、それも“異端”と呼ばれるものであり、家からそんな存在が出てしまったということを隠蔽するために、彼は里子に出された。

多額の報償を受け取った里親は、病弱な彼に見向きもしなかった。そして彼もまた、他者を気にかける余裕など無かった。

あと数時間で、死ぬかも知れない。

もしかしたら、明日までは持つかも知れない。

でも、その次は？その次の次は？一月後には？一年後には？

彼にとって“未来”は、苦痛を感じるためだけに用意されたものだった。

だからこそ、人々が何故“未来”を崇めるのか、彼には理解することが出来なかったのだ。

口の中に満ちる鉄の味も、胸を灼く痛みも、身体を襲う倦怠感も。全ては全て、苦しむための拷問具に過ぎない。

彼にとっての平穏とは、過ぎ去った日々以外にあり得なかった。

だから。

『この手を取れ』

その声を、彼は忘れない。

最早望むことにも疲れた彼に差し伸ばされた、大きな手を。

『これで、楽になれるのですか？』

『いいや、これで救われるのだ』

ある日突然、その命が途切れることになったとしても。

この言葉とその手だけは、生涯忘れることはないだろう。

。

煌億剣に、マガジンをセットする。
込められた力は、熱き氷。
赤透明の剣真を持つ魔剣、灼氷剣。

「ハアツ!!」

その一撃を振るうと、高温により空気が燃え上がり、死霊達が灰となつて消えていった。

「っ、ごめんね」

苦しみに歪んだ表情で、死霊騎士が崩れ落ちる。
その姿に、千里は眉を歪めて、唇を噛みしめた。

「リクト!こつちだ!」

「うんっ」

レウの言葉で走り、バリケードを作っている侍女達を見つける。
そして光を手に集めて放つと、侍女達が光の粒子に覆われた。

「【大地よ、壁となれ】」

さらにそこへ、レウが鉄の要塞を作り上げる。

「そこにいて下さい！」
「は、はいっ」

レウと合流した千里は、こうしてまだ生きている侍女や負傷した騎士達を助けていた。

ナーリヤに向けていた矢印を、生存者に向け直したのだ。

千里は、騎士や力ない侍女達を見捨てて動けるような、人間ではなかった。

「これでほしい、全員！」

「よし！それじゃあ合流しよう！」

千里の言葉に反応して、レウがそう叫ぶ。

それに千里はしっかりと頷くと、並んで走り出した。

「さっきから、なんなの？こんな、ひどい」

悔しそうに、それでいて悲しそうに千里がそう告げる。

それにレウは淡々と、だがその赤銅色の瞳に侮蔑の怒りを込めて口を開いた。

「……死霊傀儡、だね。

肉体から一度離れた魂は、二度と肉体と重なることができない。

けれど、特殊な才能を持った魔法使いによって魂を肉体に縛り付けられると、

縛り付けられた人間は、その魔法使いによって意のままに操られる人形と化すんだ」

殺すしか、救済手段はない。

最後にそう付け加えたレウの、残酷な言葉。

それに千里は、ナーリヤの武器を纏めた紐を持つ左手を、血が滲むほどに握りしめた。

「なんにしても、今は合流しよう。」

考え得る“最悪”の事態を、導かないためにも」

「そう、だよな。うん……そうだ」

千里は矢印を睨み付けながら、加速する。

それをレウは、ギリギリまで身体能力を強化することで、なんとかついていった。

彼はそれほど、肉体強化が得意ではないのだ。

「敵が奥に集結してる？いや……」

大きな門の前。

そこに広がる空間で、ナーリヤ達と対峙する、ティンとラック。その雰囲気とこれまでの状況から、レウは一目で理解した。

「何がどうなってるの?!」

「十三分団の団長と副官が裏切った、かな。」

それよりも、ラックのアレは、止めないとまずいぞ!」

今走っていても、間に合うかは解らない。

だが、自分の手には、先を紡ぐ道具がある。

「レウ、遠くに物を投げるの、得意?」

「うん?……なるほど。任せろ!」

レウが足を止め、杖を持つ。

するとレウよりも一回り大きなゴーレムが出現し、千里からナー

リヤの弓と矢筒を受け取った。

「ナーリヤっ!!」

千里が思いきり叫ぶと、ナーリヤが振り返る。

それとほぼ同時に、ゴーレムがナーリヤへ弓と矢筒を投げた。

投げても受け取れるか解らないので、槍は後回しだ。

「受け取って！」

「っ……」

千里の言葉に頷くと、ナーリヤは素早く弓を受け取る。

矢筒は受け取るのではなく、ただ矢を一本引き抜いてうち捨てた。

この場では、それで十分だ。

突然の来訪。

それに反応することができたのは、鍛え上げられた聴覚で千里の声を受け取ったナーリヤのみ。

だからこそ、この状況はまたとないチャンスだった。

「先見三手」

動きの後。

三手先までを見通す擬似的な未来予知。

死霊達もテインの妨害も全てすり抜けて狙うは、ラックの身体だ。

「一射必中！」

「なんだ、とオツ!？」

大剣を振って叩き落とすのも、間に合わない。

視線の流れ、それが外れた刹那ほどの隙。

針の穴を通すような一撃が、正確にラックの詠唱を止めた。

「今ここに導かれよ、果てに在りし……ぐあっ?!」
ドンッ

左肩を射抜かれたラックは、その場に膝をつく。

綺麗に貫通したのですぐに失血死するほどではないようだが、これで満足に戦うこともできないだろう。詠唱など、もつてのほかだ。

「千里、ありがとう、助かった!」

「ううん、それよりも今は!」

途中で中断させられたとはいえ、にじみ出てきたものはある。

黒い体、赤い瞳、歪な体躯。

腕が三本や四本の者、片足が半ばから分かれている者、頭が二つある者。

歪んだ魂が集結し、そこに闇を纏う血色の化け物達を生み出して
いた。

その数は、優に五十を超えることだろう。

「これで、不完全って? たまんないなあ」

「遅いぞ、レウ」

「全速力っスよ、フィオナ様」

追いついてきたレウは、心底嫌そうな顔で変質した死霊達を見る。
フィオナも一緒に軽口を叩くが、その目には焦りが見え隠れして
いた。

「助かりました。……ところで、チサト、というのは？」

「ア、アルトレイさん。これは、その」

「今は些細なことを気にしている場合ではないぞ、アルトレイ」

クラウトの声で、アルトレイは前に向き直り、千里とナーリヤは胸をなで下ろす。

もつばれるのは時間の問題だし、そもそもばねずに戦う方が難しいことだろう。

けれど今は、それを話している暇は無いのだ。

「おんりょつかいらい
“怨霊傀儡”

……不完全だが、まあいい」

歪な死霊　怨霊たちは、布で止血したラックの意に従い動き始める。

その息苦しくなるようなプレッシャーは、ナーリヤ達に強く向けられていた。

「ごほっ、ごほっ……こ、こは、お任せを、ごほっ、テイン、様」
「ああ、任せた」

ラックの声に頷き、テインは踵を返す。
その先は神託の間、神託の聖域だった。

「待て！テイン！」
「……その“偽りの名”も今日で終わりだ。騎士アルトレイ」
「なに、を？」

それだけ呟くと、振り向きもせずにティンは扉を開け放つ。
その先に続くのは、水晶のように澄んだ通り道だ。

「くっ……怨霊をどうにかしないと、狙えないか」

矢筒を腰に提げて、槍を背負う。

そのまま弓に矢を番えて構えるが、怨霊達の壁が厚すぎて、ティンどころかラックにすら当たりそうになかった。

「まずは、ここを越える必要があるという事が」

フィオナが、そう忌々しそうに呟く。

見るからに強大な怨霊達を倒すのはやはり、骨が折れるのだろう。
だが、その光景をもるともせず、千里は踏み出した。

「怯えてばかりじゃ、きっと誰も助けられない」

それほど長くない旅路だが、その中で幾度となく困難を乗り越えてきた。

そんな中で千里が学んだことは、“踏み出さずに乗り越えることはできない”ということであった。

「みんな、行こう！」

光の粒子が舞い上がり、千里の身体を覆う。

その幻想的な光景に、ナーリヤやフィオナ、レウだけでなくアルトレイとクラウトまでも引き込まれていた。

千里の後ろならば、どんな壁でも乗り越えられるような。

そんな、心の底から沸き上がってくるような、活力。

それは如何なる力か、確かにその場にいる者達の心を掴んでいた。

群がる怨霊と、ネズミの死霊。

ここが……正念場だ。

十

向こう側を見ることのできない、不可思議な水晶の間。

そこでルフィは、他の侍女達と共にオリヴィアを守っていた。

といつても、戦うのは近衛騎士の仕事であり、彼女たちに外敵に対処するような能力はほとんど無い。

「【風よ、盾を】」
「【水よ、壁を】」
「【土よ、砦を】」
「【火よ、刃を】」

魔法を扱うことができる侍女達が、使いこなせるただ一つの魔法を重ねがけしていく。

年若い侍女であるルフィルはそれすらもできないが、せめて何か出来ればと、オリヴィアに寄り添っていた。

「……オリヴィア様、
必ずアルトレイ様たちが外敵を打ち倒して下さいます。それまでしばしお待ち下さい」

部屋の中心で祈りを捧げるオリヴィアに、ルフィルは精一杯の笑みを浮かべる。

この場で心が折れるようなことがあってはならないのだと、ただ必死に前を向こうとしていた。

「ルフィル……ありがとう。
私もなんとか、イルリス様に“繋ぎ”打開の手段を探します。ですから」

「それをさせる訳には、いかんだよ」
「っ!?!」

水晶の間、神託の聖域と呼ばれるこの場所に足を踏み入れることが許されるのは、オリヴィアと彼女付きの侍女だけだ。

だからこそこの闖入者　テインの存在に、動揺が走る。

「裏切ったのですね……ティン」

「裏切ったつもりはない。俺の心は、常に一つにある」

背中の大剣を引き抜くと、片手でそれを構える。

強靱な腕力があつてこそ為し得る剛剣の構え。

その大柄な体躯から放たれるプレッシャーに、ルフィルは吐き気にも似た感情を覚えた。

「さあ、我が願いを叶えて貰おうか。神託の巫女よ」

「願う？ 貴方は、何を望むのですか」

ルフィルの震える手を、オリヴィアはそつと握りしめる。

その優しさに、何も出来ないふがいなさに、ルフィルは小さく唇を噛んだ。

「神託だ」

「神託？」

ティンが一步近づくと、四人の侍女達が魔力を高める。

風の盾、水の壁、土の砦、攻撃をしてきたものに傷を与える炎の刃。

戦うことはできなくとも、護ることには一級の力を持つ近衛侍女。

その全力が、ここに在った。

「そうだ。だが俺の求めるモノは、イルリスのそれではない」

「エルリスの神託が欲しいがために、数多の命を掠奪したのですか」
「そうだ」

ティンの言葉に、躊躇いはない。

その瞳に浮かぶのは、狂気よりも純粹な、渴望の念であった。

「確定のない未来への導きなど、現在を司る我らに必要ない」

「貴方は、まさか……」

テインの言葉から何を読み取ったのか、オリヴィアは目を見開く。演説でもするかのように悠然と歩み寄るその姿には、悲願を目前としている事への歓喜の感情が満ちあふれていた。

「我らに必要なのは、積み重ねてきた過去のみ。

未来に縋る愚かな人間達の信心を一掃し、エルリス一柱のみの信仰を築き上げる！」

盲信であり、狂信。

未来への可能性を破棄し、過去への積み重ねのみで現在を紡ぐ。

その思考はまさしく、“異端者”のものだった。

「なんと、愚かな」

侍女の一人が、呆然とそう呟く。

過去の神は語りかけない。だから、未来の神の言葉を求める。

過去の神の言葉を知りたければ、積み重ねられた歴史から読み取るしかない。

それをティンは、異端者の心を以て、覆そうとしているのだ。

「世界に縛られているから、俺の言葉を異端だと思つのだ。

だからこそ、俺には異端である資格がある。二つの血を身に宿す、俺にはな」

強力な防御結界まで、既に目と鼻の先となった。
その超至近距離で、ティンは右手に持った剣を振ることなく、ただ素手で防壁に触れた。

「なにを?!」

「フンツ!!」

ティンの左手が焼けただけ、切り刻まれ、傷つきながらも防壁を侵す。

そのうちに彼の左手は、まるで防壁に“適応”していくかのように、再生していった。

「その力は、いつたい」

「これは“加護”だ。神託の巫女よ。」

俺に、“我ら”に思う道を歩けとエルリスが与えたもった、赦しだ!」

バリント

防壁が、ガラスの破れるような音と共に敗れ去る。

そして無防備になった侍女達に、ティンは右手の剣を振り上げた。

「血で汚すのは、まずいのだったか?面倒な」

ドンツ!

「きゃあっ!?!」

剣の腹を使って、四人を纏めて薙ぎ払う。

骨の一本や二本は折れているのだろうが、殺さずに無力化することが目的な“だけ”なので、後遺症で死のうともティンには関係のない話だった。

「エルリスの言葉を求めて、どうするつもりですか」

オリヴィアはそう言い放ちながら、ルフィルを背に隠す。

この震える少女を……妹のように接してきた少女を凶刃の前に晒す気など、無かった。

「エルリスの言葉を、世界に伝える。

神託の巫女から発せられしエルリスの“怒り”を聞けば、

世界で未来を憎む全ての同士が立ちあがり、現在よりイルリスを排除するのだ」

「エルリスが、怒っているか？」

オリヴィアはそう、外の仲間達に希望を託して、時間を稼ぐ。

ティンはそれを解っていないながら、あえてそれに乗っていた。

「異なることを！解っているだろうか？」

ティンは振り上げた大剣を、オリヴィアの首筋に当てて止める。

薄皮一つ斬らない、正確な力加減だった。

「エルリスの加護を持つ魔獣達の凶暴化、それはエルリスの怒りであるのだと！」

「対となるイルリスの言葉を待たずそう断ずるのは、愚かなことです」

「だが、感じ取っているから貴様も“怒りなどない”と断ずることができないのだろう」

「それ、は……」

言葉に詰まるオリヴィアを見て、ティンは嗤う。

その瞳に狂気を宿し、その魂に狂信を孕み、ただただ歪な笑みを浮かべていた。

「さあ、神託を成せ」

「できません」

「ほう?」

テインの剣が、音を立てる。

己の首に刃が当たる、冷たい恐怖。

それを受け手なお、オリヴィアは首を横に振った。

「エルリスは神託には答えません。」

エルリスは我々に、言葉を授けはしないのです。

ですから貴方が……いえ私がいくら望もうと、エルリスは答えません」

無理なのだ、それは不可能なのだ、とオリヴィアは告げる。

それにティンは、失望を込めた瞳で、つまらなそうに受け取った。

「……ならば、仕方在るまい」

「では」

「イルリスの神託などという世迷い事を発せられる前に」

「え?」

ティンは、興味を失った瞳で剣を振り上げる。

その動きにオリヴィアは、咄嗟にルフィルを横へ突き飛ばして、目を瞑った。

「その命、刈り取るまで」

ヒュンッ

「ぬうつ?!」

後ろを振り向きながら、剣を振る。
するとその大剣に、一本の矢が弾かれた。

「そこまでだ、ティーン!」

弓に矢を番えるナーリヤと、灼氷剣を構える千里。
アルトレイたちは怨霊に足止めでもされているのか、姿が見えない。

「神託に導かれし、真なる者か」

とうにかツラは落ち、千里は栗色の長い髪を隠すことなく剣を構えていた。

その姿に動揺する者は、ここにはいない。

「やはり女であったか。だがそれも、今となつては意味のないこと」

ただ、屠るまでだとティーンは剣を掲げる。

彼は魔法使いでは無い。よって、その剣に込められる力は彼生来のものだ。

「来い、真の英雄はどちらか……決めようぞ!」

まずはナーリヤが一步下がり、千里が前に踏み出す。

背中に光を集中させ爆発させることでの超加速。

千里に宿る“未知と既知の経験”は、彼女に卓越した踏み込みを可能とさせていた。

「焼き尽くせ【灼氷一閃！】」

「先見三手、三射必中！」

ナーリヤもまた、積み重ねられてきた経験により使いこなせるようになった、先見の術を駆使して矢を放つ。三手先を読んで放たれる、一息三射の矢。

それは確実に、ティンを追い詰める楔となるのだ。

「先読みの矢か……だが、所詮は“矢”にすぎん」

ティンは、無造作に大剣を振り下ろす。

どこを狙っている訳でもない一撃、だがそれに込められた力は、尋常なものでは無い。

ドンッ！

風圧により、三本の矢が落ちる。

水晶の床はそれでも傷一つ無いが、だがオリヴィアが思わず膝を落とすほどの震動が響き渡った。

だがナーリヤの読んだ“三手”は、なにも矢の軌道に限ったことではない。

「せいっ！！」

「ぬっ！？」

灼氷剣の燃え盛る力が、がら空きになったティンに襲いかかる。

咄嗟にティンは大剣を掲げるが、無理な体勢だったために力を受け流しきれず、大きく体勢を崩してふらついた。

「悪徳を斬れ　　“光より顕れる者―　イル＝リウラス”」

左手に灼氷剣を、右手に光の剣を持つ。

そしてがら空きになったテインの胸板を、光の剣で袈裟に切り裂いた。

「ぐ、あつ!?!」

テインは大きく後退し、そして俯く。

他者の悪意のみを斬り裂き消滅させる、千里の切り札。

ナーリヤの三手は、この一撃を与えるために読まれた行動だったのだ。

「やった!」

「千里……下がって!」

余韻に浸る間もなく、千里は後方に飛び退く。

ただ佇んでいたテインは、俯いたまま千里に大剣を振り下ろした。

「っ……なんで?!」

ガツンッ!!

大剣が水晶の床にぶつかかり、再び大きな震動を残す。

確かに悪意を斬ったはずなのに、それでもテインは攻撃の手を緩めなかった。

「く、くくくつ……」。

この崇高なる信心を悪徳と断ぜられるのは癪だが、今は危なかったぞ。小娘」

未だに輝きの消えない、漆黒の右目。
だがその青い左目には、不自然な罅が入っていた。

「己の命に関わる攻撃を、一度だけ肩代わりしてくれる魔道具。
こんなものが役に立つ日が訪れようとは、な」

そういうとティンは、己の左目をえぐり出す。
それは、彼が左目に埋め込んだ、義眼だった。
彼にとっての狂信は、彼を構成する重要な要素。

だからこそ、その魔道具は千里の一撃を肩代わりしてみせたのだ。

「さて、淡い希望を摘み取ってやるっ」

「ナーリヤ……もう一回！」

「わかった！」

先見により矢が放たれようとするが、ナーリヤは動きを止める。
それを千里は、訝しげに見た。

「ナーリヤ？」

「ティンに、避ける気がない？……千里、斬ったら直ぐ後ろに飛んで」

ナーリヤは千里に耳打ちすると、今度こそ矢を放つ。

千里はそれに戸惑いながらも、再び風圧で矢を落とすティンに踏み込んだ。

「ハアツ！」

「ぐ、ぬうつー！ー！」

光の剣を身に受け……身体に傷がないのを良いことに、カウンタ

「のように剣を振る。」

千里はそれを大きく後退することで避けるが、その顔には動揺が浮かんでいた。

「もう、身代わりはないはず！」

「ああ、もう肩代わりはない。重要なのは、“一度受けた”という事実のみ」

ティンは告げる。

その顔に、隠しきれない笑みを浮かべて、千里を見る。

「さて、どうする“流れ人”よ。」

異界から連れてこられ、命を賭して戦わせられているのだ。

イルリスに憎しみを以てエルリスの救いを得ようというのなら、歓迎しようぞ」

流れ人。

ここに来てから一度も言っていない、千里の正体。

それを言い当てられて、千里とナーリヤは目を瞪る。

「何故だかわからんか？ククッ……」

剣を向けたまま、動けない。

どこにも隙が無く、また全力で戦おうとすれば侍女達が危ない状況で、ナーリヤも強く攻勢に出ることができなかった。

「誰にも扱えない固有の力。誰も知らない未知の能力。」

……俺にも一つ、誰も持たない力があってなあ」

「誰にも使えない、力？」

「そっだ」

閉じられた左目、見開かれた右目、歪んだ口元、隆起した筋肉。その全てが、千里を呑み込もうと、狂気を伴ったプレッシャーを放っていた。

「一度受けた攻撃は無効化し、それに強い耐性を持つ肉体依存能力
きょうじしん
“強靱”」

千里の悪徳を斬る剣は、一撃必殺のものながら、身代わりを立てることで“一度受けた攻撃”にしてしまった。故に、二度と効かないのだ。

「それじゃあ、まさか、あなたは……」

千里の呆然とした声に、ティンが重ねる。

今までのやりとりと、そこから導き出される……一つの、答え。

「遙か昔にイルリスの手によってこの地に召喚され、絶望の中で、帰路を探すこともできず生きながらえてきた一族の末裔……」

魔法に用いる魔力ではない。

彼の祖先が“与えられた力”とこの世界の住人の力が混じり合っ
て生まれ落ちた、異端の混血者。

「日ノ本の帝国より召喚されし男の血を、受け継ぎし者。偽りの名を捨てて、受け継がれてきた名を今ここに名乗ろう！」

嗤う、嗤う、嗤う。

解放され、そして解放するその歡喜の感情を狂信に任せて、ティ

ンは。

「我は魂に鍛え上げられし鉄を抱く者。

我が名は一刀いっとう 緒方一刀ツ！！」

一刀は、名乗りを上げる。

偽りに塗れた名を捨てて、彼はここに真の生誕を果たしてみせた。

「さて、決して帰れぬ事への証明が俺であるのなら 貴様はイル

リスに、何を望む？」

「あ

帰ることが叶わず、その地に暮らし、そして新たな命を育んできた一族。

それが一刀の一族だというのなら、それはなによりも“帰路への望み”を潰つぶえさせる材料となることだろう。

「千里

「ナー、リヤ……私

「大丈夫

「え？」

後ろで矢を番えながら、ナーリヤは言い放つ。

ともすれば無責任に聞こえてしまう言葉なのに、千里はその言葉を素直に受け取ることができていた。

一緒に居てくれるから、頑張れる。

「私の望みがどうか、そんなことで……あなたを逃がしたりはしない！」

揺るぎない瞳で、千里は一刀を睨み付ける。
翳りも何もかも、振り切った先に千里は立っている。
今更それを折るほど揺るがすのは、一刀では力不足なのだ。

「フンツ……まあいい。“やれ”」
「なっ!?!」

ナーリヤの背後から、怨霊が飛び出す。

一刀がここに入る時に連れてきて、そして今まで隠してきた怨霊。
本当は揺るがして隙を作りつけ込ませる予定だったのだが、それが叶わなくなつたのなら温存しておく必要はない。

「ナーリヤ!」

「余所見か?」

「くっ……ああっ!?!」

突進してきた一刀に、千里は大きく弾かれる。

一刀は千里が大きく後ろへ飛んだのも確認する事なく、そのまま強靱な脚力でもって踵を返した。

「あ」

視線の先にいるのは、座り込むオリヴィアだ。
ルフィルはその視線を、オリヴィアから弾かれた場所で捉えて、身を竦ませる。

「オリヴィア様!」

神託の聖域に、アルトレイとフィオナが飛び込んでくる。

クラウドとレウが、ラックを抑えていてくれているのだろう。

だがそれも 間に合わない。

「さらばだ、神託の巫女よ」

怨霊に接近されているナーリヤは、矢を番えられない。

飛び込んできたばかりのアルトレイとフィオナは、加速しても間に合わず。

体勢を立て直している最中の千里は、踏み込むこともできない。

ただただ加速された、漆黒の剣閃。

それを捉えることができたのは、ルフィルだけだった。

「だめ……オリヴィア様！」

一歩踏み出せば、届くことができる。

一歩踏み出せば、蹲っていた自分を変えられる。

「できない、はずがない。だって！」

魔法を教わるまでの間、ルフィルはせめて身のこなしでも良くしようとして、近衛侍女にも拘わらず身体を鍛えていたことがあった。

だから、咄嗟に立ちあがり、身体のパネを用いて飛び出ることができる。

“友達になって”

この一言が云えたんだ。

だったら、この一歩が踏み出せない、はずがない！

オリヴィアの身体を、小さな手が押し飛ばす。
狂気を孕んだ漆黒の瞳。そこへ真っ向から見返す青い瞳。

「ルフィル　　っ！！！」

「ごめんね……チサト」

その白い肌に、大剣の一撃が振り下ろされる。

ザンツ！

不吉を示す凶兆の花。

レラが宿した花弁よりも、なお赤い雨。

大切な友達の声を耳にしながら、ルフィルはゆっくりと後方へ倒れる。

淡い金の髪を、純白の侍女服を、儂い雪色の肌を……全てを、真紅に染め上げて。

「ティン、貴様アアアツツ！！！！」

「チイツ、アルトレイカツ！」

アルトレイに弾かれ、そこへナーリヤが追い打ちをかけることで
一刀はオリヴィア達から大きく離される。

「怨霊は私に任せて、行け！チサト！」

フィオナが怨霊達を一手に引き受けている間に、千里はルフィル
に駆け寄った。

血の海に沈んで動かない、大切な友達の元に。

「光、光よ！光よ！」

光の粒子が、ルフィルを包む。

だが、ルフィルの顔色は戻らない。

既に魂が、肉体から離れようとしていた。

「ルフィル、目を開けなさい！ルフィル！」

千里がルフィルを抱き起こし、そこへオリヴィアが近づく。

巫女の能力、奇跡は神託だけではない。

治療にしか使えない傷を治す淡い光が、ルフィルを包み込む。

「チ、サ……ト？」

「や、やだ、やだよ！どうして、やだ……光、【光よ！】」

ルフィルは弱々しく目を開くと、咳き込んで血を吐いた。

その度に、千里自身も血に染まっていく。

「ど、っ？」

「ここに、ここにいるよ！ここにいるから！」

ルフィルの瞳に、光は宿っていない。

それでも手探りで千里を探して、その頬に手を当てた。

「泣か、ないで……」

「やだ、ダメだよ、ルフィル、ルフィルっ！」

千里から流れた涙が、ルフィルの頬に落ちて血に混ざる。

それでも、その赤を薄めることは、できない。

「そん、な、かお、しない……で」

「光よ！やだ、治してよ！【治癒せよ、光よ！】」

「暗い、気持ちに、囚われない、で」

ルフィルの言葉に、千里は頷くことしかできない。

ただただルフィルを安心させようと、一心不乱に頷いて、光を当てる。

オリヴィアもそれは同様で、彼女は喋る余裕もないほどに集中していた。

「あ、ああ、ああ」

「やさ、しい、チサト、が わたしは、すき、だ……よ」

「ルフィル？目を開けてよ、やだよ、ルフィル……ルフィ、ル？」

ルフィルの手が、千里の頬から落ちる。

そして赤い海に波紋を残し、ゆっくりと、瞳を閉じた。

もう弱々しい鼓動も聞こえなくなり、もう儂い吐息も感じられな
い。

ゆっくりと、ルフィルの身体が、力を失っていく。

「あああああああつつつつ」

その折れそうなほどに儂い身体を、千里は強く抱き締める。

優しい笑みを浮かべて、そして散ろうとするルフィルの身体を抱
き締める。

「光よ」

“ 陽光を携えし、未来への導き手――イルリス＝イ
ル＝リウラス ”！

そして 千里の身体から、黄金の柱が立ち上る。
それはやがて千里のイメージする、死者を救う者 天使の翼へと、姿を変えていった。

「なんだ、アレは?!」

一刀の音が、響く。

その場の誰もが時を止めたように、ただ千里の姿を見ていた。
千里の身長どころか、空間を埋め尽くすほどの巨大な翼。
光のみで構成されたその翼を持つと同時に、千里の髪と瞳が黄金に染まる。

その姿に、オリヴィアは見覚えがあった。

「未来神 イルリス?」

空間を満たす輝きが、余波で怨霊達を還していく。
それだけではなく、神殿に残った死霊騎士やネズミたちですら、
安らかな眠りについた。

「……けほっ」

ルフィルが、小さく息を吐き出す。

目を覚ましてはいないが、その肌には生気が戻り、逆再生のように
血液が彼女の身体に戻っていった。

そして、一刀につけられた傷すらも、消滅する。

「馬鹿な……貴様は、いつたい!」

「緒方、一刀……あなただけは、許さない」

ルフィルの蘇生を確認した千里は、彼女をオリヴィアに託して立ち上がる。

黄金に染まった身体からは、感情すらも超越した“なにか”が宿っていた。

「【望み、求め、訴えよ】」

右手に掴むのは、一つのマガジン。

まだなにも宿していなかった一つを手に取り、掲げる。

「【ブレット・ロード】」

千里から再び溢れ出た黄金の柱が、マガジンに収束する。

そしてそれが収まると、千里はマガジンを煌億剣に装填した。

「【マガジン・セット】」

そして、その力がここに顕現する。

溢れ出た光が、マガジンを呑み込むように巨大な鐳を作る。

そこからまっすぐと伸びるのは、黄金の光を物質化した、一本の剣。

「【イグニッション】 “閃煌剣— イグゼイルリウス”」

光の剣の イルリウスの物質化という、求める究極を体現した剣。

煌億剣と覚醒した力により生まれ変わった、新しい力。

その輝きは、如何なる闇をも……消し飛ばす。

「くう、撤退だ！ラック！」

滑り込むように神託の聖域に侵入してきたラックが道を造る。

そして、物体操作の魔法により、一刀を自分の元に引き寄せた。

撤退という状況に置いて怨霊や死霊といった手札を失ったラックの、切り札だ。

「逃がさない」

ドンッ！

「ぐあっ！？」

転移したかとも思えるほどのスピードで遠のいた一刀を、千里は正確に捉えていた。

そして、閃煌剣を用いて、身を翻して避けようとした一刀の右手を切り落とす。

「一刀様！くっ」

物体操作で死霊騎士達が使っていた無数の武器を、千里に飛ばす。だがその全ては、千里に届く前に、時を止めたかのように空中に縫い付けられた。

「消える」

暗い気持ちに、囚われないで。

「くっ」

千里はもう一度剣を振り上げて、そしてその動きを止める。頭に響いた声は、千里の最後の一步を縫い止めた。

「【煙幕結界】」
「っあ」

その隙を逃すはずもなく、後方から追いついたレウ達も振り切つてラックと一刀は姿を消す。

その姿を千里は、ただ呆然と見送るしかなかった。
脳裏に響く声が、笑顔が、千里の足を縫い付けるのだ。

「千里……ッ！」

体勢を崩し、千里が倒れる。

その小さな体躯を、駆け寄ったナーリヤが抱き留めた。
黄金の光は千里の意識と共に薄れて、やがて消える。

そうして後に残ったのは、ただ静寂のみだった。

八章 第六話 深淵の鼓動 後編（後書き）

前後編一度に投稿したので、後書きはこちらに。
八章は、あと一話、エピソードがあります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

八章 第七話 ともだち

神殿謀反の事件の翌日、ノーズファンは喧噪に包まれていた。

神殿騎士の活躍により城下の民に被害が及ばなかったのは、不幸中の幸いと言えるだろう。

けれど、神殿の住人達への被害は、甚大なものだった。

「レウ、そつちはどうだ？」

「フィオナ様……」。

帝国兵も船員も大打撃ですよ。俺とチサ……リク、いやいいか。

俺とチサトで救助できた船員三名ほど以外は、全員死霊化していたみたいっス」

施設の復興に、フィオナたちもまた尽力していた。

一晩経ち、復興を初めてまだ半日。

昼時を過ぎた程度では、魔法使いを動員しても、神殿の被害の全てを把握することは出来なかった。

「チサトたちは？」

「仮設医務室っスよ。」

なんでも、ここに来た時から仲良くしてた友達だった、とかで「そう、か」

目を覚ました千里は、それからすぐに医務室でルフィルに付き添っていた。

未だ目を覚まさない、友人の元に。

「レウさん、こつちもお願いしまーす！」

「はいはい！【大地よ！】」

生き残っている騎士に呼ばれて、レウがゴーレムを生み出す。
ゴーレム使いほどこの場の復興に役立つ存在は、なかった。

「怨霊と死霊、か」

この動乱で、神殿は半分ほど倒壊してしまった。

中心部は無事だが、それ以外はそうはいかなかったのだ。

そのためフィオナは、神殿を見上げて、怨霊達の脅威を改めて感じ取っていた。

「さて、私も手伝おう！」

フィオナはそういうと、休憩を切り上げて走る。

一致団結しなければ、この状況を抜けられそうになかった。

神殿の端に設けられた、仮設医務室。

その簡易ベッドの横で、千里はルフィルの手を握っていた。

一晩経っても彼女は目覚めず、ただ感情の感じられない姿で眠りに
についている。

もうこのまま、目覚めないのではないか。

そんな考えが脳裏をよぎり、千里は頭を振って思考を払った。

「千里」

そんな千里に、声がかかる。

アルトレイ達の手伝いから一時的に抜けてきたナーリヤが、千里
を心配してやってきたのだ。

「千里も目覚めたばかりなんだ。休まないと、身体を壊すよ」

「ごめんね、ナーリヤ。でも、今はルフィルの側にいたい」

涙の跡、腫れた頬、充血した瞳。

普段よりも白くなってしまったルフィルの手を握る、千里の手。その手は、微かに震えていた。

「そっか……それなら僕も、ここにいる」

「ナーリヤ……」

「千里を一人には……ううん、二人には、させておけないよ」

無理をしているなんてことは、揺れる瞳を見れば一目で解る。

だからナーリヤは、ただ千里の横に座って、彼女たちを見守っていた。

そんな中、仮設医務室の扉が開く。

急造のため魔法的な施しはなく、ただの木の扉だ。

誰でも入れるようなその場所に、オリヴィアとアルトレイが入ってきた。

「オリヴィア、さま」

「アルトレイさん……」

アルトレイは、カツラを無くした千里を見ても、何も言わない。

嘘をつかれたことに対してどう思っているのかナーリヤ達は解らないが、それでもその瞳には、現状への憂いとオリヴィアを守ってくれた事への感謝の心が伺えた。

オリヴィアは一礼すると、ルフィルを挟んで千里の正面に腰掛け、ルフィルの右手を握りしめた。

「私の近衛侍女たちは、いつも私よりも年上の方ばかりでした」

オリヴィアがそう語り始めると、ナーリヤはアルトレイに目配せをして入り口付近まで下がる。千里はそんな彼らを一瞥することもなく、ただじつとオリヴィアの語りに耳を傾けていた。

「そんな中、彼女は一人、幼い内に私と共に在ってくれるようになりました。

だから、でしょうか。私は彼女を、“妹”のように感じていたのだと思います」

後悔の言葉は口にしない。

身を挺したルフィルの決意を、無碍にしてしまっから。

謝罪の言葉は口にしない。

謝ったりなんかしたら、ルフィルが悲しんでしまっから。

感謝の言葉は、口にできない。

明るい微笑みと共に、側に在って欲しかったから、目が覚めるまで言えやしない。

「ルフィルは、イルリスとエルリスがみんなの“お母さん”なら、オリヴィアさまは、みんなの“お姉ちゃん”なんだって、言っていました」

その言葉に、オリヴィアは伏せていた顔を上げて目を睜る。

そしてもう一度、俯いた。

「聞かないで、ください」

「……はい」

オリヴィアの言葉に、千里は目を伏せる。

それは後ろの二人も同様で、そっと目を伏せた。

「私が、守れたら」

それは、後悔の言葉。胸の内に秘めていた、思い。

「ごめんなさい、ごめん、なさい」

それは、謝罪の言葉。さらけ出せなかった、気持ち。

「こんなにも想ってくれて、ありがとう……ルフィル」

それは、感謝の言葉。妹のように思っていた、家族のような少女への。

オリヴィアが、涙を流す。

千里もそれにつられるように、既に枯れ果てたと思っていた涙腺から、涙が溢れ出した。

そしてその涙が、ルフィルの手に落ちる。

「……ん」

小さな声。

微かな吐息。

『ルフィル!?!』

千里とオリヴィアが、声を合わせて叫ぶ。

思わずナーリヤとアルトレイも近寄って、身を乗り出す千里とオリヴィアの後ろについた。

「え?あ、れ?」

「ルフィル、私だよ、解る?」

「っ医者をお願いします!」

呆然と辺りを見回すルフィルに、千里が詰め寄る。

その間に、ナーリヤとアルトレイが他の場所で人を診ている医者
を捜しに、外に出た。

頬に喜色を浮かべて、心配そうにルフィルを見る千里とオリヴィ
アは、ただ必死に声を呼びかける。

「あれ？えーと、何故“灯りを消して”いるんですか？」

そう、ルフィルは……目を開いたまま告げた。

首を何度かひねり、声の方向から千里やオリヴィアの顔を見て、
焦点の合わない瞳で首を傾げる。その青い瞳に輝きはなく、ぼんや
りとした視線だけがそこにあつた。

「ルフィル、貴女はまさか、目が見えないのですか？」

「そう、なんでしょう？ああ、あと、その」

再び潤んできた視界、血の気の引いていく顔。

オリヴィアがルフィルに是非を問うと、ルフィルはただ、頷いた。

そして……さらなる事実を、告げる。

「 “るふいる” というのは、私のこと、で……いいんでしょう
か？」

「え？」

千里が呆然と立ちあがり、オリヴィアが口元に手を当てて座り込
む。

何も映らない瞳でただ首を傾げていたルフィルは、困惑を抱きつ
つも現実感のない瞳でただ身を起こしていた。

「それと、あなた方は……どちら様、でしょうか？」

「や、やだなあ、ルフィル。私だよ？ルフィルの友達の……」
「ともだち、ですか？どこかで、お会いしたことが？」

ふらりと、一歩下がる。

必死に笑みを浮かばせようとするが、頬は引きつるだけで笑って
くれない。

胸に剣を刺されたかのような痛みが走り、足腰から力抜けて崩れ
落ちた。

「うそ、だよな？」

「すみません。あの、私は何かしてしまっただんですか？」

困惑する千里に、ルフィルは戸惑いの声を上げる。

オリヴィアも毅然と涙を堪えようとしているが、それでも俯いた
まま立ち上がることができなかった。

「千里！医務担当の神官さん連れてきたよ！」

「オリヴィア様！………いつたい、なにが？」

ナーリヤとアルトレイが入ってきて、千里は漸くルフィルを見据
える。

自分の名も、千里の名も、オリヴィアのことさえも思い出せない
友達の“現実”を、まっすぐと見て………崩れ落ちた。

「っ千里！」

ナーリヤに抱きかかえられ、倒れることはなかった。

けれども無理がたり、その上でショックが大きかったのだろう。
千里の意識は、電気を落とすように唐突に落ちてしまうのであっ

た。

十

医務室に比較的近い、個室。

客人を泊めるための個室の中で空き部屋だった場所に、千里達は集まっていた。

その後、医務担当の神官だけではなく正規の医者もその場に加わり、その時にされた説明を千里達に伝えるために、オリヴィアが集めたのだ。

運んできた椅子に千里とナーリヤが並んで座り、机の上には温かいお茶が並べられる。

その正面にオリヴィアが座り、オリヴィアの斜め後ろにはアルトレイが控えていた。

「視力の低下……失明以外には、感覚に異常は見あたりませんでした。ただ」

光を失ってしまったということ以外に、異常はなかった。

視覚以外の五感は正常であり、気怠さはあっても五体に残る後遺症のようなものは、おそらく無いだろうという結論が出た。

「記憶の喪失。

日常生活を送るには問題はないそうです。ですが……

自分の名も、故郷も、友人も、何もかも、思い出すことができないようです」

オリヴィアの言葉に、千里は肩を震わせる。

過ごした時間は短くとも、それは大切な時間だった。

言葉を交わし、想いを語り、心を通わせた大切な一時。

その時間を、ルフィルは覚えていないのだ。

「私は一度、戻らねばなりません。ですがいつでも面会は可能です」

オリヴィアはそれだけ言うと、頭を軽く下げて退出する。

それを見送ろうと立ち上がったナーリヤを、アルトレイが制した。

「ナーリヤ殿。君は、彼女の側にいてあげて下さい」

「アルトレイさん……はい。ありがとうございます」

アルトレイが去ると、ナーリヤは千里の横に座り直す。

俯いたまま、千里は一言も話そうとしない。
ただ膝の上に置いた手を強く握りしめて、震えていた。

ナーリヤは、ルフィルと面識がない。

彼女がどんな人間で、千里とどのような仲だったのか、知らない。それでも千里の現状から彼女たちの仲の良さが伺えて、それ故にナーリヤは何も出来ない自分に歯がゆさを覚えていた。

「千里……」

「ごめん、ナーリヤ。すぐ……すぐ、立ち直るから」

そうナーリヤに告げる千里の姿は、危うい。

突けば崩れてしまう砂の城のように、今の千里は危うさを感じさせていた。

「一人で、前を向かなくても良い」

「ナーリヤ？」

そんな千里をただ見続けているなんて、ナーリヤにはできなかった。

最愛の人が苦しんでいるのになにもせず側にいるだけなんて、ナーリヤは嫌だった。

「僕と一緒に歩くから。」

だから踏み出すなら、一緒に行こうよ？

倒れそうなら支え合えるから、だから、そんなに悲しまないで」

拙くとも、ナーリヤは精一杯に千里を元気づける。

今できることはこれしかないと、ただただ千里に語りかけた。

「そう、だよな…… ナーリヤ、一緒に来てくれる？」
「もちろんだよ、千里」

涙を拭い去り、千里は立ち上がる。

止まっただけは、ダメだ。

沈んだ気持ちのままでしたら、ダメなのだ。

『暗い気持ちに囚われないで』

脳裏に浮かぶのは、ルフィルの言葉。

その言葉を、千里は一字一句違えず思い出すことができる。

「ありがとう、ナーリヤ」

「ううん。僕が辛い時に、一緒に居てくれたのは君だから、さ」

そうやって、ナーリヤは千里に微笑んでくれた。

その笑顔を見て千里も嬉しそうに頷く。

だが彼女の中には、新たな“懸念”が生まれていた。

ナーリヤにも、こんな風に“想う”人が、いるのだろうか？

自身の名前も、故郷も、家族も解らない。

それは全て、ナーリヤにも当てはまる。

今まではずっと、忘れてしまったナーリヤにだけ焦点を合わせて考えてきた。

だが、“忘れられた”方に立って初めて、千里はその考えに思い至る。

「ナーリヤを……大切に、想うひと」

隣のナーリヤに聞こえないように、小さく声に出してみる。
現実感の沸かない問いかけに過ぎなかったはずなのに、今はこんなにも胸が痛む。

彼はナーリヤという“女性の名前”を呟き、だからそれを記憶の手がかりとして名乗っている。なら……。

「失っても、思い出すひと？」

その重さに、その想いに、千里は胸に置いた手を握りしめる。
隣で歩くこの少年が、何時しか自分以外の誰かの隣を歩き始める。
そんな益体の無い想像も、現実味を帯びればあり得る未来となるのだ。

「千里？」

「え……あ、ううん、なんでもないよ！」

気がつけば、医務室の前についていたようだ。
ナーリヤに顔を覗き込まれ、千里は慌てながら首を振る。
いずれ考えなければならぬことでも、今考えるべき事ではないのだ。

木製の扉、そのドアノブに手をかける。

何を言ったらいいのか、何をすればいいのか、どうするのがいいのか。

なにも思い浮かばず、千里はそれを捻ることができない。

「自分のことが何一つ解らないっていうのは、さ」

「ナーリヤ……」

その背中を、震える背を。

ナーリヤはそつと、優しい声で後押しする。

「やっぱりどうしようもなく不安で、もどかしいんだ。だからそんな時は……誰かの“温かい手”が、なによりも心に染みるんだよ」

ナーリヤが記憶を失った時、セアックが高価な薬を用いてまで治療してくれたとはいえ、しばらくベッドから起き上がることができないほどの苦痛に苛まれていた。

自分のことは何一つとして解らない。出身も、家族も、友達も、名前さえも。

死を淵にして、自分の正体が　自分が“自分である”という証明がなに一つ無いということは、想像を絶するほどの“不安”に相違無かったのだ。

「手を握ってあげて。それだけで、胸が和らぐんだ」

意識が朦朧とする中、セアックに受けた看病。

その大きくて優しい手を、ナーリヤは片時も忘れたことがない。

「ありがとう。私、助けられてばかりだね」

「僕も、千里に助けられてばかりだよ」

二人で、小さく微笑み合う。

もうその表情に迷いはなく、ただ千里が本来持つ強い輝きだけがそこにあつた。

ほんの少しの後押しで、千里はいつも正面を見据える。残酷な現実を受け止めて、逃げることなく立ち向かう。

そんな千里の在り方に眩しさを感じながらも、ナーリヤは確かな“信頼”を覚えていた。

「失礼します」

千里が医務室に入り、ナーリヤもそれに続く。

神殿の一部を用いているため床は大理石に似た石畳で覆われていて、壁も天井も白い。

その個室の窓際では、ルフィルが身体を起こしていた。

最初と違うのは、瞳には包帯が巻かれていて、側にレラの花が飾られているところだろう。

「具合はどう？ルフィル」

「えーと、はい。相変わらず視界はありませんが、体調は良好です」

側に座った千里の声を感じて、ルフィルは千里に顔を向けた。

そこに浮かぶ感情は、戸惑いと申し訳なさだ。

千里のことが解らない不安と、胸の奥から燻るような罪悪感。

その感情に、ルフィルは小さく眉を寄せて、それでも微笑んでみせていた。

「あの、私は貴女の」

「ねえ、ルフィル。お願いがあるんだ」

ルフィルの言葉を遮って、千里は彼女の手を握る。

両手持ち上げて、両手で包み込むように、温かい手でルフィルの手を取った。

「私と……友達に、なって」

『私と……お友達になって』

ルフィルの脳裏に、刹那の間、覚えのないフレーズが浮かぶ。それは確かに自分の声のはずなのに、そんな言葉に覚えがない。でもどう返すべきなのか、どう“返したい”のかは、自然と思いつかんだ。

「私で良ければ……喜んで」

『えと、その……私でよければっ』

友達になりたい。

そう言い出したのは千里のはずなのに。

なのにルフィルの光を失った両目から、涙が溢れ出して止まらなかつた。

「あ、あれ？お、おかしいな」

拭っても、拭っても、拭っても。

止めなく溢れ続ける涙に、ルフィルは困惑を覚える。

そんなルフィルを、千里はそつと抱き締める。

「私は千里。高峯千里。貴女の名前を、教えて」

「ルフィル、でいいんですよね？わたし、は、私の名前は、ルフィル、だよ」

「うん、ルフィル。これからもよろしくね。私の……大切な、友達」

抱き締める千里の頬にも、涙が流れる。

声を上げて泣くルフィルと、ただ微笑みと共に涙を流す千里。

その姿を見てナーリヤは、そつと身を引き、音もなく医務室を出る。

今は二人きりにしてあげようと、心配そうな表情でやってきたアルトレイとオリヴィアを、そっと手で制した。

「ナーリヤ殿？」

「えと……あれを」

薄く開けた扉の先。

その奥で抱き合う二人の姿に、オリヴィアとアルトレイは安堵の息を吐く。

そしてその光景を前に、三人で顔を合わせて微笑みあった。

しばらくして落ち着いたら、ナーリヤ達は改めて病室に入る。

もう覗き見てはいなかったのも、どのような言葉を交わしていたかは解らないが、二人は既に赤く腫れた目で笑い合っていた。

「お加減はいかがですか？」

「あ……オリヴィア様」

近寄ってきたオリヴィアに、千里は慌てて立ち上がろうとする。

それを、オリヴィアがそっと手で制した。

「チサト、どなたが？」

「えと、この方は」

「こんにちは、ルフィル」

千里の言葉を、オリヴィアは笑顔で遮る。

そして千里に向けて首を振ってみせて、柔らかく微笑んだ。

「私はオリヴィア・リウリアス・イルエレス。
貴女の、そうですね　義理のお姉さんです」

その言葉に、千里は驚きから目を瞪る。

固まる千里を見てナーリヤがアルトレイに目配せをすると、彼は苦笑を浮かべながらも頷いた。

「今回の事で身寄りを無くした子供達は皆、

オリヴィア様の預かりとなることが決まりました。問題は、まあ、ありませんよ」

「そう、ですか……それじゃあ」

ナーリヤが千里達に目を戻すと、千里の手を握りしめるルフィルの姿があった。

ルフィルは千里が優しく握り返してくれたという事を感じ取り、オリヴィアに向かってはにかむ。

「お……お姉ちゃん？」

『オリヴィア様はきつと、みんなの“お姉ちゃん”なんだ』
「はい。そうですよ、ルフィル」

思い浮かんだ言葉。

その流れも意図も感情も、今となっては解らない。

けれど、その言葉が胸に響いて、ルフィルはまた、一筋の涙をこぼす。

まだ、ノーズファンに刻まれた傷跡は、根強く残っている。
けれどこの空間には、確かに温かな空気が流れ込んでいた。

十

ルフィルと一度別れ、千里達はオリヴィアの後についていた。そろそろ昼時だというのに神殿内に人は見あたらず、中身のない鎧や主のない剣が哀愁を漂わせている。

「あれ？ここは……」

そうして連れられてきた場所で、千里は首を傾げる。大きな扉、その先に続く水晶の道。

それは昨晩、決戦の場となった“神託の聖域”であった。

「満月を越えてしまったため、約束どおりの神託は叶いません」

ですが、とオリヴィアは続ける。

気がつけば、この場にはフィオナとレウもやってきていた。

背後からクラウトの姿が伺えるという事は、彼が二人を連れてきたのだろう。

ちなみに、レウは“一帝国騎士”の扱いなはずなのだが、決戦の時に共に戦ったことからか、何かしら重要な位置にいるのであろうとアルトレイ達に判断されていた。

もともと、神託を受ける資格は無いので、“居るだけ”になってしまうのだが。

「ですが、お一人だけ……それも、ほんの短い間でしたら、神託も可能となります」

満月を終え、今晚は十六夜となる。

けれど満月という周期によってイルリスと繋がりやすくなるというのであれば、翌日まではギリギリではあるが、効果が残っていた。

「僕は、千里に神託を受けて欲しいと思う」

まずナーリヤが、そう告げる。

千里は元々は神託を受けるメンバーには、入っていなかった。

だがこの場に呼ばれた理由は、彼女にも神託を受ける資格があるという事だ。

アルトレイが千里の“嘘”をあっさりと受け入れていた理由も、ここにあった。

「神託でどうにかなると決まった訳ではない。諦められはしないが、しかし……チサトが神託を受けることが、大きな意味を持つという事は解る」

あの夜。

黄金の光に包まれたチサトと、その背から生えた巨大な翼。それを見ているからこそ、フィオナは千里に神託が授けられることの意味を感じ取っていたのだ。

「ナーリヤ……フィオナさん……。ありがとう、二人とも」

両手を握りしめて、千里は精一杯の笑みを零す。

その感極まった表情を見て、ナーリヤとフィオナは千里の肩を叩いた。

「わかりました。では、これより先はチサトさん……貴女と私のみとなります」

「はいっ」

純白の法衣には、黄金の装飾が施されている。

神託の巫女であるオリヴィアの、正装だ。

その歩き始めた背を、千里は確かな足取りで追いかけた。

水晶のような石。

向こう側が全く見えず、また鏡のようにこちら側を映している訳でもない。

だというのにそれが純粋な透明であるという事は解る、不可思議な石だ。

「熾煌晶しじゆうしょうという鉱石です」

「あ、えと……熾煌、晶ですか？」

振り向かず、オリヴィアはただ一度頷く。

後ろから見てそれを感じ取り、千里は続く言葉を待った。

「はい。世界の中央に位置する二つの島。

イルリスを祀る島“ケルニ”とエルリスを祀る島“エルク”

その二つの島でしか採掘することができない、神々の力を宿す特殊な鉱石です」

神々の力を、宿す。

そう聞いて千里は、改めて熾煌晶でできた床や壁、天井を見回す。光源なんか何処にも無いはずなのに、周囲には光が宿っていた。

まるで、全ての方向から陽光、ないし月明かりが届いているかのように。

「二つの島を繋ぐ地下大神殿“グライズホルン”にも、熾煌晶が用いられています。

といつても、何時の時代にどのような者が築いたのか解らない“遺跡”なのですが」

知らなかった地名だが、その一つ一つを忘れないように、千里は脳裏に刻んでいく。

自分たちの旅、故郷に戻るといふ目的。

その全てが、どうしてだかその神殿に集約しているような、不思議な感覚が千里には生まれていた。

この熾煌晶の上に立っていると、胸の鼓動が自然と早くなる。

まるで……誰かに導かれているかのように。

「さあ、そこでお待ち下さい」

「は、はい」

熾煌晶の、球状の結晶。

そこから滴る水滴が天井に昇り、空間そのものに波紋を生む。

荒らされた後、血痕などは残っておらず、不自然なほど澄んだ空間だった。

その中央でオリヴィアは、祈りを捧げるように両手を組む。

「【答えよ、導きの神。応えよ、未来を司る大いなる者】」

詠唱は、短い。

ただそれだけ唄うように詠唱すると、それきりオリヴィアは黙り込む。

その虚ろな目を、千里はただ正面から眺めていた。

そうしていると、徐々に空間に“白”の光が満ち始める。

熾煌晶を包み込む、久遠の光。

途切れることのない輝きに、千里は思わず目を閉じた。

「っ……あ、れ？」

瞼の裏から輝きを感じられなくなった頃。

千里は恐る恐る目を開ける。

そこに広がるのは変わらぬ風景……ではなく、無限に広がる“青空”だった。

天井も、壁も、床も。

全ての境は消滅し、雲も太陽もない空の中で千里は立ち竦む。

「お、落ち……ない？」

両手をばたばたと動かすも、足の裏には地に着く感触がしっかりと残っていた。

千里はその不可思議な風景を前に、SF映画でよく見る“ホログラム”や“ヴァーチャルリアリティ”といった単語を思い浮かべた。

「うわぁ……ここはどこなんだろう？」

ここは、“私の世界”です。

「っ！？」

聞こえてきた声に、顔を上げる。

先程まで何もなかった空間。

いや、もう少し逆ればオリヴィアがいた場所に、光が集まり始めた。

空に溶けるように靡く、金砂の髪。

金箔よりなお澄んだ、黄金の瞳。

白いドレスのような、純白の服。

全体的に半透明。

だけれども、その存在感は言葉で言い表すのが難しい。

それほどまでに荘厳で美しい、規格外の存在だった。

「貴女、は？」

私はイルリス……未来を司りし創世の石柱。

唇は動いてはいるが、澄んだ声は頭の中に直接響いていた。

長く聞き続けていればそれだけで、きっと心を溶かされてしまう。
千里にそう思わせるほど、その旋律は彼女の胸を打った。

「私を喚んだのは……貴女、なの？」

この世界に訪れる前。

胸の内から強く響き続け、そして千里を異界に誘った声。
その音と今ここで響く音が、千里の中で静かに重なった。

時間が、ありません。

「お願い、答えてっ！」

この世界に何故喚んだのか。

この世界で何をさせたいのか。

この世界に喚ばれたのが……何故、自分でなければならなかった
のか。

聞きたい事は山のようにある。

けれどその輪郭を陽炎のように薄くし始めたイルリスには、届か
ない。

どうか、助けてください。

「助ける？」

この世界を、私の子供達を、私の“対”となりしものを。

「それだけじゃ、解らないよ！第一、助けるって言ったって、どう
やって?!」

千里の言葉は、既に慟哭のような色を帯び始めていた。

脳裏を走馬燈のように駆け巡る、故郷の姿。

父、母、弟、ともだち。大切な人達との、かけがえない思い出。

四つの秘宝を、集めてください。

「秘宝？って、いったい」

エルリスの護る四つの島より、四つの秘宝を、どうか。

「エルリスの護る？さつきから、貴女はなにを伝えたいの？」

最早問答は、一方的なものとなっていた。

千里の叫びには答えず、イルリスはただ己の願いを吐露していく。その黄金の双眸からは、光でできた結晶がこぼれ落ちていた。

「泣いて、いるの？」

それを持つて、祭壇に。グライズホルンの、私の元に。

「グライズホルン……えーと、地下大神殿？」

千里はひとまず、僅かな情報でも集めようと、懸命に耳を傾けていた。

涙を流し悲哀を込めた双眸で、哀愁の声を紡ぎ続ける。

その姿に千里は、齒がゆさを感じて唇を噛みしめた。

そこに貴女の…… “あなたたちの求めるもの” が、あります。

「私たちの、求めるもの」

千里だけならば、帰還の方法だろう。

だが、“たち”と括られた対象が、誰のことなのか解らない。

フィオナとナーリヤ、そのどちらかか、両方か。

お願い、どうか…………… エルリスを、救ってください。

「エルリス……過去の、神様？　　って、ちよっと待って！まだ、聞きたい事が」

どうか、どうか、どうか……………どうか……か……。

「イルリス、ねえ、イルリス……っ!？」

光が集い、やがて消滅する。

後に残ったのは、変わらぬ熾煌晶の間と、荒い息で肩を上下させるオリヴィア。

そして。

「これって……」

千里が足下から拾ったのは、透明な結晶だった。

その向こう側をみせない不可思議なほどに澄んだ石は……紛れもなく、熾煌晶のものだといえるだろう。

だが千里が手に持つビー玉ほどの熾煌晶には、この空間に満ちる熾煌晶と比べて、不思議な輝きを宿しているように思えた。

「はあ、はあ……イルリスの言葉は、得られましたか？」

「オリヴィアさん……はい。求めていたもの、だと思えます。えと、たぶん」

確証は持てない。

けれど、この上ない“指針”であったということは、間違いなかった。

「そう、ですか」

「っオリヴィア様!？」

体勢を崩したオリヴィアを、千里は咄嗟に支える。

オリヴィアは体勢こそ崩したものの、なんとか倒れずに持ち直す

ことができていた。

どうやら、神託による疲労で、ふらついてしまったようであった。

「大丈夫ですか？」

「はい、少し疲れてしまったようで　と、それは」

体勢を立て直したオリヴィアは、千里の手に収まる熾煌晶を見て目を丸くした。

千里はそんなオリヴィアの視線に気がついて、よく見えるように手を広げてみせる。

「“レラの涙”……高純度の熾煌晶です」

「レラの涙……レラの花、の？」

可能性を象徴する花である“レラ”は、時としてイルリスやエルリスを示すこともある。

そのため、滅多に手に入らない高純度の熾煌晶を、レラの花からこぼれ落ちた涙、とすることがあるのだ。

「そう、ですか。貴女がそれを“授かった”のならば、此度の神託はやはり……」

オリヴィアはそう呟くと、俯いた。

そして幾ばくかの間思考し、千里に向き直る。

その瞳には、決意の光が宿っていた。

「貴女の道にある幾ばくかの障害を、できる限り減らすことをお約束しましょう」

「私の道にある、障害？」

「はい」

それだけ言うと、オリヴィアは千里に背を向けて歩き出す。
千里は困惑の表情を浮かべて立ち竦み、やがて慌ててオリヴィア
を追いかけた。

謎に満ちた神託。

レラの涙と呼ばれる石。

オリヴィアの告げた言葉。

千里は今日の転機が今後に大きく関与していくという事を、否応
なしに自覚されていた。

その方向が明るい未来か暗い未来かは、解らずとも。

†

神託を終えた後、夕食を終えた千里とナーリヤは神殿の一室に呼ばれた。

神託の聖域とは真逆の方向にある会議室で、その壁は大きく崩れ十六夜の月が顔を見せている。

雲がかかった朧月を背に、オリヴィアは佇んでいた。

今日はアルトレイはいないのか、その場にいるのはオリヴィアただ一人。

故に、彼女が月と並ぶさまは、神秘的だった。

「お待ちしておりました」

「お、お待たせしましたっ！」

千里が勢いよく頭を下げ、その様子にナーリヤとオリヴィアは顔を見合わせて苦笑を零す。そうしてから、ナーリヤも頭を下げた。

「事の始まりは、満月が二巡するほど前のことです」

静かに語り出したオリヴィアに、千里とナーリヤは自然と耳を傾けた。

透きとおった声は良くとおり、流れるように胸へと刻まれていく。

「私はその時、恒例の“神託”によって、イルリスの導きを得ました」

満月の度に、神託は行われる。

そうして一月ごとに新しい導きを得るのが、ノーズファンの習わ

しであった。

「救いをもたらせし者が、この地に顕れる。彼の者の未来を導きなさい」

救い……その、意味。

世界に大きな変動はなかった。だが、何かが緩やかに変わっていた。

そのことに、この世界の住人は誰も気がつくことができなかったのだ。

「それから急遽調べ、判明したことが幾つかありました。

少しずつ凶暴化していく生物たち、強力な力を持つ亜人の増加、それから……」

エルリスの軌跡とイルリスの導きを以てしても治せない、病」

その言葉に、ナーリヤは目を瞠る。

闘技大会で優勝し、神託を得て、けれど治せなかった病。

セアツクの妻を侵した、その病魔だ。

「数十年、数百年もかけて緩やかに変貌していく世界。

それに対して、イルリスとエルリスはある“抵抗”をしていたのです」

それが、と置いてオリヴィアは千里を見る。

その瞳に宿る“憂い”が、千里の中でイルリスのものと重なった。

「流れ人” 創世神の求めし、“救世者”です」

「イルリスとエルリスが求めた、救世者？」

真つ直ぐと見つめられて、千里は目を逸らすことができなかった。その空気に呑まれているのか、ナーリヤも千里同様身動きを取ることができない。

ただただ、その空間をオリヴィアの声と朧気な月明かりだけが支配していた。

「私が、流れ人が、救世主ってこと？」

千里はそう、頭を抱えて呻りだした。

元の世界に戻るために旅を続けていたはずなのに、いつの間にか世界の命運が自身にかかっていたという……理不尽。

「残酷なことを言っているということは解ります。

恨まれても、それは仕方のないことなのでしょう。けれどどうか……どうか、世界を救ってください」

「きゅ、急に言われても！……その、だって」

否定しようと声を荒げ、そして俯く。

脳裏によぎった、色々な人の姿。

王国で出会った人たち、帝国で知り合った人たち、そしてルフィとナーリヤ。

彼女たちを見捨てられるのかと言われたら、千里は選択肢を持てなかった。

でも、それでも、一つわかる事がある。

「でも……私は、オリヴィア様を、恨めません」

ルフィルの……友達の“お姉ちゃん”で、大切な人。

事実、オリヴィアはイルリスに頼まれたのに過ぎないというのに、

どうしてそれを恨めようか。

「正直、私にそんな大それた事ができるとか、思えません。でも、それが故郷に帰るための手段だって言うんなら、その……」

そこで、千里は口ごもりながらナーリヤを見上げる。

共に旅を続ける少年。記憶を求めて千里と共に在る、大切な人。

「僕は、千里がどんな道を往こうとも、ずっと隣を歩くから。

だから千里は自分が後悔しない道を、胸を張って歩いていて」

「ナーリヤ……うん、ありがとう」

再び、オリヴィアに視線を移す。

その瞳は、その空気は、もうオリヴィアに呑み込まれては居なかった。

「できる限りのことは、します。

ううん、みんなを助けられるのなら、やれることは、やってみます！」

全部見なかったことにするには、大切な出逢いが多すぎた。

全部見捨てて往くには、大切な絆が増えすぎた。

「だから、一緒に歩いて ナーリヤ」

「うん、一緒に歩こう 千里」

手を握りあい、力強く笑ってみせる。

その誰よりも“強く在る”姿に、オリヴィアは一筋の涙を零し、そしてすぐに微笑んだ。

「ありがとうございます。」

……チサトさん、ナーリヤさん。本当に、どうお礼をしたらいいか」

「そ、そんなお礼なんか、その困ります！」

譲り合いの精神か、千里は慌てて手を振る。

涙を流しながら頭を下げられてしまうと、そんな状況になれていないせいか千里は慌ててオリヴィアを止めた。

「そ、そうだ！神託で言われたんですけど、

“エルリスの護る四つの島と四つの秘宝”って、なんのことかわかりますか？」

そうして千里は、慌てたまま訊ねた。

解らないままにできる頃でもなかったので、都合も良かったのだが。

「四つの秘宝……なるほど、大神殿への“鍵”ですね」

オリヴィアはそう頷くと、涙を拭って千里に向き直る。

そうして千里は、安心したのか胸を撫で下ろした。

「イルリスは、人間の住む国のある四大陸を守護しています。」

同様に、エルリスもその間にある四つの島を守護しているのです」

王国がある東南の大陸、ウィズ。

吸血王の東の島、ニーズアルへ。

帝国がある北東の大陸、アストーイ。

魔王の治める北の島、ペルファ。

ノーズファンは北西の大陸、ルノリ。

精霊王の在処である西の島、トウーユヨーク。
そして民主国のある西南の大陸、ヴェースト。
エルフが治める南の灼熱の島、ルトルイム。

その名をあげられて、千里は必死にそれを覚えようとしていた。
だが当然一度聞いただけでは覚えられず、頭から煙を出すのではないかと言うほどに混乱してしまう。

「僕が覚えておくから、大丈夫だよ」

「うう、ありがとう、ナーリヤ」

聞きたい時は、ナーリヤに聞く。

少し情けない気もしたが、千里は気を改めてオリヴィアを見た。

「その東西南北に在る秘宝とレラの涙が、グライズホルンへ入るための鍵となります」

「そっか……それで」

千里は、ブレザーの裏地の胸ポケットから、レラの涙を取り出した。

月明かりに晒されてなお自己を主張する姿は、並の石ではあり得ない。

「吸血王の所持する“月影の首飾り”

悪魔王の所持する“太陽の指輪”

精霊王の所持する“恒星の耳飾り”

エルフの秘宝とされる“宵闇の腕輪”」

オリヴィアの言葉に、ナーリヤは目を瞞って右手を持ち上げる。
その中指に嵌められた、リリアに貰った指輪こそが、“太陽の指

輪”だった。

「それを集めれば、いいんですね？」

「はい。それで、道が拓かれます」

千里は強く頷くと、ナーリヤと視線を交じらせる。

するとナーリヤもまた、真剣な表情で千里に頷き返した。

「気軽に“任せてください”なんていえません。それでも、いいですか？」

「はい。私は何があるうと、あなた方を信じています。妹の、友達である貴女たちを」

ノーズファンの巫女としてではなく、オリヴィアは“ルフィルの姉”として千里を信じると言ってくれた。なら、千里にできることは、“ルフィルの友達”として、頷くことだけだ。

「もう、遅くなっちゃいました」

「あ……言われて見れば、そうですね。そろそろ、部屋に戻ろうかと思えます」

千里はそう告げると、ナーリヤと一緒に頭を下げる。

そして、オリヴィアをその場に残して、部屋に戻っていった。

一人残されたオリヴィアは、振り返って月を見上げる。

その瞳に、憂いと願いを込めて。

「旅ゆく少女と少年に、創世の女神の加護が在らんことを」

オリヴィアの願い。

その心に応えるように、月の光が瞬いた。

光の中、現の狭間、幻の果て。

再生と終焉に揺られる地で、黄金の涙がこぼれ落ちる。

お願い、止まって。

痛みの声。

深く紡がれた、悲哀の音。

望みを訴える、切ない旋律。

これ以上、自分を苦しめないで。

もう、私の力では、貴女を……。

そこに、相対者は居ない。

だがそこには、昏闇に包まれた寂寥があった。

ごめんなさい、我が愛しき子らよ。

時は止まらず、全ては変動の中にある。

この一時もそれは変わらず、ただ終わりなき渴望だけが、そこにあった。

八章 第七話 ともだち（後書き）

今回で八章が終了。

同時に、第二部の終わりとなります。

問題も残しつつ、次回より第三部に入ります。

第二部までのご意見やご感想のほど、お待ちしております。

それでは、ここまでお読みくださりありがとうございます。ありがとうございました。
第三部も、どうぞよろしく願います。

九章 第一話 精霊の国トウーユヨーク

川の流れる音。

湖に反射する月明かり。

空間を満たす霧。

翡翠でできた玉座の上で、ただ虚空を見つめる姿があった。

命をもたらす緑を溶かし込んだような、翠色の髪。

星から落ちたの光が染み込んだような、黄金の瞳。

年の頃は十三歳か十四歳か、その雪色の横顔は、あどけない。

けれど彼が身に纏う空気はまるで、諦観を覚えて達観に至った老人のようでもあった。

「もう、いい」

その喉からこぼれ落ちた音は、歳さかのない少年のものに相違ない。

その喉から絞り出された声色は、諦念と後悔と失望に彩られ、老成したものだった。

「なにも望まない。だから私を、放って置いてくれ」

少年（老人）が見上げる虚空には、僅かに星の光が紛れていた。

老人（少年）が見通す先には、深い濃霧が月明かりを隠すほどに満ちていた。

「なにも望まない。だが私に望みを強いるのなら」

あべこべな空気。

漏れ出す濃霧。

彼の周囲から溢れ出した霧は、翡翠の丘に溶けて消えた。

「その時は それ相応の、“代償”をいただこう」

霧が、深まる。

訪れる船を迷わせるように、光を遮る霧が満ちていった。

E
x
I

麗らかな陽光の中、魔法のかかった船の側で、千里とナーリヤたちはいた。

港に集まったのは、オリヴィアやアルトレイを始めとした一部の人間達だ。

未だ神殿の復興作業に追われていて、騎士達全員で見送りという訳には、いかなかったのだ。

だがその方が、千里たちにとって助かるのも確かだ。

そんなに大勢で見送られてしまったら、気まずくて仕方がない。それが、根が小市民である彼女たちの、本音であった。

「本当に、ありがとうございました」

「あ、頭を上げてください！オリヴィア様！」

「そ、そうですよ！こちらこそ、ですっ」

ナーリヤが慌てて止めて、千里がそれに倣う。

その様子に、控えていたアルトレイが小さく苦笑を零した。

「私たちとも、ここでお別れだな」

「いやあ、けっこう楽しかったっすよ」

続けざまに、フィオナとレウがそう言った。

フィオナはこれから帝国に一度戻り、それから王国経由で南の島、ルトルイムに戻るのだという。

レウもフィオナと共に帝国へ行き、そのまま仕事に戻るといふことであった。

握手をして、挨拶を終える。

そうしてから千里は、クラウドが引く車椅子の側に近づいた。その気配を察したのか、目に包帯を巻いたルフィルが顔を上げる。

「クラウドさんも、色々ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ。数々のご助力のほど、感謝いたします」

頭を下げて、それから今度はルフィルに向き直る。

記憶と光を失ってしまった、大切な友達の下へ。

「短い間だったけど、もうお別れになっちゃうね」

「うん……でも、チサトは、行かないやならない、でしょ？」

ルフィルの言葉に、千里は頷く。

友達になりたい、などと言っておいて、すぐに別れなければならぬ。

そのことが千里の胸に、小さな棘を刺していた。

「それじゃあ、仕方ないよ。でも……」

頷く気配に、ルフィルは苦笑する。

困ったような笑みで、それで千里は胸にまた痛みを覚えた。

だがルフィルは、すぐに柔らかい笑みに戻すと、千里を手招きして呼び寄せる。

「ルフィル？」

「……私はずっと、チサトの“ここ”にいる。チサトも、いてくれ

る？」

千里の手をとり、それから千里の胸に指を置く。
かがみ込んだ千里は、その意味を理解して、目尻に涙を溜めた。

「もちろんだよっ！ルフィル」

「そっか。それなら 寂しくなんか、ないね」

「うん、うんっ！」

感極まって、千里はルフィルに抱きつく。

慰めるつもりだったのに、いつの間にか慰められていた。
それが胸の棘を引き抜くほどに、嬉しくて。

「どこにいても、どんなことになっても、ずーっと友達だよ！ルフィルっ！」

「うん、うんっ、ずーっと友達だよ。チサト」

溢れ出てきた涙が、頬を伝って二人の肩を濡らす。

もう何度も何度も泣いたはずなのに、涙は枯れることなく流れ続けた。

大神殿を目指して旅をして、それからノーズファンへ行く余裕があるとは限らない。

もしかしたら、これが最後になるかも知れない。

それでも、それだから、今この時だけは。

そう二人は、声を上げて泣き続けた。

魔力のみで目的地まで移送する、ノーズファンの魔法使いと技術者による研鑽の結晶。

小型魔法船“アルトノア”は、千里の故郷でいうところの“クルーザー”ほどのサイズだ。小型といっても千里の世界のものほど小さくはできないのか、全長二十五メートルから三十メートルの間ほど、おおよそ公共バス三台分の大きさだ。

原動力は、上質な熾煌晶から発せられる魔力であり、それ故にこの船は“失敗作”と呼ばれていた。なにせ、神託の聖域に用いられている以外で熾煌晶など早々手に入らないためだ。

だがそれも、千里の“レラの涙”があれば、解決する。

大神殿の鍵ともなる、熾煌晶の上質な結晶体。

それによって、アルトノアは創造主達に求められた性能を引き出していた。

「ノーズファンが、離れていく……」

甲板の上に立ち、千里は離れゆくノーズファンを見ていた。

高速での航海を可能とするアルトノアにより、ほんの僅かな間でノーズファンはもうずいぶんと遠くなってしまった。

「千里、中に戻らないと危ないよ？」

速度を増すアルトノアの上は、魔法により極限まで揺れを無くしているとはいえ、速度に伴う強風までは防げない。うっかり落ちてしまった、なんてことになったら大変だ。

「ナーリヤ……うん」

そつと肩に添えられた手に、千里は自分の手を重ねる。

見上げた顔は変わらぬ笑顔で、それが一縷の寂しさを払拭してくれた。

「ありがとう、ナーリヤ」

「うん？」

「なんでもない、戻ろう？」

ナーリヤを促して、船の内部に入る。

船尾部分から中へ入れて、最初にリビングやキッチンがある。

その奥の部屋がベッドルームでこちらは手前と奥の二部屋。

操縦桿はこの部屋の上、船尾部分から昇る屋上部分にある。

レラの涙はここにセットして、後は設定した方角へ向けて障害物

を避けつつ航海できるようになっていた。こんな機能をつけるから、高純度の熾煌晶が必要などという無茶な原動力を要求されてしまうのだ。

「これから先、まずどこへ行くんだっけ？」

リビングの中央に置かれた丸いテーブル。

千里とナーリヤは、そこで向き合って椅子に座った。

「まずは“トウーユヨーク”だね。

精霊達が住む大陸で、その王様が秘宝を持っているはず」

「精霊の王様、かぁ。妖精さんとか、かな？」

「そうだね。妖精なんかは、ここに住んでるよ」

妖精、精霊、亡霊。

肉体を持たない精神的生命体は皆、この地を拠点としている。

都合上、純度の高い魔力に満ちたトウーユヨークは、彼らにとつて非常に居心地の良い場所なのだ。

「ここで僕たちは“恒星の耳飾り”を手に入れなければならない」

「恒星……星の形をしたピアスとか、かな」

千里が思い浮かべているのは、故郷で市販されている穴開けピアスやカフスだった。

千里の親友二人はピアスといった装飾を好む性質ではなく、千里もそれは同様だ。

だがクラスメート達や彼女の母のもの、テレビや雑誌で見られるものの中に、星をモチーフにしたピアス類が数多くあったという事を、思い出していたのだ。

「すんなり渡して……とは、いかないんだろうなあ」
「レラの涙があれば話し合いには応じてくれるらしいから、要交渉、だね」

イルリスの賜り物である、極上の熾煌晶“レラの涙”があれば、なによりも確証を持つ身分証明書になる。すなわち、“神の使い”と名乗り行動できるということだった。

これがあれば、各国への入国ですら容易いという貴重な代物なのだという。

もつとも、入国で苦勞するのは、帝国とノーズファンくらいなのだが。

「まあそれは向こうの王様の話を聞かないと、なんともできないことなんだけどね」

今考えても、仕方がない。

ナーリヤがそう苦笑すると、千里も笑みを返した。

「さて、そろそろ昼食にでもしようか？魚、釣ってくるよ」

「あ、私も手伝わせて。ナーリヤ」

「それじゃあ、お願いしようかな」

ナーリヤは部屋の棚から釣り竿と練り餌を取り出すと、一竿千里に渡して甲板に出る。

その際、ナーリヤは竿を握る右手に、ほんの少しだけ“意識”を向けた。

「む……ナーリヤ、今“使った”でしょ？」

「え？えーと……」

そのほんの僅かな仕草を、千里は直ぐに見抜く。
ナーリヤの仕草の一つ一つ、それを自然と目で追ってしまっていたからこそできる芸当なのだが、恥ずかしいのでそれは口に出さない。

「ダメだよ、もう。日常的に使って、またリアの時みたいになるの、私嫌だからね」

千里はそう告げると、小さく俯く。

記憶の読み込みを過剰に行った結果、ナーリヤは自身と他者の境界が曖昧になった。

その結果として高熱を出し、船の中で倒れてしまったのだ。

次も倒れるだけで済むとは限らないからこそ、千里はキツ目の口調でナーリヤに告げていた。

「う……ごめん」

「本当に、もう。無茶しないでね？ナーリヤ」

千里はナーリヤの服の裾を掴み、バツが悪そうに顔を逸らす彼を見つめる。

見上げた先にあるナーリヤの顔は、気がついた赤みがかかっていた。

「そ、その、近い、かも」

「っ……っ、ごめんっ」

ナーリヤの声に、千里は慌てて離れる。

言われて見ると、つま先立ちで見上げるその姿は、口づけをせがむ小鳥のようだった。

そんな恥ずかしい仕草をする勇氣は千里にはなく、それ故に高鳴る心臓を抑えて深呼吸をするハメになっていた。

「つ、釣り、しょうか？」

「う、うん、そうだね」

頬を赤らめた千里は、上目遣いでちらちらとナーリヤを見上げる。そんな千里にナーリヤは、拙い口調で千里を促した。

抱き締めようと飛び出す心を理性で抑えたのだが、ここまで来るとある意味へタレである。

釣り一つにも、前途多難。

今後のことを思つて、ナーリヤは小さくため息をついた。

昼食を終えた二人は、それから少しの間仮眠を取っていた。到着予定時刻は夜。なら、すぐに行動できるようにと一休み。……というのは建前で、実際は二人並んでいるだけでどきまぎとしてしまうため、互いに頭を冷やしていたのだ。

そうして目覚めた時、すでに辺りは暗くなっていた。

「ふう……眠れなかった」

リビングから直ぐの部屋が、千里の部屋。

ナーリヤの部屋は、千里の部屋を通るか、もしくは船首から入る奥の部屋だ。

ベッドから抜け出してきたナーリヤは、船首へ出て月を眺めていた。

「これから、どうなるんだろう」

今は快活に笑っているが、千里が落ち込んでいるのは知っていた。ティン……一刀からルフィルを守れなかった事への、後悔。それに苛まれているのを見ながら、側にいることしかできない自分の姿に、ナーリヤはただ齒がみする。

「緒方一刀……死んでいないというのなら、きっと」

また、立ちふさがってくることだろう。

ナーリヤはそう、確信めいた予感を覚えていた。

まるでイルリスをその身に降ろしたかのような千里を見て、動かないはずがない。

諦めて立ち去るような人間では、きつとない。

「その時は、千里に牙を剥かせたりはしない」

そういうと、ナーリヤは右手を強く握りしめる。

その瞳に宿る意志は強く、そしてどこか暗い輝きが零れていた。

「ふわ……ナーリヤ？」

「ッ……千里。目、覚めたの？」

「うん、なんか、今日はもう寝られないかも」

背後からかけられた声に、ナーリヤはハッと正気に返る。

そして、激情を己の内側に封じ込めて、穏やかに笑ってみせた。

例えば、スカート姿に戻った千里を見るのも久しぶりだ、などと思考を逸らしながら。

「ナーリヤ？どうしたの？」

「あ……いや、そろそろ到着するみたいだ」

訝しむように眼を細めた千里に、ナーリヤは己の内側を悟らせな
いように、前を指した。

真上からの月に照らされた、大陸と島の、中間くらいのサイズの
陸地。

そこが、ナーリヤ達の目的地だった。

「へえ……あれが、トウーユヨークかあ」

近づく度に、その全容が露わになる。

向かって右側のみが深い霧に包まれた、不思議な場所だった。

右側と左側を分ける大きな川があり、砂浜をとおって海に流れ出している。

その川を挟んで両隣の雰囲気は全く違うというのも、珍しい。

「まずは降りて、ここの人に話を聞こう」

乗り上げないギリギリの場所まで船を寄せると、いかり 錨を降ろす。

そして、ブーツの中に水が入らないようにズボンの裾をきつく結ぶと、飛び降りた。

ザブン

「つと、と」

少しバランスを崩しかけたが、ナーリヤは直ぐに体勢を整える。

そして、船に向かって振り向くと、飛び込むタイミングを伺っていた千里に向かって、両手を広げてみせた。

「さ、千里」

「へ？……あ、それってまさか」

ナーリヤの仕草の意味。

受け止めると笑ってみせるナーリヤに、千里は顔を赤らめた。

こいうい事を自然にやるから、ナーリヤは“ずるい”と独りごちながら。

「どづしたの？」

「あ、うう」

それでも、ナーリヤはいつもどおりなのに自分だけ照れているのも情けない。

何でも無いように振る舞うナーリヤを見て深呼吸をすると、千里は意を決して飛び降りた。

「きゃっ」

「よっ」と

目を瞑って小さく悲鳴を上げる千里を、ナーリヤは優しく抱き留める。

そして、千里が水に濡れないように、自分の首に手を回していた千里を横抱きにした。

……俗にいう、“お姫様だっこ”である。

「大丈夫？」

「う、うん。重くない？」

「軽いよ。羽みたいだ」

自然と言つてのけるナーリヤに、千里は俯く。

赤らんだ頬を隠したかったのだが、横抱きにされているので否応なしに見られてしまう。だから千里は、ナーリヤの胸元の軽鎧に手を当てながら、俯くことしかできなかった。

「はい、到着。降ろすよ？」

「え、あ、もうちよつと……」

「うん？」

「なっ、なんでも無い！」

思わず零れ出た“本音”に、千里は慌てて離れた。

今までのように大剣を担いでいたら、こんな体験はなかっただろ

う。

そういう意味では半ばから叩き折られたことも、あるいはそんなに悪いことではなかったのかも知れない。

千里はそう、茹だった頭でナーリヤの後ろについていた。

「さて、どっちへ行こうか？」

「へ？……あ、うん」

ナーリヤに声をかけられて我に返ると、千里は改めて辺りを見回した。

鬱蒼と茂る森と不気味な鳥の鳴き声が響く、川を挟んだ左側の光景。

なだらかな平地が続くように見えるのだが、深い霧に包まれた右側の光景。

「ナーリヤは、どっちが良いと思う？」

「霧の中の行動は、正直僕には良く解らない。

だったら、まだ森の中の方が動けると思っただけ……」

ナーリヤはそう、苦そうに零す。

先程から、左側の森からは不気味な鳴き声が響き続けていた。

キュエエエエエエエ

リュヌヌヌヌヌヌヌ

ウコケケケエエエエエ

そのどれもが実に不気味で、近寄りがたい。
ここへ飛び込むのは、至難の業といえよう。

「それじゃあ、森にしよう」

「……いいの？」

だが千里は、あっさりとそう言っただけ。

ナーリヤが目を瞞って千里に問い返すと、千里はそれに笑顔で頷いた。

「ナーリヤが山に詳しいのは知ってるし、私だって何かあっても戦える」

それに……と付け加えた千里に、ナーリヤは首を傾げる。

すると千里は少しだけ早歩きをしてナーリヤよりも前に進むと、振り返ってはにかんだ。

「それに、いざとなったら　ナーリヤが、手を差し伸べてくれるから」

頬に朱を差し、千里は告げる。

全幅の信頼を込めて告げ、そしてすぐに視線を正面に戻した。

「うん……そうだね。それじゃあ、一緒に頑張ろうか」

「うんっ、一緒に頑張ろう。ナーリヤ」

ナーリヤは、小走りで千里に追いつくと、隣に並んでその小さな手を握りしめる。

すると千里は、その温もりに応えて手を握り返した。

……が、ナーリヤは途端に恥ずかしくなり、顔に熱が入るのを感じていた。

横目で覗く千里の表情は、赤らめられてはいるがそれ以上にどこ

か楽しそうだ。

鬨りのある表情ではなく、心の底から安心している顔。

それを引き出すことが嬉しくて、だが同時にその柔らかい微笑みにどうしようもなく惹かれてしまって、ナーリヤは早くなる鼓動を必死で抑えていた。

互いに嬉しさと恥ずかしさをない交ぜにしながら、森に行く。

その初々しい姿を見られていないということは、二人にとっての幸運と言えるだろう。

トウーユヨークに踏み込んだ、その第一歩。

そこにあっただのは、不気味な森を警戒する戦士達の姿ではなく、初々しい少年と少女の姿であった。

九章 第一話 精霊の国トウーユヨーク（後書き）

今回より第九章、及び第三部の開始となります。
この第三部で、最後の大きな節目になります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださりありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

九章 第二話 亡霊決闘

深い森の中を、ひたすら進む。

月光に照らされた森は、仄かに視界を明るくさせていた。

「普通の森、じゃないよね？」

「そうだね。こんな木は、見たことがない」

千里の言葉に、ナーリヤは深々と頷いた。

鬱蒼と茂る木々は、青白くぼんやりと光を放っている。

触れてみると背筋が粟立つほどに冷たく、そしてどこか現実味が
ない。

まるで木の亡霊に触れているかのような、そんな不可思議な感触
だった。

「あんまり触らない方が良いと思うよ？ナーリヤ」

「うん……そうだね」

木から手を離して、ナーリヤは頷く。

触れているだけで体温を奪われていくような感覚に、ナーリヤは
確かに危機感を覚えていた。もう片方の手から伝わる、柔らかな体
温のおかげで気にならなかった……というのは、秘密である。

そう、ナーリヤの右手は、未だ千里の左手と結ばれていたのだ。

トウーユヨークに入り、早一時間。

二人は未だ、手を握り合ったまま森を進んでいた。

E
x
I

亡霊のような木々の間を抜けて、川に沿って進み続ける。
変わらぬ風景ばかりが続くと不安になるものだが、その前にナ
リヤが光を見つけた。

「千里、あれ」

「うん？光……って、あれ、まさか」

ナーリヤに指された方向を見て、そして顔を青くする。十メートルほど先の空間、木々の向こうで淡く輝く光。その青白い灯火は、どう見ても……“人魂”であった。

「行ってみよう、千里」

「ままま、待って！あれお化けだよ、絶対！」

千里は必死でナーリヤを止めようとするが、終わりのない状況に終止符を打ちたいナーリヤは止まらない。本気で手を振れば解放されるのだろうが、千里はそれができなかった。

ナーリヤの右手、その体温。

優しく包まれているだけで、身体から力が抜けてしまうのだ。

「と、確かに危険かも知れないね」

どん

「あうっ」

千里の声に冷静になったナーリヤが、咄嗟に足を止めた。まさか本当に止まるとは思っていなかった千里は、バランスを崩してナーリヤの腕に抱きつく。まるで、腕を組む恋人同士のような形だ。

「うっ、これは、その」

「え？」

「なんでも、ないです」

だが、それに慌てているのは千里だけだった。

ナーリヤの平坦な反応にそう気がつかされた千里は、一人赤面して俯く。

……ナーリヤも、抱きつかれて同じように赤面していることには、気がつかずに。

「なんだろう……墓、かな？」

ナーリヤは大きな木の陰に隠れて、人魂が浮かぶ方を覗き見る。

そこに広がるのは、西洋風の墓と石造りの家が建ち並ぶ奇妙な“集落”であった。

「ほんとだ。お墓に家かあ」

ナーリヤの後ろから、千里も顔を出す。

幾つも浮かぶ人魂と、霧のような身体を持つ住人達。

何とも不気味な光景に、千里はぶるりと肩を震わせた。

ホラー映画や怪談話は、苦手なのだ。

「見渡す限り“これ”なら、適当なところで言葉が通じそうな人を捕まえないと」

「そ、そうだね……声かけなきゃ、ダメだよね」

その光景が延々と続くというのなら、どこかで妥協する必要がある。

ナーリヤは千里が小動物のように小さく震えているのを見て、なるべく外見が自分たちに近い存在を探そうと、眼を細めて周囲を見回した。

「うーん……誰も彼も、幽霊みたいな住人ばかりだね」

ナーリヤの呟きに、千里は恐る恐る頷いた。

死霊や怨霊たちに向かっていった時は、戦闘のためのスイッチでも入っていたのか。

ノーズファンで不気味な幽霊たちに向かっていたとは思えないほどに、千里は身を縮こまらせていた。

「とにかく、動き出さないと何時まで経っても」

『そこで何をしている』

「!?!」

背後から聞こえてきた、低い声。

それにナーリヤと千里は驚き、思わず木の陰から飛び出した。

そう……墓と人魂が混在する、亡霊達の“集落”へと。

『ニンゲンだ』『また、来たのか』『厄介な』『そうやってアイツらは』『まただ!』

周囲から囁かれる声は、とてもじゃないが友好的なものには思えなかった。

集まる視線には威圧感とともに恨み辛みが含まれていて、敵意に満ちている。

まるで、“人間”という種族に対して、並々ならぬ遺恨を抱いているかのよう。

「歓迎はされていない、みたいだね」

「うん……そう、みたい」

その理不尽ともとれる怨嗟の視線に、千里は意識を切り替える。

いつものように、あらゆる状況を切り抜けてきた、強い意志を宿す瞳。

まだ攻撃はされていないため煌億剣を抜きこそしないが、千里の右手は柄頭に添えられていた。

そして自分たちに声をかけた影にゆっくりと視線を向け　　ぴたりと、動きを止める。

漆黒の毛並みを持つ大きな馬は、馬用であろう鈍色の鎧に包まれている。

その馬に跨る人物も同様に鈍色のフルプレートアーマーに包まれていて、背には槍を背負い、腰には両刃の西洋剣を提げていた。

そこまでは、いい。

だが気になるのは、鎧の人物と馬の　　首から、上だ。

『さて、人間。トゥーユヨークに足を踏み入れて、ただで済むと思うな』

どこから発せられているのか、解らない声。

それもそのはずだ。なにせ、馬も人も“首が無い”のだから。

鎧の中は空洞、という訳でもなく、中身が詰まっていることが解る。

高さ的に人の方は伺えないが、馬の首は“断面図”が見えるのだから。

「く、首無し騎士?!」

先程まで気概はどこへやら。

千里は青ざめた顔で後ずさった。

そんな千里を、一步前に出たナーリヤが背に庇う。

「僕たちは、精霊の王に用があり参りました。

決して、あなた方に危害を加えるのはもちろん、敵対するつもり

は

「やはりそうか！

貴様達も我らが王に牙を剥き、下賤な欲望から悪徳を成す者達か

ッ！！」

ナーリヤの言葉を遮り、首無し騎士がその声を荒げる。

その怨念の込められた声に、ナーリヤは苦々しげな表情を浮かべていた。

こんなに激昂されては、話しにならない。

「待つてください、僕たちはそんなつもりじゃないんです！」

「ならばいいだろう！」

亡霊集落“ウルートガルズ”の番人として、吾輩が汝に決闘を申し込む！」

ナーリヤの言葉に耳を傾けることなく、首無し騎士はそう宣言した。

途端に、周囲の亡霊達が円を作り場を整えていく。

「け、決闘ってそんな！もう少し話しを聞いてくれても良いのにな」

「ダメだ。僕たちが今何を言っても、たぶん彼らは納得しない」

噛み合わないまま進む状況に、千里は恐怖心も忘れて声を上げる。いつの間にか決闘を強いられていたのだから、たまらない。

「勝負は一對一！」

古より伝わりし亡霊族の決闘方 “亡霊決闘” にて勝負を決めようぞッ！』

首無し騎士の声に、周囲から声上がる。

そのどれもが暗い感情と歪な歓喜に包まれていて、ナーリヤは小さく額を抑えた。

十

トウーユヨークの中心を流れる川、ヴィルウィ。
それを挟んで左側に存在する亡霊達の集落が、ウルートガルズだ。
ウルートガルズには、古くから争いごとを解決するための決闘方

があつた。

それが、“亡霊決闘”である。

斬つても突いても中々死なない亡霊達は、怪我や負傷で動けなくなるなど稀だ。

だからこそ不毛な戦いを延々と続けられる前に、勝敗の線引きをする必要があつた。

それが、亡霊決闘の成り立ちである。

「ナーリヤ、いいの？」

「うん、こうでもしないと、こっちに耳を傾けてくれそうにないからね」

耳、ないけど。

そう続けるナーリヤのげんなりとした表情に、千里は顔を引きつらせる。

あれよあれよという間に整えられた舞台に、ナーリヤは若干の徒労を覚えていた。

『慣わしに従い、先に武器を落とした方の負けとする！』

相対者が例え万全だったとしても、五体が泣き別れていようともッ！』

そう、例え自分が傷一つ無くとも武器を落とせば敗北であり、例え手足が落ちようと武器さえ握っていれば敗北にはなり得ないのだ。

「武器はどうするの？全部持つてく？」

「そうだね」

千里に答えて、ナーリヤはいつものように複数の武器を持つ。槍と弓と、矢筒と短剣。嵩張りはそののだが、それらを背負う様子は熟れている。

「さて、僕の準備は良いよ」

淡く輝く円。

水晶のようなチヨークで引かれた線は、決闘の場を作っていた。半径十五メートルほどで、その線の中にどちらかに部外者が入ることはできない。

どちらかが武器を落とすまで、出られもしないのだ。

「二つ落とせばいいのかな？」

『そうだ。落とす武器は、両者の最低数に依存する』

純粋に多くの武器を持つ方が有利では、駄目なのだ。だから、より少ない方の数に依存して勝敗を決める。

『吾輩の名は“バルバロイ”！』

トウーユヨークが亡霊集落“ウルートガルス”の番人であるッ！
『！』

馬から降りた首無し騎士　バルバロイは、名乗り上げて剣と槍を構える。

槍は後ろに引き、剣はナーリヤに突きつける、騎士の構えだ。

「旅の狩人、ナーリヤ＝ロウアンス」

バルバロイの仰々しい名乗りに対して、ナーリヤの名乗りは実にシンプルだ。

どこまでいっても、ナーリヤは“一狩人”に過ぎない。そのことを思い出すことができ、ナーリヤはこっさり息を吐いていた。

このところ、“神託を受けし騎士”みたいな扱いばかりだったのだから。

『このコインが落ちた時、戦いの始まりだ』

弓を構えるナーリヤ。

コインを弾くバルバロイ。

その姿を、千里は固唾を吞んで見守っていた。

そして　　コインが、落ちる。

『オオオオツ!!』

「先見三手　」

バルバロイは、ナーリヤに矢を撃たせるつもりはなかった。

自身の背後には同胞達が壁を作っている。

そこへ通常の獣を相手にするものではないのだろう、巨大な弓から放たれる矢を放たれたらどうなるか。背後には、大量の人質がいるようなものであった。

『同胞達を、盾にはさせん!』

「要らない心配だと思っよ……一射たりとも、外しはしない」
『なにッ?!』

ナーリヤは弓を構えたまま、斜め前に飛ぶ。

右手に剣を構えたバルバロイの背に、回り込むように。

『ぬう、小癩な!』

「二拍時雨」

一息三射の二連続。

六本の矢が上空に向かって連続で放たれるそれを、バルバロイは背中越しに見ていた。

彼のような亡霊は、目でものを見ている訳ではない。視界は常に三百六十度に展開されているのだ。もつとも、意識を向けなければはっきりと認識することができないというのは、人間とさほど変わらないのだが。

『上かつ』

「先見二手、一射必中!」

上空へ意識を向けたバルバロイに、ナーリヤは矢を放つ。

その軌道は、バルバロイの足下……できるだけギャラリーへ配慮した結果であった。

六本の矢が、風を切って落下する。

それをバルバロイは、頭上で槍を回すことにより、叩き落としてみせた。

『オオオオツ!』

片手ではあるが、槍はプロペラを回すように回転している。

亡霊である彼は、手首を三百六十度回転させることなど造作ないことだった。

中身が詰まっているように見えても、やはり彼もまた精神生命体なのだ。

けれどその落下地点、落ちるタイミングの全てが“三手先”を想定したものだ。

落下してきた最後の矢を叩き落としたタイミングでは、足下の矢を振り払えない。

『吾輩をツ……嘗めるなよ人間ッ！！』

バルバロイは、右手で持った剣で足下の矢を防ぐ。

亡霊流の剣術なのか、手首の可動範囲は人間のそれではない。

より効率よい方向へ動く身体は、バルバロイに常識を越えた動きを可能とさせていた。

ズドンッ！

『グヌウツ?!』

だがナーリヤとて、足払いを目的に先見を用いた訳ではない。

対大型魔獣を想定させた弓を大きく引き絞り、矢を放ったのだ。

ガランのような大型な体躯の人間を軽く吹き飛ばす矢は、バルバロイの剣を弾いてみせた。

「闇を穿つ大弩ー ウルド〃ガル〃バリスタ”」

ナーリヤの声と鋭い視線が、バルバロイを射抜く。

普段の優しげな表情からは想像もつかない、鋭利な視線。

その引き締まった横顔に、千里はそつと胸を押さえた。

「い、今更なに照れてるんだろっ」

そんな場合ではない。

解りきっているのに、ナーリヤの横顔から目を逸らすことができ

ない。

そうしてぼんやりと見ていた千里は、バルバロイの動きに気がついていた。

「ナーリヤ、危ないっ！」

「ッ?！」

亡霊は、必ずしも“立って歩いて”いる訳ではない。

剣を落として膝を着いたバルバロイは、その体勢のまま滑るように移動してきたのだ。

僅かに浮遊し滑走する、亡霊ならではの移動法だった。

「くっ」

『遅いッ!』

千里の声で咄嗟に後ろへ飛ぶも、下から掬い上げるように放たれた槍の一撃に、ナーリヤは弓を落とす。

ナーリヤの弓もバルバロイの剣も決闘場の外へ弾かれ、二人は槍を構えて対峙することになった。

『得意の弓は無いようだが、続けるのか?』

「得意の二刀流は使えないみたいだけど、続けるのかい?」

互いに軽口をたたき合い、円を描くように立ち位置を調整していく。

周囲の亡霊も、千里も、その緊迫した空気に息を呑んだ。

『殺せ』『憎い』『人間たちめ』『また荒らしに来たんだ』『平穩を返せ!』『潰せ!』

終わりになき怨嗟の声を、千里は睨み付ける。

自分以外の人間達が、この人たちに“なにか”をしたのだろう。だからといってここまで憎む気持ちだが、千里には解らなかった。

「だって、おかしいよ。誰かが憎いから、種族もひつくるめてみんな憎いなんて」

宗教的な対立で、人種を一方的に嫌う。

故郷の中で国境を越えれば、そんなことは少なからずあるだろう。けれど千里は、それを“知識”としては解っていても、感情という面では納得できずにいた。彼女の国は、そういった感覚が特別薄いのだ。

『平穏を荒らす略奪者よ！貴様達の悪徳はここで潰えると知れッ！』
「僕たちには、貴方たちの平穏を脅かすような意志はない！」
『戯れ言を！そうやって貴様達はいつも、“王”の心を傷つけるのだ！』

バルバロイから放たれる声には、抑えきれない憤怒の感情が込められていた。

心を抉るような叫び、理不尽な感情、胸を締め付ける憤怒の音。周囲からそんな声が響いていたら、まともに集中なんかできない。

千里はそう、耳を塞ぎたくなる気持ちを、唇を噛んで抑え込んだ。戦っているのは自分ではない。だから、ここで逃げてはならないのだ。

「大丈夫だよ、千里。僕がいるから」

そんな千里の様子に、ナーリヤは気がついてみせた。

千里に背を向けているはずなのに、千里の感情に答えてみせた。一番辛いのは、矢面に立たされているナーリヤなハズなのに。

「ごめんね、ナーリヤ。心配かけちゃったね」

千里はそう呟くと、敵意の渦の中で胸を張ってみせる。

今できるのは、ただナーリヤに心配をかけないことだけだ。

「頑張つて！ナーリヤっ！！」

強い意志の込められた、声援。

それを受けて、ナーリヤは頬を緩ませる。

何よりも胸に響く後押しを受けて、ナーリヤは不敵に笑ってみせた。

『余裕のつもりかッ！』

槍を構えて、バルバロイは突進する。

超低空飛行の滑走によって近づくその踏み込みに、隙は無い。

「【聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな】」

唄うように紡がれる、声。

その声に応じるように、ナーリヤの槍が淡く輝き出す。

青白い光に満ちたその槍に宿るのは、異界より継承されし“信仰”の力。

「【憎悪に満ちし魂に、主の導きと救いあれ】」

突き放たれた槍を、ギリギリまで引きつける。

左目に突き刺さろうとする槍の軌道を、瞬き一つせずにナーリヤは見極める。

そして右側にずれながら前に踏み込み、槍の半ばで、バルバロイの槍の穂先を押しして逸らした。

「【Ame】」

ドンッ！

『ぐおおッ?!』

ナーリヤは器用に槍を回転させると、柄頭でバルバロイの胸を突く。

異界より伝わりし聖なる力 浄化に特化された魔力は、バルバロイから力を奪ってみせた。

『く……ぬう』

槍を落とし、バルバロイは膝を着く。

立ち上がる気力もないのか、そのまま身動きがとれないようだ。

『サー・バルバロイが』 『ならどうする?』 『決まっている。次は俺が』 『逃がさない』

だが、それで亡霊達は止まろうとは、してくれなかった。

周囲の亡霊達がはやし立てて、更に決闘を持続させようとする。

それでは何時まで経っても、終わらない。

それこそ、島の住人全てを打ち倒すまで。

「ま、待ってよ！ナーリヤが勝ったんだから終わりじゃないの!？」

『これで終わり?』 『許せるものか』 『終わらせはせん』 『王は我らが』 『護るのだ』

「なんで……こんな」

渦巻く敵意に、ナーリヤも焦りを覚える。

集まりだした亡霊達。その全てを相手にすることは、できない。きつとどこかで折れてしまい、そうなったら人間に恨みを持つているのであろう。この住人達に、なにをされるか解ったものではないのだ。

『卑怯卑劣と言っただけじゃ言え』

「バルバロイ……」

『それでも吾輩は、我々は、意志を貫かねばならんだッ』

膝を着いたまま、バルバロイはそう告げる。

敵意で満たされた彼らに、人間であるナーリヤ達の声は届かない。

そう　ナーリヤ達の声、は。

『　　そこまでだ』

低い声、だがバルバロイの声よりも重い声だ。

その“聞き覚えのある”声に、ナーリヤは目を瞠る。

亡霊達の作った壁。それを分けて歩み寄る、“漆黒”の鎧。

『その者達に、敵意を抱く必要はない』

「トラ、スト……？」

ナーリヤが闘技大会の準決勝で刃を交じらせた、幽族の騎士。

黒い霧を身体に宿す戦士が、毅然と佇んでいた。

『久しいな、ナーリヤ。ロウアンス』

亡霊とバルバロイ。

複数の困惑の視線の中心で、トラストは気軽に声をかける。刃を交じらせて戦えば、両者の気持ちは自然と解るもの。

それを体現できる戦士の一人が、ナーリヤの前に再び現れたのだ。

呆然とする住人達。

彼らに気を取られる暇もなく、ここに奇妙な再開が成立するのであった。

九章 第二話 亡霊決闘（後書き）

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

九章 第三話 精霊王の秘宝

精霊王の治める島国、トウユーク。

ここは、中心に流れるヴィルウイの川を境に住人の種族が異なる。

右側が、妖精達の暮らすカロートニルス。

左側が、亡霊達の暮らすウルトガルズ。

カロートニルスは、昼間は陽光に包まれているが、夜は濃霧に覆われている。

ウルトガルズは、夜間は月光に包まれているが、昼は濃霧に覆われている。

つまりナーリヤ達は、夜の中で濃霧を避けた結果ウルトガルズに迷い込むことになったのだ。

『昼間だったら、妖精達の集落に迷い込んでいただろうな』

「じゃあ、昼間に来られたら良かった、ってこと？」

石のテーブルを中心に置き、月明かりの下で耳を傾ける。

場の仲裁を買って出たトラストは、遠巻きに見る亡霊達を制しながら、ナーリヤ達に説明をしていた。

『いや、それでもおそらく反応は変わらんだろう』

「そっか……」

トラストの言葉に、千里は眉を下げる。

ナーリヤもそんな千里の肩を叩いて慰めつつ、この状況に疑問を抱いていた。

『トラストよ、何故その人間の肩を持つのだ?!』

そんな中、トラストに声がかかった。

ナーリヤの一撃から回復したバルバロイが、駆け寄ってきたのだ。

『この者は、我に正面から挑み打ち破った、誇りある戦士だ。

姑息な手段で“王”を謀った人間達とは、違うのだ。我が友バルバロイよ』

事も無げに、トラストはそう言い放つ。

闘技大会の準決勝、その対一の場に“姑息”や“卑劣”といった言葉は似つかわしくない。正面から挑み、そして打ち勝つための場。

そこへ昇ってきた者達を貶す気持ちは、トラストにはなかった。

「トラスト……ありがとう」

『礼を言われるようなことではない。

貴殿は胸を張ればいい。我は貴殿に、“誇れ”と言ったはずだぞ?』

「ああ、そうだね。そうだったね」

切り結んだ相手だからこそ、その心意気は伝わる。

そんな二人の“戦士”の姿に、千里は一縷の寂しさを覚えていた。こんな時、自分は会話に入っていくことができないのだ。

『ぬう……いいだろう。』

吾輩は敗者だ。どの道、勝者へ道を譲らなければならなかった』
『すまん、バルバロイ』

バルバロイは、無い首を竦めるような仕草をして、敵意を解く。ナリーヤがトラストなしにあの場を切り抜けていたとしても、このように敵意が解かれることはなかっただろう。そう思うと、トラストへの感謝は募るばかりだ。

『して、一体何用でこの島へ？』

トラストがそう訊ねると、ここで漸く千里が顔を上げた。微妙に疎外感を受けていたのだが、そうは言っていられない。

「神託を受けたんです」

ナリーヤがまず、そう告げる。

トラストとバルバロイはその言葉に反応し、姿勢を正した千里へ視線を移した。

視線を受けた千里は、それに促されて上着の内ポケットから“レラの涙”を取り出す。

これ以上に信用を持つ“身分証明書”は、他にない。

『こ、これはッ』

『ほう』

バルバロイがまず身を乗り出して、次いでトラストが呻り声を上げた。

どのような場所にあっても変わらない輝きを放つ、高純度の熾煌晶。

神からの授かり物として名高いそれは、幽族の二人を呻らせる。

『間違いはないようだな？バルバロイ』

『そのようだ。ぬう……此度のことはお詫びしよう、使者殿よ』

心なしか、バルバロイは落ち込んだように見えていた。

哀愁を漂わせる亡霊というのは実にシユールで、もの悲しさを飛び越えて成仏してしまいそうな雰囲気がある。千里は、口元を引きつらせながらそんなことを考えていた。

『改めて歓迎しよう、人間の使者よ。』

我はトラスト。ウルートガルズの“領主”をしている』

トラストは、改めてそう告げる。

腕試しで自分の領を離れてしまっ、なんとも自由な領主だった。

尤も、自由な住人ばかりなので、あつてないような肩書きなのだが。

そんなトラストの自己紹介に、ナーリヤと千里はポカンと口を開けるのであった。

トラストの家は、ウルートガルズの端にある。
妖精族も幽族も、領主は中央のヴィルウイの川を挟んで向き合った場所に居を構えるのが、慣わしとなっていた。もともと妖精族の方は、元来居を持たないのでその慣わしに従ったのは最初期に限るのだが。

「ゆ、幽霊屋敷」

トラストの家　古ぼけた洋館を見上げて、千里はそう零した。
亡霊が暮らしているのだから、当たり前と言ってしまうは当たり前前なのだが、如何にも“なにか”出そうな雰囲気漂っている。有り体に言えば、“怖い”ということだ。

「千里？どうしたの？」

「な、なんつでもないよ！」

思わず、声が裏返る。

変な声を出してしまったことに朱くなる千里を見て首を傾げながらも、ナーリヤは彼女の手を引いて中に入るよう促した。

蜘蛛の巣の張った廊下。

ひび割れたガラス窓。

劣化した灰色の壁。

隙間風に身を震わせながら、千里はナーリヤの手にしがみついて移動する。

ひゅおおおお

「ななな、なんか、響いてる」

「風の音だね」

解っている。

だが、そういう問題ではないのだ。

ガタンッ

「だ、だれ?!」

「あはは、これも風の音だと思っよ」

それも解っている。

苦笑いを浮かべるナーリヤを上目遣いで睨みながらも、千里はナーリヤの手から離れることができない。体勢としては非常に恥ずかしいのだが、怖い思いをするよりは遙かにマシであった。

「まずい、な」

「ナーリヤ？」

一方ナーリヤも、千里とは別の意味で危機感を覚えていた。

いや、千里のせいと、言った方が正しいだろう。
腕にぎゅっとしがみつくと千里は、小さな物音を聞き取る度に小さく震える。

大丈夫、と声をかければ頬を上気させながら、上目遣いでナーリヤを見るのだ。

理性の箍が、ぐらぐらと揺らぐ。

「うっん、なんでもないよ。千里」

「そう?」

千里に心配されて、ナーリヤは頷く。
なにやら“超えた”のか、眩いほどに爽やかな笑顔だった。

『さて、好きな場所に座ってくれ』

「あ、うん」

ナーリヤは慌てて返事をする、トラストが促した先を見る。
古ぼけた長いテーブルに、緑色の火が灯った燭台。
壁に掛かった絵画の中では、描かれている貴婦人が時折笑う。
シャンデリアの光は紫色なのに、空間は薄暗いだけで、紫色の光
なんか見えない。

照明の意味がないにもほどがある。

「とりあえず、座ろう?千里」

「と、隣で良い?」

「ッ……もちろんだよ」

思わず顔を逸らしながら、熱くなっていく鼻頭に手を当てる。
そんな情けない出血はしたくないからこそ、ナーリヤは理性をフ

ル稼働させていた。

『……何時までやっているんだ？』

「あ、あははは」

トラストの呆れたような声に、ナーリヤは苦笑いを返すことしかできない。

そんな二人の様子に気がつくことなく、千里はひたすら怯えていた。

一通り落ち着いた後、千里とナーリヤはトラストの話に耳を傾けていた。

フルプレートアーマーの下の表情は、当然ながら伺えない。

けれど、どうにも彼からは“呆れ”が滲み出ているように見えた。

『もう、いいようだな』

「あ、はは、は……はい」

「面目ないです」

ナーリヤと、次いで千里が肩を落とす。

恥ずかしい所を見られたというか、恥ずかしい所を見せつけたというか。

とにかく、二人は羞恥心で頬に朱を差していた。

「それでトラスト、いったい何故、僕たちはあんなに警戒を？」

慌てて本来の流れに軌道修正を図ったナーリヤに、トラストはため息を一つ零す。

だがそうやって何時までも引き摺る気がないから、トラストもそれに乗った。

『我らが精霊の王は、“夢を叶える力がある”と謂われていた』
「夢を、叶える？」

トラストが頷き、千里とナーリヤは顔を見合わせる。

本当にそんな力があるのなら、それは“神様”の領域だ。
イルリスも、ここに行けと命ずるだけで良い。だが……。

「謂われて“いた”っていうのは？」

『考えれば解る事だ。』

そのような規格を外れた力、
イルリスでもエルリスでもない我らに、持てるはずがない』

夢を叶える、それは望みを 空想を現実にする事だ。

そんなことは、島に縛り付けられた精霊の王にできることではない。
い。

神ですら、望むことを望むままにできていないというのに。

「でもそれなら、普通の人も信じたりはしないんじゃないか？」

『それを可能とする道具がある。そんな、噂が出回っていたら？』

「まさか……それって」

千里が、愕然とした声を出す。

それなら、秘宝を求めてきた千里達が、非難されるのも頷ける。
夢を叶える道具があり、それを王が所有しているのだと聞けば……

…人は、動く。

「奇襲、人質、謀り。」

あらゆる手段を用いて、侵入してきた人間達は望みを叶えようとした」

「その人間達が求めたのが……」

「そうだ。それこそが、我らの王の秘宝。」

“ 恒星の耳飾り ” だ」

人間達が、犯した罪。

人間という種族で一括りするつもりは、トラストには無かった。

だからこそ闘技大会にまで赴いたりしていたのだが、他の住人達は別だ。

「どうして、そこまでしちゃうんだろう。」

誰かを叩いて、それで望むものを手に入れて、本当に幸せなのかな？」

膝の上で拳を強く握り、千里はそう吐き出した。

トラストはそんな彼女の姿に、内心で心を軽くする。

人を謀るような人間ではない……それくらい、見れば解る。

「千里……人間は、貪欲なんだ。」

望みのために他者を害することを厭わない。そんな人間は、世の中には沢山いる」

そう語るナーリヤの瞳は、どこか空虚だ。

感情が込められていないのではなく、どこか遠くを見ているような。

人の裏側 人間の“陰”に、直面したことがあるような。

「でもさ」

だが、その陰も不意に消える。
その瞳に宿るのは、真摯な光だった。

「だからこそ、千里は“そうやって”いて。

それだけで、翳りを知る人たちは、頑張ろうって思えるんだ」

「ナーリヤ？どうして、そんな。

……ううん、わかった。だからそんな悲しそうな顔、しないで」

穏やかな笑みを浮かべるナーリヤの頬を、千里は撫でる。

どうしてだか、ナーリヤが泣き出してしまいそうに見えたのだ。

『光を宿す少女と、翳りを知る少年か。

なるほど、神託で選ばれたというのも頷ける』

トラストは、ナーリヤ達に聞こえないように、小さくそう呟く。

トラストが知っていたのは、ナーリヤのみだ。

けれどこのやりとりで、トラストは千里のことも信じてみたくな
った。

『昼になれば、ウルートガルズは濃霧に包まれる。

そうなれば移動は困難だ。今日は泊まり、朝の霧が薄い内に橋を

渡る』

トラストがそう告げると、千里は前を向いて頷く。

そこに怯えはなく、ただ前につき進む意志の光だけが宿っていた。

『その後は、我が王の所までの道案内を紹介しよう。

妖精族の方も人間を嫌っているが、私の紹介ならばそれも和らぐ』

「何から何まで、本当にありがとう。トラスト」

礼を言い頭を下げるナーリヤと千里。

そんな二人を、トラストは手で制した。

『構わん。我も、人間と我らの“未来”が見たくなつたに過ぎん』
「そっか、それでもありがとう、だよ。トラストさん」

千里に笑顔で言われて、トラストはわざとらしく肩を竦める。

そして、やれやれと言わんばかりに息を吐き、今度こそその礼を受け取るのであった。

十

トラスト屋敷の寝心地は、あまり良いものでは無かった。
ベッドは硬い、シーツはかび臭い、隙間風が寒い、壁を叩く音がする。

ろくに寝られたものでは無かったが、千里はなんとか目を閉じて一晩過ごすことができた。

「うう、こつちにきて寝起きの悪さ、だいぶ良くなったと思ったんだけどなあ」

原因は、寝不足か。

故郷では夜更かしをしてしまうことが自然と多くなり、それ故の寝起きの悪さだった。

習慣で悪くなっていった寝起きは、習慣で良くもなる。

こちら来て最初は悪かった寝起きもここ最近は良かった……と思つたら、寝不足でやはり寝起きは悪くなっていった。

「日本に戻つたら、夜はしっかり寝よう」

眉根を寄せてふらふらと、幽鬼のように歩く。

実に不気味で機嫌が悪そうだが、それをなんとか振り払って千里は掛けてあったブレザー型の服を手を取った。

腰には煌億剣とマガジン。

鎧の嵌められた、黒いブレザー型の服。

ベッド脇のブーツを履けば、準備は完了だ。

「よし……まずは朝食だ」

亡霊達は、食事を取らない。

そんな基本的な事を聞いていなかった千里は、意気揚々と部屋を出た。

疲れていたためか、夕食を摂らずに寝てしまったのだが、そもそも夕食なんかこの屋敷になかったと気がつくまで、まだ少しだけ時間があるようだった。

そうして廊下であったナーリヤに朝食がないことを告げられ、千里は肩を落しながら出発することになった。仕方がないので、森で木の実でもとって食べるしかないのだ。

屋敷を出発して、朝霧の中、川に沿って歩く。

向こう岸まで、川幅は百メートルから百五十メートルほどだろうと、千里は目測で見っていた。

「これ、何でできてるの？」

橋に着くと、千里はそう恐る恐るナーリヤに訊ねた。

古い建造物には、ドクダミの蔦が絡みつくことがある。

この橋も蔦が絡みついているように見えなくもないのだが、肝心の絡みつかれている橋本体が見あたらなかったのだ。

『リパイアだ。』

風に絡みつく蔦で、意図的に風を流せばその場所に蔦の道を作る『風に絡みつく？』

見れば、橋の根元の地面に、緑色の石が置かれていた。翡翠のような石で、そこから絶えず風が吹き出ている。

「ナーリヤ、あれは？」

「風石だね。火を熾す火石同様、風を起こす石だよ」

王国の港街、そこで出会った隻腕の船乗り。

ラオという老人の船にあった赤い石を思い浮かべて、千里は頷いた。

この分だと、水の石や雷の石ともありそうだ、などと考えながら。

「よつと……けつこう丈夫だね」

『張り巡らされているから、よほどのことがなければ落ちないはずだ』

先に蔦の上を歩き始めた、ナーリヤとトラスト。

二人の余裕のある表情を前に意を決して、千里も蔦の上を歩き始めた。

「けつこう、ふわふわしてるね」

「そうだね。想像してたより弾力がある」

スプリングでも入っていきそうな歩き心地に、千里は少しだけ楽しくなる。

ホラーは苦手だが、高いところは得意といっても良かった。

それほど高さはないが、足下がおぼつかないというのに怖くなる人も居るだろうが、高いところが得意ならばそれほど恐れることもないのだ。

『基本的に、幽族と妖精族にこれといった交流はない』

トラストの語り口に、耳を傾ける。

全身を覆う鎧はかなりの重量を持っているはずだが、それでも薦が切れたりはしない。

異世界ならではの、不思議植物だ。

『だから案内人の要請は領主へ一任することになる。

その点だけ、了承しておいてくれ』

「わかったよ、トラスト」

ナーリヤが頷くと、トラストはそれを受け取って満足げに顎を引いた。

仕草一つ一つから態度を見ることができるとは、彼の内側には“なにもない”など、直接目で見たことがなかったのなら信じられなかっただろう。

やがて橋の終わりに辿り着くと、トラストは足を止めて振り向いた。

『ここで暫し待っていてくれ。』

何かあったら、レラの涙が貴殿らの身分を明らかとしてくれよう』

「うん、ありがとう。助かるよ、トラスト」

「ありがとう、トラストさん」

礼を言うナーリヤ達に、トラストはただ一度だけ頷いてみせる。

そして、妖精族の領主に話しをつけるために、その場から立ち去った。

残された千里とナーリヤは、二人で周囲を見回す。

ここは既に妖精族の領域、“カロートニルス”なのだ。

「なんだか、百八十度雰囲気が違うね」

常に陰鬱な雰囲気か漂っていたウルートガルズと違って、カロートニルスは穏やかで陽気な空気に包まれていた。

空気は澄み渡り、風は心地よく、陽光は暖かい。

緑の芝生は活き活きとしていて、野に咲く花は可憐で素朴だ。

「何の花だろう？ ナーリヤ、解る？」

「えーと……見たことない、かな」

群生する花々の中の一輪に、千里はそっと近づいた。

しゃがみ込んでよく見てみると、桃色の花弁が愛くるしい七つ葉の花であった。

「コスモスなんか似て」

「千里、離れて！」

ナーリヤの声に驚き、飛び退く。

それと同時に花弁から甘い香りを纏った風が吹き上がり、千里が先程までしゃがみ込んでいた場所を覆い尽くした。

「残念でした！ここから先に行けると思ってた人間どももよっ！！」

濃いピンク色の髪をポニーテールにした、吊り目気味な女の子。

ただしその全長は二十センチにも満たないほどに小柄で、背からはトンボのような透明な羽が二対四枚、生えていた。

「よ、妖精!?」

「千里、レラの涙を」

「アンタたちには、なあーんにもさせないんだからっ!」

千里がレラの涙を取り出す前に、妖精から桃色の風が吹き上げられた。

甘い香りを纏った風……これは、花粉だ。

「惑え、惑え、惑え!

我が王の百分の一に満たなくとも、人間程度惑わすには雑作もないッ!」

「くっ……千里!」

蜜のような、甘い匂い。

花々を凝縮した香水を直に嗅がされているような、不快感。

その香りは千里の鼻孔から脳を駆け巡り、意識をぼんやりと濁していった。

「あははー、ナーリヤー……うふふふ、お花畑がいつぱい」

「ち、千里!? 正気に戻って!」

両手を広げながら、千里はその場でくるくると回り出す。

ナーリヤも嗅いではいたが、千里の方が感受性が高いのだろう。

虚ろな目で在りもしない蝶々を追いかける姿は、いっそ不気味だ。

「わあ〜い、てふてふだあ」

「なにもないから! ああもっッ」

川に向かって走り出した千里を、ナーリヤは後ろから抱き締める。それでも千里は諦めず、蝶を捕まえようと空に手を伸ばしていた。

「ナーリヤ〜、きれいだねえ〜」

「そつちに蝶なんかいないから！」

「あははは！いい気味ね、人間ども！！」

そんな二人を、妖精は腹を抱えて笑っていた。

「ご丁寧に自分の膝を叩きながら涙目になって笑う姿に、ナーリヤは苛立ちを覚える。」

けれどもまずは、千里をどうにかしなければならないと、意識を切り替えた。

「君は少し黙ってくれ！」

「うふふふふ……黙るの？」

「千里じゃなくて！」

「ナーリヤが？」

「僕でもなくて！」

カオスである。

とりあえず術者を叩けばいいのでは？という基本的な事は、混乱したナーリヤには考えられなかった。

だがこの收拾のつきそうになかった状況にも、収束の風が吹いた。

「【風よ！】」

突如吹いた突風が、桃色の花粉を吹き飛ばす。

それにより幻惑から解放された千里は、衝撃で尻餅をついた。

「ララン！その人達はダメ！」

『まったく、落ち着きのない』

「元気なのはいいことですわ」

ナーリヤと千里の視線の先。

そこには、トラストと見たことのある妖精と、見慣れない妖精の姿があった。

「あ……あの妖精さんって、もしかして」

金の髪に黄色の瞳。

緑がかった妖精の羽。

風の魔法を操る、小さな女の子。

「久しぶりね、チサト！再戦は叶いそーにないけど」

闘技大会の二回戦で千里と戦った、妖精族の少女。

ファリリナが、トラストと共に駆けつけたようだ。

「あら、ファリリナさん、私にも紹介してくださいな」

ファリリナとトラストの後ろ。

その見慣れない妖精は、彼女たちよりも遙かに大きい。

千里よりも背の高い、大人の女性然とした、白いドレスの妖精だった。

その背には、妖精の証と言すべき金色がかった羽が、四対八枚も生えている。

「初めまして、神の使いよ。私はエリエル。

妖精の集落カロートニルスの領主を務める、大妖精ですわ」

金の髪に銀の瞳を持つ、妖精の領主。

エリエルは自己紹介と共に、たおやかに笑ってみせた。

「え？神の使いつて……え？」

「ララン、あなたは落ち着きなさいよ」

いつの間にか、ファリリナは桃色の妖精　ラランの側まで来ていた。

その光景を見ながら、千里は混乱した頭を落ち着かせる。

千里が幻に惑わされて混乱している、その間。

それから抜けきれもしいうちに、王を除く役者が揃うのであった。

九章 第三話 精霊王の秘宝（後書き）

今回で折り返し地点。

次回から、九章の主要部分に入っていきます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

九章 第四話 迷いの森

朝霧がすっかりと晴れ、太陽が顔を覗かせる。
心地よい陽光と暖かい風に包まれる中、千里達はテーブルを囲んでいた。

エリエルの力によって生み出された、蔦と葉と花によって編み込まれたテーブルと、せり上がってきた丸太の椅子。
テーブルの上には、やはりエリエルの生み出した木のコップと、
ラランが注いだ花蜜の紅茶が並べられている。

『妖精族は特定の住居を持たず、思い思いの場所に隠れ住んでいる』
トラストはそう切り出すと「見つかったのは運が良かった」と続けた。

領主と名乗っているエリエルもそれは変わらず、カロートニルスの各地を好きなように移動して暮らしている。

そんなエリエルをすぐに発見できたのは、幸運だった。

「ありがとうトラスト。助かったよ」

「うう……お恥ずかしいところをお見せしました」

蝶々を追いかけていた千里が、赤くなつて俯く。
誤魔化すために口に含んだ花蜜の紅茶は、優しい甘さがした。
まるで、紅茶にまで慰められているような、そんな気がして千里は更に落ち込む。

「さてさて、それで……我らの王にお目通り願いたい、でしたか？」
「は、はい！」

エリエルの言葉に、千里は顔を上げて頷いた。
そして、胸の内ポケットから、レラの涙を取り出しして見せる。

「……ええ確かに、イルリスの導きがあるようですね」

エリエルの表情は変わらない。

最初から最後まで一貫して、微笑みを携えている。
故に、底が知れない。

「それならば私が止めることはありません」

「あ、ありがとうございます！」

「ですが、私は協力もいたしません」

「え？」

頭を下げた千里は、その言葉にすぐに顔を上げる。

王の住処への道も何もわからないのに、なんの協力も得られない。
それでは、まずいのだ。

「ど、どうしてでしょうか？」

「私も……トラストも、界限を背負うモノです。人間に協力はできませんわ」

ナーリヤがトラストに視線を向ける。

ここまでトラストはナーリヤ達に“協力”をしてくれた。

そのことに、“大丈夫なのか？”と視線で問いかけていた。

『王の下へ行くためには、迷いの森を抜けなければならない。』

人間相手に、王の咎たる森を先導したとなれば問題になつてしま
うだろう。

だが、“人間を探るためにエリエルとともに話をする”程度なら
何の問題もない』

トラストはそう、一息に語つてみせる。

多くの住人が、千里とナーリヤという個人ではなく“人間”の全
てを嫌っている。

だからこそその人間に協力したとなれば、暴動が起こつてしまつ
ことすら考慮に入れる必要が出て来てしまつのだ。

「それなら、僕たちはあなた方の協力を強制できる立場にありませ
ん」

「なんとか頑張つて、森を抜けてみます！」

協力を拒否されても、ナーリヤも、千里も、めげはしない。

自分たちの罪で拒絶を受けている訳でもないのに、受け入れて前
を見る。

その在り方を見て、エリエルはほんの僅かに微笑みを深くした。

「私たちは、協力できません。けれど……」

エリエルは、話しについて行けずぼんやりと紅茶を見る妖精たち
を、手招きした。

ファリリナとラランはそれに首を傾げて、しかしエリエルの下へ
飛ぶ。

「……妖精が森に迷い込むのは、よくあることなのです」

そしてそう……より一層底の知れない笑みを浮かべるのであった。

E
x
I

カロートニルスから川沿いに、上流を目指す。
その先の迷いの森は、常に濃霧に覆われている上に王の術がかか
っているため、川沿いに歩いて迷うのだという。

その森を、千里とナーリヤは歩いていった。
先導を、ファリリナとラランに任せる形で。

「うう、なんであたしが人間なんかを……」

「エリエル様のお言葉と、レラの涙の導き付きなんだから文句言わないの」

ラランが愚痴を零し、それをファリリナが諫める。

妖精然とした陽気さを持つファリリナと、妖精らしいイタズラっぽさを持つララン。

傍から見ていても、相性の良い二人であることが伺えた。

「いいか人間ども！あたしの先導があつて迷うなど、あり得はしな
いと知れッ！」

「あはは……うん、頼りにしてるよ。ララン」

ナーリヤが苦笑しながらそう言うと、ラランは真っ直ぐな言葉に
照れて顔を逸らす。

そんな二人を見て、千里はそっとナーリヤの側により、手を繋い
だ。

「千里？」

「……なんでもない」

視線を流しながら答える千里に、ナーリヤはただ疑問符を浮かべ
ていた。

ナーリヤの言葉、ラランの反応、千里の行動。

それらを繋ぎ合わせた結果浮かんだ答えに、ファリリナは含み笑
いを零す。

そして、千里の耳元まで、ふわりと飛んでいった。

「とられやしないとおもうけどなあ」

「っ!？」

首を回した先にある、慈愛の笑顔。

千里はそれに咄嗟に反応することも叶わず、ぱくぱくと口を動かしていた。

瞬間的に熱を帯び始めた頬を、隠す余裕もないほどに。

「千里、大丈夫？」

「だっ、大丈夫！」

「そ、そう？」

強く言い切られて、ナーリヤは少しだけ腰を引かせた。

これから謁見が待っているというのに、なんとも緊張感のない一団であった。

「それにしても……すごい霧だね」

ナーリヤが話題を変えるために呟くと、それにファリリナが乗る。

「妖精族は陽光、幽族たちは月光から力を得ることが出来る。

逆に妖精族は月光で、幽族は日光で力を削がれてしまうの」

ということとは、闘技大会の時、トラストは本気ではあったのかも
しれないが、全力ではなかったということだ。

闘技大会が夜だったら、あの頃の自分では勝てたかわからない。
ナーリヤはそう、密かに戦慄していた。

「それに対して王は、日光と月光から強い力を得ることができても人間達に度々侵入されるようになってから、己の領域を深い霧で閉ざしてしまわれるようになってたわ」

妖精族を月光から、幽族を日光から護る濃霧。

それは、王の力によって生み出されていた。

晴れた森に住んでいた王は、何時しかその力を己の領域にかけるようになつた。

そう語るファリリナの寂しげな横顔に、ナーリヤと千里は息を呑む。

陽気な彼女がここまで落ち込んでしまった理由は、財宝を求めた“人間”の欲望にあるのだから。

「私はさ、チサトと一回戦っただけで、二人のことはそんなにわかんない」

「ファリリナ？それならなんで人間どもに、ここまで？」

ラランがそう訊ねて、そしてそれをナーリヤ達も疑問に思う。

トラストは刃を交わしたことで心を通じ合わせることができた。

それはナーリヤにも納得できることだし、トラストも納得していた。

けれどファリリナと千里の戦いはそれぞれものが短く、言葉を交わす余裕もほとんど無かつたはずなのだ。

「トラスト様は、さ。」

帝国に行く時も色々お世話してもらつたし、どんな方かも知っている。

あの方は“他人を見る目”がすごくある方だから、

だから、トラスト様が信頼したあなたたちを、私も信用することが出来るんだ」

ウルートガルズの領主、トラスト。

彼はその実力だけではなく、人柄でも人望を集めていた。

そんな彼に信頼されていたナーリヤ達ならと、自分も信用する気になったのだ。

「だから、さ。あなたたちなら頼めると思っの」

「私たちに、なにを？」

千里が問うと、ファリリナは足を止めて振り向く。

その真っ直ぐな視線に、千里は僅かにたじろいだ。

「王に、翡翠の森を返してあげて。」

王の霧を晴らして、ここを翡翠で満ちた森に戻して」

頭を下げるファリリナを見て、ラランは悲痛そうに顔を歪める。

そして、咄嗟に答えられず固まっていた二人を強く一瞥してから、ファリリナに並んだ。

「あーもうっ！あたしからも、お願い……ファリリナの気持ちを、無駄にしないで」

花に惑わせた時も、ラランは謝ろうとしなかった。

けれど今、それでも、ラランは嫌いな“人間”である二人に、頭を下げた。

「ファリリナ、ララン」

「チサト……」

上目遣いで、フアリリナは千里を見る。

千里はそんな彼女に、太陽のような笑みを浮かべて見せた。

「任せておいて。だから終わったら、今度は普通にあの花の香りを嗅いでみたいかな」

ほんの小さな願い。

自分の欲望の限り、足元を見ればいいのに。
千里はただ、胸を張って笑って見せた。

そんな千里に、ナーリヤは笑みを浮かべる。
慈しみの、優しい笑みだった。

「うんっ……ありがとう、チサト」

「なによ、良いこと言えるじゃない。人間の、くせにさ。
でも、その……ありがとう。とびっきりのを、用意してる」

腕を組みそっぽを向きながら、それでもラランは礼を言う。
その頬を真っ赤に上気させて、千里に感謝の礼をした。

濃霧の中を進み続けると、だんだんと霧が和らいできた。その中で、ファリリナとラランは足を止める。

「わかる？」

ラランが指した先。

そこには、翡翠色に輝く一本の木があった。

「あの木の向こうが、王の領域。」

あたしたちはここから先に行くことができないけど、ここから先は真っ直ぐだから」

「私たちの案内は、ここまでなの。」

だからあとは、お願い……チサト、ナーリヤ」

二人の言葉に、千里とナーリヤは強く頷く。そして安心させるために、力強く笑って見せた。

「任せて！」

「ここまでありがとう。ファリリナ、ララン」

笑顔で手を振るフアリリナと、腕を組んでそっぽを向くララン。そんな二人を背に、ナーリヤ達は歩き出す。

翡翠の木は、鉱石と樹木の中間のような、不思議な木だった。その幻想的な雰囲気にもまれてまいと、千里は頭を振る。

「仲良くなれると良いね、ナーリヤ」
「うん……そうだね、千里」

木を通り抜けて、最初に千里がそう零す。その哀愁の籠もった横顔に、ナーリヤはただゆっくりと頷いた。

ここから先も、当然ながら濃霧に包まれている。だが、辛うじて見える半径一メートルほどの視界の中には、翡翠の石や翡翠の木々が鮮やかに立ち並んでいた。陽光や月光を素直にその身に受けていたならば、どれほどに美しいのだろうと呻らせる。

「ひたすらまっすぐ、だったよね」
「うん。不思議と、まっすぐ歩く道には障害物もないように見えるね」

千里の声に相槌を打ちながら、ナーリヤは時折周囲へ視線を流していた。
空間にあるのは、翡翠の植物や鉱石と、土のみ。
そこに生物の気配はなく、静かすぎる空間だった。

「千里、止まって」
「え？……あ」

足を止めてみた先。

そこには、突然深くなつた霧が壁のようにそびえ立っていた。千里はゆっくりりと、その壁に手を這わせる。

「変な感じ。なんか、弾力がある」

「……本当だ。雲を、触っているみたいだ」

通り抜けることは、できそうにない。

千里に次いで壁に触れてみたナーリヤは、そう歯がみする。

「そうだ、千里」

「ああ……レラの涙！」

ナーリヤの声で思い出し、千里はレラの涙を取り出した。

そしてそれを持ち上げると、ゆっくりと壁に近づける。

どうしようもない時には、これを使うべきなのだ。

……イルリスの、導きか。

霧の向こうから聞こえてきた声に、千里とナーリヤは身体を強ばらせる。

濃霧の中、壁の向こうで複雑に反響した声は、年齢どころか性別すらもわからない。

して、何用か。

「え、えと……神託に従い、地下大神殿グ、グライ……グライ……」

「千里、“グライズホルン”だよ」

「グライズホルンへ入るための鍵を、いただけないでしょうか！」

グダグダである。

案の定覚えることができていなかった千里は、微妙に頬を上気させていた。

この分では、他の地名やアイテムの名前も、覚えているか怪しい。

神託により宝を求めるか。

心なしか、声のトーンが下がったように思えて、ナーリヤは眉を寄せる。

何が声の主の琴線に触れたのか、答えは明白だった。

言葉を連ねたところで、解らぬのが“人間”だ。

「え?」

諦念と僅かな怒りが込められた声に、千里は息を呑む。

反論しようにも、そうさせない声の主の感情が、霧にうねりを持たせていた。

ならば此度も変わらない。平等に、試練を超えよ。

「……それで、認められるのならば」

荒れ狂う霧に怯む千里を庇うように、ナーリヤが一步前に出る。

そして、霧に向かって手を伸ばした。

待て。

「……なにか、問題が?」

ナーリヤは、先程から続く遣り取りで“嫌な予感”を感じていた。ここで何とか自分が名乗り出ておかないとならないような、そんな予感。

ナーリヤが得てきた経験からもたらされる、直感だ。

神託を受けし者しか、この先の試練は受けられん。

「……………」

口を噤むナーリヤの手を、千里が掴む。

千里は一度ナーリヤを見上げて微笑むと、強く笑って見せた。

「私が神託を受けました」

ならば、ここを通れ。

力強く頷き、千里はナーリヤを見る。

自分を心配そうに見る目。

その目を安心させるために、千里は笑ってみせた。

「私は大丈夫。だから、信じて待っていて」

「……………そう、だね。わかった。待っているよ、千里」

「うん。それなら……………頑張れる」

千里はそう微笑み、そしてナーリヤの肩に手を乗せる。

気合いは充分……………だと、言えるようにするために。

そつと背を伸ばして、その頬に口づけをした。

「あ」

「それじゃあ行ってくるね！」

霧を潜り走り抜けようとする、千里。

耳まで赤くなったその表情に苦笑すると、通り抜ける前に千里の左手を取った。

「へ？」

「行つてらっしゃい、千里」

少し、気障だろうか。

そんなことを考えながら、ナーリヤは千里の薬指に、口づけをする。

「っゝ行つて、きます」

「うん」

手からするりと離れて、千里は走る。
その背中に、精一杯の想いを込めて。

別れは終わったか。

「どういう、意味でしょうか」

声に、ナーリヤは鋭い視線を向けた。

一時とはいえ、離れる。

そのことをナーリヤに“不安”にさせたのは、この声が発する失望感が原因だった。

もつどんなものにも、期待を寄せてはいないかのような。

私の役目は、与えるだけだ。

「与える、だけ？」

そうだ。ただ、安寧を与えるだけだ。

夢を叶える。

そう称された声の主　精霊の王。

その意味を考えて、ナーリヤは眉を寄せる。

「試練の、内容とは？」

残りし者は、言葉を持たない。持つのは、進む者だけだ。
「帰ってこなければ、明かされない試練……か」

この精霊王の試練について、噂話すらも聞いたことがない。
その理由も、彼の言葉を思い出せば自然とわかった。
試練を受けた者が……誰一人として、帰ってきていないのだろう。

試練を超えなければ、この森からは出られない。
「試練を受けた者が戻ってこなければ、未来永劫ここに閉じ込められると？」

そうだ。最早、逃げられん。

言い放つ、王の言葉。

そこに、蔑みの類は含まれていない。
宿るのは、諦観のみだ。

「逃げるつもりはないよ」
ほっ。

「千里は、必ず帰ってくるからね」

千里が見せた、真つ直ぐな瞳。

それを、ナーリヤもまた見せていた。

どんな障害も乗り越えて、笑ってみせるという強い意志。
折れることのない心の、表れであった。

ならば待つがいい。十年でも、二十年でも。

そう言い放ち、声の気配が離れる。

ナーリヤはただ一人残された霧の前で、祈るように拳を握った。

「彼女に、千里に……エルリスとイルリスの、加護を」

これから先は、千里の戦い。

ナーリヤにできるのは、ただ待つことだけだ。

霧に消えた千里。

残されたナーリヤ。

諦念を宿す王。

その思いが、ここに交差しようとしていた。

九章 第四話 迷いの森（後書き）

次回前後編で、九章を終えたいと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

九章 第五話 夢幻の箱庭 前編

キーンコーン、カーン、コーン

残響する音。

耳に残る音色は、どこか懐かしい。

「……っ！……っ？」

誰かの声が、耳をくすぐる。

咄嗟に思い出すことができなくて、どこか歯がゆさを感じていた。それでも今は、この心地よい感傷に身を寄せていたくて、ただ委ねる。

「……ないと、……てる？……っ」

だんだんと、声が大きくなる。

そんなに大声を出されたら、この感覚を手放してしまう。
そう考えた 千里は、声とは反対側に顔を逸らした。

「へえ？そう……そーゆー態度とっちゃうんだあ」

底冷えするような声。

この声の主はきつと怒っているのだろうか、何故怒っているのか解らない。

だから千里は、ぼんやりと怒られている人を気の毒に思っていた。誰が怒られているのか、知らないが。

「起きろっ！！千里っ！！」

「は、はいっ！」

耳元で叫ばれて、千里は身体を跳ね上げた。だが、急に頭を上げたのが悪かったようだ。

ガンッ

耳元で叫ぶために覗き込んでいた、声の主。その主の額と千里の頭頂部が強くぶつかり、鈍痛を覚える。星が散ったような、鈍く響く痛みだった。

「いつ！？」

「っう……」

まるでコントみたいだ。

千里はそんな風に考えながら、涙目になって頭を抑えた。すると、そこへすかさず手を差し出される。

「大丈夫ですか？千里さん」

「っう、ありが、とっう？」

手を掴み、顔を上げ、目を見開き、呼吸を止める。

黒い滑らかな髪を姬カットにした、上品な少女。

千里に視線を合わせて首を傾げる姿に、奇妙な既視感を覚えた。

「千里！なに？あたしの額からなけなしの知識を叩き出したって事?!」

これ以上勉強ができなくなったら、どうするんだ。
そう叫ぶのは、女子の平均よりも五センチほど背の高い、百六十センチそこそこの身長を持つ少女だ。黒いポニーテールの髪が、彼女の活発さを見せている。

「千里？寝ぼけてる？」

「千里さん？体調でも悪いのですか？」

見間違えるはずのない姿。

遠く遠く遠く、離れてしまったはずの絆。

「利香、ちゃん？いず、み、ちゃん？」

「はいはい利香ですよー」

「はい、泉美ですよ」

いつぱいの疑問符を浮かべながら、二人はそれでも返事をする。

木とアルミでできた机と椅子、深緑の黒板、人工的な灯りを点す

蛍光灯。

ガラスの嵌められた窓、陶器の花瓶に挿された花、掃除用具入れ。

既に通っているはずだった学校、さかおおし酒大路高等学校の制服を着た、
二人の親友。

あやこし綾小路泉美と村上利香の姿に　千里は、一筋の涙をこぼした。

酒大路高等学校の、昼食時。

苦手な数学の時間に眠ってしまった千里を起こそうと、利香は声をかけていたのだ。

四時間目が終わってこれからお弁当。そんなタイミングだったな、と千里は“思い出して”いた。

「びっくりしたよ、突然泣き出すんだもん」

「だっ、だからあれは、目にゴミが入ったんだってば！」

「ええー、ホントにい？」

訝しげに千里を伺い見る利香と、それに噛みつく千里。

そんな二人を見て楽しそうに笑う、泉美。

三人は校舎の解放されている屋上で、弁当を広げていた。

「いつ見ても、泉美ちゃんのお弁当は豪華だね……」

「あら、千里さんのお弁当も美味しそうですよ」

実家が料亭である泉美の弁当は、それこそ零が四つほどの値段を出さなければ買えないと言われても納得できるような、純和風な高級感のあるものだった。

対して千里の弁当は、ごく一般的な“普通の”弁当だ。

塩鯖、ポテトサラダ、冷凍食品のシューマイ、白いご飯にごま塩。

普段ならなんの感慨もなく食べているはずなのに、今日は何故だかいつもより美味しい。

そんな事情を差し置いても、羨ましくなってしまうこともある。

「いやあでもあたしは、やすつぱくても良いから量が欲しいね」

そう話す利香の手元には、大きなバスケットがあった。

バスケットボールほどもあるその籠の中には、ぎっしりとサンドウィッチが詰まっている。よく身体を動かす利香はそれなりによく食べ、これを消費してしまうのだ。

「太らない……んだらうなあ」

「太らないんだよねえ、これが」

「羨ましいです、利香さん」

中学から友人関係が続けてきて、早四年。

千里も泉美も、利香が太りにくい体質であることは理解していた。

「私なんか、油断するとすぐお肉が付いちゃいます」

「胸にいつてるんだから良いじゃない」

「……確かに」

二の腕辺りをさすっていた泉美に、利香がツツコミを入れる。

千里もそれに便乗して、半目になって泉美を見ていた。

千里も利香も、あまり胸囲がある方ではないのだ。

「胸が大きいと、着物が似合わないんです」

「ぜーたくだと思うけどなあ」

「私からすれば、利香ちゃんも泉美ちゃんも贅沢だよ」

方や食べた物が身長へ行く利香、方や食べた物が胸に行く泉。全体にまんべんなく行き渡るくせに身長も胸囲も増えずただ体重計に乗るのが怖くなるだけな千里から見れば、二人とも“贅沢”なのだ。

「五限目ってなんだっけ？」

「現文。更宮先生眠くなるんだよなあ」

「あら、今度は利香さんが居眠りですか？」

食べ終わったお弁当をしまいながら、屋上を後にする。

隣に友達が居る、そんな“当たり前”の中で、千里は小さな違和感を覚えていた。

だが、それがなんであるか、思い出すことができない。

「なんだったっけなあ」

疑念は、意識の水泡の中へ。
僅かな違和感と共に封じ込められた。

十

眠くなる現文の授業を終えると、今日の日程は終わりを告げる。
ホームルームで連絡事項を聞き流し、終わったら教師の目が無くなると同時に大きな欠伸を一つ。現文で眠気を我慢したぶり返しが、ここに來ていた。

「ふわ……あ」

「あんだけ寝といてまだ眠いの？」

成長期なんか、もう来ないんだよ。

そう付け加える利香を睨み付けると、彼女は生温かい目で千里を見ていた。

事実今日は良く寝ていたような気がするので、しっかりと反論することができない。

「利香ちゃんと泉美ちゃんは、この後どうするの？」

「あたしはテニス部の助っ人」

「まだ、どこにも入ってないんだ」

「どれって、決まらないんだよねえ」

利香は、小学生の頃は陸上部に所属していて、中学では三年間剣道部。

どんなものでも身体を動かすのが好きな彼女は、いざ高校生になつてみると入りたい部活が決まらなかったようだ。

「泉美ちゃんは？」

「今日は花のお稽古です。その後は、琴も」

「泉美ちゃんの琴、綺麗だもんね」

「ふふ、ありがとうございます」

泉美は、とくに部活動などに所属したことはなかった。

家の都合で琴、花、茶、書、弓、薙刀など様々な習い事をして
いるため、決められたサイクルで活動する部活に所属することがで
きないのだ。

「三人で、好きなことをやる同好会でも作るうか？」

「あはは、いいねっ」

「面白そうですね」

利香の提案に、笑い合う。
好きなことを、好きな人たちと、好きに行う。
それがどれほど尊いことなのか、千里は“理解”していた。

酒大路の橋を渡り、先の交差点で手を振る。

泉美は三人が別れるここまではみんなで帰ると決めていて、その後直ぐに黒塗りのロールスルイスに乗り込んでいった。

利香も自宅へ向けて歩き出し、それに手を振ると千里は一人になった。

腕時計で時間を見てみると、まだ午後三時を回ったところで、帰宅後にプリンの一つでも食べる余裕がある。あまり遅いと、夕飯が食べられなくなるのだ。

「いつもと変わらない、はずなただけどなあ」

もう何週間も、家に帰っていなかったような。

そんな“現実味のない”思考に、千里は苦笑する。

駄菓子屋の角を曲がって、一直線。

青い屋根の二階建ての家に、千里は胸の鼓動を早める。

帰ってくるのは、当たり前のことなはずなのに。

門戸の鉄柵を開き、灰色の扉に手をかける。

鉄の棒のような取っ手を引くと、鍵は開いていたのか、ガチャンと音がして開け放たれた。

並んだ靴。

弟はまだ、帰ってきていない。

サッカー部のエースキーパーだから、まだ中学で部活動をしているのだろう。

黒いヒールは母親のもの、サンダルもそうだ。革靴は予備のものしか置いていないから、父親はまだ仕事中か。

「ただいま」

たった四文字の言葉を言うのに、声が震える。

たっぷり間を開けて言ったのに、蚊の泣くような声。

なんだかずっと……“帰りたい”と思っていたかのような、嬉しさ。

泣き出したくなるのを、我慢して、我慢して、我慢して。

「あら？千里？」

それでも、声が聞こえたら、もうダメだった。

ローファアを脱ぎ捨て、廊下を走る。

声と同時に止められた、掃除機の排気音。

リビングで首を傾げる、さらさらのストレートヘア。

鼻孔をくすぐるのは、合成洗剤の優しい香りで。

千里は首を傾げる母親の胸に、飛び込んだ。

「千里？」

優しく、受け止めてくれる。

千里から母の表情は伺えないが、困ったような顔をしているのである。事は、なんとなく想像が付いた。

「どうしたの？まさか、変質者でもいた？！」

「違う」

「ストーリーカー！？斬り裂きジャック！？」

「それも、違う」

否定していく千里を見て、母は戸惑う。

そして僅かに逡巡すると、やがて優しい表情で千里を抱き締めた。

「怖い夢でも見た？」

「うん」

「どんな夢？」

「覚えてない」

「そっか」

「うん」

背中をさすり、頭を撫でる。

その度に弱く震える娘を、慈しむように。

「私はここにいるからね」

「……うん」

「側にいなくても、ここにいますよ」

「うん　ありが……とう」

声も上げずに、千里はただ母のエプロンを涙で濡らす。

極まった感情を、全て流し出すように。

千里は静かに、泣き続けた。

夕食時には、人も集まり始める。

最初に帰ってきたのは弟の陸人で、次が父親の海人だった。

千里が母　千鶴に抱きついていたところ見た者はいないが、陸人は目を赤く腫らした千里を見て、首を傾げていた。

「千鶴、お代わり」

「はいはい、どうぞ」

海人のお椀に、千鶴が白いご飯を盛る。

キツネ色に上げられたエビフライと、タルタルソース。

千切りキャベツにプチトマトと、スライスされたゆで卵。

白いご飯が、よく進む。

「母ちゃん俺も！」

「お母さん、私もー」

千里と陸人もまた、お碗を差し出した。

食事の間、千里は終始にこにこと笑っていて、それで陸人が若干引いていてもお構いなしだ。それより今は、母の料理を白いご飯で味わうことの方が、大事なのだから。

「姉ちゃんさ、今日なんかあったの？」

「な、なんかって？」

突然掛けられた声に、千里は肩を小さく振るわせた。

それを見て、千鶴は嬉しそうに微笑んでいる。

「いや、普段そんなに食わねえーだろ？太るとかなんとか言ったださ
「あ」

「ご飯は既に、三杯目。」

比較的小さいお碗だからそれでも陸人ほどは食べていないのだが、普段なら食べたくとも自重する量を超えている。

「きよ、今日は食べるって決めたから！明日から頑張るから！」

「で、また横に伸びる、と」

「り、陸人っ！」

軽口をたたき合い、少しむくれてから食事を再開する。

言われて見れば食べ過ぎだ。自家製タルタルソースは確かに美味しいが、普段はこんなに食べない。心なしか、普段よりもお腹が減っていたようにも感じる。

「父ちゃん、リビングのテレビ使ってもいい？」

「ゲームか。……宿題は終わったんだろっな？」

「学校でやってきた」

「そうか……一時間だけだぞ」

「やりっ」

ガッツポーズをとって喜ぶ弟を、横目で見てため息を吐く。

陸人の部屋にも小型のテレビが置いてあるのだが、新しく勝ったゲームやなんかはリビングの大きいテレビでやりたがる。海人はテレビを見るよりも読書をしているのが好きなので、食後の時間にこれを反対することは少なかった。

「また新しいゲーム買ったの？」

「いや、借りた。新しく買う余裕なんかねえーよ。」

なんかアイツ、姉貴が買った方がいいが肌に合わなかったゲームくれたんだって」

月の小遣いは三千円。

中学生にしては良い方だが、新しいゲームなんか買ったら直ぐに蒸発してしまう。

だから陸人は、友人間でゲームの交換をすることが、多かった。

今回も、お下がりでもらったはいいが家族同様に肌に合わなかったゲームが、陸人の所へ回ってきたようだ。

「アイツって？」

部屋にゲームを取りに行こうとした陸人の背中へ、千里は何となくしに声をかけた。

陸人の友人関係に口を出す気は無いが、話には出てくるので名前を知っていることは多い。聞いても「ふーん」としか言えないのだが、それでも聞いてしまったのだ。

「ほら、隣の」

「お隣さん？」

言われて、顔を思い浮かべようとする。

黒い大きな犬を飼っている家があるが、そこには老夫婦がのんびりと暮らしているだけだ。小さい頃はよく駄菓子をもらっていて、今でもたまにぬか漬けをくれる。

もう片方の家は、思い出せない。

陸人にゲームを貸すような、同年代の友人。

そんな人間が果たしていたのか、どうしても引つ張り出せないでいた。

そうして悩む千里に……陸人は、何でもないことかのように、言葉が続ける。

「クリフ」だよ。姉貴の“アレナ”とは、姉ちゃんもたまに遊ぶじゃん」

「え？」

それだけ告げると、陸人は自分の部屋へ駆け上がる。

それを叱責する海人の声も、苦笑する千鶴の姿も、千里は上手く認識できずにいた。

「あ……そう、だ」

唐突に“思い出した”情報を、千里は引き出す。

旅行が趣味な体育教師、ファング。

カメラマンとして世界を回っている、ファングの弟、アストル。

実質的な保護者である二人がよく家を空けるため、隣の家には大

学生の姉弟が住んでいた。それが、アレナとクリフである。

クリフは十九歳と、陸人よりも五歳も年上だ。

それでも気が合うのか、よく一緒に楽しそうに話し込んでいる姿を見かけた。

今年で二十歳になったアレナは千里と仲が良く、やはり時折一緒に買い物へ行ったりする。その程度には、近所付き合いがあるのだ。

「おか、しいな。なんで忘れていたんだろう」

陸人の後輩、中学一年生の有名カップル　リリアとジャック。

陸人の同級生で友人　ライアンとジック。

千里の尊敬する先輩と先生　ララとフィオナ。

次々と思い浮かぶ名前に、千里は違和感を覚えていた。

ここに居て良い人物ではないような、そんな……。

「何考えてるんだろう。こんな考え、アレナたちに失礼だ」

そう零すと、千里は頭を振って誤魔化した。

これ以上掘り下げなくてもいいのだと、胸の奥で“誰か”が嘔うんざいくくのだ。

抗えないほどに強く、そしてそれでいて、優しく。

「はぁ……どうしたんだろう、今日の私」

昨日まではそんなことは無かったのに、と独りごちる。

偶には弟がゲームをするところを、隣で見てもよう。

そんな風に考えながらリビングのソファに座ると、陸人がゲームのハードとディスクを持って駆け下りてきた。

「あれ？なに姉ちゃん、見るの？」

「うん」

「ふーん」

自分でゲームをやったりはしないものの、陸人のゲームを見ることはよくあった。

昨今のゲームはグラフィックが綺麗でかつフルボイスなので映画感覚で見れたりもする。そのため、傍から眺めているだけでも充分に楽しめるのである。

ハードにスイッチを入れると、陸人は真っ暗なロード画面を眺めて肩を揺らしていた。

そんな陸人を、千里は何と無しに眺めてみる。

「陸人、大きくなったね」

「はあ？毎日見てんじゃん」

「毎日見てたから、わかんなかった」

「じゃあなんで今、わかつたんだよ」

なんでだろう、と考える。

ずっと会っていなくて、久しぶりに会えばそんな気もするだろう。でも今日の朝も、昨日も、その前も、ずっと顔を合わせているのに。

「私が男装すれば、陸人に似るのかな？」

「気持ち悪いこと言うなよ。俺が女顔だったか？」

「そういう意味じゃないよお」

「まったく、肩幅が違いすぎて似る訳無いじゃん」

言われて見れば、そうだ。

顔だけぱつと見ればあるいは似ていると言われるかもしれないが、肩幅を見ればすぐに女であると解ってしまうだろう。

「なんだろう、夢で男装でもしたのかな？」

「女装した俺でも見たんじゃないかねえのか？うえ」

しきりに首を傾げる千里を一瞥すると、陸人は喉を押さえて吐くマネをする。

そしてそれきり興味を無くして、スタート画面に目を向けた。

七色に輝くテロップと、美しいCGで彩られたオープニング。

陸人は直ぐにスイッチを押しはせず、ただじつと流れるプロローグを見ていた。

「冒険ファンタジー、かあ」

魔法は、己の内側から発現させるもの。

術を制御するための冷静な頭と、魔力を燃え上がらせる熱い心。それらが揃った時魔法は発現し、故に人々は彼らを“情熱の学者”と呼ぶ……。

人気の声優が演じる、劇中の魔法使い。

何故だか千里は、その言葉を正確に理解できているような、そんな奇妙な違和感を覚えていた。

この“世界”に、魔法なんかはないはずなのに。

弟と過ごす、夕食後の一時。

普段と何一つ変わらないはずの、日常のワンシーン。

千里はソファアの上で膝を抱えると、胸に燦る違和感の火種に、

そつとガラスの瓶を被せた
。

九章 第五話 夢幻の箱庭 後編

もう思い出すこともできないほど昔のことだ。

彼の出す“試練”とは、心の内側へ本質を訊ねる問答によって行われていた。

少しでも内面を晒しやすくなる霧を張り、望みを得るに相応しい者であるか確かめる。

そうして問答を終え認められたのならば、己の力で望んだ夢を見せる。

夢の中に己の限界を映し出し、それを超えようと望む者。

言葉を交わすことのできない存在と、一時の戯れを望む者。

二度と見ることでできない光景を、再び見たいと望む者。

大切な人と死に別れ、最後に言葉を交わしたいと望む者。

彼らはいずれも試練を乗り越え、そして後世に言い伝えた。

真摯な思いで求めれば、夢の中で夢を得られる……と。

叶う者、叶わぬ者。

様々な者が訪れる内に、口伝は歪められ始めた。

試練を超えれば夢が叶うと、初めの内は省略されたものになる。

そうして、“精霊の王の持つ宝を得れば望みが叶う”と歪められるまで、そう時間はかからなかった。

欲望に目が眩んだ人間は、何時しか王の試練を受けなくなった。

霧を警戒し、真摯な答えを出そうとしなくなり、問答に意味を求めなくなった。

島の住人を脅し、人質を取って陥れ、不意を打って首を狙うようになった。

そうして王は、失望した。

向き合い続けた人間達に裏切られ、王は人を信じられなくなった。内面を映し出す霧で相對した人間を呑み込み、欲望の果てに望んだ夢に捕らえる。

人には絶望に足掻く力はあれど、希望を砕く力はない。

囚われた人間は抜け出すことを望めず、覚めることのない眠りにつく。

やがてエルリスに導かれようとも、その身体は眠ったまま。

そうして眠りについた人間達は、今も深い霧の奥で横たわっている。

王は人を信じない。

王は人の希望を諦めている。

王を救うことができるとしたら、それは 。

「見せてみる、イルリスの使者よ」

きっと、もう一度王に、“人間の輝きを見せる”ことだけなのかもしれない。

目覚まし時計の音で、目を開ける。

夜更かしすることなく就寝したのが良かったのか、爽やかな目覚めだ。

千里は身を起こすと目覚まし時計を止めて、ぐっつと背筋を伸ばした。

「ふう、今日は……休日、か」

晴天と太陽。

澄んだ空気。

冷たさの残る、四月上旬の風。

その全てを、千里は笑顔で受け入れた。

部屋を出ると、まずは洗面所。

顔を洗って髪を梳かし、歯を磨く。

そうしたら次はリビングに移動して、食卓に着いた。

「おはよう、休みなのに早いわね」

「おはよう。うん、昨日は早めに寝たからね」

「そう、それじゃあ早起きした千里に、ちょっと手伝ってもらおうかしら」

千鶴の提案に笑顔で頷くと、千里は食器を出してくる。

既に出上がってはいるので、並べるだけだが、調理を手伝いたいならもっと早く起きる必要があるので仕方がない。

豆腐と揚げとわかめの味噌汁。

ふんわりと炊かれた白いご飯。

焦げ目の付いた銀鮭の塩焼き。

砂糖で味付けられた、だし巻き卵。

醤油で薄く味付けされたおひたし。

瓶に詰められた、お手製の梅干し。

いつもより少しだけ手間のかかった朝食に、千里は首を傾げる。

疑問に思っただけ顔を上げて、そこにあるのは千鶴の優しい笑顔だけだった。

何を聞いても、答えてくれそうにない。そんな、笑みだ。

「おはよー……っつて、姉ちゃん。今日はやけに早いじゃん」

「そうかな？」

「いつもなら、夕方まで寝てる」

「そんなことないよっ」

栗色の髪をぼさぼさにした陸人と、軽口をたたき合う。

そうしていると海人が降りてきたので、四人揃っての朝食となった。

普段、昼や夜ならまだしも、朝食の時間を全員で合わせるのはいのちが難しい。

「いただきます」

「姉ちゃん、その仕草、なに？お祈り？」

「へ？」

胸の前に握り拳を当てている自分に、千里は首を傾げた。

この後きちんと手“も”合わせるが、どうしてもこんな手順を挟んだのか思い出せない。

「なんでも、ない、と思う」

「呆けたか？」

「失礼なことを言わないっ！」

疑問も直ぐに忘れて、声を上げる。

それから、今度こそ朝食へ箸を伸ばした。

少し気に掛かることがあったとしても、食事という魅力に抗うことなど、できはしないのであった。

十

朝食を食べ終わり、食器洗いを手伝った後。

千里は自室に戻ると、勉強机の上に放り投げてあった携帯電話を手を取った。

「今日はなんか予定、あつたかな」

携帯電話の上ボタンは、スケジュール帳へのショートカットキーだ。

一回押すと画面が変わり、可愛らしい黒猫が背景に浮かぶカレンダーが表示された。

「今日は……午後から病院？誰か入院でもしてたかな？」

午後四時から、見舞い。

その文章に首を傾げつつ、千里は午前中の予定を立てる。ひとまず、充実した午前中の過ごし方を組み立てた方が良さだろう。

「まずは……そうだ、アレナに本、借りてたんだ」

五つも年上なのに、呼び捨てにしている。

これはアレナ自身が望んだことで、幼い頃の自分は疑問にも思わなかった。

そのことを思い出して、千里は小さく苦笑する。

無地のシャツの上から、鳥のロゴが付いたジップアップを着る。

下は白黒の上着と合うように、黒いプリーツスカートを穿いた。

靴下は黒のニーソックスにして、全体的にモノクロカラーの私服を選ぶ。

何故だが、地味な色合いでないと落ち着かないのだ。

“前”は特別、そんなこだわりなんか持っていなかったはずなのに。

棚から取り出したのは、冒険活劇のライトノベル。

恋愛ものや日常ものの方が好きな千里では、まず選ばないレールだ。

玄関で青いラインの運動靴を履き、扉に手をかける。

そして、何故だが尊い言葉を発するかのようになり、少しだけ息を吸った。

「行ってきますっ!」

帰ってこられるから、行ってくると言う。

「行ってらっしゃい」

帰ってきて欲しいから、行ってらっしゃいと声をかける。

リビングの奥から響いた声に、千里は一度満足げに頷いた。
玄関から外に出て、数歩進んで鉄柵を抜ける。

直ぐに左隣に顔を向けると、見覚えの“ない”見覚えの“ある”
家を、矯めつ眇めつ眺めた。

「アラストル家、か」

小さく呟き、インターホンを鳴らす。

千里の家よりも少しだけ背の高い、半地下付きの屋上付き二階建て。

見上げれば直ぐに見つけることができる、紺色のサンドバッグが特徴的だ。

「はいはい……って、千里じゃない」

すんなりと呼ばれた名前。

どうしてかそれに違和感を覚えるも、すぐに振り払う。

「アレナ！小説、返しに来たよ」

「あー、あー、はいはい。もう読み終わったんだ？」

「うん。面白かった！」

千里が笑顔で本を差し出すと、玄関から出て来た水色の髪の女性

アレナは、それを受け取った。

「で、どうだった？どこら辺が一番良かった？」

「えーと……」

読んだ記憶が、見つからない。

けれど確かに読んだのだと“認識”したとたん、頭にシーンが思い浮かんだ。

「弓使いの男の子が、ヒロインを救うために吸血鬼に立ち向かうところ、かな」

「あー、いいよねえ。あんな風に救われたら幸せだわ」

物語の結末は、何故だか思い出すことができなかった。

だが、弓使いの男の子と素性不明のヒロインとの旅路だけは、不思議と鮮明に思い浮かべることができた。まるで、見てきたかのよう。

「……つと、中、入る？お茶くらい出すけど」

「あー……まだちょっと、やることがあるから」

「そう？それじゃあ、また“明日”」

アレナの言葉に、千里は咄嗟に返すことができなかった。

それでもその逡巡を顔に出さないように、微笑む。

「うん、“またね”」

手を振って、別れる。

どんどんと膨らんでいく違和感。

それをもう、見逃すことができなかった。

「みんな、なに、会え、ば」

なにか解るかもしれない。

千里はそう、焦燥を浮かべて走り出す。

コンクリートで舗装された地面。

土と石だらけの地面より、走りやすい。

灰色の煙を吐き出しながら走る車。

独特の獣臭さや動物の鳴き声は聞こえない。

スーツやジャージ、ブランド服に身を包んだ人たち。

その腰に剣や杖は見あたらず、ネコ耳や犬耳もない。

「当たり前風景な、はずなのに」

足を止めて、荒くなった息を整える。

そのままふらふらと歩き出すも、違和感は拭えない。

拭ってしまえと囁く声と、拭うべきではないと囁く声。

相反する二つの音に、千里は額を抑えて灰色の塀に寄りかかった。

「……ク、ハハッ、こんなところで出会えるとは、私の運もつなぎ登りなようだ」

落ち着こうとしていた時、響いてきた声に目を剥く。

すぐに身体を起こして左側へ目を向けると、そこにはホストのよ
うな白スーツに身を包んだ、銀の長髪の男性が佇んでいた。

手を広げて待ち受けるその姿は、実に“らしい”のだが、それ故
に千里は眉をしかめる。

「エクス……先輩」

「呼び捨てで構わないと行っただろっ？千里」

気持ちが悪いほど優雅な歩みで、エクスはにじり寄ってくる。本性を知らなければうつとりともできようものだが、ストーカーじみたこの男のしつこさを知っている千里としては、今誰よりも近づきたくない男だった。

「さあ、車の用意はできている。ダークに用意させた」

「ダークって、ネコの？」

「そう、ネコ目のダークだ」

ダークはどうやらネコ目らしい。

そういわれてみれば、千里の脳裏に燕尾服を着込んだネコ目の男が思い浮かんだ。

当然髪は黒である。腹が白いかどうかは知らないが。

「さあ！私たちの花園へ行こうではないか！」

「やつ、ちよっと、離してっ！」

強引に手を掴まれて、千里は身を擦る。

けれど成人男性に抗えるはずもなく、千里は僅かに引き摺られていた。

前にもこんなことがあった気がするのだが、その時はどうやって振り払ったのか。

「離しなさいってば！！」

「嫌よ嫌よも好きの内だと言っことだな！」

「なんで変なところでポジティブなのっ？！」

周囲に人気はなく、危機感だけが募る。

だがどうしても、彼から逃れる術が思い出せない。
そうしている内に、千里は止めてある車に近づき始めていた。

「っ誰か！やだ、助けて　　っ！」

「人の“恋人”に何をしているんだい？エクス」

後ろから、千里を包み込む黒い影。

伸ばされた手はエクスの手をあっさりとふりほどき、千里を己の胸に抱え込んだ。

その大きな胸板を、千里はよく知っている。

「ナーリヤ？」

「大丈夫？千里」

白いカッターシャツに、黒いジャケット。

それから濃青色のジーンズを穿いた、背の高い少年。

「ちっ、君か。いい加減“先輩”とつけたらどうだね？」

「これは失礼、ストーカー先輩。通報でもしましょうか？」

火花を散らして、二人は睨み合う。

鋭い目で睨むエクスに対して、冷徹な瞳で睨み返す少年。

無限に続くかとも思われたその時間も、直ぐに終わりを告げた。

「ちっ……今日はここで引いてやる」

エクスの胸ポケットから鳴りだした、クラシック。

銀を基調とした黄金の携帯電話を開き、エクスはそう舌打ちをした。
た。

どうやら、誰かに喚び出されたようだ。

「ふう……大丈夫だった？千里」

優しい笑顔。

温かい大きな手。

千里は月明かりのような少年に、太陽のような笑みを返す。

「うん、ありがとうっ！　っ……あれ？」
「無事で良かったよ」

何でもないように流されて、そうして千里は首を捻る。
名前は思い浮かんでいるし、頭の中では呼べている。
だがその言葉が、声として出てこない。

「えっと、？」
「えっと、“ナリーヤ”？」

思い浮かべたとおりとは、言えない。
そこだけノイズがかかっているように、世界に響かない。

「なに？千里」

なのに彼　ナリーヤには、それがきちんと認識されていた。
まるで、千里の耳だけが、その言葉を受け付けていないかのよう
に。

「急いでたみたいだけど……何かあった？」
「え？……あ、う、ううん。なんでも、ない」

違和感を、覚えた。

そうして走り回っていたなんてこと、言えなくて。

千里はただ、言葉を途切れさせて首を振ることしかできなかった。

「せっかく会えたんだし、暇なら一緒にお茶でもどう？」

「あ……うん。ありがとう」

差し出してくれたナーリヤの手を取り、ついていく。

なんにしても、まずはナーリヤと共に行動して 彼のことを
“思い出す” 必要があるのだから。

ナーリヤ＝ロウアンズ。

私立酒大路立館大学法学部の一年生。

アーチェリー部に所属する期待のルーキーで、祖父はアーチェリーのオリンピック経験者。メダルは、金が二回銀が一回という好戦績だ。

千里との出逢いは、動物園から逃げ出した虎を、ナーリヤが練習用の弓矢で追い払った時のことだった。助けられてから千里とナーリヤは頻繁に連絡を取り合うようになり、出会って二週間で恋仲になったのだ。

コーヒーの美味しいカフェ。

窓辺に座りながら雑談を交わしていく内に、千里は彼との思い出を“思い出して”いた。

「今日はこの後、予定あるの？」

「うんと……四時から、お見舞い」

「ああ、そっか。それじゃあ　それまで、デートしよう」

ナーリヤの提案に、千里は頬を赤らめる。

恋人同士が遊びに行けば、それはデートなのだろう。

しかし、どうしてだか彼にそう言われるのは慣れておらず、千里は視線を逸らしたまま頷くことしかできなかった。

「う、うん……うんっ」

ナーリヤは千里の返事に頷くと、店員を呼んで会計を済ませます。

千里が財布を取り出そうとした頃には、既に奢られて店を出ていた。

酒大路高校はアルバイトが禁止されていて、大学生であるナーリ

ヤはアルバイトをすることが出来る。たったそれだけの違いで、千里は何時と言いくるめられてしまうのだ。

「まずは昼ご飯かな？時間的に」

「ねえ、それなら駅前のパスタ食べに行こうよ」

「いいね。あそこのカルボナーラは美味しいから」

酒大路の隣町、綾小路。

友達の名字でもあるその街には、所謂“美味しいもの”が揃っている。

ここからだと言を回ってしまつくらい距離があるが、それでも気分はパスタに傾いていた。

「こつち」

「え？こつちつて駅じゃ……」

ナーリヤに手を引かれて、歩く。

道を外れて真っ直ぐと歩いた先。

そこに駐められていた……真っ黒な大型バイク。

「はい」

「わっ……ヘルメット」

ぼんやりと手渡されたヘルメットを被り、促されるままにナーリヤの後ろで横座りになる。二人乗りもできる、大きなバイクだった。

「、免許持ってたんだね」

「あれ？言わなかったっけ？」

……まあ、バイク買ってから乗ってきたこと無かったしね」

エンジンがかかり、小刻みに揺れ始める。
千里は僅かに逡巡するも、意を決してナーリヤの背中にしがみついた。

「しっかり、捕まっついて」
「うん、りょーかい。」

正面から伝わる温かさ。

頼りがいのある大きな背中。

エンジンを暖められたバイクは、アクセルと共に軽快に走り出す。

自転車とはまた違った浮遊感と、ヘルメット越しに当たる風。

高速で流れていく景色に、千里は小さく息を吐いた。

これなら、隣町までそう時間がかかったりしないだろう。

千里はそう、そっと苦笑を零すのであった。

カルボナーラに舌鼓を打ち、話題の映画を見て、ウィンドシヨツピング。

三時になったら喫茶店でケーキを食べて、近くの公園でベンチに座りながら笑い合う。

そうしている内に、約束の時間が迫っていた。

「そろそろ、病院に行かないと……」

「送るよ。早く着いた方が、喜ぶだろうからね」

「あ……うん。ありがとう、」

再びバイクの後ろに乗って、走り出す。

どんな人が入院していたのか、未だ思い出すことができない。

でも 何故だかひどく、焦燥に駆られる。

風を切り、軽快に進み、やがて酒大路総合病院に到着する。

駐車場にバイクを駐めたナーリヤはそこで待つと言い、千里と別れた。

「確か……そう、五階の」

近隣で一番大きな病院というだけあって、一階には喫茶店や本屋がある。

病院自体も本棟、東棟、南棟と三つに分かれていて、所有する敷地も膨大だ。

この本棟の五階……そこに、千里の望む人が居る。

「出会ったのは……近所の公園の、そう、花畑の側」

ズキリと、頭が痛む。

軋み、悲鳴を上げて、啼く。

「それから、ご両親と知り合って」

エレベーターに乗ると、静かな駆動音と共に五階に到着した。

その先から伸びる真っ白な廊下と真っ白な蛍光灯の光に、当てられる。

「でも、“彼女”……そう、彼女は事故で」

不慮事故だった。

といっても、大げさなものでは無い。

曲がってきた車の不注意で当てられて、大事を見て緊急入院。

診断してみたら大腿骨に小さく罫が入っていたので、良くなるまでは入院ということになった。当然 “目が見えなくなったり記憶を失ったり” は、していない。

コン、コンコン

「入るよー………“ルフィル”」

「あつ、千里！」

笑顔で自分を“見る” 淡い金の髪の少女。

千里が学外で知り合った 友達。

「元気、そうだね」

「元気だよ。むしろ、退屈なくらいに」

「良かったあ」

ほっと息を吐いて、近くの椅子に座る。

ルフィルは酒大路で勉強をするために海外からやってきた、留学生だ。

彼女の両親　オリヴィアとアルトレイ　は海外で大学教授をしているのだが、この事故をきっかけに一時帰国。しばらくは一緒に暮らすということになり、千里は見舞いに来ている彼らと鉢合わせして知り合った。

「大きさだよ」

「そう、かな？」

そう苦笑するルフィルに、千里は苦笑いを返す。
涙を流さないように、ぐっと堪えながら。

「千里………なにか、悲しいことでもあったの？」

「え？」

「泣き出しそうな、顔してる」

ルフィルの手が、千里の頬に触れる。

それだけで、たったそれだけで、胸の奥で疼いていた感情が、決壊した。

トン

「あ」

ルフィルの手を振り払い、彼女の胸に抱きつく。
決して声は漏らさぬように、ただただ涙を流してしがみついていた。

「怖い、夢を、み、たの」

「夢？」

「うん、すごく、怖い、夢……っ」

「そっか……大丈夫。私はここにいるよ」

ルフィルはそういうと、千里の胸を指した。

そうやってあの日　千里とルフィルは、別れた。

記憶が、蘇ってくる。

神聖国家ノーズファンで、緒方一刀の凶刃に倒れた友達。
光と記憶を失い、それでもなお心を交わした、ともだち。

「あ、あああ、あああああっ」

ついに声を上げて泣き出してしまった千里の背中を、ルフィルは優しくさする。

ここにいる、大丈夫、と声をかけ続けながら　。

泣き止んだ後、千里はルフィルとしばらく談笑して、オリヴィアたちと入れ替わり病室を出た。オリヴィアとアルトレイを迎えるルフィルの表情は本当に嬉しそうで、千里はその表情にルフィル同様の喜びと、一縷のもの悲しさを覚えていた。

ふらりと廊下を歩き、エレベーターに乗って、それから直ぐには戻らず中庭に出る。

杖を突くお爺さん、車椅子の女の子、点滴をつけた中年男性。意識して彼らを見ると、その姿が霧のように霞んだ。

「ここは、違う」

幸せだ。

誰も彼もが笑い合う、幸福に満ちた世界。

一度は望んだ、優しい世界。

「ここには全部ある。でもここには、何も無い」

胸の前で手を握り、小さく唱える。

“光より顕れる者”と。

「確かにここにいれば幸せだけど、でもそれは、私が幸せなだけなんだ」

他に幸せになれる人が居ない。

全て自分の中で演じている偶像だというのなら、それは自己満足に過ぎない。

千里は手の中で輝く光の剣を、かざした。

真の意味で、他者とわかり合える幸福など存在しない。

周囲から人が完全にいなくなり、声が届く。

「ここはやはり、彼が……精霊王が、生み出した世界だったのであろう。」

「本当にわかり合えるだなんて、確かに夢物語かもしれない」

そう、そうだ。そんなものは夢物語なのだ。

響く声を、千里は噛みしめるように瞑目して受け止める。

そして、強い意志に籠もった瞳で、空を見上げた。

「でも、私は、わかり合うことを諦めたくない。」

諦めて、望まず、捨ててしまったら　もう、何も得られなくなってしまうから」

だから、と千里は剣を掲げる。

虚空を斬り、虚無を裂き、絶望を断つかのように。

大きくそれを、振り下ろした。

「だから私は、何があっても 諦めたりはしない！」

しんと、静まりかえる。

精霊王は声を発さない、ただじつと、千里を“観て”いた。
夢の霧の、その奥の奥から。

だがおまえも、全ての感情を切り捨てて、純粹な憎悪に堕ちた。
他者の命を絶つことは、それを望むことは。
何よりも愚かな、意志の断絶だ。

霧が、再び形を作る。

大柄な体躯、黒金の鎧、漆黒の大剣。

千里が己の憎しみをぶつけた、異端者。

「緒方……一刀っ！」

一刀が、五体満足で不敵に笑っていた。

夢の世界とはいえ、それはおまえの内面に忠実に作られている。
では、おまえの内面にリンクしたソレを放逐すると、どうなる
と思う？

夢の世界で、友達を失う。

彼を放逐すれば、また 。

「つさせない！」

「フンッ……また貴様か。どけッ！」

黄金の粒子を吹き上げて、瞬時に光の翼を造る。

あの時と、何一つ変わらない相對。
それを王は、ただ眺める。

「ここがどこかは知らんが、やることは一つだ。

巫女も騎士も侍女も全て血に染め上げて、世界を塗り替えるツ！
！」

「そんなこと……させるもんかつ！！」

覚醒した千里の力は、一刀を確実に追い詰める。

こうしていけば直ぐに、光の力は夢の世界で重みを持ち、彼を殺すだろう。

それで、全てが終わる。

友を斬られたその憎悪、一人の力で捨て去れるか？

否、所詮おまえも、憎悪のままにソレを殺すだろう。

人間は、目先の欲望を捨て去ることが出来るほどに、己を律することはできない。

千里の届かぬよう、調整された言葉。

彼の眼下では、隙を見てルフィルの病室を見上げる一刀に、強い焦燥を覚える千里の姿があった。

「クハハハッ！……あの娘は難なく刃が通ったが、貴様はどうだ？」

「っあなたは、どこまでっ」

「痛みに泣きはらす姿を見たのだろう？」

さっさとトドメをさしてやれば良かっただろうに、なア？」

剣を弾き、逸らし、隙を造らせる。

瞬時に血が沸騰し強い怒りと憎悪に囚われた千里は、それを大きく振り上げた。

「あなただけは、ここで――！」

『暗い気持ちに、囚われないで』

脳裏に声が響き、千里に躊躇いを生む。

けれど勢いのついた剣は、止まらない。

このまま切り捨ててしまったら 自身の言葉は、重みを無くす。

「っダメ！」

ヒュンッ

一刀を斬り裂く、その瞬間だった。

風を切つて飛来した“何か”が、千里を通り抜けて一刀に当たる。

その一撃は彼の肩に突き立ち、大きく身体を仰け反らした。

「ぐあっ」

その反動で、剣の軌道がずれる。

剣の脅威に下がろうとしていた一刀は、勢いが付きすぎて尻餅をついた。

このままでは隙だらけの千里を切れないと、彼は大きく後方に飛ぶ。

ここまでを全て予測して放たれた 三手を読む、矢の一撃。

バカなッ！夢の“登場人物”は全て、止めておいたはずッ！

王の狼狽した声を、千里は聞いていなかった。

一刀の肩に刺さった矢は、アーチェリーで用いるそれではない。

外で“彼”が用いる、黒帝から削り出された特製の黒い矢だった

のだから。

「ありがとう」

そう呟き、再び一刀を見る。

もうその瞳に、憎悪や憤怒の色はない。

どんなに離れていても、繋がる心があると、解ったから。

もう、乱されたりは……しない。

「チイツ……とんだ邪魔が入ったが、続きだ。

さあその憎悪と憤怒の全てを、俺にぶつけて見せろ！」

「ぶつけないよ」

「なに？」

一刀に向かって剣を掲げ、そしてそれを消した。

身体を纏う光の粒子すらも、消し去って。

「恨んでなんかやらない。憎んでなんかやらない。

そんなものを原動力に、戦ってなんかやるもんか」

淡々と、千里は告げる。

千里を後悔から振り切らせて、前を見せた約束。

大切な人たちとの絆が、千里の心を繋ぎ止めていた。

「私は、切り拓くために戦うだけ」

瞑目していた目を開き、見据えるは己の壁。

乗り越えて無くてはならない、重い壁だ。

「だから私は……未来を掴み取るために、憎悪あなたを超える!!」
「ハ…ハハツ、ハ……嘗めるなよ、小娘エッツ!!」

動きの取れる左腕だけで、剣を振り上げる。

千里はそれに対して再び光の翼を展開させると、大きく後ろに下がった。

そして、虚空に向かって両手を伸ばす。

「【望み、求め、訴えよ】」

まず左手に、マガジンが生まれる。

何もないところから、出現するように。

「【ブレット・ロード】」

そして黄金の光が集中し、周囲から霧が集まり始めた。

世界を構成する霧は、周囲の風景を切り取ってマガジンに吸収される。

「【マガジン・セット】」

そうして右手に出現した、柄だけの剣。

煌億剣の鏢に、千里はマガジンを装填する。

「【イグニッション】」

白い光だった。

柄から二本の刃が伸び、音叉のような剣を生み出す。

澄んだ霧を固めたような、純白の剣真は 実体無きものを斬ることに特化した、剣。

「 幻朧剣一 ファラ「イグゼ」 」

光の翼と、純白の剣。

黄金を纏って滑空する 神の、使者。

「 眠りなさい 」

すれ違い様に、一閃。

呆然と千里を見ていた一刀は、霧に還って消え去った。
呆気なく、そして潔く。

未来を、掴む？そのために、戦う？

「 そう、私は私の…… 私たちの未来を、幸福を掴む 」

世界を救う。

ただ己の故郷に帰りたくないと願っていた千里に課せられた、重荷。
だがそれは、ただ苦しいだけの荷物では、無かった。

「 きつとダメなんだ。私は私だけの幸福を願っても、幸せになれない 」

全部捨てて、ただ故郷に帰っても、幸せになんかなれない。
本当の幸福を望むのなら、他者の幸福も願う必要がある。

「 私は、みんなが笑っているのが好きだから。 」

きつと、私だけが望みを通して、幸福は得られない 」

霞んでいく世界。

だんだんと形を崩し始めた、故郷の姿。

千里の瞳は、もうそれらを映してはいない。

ただ、未来まゝえを見ていた。

ああ、それが。

その輝きが、人間か。

そうだな、確かに……そうであったな。

霧が収束し、千里の目の間に姿を見せる。

翡翠の髪に黄金の瞳の、幼い少年。

身に纏った純白の衣装は、どこかオリエンタルな魅力があった。

「私は王。精霊王“レメレ”」

王　レメレは、諦観を捨てた瞳で、千里を見上げる。

老成し霞んだはずの瞳には、少年のような輝きが僅かに宿っていた。

それは長らく忘れていた……希望の輝きだった。

「試練に則り、最後に一時の夢を見せよう」

「レメレ……さま」

千里は、差し出された耳飾りを、受け取る。

流星が連なつたような耳飾りで、そこには星の光が凝縮されていた。

これが、トゥーユヨークの秘宝　“恒星の耳飾り”であった。

千里がそれを自分の左耳に近づけると、穴を開けても居ないのに、吸い込まれるように張り付いた。まるで、そうであるのが正しいと言わんばかりに。

「まだ、おまえのような人間が、いるのだな」

「はい。きつともっと沢山、前を向く人たちが居ます」

「そう、か。フフ……どうやらしばし、忘れていたようだ」

レメレが目で促すと、千里は振り向いて歩き出す。

その後ろ姿を、彼はじっと見つめていた。

「私一人で幸福の殻に蹲る必要はない、か」

島の住人はみな、王を好いている。

その好意から恐れて目を逸らし続けてきたレメレは、そんな自身に自嘲した。

「今からでも、協力を上げばいい。心地の良い未来を、掴むために」

そうして浮かべた笑顔は、あどけない少年のものだった。

老成し諦念を呑み込んだような表情はそこになく、ただ希望の光が宿っている。

まだ、諦めるには早いと、数えるほどもバカらしくなるほど年下の少女に教えられたのだ。これで耳を塞ぐようでは、余りに情けない。

「まだ私は、望めるのだろうか？」

いや……そうだ。まだ、望んでみせよう

レメレの声が、虚空に解ける。

彼は最後に地面に突き立った“矢”を “絆”を見て、薄く微笑んだ。

十

霧の中を歩くと、それはあつた。

青い屋根の二階建て。住み慣れた、家。

鉄柵を開け、扉を潜り、玄関に靴を揃える。

窓から見える風景は全て、深い霧に包まれていた。

それでも、日常の音が、消えたりはしない。

「ただいま」

小さくそうつ、呟く。

「おかえり」

リビングから顔を覗かせた、千鶴の笑顔。
それに千里は、心からの笑みを返す。

「お父さん、いる？」

「書斎で休んでいるわよ」

「ありがとう」

掃除機をかける千鶴の姿を眺めて、そして目を離す。

二階に登り、向かい合った自分の部屋と陸人の部屋を通り過ぎると、両親の寝室と書斎が、やはり向き合っていた。

コンコン、コン

「お父さん、今、大丈夫？」

「ああ、入りなさい」

「うん」

寡黙な父の声は、いつも温かさに満ちていた。

口数はあまり多くないが、それでも込められた想いは強い。

千里はそんな、静かで優しい父が、好きだった。

「ここに来るとは、珍しいな」

「うん。ダメだった？」

「好きなだけ、居ると良い」

「うん……ありがとう」

書斎の奥、大きな回転椅子。

机の前で本を読む、海人の姿。

なにか悩みがあると、千里は決まってここにいた。

「お父さん、もし私がいなくなったら、どうする？」

「謎かけか？」

「ううん。なんとなく、かな」

海人は千里を一瞥すると、再び本に目を落とす。

そして、そのまま、口を開いた。

「探す。見つかるまで、ずっと」

「それじゃあ、疲れちゃうよ？」

「千里がいないのだろう？なら、それは疲れの内に入らん」

千里を捜すために、疲れたりはしない。

絶対に必要なことだから、休まないで捜せるように。

「帰ってこないかも、って思わないの？」

「帰ってくる。千里が帰ってこようとする限り、可能性は零ではない」

「帰ってこようって、思わないかもしれないよ？」

「帰ってくるさ。私と千鶴の、娘だからな」

静かに言い切った海人に、千里は一筋の涙をこぼす。

そしてそれが彼に気がつかれないうちに、背を向けた。

「お父さん」

「なんだ」

「変なこと聞いて、ごめん」

「構わん」

淡々としている。

けれど、自分を気に掛けているのが解る声だ。

「いってきます、お父さん」

「ああ、行ってらっしゃい、千里」

扉を開ける。

するとそこはもう、深い霧に包まれていた。

恒星の耳飾りが強く輝き、道の先を照らすと、千里はそこへ歩いて行く。

その頃には服装も、私服から見慣れた鎧に戻っていた。

「絶対に帰るから、待っててね。お父さん、お母さん、陸人、みんな」

もう振り向いたりはず、千里は涙を拭い去る。

前を向こう。

みんなが手を取り合って、笑える世界を夢見て。

前を向こう。

みんなと心からの笑顔で別られる、その日を望んで。

前を向こう。

みんなと笑顔で再会し、充ち満ちた幸福を宿した未来を、得るために。

千里はそう、光の中へ飛び込む。

その先に待つ、優しいひとの下へ。

九章 第五話 夢幻の箱庭 後編（後書き）

前編と一緒に投稿するので、後書きはこちらに。
今回で第九章が終了。

今回は、第九章のエピローグ込みで第十章のプロローグとなります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
第十章も、どうぞよろしく願います。

十章 第一話 花妖精の贈り物

呻る風、荒れ狂う海、空に浮かぶ雷雲。

ぼろぼろのマストにドクロマークを描いた幽霊船が、大きな波を身に受けてもなお揺るがずに、危うげ無く航海していた。

「フハハハハッ！ついに足取りを掴んだぞッ！ダーク！」

「主、^{あまじ}うっかり沈めてしまわぬようお気をつけくださいニヤ」
「解っている。そのような醜態はさらさん！」

その船首の先に、一人の男性と一匹の猫妖精が立っていた。

猫妖精は手から離れている傘を特殊な力で操り、男性に被せている。

だが猫用のそれは大きさがならず、男性の顔しか守れていない。

耳にかかる程度の、美しい銀髪。

深淵から溢れ出てきたような、血色の双眸。

不敵に歪められた、背筋を粟立たせるほど端正な顔立ち。

銀月の吸血王と呼ばれた彼　　エクスは今、腕を組んで笑っていた。
た。

「フハハハハッ！天運は、私にあり！」

「太陽を見たら灰になってしまいますニヤ」

「天運とは太陽のことなのか?!ぬう」

高笑いをしながら首を傾げるエク스에、ダークは小さく息を吐く。
己の主、銀月の吸血王は……変わった。

あの日、青白く輝く浄化の槍をその身に受けてから、エクスは妙

に丸くなっていた。

「丸いだけニヤら良かったのですがニヤ……」

「太ったか？」

「太ってないですニヤ」

微妙にずれて修正の効きそうにない二人の、締まらない旅路。その行く末は確実に、千里達へ牙を剥こうとしていた。

「さあ、光は直ぐそこだッ!!」

「だから太陽はマズイですニヤ」

「美味しいと思ったことなど無い!!」

だがどうにも、見ていて何とも気の抜ける二人でもあった。

瞼の裏に差す強い光で、目が覚める。

見上げればどこまでも続く空が広がっていて、陽光が翡翠の木々を浮き彫りにしていた。

「ここは……」

「……森の奥、翡翠の玉座だ」

足下から聞こえてきた声に、身体を起こす。

気怠さなどはなく、むしろ普段よりも身体の調子が良かった。

そうして顔を上げて見ると、翡翠の台座の上で、レメレが足を組んでいた。

「よくぞ試練を乗り越えた……イルリスの使者よ」

「レメレさま……それじゃあ、あの夢は、やっぱり」

ただの夢ではなかった。

そのことを思い出して、千里は胸に手を置く。

実際に父や母に会えた訳ではない。

けれど、確かに重みのある言葉を、もらった。

「あの夢は君の経験を読み取り、最も本物に近い行動をとる幻影を見せるモノだ」

「はい……ありがとうございます」

千里は立ち上がると、深々と礼をする。

その左耳には、恒星の輝きが宿った耳飾りが、陽光を反射して煌々と瞬いていた。

きつと、家族も友達も、今も捜して待っていてくれるのだから。

そう考えると、自然と胸が熱くなり、瞼が僅かに熱を宿す。

「千里！」

「あ……ナリーヤ」

今度は、きちんとナリーヤの名前が声として出せた。

夢の中と比較して、千里は小さく安堵を覚える。

「大丈夫だった、みたいだね」

「ナリーヤが、助けてくれたからだよ」

「僕が？」

首を傾げるナリーヤに、千里はただ微笑んで頷く。

夢の中でも、ナリーヤは自分に手を差し伸べてくれた。

それが何より嬉しくて、困惑するナリーヤをつい、笑顔で眺めてしまう。

「矢を、放ってくれた」

「矢？えーと……もしかして」

頬を掻くナーリヤに、今度は千里が困惑する。

本当に矢を射ったというのなら、どこかにその矢が落ちていないとおかしい。

そうでなければ、本当に“夢の中”へ入って来たという事になるのだから。

「爺ちゃんに教わったんだけどね」

ナーリヤはそう前置きをすると、弓を構えた。

そこに矢を番えたりはせず、ただ弦を引く仕草をする。

まるで、そこに見えない矢があるかのよう。

ビ、イイイイイン

そして、指を離す。

すると、空間に弦の震える音が、静かに響いた。

「こうすると、霞がかつた心が晴れるんだって。

僕は悩みがあると笛を吹くことにしてるんだけど、でも、ほら

そういって、ナーリヤは首を回す。

だいぶ薄くなつてはいるが、僅かに残る霧。

その視線の意味に気がついて、千里は小さく首肯した。

「千里が霞に包まれて居るのなら、それを晴らす手伝いがしたい。

そう思って、でもできることはこれしか思い浮かばなくて、さ

こんなことをしなくても、大丈夫だったのだからうけれど。

そう続けたナーリヤの言葉に、千里はゆっくりと首を振る。

本当に危ないと、そう思った時。いつも助けしてくれた、ナーリヤの矢^て。それが余計だなんて、無くても良かったなんて、思えるはずがなかった。

「さて 話は済んだか？」

「は、はいっ」

「あ、はいっ」

千里とナーリヤが、微笑ましそうに見るレメレに向き直る。その瞳に宿るのは、諦念でも希望でもない。孫を見るおじいちゃんのような、生温い光だった。

「試練を乗り越えし、希望を抱くものよ。

此度の試練によりそなたに恒星の耳飾りと、我が加護を授けることを約束しよう」

「加護、ですか？」

レメレは二人を見上げて、一度頷く。

「これよりそなたらは、決して“道に迷う”ことが無くなる。

それが、視界と目的を惑わす精霊の、加護だ」

この“道”とは、目標への過程といった意志のことではなく、そのままの意味だ。

目的地に向かうのに、光の矢印を用いなくとも辿り着くことができる。

もちろん目的地に行こうという意思に関わりはあるが、耳飾りの特典としては申し分ない能力であった。

「私は君の意志を見て、未来を信じなくなった。

もう、裏切ってはくれるなよ……人間の、希望よ」

「はいっ……って、人間の希望？」

大げさな物言いに、千里は目を白黒させる。

そんな肝心なところで謙遜してしまう千里に、レメレは小さく笑みを浮かべた。

「そなたらの絆、人の宿す光……確かに、見せてもらった」

「レメレさま……」

優しい目で、レメレはそう言い渡す。

そしてふわりと浮かび上がり、右手を払うように振った。

「隔たりはもう無い。往け、希望の使者よ！」

霧が全て晴れて、一直線に続く道が現れる。

繋がる先は、輝く陽光に包まれた妖精の集落だ。

千里とナーリヤは最後にもう一度だけ頭を下げると、踵を返して歩き出す。

その手を、堅く握り合いながら。

「チサト……か。

君は真に神の導きを得たものなのだろう。だが」

思い浮かべるのは、もう一人の少年のこと。

夢の世界において、言葉に力を持たせられなかった“名も無き少年”の姿。

千里の記憶に本名がないのは、いい。記憶喪失だということは、

彼女の記憶から読み取っていたからだ。

「だが君は、何者だ？」

既に姿の見えなくなった二人。

その背にそつと、レメレは問いかける。

「ナーリヤ＝ロウアンス……君の本質は、いったいどこに在るのだ？」

答えは返らない。

それでもレメレは、一縷の不安と共に 問いかけずには、いら
れなかった。

アルトノアの前、千里達は出迎えに来た住人と向き合っていた。昼間でも歩けるほど強力な幽族は、トラストくらいらしく、幽族からは彼しかいない。

だが妖精族からは、知り合った三人が出向いて来てくれていた。

「どうやらあなた方は、真実“光”であつたようですね」

「あの霧を晴らしちゃうなんて、やるじゃない！」

「ふんっ……その、認めるわよ。人間」

エリエル、ファリリナ、ララン。

三者三様の礼に、千里は頬を綻ばせる。

トラストとナーリヤも最後に言葉を交わっていて、どこか楽しげだった。

「また出會えて、本当に良かったよ。トラスト」

『それはこちらの台詞だ。今度は我が、貴殿と亡霊決闘といきたいものだな』

「そう、だね。次に出會えた時は、月明かりの下で刃を交わそう」

『うむ、楽しみにしているぞ。ナーリヤ』

そう言つて、二人は拳を合わせる。

その表情は大人びたものでは無く、年相応の少年のようであった。

「チサト」

「うん？……ララン？」

見れば、ラランが自分の近くまで飛んできていた。その手には、ガラスの小瓶が抱えられている。

「約束、護ってくれて……ありがとう」

「うっん、私は私のやりたいことを、やっただけだから」

良い夢も見せてもらった。

その言葉は、呑み込んで。

「それでも、その、だから　お礼」

「お礼？」

ラランが渡したのは、抱えていた小瓶だった。

金の蓋からは突起が出ていて、中の桃色の液体を小出しできるようにしてあるようだ。

「人間って、“そーゆーの”好きだから、さ」

「えーと……あ、良い香り」

ふわりと漂う、花の香り。

手首に落とした雫を広げて、千里は思わず呟いた。

人間に限ったことかどうかは知らないが、香水は確かに好きだった。

度の超えたモノは苦手だが、柔らかい香りは安心できるのだ。

「あらあら、うふふふ」

エリエルの含んだような笑みが気になったが、千里は首を傾げながら小瓶を掲げた。

桃色の液体の中には、やはり桃色の花弁が沈んでいる。

「これは？」

「あたしの宿る花。“ライエラリア”の花弁よ。

あたしの力がこれでもかと込められているから、

中身が無くなっても水を入れれば一晩で元に戻るわ」

「へえー……ありがとう、ララン！」

千里が礼を言うと、ラランは頬を赤くして顔を逸らす。

そんな彼女の頬を、近づいて来たファリリナが面白そうについついていた。

微笑ましい様子を尻目に、千里は香水を自分の首に広げてみたりと、どこか楽しそうだった。

「さて、そろそろ行こうか。千里」

「あ、うんっ」

ナーリヤに言われて、千里は一度だけ、エリエルに頭を下げる。

そして、彼に並んで、手を振った。

「みんな、ありがとうっ！」

エリエルも、ファリリナも、ラランも、トラストも。

ここの表情は違えど、優しいな色を持って手を振り返してくれる。

それが千里は嬉しくて……ナーリヤと顔を合わせて、船に乗り込むのだった。

アルトノアに乗り込んで、トゥーユヨークを後にする。

妖精たちが手を振る中、島はあっという間に離れていった。

もう何度目になるか解らない、別れ的一幕。

その光景を前に、千里は僅かな寂しさを宿した目で、ひたすら上を見上げていた。

「ナーリヤ」

「なに？」

「うっん、なんでもない」

「そっか」

試練を終えてから、千里との距離が近くなった。

そのことを自覚して、ナーリヤはぎこちなく笑う。

気まずいのではなく、照れているのだろう。頬は僅かに赤らんで

いた。

「次は、どこへ行くんだっけ？」

手を握り、一步近づいてくる。

出発前に香水を使ったためか、花の香りがふわりとナーリヤをくすぐった。

触れれば、届いてしまう距離。

「え、えーと……次は民主国家“スエルスルド”だね」

「民主国家……ってことは、選挙とかするのかな？」

「そうだね。国民が選んだ人が議会を作って、議員たちが国を動かすらしいよ」

「首相とか、大統領とかは？」

「?……えーと、基本的にリーダー格の人が複数居るらしいよ。詳しい事は、国に行ってから調べないと解らないんだけどね」

ふーん、と唇に指を当てて、千里は首肯する。

仕草の一つ一つ、それらに迷いの気配が薄れた千里は、どこか大人びた魅力を持ち始めていた。それが幼さの残る容姿とミスマツチに対して、ナーリヤの胸を強く打つ。

自身に体重を預けているせいで、柔らかな肢体がナーリヤに触れる。

左手に重ねられた温かな右手は、熱を持ってナーリヤを包む。

鼻孔をくすぐる花の香りが、ナーリヤの理性を、強く揺さぶっていた。

揺れて、揺れて、揺れて、届く。

「千里」

「ナーリヤ？」

手のひらを合わせ合うように、握り方を代える。

二人で祈りを捧げているかのような、手。

持ち上げて引き寄せると、花の香りが強くなった。

右手をそつと頬に這わせると、長い睫毛が微かに揺れる。

僅かに潤んだ瞳には、微かな期待を宿した光が、漂っていて。

揺れて、揺らめき、揺さぶられて、止まらない。

「目、瞑って」

顎を小さく、持ち上げた。

頷くことはなく、千里は目を瞑る。

朱色の唇は瑞々しく、貪りつきたくなる衝動を、理性で抑えた。

ここに暴力は必要ない。獣のような衝動は、いらぬ。

「……ん」

重ね合わせるだけの、口づけ。

柔らかな果実のようなそれをこじ開けたくなるのを、抑える。

代わりに、右手を千里の腰に回して、強く抱き締めた。

肢体が、四肢が、香りが、体躯が、枷を揺さぶる。

「は、あ」

唇が、離れる。

零れ出た吐息が唇に当たり、それが一度離れたはずの距離を縮めた。

「ん、あ、ナーリヤ？」

答えない。

名を呼ばれて、答えを持たない。

もう一度唇を重ねて、合わせて、抱き締める。

「ナーリヤ、ちょっと、強い、かも」

「あ」

強く、強く抱き締めて。

苦しげな吐息で、ナーリヤは我に返える。

そつと距離を離して、上気した頬を見て、潤んだ瞳を見て。

「う、ごめん」

暴れ出そうとする獣を、鎖でがんじがらめにした。

「うん。私は、だいじょうぶ」

そう言いはするが、千里は上手く呂律が回らず、はっきりと言えなかった。

強く、強く、強く求められて、ただ受動的に在るしかできなかったのだ。

「すきだよ、ナーリヤ」

「うん、僕も……千里が、好きだ」

離したくない。

異なる故郷を持つ、大切な人。

決定づけられた別れを持つ、愛する人。

いずれ手を離さなければならなくとも、今は。

「風、強くなってきたね。中、入ろう？」

「そうだね……あ、いや、僕はもう少し、風を見ておくよ」

「そう？……それじゃあ、先に戻ってるね」

船尾から中へ入っていた千里を、ナーリヤは柔らかい笑みで見送った。

そうして扉が閉まり姿が見えなくなると、大きく息を吐いて頂垂れる。

「僕は、なにを？」

右手を額に当てて、熱を持った顔を冷やす。

衝動のままに、細く壊れそうな肢体を抱き締めた。

潤んだ瞳、柔らかな身体、熱を持った唇。

「うう、この旅路、耐えられるかな」

ナーリヤは一人、そう零す。

理性の鎖で縛り付け、意識の湖に沈めた獣。

鋼でできた鎖も、あの花の香りを前にすると、呆気なく錆びていく。

「はあ……どうにか、しないと」

熱は引かず、顔は未だ赤い。

船の中へ戻るには、今しばらくの時間が必要なようであった。

そしてそれは、一足先に戻った千里もまた、同様だった。先程まで余裕ぶつた態度をしていたが、そんなものは形だけだ。自室に入った途端に腰が砕けて、千里は立ち上がることもできずに蹲る。

思い出すのは、トウーユヨークでの別れの間際。ランが自分に向けて言ったことと、エリエルの含みのある笑顔。

『人間って、“そーゆーの”好きだから、さ』
「どういう意味で言ったのさ……あれ」

考えるまでもなく、“そーゆー”意味なのだろう。千里は嬉しそうに貰ってしまった自分の態度を思い出し、頬を赤くして頂垂れた。

「それにしても……」

強く握られた手。
熱を持った身体。
射止める様な瞳。
冷たさの残る唇。

求められることの充足感に身を委ね。
心を交わす悦楽に身を沈め。
短くも永遠を覚えた……一時の、逢瀬。

「ちよつとだけ、なら」

千里はほんの僅かに、手首に香水を垂らすと……それをそっと、首に広げた。

「ラランに文句、言えないかも」

そう呟く千里の手には、桃色の液体に満ちた小瓶が握られている。何度でも満たすことができる、桃色の香水。

惑いを知るその液体は、どこか“愛”にも似ていて。よぎった思考を、千里は強く振り払う。

「はぁ……あとどれくらい、一緒に居られるんだろうなあ」

眩きは、吐息と共に。

虚空の中へ、消えていった。

十章 第一話 花妖精の贈り物（後書き）

今回から第十章。

少しずつ、恋愛に重きを置いた展開が増えていきます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

十章 第二話 幽霊船

強く吹いた風が海を揺らし、やがて大きな波を生み出す。空は真つ黒な雲に覆われていて、時折紫電を吐き出していた。

「外、凄い嵐だね」

千里の言葉に、ナーリヤは頷く。

思えば海の上で嵐に遭うのも、これで三度目だ。

一度目は王国から船を出した時、二度目は帝国から出て来た時。

三度目となる今回は、スエルスルードへの旅路で嵐に遭っている。

こんなにも海上で嵐に遭うのは貴重な経験になるのだろうか、嬉しくない体験にもなっていた。

「嵐が収まるまで、船から出ない方が良さだろうね」

「うん……普通、こんなに嵐に遭遇するものなのかなあ」

千里はそう、大きく息を吐く。

リビングに備え付けられた窓から覗く、大荒れの海。

高い波が船を覆う度に、千里は肩を震わせる。

「大丈夫だと思つよ、この船は」

「う、うん……そう、だよね」

恐る恐る窓に近づいては、肩を竦ませて戻ってくる。

そんな千里の様子に、ナーリヤは度々笑みを零していた。

一々の動作が非常に可愛らしいと思つのは、彼が“惚れた弱み”

というフィルターを通して千里を見ているからなのかも、しれない。

トウーユヨクを出て、一晚。
まだまだ、太陽は拝めそうにないようだ。

E
X
I

嵐の始まりは、ナーリヤがぎこちなく船に戻ってすぐのことだった。

強くなってきただけかと思われた風が、だんだんと勢いを増してきたのだ。

そうすると、様子を見るまでもなく……。

ゴオオオオオ………

……波は荒れ狂い、空は暗雲に覆われ、外に出ることもできないほどの強風が吹き荒れ始めていた。

「今外に出たら、どうなることやら」

ナーリヤはそう、窓の外を見て呟く。

船が何メートルも上下しているのにあまり揺れを感じないというのは、流石とノーズファンの魔法使いの、技術の結晶と言えるだろう。

だが、窓から見える風景のほとんどが荒波に支配されているというのは、なんとも不安になる状況だった。これでは、まっすぐ進んでいるのかも解らない。

「ナ、ナーリヤっ」

そんな中だった。

千里の焦りに満ちた声が届いたのは。

千里はナーリヤとは反対側の窓に張り付き、そこから外を眺めていた。

その最中で何か気になるものでも見つけたのか、必死に窓の外を指している。

「あれって、まさか」

「あれ？……って、船！？」

荒れ狂う波の狭間で、はっきりと見ることはできない。

けれど千里が人差し指の腹を窓に張り付けながら指した先には、微かに船の影があった。

「この嵐じゃ、危ないよね……？」

「そう、だね」

不安げに問いかける千里に、ナーリヤは曖昧に頷いた。

大型船で海に出ているのなら、自分たちよりも確かな航海技術を持っていることだろう。

第一、自分たちが行ったところで何の力になれるのか、解らない。

それでも決意に溢れた千里の瞳に、ナーリヤは曖昧な返事しかできなかつたのだ。

行って欲しくはないが、行かないという選択肢は……彼女はきっと、持っていない。

「ナーリヤ……私」

「ふう……解ってる、助けに生きたいんだよね？」

「うん、でも、私一人で」

光の粒子を用いれば、きっと一人で行けないこともないだろう。

けれどそれよりもずっと確実な方法がある以上、一人で行くなんて言わせない。

ナーリヤはそう、少しだけ真面目な顔をして見せながら、千里の唇に指を置いた。

「どんな危険があらうと、乗り越える時は二人で行こう、ね？」
「……うん。ありがとう、ナーリヤ」

頷く千里に、柔らかく微笑む。

ナーリヤも必然的に一緒に行くことになる方法……つまり、アルトノーアの針路を、微かに見えた大型船に固定するというものだった。

船の針路を変えるくらい、外に出ずとも可能だ。

「もう誰も残ってないって可能性も、覚えておいて」
「うん……わかった」

しっかりと首肯する千里に、ナーリヤは満足げに頷く。
目指すのは、海の果ての大型船だ。

大型船の横に、ゆっくりとアルトノアをつける。

大型船に針路を固定されたアルトノアは、錨を降ろさなくともこの場から離れることがないので、船が流される心配は無かった。

「うーん、どうやって乗り込もうか」

アルトノアの船体にしがみつきながら外に出て来たナーリヤは、そう零す。

十メートルから十五メートルほどもある船体を登って船に乗り込むのは、至難の業だ。

当然、ロープのような物もない。

「ナーリヤ、あれ」

「……小窓、かな？」

「うん、あそこから入れないかな」

波と風の音が激しいため、千里はナーリヤにしがみつき、耳元まで近づいて提案をする。

強風のおかげで香りが散っているから良かったが、花の香りが残っていたらまずかっただろう。理性が揺らいで海に落ちる的な意味で。

千里が指したのは、船の壁に取り付けられた窓だった。

確かに上に登るよりは早いだろうが、その小窓でも五メートルほど上にある。

そのまま窓の横に目を滑らせば、等間隔で並んでいることが解った。

「他に方法がある訳じゃないけど、あそこまで登れそうにないなあ」
「大丈夫。ちょっと考えがあるから」

千里はそう言ってウィンクをすると、煌億剣とマガジンを手に取った。

ナーリヤは両手を離れた千里が落ちてしまわないように、その腰にそっと手を回して身体を固定する。

「【マガジンセット・イグニッション】……“蒼炎剣” アルク
イグゼ”」

ノコギリ状の刃と鋭い切っ先を持つ、幅広の青い大剣。周囲を凍てつかせる蒼炎を身に纏いし剣が、仄かに揺らいでいた。その剣を上段に構えながら、千里は波の動きを見る。

「今」

そうして一際高い波が来た時、千里は剣を振り下ろした。

ガチ、キインッ

大型船の船体に当たった波が、蒼炎に包まれて凍り付く。すると、アルトノアから小窓へ続く、氷結した波の道ができた。だが嵐の最中で凍らせたこともあり、早くもヒビが入り始めている。

「今の内に！」

「わかった！」

完全に崩れ去る前に、走り出す。

だが、千里の後ろに続くナーリヤが通った場所から、氷結の橋は砕け散って波間に消えていた。

「くっ……」

「窓は……蹴破るから続いて、ナーリヤ！」

「わかった！」

足下を掬われそうになって焦るナーリヤに、千里がそう呼びかける。

少しでも遅ければ、待っているのは帰ることが困難な海底散歩だ。海の魚や魔獣たちの餌となり果てる気は、二人にはない。

「っえい！」

バリント

千里が小窓を蹴り破りながら、船の中に転がり込む。

ナーリヤもそれに続いて飛び込もうとするも、その前に足下の氷が砕け散った。

「っまずい」

「捕まってる！」

千里が差し出した手を、なんとか掴む。

力強く引つ張られることで窓に飛び込むことに成功するが、同時に橋は完全に消滅していた。

「うわっ」
「ひゃっ」

力強く引き込まれたナーリヤは、その勢いに抗うことができず倒れ込む。

下になった千里を潰すまいと両膝を立てることに成功するが、計らずとも千里を押し倒す形になっていた。

「あ、ご、ごめん」

「あ、う、ううん」

互いに頬を染め合い、それからゆっくりと離れる。

今はそんな場合ではないと解っているはずなのに、その動きは名残惜しそうだった。

未だに赤らんだ顔を誤魔化すために周囲を見回すところまで、全く同じ仕草だ。

「もう、避難した後なのかな？」

千里の声に、ナーリヤは改めて周囲を見る。

集中できないほど“乱されて”いる自分に、呆れながら。

船の中はガランとしていて、人の気配が無い。

それだけではなく、もう何十年も使われていなかったのか、蜘蛛の巣が張っていて床も所々腐っている。沈没していないのが不思議なくらい、ぼろぼろだった。

「とりあえず、誰かいないか捜してみよう」

「そうだね。それなら私は、右側から回るね」

千里が窓から見て右側、ナーリヤが左側からそれぞれ見て回るところにする。

長居をして沈没でもされたらたまらないので、二手に分かれて早急に捜す必要があった。

そうしてナーリヤと別れた千里は、一部屋ずつ入ってみる。

念のためノックをして、返事がないことを確認する前に開けて入る。

突然入ったら驚かせてしまうかもしれないという配慮であり、返事を期待している訳ではなかった。

「誰かいませんかー？」

声は、薄暗い客室に、静かに響いた。

強風が窓を叩きつける音、軋みをあげる船体。

不気味な雰囲気、背筋が栗立つのを覚えるも、人命救助が優先なのだ、頭を振って恐怖心を追い払う。

「【光よ】」

小さく手の平に光を生み出すと、それを肩の高さまで浮かべて固定する。

すると、薄暗くてよく見えなかった部屋の全貌が、見渡せるようになった。

机の上に置かれた日誌、インクの瓶に入れられたペン、棗の挟まれた小説。

クローゼットには衣服が掛けられていて、壁には帽子が引っ掛けられている。

まるで部屋にいた人物が霞のように消え去ったかのような、生活感の残る光景だった。

だが、その全てはインクが乾ききっていたり衣服にカビが生えていたり、長い時を超えてきたかのような印象を残していた。

「ここには、いないね」

生唾を飲みながらそう呟くと、扉を閉じて隣の部屋に移る。

その部屋も同様に生活感が残っていて、千里を震え上がらせた。気味の悪い幽霊船ものの映画に迷い込んだような、感覚だ。

「ここも、かぁ……」

一部屋、二部屋、三部屋、四部屋。

歩き回り中に入り呼びかけて、その全てが不気味な様相を残している。

これ以上捜しても、無駄なのではないだろうか。

そんな気持ちになりながら、千里はため息を吐いた。

「メアリー・セレスト号みたい」

以前、故郷のテレビ番組で見た、有名な幽霊船。

孤立した船の救助に向かうと、船の中には誰もいなかった。

だがまだ温かい朝食など、確かな生活感が残っていた……というものだ。

温かい朝食などはデマらしいが、幽霊船の状況と酷似している光景に、千里は喉を鳴らして生唾を呑み込む。もう、ここにいたくなかった。

「一端ナーリヤと合流して、情報を交換しよう」

そう肩を落として、最後に入った客室から出ようとする。

だが、コトリと響いた小さな物音に、肩を跳ねさせて動きを止めた。

「だ、誰がいるの？」

生きた人間だったら、僥倖だ。

そんな“淡い”期待を胸に、千里は恐る恐る振り向く。

けれどそこには何もおらず、壁に掛けられた外套と帽子だけが寂しそうに揺らいでいた。

「って、船内で、風もないのに？」

強風に煽られているかのように、ぱたぱたと揺らめく外套。

ぼろぼろと言っても船内に風や水は侵入していなくて、現に今も風は感じられない。

だというのに、外套は未だ揺らいでいた。

そしてついに、外套が壁から外れる。

「ひっ」

壁から外れた外套は、中に透明に人間でも飼っているのか、ゆらりと立ち上がる。

壁に掛けられた帽子を手に取り、優雅に頭が在るであろう場所に被る姿は、不気味を通り越して滑稽だ。だが千里は、滑稽を通り越して恐怖心を抱いていた。

外套が一步近づくと、
千里は一步離れる。
外套が二歩近づくと、
千里は二歩離れる。
外套が走り出そうと前屈みになる。
千里は逃げだそうと外套に背を向ける。

「あわわわわっ!?!」
『ッ!?!』

そうして、追いかけてこが始まった。
床が抜けそうだとか、急に廊下に光が灯ったとか、そんなことを気にしている暇は無い。千里はひたすら、トウユークで見慣れたはずの亡霊に逃げ惑っていた。

「ととと、とにかく! ナーリヤに合流しないと」

このまま真っ直ぐ走れば、ナーリヤに合流することができる。
左右逆方向に別れて探索していたので、時間はかかるかもしれないが。

「ん? …… ナーリヤっ!?!」

だが思っていたよりも早くナーリヤの姿を見つけて、喜色を浮かべる。
何故だかナーリヤも自分に向かって走ってきていて、焦りが見えたようにも思えた。

「千里!」

「ナーリヤ! ね、ねえ、今、後ろからお化けが……」

焦りながらナーリヤの手を掴んで自分の後方を指す千里に、ナーリヤは痛ましそうに首を振った。その顔にはやはり、焦りが見える。

「ナーリヤ？」

「どうやら僕たちは、おびき寄せられたみたいだ」

ナーリヤの後ろからやってくる、ドレスや外套。

その全てに中身はなく、不気味に浮かんでいた。

千里の方から走ってきたのは外套一人前だというのに、ナーリヤの方からは十人単位の団体が来ている。

「衣装部屋に出たんだ」

「な、なるほど……って、どうしよう！」

「まずは意思疎通、かな」

「そそそ、そうだよねっ」

客室の扉を背にしたナーリヤにしがみつきながら、千里は自分を追いかけてきた外套に向き直る。明確に敵意を持って追いかけられた訳ではないのだと、彼女は自分に言い聞かせていた。

「目的は、なんですか？」

千里の問いに、外套は身振り手振りで説明する。

あっさりと答え始めてくれた事に千里は、彼らはもしかしたら友好的な存在なのかもしれないと、小さく安心し始めていた。

「えーと、私」

外套が、白い手袋で指を作り、千里を指す。

「を、あなたが？」

次いで自分を指し、千里に頷いてみせる。

「ボール……あ、丸だ！」

空に丸印を描いて、もう一度頷く。

「飲む？ああ、いや、食べる……“嚙る”だ！」

その丸を口であろう部分に持っていく仕草をして、親指を立てた。

両手を挙げて正解を喜ぶ千里。

一斉に親指を立てるドレスや外套たち。
頬を引きつらせて固まるナーリヤ。

「あなたが私を丸かじり……って、えええええっ！？友好的じゃないの？！」

「どこをどう見たら友好的って発想が出てくるのさ」

あんまりと言えばあんまりな千里の反応に、ナーリヤは額を抑えてため息を吐く。

そうしている間にも、外套たちは少しずつ輪を縮めていた。

窓側にもドレスが居て、飛び出すことも叶わない。

このままでは、外套の要望どおりの結果になってしまうことだろう。

「僕が道を造る」

「ナーリヤ？」

「とりあえず、この場から離れよう」

千里が強く反応する前に、ナーリヤは背中中の槍を手に取る。そして大きく身体をしながら、天井に向けて槍を放った。

ドゴンッ！

「上から逃げるよ、千里！」

「うん！なら私が、引き上げる」

大きな音と共に、天井に穴が開いた。

まずは千里が、ひとつ飛びして上の階に上る。

それから素早く身を翻して、ナーリヤに手を差し伸べた。

「捕まって！」

ナーリヤは差し出された手に飛びつこうと、足に力を入れる。とりあえず上に逃げて、それからアルトノアに戻ればいい。だが外套たちは、千里を逃した上でナーリヤまで逃がす気は、無かった。

『 ツー！！』

「うわっ！？」

「ナーリヤっ！」

外套に掴まれて、引き摺り倒される。

千里はナーリヤに手を伸ばして助けようとするが、届かない。

「ナーリヤ、待ってて今……っ」

助けに行こうとした千里だったが、その動きが制される。

自身に突きつけられた、鋼の剣。

ゆっくりと振り向いてみれば、そこには銀の甲冑が剣を構えていた。

『 抵抗する二……抵抗するな』

言い直した。

だが何を言おうとしたのか解らず、首を傾げる。

「ナーリヤは？私たちをどうする気？」

『彼は牢に幽閉するが、わざわざあの程度、命までは奪わ……ない』

甲冑のどこかで聞いたことがあるような声に、ひとまず安心する。信用できる訳ではないが、抵抗できない状況で嘘を言うメリットがない。

『さあ、主がお待ち……だ。ついて来い』

「わかった……」

『武器は預からせてもらう。大剣はどうした？』

大剣と問われて、千里は内心で首を捻る。

闘技大会以前で自分を見たことがあるのなら、その時は“アギト”を持っていたので、そのことだろうとは思った。けれど、目の前の人物に心当たりは、無い。

「……人命救助のつもりだったから、船に置いてきたの」

波を氷結させたところは、見られていなかったようだ。

それを会話の中から感じ取った千里は、咄嗟に煌億剣を隠蔽した。服の中に隠していれば解らないものだし、初見ではなんだかよくわからないアクセサリーにしか見えないからだ。

『迂闊だ……な。良いだろう、ついて来い』

甲冑に剣を突きつけられたまま、千里はコクリと頷く。

視線の先に広がるのは、薄暗い廊下。

この先に、甲冑が“主”と呼ぶ人物が、いるのだ。

千里はナーリヤの無事を祈りながら、ゆっくりと歩き出す。

今回の罫の元凶と、その目的を知るために。

十章 第二話 幽霊船（後書き）

次回前後編で、十章を終えようと思います。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

薄暗い船室の一角。

強風によりガタガタと揺れる窓には、無骨な鉄格子が嵌められていた。

かび臭さと、半ば腐った床と、違和感のある真新しい鉄の牢。

その六畳ほどの部屋に、外套たちに連行されたナーリヤが叩き込まれた。

ガンッ

「くっ……かはっ」

強く押され、船室の壁に背中を打ち付ける。

肺から空気が漏れだしほんの僅かに息が止まり、ナーリヤは小さく咳き込んだ。

『そこでしばらく、大人しくしている』

「待て!……くそッ」

大きな倉庫を無理矢理改造したような、鉄の檻。

その鉄格子にしがみつきながら、ナーリヤは外套を呼び止めようとする。

だがその外套は、中身が居なくなっただかのように、崩れ去った。

事実、中身がその場から消えたのだろう。

先程までナーリヤを睨んでいた異質な気配は、もうその場に残っていないかった。

「武器は……って、あそこか。嘗められている、んだろっなあ」
牢屋の外。

船室の入り口付近には、ナーリヤの武器が乱雑に置かれていた。逃げられはしないという自信の表れか、それともそもそも捕まっていたようがいまいがどうでもいいのか。

「まさか“うっかり”なんてことはないだろうし……そうになると、何か思惑があるのか」

自分たちを捕らえた存在。

その自信を裏打ちするほどの、思惑。

ナーリヤは、単純に武器をたぐり寄せただけではどうにもならないのだろうと、額に手を置いて考え込む。罨である危険性が、高すぎるのだ。

「千里……どうか、無事でいて」

早く抜け出して、どんな状況に立たされているかわからない千里の下へ向かおうと、ナーリヤは敵の裏を搔く方法を思案し始めるのであった。

まさか武器を捨て置いたのが敵の“うっかり”だとは、思いもせず……。

一歩進む度に床が軋む。

未だ嵐は止まず船体が右に左に大きく揺れる中、背中に剣を突きつけられた千里は歩いていった。

「どこまで行くの？」

問いかけても、返事はない。

廊下を進み、階段を登り、甲板に出る。

強い風が身体を浚おうとし、煽られた雨が強く肌を打つても、歩

みを止めることは許されない。

「っ寒い」

救出に乗り出た時は、そんなこと思いもしなかった。なのに今は、背筋から寒気が浸透し、鳥肌が立つ。どうして今になってなど、少し考えれば直ぐにわかった。

「ナーリヤが、いないから」

『何か言ったか？』

「……なにも」

隣に、ナーリヤが居ない。

側にいる時は心の奥底から温かくあれたのに、今はこんなにも寒い。

千里はぎゅっと眉を寄せると、下唇を軽く噛む。

痛む胸を隠すように手を添えて、逡巡の後俯いた。

負けるもんかと、自分に言い聞かせながら。

『じじじ……ヤ』

「や？」

『ここだ』

甲板の船尾部分に設置された部屋は、船長室なのだろう。

この部屋だけ一際綺麗にしてあることから、奥にいる人物が“元凶”であるということは伺えた。

「入れ」

中から聞こえて来て来た声に、千里は小さく肩を跳ねさせる。
男の声……それもどこかで、聞いたことがある声だ。
だがどこで聞いたのか思い出せず、千里は首を捻る。

「……っ」

弱みは見せない。

そんな決意と共にドアを開け放つ。

部屋の中に風が吸い込まれていくような感覚に、怯むことなく。

「ようこそ、我が光よ」

奥の椅子で足を組む、男。

血色のワインを傾けながら潜めたように笑う男の顔は、灯りのない部屋の影に隠れて見えない。

「だ、れ？」

「くく、照れるな」

「え？」

男がそう声を発した瞬間、暗雲から稲妻が轟き、船の近くに落ちる。

そしてその眩いほどの閃光が、男の顔を闇夜の中で浮かび上がらせた。

耳にかかる程度の、銀の短髪。

深みのある血色の瞳は、白すぎる肌と相まって強く浮かび上がっている。

しなやかに引き締まった体躯を包むのは、ワイシャツと黒いズボン。

その端正な顔立ちに乗る口元は、どこか皮肉下に歪められていた。

「この時を待ちわびたぞ……我が、花嫁よ」

「……エクス」

銀月の吸血王。

ニーズアルへの支配者、“エクス・オンハイエルハイト”が、不敵な笑みで佇んでいた。

「覚えていてくれたか！

ほらみるダーク！私の愛は通じていたのだ！！」

先程までの雰囲気とは一転して、子供のように喜ぶエクス。

その背後から、尾の毛先の白い黒猫が、呆れた表情で現れた。

「主のことを忘れられる人間なんか、早々いませんニヤ」

「そうだろうそうだろう。なにせ私は“いけめん”だからなッ」

どうにも様子がおかしいことに、千里は首を捻る。

前にあった時、エクスは圧倒的な“悪のカリスマ”を内包していた。

抗うことに絶望させるほど強く、恐ろしい吸血種の支配者。

それに相応しいだけの恐ろしさは、感じられない。

「イ、イケメンってそれ……」

「ああ、ダークから聞いたのだ。

チサトが私のことを“いけめん”と言って褒め称えていたとなッ」

確かに千里は、ダークに向かってエクスをそう称したことがある。

けれどその時千里は、“似非イケメン”と言ったのだ。

そこに褒める意志など、欠片もなかった。
言葉の上では、イケメンと認めているのだが。

「なんでもそれは女性が示す求愛の一種だそうじゃないか！」

「ち、違う！そんな訳無いじゃない！」

「照れずとも良い。私はわかっている」

「だ、だから違っつてば！」

どうにも、調子が崩れる。

エクスとは、果たしてこんな性格だったか。

思い返せば、すぐに“否”と答えることができる。

ならばこれはいったい“なんなのか”わからず、千里は険しい目でダークを見た。

「……浄化の光から奇跡的に蘇生を果たした主は、丸くなられたのですニヤ」

「つまり、バカっぽくなったと？」

「……丸く、なられたのですニヤ」

ナーリヤが全力で放った浄化の光。

それはエクスの身体を魂ごと灼いた。

その上で立ち上がって一矢報いようとして、走り回ったのだ。
どうにかならない、はずがない。

つまりエクスは、頭の螺子が数本飛んだ状態で、復活したのである。

「さて、こちらに來い」

「っ……」

千里の背後に立っていた甲冑が、ダークの力で動いて千里の背に剣を突きつけた。

ダークの力、強力な念動力で動いていた甲冑や外套。千里はまんまと追い詰められたことに、歯がみする。

だがダークは、甲冑が自動で動くように調整していたので、さりげなく千里の背後にいた甲冑に気がついていなかった。彼はそんなに考えて動いたり、しない。

「来ないならいい。こちらから行く」

「流石主。積極的ですニヤ」

ダークもおかしい気がしたが、元からかもしれないと思い直す。よくよく思い返してみれば、わりと適当なところがある猫妖精だった。

「こ……来ないでっ」

下がるうとするが、背には剣があるため下がれない。

そうしている内にエクスは、緩慢な動作で千里に歩み寄っていた。

男性にして細い指を、苦しげに顔を逸らす千里の頬に這わせる。

撫でるように指を落とし、顎を伝って首を撫で、鎖骨を親指でなぞった。

その度に不快な刺激が、千里の脳を侵し、危機感を募らせる。

甘く歪められた表情、抗おうと身を振る仕草、怒りから上気した頬。

その全てが、エクスの心を嗜虐心に染め上げる。

「くく……さあて、味見といこうか」

エクスはそう呟くと、腕を戻して口元に持っていきこうとする。
千里に触れた指を舐め上げようと背德的に舌を伸ばして。

「ほづぐっ?!」

「へ?」

「主!?!」

ひっくり返った。

鼻を押さえてごろごろと床を転がるさまは、無様を通り越していつそ哀れだ。

そんな己の主の姿に動揺したダークは、何故か生身のまま千里に飛びかかる。

「主の仇　フニヤツ?!」

そうして、千里に触れようとして、落ちた。

訳もわからず首を傾げる千里を、エクスは睨みながら立ち上がる。鼻を押さえて後ずさる姿は滑稽だが、疑問符が邪魔をして笑えない。

「くっ……なんのために亡霊どもの辺境に立ち寄ったのかと思えば
ッ」

一歩二歩と千里から下がる、エクス。

目尻に涙が溜まっていたのは、見ないことにする。

代わりにダークが、エクスにハンカチを差し出していた。

自分も辛いだろくに、エクスを優先する姿は従者の鑑である。

「嗅覚が敏感で、匂いの強いものを避ける吸血鬼や猫妖精。

それらを退けるために効果的な、花妖精の香水を手に入れていたとはなッ」

「まさか、奥方様は全て感じていたと言つことですかニヤ!？」

「ああそうなのだろう、ダーク。」

「……クハッ! 強く、可憐で、そして聡明! ますます君が欲しくなつたよ、チサト」

見るものを否応なしに魅了する、流し目。

けれどどうにも鼻を押さえる間抜けさが際だって、決まらない。

「臭いが落ちるまで、あとどれくらいある? ダーク」

「三刻もあれば余裕ですニヤ」

「では三刻後、その時までには私を迎える準備をしておけ!」

帝国で千里が見た時計は、十二時間半日刻みのものだった。

ということはこの三刻とは三時間の事なのだろうと、千里は当たりをつけた。

言い放つエクスを半目で見ながら、千里はおもむろに小瓶を取り出す。

服の内ポケットは、けっこう色々入るのだ。

「そ、それはまさかッ!」

「逃げてください主! ここはボクが引き受けますニヤ!」

「くっ、一人にしておけるか! ダーク!」

「あ、主……」

本当に丸くなったのか。

大まじめな顔で寸劇を始める二人に、千里はたじろぐ。

この展開、どう見ても千里の方が“悪役”である。

鋭い表情で千里の持つ小瓶を見る、エクストダーク。

この香水の小瓶は一滴ずつ垂らして使う構造になっているので、実は振りかけたりすることはできないのだが、そうとは知らずに二人は本気で警戒していた。

後ろから甲冑で斬りつけられたら、どうすることもできない。

だから千里は二人がそのことに気がつかないように、香水を持ち上げたり揺らしてみたりして、時間を稼ぐのであった。

十

嵐の最中にある、大型船。

当然、その船内は激しい揺れに見舞われている。

気を抜けばただ立つことも難しいであろう揺れの中、ナーリヤは鉄格子から手を伸ばしていた。

「あと、もう少し……ッ」

揺れのせいで武器の位置がずれ、クリフの短剣が比較的近い場所まで滑ってきたのだ。

敵の思案などを考えていたせいで手を伸ばすまでに無駄な時間をとってしまったが、とにかく今はできることをするしかない、割り切っていた。

「もう、ちよっ……うわっ」

ガンッ

大きく船体が揺れ、ナーリヤの身体が滑る。

鉄格子に向かって滑り出した身体は簡単には止まらず、手を伸ばして無防備だったせいもあり、ナーリヤは思い切り頭をぶつけた。

「う、ぐう………うう……」

鉄格子なので、そうとう痛い。

思わず涙目になって額を抑えるナーリヤに、今度は逆方向の揺れが襲う。

「うわっ………」

だがそう何度も体勢を崩すまいと、辛うじてではあるが踏ん張っ

た。

また滑り出して背中でも打ち付けたらたまらない。

「ふう、つて、あ！」

滑り出てきたのか、鉄格子に引っかかる短剣。

ナーリヤは大きく目を瞪ると、慌ててそれに飛びついた。

再び揺れでずれないうちにと掴み、一息吐いた……瞬間。

「ん？」

再び傾いた船体に、ナーリヤは体勢を崩す。

短剣を離すまいとそれだけに集中していたのが悪かったのか。

ナーリヤは、今度は頭頂部を鉄格子に打ち付けた。

ガツンッ

「うぐっ……お……あああ……」

鈍い痛みにも、蹲る。

どうしてこんな目に遭っているのか、運の悪さを恨みつつ、震える。

できることならこの痛みは、今回の元凶にぶつけよう。

そんな暗い気持ちで、ナーリヤの中でじわじわと芽生え始めていた。

「は、ははは、はは」

暗い瞳で笑いながら、クリフの短剣から躊躇なく記憶を読み取る。

約束はしたが今回だけは特別だと、頭の中で千里に言い訳をしながら。

「牢の抜け方 【継承把握】」

盗賊を経験していた、クリフの記録。

その一角から、牢の抜け方を検索して引き出した。

ドオンッ

「上か……待っていて、千里。それから待っている……元凶ッ」

牢を抜けるために、鍵に向かう。

千里の元へ辿り着くには、もう少し時間がかかりそうであった。

†

膠着状態になって、数分。

未だ動きが取れないことに、千里は焦りを覚え始めていた。

船体が揺れても、背中から剣が離れる気配はない。

エクスとダークは未だ千里が何を警戒しているのか気がついていないが、このままでは時間の問題と言えるだろう。

「主、様子がおかしいですニヤ」

「……っ」

気がつかれた。

千里はそう身を強ばらせると、素早く煌億剣を抜けるように身構える。

至近距離からでは、千里が動き出すよりもエクスが千里を拘束する方が速いだろう。

けれど、何もしないよりはマシだった。

「む？なにがだ？ダーク」

「そろそろ、日が昇りそうですニヤ」

「それはマズイな」

「美味しくはないですニヤ」

とぼけた会話をしながら、エクスは小さく頷く。

そして、黒いズボンのポケットから、鎖の付いた装飾品を取り出した。

銀の鎖に繋がれた、白金色の三日月。そこには、不思議な輝きが宿っている。

「【我が為に、陽光を覆え　　“月影の首飾り”よッ！】」

暗雲を退け日が差し込み始めていた空が、再び暗雲で覆われる。
その雲は雨雲や雷雲よりも深い黒で、さらに中心には不自然なほどに大きい三日月が浮かんだ。

「それは……まさか」

「欲しいのか？」

「奥方さま、拳式を上げれば何時でも手に入りますニヤ」

四つの島、四つの秘宝、四つの鍵。

太陽の指輪、恒星の耳飾りに次ぐ三つ目の装飾品が、そこにあった。

偶然か、それとも必然か、千里にはわからない。

けれどこれは、またないチャンスだ。

「フハハハハッ！まさか倉庫の奥に投げ入れていたこれが、求婚の導となるとはなッ」

「球根の調べ？……花でも植えますかニヤ？」

「うむ！拳式に花はつきものだ」

「拳式のためでしたら、複数必要ですニヤ」

「これは一つしかないぞ」

噛み合っていないようで、噛み合っている。でもやっぱり噛み合っていない。

こうして間抜けな会話を繰り返してくれろことは良い時間稼ぎにはなるものの、ツッコミどころの多すぎる会話に、千里は考え事に集中できないでいた。

「では祝砲だ！轟けッ
【稲妻】」
「妻だけに、ですニヤ」

偽りの月の周辺、暗雲が紫電によって煌めいた。
瞬きするように幾重にも輝き、そして一瞬、その光を収める。
やがて光は集中し……幽霊船のマストに、光の柱が打ち込まれた。

ドオンッ

「くっ……」

マストは焼け焦げ、灰になる。

こんなことをすれば航海が出来なくなりそうなのだが、エクスは嵐を操りそれに乗って移動しているので、船の形さえ残っていれば問題なかった。

ガシャンッ

「あ」

その凄まじい衝撃で、甲冑が崩れ落ちる。
高笑いをするために、過剰なほど胸を仰け反らせているエクス。
そんなエクスを、拍手と共に褒め称えるダーク。

このチャンスを、逃さない。

「【光よ！】」

煌めきと共に、甲板の中央まで下がる。

超近接戦では圧倒されてしまおうと言うことは、ニースアルへの時に実感していた。

だから一度距離をとり、万全を期す必要があるのだ。

「主！逃げられますニヤ！」

「フンツ……私の嵐の中から逃げる？不可能だ」

エクスが指を鳴らすと、更に海が荒れ出した。

王国の港街、ルルイフを襲った海淵の魔獣の嵐。

その能力は、エクスが分け与えたものだ。

海淵の魔獣に力を与えた“オリジナル”であるエクスが、嵐を操れない道理はない。

尤も、攻撃手段にできるほどの精密な操作は、エクスを中心に半径二メートルほどの空間にしか展開できないのだが。

「追いかけてつこも悪くない。行くぞツ！ダーク！」

「はいですニヤ！」

船長室から飛び出し、雨の甲板の上で対峙する。

余裕の笑みを崩さないエクすと、そんな主に追従するダーク。

千里はエクスの“本気”は見たことがないが、ダークだけでも充分厄介だということを知っている分、この状況に焦りを覚えていた。

相対する二人を、千里は強く見据える。

ここで退く訳にはいかないのだと、栗色の双眸に力を込めて。

悔しかった。

主に任された命を全うできず、結局主の花嫁候補を逃がしてしま
った。

妙に丸くなった主は彼を責めなかったが、それでも彼は悔しかっ
た。

花嫁候補 千里を捜す度。

その旅路で、彼は ダークは、密かに逆襲の準備を整える。
何度も開発を試み、立ち寄った場所で情報と材料を集め、試作品
を幾つも生み出し。

そうしてダークの技術は、力は、進化していった。

「ふははははっ！これでもう、負けはないニヤ！」

ニースアルへの技術は世界一。

そんな事を叫びながら、幽霊船に“それ”を積み込む。

そのせいで船体に不自然な重み加わり、少し軋む音が響こうと
も関係なく。

「待っているニヤ！奥方さま！これで、ボクの勝利は確定ニヤ！」

一匹の猫妖精の高笑いが、夜の幽霊船に響き渡る。

千里達の足取りを掴む、前日の夜のことだった。

対峙する中、ダークが不敵に笑う。

だが猫なので、その印象は“可愛い”以上のものにはならなかった。

「さて……主、まずはボクに任せてくださいニヤ」

「いいだろう。前座を務めよ、ダーク」

「ありがとき幸せニヤ」

エクスが三步下がり、ダークが大きく五歩前に進む。千里とダークがこうして対峙するのは、二度目だ。

「この日をどんニヤに待ちわびたことか！

さあその目でよく見るがいいニヤ！ボクの新、最高傑作を！

【来たれ！ ねこせんようきょうかがいこっかく 猫専用強化外骨格飛行型・八式改】

ダークの雄叫びに反応して、船首部分を“突き破り”、白銀の巨人が出現する。

ジェット飛行機のような翼、猫耳付きの兜、白銀のフルプレートアーマー。

その右手には三メートルに近い大剣を持っていて、左手には二メートルほどの盾を構えていた。

全長二メートル半。

その巨体に、ダークは乗り込んだ。

「ロボット……でも、前よりパワーアップしてる」

冷や汗が、額から伝って顎から落ちる。

叩きつけられる雨に微塵も動じることなく佇む姿は、まさしく威風堂々。

ダークの情熱がこれでもかと詰め込まれた、兵器であった。

「飛行制御確認、安定確率良行、魔力充填九十九……成功ニヤ」

失敗する確率もあつたらしい。

声に過剰な安堵が見え隠れするのは、どうやら気のせいではなか

ったようだ。

横では、エクスが満足げな顔立ちで佇んでいた。

「見るニヤ！魔力展開、爆進特攻！」

大剣を突き出して、鎧が飛んでくる。

その速度に目を瞠りながらも、千里は右側に大きく飛ぶことによつて、その一撃を避けてた。

「飛行制御、昇空！」

だがダークはそのまま空に飛び上がり、遙か上空で制止した。

そうして盾を構えると、盾の中心部が左右に開き、中から黒い砲身を見せる。

いったいどこでそんな知識を手に入れてきたのか、それはSFもの
のありがちな魔力銃だった。

「主の魔力とボクの魔力を加工し、

火石の爆発力によつてそれを放つボクの最高傑作！

その名も ねこしきがえんまりよくほう【猫式火焰魔力砲】だニヤ！」

魔力が充填されていき、やがて輝きを持ち始める。

荒れ狂う魔力と火石の炎。

あんなものを受けたら、ひとたまりもないだろう。

「発射時間、詠唱開始。十、九、八、七、六……」

「どうする？どうすれば……」

横目でエクスを見れば、彼は愉しそうに笑っていた。

下手をすれば、彼が求める千里はバラバラになってしまうだろう。

それでもエクスは、ただ笑っていた。

いや……“だから”なのだろう。

「私の妻ものになれ。」

そうすれば　　ダークは撃たない」

それが、狙いだった。

今から光の翼を展開しても、避けられるかわからない。

第一避けたら、船に囚われているナーリヤの安否が、保証できなくなってしまう。

「さあ、選べ！死か、生かッ！」

「私は……いや、そくだ　　私は、逃げない！」

煌億剣を抜き放ち、マガジンをセットする。

今の今まで忘れていた、煌億剣の新しい力。

「【イグニッション】　　“幻隴剣―　ファラ＝イグゼ”」

「なんだ……あれは？」

純白の体躯を持つ、音叉のような二又の剣。

精霊王レメレの霧を内包するこの剣の力は　　。

「……三、ニヤ、一……発射！」

「斬り裂け……【幻想を拓く者よ！】」

飛来する真紅の砲弾を斬り裂き、消滅させた。

実体のないものならば、たとえそれが炎だろうと雷だろうと魔力だろうと斬り裂くことができる、幻想の剣。直接攻撃力は皆無だが、

対魔法においてこれほど心強い存在はない。

「打ち消されたニヤ?!……ならばもう一度、再装填ニヤ!」

再び光を溜め始めるが、何度やっても同じ事だ。

だが次はエクスからの妨害が入る可能性があるなので、極力彼から距離を取る。

「つまらんな。それは取り上げさせて貰おうか」

指を向けて、そこに稲妻を溜め始める。

案の定、エクスは千里を妨害する気でいた。

少々螺子が飛んだところで、元来の嗜虐的な部分が消えて無くなる訳ではないのだ。

「さて、上空と正面。二つの攻撃、同時に退けられるか?」

「同時に退ける必要は、ない」

焼け落ちたマストの根本から、声が聞こえる。

その声が誰のものであるかなど、わかりきっていた。

だから千里は己の声に喜色を乗せて、叫ぶ。

「ナーリヤ!」

「遅れてごめん、千里。それから 君はここで落ちろ、黒猫」

トーンが下がり、怒りの込められた瞳でダークを見据える。

その手に弓を構えて矢を番えるナーリヤを見たエクスは彼を止めようとするが、千里によって阻まれた。

「先見三手……」

「ちっ、横軸機動制御、展開ニヤ！」
「……一撃必殺」

黒帝より削り出された、対大型魔獣であるナーリヤの弓の力を最大まで引き出すことが可能な、矢。

その一撃はダークの動きを読み切り、正確に砲身を穿ち抜いた。

「ニヤ?!ま、まずいニヤ」
「キーンツ……………ドゴオオンツツツ!!!」

巨大な花火が上がり、緊急脱出装置を用いたダークが飛び出してくる。

なんのために空を高速飛行できる兵器を作ったのか、わからないほど早い撃墜。

空中でのジグザク飛行などは砲身を構えている間はできないので、色々と未使用機能を残した上での爆散だった。哀れである。

「ぐうう……………まさかこうも早くダメにニヤるとは」
「ダーク、無事だったか」

兜に装着された翼で、ダークは緩く滑空してきた。

ダーク自身は怪我の一つも負っていないため、まだ戦意を鈍らせていない。

どうやら脱出装置を千里に破壊された時に学習して、丈夫に造ったようだ。

「千里、なんでアレがいるのかわからないけど、今の内に逃げた方がいい」

「“アレ”って……………いや、逃げちゃダメ」

「千里？まさか……」

真剣な顔で千里を見るナーリヤに、首肯する。
エクスは自分たちの求める秘宝を持っている。
ここで逃げる訳には、いかなかった。

「……腹に据えかねるほどのことを、アレにされた？」
「へ？……ええっ!？」

だが、千里の意図は正しく伝わっていなかったようだ。
きちんと説明した訳ではないから伝わらないのは当たり前なのだ
が、間違っつて頷いてしまったのが悪かった。

ナーリヤが“変な勘違い”をしているのに気がついて、千里は頬
を赤らめる。

「羞恥心を抱くほどのことを？エクス……貴様ッ」

「あああ、あの、その、えと……」

「久しいな、ナーリヤ」

エクスは如何にも興味の無さそうな視線でナーリヤを一瞥し、す
ぐにため息を吐く。

事実ナーリヤのことはどうでも良いのだろう、すぐにダークに向
き直つてなにやら指示を飛ばしていた。

「いやいやいや、そうじゃなくて!」

「何もされていないの？」

「そうなに……も……?」

思い浮かべるのは、香水で悶絶する前の光景。

頬に指を這わせ、鎖骨をなで上げるまでの一連の仕草。それらを思い出して、千里は言葉に詰まる。

「された、かも」

「エクス、この海が貴様の墓標だ！」

「言ってくれるな、間男がッ」

「どっちが間男だ！」

よくよく考えてみれば、怒りに身を任せるナーリヤを止める理由もない。

もちろん、なにやら凄い想像をされていそうだが、それには気がつかないフリをしておく。後から説明すればいいし、なにより恥ずかしい。

「間男め！貴様の相手はこのボクニヤ！」

復活したダークが、脱出用の兜を装着したままふわりと浮かぶ。

そして肉球で指を弾く。猫の手では弾けないので、見た目だけと、甲板に沢山の甲冑が舞い降りた。

「【行け！ねごしきがたへいそうかつちゅうせんだん猫指揮型兵装甲冑戦団！】」

ナーリヤを取り囲む、無数の甲冑。

斧や槍、剣に弓を持つ姿は、まるでノースファンでの怨霊達の再来に見えた。

「ナーリヤ！」

「君の相手は私だ、チサト」

「エクス……」

甲板の端と端。

甲冑たちによって、二人は分断されてしまった。

「始めからこうしておけば良かったのだ。

欲しいモノは 己の手で、直接手に入れておけば、な」

エクスの回りに、暗雲が出現する。

彼を中心に半径二メートルを覆う雷雲の結界。

ナーリヤが打ち破った時ほど、手加減はしてくれないだろう。

「さあ、その力を私に見せてみる チサトツ！」

宙に浮くエクスを見据えると、千里も背に光の翼を展開して浮かび上がる。

装填するマガジンは、直接攻撃力と精神攻撃力を兼ね揃えた、オールマイティの剣。

「閃煌剣― イグゼイルリウス」

実体を持った光の剣は、幻朧剣ほどではないが実体のないモノにも効果を持つ剣だ。

稲妻にも効果をもたらし、かつ直接攻撃力も有している。

先程のダークの魔力砲レベルの攻撃を打ち消さなくても良いのなら、これで十分だ。

両者ともに飛んでいるのなら、来ても避ければ済むのだから。

新たな大陸の、その手前。

千里は望みのために、閃煌剣を構えた。

†

左右から振り下ろされる大剣を、槍で逸らして避ける。
ぐらつく船体に足を着けながらも、ナーリヤは匠に槍を操っ
ていた。

右へ、左へ、前へ、後ろへ。

甲冑の攻撃を受け流して、一撃を加える。

ドンッ

激しい音と共に、甲冑の胸に風穴が開く。
けれど、それでもなお甲冑は止まらない。

死霊や怨霊のように、胸を貫けば終わりではないのだ。
なにせ彼らは、空っぽなのだから。

「やっぱり、本体を討たないとッ！」

甲冑たちを操る、ダーク。

彼は自由自在に空を飛び回っているため、中々捉えることができずにいる。

また、群がる甲冑たちをどうにかしないと矢を番えることもできないため、例えダークを捉えたとしてもゆっくりと狙う隙は無い。

「くっ……どけ！」

放たれる矢を避け、振り下ろされる斧を逸らし、突き放たれる槍を弾く。

一度に向かってくる敵は、四体が限度。それも、仲間討ちを視野に入れて。

その上で、矢も振ってくる。腕が悪いのは救いだが、慰めにはならない。

「せめて、嵐が止めば」

ナーリヤが危惧しているのは、突風や船体の揺れによって体勢が崩れる事ではない。

肌を打つ豪雨と身体を揺らす突風、そして耳をつんざく稲妻。これらの“音”が落ち着けば、状況を覆すことができる。

「ふはははっ！ 終わりかニヤ？ 諦めたかニヤ？」

「誰が……諦めたり、するもんか！」

降りかかる火の粉を、剣を槍を斧を弓を避けながら、ナーリヤはダークに反論する。

雨で身体は濡れ、風で濡れた身体が冷え、稲妻で急激に熱を持つ。その連鎖は、ナーリヤの体力を確実に奪っていた。

「どうにか、隙を」

ゴオオンツツ

震える足を必死で動かしていたナーリヤは、大きな音に動きを止めた。

ナーリヤだけではない、自動で動いているのかダーク以外の周囲の全てが、動きを止めた。ダークの意識も、空に向いていたのだから。

「二つの、稲妻?……いや、それよりも!」

空に浮かぶ、二条の雷光。

嵐を消し去るほどの威力を内包した雷光を前に、誰よりも早くナーリヤが再起動を果たした。

槍を捨て、両手を開き、一拍。

パアンツと周囲全方向に音が流れて、複雑に反射しナーリヤに還る。

「【領域把握】 先見二手」

目を瞑り、そのまま脳内で全ての動きをトレースする。

やがてそれらは三手先の映像をナーリヤの脳裏に浮かばせて、軌道を如実に表わした。

狙うは、高速起動中の、ダークの兜。そこへ向けるために、ナー

リヤは思い切り弦を引く。

「一射必中」

「まずいニヤ……総員、かかるニヤ!!」

矢を番えたナーリヤに気がつき、ダークは甲冑たちを動かす。

だがそれも、一歩 いや、三步遅い。

「夜影弓“闇を穿つ大弩” ウルドⅡガルⅡバリスタ ”」

ドンッ

対大型魔獣の名を冠する弓の、全力。

その一撃は空を駆り、避けようと軌道を変えたダークに食らい付く。

兜を砕き、ダークを傷つけずに抜いて、翼を砕いた。

森の主、黒の帝王。

その骨格から削り出された矢は、オリジナルの魔獣と相違ない“暴力”を示す。

「ぎニヤっ!?!」

悲鳴と共に甲板に墜落し、二回三回と転がっていく。

やがて船長室の壁にぶつかり動きを止めるが、その頃には目を回して気を失っていた。

同時に、甲冑たちが崩れ落ちる。

どんなに厄介な敵でも、頭がなければ何も出来ない。

それを表すように 彼らはもう、動き出すことは無かった。

十

黄金の粒子と白銀の稲妻が、空間に満ちる。

エクスが一度指を鳴らすと、その度に空が瞬いた。

発射地点から着弾地点まで、ほとんど時間に差がない。

けれどそれを、光の粒子によって強化されていた千里の瞳は、
確
実に捉えていた。

「【断て、光輝！】」

閃煌剣を振るう度、光が輝いてエクスに飛来する。

だがエクスは、余裕の表情で攻撃を避けていた。

「さて、避けるのにも避けられるのにも飽きてきたぞ？チサト」

エクスはそう言うと。右手を前に差し出した。

そして手招くように手を握ると、一気に開いて手の平を千里に見せる。

「【雷霆／散開】」

エクスの詠唱に合わせて、大きな雷球が出現する。

それは瞬く間に分裂していき、気がつけば百を超える雷球を生み出していた。

「【雷針／無限震域ッ！】」

「【遮れ、光盾っ！】」

円形の盾が生み出され、避ける隙のない電撃の針を防ぎ続ける。

このまま防いでいたら、終わらないだろう。

針を一撃放つただけでは雷球は消えず、未だに射出機としてその場に残っていた。

「【行け！】」

千里の声と共に、光盾が進む。

それは直ぐに弾丸のような速度を持ち、エクスにつき進んでいった。

「クツ……【雷霆／集中】」

エクスの詠唱に合わせて、針を吐き出していた雷球が、エクスの

手の平に集まる。

やがてそれはバチバチと大きな音を立てて、形を大きな槍に変えた。

「【雷臨ノ大槍閃ツ！】」

ズドンッ

稲妻の槍で切り裂かれ、光盾が消滅する。

その隙に、千里はエクスの更に上空まで飛び上がっていた。

ここで一直線に振り下ろせば、流石のエクスも避けられないだろう。

「普通には無理でも、私は吸血鬼　どうとでもなるのだよ」

「はあああつつつ！！！！」

光の剣が、空を割る。

その輝きを見るもの全てを圧倒し……しかし、虚空を斬り裂いた。

「えっ?!」

「【霧化】……残念だったな、チサト」

エクスが出現したのは、千里の正面十メートル場所だった。

そこでエクスは、剣を振り下ろした体勢から戻れていない千里を見据える。

「その身が半ばまで焼けただけたとしても、

我が眷属として蘇らせ悠久の時間を与えることを、約束しよう」

大振りに構える槍に、エクスは更に電撃を纏わせる。

月から力を得る種族である吸血鬼^{エクス}は、月影の首飾りによってその

力を増していた。

「【雷煌／大閃槍刃ッ！！】」

……【パージ】」

エクスが、身の丈の三倍ほどになった槍を投げる。

と同時に、千里はマガジンを外し、そして新たなマガジンを向けた。

強力な攻撃に対して、避けることも弾くこともできないのなら。

「【ブレット・ロード！】」

奪ってしまえば、いいのだ。

白銀の稲妻が、千里の左手に持たれたマガジンに、吸い込まれていく。

千里の視界を、黄金によって塗りつぶすほどの極光の中、彼女は左手に力を込めた。

「【マガジン】」

稲妻が轟音と共に吸い込まれ、消えていく。

その後に残るのは焼け焦げた少女ではなく、マガジンを剣の鏢に差し込む千里の姿だった。

「セツト】」

目を睨るエクスの前で、千里は剣を掲げる。

新たな力が装填されたマガジンは、煌億剣と共に黄金の電撃を走らせていた。

五つ目のマガジン、それに内包せしは、光とは異なる黄金。

「【イグニッション】 “雷響剣―ミールイグゼ”」

雷迅を奔らせながら、黄金の剣真が伸びる。長さ六十センチほどの剣真だ。

だが特筆すべきは剣真ではなく、その柄にあった。

―メートルと少し程度まで伸びた、黄金の柄。

元々の煌億剣の全長を合わせて約―メートル十五センチ。低学年の小学生ほどもある。

その上に稲妻の刀真を合わせれば、千里の身長を優に超える。

槍と剣を合体させたような、稲妻の大槍だった。

「クッ……ハハハッ！」

私の力を掠め取るか。流石はこの私が認めた女だ、チサトッ！！夫婦ならば力を共有するのモまた、悪くないッ！」

エクスは、愉しそうに笑う。

事実心の底から楽しんでいるのだろう。

喜色に満ちた笑みは、いっそ清々しいほどに狂氣的だ。

「【雷霆ノ集中】」

大きな雷球を四つ生み出し、分裂させることなく集中させる。

そして再び、先程千里に放った槍を構えた。

「力を貸して……“陽光を携えし、未来への導き手―イルリス―イルリウラス”」

光の翼を巨大化させて、羽ばたかせる。

すると周囲に光の羽が降り注ぎ、風に舞ってエクスへ一直線の道を造った。

その道を見据えて、千里は左手を引き槍の先端をエクスに向け、鐔の近くを右手で掴む。

「今度こそ、終わりだ！【雷煌／大閃槍刃ッ！】」

「奔り穿て、黄金の稲妻【雷響・煌億閃刃っ！！】」

エクスが槍を投げ放った、瞬間。

千里の姿が、かき消える。

光の羽の中を槍が通過する度に、小さな破裂音と共に千里の身体が加速されて、雨も風も音も色も光りも 全てをその場に、置いていった。

……………ゴォンツツツ

音が戻った時、千里はエクスの遙か後方に浮かんでいた。

光の道は未だその場に残り、エクスの稲妻と交差しているように見える。

もう千里は、その場には居ないのに。

「な、に？」

エクスの呆然とした声が、千里に届く。

稲妻が通り抜けたように、エクスの身体には右肩から左腹にかけて斜めに火傷が走っていた。

千里の姿を捉えることができなかつたせい、真紅の双眸が驚愕から見開かれている。

「ぐ……まだ、終わらんぞ！」

「【パージ・マガジンセット】」

雷響剣を切り離し、閃煌剣を生み出す。

爪を以て飛びかかるエクスの動きは速いが、斬り裂かれたせいか本来の速さではない。

「おおおおツツツ！！」

「しぶといっ……でも！」

振り向き様に、一閃。

他者の悪徳を斬り裂く黄金が、質量を以て煌めいた。

エクスの身体に刀傷が刻まれる。

先程までとは逆、左肩から右腹にかけて斜めに走った傷から、鮮血が吹き上げられた。

「が、はッ」

エクスの身体が、ゆっくりと落ちる。

悪徳を斬るには、幻朧剣では無理だ。

身体に傷を残しても、千里は相手を殺そうとはしない。

それでまだ追いかけることになっても、千里は他者を殺めない。

その想いが形となったのか、エクスの身体に刻まれた裂傷が、漂っていた光の羽によって消滅した。ダメージは残っているので、直ぐに復活することはできないだろうが。

「はぁ……終わった、のかな？」

甲板に墜落して起き上がらない、エクスノの姿。それを見て、千里は小さく息を吐く。鎧袖一触、その刹那の間に掴んだ光。

千里の左手の中に毅然と輝く　月影の首飾り。

「手癖が悪いみたいで、なんかあれだなあ」

そう呟く表情は、どこか苦い。

スリの技術なんかあっても、仕方がない。

そう言いたげな苦笑を浮かべて、佇んでいた。

「千里ーっ!」

「ナーリヤ……今行く!」

滑空し、ナーリヤの元へ降り立つ。

ナーリヤは怪我一つ無い千里の姿を見ると、安堵の息と共に微笑んだ。

「良かった、無事みたいだね」

「うん。ナーリヤも」

微笑み合って、互いの無事を確認し合う。

その頃には、徐々に陽光が差し込まれ始めていた。

「ところで……さっきのことだけど」

ナーリヤの言葉に、千里は再び苦笑する。

どちらも落ち着いてきたのだろう、冷静に話ができそうだった。

「ちょっと追い詰められたけど、ひどいことはされなかったよ」

「最初に頷いたのは？」

「エクスが……これを持っていたから、ついそのことかと思っちゃった」

千里が掲げた首飾りを見て、ナーリヤは得心がいった表情で頷いた。

漸く、厄介な誤解を解くことができた。

だがそんな風に安心している時間は なかった。

ミシッ

「あれ？なんの音だろう？」

耳を澄ませるまでもなく響く、何かが軋む音。

千里がそれに首を傾げて、次いでナーリヤが床を見る。

「千里、まずい！逃げるよ！」

「へ？って……わわっ」

甲板を横一直線に走る、ひび割れ。

ぼろぼろの幽霊船で嵐を航海しながら激しい戦闘を行った結果、船体に修復できないダメージを残していた。

真っ二つに割れ、その隙間にエクスとダークが滑っていく。

だが途中でダークが目覚まし、物を動かす力でエクスを浮かせて運んでいった。

その一連の様子を見て、千里は僅かに安堵する。

セクハラ被害はある物の、陽光で灰になったり水没でもされたら

寝覚めが悪い。

「飛ぶよ、千里！」

「うん！」

甲板から飛び降りて、アルトノアに着地する。

同時にレラの涙の力で高速発進すると、その瞬間、幽霊船が真っ二つに割れて沈んでいった。

「あ、危なかった」

「う、うん」

アルトノアの甲板の上。

二人は背中合わせに座り込む。

安堵に胸を撫で下ろし、ふと空を見れば、もう完全に青空が取り戻せていた。

「お疲れ、ナーリヤ」

「……うん、お疲れ。千里」

空の下。

呟いた言葉は、胸に落ちて消える。

海の上に、優しい安堵を残して　。

十章 第三話 Revenge of the Vampire ! 後編(後

今回で第十章が終了。

次回から、第十一章に入ります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次章もどうぞ、よろしく願います。

十一章 第一話 民主国スエルスルド

暗い雲が、空に広がる。

鬱蒼と茂る木々の中、微かな吐息が緑の中へ吸い込まれていく。

むせ返るような、血の臭い。

周囲の充満する死の臭いに、森に住む獣は反応していた。

『グルルル……』

涎を垂らして、紅い目に二又の尾を持つ黒い狼が、集まり出す。

群れの一部、四匹ほどのインウルフが、目の前の“餌”にありつこうと息を荒げていた。この森で倒れ伏し、森に還ることは最早避けられないだろう。

そうして獣に食われて、終わるはずだった。

けれど、それは誰の気まぐれか、偶然一人の老人が通りかかった。

「先見三手、二拍時雨」

黒い弓を持つ、大柄な老人。

撫でつけた白髪と口髭、鋭い目は空を射抜く青。

老人は先の三手を見据えて、上空へ一息三射、二連の矢を放って見せた。

『ガウッ』

飛びかかるようにしたインウルフを、その矢が制す。

倒れ伏す人間、その“少年”を取り囲むように突き刺さった矢を見て、アインウルフは小さく呻り声を上げた。

「去れ、黒き狩人よ」

『グルルルル……ガウツ！』

一喝。

その静かで、それでいて猛々しい声にアインウルフは走り去る。森は彼の領域だ。森の主でも出てこない限り、彼に敗北はない。

「人……子供か」

年の頃、十四歳か十三歳か。

倒れ伏す少年を見て、老人は呟く。

裂傷や打撲、それから火傷。

誰かに浚われて捨てられでもしたのか、血糊の付いた足跡などは見あたらない。

「まだ、息がある」

老人は少年に近づくと、そつとその身体を持ち上げた。

傷に響かないように背負い、なるべく急いで家に帰るようにする。

その間、老人は少年の意識が途絶えないように、声をかけ続けていた。

「大丈夫か？ 出身地や、自分の名前は言えるか？」

「な……ま、え？」

「ああそつだ。名前だ」

反応がきた。

そのことに軽い安堵を覚えながら、老人は先を促す。

どうにか彼の命を救おうと躍起になっている自分に、老人は小さく自嘲して、それでも少年を繋ぎ止めようと足掻いていた。

「な……………り…………… ……や……………」

「ナーリヤ？女性の名前か？」

「…………… ……」

途切れ途切れの言葉の中、聞き取れたのはそれだけだった。

曖昧だが、誰かの名を呟いたことはわかった。

だから老人は、気を失った少年が残した名を、記憶する。

それは、過ぎ去りし日の一幕。

老人と少年の、出逢いの光景。

晴れ渡った空の下、アルトノーアが波止場はとばに錨いかりを降ろす。

食料の調達と次の島の情報収集、そしてナーリヤの記憶を求めて立ち寄った大陸。

その初めて訪れる町並みを見て、千里は目を輝かせた。

「うわぁ……っ」

赤い塗りの木造建築。

反り返った瓦の屋根。

白と黒と赤のコントラストに浮かぶ金字の看板が、アジアンチックな雰囲気醸し出す。

千里にとっては非常に懐かしい、“東洋”の光景だった。

「みんな僕みたいな髪の色をしているんだね……」

「あ……言われて見れば、そうだね」

東洋は黒髪、というイメージがあった千里は、言われて初めて人を見る。

男性は、ゆったりとした袴のような服。

女性は、腰の高い位置にスカートがある着物のような服。

その黄色人種系の顔立ちには、黒髪黒目がよくマッチしていた。

「もしかしたら、ここに僕のルーツが」

小さく呟いたナリーヤの、声。

千里はそれに「良かったね」と、口にすることができなかった。わけもわからないまま、開きかけた口を閉じる。

同時に、彼女の胸に小さな傷みが走った。

「千里？大丈夫？」

「え……う、うん！それより、もっと見て回るうよ！」

「あ、ああ……うん。そうだね」

どうしても、素直に祝福することができなかった。

記憶が見つかるかもしれないと、諸手を挙げて喜ぶことができなかった。

懐かしさを覚える、中華風の建物。

その町並みに綴られるのは、漢字ではなく見慣れない文字。

それが郷愁の心を強くしながらも、素直に懐かしいと受け入れられない。

大きな手を取って。

ズキンと、胸が痛む。

驚いた目が、優しい瞳に変わり。

ズキンと、胸の奥が疼く。

そっと手を握り返してくれて。

ズキンと、心を茨が覆いだして。

やがて柔らかい微笑みで、千里を包んだ。

ズキンと、ズキンと、ズキンと、千里の心を鋭い針が突き刺した。

「いたい、なあ」

眩きは、届かない。

痛みだけが、残る。

†

大きな朱色の門。

金のラインが眩しい塔。

見慣れた中華飯店の屋台には、見慣れない物もあつて。

千里はナーリヤと手を繋ぎながら、スエルスルードの町並みを堪能していた。

「千里、そろそろ宿を探そうか」

「あ、忘れてた！」

呆れた表情で、それでいて楽しそうに笑うナーリヤ。

その笑顔に、千里は少しだけ拗ねて見せて、それからいつもの笑顔に戻る。

会話を交わすことが、笑顔を交わすことが、なによりも大切で。その時間を一時でも長く、味わっておきたかった。

「人通りの多いところから、順に見てみようか」

「そうだね、まだ探す時間はありそうだし」

スエルスルードの港に構えられた首都、シエリエ。

その町並みをたっぷりと見て回ったような気もしたが、朝の早い時間から始めたのでまだ昼過ぎだった。

「そういえば、お昼ご飯もまだだね。ナーリヤ」

「そうだね、どこか屋台で買って食べようか」

周囲の屋台から漂う匂い。

油を使ったこってりとした料理の匂いは、空きっ腹によく響く。

そう認識した途端、千里はそつと腹に手を乗せて、苦い表情を浮かべた。

「あー、でも路銀が危ないかも。先に、狩り場を探して何か売った方がいいかな」

「そつか。私も手伝うよ、ナーリヤ」

「あはは、それは心強い」

一端街を出て周囲の森でも見て回れば、売れるような獣も居るだろう。

魔獣退治を斡旋して貰えばそれに越したことはないので、最初に向かうのはあまり活用してこなかった、ギルドが良いだろう。

ガシャンッ！

「っ………今のは？」

ナーリヤが鋭い目で、振り向く。

千里もそれに合わせて振り向くと、少し先で騒ぎがあった。

「喧嘩？いや………」

「女の人が、襲われてる！？」

腕を押さえて蹲る男性と、その前に立ちふさがる女性。

黒い波打った髪をポニーテールにしている女性はなんと勝ち気で、その姿が千里の中の“親友”のものと重なった。

「ナーリヤ！」

「援護するから、行って！」

「うん！」

人混みの真ん中で、ナーリヤが弓を構える。

こんな街中で矢を番えたナーリヤに、周囲の人がどよめいた。

「おい兄ちゃん、危ねえだろ！」

騒ぎに駆けつけようと走ってきたのだろう。

黒髪に白髪が交じった中年男性が、息を荒げてナーリヤを怒鳴る。だがナーリヤは自信に溢れた笑みを浮かべて、それに答えた。

「大丈夫ですよ。……“誰にも”当てませんから」
「なに？」

大きく右足を上げて、落とす。

すると、足踏みの音がしなやかに響いた。

その反響音こそが、ナーリヤの一手。

「【領域把握】 先見三手、二拍時雨」

一息三射、二連六矢。

上空に放たれた矢は、大きな放物線を描く。

そしてその先では、千里が一直線に走っていた。

「チンピラが、六人かな」

煌億剣を抜き放ち、マガジンをセットする。

こんな人混みで大立ち回りはできないから、見た目でどうにか竦ませることができるよう、最近手に入れた力を解放した。

「背中の男を出せば、許してやるよ」

「ハッ、よってたかつて恥ずかしくないのかい!？」

「君!よすんだ!俺のことは良いから、逃げる!」

「へっへっへっ、俺たち“影爪会”に逆らおうってか?」

どうやら、男性と女性は知り合いではなかったらしい。

それでも襲われている男性を見て、歯止めが利かなくなったのか。文句を言いながら助けてしまう姿が、親友のものとますます重なる。

「野郎ども、一斉に……」

タタタタタンッ

「……う、うわっ!？」

上空から降り注いだ矢が、男達の足を止める。

驚いて身動きがとれなくなった男達。

その輪の中心で男性と女性を庇うように、千里が降り立った。

「雷響剣―ミール＝イグゼ」

その手に、黄金の電撃を纏わせた槍剣を掲げて。

「な、魔法使いか!？」

「私の稲妻で丸焦げになりたくなかったら……」

ジ、ジジ、ジジジ、ジジジジジジジ……

断続して響く、電撃の音。

暗雲から降り注ぐ稲妻を具現化したような光に、男達はたじろいだ。

「……今すぐこの場から、退きなさいっ!!」

ジジ……ガアアンツ

「ひいっ……や、野郎ども！撤退だ！」

男達の足下に、解放された稲妻が落ちる。

ある程度なら電撃を操る事が出来るのが、雷響剣の特徴だ。他にも、この剣には“超加速”じみた能力も備わっている。

千里は男達が逃げていったのを見ると、マガジンを外して剣を収めた。

そして、息を吐いて、振り向く。

「大丈夫？」

初対面なのに敬語が取れてしまっている。

親友と重ねてのことなのだが、千里自身はそれに気がついていなかった。

「す、すごいじゃないか！アンタ、冒険者かい!？」

「う、ううん、私はただの旅人……かな」

女性に詰められて、その勢いにたじろぐ。

よく見てみれば、千里とさほど年が離れて無さそうな、少女の顔つきだった。

身長が女性にしては高く、故に遠目ではわからなかったのだ。

「ぐ、っっ」

「あつ！そうだった、アンタ大丈夫かい？」

女性が、思い出したのか後ろを向く。

自分が背に庇っていた男性が、腕を押さえて蹲っていた。

「彼は？」

「アイツらに殴られてたのさ。それで、見て居らんなくてさ」

よく見れば、腕を押さえて冷や汗を掻いていた。

おそらく折れているのだろう。早くどうにかせねば、後遺症が残ってしまう可能性もある。

「見せて」

だから千里は、そっと男性の側にかがみ込んだ。

手の平から光を出現させて、それを優しく男性の腕に当てる。

「【光よ、癒せ】」

「へえ、すごいねえ、魔法って」

女性の声に曖昧に笑いながら、千里は男性の腕をあつという間に癒してしまった。

雷と光の二属性を操る上に、骨折をも瞬時に治すほどの腕前。

そんな本職の魔法使いが見たら卒倒してしまいそうな光景も、魔法の知識が少ないその場の人間達から見たら“こんなこともできるのか”程度のものであった。

「あ、ありがとう。君は……？」

「私は千里。高峯千里。ただの旅人」

顔上げた男性は、やはり幼さの残る顔立ちだった。ナーリヤとさほど年が違わないくらい、少年だ。

少年は顔を上げて、千里を見たまま動かない。

黄金の輝きと共に降り立った、少女。

その姿に、少年は 確かな“熱”を宿した瞳で、彼女を見ていた。

「チサト……本当にありがとう。できれば君たちに礼がしたい」

少年は千里と少女に、そう告げる。

屈んだ千里の手を、両手で握りながら、彼女に詰め寄ろうとして……。

「ごめん、遅くなった」

その手を、千里の身体を、少年から引き離された。

側に駆け寄り、千里の肩に手を回して引き寄せたナーリヤ。

側に立ったナーリヤが微笑むと、千里もまた可憐な笑みを浮かべる。

そんなナーリヤの様子に、少年は小さく眉をひそめ、そしてすぐに笑顔の下に隠した。

「君が矢を放ってくれたんだね。ありがとう、助かったよ」

「いや、構わないよ。偶然通りかかって放って置けなかったただけだから」

「何かお礼がしたいんだが、時間をくれないか？」

「残念ではあるんだけど、これから宿を探さないとならないんだ」

一触即発。

そんな雰囲気の流れていることに気がつき、千里はたじろぐ。どうしていいかわからずナーリヤの服の裾を掴むのだが、それがナーリヤと少年の間に散っていた火花を、大きくした。

「アンタ、宿屋を探しているのかい？ だったら……」
「……兄ちゃん、だったらウチに来な！」

少女の声を遮って、中年男性が声をかける。
ナーリヤが弓を構えた時に注意をしたこの男性に捕まっていて、ナーリヤは到着が遅れたのだ。どうやら、さんざん感心されていたようだ。

「父ちゃん！？」
「街中で大立ち回りなんかするんじゃないねえ！」
「あだっ！？」

少女の頭を、男性が小突く。
どうやら彼女たちは、親子関係にあるようだ。

「オレはシムットウイ、でこっちは娘のシムィエル。
少し離れた所にある宿屋、リユーウオンの店主だ！」

男性の紹介に、千里とナーリヤは目を瞪る。
声を上げて笑うトウイの姿からは、面倒見の良い親父肌な雰囲気が出ていた。

尤も千里は、名字名前の順番が東洋風なことにも驚いていたようだが。

「あ、でもナーリヤ。お金は……」
「それなら！」

置いていかれていた少年が、直ぐに割って入ってきた。
そして、にこやかな笑顔で提案をする。

「丁度良い仕事があるから、是非引き受けていただきたい」

「丁度良い、仕事？」

「ああ、そうだ。チサト、是非君に 俺の護衛をして貰いたい」

女の子への頼み事にこれは、情けないと言われれば情けない気もするが、狙われていることには違いない。割と切実な問題なのだろうが、意図的にナーリヤを除外して話している当たり、本気だ。

「俺の名前はウエン＝リヤウ、と言えば聞いたことがあるかもしれないが」

「ええ?! アンタがかい?!」

来たばかりなので、千里とナーリヤはわからない。

けれどシム親子は気がついたのか、目を瞠っていた。

「ああチサト、あの人はこの国の“議員”なのさ。改革派の“最年少議員”」

「ぎ、議員って……すっごく偉い人なんじゃ!？」

「いや、俺はまだまだ下っ端役人だよ」

思わぬ出自に、千里やナーリヤはもちろん周囲の人間まで驚く。

議員の顔を知らないものなのか、と千里は思いはしたが、すぐにそれを打ち消した。

テレビも写真も無いのに、全ての人に容姿が伝わったりはしないのだろう。

「どうかな？」

「とりあえず、宿には来るだろう？」

シム親子と、リヤウ。

二人に詰め寄られて、千里は頬を引きつらせながらナーリヤを見上げた。

「どうしよう、ナーリヤ？」

「とりあえず……他に選択肢は無さそうだね」

渋々と頷くナーリヤを見て、シム親子は諸手を挙げて喜んだ。
リヤウもそれを見て、満足げに頷いている。

「そういえば、二人はどんな関係なんだい？」

イエル言葉に、千里は薄く頬を染める。

だがナーリヤは、イエルの言葉を受けた上で、リヤウを鋭く睨んだ。

そして、気圧されたリヤウとナーリヤの様子に周囲が気がつく前に、答える。

「恋人です」

「あわわわ、ナ、ナーリヤ」

いつになく自信満々に言い切ったナーリヤに、千里は慌てる。

イエルトウイのニヤニヤとした視線が、痛い。

「そう、なのか？チサト」

リヤウが千里に確認をすると、千里は目を泳がせながら、俯く。

そうして首から耳まで顔を真っ赤にして、ゆっくりと、頷いた。

「う……………うん」

「そ、そうか」

リヤウがナーリヤを睨み、ナーリヤはただ千里の肩を引き寄せる。いつになく積極的なナーリヤに戸惑いを覚えながら、千里は今香水は使っていないはずだと自分に言い聞かせていた。

周囲には決して漏らさぬように、火花を散らしながら進んでいく。

スエルスルードの、二人の初日。

そこには既に、波乱の予兆が瞬いていた。

十一章 第一話 民主国スエルスルド（後書き）

今回から十一章。

今話は導入となります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。
次話もどうぞ、よろしく願います。

十一章 第二話 炎の中の絆

木材が焼ける臭いが、肌を焼く炎が、肺を冒す煙が。ほんの僅かな時間で、瞬く間に、刹那の内に広がった。

誰も彼もが、生まれたばかりの子供のように空に手を伸ばし、助けを求めて泣く。

そんな地獄の業火の中、一人の少女が走っていた。

足が纏れて転び、真っ暗な何かに躓いて転げ、身体を擦り傷だらけにして。

煙を吸って咳き込み、しゃがれた声で名前を呼び、涙に濡れた顔で懇願する。

助けて。

助けて／嫌だ／どこ／なんで？

助けて／お願い／どうして／いつから？

途切れ途切れに廻る思考が、意識の海で水泡を上げる。

助けてと、助かっていてと、少女の悲痛な声が、爆ぜる炎の音へ消えていく。

「にい、ねえ」

混乱して埋没していく思考。

その最中で少女は、最愛の人の名を呼ぶ。

自分にとってのヒーローの名前を、英雄の響きを口にする。

「たすけて、にいさん」

燃え上がる劫火。
炎によって焼け落ちた家が、ゆっくりと傾く。
少女の身体を覆う影に、嗚咽の中で兄の名を呼ぶ少女は気がつかない。

「たすけて、助けてよ……」

兄さんっ!」

少女の身体を潰さんと、倒壊した家屋が牙を剥く。
漸く顔を上げた少女であったが、最早襲い来る絶望からは逃げられない。

そう悟って、目を瞑った。

ドンッ!

頬にかかる、温かい水。

それが何であるか、少女は理解できなかった。
ただ導かれるように薄く目を開き、そして瞠る。

「ごめん、。大丈夫?」

「にい、さん?」

「くっ……あ……本当に、ごめ、ん」

苦しそくに息を吐く、兄。

その背に突き刺さった木材に、少女は目を瞠る。
だが何もかもが、遅かった。

「にげ、よう。ぼく、は……大丈夫、だから」

「だめ、だめだよ!じつとしてなきゃだめ!」

「大丈夫、大、丈夫、だよ」

そうして少年は立ち上がる。
黒い髪を頬にかけて、柔らかく微笑みながら
。

E
x
I

「……あ」

小さく息を吐いて、ナーリヤは目を覚ます。

見慣れない天井、畳に敷かれた布団、薄く光の差し込む窓。

ここは、昨日ナーリヤと千里が助けた親子が経営する、宿屋の一室だった。

「変な夢、見たな」

この地に着いてから、ナーリヤはずっと不思議な感覚を覚えていた。

国に、街に、大地に、何故だか強い心が籠もっているのだ。

それ故に、少し何かに触れただけで、勝手に記憶を読み取ろうとしてしまう。

「この部屋を使っていた誰かの記憶、かな？」

思い出そうとしたら、それだけでズキリと頭が痛んだ。

これはなにも夢の為だけではないだろう。

絶対に、昨日のことが影響している。

ナーリヤはそう判断して、大きく息を吐いた。

昨日、ナーリヤはリヤウとにらみ合うように宿屋へ行った。

そこで早速リヤウが依頼について詳しく話そうとしたのだが……

それは、叶わなかったのだ。

「まさかいきなり、宴会とはなあ」

一息吐く暇もなく、ナーリヤたちは宴会の主演へ立てられた。

感謝と歓迎の宴と銘打たれたそれで昼間から酒飲みの時間となり、

流れは何故かリヤウとの飲み比べに移行。

意地になって飲み過ぎたナーリヤは、リヤウよりも一杯分多く飲んで、勝鬨の声と共に意識を失ったのだ。つまり、二日酔いである。

「はあ、情けない」

こめかみを押さえながら、ナーリヤはそう息を吐く。

まだ月も出ていなかったはずなのに、目覚めてみれば早朝だ。

習慣的に早く起きられたのだろうが、それが無かったら何時間寝ていたことが、わからない。

「僕としたことが」

気に入らなかった。

千里を見る、黒い瞳。

黒曜石のような瞳に熱を込めて、じっと見つめるその視線。

それをナーリヤは、どうしてもかき消したかった。

「っ」

起き上がり、外套を羽織る。

嵩張るので、武器は部屋に置いておくことにした。

襖を開けて部屋から出る。

ブーツはなく、ナーリヤは靴下代わりの布だけを足に巻き、そのまま階下に降りていった。ここで初めて、ナーリヤは自分が寝ていたのが二階だと言うことに、気がついた。

「あれ？早いね」

「あ……おはようございます、マエルさん」

黒い髪に黒い細目。

髪を後ろで適当に纏めた、恰幅の良い女性。

彼女はこの宿の女将でありイエルの母、マエルだ。

「ああ、おはよう！で、どうしたんだい？」

「そうだ、水をいただけますか？」

「あいよ、座って待ってな！」

畳の上を歩き、木の机の前に座る。

どこも椅子にテーブルという暮らしだから、どうにも落ち着かなかった。

スエルスルドの東部は畳の習慣で、西部は机と椅子の習慣だと、ナーリヤは宴会で聞いていたのを思い出す。思い出すまで時間がかかってしまったのは、酔いのせいだろう。

「あつれ〜？早いねえナーリヤ」

「イエル……」

そうして足を崩して待っていると、座敷にイエルが顔を出してきた。

手には桶を持っていて、そこにはたつぷりと水が汲まれている。けっこうな重さがありそうな物だが、イエルは慣れているのか、それを軽々と持ち上げていた。

「そうだ、ちょっと聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「うん？あいよ、ちょっと待ってな」

マエルとよく似た、快活で気さくな雰囲気。
声を聞いているだけで、元気を分けて貰えるような、そんな性格
だった。

イエルはマエルと一言二言話すと、手に陶器のコップを持って戻
ってきた。

ナーリヤが頼んでいた水も、ついでに持ってきてくれたのだろう。
ナーリヤの前に水を置くと、イエルはそのまま彼の正面に座った。

「それで、聞きたい事って？」

「僕の部屋なただけ……」

「……ああ、寝心地悪かったかい？」

「あ、いや、そんなことはないよ。良い部屋だった」

不安そうに首を傾げたイエルに、ナーリヤは慌てて弁明する。
慣れていないと言っても、布団の寝心地は不思議と落ち着いた。
寝ていると優しく鼻孔をくすぐる量の香りも、好きだった。

「そっか、ありがとう。って、ことは……なにが？」

「ああ、っと。少し気になったただけなただけ」

ナーリヤはそう前置きすると、“なんでもない風”を装う。
無用な心配をさせる気は無いし、させたくもないのだ。

「……僕の部屋って、長い間誰かが使ってた？」

「ああ、なにか残ってたかい？」

「うっん、ちょっと……よく使われている感じが、したから」

他者の記憶を、夢として見る。

リリアのところで見たジャックの夢。

その時は、城に満ちた強い思念によって、ナーリヤは蝕まれた。その時と同じだったら、そう考えてしまったのだ。

「あそのこの部屋は、あたしの友達がよく泊まるんだよ。昔しばらく寝床を貸してたことがあってさ、それ以来たまに泊まっっていくのさ」

ならばこれは、彼女の言う“友達”の夢か。そう考えはしたが、果たして“たまに”泊まる程度で、思念が移るのか。

試したことがない以上わからず、ナーリヤはただ首を傾げた。

「その友人は、どんな人なの？」

「どうしたのさ？そんなこと……」

「いや、ずいぶんと大切に使われていたからね。」

「……もちろん、イエルたちの管理の良さもあるんだろうけど」

流れるように、嘘を吐く。

照れて笑うイエルを前に、ナーリヤは小さく自己嫌悪していた。良心の呵責で、胃と胸が痛む。

「ふわ……おはよー」

そうしていると、ふらふらと千里が起きてきた。

ナーリヤと一緒に漬れたリヤウは未だ降りてこない。

おそらく、まだ立ち直れていないのだろう。酔いから。

「おはよう、千里」

「うん、おはよーナーリヤ」

千里がナーリヤの隣に正座すると、ナーリヤは自分の分の水を千里の前に置いた。

寝ぼけた千里はそれをとくに感慨なく受け取ると、飲み干す。

「ああ、冷たい。目が覚める……ってこれ、ナーリヤのじゃなかったの？」

「いや、僕はもう目が覚めちゃってたから。いいから、飲んで飲んでというか……の、飲み干しちゃった」

申し訳なさそうにコップを持つ千里を見て、ナーリヤは小さく笑う。

いいから、と背を叩いて微笑むその表情は、優しげだ。

「あー……いいかい？」

「あ……う、ごめん」

「イエル？どうしたの？」

首を傾げる千里に、ナーリヤはいきさつを伝える。そういえばまだ、話の途中だった。

「そっか、ねえナーリヤ？」

「うん、ちよっと、ね」

いきさつを聞いた千里は、ナーリヤに目配せをする。

記憶を読んできましたのかと、視線に心配の色を乗せていた。

ナーリヤはそんな千里に頷きながらも、大丈夫だと笑ってみせる。

「……もうアンタら結婚しちまいなよ」

「うえっ!?!?」

眼を細めて頬杖をつき、イエルはそう言った。
千里はそれに肩を跳ねさせ、ナーリヤは赤い顔で目を逸らす。
仲が良いのは良いことだが、目の前で一々いちゃつかれては、たまらない。

「さて、ナーリヤの部屋によく泊まる子だったね」

「はい……お願いします」

頂垂れて敬語になるナーリヤに、イエルは苦笑を浮かべながら続ける。

「スエルスルドの特徴でもあるんだけど、黒髪黒目でね。」

「こつ……腰の辺りまでまっすぐ伸びた、綺麗な髪の女の子さ」

スエルスルドの民は、誰も彼も黒髪黒目だ。

焦げ茶程度の茶髪もいるにはいるが、千里のように栗色の髪の人
は見あたらぬ。

「明るくて人懐っこい、まあ可愛い子だよ。私の二歳年下で、十四
だったかな」

そう語るイエルの瞳は、優しげだ。

よほど仲が良いのか、友人と言うよりも実の“妹”を話している
かのようにであった。

「今日も来るから、その時に会ってみると良いよ」

「ああ、そうさせて貰うよ。ありがとつ、イエル」

会えるというのなら、会っておこつ。

ナーリヤはそう何故だか思っ、頷いた。

別に会う必要なんて、ないはずなのに。

「ぐ、ぬ……お、おはよう」

「リヤウさんじゃないか、おはよう」

頭を抑えてふらふらと起きてきたリヤウに、イエルは苦笑する。

二日酔いが辛いのか、顔面蒼白だ。

「ほら、水だよ！」

奥からマエルがやってきて、リヤウの前に水を置く。そうしてから、イエルを連れて厨房に戻っていった。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、チサト。いや、問題ないよ」

無理にでも、笑ってみせる。

無理をする理由が二日酔いというのは、なんとも情けない話だが。

「さ、さて、仕事の話、だが」

「む、無理はしない方が……」

たじろぐ千里に、リヤウは首を振る。

ここで千里に、無用な心配はさせたくなかった。

あの時、ナーリヤと合流した時、彼に見せたような可憐な笑顔が見たかった。

だからリヤウは、強く微笑んでみせる。

例え“あの”笑顔が返ってこないと、わかっているても。

「……君たちは、スエルスルードの“災害”のことを、知っているか？」

リヤウの声に、ナーリヤと千里は顔を見合わせる。
災害、と聞いても、思い当たる節はない。

「ナーリヤ、知ってる？」

「いや、僕は……あ、火、かな？」

昨晚見た夢。

焼け焦げる臭いが、まだ肺の奥に残っているような、そんな不快感を覚える。

「そうだ。ここ、シエリエは、前例のない大火災に襲われた。

……今からちょうど、“四年前”のことだ」

四年前。

その単語に、ナーリヤは眉を動かした。

「前日の嵐の際、落ちた稲妻が山に火を熾した。

瞬く間に火が広がり、それはスエルスルードの各街にも燃え広がったんだ。

その中でも一番被害がひどかったのが、山を背にすること、シエリエだった」

海と山に面した街、シエリエ。

瞬く間に広がった火は、この街を焼いた。

前日の嵐で疲弊していた民はこれに迅速に対処することもできず、後には焼け野原が残ったのだと、リヤウはどこか悔しそうに語る。

「その時、影で動く人間が居た。
焼けた家々から火事場泥棒を働き、土地の権利書を奪い、
そうして復興が進んだ時には既に、シエリエには莫大な財産を持
つ人間がいたんだ」

未だ、シエリエは当時の傷が癒えきっていない。

大火災の爪痕を抱いたまま、この地は悪意に翻弄されることにな
った。

人質をとり、金を流し、土地を掌握する組織。

それを側で聞いていたイエルは、苦み走った表情を浮かべて、唇
を噛む。

「アイツら、好き放題さ。」

門の米屋も丘の酒屋も、あつという間に潰しちまいやがった」

拳を強く握り、吐き捨てる。

彼らに逆らったものの末路は、皆似た様なものだった。

「あともう三年もすれば、復興を願う者達の手で彼らは追い払われ
るだろう。」

けれど、そうやって何時までも先延ばしにしていたら、新しい悲
しみが増えるだけだ」

そう語るリヤウの瞳には、強い決意が抱かれていた。

悪を野放しにしておけないと、そう語る強い声と目。

そこには、他者を強く惹きつける輝きが宿っている。

「十八歳で、政治の場に足を踏み入れることが許される。」

だから俺は十八でこの場に駆け上がった。全ては、新しい世のた

めに」

リヤウは現在、十八歳。

選挙によって政治家になり、まだ半年ほどだ。

だが彼は、人を惹きつける光によって、着実に準備を進めていた。

「新しい、世？」

千里の声に顔を上げて、リヤウは深く頷く。

気がつけば、ナーリヤも千里も、リヤウの声に呑み込まれていた。

「そつだ。準備は既に整っている。

次の議会、明日行われるこの議会で、土地に関する法案を議論する。

この日のために、政治の場に立つ前から培った全てを使えば、ヤツらの影をこの地から消し去ることができるだろう」

「だから、その“組織”は、君を狙っている、と」

ナーリヤの言葉に、深く頷く。

積み重ねてきた努力、培ってきた経験、築いてきた人と人との繋がりが。

ここで漸く呪縛から解き放たれるというのに、悪意の影はそれを邪魔する。

「どうか明日の議会まで、俺の命を守って欲しい。

俺が議会に参加できるよう、その力を振るって欲しい。

シエリエから……スエルスルドから、“影爪会”の闇を払っためにッ……！」

頭を下げるリヤウを見て、千里はナーリヤを見上げた。

この地に、千里は元から用はなかった。
必要なのは、この次に訪れる島にある“秘宝”なのだから。

それでも今こうして話を聞いて、それから顔を上げた千里のその栗色の双眸には、揺らぎ無い決意の光が宿っていた。

「ナーリヤ」

「うん、わかってるよ」

「ありがとう。……リヤウさん！私たち、その依頼、受けます！」

そう正面から言い放った千里に、リヤウは頬を綻ばせる。

そして、今までの大人びた雰囲気塗り替えるような、少年らしい笑みを浮かべて頭を下げた。

「ありがとう。本当にありがとう！チサト……と、ナーリヤ！」

リヤウの言い方に引っかかる物があったが、それでもきちんと礼は言ってくれたので、ナーリヤは苦笑しながらもリヤウの礼を受け取るのであった。

「遅くなって悪いね、朝食だよ！」

「お待ちどおさまっ」

マエルとイエルが、盆に食事を載せて戻ってきた。

奥からは、トウイが鍋を振る音が響いている。

「おいしそう……」

千里が、並べられていく料理を見て目を輝かせた。

鼻孔をくすぐる香りに思わずお腹が鳴りそうになり、慌てて手で

押さえながら身を乗り出す。その姿に苦笑しながらも、ナーリヤは生唾を呑み込んでいた。

透明なタマゴのスープ。

日本のそれより細長い米。

鶏の唐揚げ甘酢風味に、さつと炒めた野菜。

添えられている漬け物は、キュウリや大根のもののように見えた。

「エルリスの恵みと、イルリスの導きに感謝を……いただきます」
「いただきます」

ナーリヤに続いて、千里も胸に手を当てた。

そんな二人の言葉に、マエルは快活に笑った。

「ああそれ、“食事と調理人に感謝を”ってやつだろう？いやあ、懐かしいねえ」

「し、知ってるんですか?!」

思わず乗り出した千里に、マエルは驚いて少しだけ腰を引かせる。だがすぐに、頷いて、再び笑って見せた。

「ん、ああ、そうさね。この宿屋の先々代が、教えてくれたんだよ。なんでも、ふらりとやってきた旅人が、その作法をしていたとかで」

「その人は、その、どちらへ？」

「さあてね。もう居場所がなんたら〜って言ってたらしいけど……
ああそうだ」

マエルは話の途中で立ち上がると、手をぼんと打って奥へ走っていった。

そんなマエルにイエルは苦笑を零すと、食事を促す。

「まあ話は後にしてさ。今はひとまず、食べちゃいなよ」

「う、うん、そうだね。冷める前に食べようっ」

戸惑いから立ち直って、箸を持つ。

思えば、故郷の物よりも少し長いが、箸を持つのも久々だ。

千里はそう夢の中でのことも合わせて故郷を思い出し、感慨に耽る。

集めるべき秘宝も、あと一つ。そうしたら、帰れる可能性が見えてくるのだ。

「千里？」

微妙に記憶でも読んだのか、器用に箸を持つナーリヤが声をかける。

それに千里は我に返り、顔を上げた。

「大丈夫。さ、食べよう」

「……うん、そうだね」

今度こそ、料理を口に運ぶ。

今はただ、この時間を楽しんでいようと。

朝食後、座敷で待っていると、仕事を終えたトウイが戻ってきた。快活に笑うその手には、大きな木箱を抱えている。

「いやあ、待たせちまって悪いな」

「いえ、私も気になっていたので」

ナーリヤと千里と机を挟んで正面に、トウイはゆっくりと座った。そして木箱を机の上に置き、改めて向き直る。

身辺警護が必要なリヤウは、念のため部屋の直ぐ外にいたので、こうして三人だけの場が作れたのだ。

「今から話すのは、俺が爺ちゃんから聞いた話なんだがな。

そうさな、ちょうど六十年前のことだ。

爺ちゃんがこの宿屋を開いていた頃、ここに来たのは、黒い着物を着た男でな」

男は、自分は僧侶である、といったらしい。

そう己の生業を零すと、男はご飯とスープだけを懐かしそうに飲んだのだという。

その瞳に、憂いを乗せて。

「故郷では、結局自分の欲しい物は得られなかった。だから、こゝで探す」

そう言っていたらしいと、トウイが続ける。

どんな日々を送ってきたのか知らない。

六十年前 昭和の日本を生きた、僧侶の男性。

彼がいったい、何を思っ生きていたのか。

「そうそう、一度自分を見つめ直したい。だから魂は置いておく」
「って言ってな」

トウイはゆっくりと木箱に手をかけた。

その様子を、その手を、その箱を、二人はただじっと見つめる。

「同郷の者がこの地に来たら、渡して欲しいとな」

「これって……」

開け放たれた木箱。

そこに入っていたのは、一振りの剣だった。

黒塗りの鞘に漆黒の柄巻。

鍔も同様に黒色の、細い片刃の剣。

「日本刀……」

全長百四センチ弱ほどの“刀”が、そこに安置されていた。

「手に取ってみても？」

「構わないと思うぜ」

昭和という、近代の日本。

すでに刀が失われ、かつ仏の道に身を置いてなお、刀を持っている僧侶の男。

彼はいったい何を思っていたのか。何を思って、置いていったのか。

寂寥から小さく俯く千里を余所に、ナーリヤは木箱から刀を手にとっていた。

「これは」

抜き放った刀。

その刃はぼろぼろで、見る影もない。

だが刀真に薄く刻まれた漢字などが、千里の郷愁を僅かに大きくさせた。

「オレの親父がまだ駆け出しの頃、

初めて親父のスープを美味いと言ってくれた男のモンだ。

あの男のためにも、受け取ってくれや」

千里とナーリヤは、トウイの言葉に確かに頷く。

ここに置かれたのは、男の心なのだろう。

武士の魂は、刀。書面やテレビの向こうでしか、知らない感情。

けれど日本という国に生まれ育った千里は、何となくではあるがその気持ちを感じ取っていた。

侍でいることが、窮屈な世界。

その世界においてなお、刀を提げ続けた男の、気持ち。

「僕が持っていてもいい？千里」

「私は煌億剣があるから……“無茶”しないって、約束してくれるなら」

千里はそう言うも、その約束の効果をあまり期待していなかった。他のことならばまだしも、ことこのことに関しては、ナーリヤはきつと破ってしまうことだろう。

「うん……わかった。ありがとう」

言いながら、ごく自然にナーリヤは、自分の右側に刀を置いた。

千里は知らないが、これは刀を置く時の作法だ。

正座から抜刀するような意図がないと示すために、自分の右側に刀を置く。

そんな知識を、ナーリヤは手に取ったほんの一瞬の間に読み取っていたのだ。

……っ！

「うん？客か？」

外から聞こえてきた声に、トウイは立ち上がる。

そうして一息吐いた千里とナーリヤは、互いに顔を見合わせた。

「ここにも来ていたんだね、流れ人」

「うん……お待さんのお坊さん、だったのかな」

感慨に耽る千里に、ナーリヤは優しく微笑みかける。

こうして直ぐに人の悲しみを悼んでしまうのは、千里の良いところであり、それ故にナーリヤは彼女を愛おしそうに見ていた。

「今、入っても良いかい？」

「あ、どうぞ」

聞こえてきたイエルの声に、千里は反射的に返事をした。

するとイエルは正座したまま襖を開けて、快活に笑いながらナーリヤを見る。

親子三人、実によく似た笑顔であった。

「さっきあたしが話していた女の子が来たよ。会っていくかい？」

「ああ、そっか……頼むよ、イエル」

「ナーリヤの部屋をよく使っていた子、だよな」

「うん、そうみたいだね」

気持ちを切り替えて、立ち上がる。

廊下にはリヤウが立っていて、その顔はどこか不満げだ。

千里の側にはいけないと言われたようなモノだったが、どうにも納得いかなかったのだろう。

「さて、明日のために一度自宅へ行きたい」

「うん、それじゃあこの後の今日の予定は、リヤウさんの家だね」

「そうなるな」

リヤウは、千里の笑顔に、喜色を含んだ笑みを浮かべる。

望んでいた笑顔、最初に会ったときのあの笑顔は未だみられない。それでもリヤウは、笑顔を向けられると言うことが嬉しかった。

もっとも、ナーリヤが千里から離れないので、嬉しく思うのと同

じくらしい苛立ちも覚えているのだが。護ってくれる以上、文句を言う気は無いのだけれど。

廊下を進み、玄関に出る。

裸足で移動や畳など本来に“和”の物で満ちているのに、着物や料理、建物の外装には“中”の要素が盛り込まれている。なんとも不思議な物だと、千里は苦笑を零していた。

「つと、君か。こんなところで何をしている」

「リヤウ！ちよつと、こんなところで何してるのよ?!」

幼さの残る高い声が、先を進んでいたリヤウにぶつかる。知り合いだったのか、どこか気安げだ。

「相変わらず元気だねえ。さ、ナーリヤ、この子が……」

イエルの視線の先。

そこには、一人の少女がいた。

腰まで届く長い黒髪は、癖のないストレートヘア。

瞳も同様に漆黒に染まっていて、大きく見開かれていた。

朱色の唇、スエルスルードの住人にしては、白い肌。

整った顔立ちの少女が、目を丸くしてその場に立ち竦んでいた。

「あーと、初めまして。僕は……」

「さん」

「……え？」

イエルの横を抜け、千里やリヤウには目をくれず、少女は走る。そして十分な勢いをつけて、ナーリヤの胸に飛び込んだ。

その衝撃でナーリヤは一步下がるも、少女を受け止めることで踏みとどまる。

「え？」

「ちょ、ちよつと、どうしたの？」

抱きつかれているナーリヤも、側で見ていた千里も、友人であるはずのイエルたちも、その状況に戸惑いを見せていた。少女の瞳が潤んでいて、今にも泣き出しそうだったのも、彼女たちの戸惑いに拍車を掛ける。

そして少女は、泣き笑いのような表情で告げた。

「会いたかった……また会えるって信じてたよ、“兄さん”っ」「え？い、いや、僕は」

興奮した面持ちの声。

ナーリヤはその空気にたまらず、一步下がって落ち着かせようとしていた。

少女から離れ 刹那、傷ついたように眉をひそめる少女 距離を取る。

そうして覗き込んだ少女の表情は、既に涙に濡れていた。

「本当に会いたかった。会いたかったの……リーヤ兄さん」

名前に、ナーリヤの奥で何かが声を上げる。

警告音にも似た優しい音色が、ナーリヤの心に緩く響いていた。

「え？あの、それって」

「私だよ、リーヤ兄さん。貴方の妹の“ナーヤ”だよ」

「 ナーヤって、え? 」

千里の言葉、止まる。

手がかりに呟いた言葉が、妹の名前だったのなら?

ナーリヤが本当に“ そう ” なのだとしたら、何故海を渡って王国にいたのかなど、それでも疑問は数多く残る。

けれど、今、そのことはさほど重要ではない。

そう感じてしまうほどの強い感情に、ナーリヤはふらりと、下が

胸の内を渦巻く感情を、ナーリヤは知らない。

いや、知る機会の無かった感情なのだろう。

千里がいつも感じていた 郷愁の想いなど。

「 兄さん? 」

「 僕、が……君、の? 」

笑みを浮かべて頷く、可憐な表情。

月に向かって咲く花のような、儂くも柔らかい笑み。

記憶の淵で、何かが音を立てる。

「 ナーリヤ? 」

千里の心配するような声も、今は届かない。

ナーリヤは集まる視線の中、ただ額に手を当てて目を瞠っていた。

ナーヤと名乗る少女。

リーヤと呼ばれた自分。

誰かの心の奥が、小さく音を立てた……。

十一章 第二話 炎の中の絆（後書き）

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

十一章 第三話 誰の為の笑顔

振り返った瓦の屋根。

黒い塗りの木造の屋敷。

奪ってきたもので造られた広大な敷地。

その一室に、一人の男が胡座をかいていた。

「まだ始末できんのか！」

禿げ上がった頭に、鎖骨に届くほどに伸ばした黒い口髭。

眉はなく、瞼は厚く、その双眸には淀んだ光が満ちていた。

「そ、それが、妙な邪魔が入りまして……」

それに答えたのは、数名の破落戸しうらくこだった。

黒一色の中華服に、白い爪を模した刺繍が施された黒い頭巾を被った男達だ。

バツの悪そうな顔で正座する破落戸たちに、禿頭の男は鼻を鳴らす。

男の名は、“ワン＝スベル”……この影爪会の、頭領だった。

「ウエンの一族に、これ以上邪魔をされてたまるか！」

……いいか、どんな手段を使っても構わない。絶対に始末しろ！」

「へ、へいッ！」

破落戸たちが走り去っていく様子を見て、ワンは苛立たしげに杯を掴む。

そこに満ちた白く濁る酒は、庶民では一生かかっても口にすることができないような、上等な酒だ。

「この栄光、この栄華……潰させはせんぞ、ウエン！」

怒りにまかせて投げた杯が、壁に当たって跳ね返る。
ワンのその顔には、醜い疑心の鬼が暗く笑っていた。
。

昼前の座敷。

湯気を立てる茶飲みの前で、ナーリヤは身体を強ばらせていた。

左に座る黒髪の少女、ナーヤに微笑まれる度に、右に座る栗色の少女、千里に睨まれる。

未だ状況を理解し切れていないナーリヤは、それに戸惑うことしかできずにいた。

記憶喪失であることを告げても、ナーヤの態度は変わらない。むしろ、献身さを増すほどの勢いだった。

「とにかく、だ」

そんなナーリヤ達を薄く細めた眼で見っていたリヤウが、ため息と共に告げる。

「俺には大事な仕事があるんだ。依頼を放棄されては困る」

「放棄するつもりはないよ。」

「……ということだから、戻ってから話を聞きたいんだけど、いいかな？」

ナーリヤが、ナーヤに告げる。

極力棘を含まないように発せられた言葉は柔らかく、その響きに千里が方眉を上げる。

板挟みに感じる冷たい空気に、ナーリヤは己が何時まで保つかわからなかった。

「また……行っちゃうの？」

「え？」

「また、帰ってこないの？私、そんなのイヤっ！！」

ナーヤの悲痛な叫びに、ナーリヤはたじろぐ。

その泣き顔が夢の中の光景と重なり、ナーリヤは何も言えなくなってしまう。

沈黙があり、離れた所にいるイエルも含めて、誰もが口を噤む。そんな状況に変化をもたらしたのは、リヤウだった。

「……一番大事なのは、明日の議会に出席するまでの護衛だ」

何を告げようと言うのか、リヤウの声は淡々としている。

俯いているため表情は何えず、どこか不気味な雰囲気だった。

「だからナーリヤ。君は“彼女”と話し合いを続けてくれて構わない」

そう言って、リヤウは顔を上げる。

気持ちを乗せて言葉を紡ぐその顔は。

「今日の所は、“チサトだけ”でも大丈夫だからな」

満面の、笑みだった。

千里の手を引いて立ちあがり、早足で部屋から出て行く。

あまりの展開に千里が着いていけないのを良いことに、リヤウは全力で歩き去っていった。

「くっ、そう来るとはッ！」

ナーリヤはその後を着いていこうと、慌てて立ち上がる。
だが、ズボンの裾を掴まれて、立ち止まらざるを得なかった。

「行かないで！……一緒に居て、リーヤ兄さん」
「あ……」

もう、リヤウたちの足音すら聞こえない。

ナーリヤは立ち止まってしまった己に不甲斐なさを感じながらも、ナーヤの手を振り払えずにいた。

振り返り、潤んだ瞳で己を見上げるナーヤを見返して、逡巡する。
喉が詰まったように声が出ず、それでもナーリヤは、ゆっくりとしゃがみ込んだ。

「ごめんね、行くにしても行かないにしても、やっぱり話し合っておきたいから」

ナーヤの手にそつと自分の手を重ねて、優しく振り解く。
残るにせよ残らないにせよ、曖昧な状況に身を任せたままにしたくは、無かった。

「きつと千里も、外で待っていてくれるから」

そう言っつてナーリヤは、宿の外へ走る。

きつと待っていてくれるから、待たせてはならないと走り、ブーツを適当に引っかけて外へ出た。

だ。。。

「千里っ！ あ」

そこに千里の姿は、無かった。

人混みに溢れかえった道は、数歩先を見ることも叶わない。

ナーリヤはその光景を見ながら、ただ呆然と立ち尽くす。

「入ろう？ 兄さん」

「ナーヤ、ちゃん？」

「ナーヤでいいよ。ほら、イエルが美味しいお茶を淹れてくれるから」

ナーヤは、ナーリヤの手を優しく掴む。

そして、後ろ髪引かれる思いで路地を見るナーリヤを、そっと宿へ連れて行った。

リヤウに手を引かれた千里は、靴を履く段階で我に返った。そして、リヤウの手を振り払い、立ち止まる。

「チサト……気持ちはわかるが、彼も“血縁者”かもしれない人間との再会くらい、噛みしめたいだろう」

リヤウが告げると、千里は何も云えなくなる。

ミドイルの村で聞いた、ナーリヤの事情。

セアツクに拾われる寸前、彼は誰かの名前を呟き、それを記憶のきっかけとするために名乗っていたのだという。

それがもし、妹の名前を呼び、それから自分の名を言ったのだとしたら。

優しいナーリヤのことだから、充分にあり得る可能性だ。

ナーヤとリーヤ。

合わせて “ナーリヤ”。

「待ちたいチサトの気持ちを、無碍にはしたくない。

俺の事情で付き合わせてしまっているんだ。嫌ならば、今からでも」

「ごめん、リヤウ。でも大丈夫だから。

だから、あとほんの少しだけ……待って」

千里はブーツを履くと、小走りで道に立ったリヤウに並ぶ。

そして、宿の中をじっと見つめた。

十秒、十五秒、三十秒。

そこまで待って、リヤウは千里の手を取る。

「やはり来ないようだ。もう行こう」

「あ、リヤウ！」

そのまま歩き出してしまったりリヤウに、千里は慌てて着いていく。最後にもう一度だけ振り返るが、そこにナーリヤの姿は無い。

千里はそのことに辛そうに眉を落とすと、気持ちに蓋をしてリヤウに付き従った。

……ッ

「ナーリヤ？」

振り返っても、そこに広がるのは人混みだけ。

もう宿の前すら見えないほどの雑踏が、視界と耳を覆ってしまっていた。

千里は後ろ髪引かれる思いを宿しながらも、今日の仕事を終えてから話し合おうと前を向く。

そうして二人は 僅かな差で、すれ違った。

宿屋の座敷、その机の前に二人は座っていた。

イエルの淹れてくれた緑茶を飲みながら、ナーリヤはただ隣の少女に相槌を打つ。

その度に少女　ナーヤは、太陽に咲く花のように、柔らかく笑うのだ。

「それでね、兄さん……」

甘くのしかかる声。

家族という名の絆。

失ったはずの自己。

家庭があり、過程を持ち、結果として家族ができる。

家庭があつて、家庭を失い、結果として絆が断たれる。
断たれたはずの絆、失ったはずの過程。

過程は未だ回復していなくとも、家庭に心は宿るのか。

ナーリヤは、胸を突く虚無感に、齒がゆさから目を伏せる。

「兄さん？」

リーヤという、少年。

ナーリヤは夢の中でしか、その姿を知らない。

第三者のような視点で流れた、あの地獄のような夢でしか。

「ねえ、ナーヤ」

「なあに？」

笑顔を眺めながら、ナーリヤは選択をする。

超えなければならぬ道程に、踏み込むために。

「君の言う“兄”は、どんな人だったの？」

ナーリヤの言葉に、ナーヤは目を瞬く。

そして、ナーリヤが“自分の事”と言わないことに、僅かだが悲しそうに目を伏せた。

だがそれも柔らかな笑みの裏に押し隠し、微笑む。

「優しいひと、だよ」

思い出を辿り、笑みを零すその表情は、可憐で。

「私に、何時も、どんなときでも、笑顔をくれる優しいひと」

夢い優しさに、満ちていた。

「つらいとか、くるしいとか、全部笑顔の下に隠して」

唇を噛み、瞳を潤ませる。

優しいな表情は、一転して後悔に包まれた。

「月明かりのように、かすかに笑うひと」

兄のことを、何も気がつけなかった。

そんな言葉が、聞こえた気がして。

ナーリヤは自分の胸に、強く右手を押し当てた。

「いつも、思うの。思って、いたの」

「なに、を？」

「リーヤ兄さんは、夢の中のひとなんじゃないかって」

「え？」

ナーヤに、リーヤという兄が居たことは、間違いのないことだ。

けれども、それでも、ナーヤは思うのだ。

「日が昇れば、消えてしまう私の夢。

だっていつも、みんなが笑う頃には、ひとりだけ傷を背負ってしまっていたから」

伏せられた瞳。

溢れ出た涙は頬を伝い、一筋の軌跡を残す。

その雫が、その表情が、その声が、ナーリヤの中で心にひっかかった。

どうして、いつもっ！

失ったはずの心から、少女の声が響いてくる。
その少女とは、誰のことだったか。
誰が己に、そう言ったのか。

答えは、出ているのではないか。

「兄さん」

「ナー、ヤ？」

声が震える。

喉が震える

肩が震える。

心が震える。

微かに呟かれた声に、ナーリヤは揺れる瞳を向けた。

「記憶が戻って欲しいって思う。」

でも、例え戻らなくても構わないって、思ってもいるの」

言葉が出ない、身を預けるように己に体重を任せたナーヤを、ただ受け止めることしかできなかつた。それが、当然の帰結であるかのように。

「あれが、あの時のことが、

兄さんにとって辛い記憶であったのなら、どうか思い出さないで」

ナーヤはナーリヤの胸に顔を埋めて、想いを吐露する。

「なんの翳りも無く、なんの苦痛もなく、私は兄さんと二人で暮らしたい」

「二人、で」

「そう。一緒にご飯を食べて、一緒に歌を唄って、一緒に笑い合っ
て」

二人……ひとりと、ひとり。

その言葉にナーリヤが思い浮かべたのは、栗色の少女だった。
だが直ぐに、その笑顔が、思い出せない。

ただ襲い来る記憶と記録の奔流に、ナーリヤは身を竦ませること
しかできなかった。

「私は、兄さんと 未来を、生きたい」

「ぼく、は……僕は」

戸惑い、言葉が出なくなる。

でもそれに頷いてはならないと、頷くべきではないと、誰かが胸
の内で言う。

なぜならば、ナーリヤには……最愛の人が、いるのだから、と。

「 僕は」

「ねえ、兄さん」

言葉だけでも、彼女から離れようとする。

だがナーリヤが何か言うよりも早く、ナーヤは柔らかに身を離し
た。

「私たちの家に、行ってみましょう。」

あの火災でも、街外れの別荘は残っていたから、ね。

記憶が戻るに越したことはないって、思つかもしれないし」

記憶が、戻る。

セアックに拾われる前、己が求めた自身のルーツ。それが戻るといふ言葉に、ナーリヤは何も云えなくなる。

「ね？行ってみましょう」

「う、うん……そう、だね　わかった」

何か切っ掛けがあれば、この胸の痛みも晴れるかもしれない。ナーリヤは自分に言い訳をするように、微かに頷いた。それをナーヤは、花開いたような笑みで、受け入れる。

「イエル！ちよつと出かけてくる！」

「あれ？もういいのかい？その……アニキ、なんだろ？」

「ふふ、その“アニキ”と、私の家に行くの！」

ナーヤの嬉しそうな表情に、イエルもつられて微笑む。年の離れた友人同士とはいうが、その有様は仲の良い姉妹のように見えた。

「ナーリヤ！……ナーヤを、よろしくな」

「イエル……」

背中越しに手を振るイエルに、ナーリヤは反応を返すことができない。ただ肯定とも否定とも取れない曖昧な笑みを残した。

「さ、兄さん！早く！」

ただ、今は、やるべきことをしよう。

そう決めたはずなのに、ナーリヤの足取りは重い。

思い浮かべるのは、視界を通る栗色の髪と、優しい匂い。
可憐な笑顔を思い浮かべて、その名を口にする。

「千里……千里、僕は」

名を口にしたら、たったそれだけの事で元気が沸いた。

「今行くよ、ナーヤ」

「兄さん？……うん！」

やれることをやろう。

考えていることは同じなのに、心意気がこんなにも違う。

ああ、これなら、頑張れると、ナーリヤは彼女の耳に届かないように
うに小声でそう零した。

向かう先は、街の外れ。

ナーヤとリーヤの思い出が、僅かに残る場所だ。

シエリエの中央にある、議事堂。

赤く塗られたその大きな建物は、スエルスルードの観光名所にもなっていた。

そこから宿とは正反対の方角へ進んだ場所に、リヤウの仕事場がある。

「議員たちには、寮に一人一人専用の部屋が与えられる。ここは、その一室だ」

議員たちが住む、社員寮のような建物がある。

赤で塗られた議事堂とは打って変わって、質素に黒白で塗られた建物。

中華風の外観に日本の平安時代の屋敷のような内装という、なんとも変わった建物であった。議事堂の側に居を構えるのは許されないうらしく、宿の方が近いというような場所まで離されているのだという。

「けっこう、片付いているんだね」

千里は、招かれた部屋を見てそう零す。

畳の上に置かれた座椅子と、木の机。

周囲に置かれた本棚には多くの書籍が並べられていて、綺麗に整頓されている。

窓辺に掛けられたすだれや、火の点けられていないランプなど、質素ながら上品な高級感が、あった。

「少し纏めなければならぬ書類があるんだ。

暇かもしれないが、待っていてくれないか？」

「うん。わかった」

千里はそう、ぎこちない笑顔で頷いた。

やはりまだ、気に掛かっているのだろう。

不安が、表情に残っている。

リヤウはその表情を見て、千里に気がつかれないよう眉根を寄せた。

見たいのは、彼女のそんな表情ではない。

花開いたような……千里のそんな笑顔が、見たいのだ。

「……俺の父は、立派な人だった」

書類を纏めながら、畳の上で正座する千里に語りかける。

視線は書類から話さず、ただ淡々と。

「リヤウ、さんの、お父さん？」

「リヤウで良い。……そうだ、俺の父だ」

リヤウは“さん”付けて呼ばれたことに密かに不満を抱きながら、続ける。

千里はそんなリヤウの様子に、小さく首を傾げていた。

「国より憂いを取り除き、民により良い安寧を約束する。そのために数多くの悪人たちを退ける政策を立て、
「当時から強い力を持っていた犯罪組織を、国から追い出してきた」
嬉しそうに語るリヤウの表情は、活き活きとしていて。
千里はそれにつられて、優しく微笑んだ。
リヤウは求めたモノとは少し違うが、それでも彼女の笑顔がみられたことに、嬉しくなる。

「俺は、そんな父の背中に憧れていた」

大きく、たくましい背中。

民の笑顔を己の糧に、弁論の場で戦い続けた憧れの人。

「でも、そんな父も あの“大火災”で、命を失った」

過ぎ去った日々。

そこに置いていかれてしまった、大切な存在。

リヤウのたった一人の家族は、そうして息絶えた。

「それからだ。影爪会を始めとした犯罪組織が、力をつけ始めたのは」

「そんな……」

国は疲弊し、人徳のあった者達は民を庇って死に、スエルスルドの空は悲哀に包まれた。悲しみが、人々を呑み込んだ。

その光景を思い浮かべて、千里は眉を寄せる。その瞳を、悲しみに伏せながら。

「俺は、父の成し遂げられなかったことを、自分の手で掴み取りた

い
「……リヤウ」

だから、とリヤウは頭を下げる。

千里が思わず片膝を着いて止めようとするのも、構わずに。

「どうか、俺の夢を叶えるための道を、切り拓いて欲しい。

この国を、民を、平穩を取り返して護るために！」

千里に頼んだ時、下心が無かったと言えば嘘になる。

けれどリヤウは、千里ならば未来への道程を築いてくれると思っ
たのもまた、真実だ。

武の力に偏った者は、皆、影爪会に呑み込まれている。

だからこそリヤウは、千里の力が借りたかった。

「一度」

「チサト？」

千里は、脳裏に少年の姿を思い浮かべる。

無茶ばかりするけれど、約束は必ず守ってくれた。

大切な人で、最愛の人の……柔らかない、笑顔を。

「一度、約束したんだもん。

最後までやり遂げてみせるから、リヤウは自分の事に専念して！
ね？」

力強く、太陽のように笑う。

その炎は、破滅をもたらした火ではない。

その炎は、灰燼より再生をもたらす浄化の火だった。

「ありがとう……チサト」
「うんっ」

礼を言うリヤウの、喜色に満ちた声。

それを千里は、真っ向から受け止める。

感謝に対して謙遜ではなく受け止めることを選ぶというのは、千里がこの世界に来て学んだことであった。

「さて、書類は纏めた。

これさえあれば、宿から直接議事堂へ行ける。

居場所の知られているここよりも、向こうの方が安全だろう」
「それじゃあ、移動だね」

立ち上がる千里を見て、リヤウは柔らかく微笑む。

真っ向から受け止められて 真っ向から、心を肯定された。

それが何よりも心地よく、それで何時もよりも力がわいてくる。

「本当に、ありがとう」

小さく呟くと、リヤウは資料を纏めて千里よりも一歩先を歩く。彼女に後れを取らないように、彼女が拓いた道を歩けるように。

宿屋を出て、ナーヤが現在住んでいるという家に向かう。

元々は彼女の父が保有していた別荘だったらしいのだが、山火事の範囲外だったため無事だったようだ。

そこでナーヤは、住めるように日用品などを整えて、家族の思い出と共に住んでいるのだという。

「父さんも母さんも、別荘に連れて行つては釣りや狩りを教えてくれたわ」

「釣りや、狩りを？」

「そう！」

その道すがら、人の賑わう路地を通りながら、ナーリヤは彼女の話に耳を傾けていた。

少しでも記憶の琴線に触れる物が在れば幸いと、声を弾ませて思い出を語る。

悲しみを乗り越え、思い出を語ることができるようになったナーヤの声は、温かな喜びに満ちていた。

「父さんは事業が成功するまではお金がなかったんだって。だから、食費を使うのが惜しくて釣りや狩りで食糧を確保していたの」

行動力のある父親だったようだ。

自給自足で済むのならそれは賢い判断だが、普通は家庭菜園のよ
うなものから始めるだろう。

それが、手を出したのは釣りと狩り。

前者はともかく、後者は魔獣と戦う機会がある分命に関わる。

「兄さんも、狩りは得意だった。でも、釣りはあんまり」

「あ、あははは……」

ナーリヤは釣り竿から経験を読むまで、釣りができなかった。

どうにも苦手だから飛び上がったフリックを射抜くなどという、

余計に難しい手段を選んでいたので。そのことを思い出すと、苦笑
いしか浮かべられない。

「ねえ、今度は兄さんの話を、聞かせて？」

ナーヤはそう、“兄”譲りの柔らかい笑みで訊ねる。

子供が宝物を請うような、優しく喜びに彩られた表情だ。

「僕は……森の狩人に拾われて」

語り始めたナーリヤを、ナーヤは嬉しそうに見る。

失われた四年間、その軌跡を埋めるように、ナーリヤの思い出を
呑み込んでいく。

「兄さんの妹分なら、私にとっても妹分だねっ！ふふ、私に妹かあ」
ミドイル村の、レネとメリア。

その下りで、ナーヤは笑みと共に手を合わせて喜ぶ。
一人残らず失ったと思っていた家族が、沢山できるのだと、頬を綻ばせた。

「彼女と出会ったのは、僕が拾われた森だった」
「彼女って……あのひとのこと、だよな？」
「うん」

ナーリヤが頷くと、ナーヤは顔を曇らせる。
そして、足を止めてナーリヤを見上げた。

「あのひとは」
「ナーヤ？」
「あのひとは、きっと兄さんを“返さない”」
「え？」

直感か、それとも他に感じ入る要素があったのか。
ナーヤは、表情を曇らせたままそう呟いた。

「あのひとに着いていたら、もう兄さんは帰ってこないような、
そんな気がするの」

ナーリヤは、彼女の言葉を否定できなかった。
千里が目的を果たし、故郷へ帰るとき 最愛の人が居なくなる
とき、自分はどんな選択肢を取るのか。

幾度となく考えたこと。

彼女の望みを知っているから、彼女の郷愁を知っているから、彼女の憂いを知っているから、ナーリヤは千里を引き止められない。

そうして、千里が故郷へ帰り、二度と戻ってこられないのなら自分は。

「きっと兄さんは　あのひとを、追いかける」
「っ」

言い当てられた。

まだ、答えも出ていなかった自分の気持ちを。
丁寧に蓋をして沈めておいた心の行く末を、ひっくり返された。

ナーヤは、千里が流れ人であることを知らない。
けれど、千里が故郷へ帰りたいがっているのは、ナーリヤから聞いて知っていた。

帰りたくとも帰れない場所は、行きたくとも行けない場所ということなのだから。

「お願い！ここで私と一緒に居て！」

もう……私を、一人にしないで」

涙を溢れさせて、ナーリヤの手を掴む。

強く強く強く握りしめて、離さない。

そんなナーヤの姿に、ナーリヤは唇を噛みしめた。

求めていた、家族。

自分のルーツ、自分の思い出、自分の全て。

それが目の前にあるかもしれないというのに、ナーリヤは掴み取

ることを躊躇してしまつ。

「僕は あれ？」

顔を上げて、ナーヤを見据えようとして……その奥に、視線が流れる。

議事堂前だろうか、そこで向かい合う少女と少年。

見覚えのあるその姿は 千里と、リヤウのものだった。

リヤウはナーリヤに背を向けていて、千里は自分たちの方を向いている。

だが、会話に夢中になっているためか、距離が離れているせいか、千里はナーリヤに気がついていない。

「あのひとつ……リヤウと、チサトさん、だよな？」
「う、うん……でも、いったい何を？」

リヤウは千里に、なにかを熱く語っているようだった。それを受けている千里の瞳は、困惑に彩られている。だが嫌がっているようには、見えない。

やがてリヤウは、千里に近づいてその手を握りしめる。押され気味の千里と、押しているリヤウ。

そしてリヤウは、何事か呟いた後に……。

「え？」
「なっ」

千里の顔へ、己の顔を近づけた。

どうなっているかは、後ろ姿だけでも判断できる。
千里ならば直ぐにはね除けることができるはずなのに、それをしない。

ナーヤは困惑と共にナーリヤを見上げて、目を瞠る。
顔を伏せて、歯を噛みしめるその表情に、ナーヤは痛ましそうな表情をした。

「兄さん、その、うまく言えないけど」

ナーヤは必死に、ナーリヤを慰めようとする。
確かに、千里の方へ行かないで欲しいと願った。
だが、ナーヤは、ナーリヤを傷つけたいとは思っていなかった。

「に、兄さんの方がずっと素敵だよ！あんなひよるひよる男より！」
ナーヤはリヤウと仲が悪いのかそれとも気安い仲なのか、辛辣だ。
だがそんな彼女の声は、ナーリヤには届いていなかった。

そして、リヤウから離れた千里の視線が　　ナーリヤと、交わった。

時は僅かに遡り、議事堂の前。

リヤウはその大きな赤塗りの門を、千里に見せていた。宿に向かうのに、ちょうど通り道になっているのだ。

「ここが、俺たちの戦場だ」

「ええと、議事堂、だよな？」

「ああ」

千里が思い浮かべるのは、故郷の“国会議事堂”だ。

扇形に並んだ机、その中央に位置する首相の舞台。

彩るのは荘厳な赤で、国会中継を見続けると眠くなる。

そんな、浮かんでは消える思い出に、千里はどこか寂しそうに笑った。

「ここで明日、俺は全てを賭けて戦う」

議事堂を見上げるリヤウ。

その視線は強く、鋭い。

戦いに望む前に、全てを受け入れた表情だ。

「夢を叶えるんだよね」

「そうだ。夢を叶えて、夢を現実にするんだ」

右手を伸ばして、赤塗りの大きな門に翳す。

勝利をその手に掴み取り、己の目的を達成する為に。

そう語るリヤウの表情は、命を賭して戦場に赴く戦士の顔つきをしていた。

「色々な人の支えがあった。それは自覚している」

だが、とりヤウは続ける。

千里の方を向き、正面から向き合い、どこか寂寥を抱いた瞳で千里を見た。

その目を、千里は困惑と共に見ていることしか、できない。

「けれど、戦いの場において、俺は孤独だった。

静かな部屋で、父と対面する以外に、己を保つ方法を知らなかった」

でも、と続けて顔を上げる。

そこにあるのは、寂寥の青ではない。

そこにあるのは、決意の赤であった。

「でも俺は、君の笑顔が在れば　きっとどこまでも頑張れる」

「え？」

首を傾げる千里に、リヤウは畳みかける。

きっとこの想いは叶わない。

リヤウが様々な人間と相対し続けて培った経験が、否応なしに答えを出す。

それでも、リヤウは　　なにもせず、終わりを享受したくなかった。

「俺は国を支えたい。国と民を支えて、より良い未来へ導きたい」

近づいて手を握る。

勢いに任せるなど卑怯だ、と自分で自分を誹りながら。

「俺は君の笑顔が、好きだ。

俺をその笑顔で、支えてくれ。

俺の側で、一番近い場所で、笑ってくれ」

「あ

言いながら、リヤウは己の唇を千里のそれに近づける。

千里はそれを見て、はじき飛ばそうとして、自分の力では取り返しの付かない怪我をさせてしまいかもしれないと思いとどまった。

だから、千里は……。

パンッ

……リヤウと自分の唇の間に、手を差し込んで遮った。

思ったよりギリギリだったことに焦り、一瞬固まる。

それでも、リヤウを傷つけないように、ゆっくりと離れる。

「ごめん、リヤウ。私は　　え？」

顔を上げて、リヤウを見ようとして……その先に気がつく。

「あ」

目を睜り、千里と視線を交わす　ナーリヤの姿。
その黒い瞳が、揺らぎと共に伏せられた。

「つごめん、リヤウ！」

「チサト!?!」

リヤウを押しつけて、千里は走り出す。

だがその姿を見る前に、ナーリヤは踵を返して走り出した。

「まって、待って！ナーリヤっ」

人混みと喧噪に呑み込まれて、声は届かない。

押しつけて走るのにも限界があって、ナーリヤに追いつけない。

ドンッ！

「どこ見てんだ！」

「す、すいません！あうっ」

客観的に見て、どんな状況だったのか。

少し考えれば直ぐわかるからこそ、千里は走っていた。

人混みを押しつけて、ぶつかり、焦りから躓き、起き上がるごと顔を上げる。

「ナー、リヤ？」

だけどその頃には、ナーリヤの姿はどこにも無かった。

「あ、れ？」

頬に一筋、熱が流れる。

地面に座り込んだまま、藻掻くように胸元を握りしめ、俯く。

「いた、い」

胸が痛い。

張り裂けそうなほどに、胸が痛んで鼓動が速くなる。

「いたい、痛い」

痛い、何度も何度も眩きながら、千里は胸を押さえて涙を流していた。

ナーリヤが最後に見せた顔、失望の表情を思い浮かべる度に、胸に茨が巻き付いた。

「チサト！大丈夫かい！？」

まったく心配になって追いかけてみればアレだ！

政治家なら女心くらいわかれッてんだ！！」

走り寄ってきたイエルが、千里の側にしゃがみ込む。

そして憤りを浮かべながら、千里の背をさすっていた。

「いたい」

「え？どこか、ぶつけたのかい？」

千里は胸元を押さえたまま、首を振る。

故郷の親友によく似た気配を感じ取った千里は、ついに嗚咽を漏らして泣き始めた。

「大丈夫、大丈夫だよ、ほら」

慌てて、イエルは千里を抱き締める。

その胸の中で、千里はただ声を押し殺すしかできなかつた。

「痛い、痛い、痛いよ　　ナーリヤ、あ………」

涙が、悲しみと共に……こぼれ落ちた。

十一章 第三話 誰の為の笑顔（後書き）

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

十一章 第四話 君の為に笑顔を 前編

小高い丘の上。

澄んだ川の畔。

緑の木々に囲まれて、二階建ての家が建っていた。

「着いたよ、兄さん」

「ここが……」

ナーヤに連れられてきたナーリヤは、息を吐きながら建物を見上げる。

白塗りの壁と丸い窓が特徴的な、こぢんまりとした家であった。

「さ、入って」

「う、うん」

ナーヤに手を引かれ、家の中へ入る。

靴を脱いで土間から板の間に入り、廊下を進む。

真っ直ぐ進む間に二部屋ほど並んでいて、更に先へ行くと曲がり角があった。

そこまで行って奥を覗き込むと、その先には階段があり、更に先には台所があるようだ。

「私たちの家は燃えてしまったけれど、ここには兄さんの私物も置いてあったの」

幼い頃の物だけだけれど、とナーヤは付け加える。

階段の前の部屋。その板の扉を開くと、質素な部屋に出た。

六畳一間の部屋には畳が敷かれていて、箆笥や机などの家具が置かれていた。

「これが、彼の」

箆笥の上に置かれている、写し絵。

精巧に描かれたそれには、幼い彼らの姿があった。

黒髪の少女の手を握る、黒髪の少年の姿。

「僕が、幼ければきっと……」

ナーリヤをそのまま幼くしたような、柔らかい笑みを浮かべた少年。

絵師に向かって照れているのか、その顔にはうつすらと朱が塗られていた。

「どう？思い出した？」

「……いや、でも、僕は」

「なあに？」

「なんでも……ないよ」

家族の存在に、ナーヤは嬉しそうに笑う。

兄が帰ってきたのだと、一緒に居られるのだと、彼女は笑っていた。

その笑顔を前に、ナーリヤは何も云えなくなる。

思い出す気配すらせず、よく似た別人なのではないかと、言えなくなる。

「そつだ！久しぶりに私が夕ご飯を作るよ！ね？いいでしょ？」

小走りで近づき、ナーヤはナーリヤの腕を抱き締める。
楽しそうな表情で笑いながら、ナーリヤの温もりに身を埋める。

その熱を、ナーリヤは振り払うことができずにいた。
ただ時間だけが過ぎる中、ナーリヤは思いを馳せる。
どんな顔をして、千里と向き合えばいいのか。
ただ、痛みと焦燥だけが、ナーリヤを包んでいた。

明日には、リヤウの仕事を完遂し、新たな地に向かわなければならぬ。
らない。

そのはずなのに……ナーリヤの脚は、動いてくれなかった。

宿の一室。

座敷の端で、千里とリヤウは向き合っていた。その様子を、肩を怒らせたイエルが見張る形で。

「本当に、申し訳ないことをした」

リヤウが見ているのは、千里ではない。

失意から目を伏せる千里を見続けるのが辛い。のではなく、視線は畳に向いていた。

スエルスルドに伝わる伝統的かつ最大級の謝罪方法。

正座から両手を着き、畳に額を擦り続ける継承されてきた“ごめんなさい”の伝統。

そう “土下座”である。

「痴漢議員」

イエルが呟いた言葉に、リヤウは肩を振るわせる。

失恋してそれなりに傷ついていたリヤウを慰めたトウイは、マエルに正座させられている。そのまま額を畳にこすりつけるのも、時間の問題だろう。

「ほら、チサトも一緒に」

「そ、それだけはっ！」

「黙りな、変態議員」

「ぐうっ」

正直、罵る気にはなれなかったので、千里はただ苦笑いを浮かべていた。

憤りは感じたし、失意もあった。けれど、一晚経って早朝を迎えた現在、イエルにずっと慰めて貰っていたこともありリヤウに対する怒りは残っていなかった。そもそも未遂だった、というのも大きい。

だからこの失望は 不甲斐ない、自分に対するものだった。

「俺は 俺は、チサトにそんな顔をして欲しかった訳じゃないんだ」

リヤウは一度頭を上げ、そしてもう一度深く下げる。

千里の表情を見たリヤウは、眉を寄せて唇を噛んでいた。

「だから君の心が晴れるというのなら、好きに罵ってくれて、構わない」

「リヤウ……」

その表情を見て、千里は薄く笑い、そして顔を引き締める。

頭を下げるリヤウに、なるべく厳しい声が出せるように構えて、そうして口を開いた。

「謝罪したいって、思ってる？」

「……もちろんだ。なんでも、言ってくれ」

覚悟を決めたリヤウ。

それに千里は、ゆっくりと告げた。

「それならば、その気持ちも上乘せして、この国の人たちを救ってあげて」

「……チサト、アンタ」

イエルの驚いた声。

リヤウも思わず顔を上げて、千里を見て、目を瞠る。

「ね？」

優しい笑みだ。

前を向けと、自分を傷つけた人間に告げる、優しい表情。

それをリヤウは、深く胸に刻みつけ、そして鋭い目で頷いた。

「ああ……ああ、任せてくれ！」

胸を張って、告げる。

その目に翳りはなく、その姿勢に後ろめたさはない。

意志を定めた男の表情で、リヤウは千里にそう言い切った。

「はあ……チサトがそれで良いなら、あたしはもうなにも言わないよ」

「ごめん、ありがとう。イエル」

「なに、チサトは命の恩人だ。これくらい、どうってことはないよ」

快活に笑うイエルに、千里は頬を緩ませる。

彼女が側で慰めてくれていたから、千里は今こうして笑えているのだから。

「そろそろ出発したいのだが、いいか？」

「あ……うん。わかった、リヤウ」

千里は煌億剣を手に取り立ち上がると、同じく立ち上がったリヤウに着いていく。

その様子を、イエルはじっと見守っていた。

「ナーリヤが戻ってきたら、説明しておくよ。

だから、安心していっておいで」

「うん。何から何までありがとう、イエル」

千里はイエルに背を向けたまま、礼を言う。

その言葉は心なしか震えていて、それでもイエルは彼女の顔を伺うことができなかった。

「いつてきます」

そう告げる千里の背は、小さく儂く。

そしてとても脆いような、そんな雰囲気があった。

今にも折れてしまいそうな背を、イエルはただ見送ることしかできず歯がみする。

せめて、ナーリヤに真実を告げるだけでもしなくては、命の恩の欠片すら返せない。

イエルはそう独りごちると、雨の降り出してきた外を見つめるのであった。

+

ナーヤの作った夕食を食べ、談笑し、一夜明けた現在。
ナーリヤは曇りだしてきた空を見上げながら、自問していた。

「僕は、どうすれば」

目を眇めて、ただじつと曇り空を見つめる。
脳裏のよぎる光景は、ここに来る前に見た千里の姿。
朱色の門の前で抱き合い、受け入れ合うが如き姿を思い出す度に、
ナーリヤの胸に鋭い傷みが走った。

「僕は、どうするべきだ？」

連続して痛む胸。

千里の花開くような笑顔と、ナーヤの寂しげな涙。

その二つが交差する度に、ナーリヤは右手で己の胸を強く握っていた。

「いや、違う」

頭を振って、瞑目する。

眉根を強く寄せて悩む姿は、どこか痛ましさすら覚えさせていた。

「僕は どうしたい？」

家族 親愛。

恋人 恋慕。

どちらかを取らなければならない。

本来は、相容れるはずの感情なのに。

選択を、迫られる。

「僕は」

左手で握りしめた、一振りの刀。

気がついたら、ナーリヤはこれを手に取っていた。

千里とは異なる流れ人が残した、生命の証だ。

君が後悔を抱かぬよう、これを鍛えた。

「っ」

気を抜いていたせい、脳裏に声が流れる。

普段なら千里の言葉を思い出して拒むはずの、記憶の逆流。それをナーリヤは、どこか諦念にも似た気持ちで、受け入れた。

君が後悔を以て歩む姿を、見たくなかったんだ。

優しいな、男の声。

これは、声の主の記憶ではない。

これは、声を聞いている人間の、記憶だ。

ぼくはきつと、このまま息絶えるだろう。

足下がふらついて、どんっと勢いよく壁にもたれかかる。

思わず胸に置いていた右手を額に持つていくが、左手の刀は手放さない。

見ている光景に上から映像が重なるような、奇妙な光景に、ナーリヤは齒がみしていた。

それでも、こうして君が夢を諦めないのなら。

今にも消えて無くなりそうな、儂い笑顔。

見たことのないはずの男性の姿に、記憶から召喚された感情が、疼く。

ぼくは絶えることなく、君と歩むことができる。

差し出された剣を、一振りの刀を握む。

頬を伝う涙の意味は、生涯の友と二度と逢えないという覚悟から

か。

黒い袈裟姿の男は、友の笑顔に涙していた。

侍はまだ死んでいないと、伝えるんだろう？ さあ、行くんだ。

男は、寡黙だった。

声に出して言葉を交わして感情を表現することに、意味を見いだしていなかった。

だから、それはこの時においても変わらない。

ただ一度、正面を見て頷いて、流れる涙を隠そうともせず刀を抜いた。

何度後悔してもいい。だがそれを抱き続けるな。

前を見て進むときは、抱いた後悔を捨てる。振り向いた先に道はない。

青年はそこまでを真剣な表情で語ると、大きく咳き込む。

そこに多量の赤が交じっていることに気がついた男は慌てて近寄るも、青年はそれを手で制した。

確かに君の家は、守っていた宝を無くしたかもしれない。

けれどそれは、戦いくさによってもたらされたものだ。気に病むことではない。

それでもそれが心のとっかかりになっているのならば、その刀を新たな宝としろ。

今にも崩れそうな身体で、青年は語る。

後悔に依らない、強い意志と決意を黒い目に宿して。

なに、相応しいかどうかなど、全て君が証明すればいい。

大きく笑って、青年は男の肩に手を置く。
優しく、そしてどこまでも強かった青年は、男に全てを託して
いた。

気張れよ、阿蘇兼定藤治郎。あそかねさだとうじなつ君が持つのは、真実国宝になり得る刀だ。

最後にそれだけ言い、青年は崩れ落ちる。

男はそれを慌てて支えると、まだ息があることに胸を撫で下ろした。

そつと、青年を布団に横たえる。

側では、彼の妻が悲しそうに、それでいて優しげに微笑んでいた。夫婦で背を押され、止まっていられるほど自分は大人ではないと、男は気がつき小さく笑う。

刀を手に、袈裟姿でその場を去る。

僧侶の姿に刀という珍妙な格好ながら、男の背に迷いはない。

後悔に依らない、人生がために。

男はそう呟くと、最初の一步を踏み出した。

この国に、心の荒んでしまったこの国に、未だ残る物があるのだと。

人生を以て証明するための一步を。

意識が、戻る。

ほんの一瞬のことだったのだろう、時間は余り経っていない。だが頬を伝う冷たい汗が、記憶を読み取ったということを証明していた。

「後悔に依らない、人生」

今ここでナーヤと生きることを選択して、己は後悔を抱かないのか。

答えは否だと、ナーリヤは己に自答する。

きつとこのまま別れてしまったら、一生変わらぬ後悔を抱き続けるだろう。

そしてそれは、己だけではなく周囲のモノも翳らせるのだ。

庭から見上げた空。

それはまるで、後悔を抱いているのかのように薄暗い。

けれど空は、後悔を抱き続けたりはしない。

いずれ雨となって人々に恵みを与え、そして清浄な青と共に輝きを見せるのだ。

「ごめん、千里。約束、もう一度破る」

ナーリヤは、ナーヤが未だ起き出していないことを振り返って確認すると、大きく頷いた。その瞳には、大きな決意が宿っている。

「やったことはない。けれど、強い思いが残るこの地なら、きつと」

膝を着いて、地面に右手を当てる。

大地を掴み取るように手を広げ、ナーリヤは瞑目した。

「【継承把握】」

シエリエの地に強く刻まれた、その記憶。
それが光の奔流となって、ナーリヤの身体を包み込む。
まるでこの地が、ナーリヤに記憶を見せたがっているかのように。

/

瞬間に、炎が広がった。

木々が燃え、草が焼かれ、空が赤に染まる。

逃げだそうとした動物たちも、前日までの嵐で土地を乱されてお
り、そのほとんどが炎に飲まれた。

それが街に辿り着くまで、時間は要らなかった。

紅蓮の劫火はいとも簡単に街を覆い、人間達に牙を剥く。

いち早く対応を始めた大人たちは、街の人間を水辺に誘導し始め
た。

「くっ……炎が！」

男が、そう叫ぶ。

黒い口髭と後ろで結った髪の男性だ。

「ウエン＝リュウ！」

名を呼ばれ、男　リュウは振り向く。
彼が真つ先に先導を初めて、それから街の公安が人々の救出を行い、そして今彼の下に自警団が集合した。

「指示を！」

「……わかった。一分隊から四分隊まで東西南北にあたれ！
家屋に取り残されている人間の救助。ただし、決して無理はするな。」

自分の家族の行方が解っていないものはそちらを優先しろ！」
「はいっ！」

散り散りになっていく中、その中に一人の少年が残った。
年の頃は十四か十五歳くらいだろう。耳にかかる程度の黒髪と、黒曜石のような瞳を持っている。

「君は……リーヤか？どうした？」

「妹が、まだこの先にいるかもしれないんです！」

「そうか……ならば共に来い！」

「はい！」

ナーリヤを幼くすれば、なるほどこの少年に見えるだろう。
リーヤと呼ばれた少年は、残った人間を捜すために山側を探索するリュウに、加わった。

誰かに手を差し伸べながら、必死に妹の姿を探す。
まだ十歳になったばかりの少女を、救い出すために。

「この辺りは、もう」

「いえ、諦めません」

強く言い放つリーヤに、リュウは瞑目する。
やがて小さく、頷いた。

「私はこのまま山沿いを、公安と共に搜索する。

君も、安全が確認できたら来なさい」

「……はいッ！」

リュウと別れて、リーヤは走る。

足を纏れさせながら、灰によって咳き込みながら、炎によって肌を焼かれながら。

痛みも苦しみも全て振り切って、リーヤはただ走っていた。

そして、視線の先に、黒髪の少女を見つけた。

今にも倒れそうなほど、弱々しく歩く少女。

それは見間違えるはずのない、己の妹の姿。

「ナーヤ！」

声を上げて、ナーヤは気がつかない。

爆ぜる家々の音が、リーヤの声を消してしまっていた。

走っていて疲れたのか、ナーヤはついに座り込んでしまう。

その頭上に降り注ぐ、倒壊した家屋に気がつかぬまま。

ドンッ

「ごめん、ナーヤ。大丈夫？」

背中に走る熱は、炎よりもずっと熱い。

それでも庇えたことが、嬉しかった。

「にいい、さん？」

「くっ……あ………本当に、ごめ、ん」

声が漏れてしまう。

心配させたくないのに、苦しげな声のせいで、背中に突き刺さった木材に気がつかれてしまった。それがリーヤは、苦しい。

「にげ、よう。ぼく、は………大丈夫、だから」

安心させようと、大丈夫だと言いたいの。

声は途切れ途切れで、はっきりと言葉が伝わらない。

「だめ、だめだよ！じっとしてなきゃだめ！」

「大丈夫、大、丈夫、だよ」

それでも、いや、だから。

立ち上がって笑ってみせる。

ナーヤの背を押して、声をかける。

「絶対着いていくから、走って」

「や、やだ！兄さんが先に……」

「僕を信じて、お願いだから」

「で、でも、兄さんっ」

「早くッ！」

痛みを堪えて、嘘を吐く。

リーヤはナーヤに見せなくなかったのだ。

己の、姿を。

走り出したナーヤの後ろに、ついて走る。
離れないように、時折声をかけて安心させてやりながら。
走って、走って、走って、そうしている内に人影が見えた。
他地区を担当していた、自警団のメンバーだ。

「ほら、みんなだ。走って！」
「うんっ」

安心して、ナーヤは最後の力を振り絞る。
だがリーヤは、それ以上動くことができなかった。
今まで平然と走っていたのが不思議なほどに、体力が奪われてい
る。

もう自分は助からない。
リーヤはそう、感じ取っていた。

「どうか、幸せに」

炎が広がり、リーヤの視界を覆う。
もうこれで、リーヤは向こう側に行くことは叶わなくなった。
だが視界の奥で、気絶して運ばれるナーヤを見て、安心したよう
に微笑んだ。

「ああ、よかった。ほん、とう、に」

ふらふらと、歩く。
それは如何なる偶然か、リーヤが歩けるだけの道は残されていた。
一歩一歩と進んで、やがて雨が降り出す。

「これで、火は消えるかな」

燃えるものが無くなって、鎮火し始めた山。
そこをふらふらと、登っていく。
後には赤黒い道だけが残っていた。

「ぐ、あ」

ずるりと、背中から木材が抜け落ちる。

リーヤはその衝撃に顔を歪め、だがそれでも更に進んだ。
山の奥、黒ずんだ大木に背を預けて、座り込む。

「ごめん、ナーヤ。ぼくは……」

そう呟いたきり、リーヤは目を閉じた。

その瞳が開かれることは、もうない。

だというのに、その表情は、どこか安らかだった。

/

地面から手を離し、ナーリヤはふらふらと立ち上がる。
そつと家の敷地を抜けて、そのまま山を歩いて行く。

四年で緑を取り戻しつつある、川向こうの山。

この川のおかげで、別荘のある山は無事だったのだろう。

歩いて、歩いて、歩いて。

記憶に従って歩いた先には、黒ずんだ大木があった。

その幹からはすでに、新しい目が芽吹いている。

「やっぱり、そうか」

その根元。

そこにあるのは、息絶えた少年の亡骸ではない。

大きな石が置かれ、摘んだばかりの花が添えられた　墓があつた。

「君は、知っていたんだね」

背中に、声をかける。

背後をずっと着いてきていた、小さな気配。

そつと振り向いた先には、諦観を浮かべたナーヤが、立っていた。

「帰ってきたって、思った。約束を、守ってくれたんだって」

泣き出しそうな表情を、無理矢理笑みの形に固定しようとする。

けれど長くは叶わず、涙が溢れ出してきた。

「記憶がないって、わかって。もう兄さんしか居ないって思った。

ただ似ているだけの人だったら、記憶がある人だったら、

少しだけ甘えさせて貰って、振り切ろうと思った」

でも、ダメだった。

ナーリヤに記憶はなく、そのキーワードとなる名前も、ナーヤとリーヤを合わせたかのような名前だった。

「おかしいよね。兄さんは　　わたしが、みつけて、弔ったのに」

ナーヤは途切れ途切れにそう零すと、崩れ落ちる。そんな彼女に、ナーリヤはゆっくりと近づいた。

「僕は、行かなきゃならない」

「うん」

「それはきつと、僕が本当に“そう”だったとしても、選んでいたと思う」

「うん」

「でもさ、あとほんの少しだけなら、君と一緒に居られるから」
「え？」

肩に手を置き、ナーヤが顔を上げる前に、強く抱き締めた。

「だから、あと僅かな時間だけは、僕に全部ぶつけて。……ナーヤ」
「あ……ああああ、あ、あああああつつつつ！！！！！！」

ナーリヤの胸に顔を埋めて、声を上げて泣く。

涙を堪えて生きてきた少女は、ただひたすら泣いていた。

二度と逢えないと思っていた兄に、想いの丈の全てをぶつけるよ
うに。

ただ、ただ、涙を流す。

そうして泣き止んだナーヤは、泣き疲れて眠ってしまった。

そんな彼女を抱き上げると、ナーリヤは山を下りる。

大事な弓や槍を宿に置いてきたことに、今更ながら気がついた。

「千里、君が僕から離れて行ってしまふのなら、何度だって繋ぎ止めよう」

そう呟くナーリヤの瞳。

そこには、強い決意が宿っていた。

「だから、待っていて」

山を下りて、目指す先。

そこに居るであろう最愛の人を求めて、ナーリヤはただ、走る。

十一章 第四話 君の為に笑顔を 後編

雨の中、目を腫らして眠るナーヤを、ナーリヤはイエルに預ける。その安らかな寝顔に、イエルは首を傾げた。

「あ、な、ナーリヤ！この子、どうしたんだい？」

「溜め込んでいたものが、溢れてしまったんだ」

四年前、家を無くしたナーヤを泊めてから、イエルは彼女と姉妹のように過ごしてきた。

だからこそ、この寝顔を悲しみか喜びか判断しきれず、怒るべきか喜ぶべきか判断できずに戸惑っていたのだ。

「大丈夫、きっと目が覚めたら、全部話してくれるから」

「あ……うう、ごめん。ありがとう、ナーリヤ」

そう告げたナーリヤの表情。

その穏やかで優しい笑みに、イエルは僅かでも疑いを抱いた己を恥じた。

「千里はどこにいるか、わかる？」

「そ、そうだ、その千里のなんだけどね」

イエルの必死な表情に、ナーリヤは思わず足を止めた。慌てながら、それでも途切れ途切れに告げるイエルの言葉。

それは、あの時の、“真実”だった。

「……ってことだから、チサトはアンタを裏切ったとかじゃないん

だよ！」

考えてみれば、わかることだ。

あの優しい千里が、怪我をさせるとわかりきっているのに突き飛ばせるはずなどない。

長く接していたナーリヤはそれがわかって当然で、わからなければならなかった。

「あ、はは、は、そうか……そうか、それなら
ナーリヤ？」

額を抑えて笑い、そして眉を落として唇を噛む。
ならば、傷ついたのはナーリヤではなく。

「謝らなければならないのは、僕だ」

顔を上げて、イエルに背を向ける。

そんなナーリヤを見て、イエルは慌てて奥へ走り、戻ってきた。

「弓と槍と、ええと短剣！」

「ありがとう」

「それから、チサトの居場所は」

言い出そうとしたイエルを、ナーリヤは遮る。

「それは、すぐわかる」

そして、それだけ告げて飛び出した。

槍は嵩張るので宿に置く。人混みを移動するのに、長柄は不利だ。
後ろ腰に短剣、背に弓、左腰に日本刀を差して走る。

「【継承把握】」

地に踏みしめた足から、断続的に過去の映像を吸い上げる。
その足取りの向かう先を、降りだした雨に構うことなく走り続け
た。

「待っていて、千里……ッ！」

この想いを、届けるために。

大振りになってきた、雨。

その中を、千里とリヤウは移動していた。

赤い塗りの和傘を差して、ゆつくりと、警戒しながら進んでいく。

「今のところ、妨害はないか」

「うん、そうみたいだね」

歩きながら、千里は考える。

ナーリヤのことを考えたいのはもちろんだが、今は別のことだ。

それは考える度に胸が強く痛むから、今は別のことで気を紛らわしたかった。

「そういえばリヤウは、彼女と……ナーヤと、知り合いなの？」

一番、最初るとき。

ナーヤは、リヤウのことを気安げに呼んでいた。

だから、彼らがどんな関係なのか、気になったのだ。

「ああ、彼女か。火災の時、避難所で出会ったのが最初だ。

兄が居ないと泣きじゃくる彼女を慰めていたはずが、

気がついたら俺より強く快活になっていた。まあ、幼馴染さ」

リヤウは、ため息と共にそう告げる。

泣いてばかりいた幼い少女は、己の別荘を思い出して山へ行き、それから変わったのだという。兄の名を、呼ばなくなったのだ。

「あんなに求めていたんだ。今は、笑っているだろう」
「リヤウ……もしかして」

千里の声は、雨音にかき消されて届かない。

あの時、千里を無理にでも引つ張って行ったのは、決して己のためだけではなく。

「優しいんだね、リヤウ」

「なにか言ったか？」

「ううん。なんでもないよっ」

優しさに触れる度に、思い出す。

優しい笑顔と、柔らかい声と、温かい手。

思い浮かべて、その度に強く痛むのだ。

「リヤウ、誰が来る」

「わかった」

気配……それも、殺意の込められたモノだ。

それらを感じ取って、千里はリヤウに告げる。

その声を受け取ったリヤウは小さく頷くと、走り出した。

「【光よ、示せ】」

千里は、道に迷わない加護をレメレより授かった。

そのためこの光の矢印は、道ではなく敵を指すモノ。

ようは、レーダーである。

「後方に八、左右にそれぞれ十と十二、前から奇襲で五。うう……なんでこんなに多いのさ」

そう悪態を吐きたくなるのも、無理はないだろう。

合計三十五人の敵だ。人混みなど気にせず襲って来るであろう敵の姿に、千里は頂垂れる。

「リヤウ、私から離れないで」

「あ、ああ、わかった！」

煌億剣を収めて、手を前に出す。

直接攻撃力を有さず、かつ対象を選べる剣。

そうなると、物理的な攻撃力は極端に下がるが、通常の光の剣しかなかった。

「イル＝リウラス――光より顕れる者」

千里の手の平から出現した光の剣に、周囲の人間は何事かと道を空ける。

するとその中に、あからさまに千里へ向かってくる一団が見えた。鎧などを着られるとダメージが下がってしまうが、敵は市井に紛れるために軽装だ。

「【悪徳を斬れ！】」

「ウエン＝リヤウ！その首頂戴……ぐあぁっ！？」

一歩前に出て、下から袈裟に切り上げる。

血の一滴も流すことなく倒れ伏した男の表情は、安らかだ。

だがその永眠を思わせる顔色は、男の仲間達を震え上がらせた。

「はああっ!!」

「ひいつ!?!」

一喝、一閃。

大上段から振り下ろされた一撃が、怯えた男を切り伏せる。直後には安らかな笑顔で、眠りについた。

「おい、あれ影爪会の連中だぞ」

「ええつ。あの女の子、大丈夫かなあ？」

「いい腕っ節だな。おい、道開けるぞ！」

次々と影爪会の頭巾を被った男達をなぎ倒していく千里に、周囲は強く反応し始める。

誰かが先陣を切って、悪を打ち倒そうと、闇を払おうと動けば、その心は伝わる。

だからリヤウは、この国で、この街で、先陣を切ろうと決めたのだ。

「あ……人混み、が」

剣を振るっていた千里は、三人目を切り伏せたところで気がついた。

人混みが避けて道を造り、千里達に舞台を用意してくれていたということに。

「な、なんだアツ?!」

後ろから追いついてきた八人と、前から来て残っていた二人。さらに左右から四人ずつの合計十八人が、千里達を取り囲む。

左右からの人数が少ないことが気になったが、千里はそれを保留にした。

「この人数相手に、護りながら戦えるかア？」

手に持った青竜刀を振り回しながら、男は下卑た笑みを浮かべる。確かに一人ずつ相手にしていたら、リヤウを傷つけてしまう可能性もあるだろう。

けれど千里の手札は、それだけではない。

「【マガジンセット・イグニッション】 “蒼炎剣” アルクⅡ
イグゼ”」

鋭い切っ先とノコギリ状の刃を持つ、青い剣。
青い炎を剣真から揺らめかせるその刃は、見る者の心を凍てつかせる。

「薙ぎ払え！」

詠唱ではなく、かけ声。

ぐるりと一回転しながら放たれた青い炎は、男達の足下を凍り付かせる。

「ひいつ!?!……あ、な、なんだこれは!?!」

「そこでしばらく、反省してて!行こう、リヤウ!」

「あ、ああ!」

千里はリヤウと離れたって、その場を去る。

残ったのは、歓声を上げる住民たちと、項垂れる男達であった。

十

暗闇を、走る。

全身を漆黒で覆い、黒い弓を手に掛け矢を番える。

音もなく疾走するその姿は、暗い洞窟を迷わず進むコウモリのようであった。

路地裏は、薄暗い。

晴れの日でもそうなのだから、大振りの雨ともなれば前も見えない。

そこで武器を手にして通りがかる人間を待ち伏せする、男達の姿があった。

暗い雰囲気を身に纏う男達は、気がつかない。
己の命運を分ける、一筋の漆黒の存在に。

「来たぞ、行け！」

先陣を切つて、まず四人飛び出す。

さらにそこへ続こうとするも、男達は足を止めることになった。

タタタタンッ

「なんだッ!？」

降り注いだ矢に、思わず飛び退く。

道を挟んで反対側も、同じように降り注いだ三本の矢に、警戒して足を止めていたのだが、男達はそのことには気がつかない。

「壁駆へぎか

」

なぜならば、仲間の様子など知る暇もなく。

「疾閃しっせん

黒い影に、屠られるのだから。

鉄で殴られたような衝撃に、殿しんがりの男が倒れ伏す。

壁を蹴り、人では捉えられない動きで走る影。

男達がそれに気がついたのは、三人目の仲間が倒れ伏したときだった。

「な、なんだッ!?!……ぐあッ」

声を上げた男も、次の瞬間には倒れ伏していた。
そこで漸く、残った二人の男が武器を構えるも、遅い。

「煌めけ

“銀堂”ぎんどう」

黒い髪と黒い目、黒い軽鎧に黒いマント。

背負った黒い弓と手に持つ黒い刀。

鞘まで漆黒で覆われたその剣の刀真は、儂くも力強い銀だった。

「ぎっ

「がっ

峰を利用した一撃が、剣を構えた男の手を打つ。

返す刃で首筋を打ち、同様にもう一人の男を叩き伏せた。

「しばらく、眠っている」

そう告げると、影は再び壁を走る。

そのまま人混みに紛れるように飛び出し抜けると、反対側の路地裏へ飛び込んだ。

「なんだッ！」

急いでいたためか、今度は最初から気がつかれる。

だが影はその瞳に童謡を映すことなく、ただ淡々と壁を蹴った。

「【領域把握】」

その反射音で、足止めされ警戒していた八人の男達の立ち位置を、正確に把握する。

獣が獲物を狩るときに決して逃がさないように、その匂いを覚えるが如く。

影は男達の命運を、いとも簡単に握りしめた。

「死ねッ！！」

男が振り下ろした青竜刀を、影は刀で受け止める。

未だ細剣を扱う特殊な技術が身につけていないためか、力任せに受け止めて、銀の刃が欠けた。といっても、元からボロボロだったので、どう欠けたかは判断が付かなかったのだが。

「ふっ」

短く息を吐いて、峰で男の腕を打つ。

痛みから青竜刀を落とした男の鳩尾に、柄頭を以て打撃を叩き込むのも忘れない。

「ぐがっ」

崩れ落ちる男を見て、男達は怯む。

人間とは闇を恐れる生き物だ。

であるならば、この影に怯えるのも仕方がない。

「あんなボロい剣に怯むな！あつち俺らのことを殺せねえんだ…
…やっちまえ！」

リーダー格の男。

その男の言葉に、配下の男達は下卑た笑みを浮かべる。

そして同時に、青竜刀を振りかざした。

「【継承把握】」

一步踏み出し、刃を振る。
青竜刀を受け止め、刃を更に欠けさせた。

「【継承把握】」

横薙ぎに襲いかかる青竜刀に、刃を合わせる。
そのまま力加減を考えて流すも、衝撃が腕に伝わった。

「【継承把握】」

背から振り下ろされた青竜刀を感じ取り、身体を回転させる。
握り手を整え、刃筋を揃え、重心を考慮し、タイミングを計る。
そして綺麗に絡め取り、青竜刀を見事に流して見せた。

「【継承 完了】」

持ち主の記録を完全にインストールし、己の身体に付与する。
影は ナーリヤは今、歴戦の剣豪へとその身を変化させていた。

「【煌めき集え “銀蛭国俊”】」
ぎんほたるくにとし

ナーリヤが記憶から読み取った世界。
千里の世界の過去で行われた戦争。

第二次世界大戦と呼ばれるその戦争以降から行方の知れない、旧
国宝があつた。

ほたるまるくにとし
蛭丸国俊。

そう呼ばれていた刀を守ってきた阿蘇家は、戦後にそれを紛失し

た。

そのことを悔やむ余り、時代にそぐわなくとも侍の道を目指していた男はそれを諦めて、家を出て僧侶になった。

そんな男に、男の親友が鍛えたのがこの“銀蚩”だった。

結核で倒れ後がないと知った男の親友は、最後の一時を男のために費やした。

刀工集団“来派”らいはの末裔であった男の親友は、刀鍛冶だったのだ。

そうして鍛え上げられた刀は、蚩丸の化身と言すべき“力”を以て、今この場でナーリヤに受け継がれた。

「なん、だ、あれ」

男の一人が、途切れ途切れにそう告げる。

ナーリヤの持つ銀蚩に、淡い白銀の光が集い始めたのだ。

それはまるで、銀の蚩が刀に吸い寄せられていくような、不可思議な光景。

降り注ぐ雨によって消えることのない光が、刃に溶けていく。

後に残ったのは、刃こぼれ一つ無い、美しい銀の刀だった。

「来い」

「う、うわあああつつつ!!」

暗がり輝く銀光と、雨に濡れた黒髪から覗く、闇色の瞳。

その煌めきと深淵に錯乱した男が、ナーリヤに斬りかかる。

大上段から振り下ろされた一撃を、ナーリヤは半歩前に出ながら半身になって躲すと、峰でもって男の腰を打ち据えた。

「ぐあっ」

蹲る男の首に一撃。

そのまま近くの男へ走る。

「ひっ」

「ぎっ」

「あぐ」

「がは」

手首を打ち、鳩尾を打ち、臍を斬り、意識を奪う。

川の流れるが如く通り過ぎた黒い風に、身震いする暇などない。

気がつけば、瞬く間に七人が地に伏し、最後の一人となっていた。

「御仏の救いが、あらんことを」

「い、あ」

何か男が口にするより早く、ナーリヤの刃が男を打つ。

すれ違い様に首を打たれた男は、白目を剥いて倒れ伏した。

「さて……早く、追いつかないと」

刃を上に向けて、鞘に収める。

そしてナーリヤは再び、闇に溶け込むように走り出すのであった。

雨の中を、リヤウと二人で走る。

途中で何人影爪会の人間が現れようと、風の如き速さで情報が伝わったのか、街の住人は道を空けて千里達の舞台を整えてくれた。

「頑張れよ！お嬢ちゃん！」

「期待してるぞ！ウエン議員！」

「あんなにご立派になられて」

「あのお嬢さんは、まさかウエン議員の？」

「いやいや、だったら手の一つでも繋ぐだろうさ」

「頑張つてー！」

口々に溢れ出す、声援。

屈強な男達も影爪会の人間と戦い始め、戦えない人たちはリヤウ

に声を送る。

やがて賄賂で上司が動かなかった公安の人間達も、上司を振り切
って参加し始めた。

「俺たちは、今、一つになっているんだな」

リヤウは、そう、心から声を零す。

影爪会の妨害で、命を落とす危険性があつた。

だから焦って千里に想いを告げ、結果的に彼女を傷つけた。
そんな後悔を吹き飛ばしたのは、千里の言葉だけではない。

こうして彼を後押ししてくれる存在を直に感じられたから、リヤ
ウは逆境に身を置いてもなお、前を向くことができていた。

「議事堂だ！」

「リヤウ、ここは任せて、行って！」

「ああ……ありがとう、チサトっ！」

議事堂に飛び込むリヤウの背に、千里は声を投げかける。

それにリヤウが返事をするのとはほぼ同時に、千里は踵を返して前
を見据えた。

「チイツ！こうなったら、会議そのものを潰すぞ！」

「おおっ！！」

街に根を張る影爪会の人間達が、二人三人と集まり出す。

その数が二十を超えたところから、千里は数えるのをやめた。

「【ページ・マガジンセット・イグニッション】 “雷響剣”
ミール”イグゼ”」

黄色に輝く、雷電の槍剣。

その威風堂々とした構えに、男達はたじろいだ。

「さあ」

瞑目して、背中に感じる寂しさ。

いつもなら後ろから全部を見回して、戦いの場を整えてくれるのに。

なのに、今は、背中にはただ冷たい雨が流れるばかりだ。

「どこからでも、かかってきなさい！」

それでも千里は、剣を掲げる。

夢を語られて、守ってくれと願われた。

だから千里は、背筋に伝う寂寥を押し隠して、敵を睨む。

「魔法使いといえどたった一人だ……押し通れ!!」

集団の背後に控えた男が、大きく声を上げる。

それに反応して、男達が武器を手に走り出した。

「少し痺れる程度に、調節……【痺電槍撃】」

見た目の派手さはそのままに、後遺症が残らない程度のスタンガンほどの威力を想像して調整。これで、思う存分電撃の槍剣を揮う事が出来る。

「はあっ!!」

雷響剣の能力である、高速移動。

周囲の流れが遅く感じるほどの移動を用いて、千里は自分を乗り越えようとする敵を痺れさせて、倒していく。

「持続して使えるのは、たぶん一秒くらい、かな」

緩やかに動く世界で、千里はそう呟く。

体感時間ではなく、現実の時間で一秒程度しか持続的に使えない高速移動。

それ以上使おうとすると骨が軋み痛みを発し始めたので、訓練次第である程度延ばせるのかもしれない。

けれども必要なのは、今。

今すぐ手に入らないことを気にしても仕方がないと、千里は荒くなった息を隠すように苦笑いを浮かべた。

「ぐあぁー！」

「ぎがアッ！」

「ぎゃうツッ」

「ひぎ、アッ」

時間が正常に動き出す度に、悲鳴が聞こえる。

聞いていて気持ちの良いものではないが、仕方がない。

そう思いつつも、千里は柔らかい微笑みを思い出して、下唇を強く噛んでいた。

これからはずっと、一人で旅を続けなければならないかもしれない。

そんな想像が、足枷となって千里を縛る。

まだ半分も減っていない敵に、弱みを見せる訳にはいかないのに。

「ッ……貰ったア！」

「あ」

考え事をしていたためか、高速移動から回復した一瞬の隙を、敵の男が偶然にも捉えてしまった。もう今更、逃げられる距離ではない。

「ごめん、ナー」

全ての言葉を紡ぐ前に、男が崩れ落ちる。

路地裏から飛び出してきた影が、男の首筋を打ち据えたのだ。

「ごめん、千里。少し、遅れたみたいだね」

変わらぬ笑顔。

その優しい表情に、千里は眉を寄せる。

そうでもしないと、涙がこぼれ落ちてしまいそうだったからだ。

「イエルから、聞いた」

「あ、そ、そっか」

ナーリヤは一言そう告げると、千里に近づく。

そして、微笑みを引き締めて真剣な表情を浮かべた。

その鋭い眼差しに、千里は身体を震わせる。

「問いもせず、君から逃げた。本当に……ごめん」

何を言われるのかと恐れていた千里に、ナーリヤは頭を下げる。何時だって向き合ってきたのに、逃げてしまった事への謝罪だっ

た。

「そ、そんな、私の方こそ……隙だらけだったかなって、思うし。だから、ごめんっ」

揃って頭を下げ合うものだから、滑稽な様子になってしまった。そうして顔を上げればすぐに目があって、揃って吹き出す。

「おい何やってんだ、アレ？」

「イチヤついてるんですぜ」

「チツ、嘗めやがって」

突然の事態に距離を取っていた男達が、動き出す。

どうせなら最中に一撃で倒してやるうと、円を縮めるように間合いを詰めながら。

「それじゃあ、仲直り、だね」

「うん……うんっ」

千里とナーリヤは、今度こそ笑い合う。

千里が浮かべるのは、リヤウが見たいと思っていた……あの、花開くような笑顔だった。

「ナーリヤ、背中、お願い」

「うん、任せて。気がかりは、僕が全部潰すから」

「うん、ありがとう。ナーリヤ」

男達が、笑い合う千里達の背に向けて跳躍する。

隙を突けるようにかけ声すら発さず、青竜刀を振り上げた。

「【痺電槍撃】……はあっ！」

振り向くことなく、超加速に入る。

ゆったりと流れ出した世界でナーリヤを一瞥すると、彼はすでに矢を構えて飛び退いていた。

「せい！」

「ぐあっ!?!」

加速の解けた世界で、千里に近かった男が五人、吹き飛ばされる。だがその光景を見てなお、一部の男達は怯まず声を上げた。

「なにかやっついていやがるようだが、終わりに隙ができる。そこをつけ！」

「おおっ!?!」

加速し、倒し、隙ができる。

そこを狙うように振り下ろされる青竜刀の一撃を、千里は一瞥することすらない。

背中を……思う存分戦うのに不要な思考に労力を裂く必要は、ないのだ。

「先見三手、三射必中！」

飛来した一息三射の矢が、千里の隙を突こうとして控えていた男を含めて、三人の男達の足に突き刺さる。その衝撃と痛みで倒れ伏すのを、千里は確認することなく更に加速状態に入った。

なぎ倒し、隙は全て矢が払い、瞬く間に電撃が走る。

水は電気を通し、雨は稲妻を伝える。

地面に当たれば弾かれてしまうが、一撃で周囲三人ほど蹴散らすことは、可能だった。

「たった二人で、なんでこんな……ッ」

「力を合わせられるから、人は強くなる」

最後の一人となった男へ、千里は槍を掲げる。

そこに、黄色の稲妻を奔らせて、男に向かって言葉を紡いだ。

「想いを通わせられるから、人はどんな壁でも……乗り越えられるんだ！」

青竜刀を振り上げるも、矢によって弾かれる。

大きく体勢を崩したそこへ、稲妻が通り過ぎた。

「が、あ」

倒れ伏す男を見て、佇む千里を見て、微笑むナーリヤを見て、周囲から歓声上がる。

災害の心の隙間を侵されて、諦めかけていた住人たちが、心を動かされていた。

「千里」

「ナーリヤ」

近寄って、手を取り合う。

もう、胸は痛まない。

ただ、笑顔を交わせるほどに、その表情は晴れていた。

「貴様ら」

だが、そんな空気を壊す声が、響いた。
長い口髭に禿頭の男。影爪会を牛耳っていた男が、血走った目で立っていた。

「わ、ワン様っ」

「こんの……役立たずが！」

「ひいっ」

辛うじて意識を保っていた男が、矢に貫かれた足を庇いながら後退する。

影爪会のトップとして甘い蜜を啜り続けてきた男　ワンは、自分の末路を悟っていた。

「このまま怯えて、惨めに生きるくらいなら、最後にその首を貫く！」

高い金をつぎ込んで作った、魔力射出型のクロスボウ。

魔法こそ使えないが魔法の才能だけは僅かに持っていたワンは、いざという時の手段を整えていた。

「どうせワシはここで破滅だ。なら、貴様らも道連れにして」

「イル＝リウラス― 光より顕れる者」

言い切る前に、千里が肉薄していることに気がつく。

咄嗟に矢を放とうとするが、それすらも遅い。

「先見三手、一射必中」

飛来した矢がワンのクロスボウを砕き、衝撃から腕を仰け反らせ

た。

痛みに苦悶の表情を浮かべるが、もう立て直すことはできない。

「【光よ、悪徳を斬れ！】」

「ぐあああああッ!??!?!」

右肩から左腹へ、袈裟に振り下ろされた光の剣。

ワンはその切り口から黒い靄のようなものを吹き上げながら、倒れ伏す。

その表情は、憑きものが落ちたかのように安らかなものだった。

「大丈夫？」

「うん。ナーリヤが助けてくれたから」

「助けられたのは僕だよ。何時だって、そうさ」

「私だって、助けられているって所では、負けてないよ」

「それじゃあ、お互い様だね」

「うん。お互い様」

手を取り合って、笑い合う。

そしてふと、千里が瞳を揺らした。

「ナーヤは、いいの？家族、なんででしょう？」

「いや、彼女は、僕の起源ルーツではなかったみたいだから、さ」

「そ……っか」

一瞬、ナーリヤの記憶が戻っていなかったことに、ナーヤの勘違
いだったことに安堵してしまい、千里はそんな自分を恥じる。

だがナーリヤは、そんな千里に柔らかく微笑んで見せた。

「でも例えそうだったとしても、僕はこの場にいたと思う」

「え？」

公安が、ワンたちを縛って運んでいく。
沸き立った住民たちのその中心で、ナーリヤはゆっくりと言葉を紡いでいた。

「だって、僕が在りたいと願うのは、いつだって君の隣だから」
「……ナーリヤ」

千里に近づき、強く抱き締める。
その抱擁を受け入れて、千里はそっと瞑目した。

「どんなことがあっても、僕は千里の側にいる」
「うん……うんっ。私も、ナーリヤの側にいる。ナーリヤと、一緒に居たいっ」

溢れ出してきた涙で視界を濡らしながら、千里はそっと顔を上げた。

その火照った頬をナーリヤは愛おしそうに撫でると、そのまま千里の顔に手を添える。

「千里。僕は君が、好きだ」
「うん、私も大好きだよ……ナーリヤ」

二人の距離が、ゼロになる。
その光景に、住人たちはそっと目を逸らすのであった。

十一章 第四話 君の為に笑顔を 後編（後書き）

前後編なので、後書きは纏めてこちらに。

次回、エピローグを一話投稿させていただき、第十一章の終了とさせていただきます。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
エピローグもどうぞ、よろしく願います。

十一章 第五話 太陽に咲く花

雨が去れば、晴れが来る。

月が落ちれば、日が昇る。

スエルスルードをすっぽりと覆っていた雨雲は、一晩で流れていった。

そのため、シエリエの港でアルトノーアの前に立つ千里達は、太陽に見送られることになった。

「なにからなにまでありがとう、イエル」

「マエルさんとトウイさんも、ありがとうございました」

千里に続いてナーリヤが、頭を下げる。

裁決が下される前に潰れた影爪会。

その後の收拾で慌ただしいのか、ここで関わった人達の中で、リヤウの姿だけ見あたらなかった。

「何言ってるのさ！こっちこそ、色々“ありがとう”だよ」

「また来なよ、チサトにナーリヤ！歓迎するからね」

「おうともよ！そしたらまた宴会だ！」

大きな声で、似た様な表情笑う三人。

思えば、千里は彼女たちにずいぶんと“元気”を貰っていた。

「に……ナーリヤ、さん」

「……ナーヤ」

気まずげに声をかけながら、ナーヤがナーリヤを見る。

今にも泣き出しそうな表情で、ナーヤは距離を縮めるのを、怖が

っているように見えた。

ナーリヤはそんなナーヤを見て、困ったように笑う。
そして、彼女が取りかねていた距離を、大きな一歩で縮めた。

「あ」

「君が、それを許すなら」

「ナーリヤ、さん？」

さんづけは、呼ばれ慣れてないんだ。

そんなことを嘯きながら、千里を盗み見る。

すると千里は困ったように、でもどこか安心したように笑った。

ナーリヤのその優しさは……千里が好きな、彼“らしさ”なのだから。

「今までどおりで、いいよ」

「え、あ……に、兄さん？」

「君からは、そっちの方が呼ばれ慣れてるみたいなんだ」

ナーリヤはそう言って柔らかく笑うと、ナーヤの頭に手を載せる。

そして、少しだけ力を込めて、強く撫でた。

自分が大切な人に……セアックに、して貰ったときのように。

「ありがとう、兄さんっ！」

ナーヤの顔に、涙はない。

先程までの翳りはそこになく、彼女は満面の笑みを見せる。

「それでは、僕たちはそろそろ」

「ああ、いっついで」

手を振るイエルたちに背を向けて、アルトノーアに乗り込む。
千里が操縦席にレラの涙を置くと、輝きを見せて躍動し始めた。

「行ってらっしゃい 兄さん!“義姉さん”！」

「ええっ!？」

「は、ははは……行ってきます、ナーヤ」

言葉の響きに気がつき、慌てる千里。

そんな彼女とナーヤの言葉に苦笑いを浮かべながら、ナーリヤは手を振り返す。

動き出したアルトノーアは波を切り、そんな彼女たちから離れて行った。

「もう、あの子」

「嫌だった？」

「……イジワル」

千里は、イタズラっぽく笑うナーリヤに、頬を膨らませて拗ねてみせる。

だが直ぐにナーリヤに視線を戻して、そして花開いたような笑みを見せた。

「はあ……嫌じゃないよっ」

「そ、そっか。うん、僕も嬉しい」

「また、そーゆーことを……」

照れたように、笑い合う。

二人の間には、もう以前のような“恐れ”は無かった。
離別の恐れよりも、今を失う方がずつと怖い。

それを、ナーリヤ達はこの国で学んだのだ。

ナーリヤと千里は、旅路を進む。

スエルスルードに、柔らかな笑みを残して
。

E
x
I

去っていたアルトノアを見送り、ナーヤは踵を返す。
その背中に、イエルが首を傾げた。

「もう行くのかい？」

「うん、この後イエルのところへ行こうと思ってただけど……
ちよつと野暮用」

「そうかい。ま、酒でも用意して待ってるよ」

「うん、ありがとう。イエル」

ナーヤはイエルから離れると、そのまま港近くの森に入っていく。
ここは小高い丘になっていて、海や港がよく見渡せるのだ。

その一角に座り込む、黒い影。

それを見つけて、ナーヤはため息を吐く。

「意気地無し」

「うっ」

肩が、小さく震えた。

ナーヤはそんな彼の様子に肩を落とすと、背中に背中を合わせる
ように座り込んだ。

海を見る彼の背中は、どこか冷たい。

「折角時間が取れたなら、最後まで会いに行けば良かったのに」
「な、なんのことだ？」

誤魔化してみる彼に、ナーヤは苦笑する。

そして、背中合わせなのをいいことに、イタズラっぽい笑みを浮かべた。

「義姉さんのところに」

「ね、姉さん？」

「ナーリヤ兄さんの“お嫁さん”でしょ？チサトさん」

「ぐっ、おおおお」

頂垂れる。

背中越しでもわかる慟哭に、ナーヤはバツが悪くなった。

少しだけからかいたかったが、それ以上にこの“悪友”には、元
気になって欲しかった。

「ここにはさ、私とあなたしか居ないんだから……全部、吐き出し
ちやいなよ」

「君は、いいのか？」

「私は既に吐き出し済みだから、いーのっ」

「そう、か」

そう呟いたきり、彼は口を閉ざす。

だが、ぼつりぼつりと語り出した。

「彼女の笑顔に、惹かれたんだ」

整合性の取れた話し方をする彼にしては珍しく、脈絡がない。

だが、ナーヤはそんなことは気に留めずに、耳を傾けた。

「夜を払う太陽が昇ったような、可憐で明るい笑顔だった」

「うん」

「その笑顔が、太陽が自分に向くのを、俺は望んでいたんだと思う」

「うん」

「俺を見て、それから豊かに笑ってくれるのなら、

それだけで、心の闇が払えるような気がしたんだ」
「うん」

頷いて、先を促す。

彼の背が震えているのに、そつと目を瞑りながら。

「ああ、そつだ、俺は……彼女の笑顔が、欲しかった」
「うん」

「おかしな話だ。手に入るはずなんか無いのに」
「うん」

彼は、そつと先程の光景を思い出していた。
手を振って去る、千里とナーリヤ。

最後にその姿が見たいと手にした、双眼鏡。
そこから覗いた光景を見て、思い至つたのだ。

「俺が欲しかったのは

ナーリヤに恋心を抱いていた、チサトの笑顔だったんだ」

恋をした少女の笑顔に、惹かれた。

それを向けられたのが自分でない以上、結末はわかりきっていた
のに。

それでも、手を伸ばせば届く場所に彼女が居て、だから彼は足掻
いてしまった。

「結果は、彼女を傷つけただけ。ははっ、俺は、どうしようもない
な」

「うん」

「ああ、やっぱり君もそう思うか」

「うん……だって、何時まで経っても周りのことに気がつかないじ

やない」

「なに、を？」

彼が顔を上げる気配が、した。

背中合わせという状況に感謝していたのは、彼　　リヤウだけではない。

ナーヤもまた、この状況に感謝を覚えていた。

「父さんも母さんも兄さんも、みんなみんな亡くして、私、落ち込んでたよね」

「……ああ、そうだったな」

状況が、反転する。

今度はリヤウが、ナーヤの言葉に耳を傾け始めた。

「避難所に泣きながら入って、誰も彼もが自分の事で手一杯」

「……あの状況ではな。誰もが、泣いていたから」

「でも、自分の事だけじゃなくて、周囲の人も一生懸命に気遣う人が居た」

「あ、いや……父さんのように、なりたかったから、な」

あまり上手いとは言えない相槌に、ナーヤは苦笑する。

その表情は、リヤウには見せられないのだけれども。

「泣いてる私に、一生懸命声、かけてくれたよね」

「だが、その、何を言ったらいいかわからなかった」

「“元氣出せ！いや、元氣じゃなくても良い！ええと、わ、笑うと良いぞ！”」

「ぐっ………なんというか、すまん」

一字一句違わず覚えていたナーヤに、リヤウは項垂れる。
今考えると、家族を亡くした子供に言うことではない。

現に、当時のナーヤは、その言葉に声を大きくして泣いたのを覚えてる。

「それからリヤウ、ずっと私に着いててくれた」

「泣かせてしまったから、な」

「ふふ、でも、けっこう嬉しかったよ。ほら“笑った方が、絶対可愛いぞ！”」

「わ、忘れてくれ」

「ダメ……私の、大事な思い出なんだから」

「え？」

ナーヤは振り向くと、リヤウの背に抱きつく。

リヤウがナーヤとナーリヤの状況を見て、急いで千里を連れ出した。

それは、再会を喜ぶナーヤを思っていたことだろう。

では、再会したのならもっとゆっくりと、時間を掛けて仲を築けばいいのに、千里から離してナーリヤを別荘まで連れて行ったのは、誰のためか。

「リヤウは、さ。いつつも一生懸命だよね」

「あ、ああ、余裕がなかったから、な」

「これと決めたら、周りを見ない。あの日から、ずーっとそう」

リヤウは自分の父、リュウを失った火災の後。

リヤウは、ただ目標に向かって走り続けた。

何度転ぼうとも、何度挫折そうになろうとも、何度這いずりながらも。

「そうやって走り回って、成功してきたの、知ってるよ」
「ああ」

「誰よりも苦勞して、でも誰よりも強い気持ちで、みんなを引っ張ってきたよね」

「……俺は、できていたのだろうか」

「私が保証するから、そこは心配無用だよ」

「……ありがとう」

普段は強気に全てを行い、時折弱気になって頂垂れる。

それでもいつの間にか自分の力で立ち上がって、気がついたらもつと多くの人を救っている。

ナーヤはリヤウのそんな“いいところ”を、沢山知っていた。

「リヤウは、強いよね」

「……そうか？」

「うん、でも、たまにヘタレ」

「ぐ……そ、そうだな」

「背の低い女の子に弱いよね」

「ど、どうしても泣かせてしまうんだ」

吐息が背中当たり、リヤウは固まることしかできなかった。

どうしたらいいかわからず、ただ相槌を打つ。

「夢や目標以外のことには、弱気になる」

「ああ、そうだな、そうだと、ああ」

「でも、全部ひっくるめて　カッコイイと思っよ」

「え？なに、を」

思わず聞き返すが、その返答は力の込められた彼女の両腕だった。柔らかな香りが鼻孔をくすぐり、固まることしかできない。

「私、知ってるんだよ？リヤウがどんなに駆け回ってきたか」

「……」

「だっていつつも、見ていたからね」

「それ、は」

「鈍感」

「ぐっ」

何か言う暇もなく、矢継ぎ早に告げられる。

思えば、リヤウの側にはいつも、ナーヤが居た。

街で会えば声をかけて、たまに仕事場に差し入れを持ってきてくれる。

既に日常的一幕と化してしまい、気がつくことができなかつた風景。

「せつかく応援してあげたのに、先走って泣かせて」

「ああ、そうだな……」

「イエルなんか、“立派な人だけど変態な議員”って覚えてるよ。

絶対」

「ぐぬっ……おおお、申し訳ない」

項垂れるリヤウを、また、強く抱き締める。

その度に肩を振るわせる彼に、小さく笑いながら。

「気がついてよ、ばか」

「すまん、ああ、まっただ」

ナーヤに背を向けたまま、リヤウは苦笑を零す。

微かに笑い、それから息を吐いた。

「言わなきゃわからないぞ、ばか”って言っても良いんだよ？」
「いや、俺は ああ、そうだな。言ってくれないと、わからない
みたいだ」

落ち込んでいた声と変わって、優しげな声。

強く温かく人を惹き寄せる声が、ナーヤは好きだった。

「一回しか言わないよ」

「ああ、それで構わない」

「本当に、大丈夫？」

「重要なことだろう？なら、聞き逃さないのには自信がある」

「大切なことは、見逃すのに？」

「ぐ……目は、悪いんだ」

小さな笑い声が背中から響いて、リヤウは小さく咳き込んでみせる。

その類は、僅かに上気しているようだった。

「焦らせないでよね、ばか」

「う、す、すまん」

「好きだよ、リヤウ」

「え？あ」

不意打ちだった。

聞き逃しはしなかったが、あまりにも自然なタイミングだった。
ずっと側で見えていたからこそわかる、僅かに気を抜くタイミング。
そこに、そっと思いを差し込んだ。

「返事は？」

「いや、その……俺で、いいのか？」

「はあ、もう……リヤウ“が”、いいの」

返答に、詰まる。

千里への思いは、先程双眼鏡越しに玉砕した。

荒治療が必要かと思われるほどに、それはもう粉々に
だがそれは本当に振り切れているのか。

そう悩むリヤウに、ナーヤがそつと告げていく。

「リヤウは私のこと、どう思ってる？」

「え？」

「箇条書きで述べよ！」

「あ、ああ！ええつと」

そう言われ、考え込む。

だがそれは、僅かな時間だった。

「涙が、切ない女の子だった」

「うん」

「笑うと、可愛いと思った」

「うん」

「横着をすると、必ずばれる子だった」

「う、うん」

「おにぎりは、三角より丸の方が好きだ」

「うん」

「笑顔がよく似合っていて、笑うと、心が温かくなった」

千里に感じた、胸の高鳴り。

それはもつと以前にも、感じたことがあったのでは、なかったか。

リヤウはそう自問しながら、思いを告げていく。

「いつも笑顔を見せていた」

「うん」

「でも時折、遠くを見て心で泣いていた」

「うん」

「そんな時、笑顔になって欲しくて、世の中をよくすればいいのか
と思った」

「うん」

「笑っていて、欲しかった」

「うん」

リヤウは言葉を連ねる度に、頭を抱える。

こんな気持ちを抱いたまま千里に思いを寄せていたというのなら、
それは。

「俺は、ナーリヤに一発殴られておけば良かった」

「眼中になかったね」

「ああ、それだけは、未だに悔しく思う。陰険な仕返しだ」

「変態議員にだけは言われたくないと思うよ。兄さんにそんな意図
は無いだろうし」

「ぐぬっ」

千里にも、そしてナーヤにも、失礼なことだ。

リヤウはそう、己を恥じる。

「それで、答えは出たの？」

「ああ、でた」

「ふーん、それで？」

「声が震えているぞ」

「そ、そんなことは」

「俺も、ナーヤが好きだ」

タイミングを、ずらされる。

ナーヤはそれに思わず口を閉ざし、リヤウの背に顔を埋めた。口を嚙み、目を閉じ、耳だけは傾けて。

「何故、今まで気がつかなかったんだろっな」

「しるか、ばか」

「こんなにも近い場所に、求めていたモノがあったのに」

「どんかん」

「ああ、まったくだ」

リヤウはナーヤから離れると、正面から向き合っ。

そして愛おしげに、ナーヤの頬に伝っていた涙を拭った。

「君の笑顔を、俺に欲しい」

「うん……うん」

ただ頷く事しかできないナーヤを、抱き締める。

瞳を合わせて、微笑み、それから離れた。

「行こう」

「待って」

「どうし」

街に戻ろうとするリヤウの手を取って、ナーヤが背伸びをする。

抱き締める程度で終わらすなんて許さない、と勝ち気な瞳に浮かべながら。

そっと、小鳥が見上げるような、キスをした。

「 た？ 」

「 さ、行こう！ 」

「 なっ……ぐう、敵わんな。おい、待ってくれ！ 」

走り去るナーヤを、リヤウは慌てて追いかける。

その表情は、先を走るナーヤ同様に、耳まで赤に染まっていた。

闇が打ち払われた、スエルスルド。

その小高い丘の上で、太陽と月が、柔らかな笑みを交わすのであった。

十一章 第五話 太陽に咲く花（後書き）

今回で十一章を終了。

次回から、第十二章に入ります。

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださりありがとうございました。
次章もどうぞ、よろしく願います。

十二章 第一話 常夜の国ルトルイム

闇が、蠢く。

それは、痛みだった。

それは、悲しみだった。

身を引き裂かれるような慟哭を宿し、彼はただ叫びを上げる。

何故だ。

何故だ。

何故だ。

何故だ／何故／あのお方が／何故／こんなにも。

断続的に響く声。

その悲しみを止めようと、彼は大きく口を開けた。

貴女が苦しいというのなら。

大きな身体に、小さなモノが吸い込まれる。

闇が、影が、その漆黒に呑み込まれていく。

我がその願い、叶えましょう。

全てを呑み、全てを多い、全てが白になる。

漆黒の巨体を呻らせて、闇色の身体をうねらせて、それはただ慟
哭に同調する。

世界よ、我が願い、聞き届けよ。

これこそが、我らが主の……真なる、願いであるぞ。

闇が、吼える。

E
×
I

アルトノアの航海速度は、かなりのものだ。

嵐に見舞われたりでもしない限り、昼前に出れば月が昇る頃には次の島に到着する。

だから千里は、その間にナーリヤとゆっくり話でもしようと考え……実行に移すことができなかった。

最初のうちは、照れながら一緒に釣りをして和んでいた。

距離が縮まったことを自覚して、深呼吸してみたりもした。

けれど釣りが終わり、昼食を食べ終えた辺りから、どうにもおかしい。

「暑い」

「あつい、ね」

燦々と光る太陽。

その眩いばかりの熱を船の中で感じながら、千里はナーリヤに同意する。

語らうことも億劫になるほどに、気温を上げる太陽。

日差しだけで蒸されていく感覚に、千里は情けない声を上げた。

「なんで、こんなに、あついの……」

「……本当に、ね」

針路の固定や障害物の回避など、様々な機能を搭載した高技術の船、アルトノア。

そんな時代背景にそぐわないような船でも、“クーラー”は搭載されていないようだ。

「なんとか、身体を冷やさないと、蒸されちゃうよ」

「急激に冷やすと、身体を壊すと思うよ？」

まあ、冷たいものが欲しいのには同意するけどね「

居間にいる限り、日光に直接肌を焼かれる心配は無いだろう。けれど、熱射病にならなくても熱中症になる可能性は充分にある。

「……そうだ！【マガジンセット・イグニッション！】」

千里は目を輝かせて立ち上がると、煌億剣にマガジンをセットした。

困ったときの煌億剣、それは、こんな時でも役に立つのだ。

「蒼炎剣ー アルクイグゼ ……これでなんとかっ」

「おお……すごい、涼しい」

千里が剣から溢れ出させた青い炎に、ナーリヤは頬を緩ませた。陽炎を生み出して揺れているのに、全く熱くないという矛盾した剣。

ペルファで千里が手に入れた、リリアの冷たい炎だった。

「冬は灼雪、夏は蒼炎……クーラー魔法かぁ」

暑さで参っているのか、千里は怪しげな笑みを浮かべていた。

普段ならばナーリヤが正気に戻すのだが、残念ながら彼も冷気の虜になっているので、千里の様子に気がつくことができなかった。

怪しい笑みを浮かべる千里。

蕩けた表情で炎を抱くナーリヤ。

不気味な様子の二人は各々の表情に気がつくことなく、割と無駄な時間を消費しながら海を進むのであった。

+

航海を続けてしばらく経った頃、二人は甲板で横になっていた。日光に肌を晒し続けるのは身体に悪いので、厚着のまま蒼炎を浴びる。

決して燃え広がらないように調整してあるおかげでクーラーの効いた空間にいるような感覚になっているが、それでも日差しの強さが軽減できる訳ではなかった。

「ねえ、ナーリヤ」

「……どうしたの？」

そんな中、千里が不安そうな声を出した。
何かに気がついたのか、口元に手を当てて考え込んでいる。
その様子に、ナーリヤは小さく首を傾げて見せた。

「今、何時頃だろう?」

「いつ?いつって……あれ?」

千里の疑問に、ナーリヤも思い至る。
航海を続けて、もうだいぶ時間が経った。
そろそろ到着しても良いという頃合いだ。

「それならもう、夕方になっていないとおかしい?」

ナーリヤが呟くと、千里は疑問を覚えた表情で頷き返す。
もうすぐ到着という時刻ならば、空は朱色に染まっていな
いとおかしい。

だというのに、未だ白い太陽が中天に輝いていた。

「昼間が、終わらない?」

「っナーリヤ、あれ」

「え、あ……見えた」

千里に指されて前を向き、そうして眼前に置かれた陸地に気がつ
いた。

太陽に晒され続けるその地こそ、千里達の目的地。

「あれが、ルトルイム」

ナーリヤの声が、千里の耳朵を震わせる。

高速で航海するアルトノアはあっという間に港に船体を寄せて、

二人の意識を引き戻した。

「砂漠……?」

波止場に船を固定して、千里はルトルイムに降り立つ。

人の気配はそこにはなく、港から地続きで大きな砂漠が広がっていた。

そこに人の気配は見あたらず、ただ寂寥の空間が二人を迎える。

「とにかく、進んでみよう」

「う、うん」

アルトノーアから、二人分の外套と水筒を手にしたナーリヤが降りてきた。

ナーリヤは千里に太陽光から身を守るための外套と水筒が入った水を手渡すと、自身も外套をすっぽりと被る。

「行こう、千里」

「あ、待って！」

歩き出したナーリヤに並び立ち、ブーツの下からでも熱が伝わる砂を踏む。

そうして二人は、陽炎で歪み先の見えない空間を、恐る恐る歩き始めるのであった。

砂漠をただ、進んでいく。

水が尽きないように調整しながらも、やはり長時間持たせ続けるのは無理があった。

「あ」

「千里？」

水筒を逆さにして、千里は眉を寄せた。

そんな千里を見て、ナーリヤは小さく苦笑を零した。

「まだこっちがあるから、飲むと良いよ」

「え？だ、だめだよ！ナーリヤが脱水症状になっちゃっよ」

「僕は大丈夫だから、ね？」

ナーリヤが差し出した水筒を、千里は手を振って答える。

ペース配分を間違えたのは自分なのに、涼しげな笑顔で水筒を手渡してきた。

だがその額に浮かぶ大粒の汗は隠せず、千里は必死に断る。

「私は良いから、ナーリヤが飲んで」

「大丈夫だから、ね？……格好つけさせてくれると、嬉しいなって」

そう言っつて、ナーリヤは嬉しそうに笑う。

そう言われてしまうと、千里は日差しとは別の要因で、頬に熱を持たせることしかできなかった。

「……ありがとう。でも、一口だけ。あとはナーリヤのだからね？」
「うん、わかったよ。千里」

結局押し切られてしまい、千里は水筒に口づける。

温くなった水が喉をとおり、嚥下すると途端に体調が良くなったような、そんな錯覚を覚えた。

「はい、ナーリヤ」
「うん、ありがとう」

千里から水筒を受け取ったナーリヤは、僅かに唇を湿らせた。
ほんの僅かしか水を飲まないから、まだ余っていたのだろう。

それを見ると、千里は申し訳なさを覚え始めて大きく息を吐いた。

「千里、止まって」
「え？」

そうして頭を抱えていると、ナーリヤの真剣な声に呼び止められる。

次いで周囲を見回して、千里も同様に眉をひそめた。

「……………」

周囲から溶け出すように現れた、白い外套の人影。

その数は、ざっと三十はくだらない。

誰もがナーリヤ達を見ても口を噤んでいて、声を出そうとしない。

だがそんな中、外套の一人が躍り出た。

「っ」

「シッ」

小さく息を吐いて襲ってくる人影に、ナーリヤは一步前に出る。

人影の手に持たれているのは、S字を描く反り返った曲刀。

シラムシールと呼ばれる剣が、ナーリヤに襲いかかった。

「煌めけ、銀蛍」

納刀状態から、敵を見据える。

風を切ってつき進む曲刀に、高速で抜刀し一撃を加え、返す刃で
手首を狙った。

広い間合いを持つ、超高速斬撃 居合いの前では、振り下ろす
だけの一撃など止まっているが如き剣速であった。

「フッ」

ギ、キンッ

手首を狙った一撃を、人影は腰から抜いたナイフで弾いてみせる。
そして、そこからさらなる追撃を仕掛けることもなく、大きく退

いた。

「様子見、かな？」

ナーリヤの背に合わせるように、千里が側による。

二人が力を合わせれば、この程度の人数など敵ではない。

そう感じるだけの安心感に、二人は背中合わせに小さく微笑んだ。

「敵襲！」

「ッ！」

突然、外套の内一人がそう叫んだ。

途端に、場の空気が張り詰める。

「私たちのこと、じゃないみたいだね」

「そうだね……」

外套たちが警戒し始め、緊張感が高まっていく。そうしてついに……警戒の正体が姿を現した。

ザブンツ

「うえっ……く、クジラ?!」

千里の声が、響く。

砂の中から大口を開けて姿を現した、巨大な魚。

砂色の身体と四対の黄色い瞳を持つ巨大なクジラが、背中から砂を吹き出して眼下の人間達を威嚇する。

「“ザージグラージス”か！全員、陣を組め！」

「はっ！」

ナーリヤに曲刀を向けた人物の声で、外套たちは一斉に各々の武器を構えた。

ナーリヤ達に背を向けてでも戦う姿勢が見られることから、敵の強大さが伺える。

この混乱に乗じて逃げ出すことは、さほど難しくはないだろう。

だが

「ナーリヤ、背中……お願い！」

「うん……任せて、千里」

ここで見捨てて逃げるのは、彼女たち“らしく”はなかった。

「ッ、お前たち」

「手伝います！指示を！」

曲刀の人影の横に、千里が並び立つ。

人影は千里を見て、次いで後方で弓を構えるナーリヤに視線を移し、頷いた。

「何が出来る？」

「なんでも！」

「はっ、言うじゃないか」

人影はそう笑うと、クジラからの距離を測りながら被っていた外套を外した。

褐色の肌、短く切りそろえられた赤い髪と黄色の目。そして、長い耳。

ナーリヤよりも僅かに年上に見えるエルフの男性が、不敵に笑っ

た。

「俺はテイガ。今はそれだけ覚えておけ」

「私は千里、あっちはナーリヤ！」

千里は煌億剣を手にして、クジラが吐き出した砂の弾丸を避けた。テイガが指示を出した彼の配下達も応戦しているが、対抗するのは難しいようだ。

「チツ、やはりカーサを連れ来るべきだったか。

チサトと言ったな……炎は得意か？」

「使えるっ」

「そうか、だったら特攻だ。切り込むぞ！」

走り出したテイガに並び、千里はマガジンをセットする。

喚び出すは、真紅の刃。カミソリのように角張った、半透明の剣。

「【イグニッション】 “ 灼氷剣 — リズニイグゼ ” 」

「ほう、魔法剣か！」

テイガは獯猛にそう笑うと、身体を滑らせて来たクジラを跨ぐように、飛ぶ。

人間ではあり得ない跳躍力で、全高五メートルはくだらないクジラの上に飛び乗った。

「下を焼き払え！」

「わかった！……灼き断て【灼雪剣波！】」

真紅の息吹が、クジラの下あごにぶつかる。

すると激しい熱に痛みを感じたのか、クジラが大きく怯んだ。

それを機に、テイガはクジラの背を曲刀で切りつける。
砂の噴出口……そこが、巨大クジラ“ザージグラージス”の弱点
だった。

「エルリスの元へ眠れ！」

振り降ろし、薙ぎ、払う。

挟るように切り続けて、赤く染まった噴出口にテイガは己の腕を
差し込んだ。

この先にあるのは、クジラの運動神経を束ねる“弱点”だ。

『グオオオオオオオツ』

「づつ、ぐあ……まずいッ」

クジラの咆吼とともに、周囲から砂色の魚が飛び出した。
鋭い刃のようなヒレを持つ、砂魚。

このクジラと戦うときに注意しなければならなかった、人間サイ
ズの魚だった。

「くっ、コイツを忘れるとは、なんて迂闊」

ドン！

「なに？」

飛び出した魚が、横合いから殴りつけられて吹き飛ぶ。

その腹に突き立った矢に、テイガは目を見開いた。

暴れるクジラが起こした砂煙、その中から正確に対象を射抜く弓
兵など、彼の配下には居ない。

『ギエエエエッ』

次いで、四方から飛び出てきた魚がほぼ同時に落とされる。
今度は横合いからではなく、頭上。
放物線を描いた矢が、砂魚を真上から落としたのだ。

「【マガジンセット・イグニッション】 “蒼炎剣” アルク
イグゼ”」

突然、クジラの動きが止まる。

何が起こっているのか理解が追いつかなくとも、このチャンスを
逃す訳にはいかない。

テイガはそう決意し、クジラから“器官”を引き抜いた。

「おおおおおおッ！！」

『ギオオオオオオツツツ！！！！』

クジラの運動神経を束ねる器官。

琥珀色の丸い宝石を、テイガは空にかかげた。

「ふう……手間を掛けさせる」

テイガは血にまみれた頬を外套で拭い去ると、軽やかにクジラか
ら飛び降りる。

そして動きを止めた原因を探ろうと振り向き 言葉を失った。

「凍り付いている？」

クジラの下あごから、前足、後ろ足に至るまで凍り付いていた。
その光景に絶句し、それから千里に視線を移す。

「びっくりしたあ……なんで砂漠に魚が？」

「砂魚すなうしおだね。砂地に生息する魔獣だよ」
「へえ、そんなものもいるんだあ」

のんきに会話する二人の姿に、テイガは苦笑と共に息を吐く。
そして、二人にゆっくりと歩み寄った。

「まずは感謝しよう、異国の民よ」

「あなたは……」

「テイガだ、ナーリヤ。ああ、君の名前はそこの彼女から聞き及んでいる」

テイガが気さくに声をかけたことで、ナーリヤは警戒を緩める。
彼の配下達も、その様子に僅かに警戒を解いていた。

「先程は突然襲いかかってすまなかった。腕を見ておきたくてな」
目を眇めて、テイガはそう話す。

まずは己で太刀筋を見極めるといふ、侍のようなことを言う男であつた。

「それで、結果は？」

ナーリヤが問うと、テイガは不敵に笑ってみせる。
飄々としていて掴めない、それなのに豪快という人柄。
その姿は、レウとガランを足したような印象を、ナーリヤに与えていた。

「良い剣筋だった。悪意も、迷いもない」

テイガの一言で、彼の配下達が一斉に顔を見せた。

白い肌のエルフと褐色の肌のエルフが、丁度半分ずつ程度の混交部隊のようだ。

「さて、謝礼ついでに話を聞きたい。着いてきて貰えるか？」

テイガがそう提案すると、ナーリヤと千里は顔を見合わせた。テイガやその配下達に、敵意は見えない。

そしてなにより、砂漠を二人だけで歩くのにも、そろそろ限界だ。

「わかった。僕はナーリヤとロウアンス。よろしく、テイガ」

「ああ……さあ行くぞ！」

踵を返して、テイガが歩き出す。

それに合わせて、彼の配下達も移動を始めた。

「僕たちも行こう、千里」

「うん！」

ナーリヤと千里は、互いに頷き合つとその一団に着いていく。彼らの向かう先にどんな状況が待ち受けているのか、期待と不安をない交ぜにした表情で、二人は砂漠を歩き出すのであった。

十二章 第一話 常夜の国ルトルイム（後書き）

ご意見ご感想のほど、お待ちしております。

ここまでお読みくださり、ありがとうございました。
次話もどうぞ、よろしく願います。

十二章 第二話 白夜の檻

石でできた建物が、砂漠のオアシスを中心に建ち並ぶ。

目深に被った白い外套と、ラクダに似た馬、それから市場に並ぶ見たこともない動植物に、千里は感嘆の息を吐いた。

「へえ……砂漠の街かあ」

「妙に人が少ないのが気になるけど、どうしたんだろう？」

呟いた千里の横で、ナーリヤが周囲を見回しながらそう言った。

市場で果物を売る人、ラクダを引く人、水を運ぶ人。

売る人達の目に生氣はなく、買う人の姿はそもそもほとんど見られない。

「こっちだ」

「あ、はいっ」

テイガに声をかけられて、足を止めていた千里達は歩き出す。

先頭を歩くテイガたちは街の人々から歓迎されているようで、その周囲に笑顔は絶えない。そのおかげで、テイガたちが案内している千里達もまた、街の人々からはおおむね好意的な笑顔を向けられていた。

「さて、ここが俺たちの拠点」

石造りの、大きな建物。

竜巻を従えた黒い籠の紋章が目立った、彼らの拠点。

そこだけは、街よりも僅かに賑わっている。

「 “アルハンブラ”だ」

そこが、テイガたち治安維持部隊の拠点であった。

E
×
I

建物の中に通された千里とナーリヤは、案内された部屋で石の椅子に腰掛けた。

本棚と武器が並ぶ十畳ほどの部屋で、その一番奥の大きな机の前にテイガは腰掛ける。

ここが彼の仕事部屋なのだろう、オリエンテルな高級感が僅かに感じられる部屋からは彼の身分のほどが伺えた。

「さて、まずは礼を言おう。手助け、感謝する」

長時間座っけいられるように布が座布団代わりに巻かれた、石の椅子。

その上で、千里とナーリヤはテイガの礼を受け取った。

「えと、どういたしましてっ」

笑顔で答える千里と、ナーリヤ。

その柔らかい仕草に、テイガ小さく微笑んだ。

笑顔の絶えない、二人の旅人。

活気を失いつつある街には、貴重なものだった。

「俺たちの国、ルトルイムは、自分で言うのも何だが滅多に人が訪れない」

人間に比べ、遙かに優れた身体能力を持つエルフ。

その国に立ち入ろうとする人間は、滅多にいなかった。

観光などをするには遠く、また砂漠をわざわざ見たいと思うのは偏屈な学者（魔法使い）程度。その上で、犯罪目的で行こうものなら返り討ち。

これでは、わざわざ人間が訪れることにメリットなど見いだせな

い。

「アンタたちは、いったい何の用で来たんだ？」

その返答によっては、恩義を返すついでに協力しよう」

テイガはそう言うと、以外と似合うウインクをしてみせる。

その姿勢に、千里とナーリヤは目を合わせた。

「うん？不満か？」

「と、とんでもないですっ！」

私たちは、その、“神託”で秘宝を求めているんです」

千里は慌てて否定すると、恐る恐るそう告げた。

秘宝と聞いただけで表情を険しくするものがあることを、千里はトウーユヨークで学んでいた。

「秘宝を？」

「えと、これが証拠です！」

「！……レラの、涙」

千里が取り出した石に、テイガは目を瞪る。

向こう側が透けることのない、不可思議な透明の石。

それに秘められた力は、なるほど“証拠”に足る“信頼”だった。

「しかし、神託か。それならアンタが、今年の優勝者ってわけだ」

「ほら、闘技大会の」

「え？…… あ、いえ、私が優勝した訳じゃなく……」

何のことだかわからず首を傾げ、ナーリヤに告げられて思い出す。色々あって忘れていたが、神託を受けられるのは闘技大会の優勝

者のみ。

実際に神託を受けたのは千里だが、優勝したのはナーリヤとフィオナだ。

「へえ、それならアンタが優勝したのか。」

「うん？それなら、女戦士の優勝者は誰だったんだ？」

「私の友人の　フィオナさんっていう女性で……」

千里が続けた言葉に、テイガは眉をひそめる。

「フィオナ？フィオナ＝ファイルラートか？」

「はい」

千里が不安げに頷くと、テイガは口の中で何かを呟く。だが直ぐに頭を振って、息を吐いた。

「あー、いきなり質問攻めにして悪かったな。」

「秘宝の件だが、今は時期が悪くて、どうにかなるかわからん。だがまあ、恩義は返すと言ったんだ、上には伝えておくさ」

「あ、ありがとうございます！」

千里が頭を下げると、テイガは苦笑気味にそれを受け取った。

礼を言っているはずだったのに、何故だかいつの間にか頭を下げられていたのだ。

こちらの世界では珍しい、日本人特有の謙虚な姿勢に、テイガは苦笑と共に好感を抱いた。

「とりあえず、だ。」

大したもてなしも用意できないが、俺たちは君たちを歓迎しよう。ようこそ、ルトルイムへ。ここは自由に使って構わないと、部下

に通達しておこう」

「ありがとうございます！」

「ありがとう、テイガ」

千里とナーリヤが礼を言い、テイガはそれを先程よりも柔らかい表情で受け入れる。

最初にナーリヤと刃を交わしたとき、テイガはナーリヤの剣を見極めようとしていた。

命を刈り取るような攻撃に対して、ナーリヤは極力テイガを傷つけないように攻撃していて、彼もそれを感じ取った。だからテイガは、彼らの優しさの一片を見いだしていたのだ。

部屋から退出していく二人を見送り、それから顎に手を当てる。それでもまだ、気になることは残っていた。

「“姫さん”が優勝者？」

ならば何故、神託を受けられなかったんだ？」

何か、大きな流れの中にいるような、そんな錯覚を覚えて呻る。

この疑問は、なにか重大な事への切っ掛けなのではないかと、そんなことを考えながらテイガは今後のことに思いを寄せるのであった。

テイガの部屋から退出した千里とナーリヤは、互いに顔を見合わせて一息吐く。

無事、渡りをつけられそうなのだから、安心もできるというものであった。

「あつさりたどり着けたね」

「うん。レメレさまの加護……なのかな？」

ナーリヤの言葉に、千里は頷く。

精霊王の加護、即ち道に迷わないというもの。

それが理由でたどり着けたのか、それとも別の要因があるのか、ただの偶然か。

千里はそんな些細な考えを脇に置くと、今はひとまずこの幸運に感謝しておこうと微笑んだ。

テイガの部屋は、アルハンブラの最上階にあった。

偉い人は高いところに住む、というのは伝統的なことのようなのだ。

四階にあったテイガの部屋を出た二人は、言葉を交わしながら階段を下りる。

「チサトにナーリヤ、だな」

「はい？」

三階に下りてどうすればいいかと話し合っていると、二人に声がかけられる。

声が出た方に振り向いてみると、そこには褐色の肌の女性が立っていた。

白髪のショートカット、すらりとした高めの身長に、切れ長の紫の瞳。

淡泊な表情でナーリヤ達を見据えた女性は、目を伏せるように小さな会釈をした。

「隊長から通達を受けた。貴殿らの訪問、歓迎しよう」

「あ、ありがとう。君は？」

突き放されているような感覚は、覚えない。

けれど余りにも淡々とした語り口だったので、ナーリヤは恐る恐る問うた。

「そうだな、紹介が遅れた非礼を、詫びよう。」

私の名はイリユース。アルハンブラ治安維持隊副長だ」

イリユースはそう告げると、今度は僅かに顎を引いて挨拶をした。表情は崩す気がないのか、口元は堅く一文字に結ばれている。

「ええと、聞いて居るみたいだけど……」

僕はナーリヤ。ナーリヤはロウアンス。よそしく、イリユース」

「私は千里＝高峯です。よろしく願います、イリユーネさん」
ナーリヤに次いで、千里も緊張したような面持ちで言葉を返す。
その仕草にイリユーネは一瞥だけすると、答えるように顎を引いた。

やはり、口元に綻びはないようだ。鉄壁である。

「この案内は私が努めよう」
「ありがとう、イリユーネ」

それでもナーリヤは、直ぐに戸惑いを消し去っていた。
淡泊で無表情で、淡々としていて、でも無機質ではない。
彼女は、ナーリヤのよく知る人物に似ていたのだ。

そう、ナーリヤの家族、セアック＝ロウアンスに。

「イリユーネさん、ここってどんなところなんですか？」
「アルハンブラか？ここは、国の治安を維持するための組織の、首都周辺部隊だ」

「警視庁みたいな感じなのかな？」

「ケイシチヨウ？」

「あ、ううん、こっちの話っ」

千里が思い浮かべた想像で、おおむね間違っていない。
ただ彼らは、同時にある程度の裁判の権限も持っていた。

事件の概要を“王”に通達され、その判断を一任されることが多い。

それは長命種で構成されているエルフの組織特有の、人物に対する信頼が全体に影響を及ぼすという珍しい関係だった。

「アルハンブラの最上階は、隊長の執務室がある。
三階は私の執務室、その他上級隊員の執務室が配置されていて、
二階は一般隊員の仕事部屋から会議室、資料室といった部屋がある」

階段を下りながら、イリユネは淡々と説明していく。
それを聞き逃さないように、千里は背の高いイリユネにぴったりとくっついていった。

その様子はさながら、子犬が親に付き従う様な動作に見える。

ナーリヤはそんな千里の様子に、小さく頬を綻ばせていた。

「一階は受付と食堂、医務室などの部屋がある。」

一階の裏口から外へ出れば、隊員たちの実技訓練場だ」

部屋を指しながら説明していくためか、千里は着いていくので精一杯だった。

とてもではないが、覚えきれそうにない。

そんな不安を込めてナーリヤを見上げると、彼は優しく笑って頷いてくれた。

ナーリヤが覚えておいてくれるなら、ひとまず安心だ。

そう千里は、胸を撫で下ろした。

……どうやら、レメレの加護で迷わないことは、忘れているようだ。

「この外がそうだ。着いてこい」

「は、はいっ」

何事かと目を向ける一般隊員たちを一瞥することもなく、イリユ

「ネは裏口を潜る。」

扉と言つほどのものは度の部屋にもなく、その全ては厚い暖簾だ。こつも温度があると、風通しを悪くする訳にはいかないのだろう。

ナーリヤと千里がイリユーネに着いて暖簾を潜ると、そこには非常に大きな広場があつた。砂漠ばかりの広い土地を有効利用した、実技訓練場だ。

「まだ私室は用意できていない。」

だからそれまで、隊員に貴殿らの腕を見せて欲しい」

「僕らの、腕を？」

「そつだ」

ザージグラージスを討伐したとき、首都の守りについていたイリユーネはその場にいなかった。それどころか、テイガは主要な隊員を誰一人として連れずに見回りへ行つていたので、ここの隊員たちはみなナーリヤ達の実力に対して半信半疑だつた。

共同生活を行う上で大切なのは、信頼関係だ。

疑いを持ったまま共に生活することは、よしとしない。

それは、少し出歩くだけでも命の危機に直結する環境下に生きる彼ら特有の危機感であり、そして伝統的な信頼関係生成の方法だつた。

「全員手を止める、集合！」

イリユーネが声を張り上げると、隊員たちは手を止めて直ぐに集まつた。

信頼関係という名の規律の下に集合する彼らに、乱れはない。

副長という立場に在る彼女は、それ相応の信頼を寄せられている

ようだった。

「この二人は今日、隊長とともにザージグラージスを討伐した。その腕前を見せてくれると約束を取り付けた。弓に自身があるものは彼に、剣と魔法に自身があるものは彼女に、それぞれ一人ずつ決めて挑んでこい」

ナーリヤ達はここに来て、漸く事態を把握した。だが今更退くとも言えずに、二人で顔を見合わせて苦笑する。

「なんだか凄いいことになっちゃったね、ナーリヤ」

「そうだみたいだね。でもまあ、険悪な雰囲気よりはいいかな」

「あはは、トウーユヨークみたいな状況じゃ、ないもんね」

過去に敵意から似たような状況に陥った経験があるためか、二人は落ち着いていた。

善意によってもたらされた状況がこれであるのなら、拒む理由もないのだ。

「よし、それならその弓使いには、私が戦いを申し込もう！」

緑色の長い髪をポニーテールにした、緑の瞳の少女が前に出る。

その肌は砂漠の炎天下の下に置かれてもなお、白い。

手には短めの弓を持っていて、速射性に優れる弓使いであることが伺えた。

そんな少女の姿に、隊員の一人がため息を吐く。

「はあ、テトラ。お前は直ぐそうやって」

「いいじゃないかっ！人間と切磋琢磨するのも面白そうだ！」

エルフである彼女たちは、短命種である人間と余り深い関わりを持たずとしない。

人間の歴史にこそ度々現れるのが、特定の個人と交友を結んでいった、というのはほとんど見られなかった。

「まったく。いいさ、それならあの女は俺の獲物だ」

少女　テトラに苦言を零していた少年が、前が出る。

少年少女といってもナーリヤ達よりも遙かに長く生きているのだが、その精神の度合いは人間に比べて緩やかに成長するのか、外見相応に幼げだ。

金の髪に碧い瞳、褐色の肌。

ショートボブ程度の長さであろう髪は、頭部の後ろで括られている。

「気を抜くなよ、ファイス」

「了解ですよ、副長」

少年　ファイスは不敵に笑うと、腰に提げた剣を抜く。

黒い刀真を持つ広く薄い剣だった。

切れ味を重視しているのだろう、使い手の技量が問われる剣だ。

「では両者、前が出る」

イリユースの言葉に、ナーリヤは弓以外の武器を置く。

弓の勝負と感じたから置いたのだが、手加減をされていると感じたテトラは小さく眉を寄せた。どうにも、不満げだ。

「剣は手加減で何とかしろ。弓は練習用のものを扱え。」

それから　大怪我をするようなバカはするな。準備は良いな？」

矢継ぎ早に告げられ、練習用の矢を受け取る。

ナーリヤはそれを手に持ち重さを確かめ、そしてこれまでの経験で、その扱いを把握した。

千里もまた、煌億剣に手を伸ばす。

セットするマガジンは、極力傷つけないように設定できる剣。

悪徳を斬る訳にもいかないし実体のないものだけに対応しても仕方がない。

そんな考えの元選ばれたのは、吸血鬼より奪い取った稲妻の力だった。

「私が止めるか、膝を着くか、負けを認めたら敗北だ。　それでは、始め！」

イリユーネの声により、模擬仕合の火蓋がきって落とされるのであった。

ナーリヤと向き合った少女が、動く。
初手でペースを掴もうと、まずは速射による威圧だ。

「先見三手、一射必中」

だがナーリヤは、そのことごとくを躲してみせる。
一射目を避けながら矢を番え、二射目を弓で弾いて距離を掴み、
三射が放たれるのと同時に矢を放った。

「なっ！うそっ」

威圧の三射。

それを放つ間は隙になるのだが、普通はそれを躲すことで精一杯
で反撃なんかできない。

速射に自身があつたこともあり、テトラは普通“以外”に意識を
割けなかったのだ。

もつとも、反撃できたとしても、カウンターなど決められたりは
しないのが常だ。

セアックから引き継ぎ使いこなす領域まで至ったナーリヤは、考
えられないほどの正確さでカウンターを決めてきた。

「くっ」

テトラはエルフの身体能力を用いて、飛来した矢をギリギリの所で躲す。

そして、頭上に弦を向けているナーリヤの姿を見て、危機感を覚えて飛んだ。

予測できないように不規則な動きで、かつナーリヤに最良の一撃を放てるように。

だが、その到着地点は

「先見三手、二拍時雨」

ナーリヤの“先見”の範囲内だ。

一息三射、二連六本の矢が弓を構えたテトラを囲むように、降り注ぐ。

思わず目を閉じるような愚行はしなかった。

だからテトラは、目を瞪る。

身動きのとれなくなった自分に肉薄する、ナーリヤの姿に。

「これで詰み、かな？」

柔らかい微笑みと共に、首元の突きつけられた模擬用の鏃やじり。

月影の奥から照らされるような笑顔と夜色の瞳に、テトラは身体
の力を弛緩させてぺたんこ尻餅をついた。

「すじい……」

「え？」

「すごいな、アンタ、ええと、そう！ナーリヤ！」

「あ、ありがとう？」

テトラは敗北を認めてから立ち上がると、ナーリヤの手を掴んで笑みを見せる。

可憐な表情だが、その瞳に宿るのは、少年のような快活さだった。

「まさかこんな時にこんな凄い弓使いに出会えるとは思わなかったぞ！」

なあ、私に弓を教えてくれ！いいだろう？な！」

「え、あ、うん？」

「そうか、気前も良いのだな！あっはっはっ！」

押しに押されて、ナーリヤはたじろぐ。

少女の瞳に浮かぶのは、色恋といったものとは別種の“憧れ”だった。

勝ったはいいが、どうしてもだか負けている気がする。

ナーリヤはいつの間にか了承を受け取らされていることに気がついて、苦笑いを零すのであった。

一方、視線は少し前の千里達へ移る。

千里が柄だけの剣を手にしているのを見て、フェイスは怪訝そうに眉を寄せる。

だがその表情も直ぐに打ち消して、黒い剣を構えた。

「さて、ザージグラージスを退けたってことらしいが、本当かどうか確かめてやるよ」

静かにそう告げ、走り出す。

同時に千里は、煌億剣を突き出すように構えた。

「【イグニッション】 “雷響剣一 ミールイグゼ”」

「はっ、魔法剣か！だが、道具頼りで俺の剣が切り抜かれるか！」

黒い刀真に、黒い靄が纏わり付く。

フェイスはそれを一瞥すると、千里から離れた位置で剣を振り下ろした。

「【影よ、斬り払えッ!】」
「【痺電槍撃】……行くよ」

千里は雷響剣に意志をとおすと、揺らめくようにつき進む影を見つめる。

その奥でファイスが別の動作に移ろうとしていることから、この一撃が注意を逸らすためのものであることがわかった。

だが、全てがスロー再生のようになった世界で移動する千里にとっては、次にどのような術を施そうと考えていても、無駄だった。

「え?」

「はあっ!」

音が世界に戻ったとき、ファイスの間の抜けた声が千里に届いた。それは如何なる術を行使しようとした名残か、ファイスの足には黒い影が纏わり付いている。けれど、中断させられてしまった今では、何をしようとしていたのか、わからなかった。

「嘘、だろ」

指が痙攣する感覚に、稲妻で斬りつけられたことを悟る。

どんなに立っついていようと願っても身体は動かず、膝を着く。

試合開始から一分にも満たない、短い戦い。

圧倒的な実力差に、ファイスは驚愕していた。

「私の勝ち、だね」

そうして、千里は笑う。

憎き太陽に似た……愛しき太陽に似た、笑顔で。

「そう、だな、ははっ……俺の負けみたいだ」

負けを認めたファイスは、小さく笑う。

正当な敗北を前にして嘔みつくのは、戦士の誇りを穢すことだ。

ファイスはそう思い、そして敗北を受け入れた。

「両者、それまで！」

イリユーネの聲がかけられ、同時に周囲が歓声に包まれる。

戦士として長い時を生きてきた彼らにとって、その戦いは目の肥やしと言えるものであった。

それはイリユーネも同様だったのか、心なしか目が柔らかくなっているようにも見える。

「千里、お疲れ」

「うっん、ナーリヤも」

顔を見合わせて、笑い合う。

勝手なお温かい周囲に、二人はトゥーユヨークの一幕を思い出していた。

その時は勝つことで憎しみを向けられてしまったので、この展開は素直に嬉しかったのだ。

ルトルイムの、最初の邂逅。

そこから導き出された出逢いの一步は、二人にとって久方ぶりに“好調”なものとなるのであった。

十二章 第三話 太陽の侍従／月の使徒

燦々と光る太陽を、見上げる。

正確な時刻は解らないものの、今が早朝であることは感覚でわかっていた。

だというのに、太陽は真上から動こうとしない。

その奇妙な光景に、ナーリヤは眉をしかめる。

「夕方も夜の間も、ずっと昼なんだね」

隣りに立った千里が、ナーリヤに声をかける。

ルトルイムにやってきて一晩ほどの時間は、過ぎした。

だが太陽は微動だにせず、未だ船の中から見たときと姿を変えず中天で輝いている。

「なにが、起こっているんだろう」

「わかんない。でも、良い予感はないかも」

千里の声には、僅かな不安が乗せられていた。

ナーリヤはそんな千里を励まそうと、ただ、柔らかく微笑んで頬を撫でる。

それだけで、思いも心も、全部が伝わった。

「心配しても、しょうがない。だよね？」

「うん、そう。だから今はこれからどうするのかだけでも、考えて

おい」

「うんっ」

ナーリヤの言葉に返事をする、千里は不安を振りきった表情で笑った。

落ちない太陽なんかよりも、ずっと強くて明るい笑顔だ。

「とりあえず、この現象がなんなのかだけでも聞いてこよう」
「うんっ」

アルハンブラの訓練場から、建物に戻る。

昨日は、実戦訓練からささやかな宴会に移ってしまったので、ろくに話を聞くこともできなかったのだ。

「白夜、か」

千里の呟きが、陽光にかき消える。

ただ自分たちを見下ろし続ける、太陽の姿。

そこに千里は、生気の無かった住民たちの、その原因を感じ取るのであった。

テイガの執務室に、強い日差しが差し込んでいる。
厚く重ねられたカーテンを用いても意味をなさない、強力な日光。
生命に活気を与えるはずの太陽は今、ルトルイムの住人たちの体
力を、確実に奪っていた。

「もう、半年になる」

テイガはその太陽を、厳しい瞳で睨み付ける。
そこに込められた溢れんばかりの感情には、憤怒と悲哀がない交
ぜになっていた。

「ある日突然、ルトルイムから“夜”が失われた。
原因は不明、神の怒りを買った覚えもない。
ならば何故という問いも虚しく、現状はこんな感じさ」

自嘲を孕んだ顔で、カーテンを開ける。

見渡す限りに広がる街に人の姿はほとんど見られなくなって、
テイガは今にも息絶えそうな街の様相を、その寂しげな背中で凄惨
に語っていた。

「夜が長く、それ故に“常夜の国”と呼ばれていたルトルイムの姿
は、もう無い」

テイガは太陽に手をかざすと、強く握りしめる。
彼は、瞳を眇めてただ陽光を退けていた。

「湿っぽい話しちまって、悪かったな」

「あ……ううん、そんなことないよ」

「僕たちも、できることがあつたら手伝いたい。
だから、なんでも言ってくれると嬉しいかな」

千里と、次いでナーリヤが穏やかな笑みを浮かべる。

テイガはそんな優しい笑みに慣れていないのか、小さく息を吐き
ながら頬を掻き、やがて苦笑した。

「ははっ……ああ、ありがとう。汝らに月の加護があらんことを」

胸に手を当てて、テイガは一礼する。

その本土とはまた違った挨拶は、ルトルイム特有のものなのだろ
う。

「月の、加護？」

その言葉に疑問を持ったのは、千里だった。

千里はテイガの言葉に小さく首を傾げ、そして思わず復唱する。
それを聞いたテイガは再び苦笑すると、直ぐに口を開いた。

「ああ、そうか、普通は知らないか。

人間は“イルリス”に近い生物だと言われている。

それに対して、魔獣や亜人は“エルリス”に近い存在だ」

テイガは足を組むと、楽な体勢で語り始めた。

「だが、亜人でありながらも、エルフだけは少し違う。

二柱の中間に最も近く、それ故に両者の加護を色濃く受けているんだ。

その結果が、月の魔力と太陽の魔力に影響されるという形で出て来た」

エルフは、月に魔力を貰うものと太陽に魔力を貰うものが居る。

普通の人間が水魔法を扱えば、それはただの水魔法だ。

けれど、月の加護を受けているものが水魔法を使えば“月・水属性”の魔法となる。

「天空より授けられた力を行使する。

だからエルフは、なにかに特化するのではなく、全ての基準で高い能力を持つ。

月の加護を持つエルフは肌が褐色になり、太陽の加護を持つエルフはその逆となる」

ちなみに、亜人たちは肌以外の所にその特徴が現れている。

吸血鬼ならば牙、悪魔なら羽、亡霊ならば姿形などといったように。

「あれ？でも人間にも、褐色の肌の人がいたような？」

千里が思い浮かべるのは、ノーズファンの神殿騎士だった。騎士団長アルトレイの副官、クラウト。彼はテイガ同様、褐色の肌を持っている。

「人間の中には、エルリスに近く生まれてくるものが居る。その者達は、周囲に幸福を与える存在だと崇められることが多いそうだ。」

チサトが見たのも、大方そんなところだろう」

思わぬ所で解ったクラウトの情報に、千里は呻る。確かに、千里はこの世界で褐色の肌の人間をほとんど見なかった。だがそこには、神の使いという意味が強く込められていたのだ。それでは、見つけるのは容易ではない。

「まあ、いざとなったら頼らせて貰うよ。それまではここで、俺の部下たちでも鍛えてやってくれ。上へ渡した報告が帰ってくるには、まだ時間があるはずだからな」

千里とナーリヤは、その言葉に顔を見合わせると、頷いた。誰かを鍛えるとか、教えるとか、そんな経験はない。せいぜい、帝国でライアンにアドバイスをした程度だ。けれど、それが望まれていて、そして機会があるのなら。

「たぶん、一緒に訓練する程度しかできませんが、大丈夫ですか？」千里が問うと、テイガは笑顔と共に頷く。必要なのは、実戦訓練だ。なら、それを行ってくれるのが一番だった。

秘宝を求めに行く、その前。

二人はそうして、アルハンブラの訓練に参加することになるのであった。

十

矢を番え、弦を引き絞る。

獲物を見据える黒耀の瞳は鋭く眇められ、その末路を映し出しているようだった。

空に上がった獲物が、風の影響を受けて複雑な軌道で落ちてくる。

「先見三手」

それをナーリヤは、ただ俯瞰して受け入れた。

「一射必中」

舞い落ちる獲物　　ザージグラージスの絵が描かれた紙。

描かれた魔獣の額の部分を矢が貫き、絵画上の命を摘み取って見せた。

「おおっ！さすが“先生”！」

それを輝かしい笑みで見守り、拍手をする少女が一人と。

「なんだよ、あれくらい」

それを不満げな表情で、時折窺う少年が一人。

テトラと、フェイス。二人は、ナーリヤの実演を見て呻り声を上げていた。

「人気者だね、“先生”？」

「千里……」

そんな二人を見てどうしたらいいか解らないナーリヤに、声がかけられる。

他の隊員と模擬戦を行い、休憩に入った千里だった。

ちなみに、彼女と戦った隊員たちは皆、見事にバテている。

「からかわないで。僕も、どうしていいか解らないんだ」

「あはは、ごめんごめん。でも、ちょっと楽しそうだったよ?」

「そうかな?」

「うん」

千里に微笑まれて、そんなような気がしてしまう。

だがナーリヤはそれを言うのはどこか気恥ずかしく、頬を掻きながら顔を背ける。

その先には、なにやら言い合いをしているテトラとファイスの姿があった。

「あんなヤツのどこが良いってんだ。優男じゃねーか」

「あの弓を見て優男だなんて、よく言えるな。表へ出る！」

「ここは外だ！」

「むう」

そう言い合う二人に、怒気は見えない。

おそろくじゃれ合いではないのだろう。

普段から、このような関係であるということがよく解る光景であった。

「でも」

千里の声に、視線を戻す。

視線を斜めに落とす千里の頬は朱く、首筋から覗く肌にナーリヤは再び目を逸らした。

「あんまりあつちにはかり熱中しちゃうと、ちょっと妬いちゃうかも」

自分で言ったのに、恥ずかしかったのだろう。

その可憐な横顔を抱き締め連れ去ってしまいたくなる気持ちを、ナーリヤはすんでの所で抑えて、伸ばしかけた手を千里の頬に添えた。

「僕もだよ。君が魅力的なのは、よく知っているから」

顎まで手を滑らせ、持ち上げる。

だから、と続けて唇を横切り、千里の耳朶にそつと告げる。

耳朶に触れる柔らかな風に、千里は大きく肩を振るわせて目を閉じた。

「あんまり僕から、離れないでね？」

「あ……う、ん」

珍しく“恥ずかしい言葉”を言った千里に対抗して、自身もできる限り気障な言葉で対応したナーリヤ。

だが予想以上に熱が籠もってしまい、ナーリヤは胸の内に宿る熱を冷まそうと必死になっていた。

「うう、やっぱり勝てない」

「やっぱり？ならどうして始めたのさ？」

頬を赤くしたまま離れて、互いに頬に宿った熱を冷まそうとする。だが中々冷ますることが敵わず、ため息を吐いてただ誤魔化しているようだった。

「え、えーと……あはは」

千里は曖昧に笑うと、ナーリヤからゆっくり離れて行く。そして赤い顔を隠すように踵を返し、走り去っていった。

「ごめんイリユーネ、負けた！」

「ふむ、そうか。では次は」

千里に近づいたイリユースが、なにやらアドバイスをし始める。その影では、伸されたはずの隊員たちが肩を振るわせて親指を立てていた。

頂垂れているものもいる様子から、賭を行っていたことが窺える。

「あー……あー……」

まんまと“してやれた”事に気がつき、ナーリヤは深く息を吐いた。

乗せられてしまう千里も千里だが、ノリノリで返してしまったナーリヤもナーリヤである。

……悔しいので次からも勝ち続けようと思ったのは、彼だけの秘密である。

「先生、なにも今いちゃつかなくとも」

「バカ、あーゆーのは触れると碌なことにならないぞ」

いつの間にか元の調子に戻っていたテトラたちが、ナーリヤの背に声をかける。

ナーリヤがそれに恐る恐る振り向くと、フェイスはともかくテトラは頬を赤くしていた。

どうやら、しっかり見られていたらしい。

「ルトルイムは皆情熱的だ。後からいくらでも誘い込めばいいと思うぞ？先生」

頬を赤くはしていたが、特別“純情”ということでもないようだ。

子ができにくいエルフにとって、種の保存は一つの命題だ。
老人ばかりの社会を形成する訳にも行かず、それ故か皆おおらかなようであった。

「さて、続きをしよう！」

「あ、おいテトラ、誤魔化しているぞ」

「ファイス、それには触れないのが礼儀だ」

ナーリヤは二人の言葉に、無言で矢を番える。

解っていてからかったのか、それとも生来の戦士気質なのか。

二人は顔を見合わせると、前衛と後衛に別れてナーリヤから距離を取った。

「僕に一撃与えられたら、君たちの勝ちだ」

「余裕だな、人間！」

「僕が君たちを追い詰めたら、僕の勝ちだ」

自分たちを格下に置いた、条件。

事実ナーリヤの方が強いのもしれないが、そのルールにファイスは小さく苛立つ。

だがテトラを後衛に任せている以上、みっともない姿は見せられなかった。

「その条件、後悔しろ！」

「先見三手」

ファイスが黒い剣を腰だめに抱えながら、走り出す。

ナーリヤはそれを注視することもなく、ただ上空へ弦を向けた。

「二拍時雨」

一息三射、二連六本の矢が高く打ち上げられる。同時に弓を背負い直すと、ナーリヤは刀を片手に駆けだした。ファイスはそれをナーリヤの威嚇と判断して、つき進む。彼は、千里と戦っていたため、テトラの仕合を見ていないのだ。

「直接戦闘もこなすってか？だが、“魔法使い”相手にどこまで通じるかな？」

ファイスはそう不敵に笑うと、黒い影を剣に纏わり付かせた。光を遮る影。それを振り抜くと、ナーリヤに黒き刃が飛来する。飛来する刃は、さほど速くはない。けれど、言いようのない不安に、ナーリヤは警戒を緩めなかった。

「ファイス、出過ぎだ！」

テトラが矢を放ち、ナーリヤに飛来する。

一拍おいて連続で襲いかかる矢。

命中力よりも連射力を優先した足止めの矢だった。

「【影よ】」

ファイスが再び剣を振ると、もう一度黒い刃が放たれた。

一回目の刃はナーリヤの後ろまで来て制止し、二回目の刃はナーリヤとファイスの中間地点で止まる。

「【影よ】」

詠唱に詠唱を重ね、ナーリヤがファイスに接近するまでに配置された刃は、四つ。

その全てが、ナーリヤを取り囲むように置かれていた。

「弓を捨てて挑んだことを、後悔しろ！ 【影重ね、対牢死楼】」

ファイスは、目の前に配置された影に剣を突き入れる。

一度や二度ではなく、何度も何度も突き入れ 引き抜いた。

「影は日より遅れて出、重ねて現る影の虚ろ、その闇に身を賭し宵を見よ」

「煌めけ、【銀蚩】 主の加護を、【Amen】」

低く構えて、一閃する。

だがその刃は、横合いから飛び出した剣によって弾かれた。

周囲に四つ、四箇所配置された黒い影。

その全てから刃が出現し、ナーリヤに襲いかかる。

「死出の旅への餞別だ、受け取れッ！」

模擬戦なためか、命が脅かされる配置ではない。

けれど、受けたら“相当”痛いだろっ刃たちを、ナーリヤは見据えることもしなかった。

「【領域把握】」

剣が弾かれたときの音で、周囲の剣撃全ての場所を把握する。

そして、術を使っている最中は動けないのか、ただ驚きに目を眩るファイスの前でナーリヤは全ての刃を叩き落とした。

ついでに、青白い輝きで影を消し去りながら。

「っ 援護する！ きゃっ」
「テトラ!？」

先程上空へ放った矢が、最初の時と同じようにテトラを取り囲む。突出するファイスに気を裂きすぎた結果、ナーリヤの矢に気がつくことができなかつたのだ。

「ちっ……あ」

そしてファイスもまた気を取られ、反撃に乗り出そうとしたときには既に、自身の首元に銀の刃が添えられていた。

「僕の勝ち、だね」

「っ……ああ、くそっ、俺たちの負けだ」

ファイスはそう吐き捨てると、大の字になって寝転がる。そこへテトラも駆け寄ってきて、共に大きく肩を落とした。

「何がたらねえんだろっなあ」

「 決まってるんだろ。“連携”だ」

聞こえてきた声に、ファイスは慌てて身体を起こす。シャムシールを片手に佇む、赤い髪の青年エルフ。テイガが、呆れた表情でファイスを見下ろしていた。

「弓と剣。その連携こそ、お前たち二人がナーリヤ達に学ぶことだ」
「連携?……やってみましたよ、俺たちだって」
「いいや、やっていない」

テイガはそう、きっぱりと言い放つ。

それにファイスは、不満げな表情を見せることもなく、ただ熱心に聞いていた。

アルハンブラは、ルトルイムの治安を維持する大切な組織だ。だからこそ、その隊長は尊敬の対象となっていた。

「突出しすぎるな、とは言わない。だが突出する必要がなかったのは事実だ。

距離を詰めれば、弓使いは何も出来ないとも思ったか？それは油断、だぜ」

「っ……はい」

魔法と剣を用いた、“中距離”近接攻撃。

それを正しく用いず己の手で追い詰めようとしたのには、彼の自尊心があつたのだろう。

そこを言われてしまうと、何も言えなかった。

「次、テトラ」

「は、はいっ！」

テイガに呼ばれ、テトラは肩を跳ねさせる。

彼女は今度は、自分で思う“ダメ”だろう部分が多すぎて、困っていた。

「おまえに必要なのは、ファイスをもっと信頼することだ。悲観するほど悪い腕じゃあない。

ナーリヤみたいに別次元の弓使いが出てきて混乱するのは解るが……」

テイガがナーリヤを一瞥すると、彼は苦笑しながら頬を掻いていた。

ナーリヤの技術は、現状では彼しか使えない技だ。
セアック＝ロウアンズという弓の天才が零から作り上げた、彼の
至高。

手ずから教わり、かつ、ある種の才能を持っていたナーリヤ。
その上で他者よりも濃密な経験を積んできたナーリヤに追いつが
るのは、至難の業だった。

「……だが、それでもおまえなら、
ファイブに誤射をすることなど気にせず、もつと連射できたは
ずだ」

「はい……隊長」

テイガの言葉に、テトラもまた頂垂れる。

そんな二人の姿に苦笑すると、テイガは改めてナーリヤに向き合
った。

「さて、思ったよりもだいぶ早くて驚いたんだが……“上”から返
答が来た」

「え？」

「だから、その件で話がある。着いてきて貰えるか？」

ナーリヤがそつと周囲を見ると、イリユーネに伝えられた千里が
歩いてきた。

反応は両者ともに同じ。戸惑いが、見てとれる。

「ナーリヤ……」

「行く。まずは話を聞いてから、ね？」

「そう、だね。まずは話を聞かないと」

どこか不安さを残しながらも、千里はナーリヤと共にテイガに着

いていく。

喜ばしいことなはずなのに、どうにも良くない予感がする。

千里は燦々と輝く太陽を見て、そつ目を眇めるのであった。

十二章 第四話 砂漠の要塞

黒い肌と大きな角を持ったサイが、車両を牽引する。

ルトルイムの民に“カウカウ”という名で呼ばれているこのサイは、砂漠で覆われた賭しにおいて用いられる貴重な移動手段であった。

カウカウの牽引する車両、ようは馬車のようなもの。

その中で、千里とナーリヤは緊張を滲ませていた。

アルハンブラ治安維持組織の隊長以下数名が、千里達に付き添っている。

今本部には、その他の隊員とその代理司令となるイリユーネが残っているのだと、乗り込む前に聞かされていたことを、千里は思いだした。

「もうすぐ到着だ」

テイガの言葉に、気を引き締める。

首都からカウカウ車で三十分ほどの場所に在る、石の城。

そこが、千里達の目的地であった。

「王様かあ……どんなひとだろう？」

千里の呟きに、正面に座るテイガは小さく苦笑した。

その笑顔の意味がわからず、見ていたナーリヤは首を傾げる。

なんだか気まずげな仕草に、ナーリヤは僅かだが“嫌な予感”を覚えていた。

「なんにしても、なるようにしかならないか」

「ナーリヤ？」

「いや、なんでもないよ」

窓から身を乗り出して、城を見る。

エルフたちの王が住むという、その巨大な石の城を
。

E
x
I

砂で囲まれた、石造りの城がある。
太陽の光に晒され、風に当てられ、徐々に砂へ還っていく大きな城。

その威風堂々とした佇まいは、見上げる千里を圧倒していた。

「すごい」

思わず、息が零れる。

今まで千里は、この世界で色々な建造物を目にしてきた。

王都の城。

銀の吸血城。

帝国の城。

灼雪の悪魔城。

神託の神殿。

朱色の議事堂。

それらどれにも当てはまらない、まるで古代の遺跡のような建物に、千里は魅入っていた。

「こっちだ」

「千里、行こう」

「あ……うんっ」

テイガの声で引き戻されて、ナーリヤに手を引かれる。

石の城の周囲には、アルハンブラのメンバーの他にも、常駐しているであろう兵士たちの姿も窺えた。

城、と最初に千里は考えたが、ここはそんな生易しいものではない。

まるで巨大な外敵から戦い続けてきたかのような、経験の粋がこれでもかと込められた要塞。

大型の魔獣が数多く存在する“砂漠”で、生存し続けるために作られた砦だった。

「テイガ、こんなに簡単に来られるところの場所のようには思えないんだけど？」

道中、ナーリヤが訊ねると、テイガは小さく肩を竦めた。

その表情には戸惑いが浮かんでいて、どう答えて良いかも判断しかねているようだ。

「俺も、こんなことは初めてだ。王に、こんなに簡単に会えるなんてことはな」

今までになかったこと。

その理由が自分の背後で建物を見回している千里が持つレラの涙あれば、それでいい。

だがそれだけではいかないような気がして、ナーリヤは胸の内に燻る感情を抑えた。

「ここから先が謁見の場だ。

俺も一緒に入るが、失礼の無いようにな」

「わかった、ありがとう。テイガ」

「うんっ、ありがとう。テイガさんっ」

ナーリヤと千里は、テイガに礼を告げると、前を見る。
大きな石造りの門を門兵が開くと、そこから伸びる赤い絨毯が見えた。

千里はその絨毯に、“ラテン”系の色を思い浮かべ、ほんの僅かに懐かしい気持ちを抱く。

赤い絨毯の向こう。

七つ重ねた石の階段。

薄くヴェールの並んだ天蓋。

石で作られた赤い装飾の玉座。

「連れて参りました、王」

「ああ」

腰まで届く、月明かりのような金砂の髪。

濁りのない海のように、恐ろしいほど碧い目。

額は大きくさらけ出されていて、その褐色の肌からは気怠さが見える。

けれどなにを於いても崩れる事のない高貴な雰囲気、彼を最良種とまで呼ばれたエルフたちの王であるということ、否応なしに見せつけていた。

「要件は聞いている。宵闇の腕輪が欲しいのだろう」

頬杖をついたまま、王は胡乱げに告げた。

名も名乗らず、名乗ることも許さず、目を見ることすらせず。

「は、はい！これが証明の、レラの」

「いい。好きに持っていき」

「え？」

レラの涙を取り出そうとした千里を、制する。
その受け答えに、千里やナーリヤはおるか、テイガまで驚いてい
た。

「不満か？」

「い、いえ、そんなことはないです！けど……」

「ああ、どこにあるのか気になるか」

ため息を吐きながら告げる、王。

聞くものの腰を砕くような憂いのある声。

その美声から紡がれる声には、ひどく力がない。

褐色の肌は、月の加護を得た証。

ならこの気迫の無さは、月が隠れて久しいために起こったのか。
判断できず、ナーリヤは口を噤んで眉を寄せた。

「砂漠の果てに遺跡がある。その守護者から手に入れる」

「ッ？……王よ！お待ちください、王よ。この者たちは我々の恩人
そのような」

「であるならば、問題はないだろう。エルフよりも優れた力を
宿しているのなら」

テイガの言葉を、王は真っ向から切り捨てた。

それきり食い下がることができず、テイガは唇を噛んで頭を下げ
る。

その様子に、千里とナーリヤは今までに何度も経験してきた感覚
を覚えていた。

そう、途轍もない厄介ごとを任されるような “嫌な予感” で

ある。

「その、守護者というのは？」

ナーリヤが、真剣な瞳で問いかける。

すると王は、胡乱げな瞳をナーリヤ達の方へ戻した。

「魔獣だ。夜を呑んだ、愚かな魔獣だ」

「王、彼のものをそのような」

「無粋な口出し、幾度も許すと思うか？」

「申し訳、ありません……ッ」

テイガと王の遣り取りは、奇妙だ。

それ故に、千里とナーリヤは小さく視線を交えて、戸惑いを浮かべていた。

「道はあとで案内をつけよう」

「王よ！それならその役目、私めに」

「……構わん。兵も連れて行け」

「はっ、ありがたき幸せにございます」

謁見も、それで終わり。

そうしてお開きになるうとする中、ナーリヤはその場から動かさず王を見据えた。

「守護者とは、どのような存在なのですか？」

石造りの王の間に、ナーリヤの声が静かに響く。

その声に、立ち去ろうとしていた誰もが、足を止めた。

「 龍だ」

静かに告げられた声。

その声をナーリヤは、真っ向から睨む。

幾多の人生を内包するナーリヤは、今、長い年月を生きてきたエルフの長と、さほど変わらない“強さ”を宿していた。

その黒い瞳に 夜を映し込んで。

「その性格は？」

「半年前より、凶暴」

「その在り方は？」

「半年前より、暴虐」

「その名は？」

「宵闇の、龍」

玉座の前で跪いているはずのナーリヤは、この時、確かに王と対等に立っていた。

神の使いと名乗ってやってきたナーリヤ達に、王はこの時、確かに押されていた。

その流れを、緊迫した場を 千里が、塗り替える。

「王様」

「なんだ」

千里に、再び気怠げな表情を向け そして、目を瞞る。

栗色の髪から覗く、栗色の瞳。

そこに込められた強く美しい輝きに、王はたじろんだ。

「龍がなにを、したんですか？」

「夜を呑んだ」

「龍を倒さねば、どうなるんですか？」

「民が滅びる」

「困って、いるんですね？」

「ああ、そうだ」

何故こんなにも素直に受け答えしているのか、王は理解できていなかった。

けれど、どうしてだか、その姿に見たこともない“神”を重ねていた。

「王様、私たち、行きます」

「チサト、正気か！相手は龍だぞ！」

「だって、放って置けないから」

「あはは、君ならそう言うと思っていたよ」

ナーリヤはそう笑うと、千里の隣に並び立つ。

どのような陰謀が込められていようと、関係ないのだ。もう既に、このエルフたちと、笑い合ってしまった。

だから、退かない。

だから、逃げない。

だから……挑むのだ。

「行こう、ナーリヤ！」

「待て」

踵を返そうとした千里とナーリヤを、王は呼び止める。

二人がその顔を見上げようとした頃には、王は玉座から降り、二

人の直ぐ目の前に佇んでいた。

「先程の無礼、詫びよう。」

私はフェイン¨フェイルラート ルトルイム王である」

「フェイルラートって、まさか」

千里が目を瞠った瞬間、玉座の間に炎が走った。

ドン

「敵襲か!？」

テイガの驚いた声。

そこに通り抜ける、真紅の熱気。

それを千里は 千里とナーリヤは、知っていた。

「兄上!私を封じ込めておけるとでも思いましたか!？」

最後に見た、欠けた剣ではない。

真紅に染め上げられた、炎の紋章を持つ長剣。

その美しき剣真を収めるのであろう、赤く輝く鞘。

「フィオナ!？」

金の髪に碧い瞳を持つ、エルフの女性。

フィオナ¨フェイルラートが、長剣を片手に突入してきた。

「……詳しい説明をしよう。フィオナも、落ち着け」

「ぬ、う。了解した。きっちりと、説明して貰おう!」

その光景に、今度はテイガが頭を抱える。

千里達の発する“カリスマ”じみた雰囲気を押されていたら、いつのまにかこの状況。

混乱してしまうのも、無理はないだろう。

「だいいち、アンタ旅に出たんじゃないのか!? “姫”さん!」

「テイガか。相変わらず騒がしいな」

「そうじゃなくて、ああもう、俺にも説明はいただけなのでしょう
か?王!」

「当たり前だ、道案内に志願したのはおまえだろう」

「ああ、そうでしたね……」

志願したことに、後悔はない。

けれどこんな気の抜けた展開になることは、予想できていなかった。

だからテイガは、大きく大きく息を吐いて肩を落とすのであった。

場所は再び、玉座の間だ。

だが先程とは違い、王　　フェインは玉座から降りて石造りの椅子に腰掛けていた。

それを咎める兵は既に部屋から出していて、ここではただ、ティガがフェインと対等な視線でお話することに、居心地の悪さを感じるだけとなった。

「事の始まりは、一年ほど前のことだった」

話をし始めたフェインに、千里とナーリヤ、そしてティガとフィオナはただ耳を傾けた。

「ルトルイムの夜は、龍が守っている。その龍が、時々嘆くようになったのだ」

夜を支配する、宵闇の龍。

それが嘆くと、夜が震えるのだと。

「それが気になり何度か龍の住処へ行くも、夜が震えているせいで全力が出せない。

それはお前もだろう、ティガ」

月の加護を持つものは、夜によってその力が左右される。

晴れた日の満月には力が増し、曇の日の新月には弱くなる。
それでも隠れているだけだから、決定的に落ちたりはしない。
けれども、震えれば、力は乱れ、使いづらくなる。

「龍は我々の言葉を、受け入れなくなった。」

嘆き、嘆き、嘆き　気がついたら、夜を呑み込んでいたのだ。

……秘宝、“宵闇の腕輪”ごと、な

「っ……っ！」

千里が、ただ目を睜って驚く。

つまり秘宝は今　龍の腹の中に、あるのだ。

「何度行っても無駄だった。」

その矢先に現れた貴君らを向かわせようとしたのは……

八つ当たりに過ぎなかったのかも、知れない」

ただ未来を諦めようとしていた。

その矢先に秘宝を　ルトルイムを追い詰める原因を求めてやってきたのだ。

あわよくば、と考えてしまうのは無理もないが、突如神の使いと言って現れたものが信用ならないと言っても、些か浅慮に過ぎただろう。

「私が修行の旅を切り上げて闘技大会に出場したのも、それが理由なのだ」

口を噤んでいたフィオナが、ゆっくりと告げた。

それに、千里はそっと目をやる。

「神託を求めて出場し、結局神託は得られなかった。」

だから私は一路ルトルイムに戻り、剣を修復して龍に挑もうと思
った」

「姫さん、そりゃ無謀ですけど」

フエインの妹、フィオナ。

彼女は兄と違い、太陽の加護を受けるエルフだ。

だからこの白夜のルトルイムは、フィオナがもっとも力を発揮す
ることができる空間と言えた。

「それで、止められて、軟禁？」

千里が告げると、フィオナは苦々しく頷いた。

龍に一人で挑むことを認められず、その結果兄よって軟禁された。

「こんなことならば、黙ってでいくべきだった」

「それは許さんぞ、フィオナ」

「わかっております、兄上」

「わかっていないだろう。まったく」

解っているのならば、唇を噛みしめたりはしないだろう。

フィオナはルトルイムで生まれ育った、ルトルイム王の妹だ。

愛する祖国を守りたいがために、龍に挑もうとするのも無理はな
い。

「あの、龍って、そんなに強いんですか？」

千里が恐る恐る告げると、傍で聞いていたテイガが思い切り肩を
落とす。

どれほど強いか理解できていなかったのか、と。

「え？あ……どんなに強くても、私たちは負けませんよ！テイガさん」

「ああ、そうかい」

自信満々に、千里は少しずれた事を言った。

だがしっかりと“たち”と言っている辺りに、テイガは好感も感じていた。

生きることには必死になれねばならない過酷な環境である、ルトルイムの砂漠。

その地で生き残るのに何よりも必要なのは、仲間への信頼からなる強い結束力だ。

「龍とは、天災の一部を担うものだ」

二人の遣り取りが一団ランクしたのを見計らって、フェインが告げる。

千里たちは、その言葉に再度耳を傾けた。

「イルリスの言葉を受け、癒しの奇跡を行使するのがノーズファンの巫女だ。

同時に、イルリスの声を聞きその思いを汲み、そして天災の一部を授かった者、

……それが、“神の従僕”と呼ばれる、龍だ」

天災とは、即ち天の怒り。

イルリスが嘆けば、命は祝福を許されず誕生することが無くなる。イルリスが怒れば、天が轟き地が震え、風が吹き起こり海が荒れる。

この時イルリスが憤怒から巻き起こす災いを、龍は一部譲り受けているのだという。

「神様と、戦うんだね。」

それじゃあ、頑張らないとね？ナーリヤ」

「うん、そうだね。……負けられない」

それを聞いてもなお、二人の根底は揺るがない。

長い旅を続けてきたことで生まれた、絶対の信頼。

そこに、怯え退く要素など、入り込むはずがなかったのだ。

「お前たち……」

フェインは小さく呟くと、何かを決意した表情になる。

千里とナーリヤを優しい瞳で見つめる、フィオナ。

肩を落としながらも、意志を固めているテイガ。

ここまできて、反対することなどできはしない。

「私は王として、この場を開け続ける訳にはいかない。

だから改めて、頼む。ルトルイムを、救ってくれッ！」

立场上、頭を下げることはできない。

しかし、強く、そして重く告げられた言葉に、千里とナーリヤは強く頷いた。

「はい！」

「任せてください、フェイン王さま」

在り方を、強く持つ。

それは確かに、能力で劣る人間達の誇りであったと、フェインは思い出した。

「フィオナ、おまえも行け」

「よろしいのですか？」

「止めても行くだろうか？」

「……勅命、承りました」

恭しく頭を下げるフィオナを見る。

続いて、テイガに視線をよこした。

「アルハンブラは心配するな」

「はっ」

「だから頼んだぞ、我が膝元の守護者よ」

「了解です、我らが王よ！」

話は纏まったとばかりに。立ち上がる。

その背を、フェインは目を眇めて見送った。

どうか、どうかと思いを込めて。

「頼んだぞ、イルリスの遣いよ」

フェインの声が、玉座の間に響く。

ただただ、強く細く、流れるように響き渡った

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212n/>

E x I

2011年6月8日05時14分発行